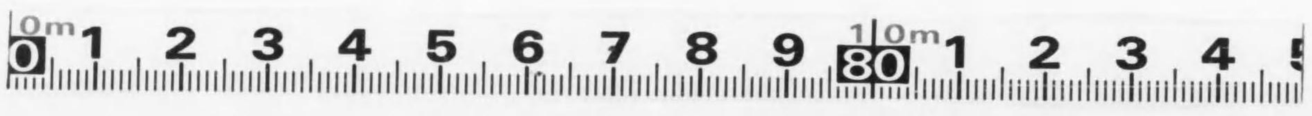


F53
R76
4a

F53-R76-4a
12005014805 36

28.2.12

151
705-43
F53
R76
4a

新エロイズ

（戀の師とイリュジ）

前篇

著オソッル・クッヤジンャジ

大正
11. 5. 18
内交

譯郎一晃原宮

東京 光文社 刊行

譯者序

本書は原名をジユリイ、一名新エロイズ Julie, ou La Nouvelle Heroise といふ、一七六〇年にルウソオが書いたものである。如何なる意圖を以て、又如何なる抱負を以て彼が此書を書いたかはその詳細な對話體の序文を見れば自づから知られることで此處に多言を要しないが、その筋を簡短に言へば、デタンジユ男爵の娘ジユリイといふ優雅な淑女が、その家庭教師として傭入れてある平民のサン・プルウと戀に落ち、種々の波瀾を經て、遂にその戀を達成することが出來ず、平凡なド・ヴオルテルといふ可成り年長の男に結婚するところで、上卷は終つてゐる。下卷はその結婚後のことを叙したものである。全體が書簡の形式で情人同志の往復や、第三者達の書簡とを點綴集成した形になつてゐる。新エロズの名は師とその弟子との戀を書いたところから、彼の有名な史實「エロイズとアベラール」に因んだものである。

此書の文學的價値については私は自説を言ふよりも、セインツベリのフランス文學史に有る次の文句を引用するを便利と思ふ。

『此の著名な書の第一の効積はセンチメントの小説の例を開いた事で、第二の効積は叙景小説の例を開いた事である。その後多くの人がセンチメントと叙景との點に於

目次

序一（著者自序） 一
序二 二
書簡 三九
第壹部 一四一
書簡 第一 ジュリイへ 四一
書簡 第二 ジュリイへ 四七
書簡 第三 ジュリイから 五〇
書簡 第四 ジュリイへ 五四
書簡 第五 ジュリイへ 五九
書簡 第六 ジュリイからクレールへ 六二
書簡 第七 返事 六五
書簡 第八 ジュリイへ 六九
書簡 第九 ジュリイから 七三
書簡 第十 ジュリイへ 七七
書簡 第十一 ジュリイから 八一
書簡 第十二 ジュリイへ 八五
書簡 第十三 ジュリイから 九三
書簡 第十四 ジュリイへ 九六
書簡 第十五 ジュリイから 九九

てルッソウを凌駕しやうと企てたが、遂に一人として之に成功したものはない。併し此の小説はセンチメンタルな、ピクチユアレスクな小説として盛んな世評を贏ち得たけれども、完美した小説とは言ひ難い。その直接な物語的興味が稍々稀薄で、その人物の性格は餘りにはつきりと、又は餘りに傳習的に描きすぎてあり、その脚色は粗硬である。』

とは言ふものゝ、あの大哲カントが、その時計よりも正確な日課を破つてまで讀み耽つたのは實に此の書である。そして後に、ゲーテを起たしめて、あの『ウエルテルの惱み』を書かしめた點丈けを見ても、その眞價は解るであらう。

なほ、此の書が英のリチヤードソンの『クラリツサ』や『パメラ』に學んだ跡あるのは、後世の文藝史家の指摘する通りである。

本書の譯本下卷は、原著者の長い序文がない爲に上卷よりも聊か頁が薄くなるが之は原書でもその通りになつてゐるのであるから、讀者の御了解を豫め願つて置く。尙ほ上卷は出版期限を及ぶ限り速かならしめる必要上、帝大佛文科渡邊一夫氏外諸氏の助力に負ふ處が多かつた。附記して諸氏の厚意を感謝する。

第五十九條　書面ヲ以テ
第五十八條　書面ヲ以テ
第五十七條　書面ヲ以テ
第五十六條　書面ヲ以テ
第五十五條　書面ヲ以テ
第五十四條　書面ヲ以テ
第五十三條　書面ヲ以テ
第五十二條　書面ヲ以テ
第五十一條　書面ヲ以テ
第五十條　書面ヲ以テ
第四十九條　書面ヲ以テ
第四十八條　書面ヲ以テ
第四十七條　書面ヲ以テ
第四十六條　書面ヲ以テ
第四十五條　書面ヲ以テ
第四十四條　書面ヲ以テ
第四十三條　書面ヲ以テ
第四十二條　書面ヲ以テ
第四十一條　書面ヲ以テ
第四十條　書面ヲ以テ
第三十九條　書面ヲ以テ
第三十八條　書面ヲ以テ
第三十七條　書面ヲ以テ
第三十六條　書面ヲ以テ
第三十五條　書面ヲ以テ
第三十四條　書面ヲ以テ
第三十三條　書面ヲ以テ
第三十二條　書面ヲ以テ
第三十一條　書面ヲ以テ
第三十條　書面ヲ以テ
第二十九條　書面ヲ以テ
第二十八條　書面ヲ以テ
第二十七條　書面ヲ以テ
第二十六條　書面ヲ以テ
第二十五條　書面ヲ以テ
第二十四條　書面ヲ以テ
第二十三條　書面ヲ以テ
第二十二條　書面ヲ以テ
第二十一條　書面ヲ以テ
第二十條　書面ヲ以テ
第十九條　書面ヲ以テ
第十八條　書面ヲ以テ
第十七條　書面ヲ以テ
第十六條　書面ヲ以テ
第十五條　書面ヲ以テ
第十四條　書面ヲ以テ
第十三條　書面ヲ以テ

一　一　一　

書簡　第六十　ジュリイへ　二六二
書簡　第六十一　ジュリイから　二六九
書簡　第六十二　クレールからジュリイへ　二七一
書簡　第六十三　ジュリイからクレールへ　二七九
書簡　第六十四　クレールからドルプ氏へ　二八九
書簡　第六十五　クレールからジュリイへ　二九一

第二部

書簡　第一　ジュリイへ　三〇七
書簡　第二　エドワード卿からクレールへ　三一一
書簡　第三　エドワード卿よりジュリへ　三一九
書簡　第四　ジュリイからクレールに　三二五
書簡　第五　返事　三二八
書簡　第六　ジュリイからエドワード卿へ　三三八
書簡　第七　ジュリイから　三四二
書簡　第八　クレールより　三五〇
書簡　第九　エドワード卿からジュリイへ　三五三
書簡　第十　クレールへ　三五五
書簡　第十一　ジュリイから　三六一
書簡　第十二　ジュリイへ　三七二
書簡　第十三　ジュリイへ　三七四
書簡　第十四　ジュリイへ　三七九

書簡　第十五　ジュリイから　三八六
書簡　第十六　ジュリイへ　三九三
書簡　第十七　ジュリイへ　四〇二
書簡　第十八　ジュリイから　四一八
書簡　第十九　ジュリイへ　四二八
書簡　第二十　ジュリイから　四三一
書簡　第二十一　ジュリイへ　四三二
書簡　第二十二　ジュリイへ　四五四
書簡　第二十三　ジュリイの愛人から　四五七
書簡　第二十四　ジュリイから　ドルプ夫人へ　四七〇
書簡　第二十五　ジュリイへ　四七二
書簡　第二十六　ジュリイへ　四七七
書簡　第二十七　ジュリイから　四八三
書簡　第二十八　ジュリイから　四九八

第参部

書簡　第一　ドルプ夫人から　四九九
書簡　第二　ジュリイの戀人からテダンヂュ夫人へ　五〇四
書簡　第三　ジュリイの戀人からドルプ夫人へ　五〇七
書簡　第四　ドルプ夫人からジュリイの戀人へ　五〇八
書簡　第五　ジュリイから戀人へ　五一一
書簡　第六　ジュリイの戀人からドルプ夫人へ　五一四

書簡　第七　返事　エドワード卿からジュリイの戀人へ　五一七
書簡　第八　返事　ドルプ夫人からジュリイの戀人へ　五二六
書簡　第九　返事　ジュリイから其戀人へ　五二六
書簡　第十　返事　デダンジュ男爵から　五二七
書簡　第十一　返事　ジュリイから　五二八
書簡　第十二　返事　ジュリイからドルプ夫人へ　五三一
書簡　第十三　返事　ジュリイから　五三三
書簡　第十四　返事　ジュリイから　五三七
書簡　第十五　返事　ドルプ夫人からジュリイの戀人へ　五四五
書簡　第十六　返事　ジュリイから其戀人へ　五四八
書簡　第十七　返事　ジュリイから　五五五
書簡　第十八　返事　ジュリイからエドワード卿へ　五五六
書簡　第十九　返事　エドワード卿からジュリイの戀人へ　六〇一
書簡　第二十　返事　ジュリイの戀人からエドワード卿へ　六〇七
書簡　第二十一　返事　エドワード卿からジュリイの戀人へ　六一九
書簡　第二十二　返事　ジュリイの戀人からエドワード卿へ　六三三
書簡　第二十三　返事　エドワード卿からジュリイの戀人へ　六四四
書簡　第二十四　返事　ジュリイの戀人からドルプ夫人へ　六四六
書簡　第二十五　返事　ドルプ夫人からジュリイの戀人へ　六四六
書簡　第二十六　返事　ジュリイから　六四七
了

序

大都市に在つては、人の注意を惹く樣な出來事が必要であり、腐敗した人民にとつては小說が必要である。私は現代の風俗を觀て此の書簡集を公にする。だが今迄の世の中はこの書き物を燒棄てなくてはならぬ時代——卽ちこの書き物が非難してゐる所が罪なる冤罪であつて、皆の憤激を買つて了ふ程の時代ではなかつたのである。

今私はこの手紙の編纂者といふ地位に立つてゐるのであるが、實は私自身が皆書いたものである事は隱さずに發表して置く。果して私が手紙の內容にある樣な事を實行したか？或は全文皆荒唐無稽な作り事か？人々よ、君達にはこの問題は論ずる必要はない物だ。否確に君達にとつてはこれは作り事に違ひあるまい。

誰でも心の正しい人は皆自分で書いた本は「これは私の著である」と自ら發表しなくてはならない。故に私も、本書の卷頭に於て名乘りをあげた理由である。しかしそれは本書は自分の物であると主張する爲ではなくて、本書の責任を負ふ爲である。若し、惡い事が書いてあつたら、私にそれを賞めて頂きたいだが、若し善い事が述べてあつたとしたら、その時は私はそれを光榮とはすまい。若し本書が惡い物なら、

私は猶更の事、その悪いといふ事を認めて、決して、善くないのに、より善い物である等と頑固に主張しようとは思はない。

内容の眞實性に關しては私は國内に變をする人達が澤山居るけれども、デタンジュ男爵とかその娘とかドルブ氏とか、富豪のエワード、ボンストン卿、ドウ、ウオルマール氏とかいふ人達に就いては、何等そんな人達が居て、どうしたか等といふ事は聞いた事は無いと斷言する。又地理的な描寫は屢々大變眞實の物とは遠つて書いたが、それは讀者の目を瞞着するためでもあり、又それ以上私が實際の處を知らなかつた爲でもある。以上でもう私の云ひ度い事は盡きた。讀者各位が好きな樣にあとは考へて貰ひ度い。

此の本は、世界中に廣く讀まれる樣には出來て居ない。極く小數の人々にのみ氣に入る本であらう。第一形式が興味のある人の氣に召さぬものであり、内容が嚴格な人達を驚愕せしむるであらう。又「道德」を信ぜぬ人達にとつてはこゝに書かれてある感情等は不自然と見えるであらう。本書は、信仰深い人や遊蕩兒や、哲學者には氣に入る本では無い。同時に亦、氣取つた婦人方の氣を惡くさせ、正直な婦人方を侮辱するものでもあらう。然らば一體誰にこの本は氣に入るかしらん？恐らくは私だけにかもしれない。否確に本書は、普通に云つて誰の氣にも入るまい。

誰でも本書を讀まうと決心した人は、言葉の使ひ方の誤りや、大業で、しかも平凡な文體や、普通一般の思想でありながら業々しく書かれた事に就いて、退屈しない樣に心をひき締める必要がある。又其上、手紙を書く人々は佛國人で無く、才智のある人でも、學士會員でも、哲學者でも無く、却つて田舍者で、外國人で、孤獨な人で、青二才で、まるで子供みたいな人達で、夢幻的な想像をして、彼等の腦が考へた罪の無い囁語めいた事を、哲學視する如き人達であるといふ事も銘記しなくてはならぬ。

私は信ずる事を云ふのを恐れる事があらうか？この本は一體時代遲れの調子で充ちて居るから、或は、哲學書よりも婦人の御氣に召すかもしれない。又棄亂した生活にあつて尙純正な事に執着を持つて居る婦人方にもやはり有益であり得るであらう。娘さん方にとつては、これは別問題だ。貞淑な娘達は決して小說なんぞ讀みやしない。第一私は開卷して内容がどんなものであるか判る樣な明な題を本書には付けて置いた。此んな題を見ても尙敢へて此本を讀む娘があれば、一頁讀んだら其娘は、もう救はれまい。しかし其樣な娘があつても、決してそのとり返しのつかぬ狀態に陷つた事を此の本に責めてはいけない。一すばかりしか讀まなかつたからいけないのだ。彼女が若し讀み始めたら、皆讀まなくてはいけない。さうすれば別に危險な事も無い筈だが。嚴格な人が此本に目を通して最初の部分を讀むで落膽して了ひ、怒つて本を叩きつけて、編纂者に對して憤つた所で私はその人が不正である等と云つて、こぼす樣な事はしまい。私だつて彼の位置にあれば矢張同じ樣にするであらうから、又全書を通讀して私を敢へて嘲けらうとする人があるなら、若し御望みなら、全世界に大聲をあげて非難を云つて關はない。しかし、私の所へ云ひには來ては下さるな。何故と云ふに私としては、どうしても斯樣な人は尊敬するわけにはゆかないから。

私が共に生きて行かうと望むだ、又私を悪い人達の侮辱から慰めてくれた、良き人々よ、遠くへ去つて貴君方と同じ氣持の人達を探してくれ。町には、貴君方といつくり氣持の合ふ様な人は居やしないから。靜かな人里離れた所へ行つて、貞淑な戀人の群を欣ばせてやつてくれ。そして是等の戀人達の結合は貴君方の結合の魅力ある樂しさに結付くであらう。素朴な感じ易い幾人かの人は貴君方の狀態を愛する事が出來よう。世を煩はしく思つてゐる寂しき人々は、貴君方の犯した誤りや過失等を讃りつゝも、やさしけに斯う獨語するであらう。「嗚呼、この人達こそ私の心に缺いてはならぬ人達である」と。

次の「序」に關する注意（此の「序」は一七六一年版には記載せられなかつた。）

次の述べる對話は一種の會話の形式や長さの關係で初版にはその拔萃しか乘せる事が出來なかつた。だが此版には皆載せる。それと云ふのも、此種の書き物を讀むについて、この序は何かにつけ、有益な所があるだらうと私は思つてゐるからである。

「序」第 二。

N『さア原稿をお返へしする。私は皆讀んだ。』

R『皆ですつて?。比類の無い出來だと思ひませんか?』

N『Vel duo, vel nemo.』

R『Turpe et miserabile. 然し私は、はつきりした批判がして貰ひ度いですな。』

N『私は敢へてしないのだ。』

R『何もそんな六ヶ敷い事ぢやない。「こゝを說明して兄ろ」と一言云つたらいゝのですよ。』

N『良し。それでは私の判斷は次の樣に君に問を懸けるがね、その問の答へ如何に據つて決まるのだぜ。いゝかい。一體この書簡集は眞實にあつた事なのか、虛構なのかい?』

R『私は此の本がどんな結果を及ぼすかなんてことは少しも考へないよ。それで或る本がどうやつて作られたか、つまり眞實の事實に基いて作られたものか、或は荒唐無稽なものであるかといふ事は、その本が善いか惡いかといふ事を決するに必要でずかしら?』

N『必要だよ。大きに必要だよ。ある肖像畫が價があるといふのは、モデルの實物とは多少違つて居るにせよ、兎に角似て居るからなんだ。だが想像畫に在つてはそこに描かれてある人の風貌には皆の人に普遍的な感じを起こさせる表情を持たせなくては駄目だ。さうでなければこの繪は何等價値が無い事になるね。だから以上の二種の繪が希望通りに描かれたとすると、其間に自ら差異が生ずる理である。肖像畫は小數の人を欣ばせ、想像畫は公衆の氣に入るといふ事だ。』

R『成る程。そんなら、今の所若し此等の手紙が「肖像」であるとしても誰をも欣ばせず、「想像畫」だとしたら、これ亦不完全なものになるわけですねえ。さうでせう。』

N『さうさね。』

R『よろしい、そんなら、私は貴君が何やかやと御答へにならぬ前に御納得が行く樣にしよう。しかし私は貴君の御質問を今急に滿足させる事は出來ないから、貴君は私が私の考へなくてはならぬ問題の解答を獲るまでは我慢してくれなくてはならないね。まづ根本からかゝつてゆきますがね。扨てあのジュリイはね……。』

N『あゝ。その女が實際居れば何も問題はないんだねえ。』

R『えゝ何と仰言る。』

N『だが確に、これは作り事だな！』

R『で、さうだつたらどうすると云ふのです。』

N『若しさうだつたら、此の「手紙」程面白くも無い本は外に無いね。此の手紙にして手紙で無くなるし、小說でありながら小說で無くなるのだ。中の人物だつて別世界の人達ゝなつて了ふね。』

R『少しひどいですねそれは。』

N『怒つちやいけない。だが全く君の書いた人物は不自然なんだ。』

R『私だつて……否、貴君は隨分物好きだと思ふよ。何故そんな事を云へるのだ？貴君は人間といふものがどの位各人相異つて居るかといふ事を御存知なのかな？。どんなに人の性質が異つて居るか、又時、年齡に從つて人々の風習や、偏見やが異つて居るかといふ事を知つて居るのですか？。誰が人性上に明白な限界を設けて、「これまで行けるがこれより先は駄目だ」と云ひ得ませうか？』

N『うまい事を云つたな。しかしかうすると前代未聞の怪物であらうと、巨人、小人であらうと、色々な化物であらうと、皆其種に應じて自然にとり入れられ、本の形とは違つたものになつて、澄まして居る樣になるよ。さうすると自分達は、どういふ者が人間だかさつぱりわからなくなりはしまいか？私はもう一遍云ふけれ共、人類を描くには少くとも人性といふものを考へに置いてやる可きだ。』

R『人々が、本質的なものと變則的ものとの區別さへ知つて居るなら、そんな心配は無いのだ。貴君は、「佛國人は佛國式の衣服を着なければ見わけが付かぬ」といふ人達があるとしたら、彼等についてどう思ひますか？。』

N『そんなら君は、顔も姿も書かずに、衣に一枚の布を着て居る人間を描かうと欲する人があるとしたら、その人に就いてどう思ふか？　その樣な人に「君の描くといふ人は何處に居るのだい」と質ねて惡いものかねえ。』

R『顔も姿も書かない？貴君は正しい物の云ひ方をして居るかしら？　顔も姿も無いのは人間じやな

い、化物じやあるまいか。歯切れの悪い云ひ方はやめて私は云ふが、私の書いた人物は次の様な人々なんです。一人の娘は、彼女が心に珠と抱いて居たある「徳」に背き大きな不幸に恐れて義務に服したのだし、その友達は氣さく者であまり寛大なので自分の心に罰せられるといふ女であるのだ。其外、心の直い、感じやすい、又志操の弱い、そして辯舌の巧な青年や、貴族的な考へで頑迷な、そして其主義に對しては何物でも犠牲にするといふ年老いた貴族や、寛容な勇敢な、又常に智識的な問題になると、のぼせ上る、そして理由も無いのに理窟をこねて居る一人の英國人を私は書いたのです。』

N『そして君はこの男も書いたな、甘い御親切な一人の夫を、その妻の古い戀人を、自分の家に落ちつかせるのに夢中になつて居る一人の夫を書いたね。……』

R『貴君は木版に書いてある銘を親なくてはならない。』

N『Les belles ames「美しい魂」……ウン名句だ。』

R『噫！哲學といふものはどうしてこんなに人の心を狹ばめ、人を弱少なものにして了ふのか！』

N『所で空想的な考へは人間を大きなものにして、欺くのだ。餘計な事はやめて、前の話をしよう。二人の友達の女が居ると君は云つたねえ。それがどうしたんだつけ？……そして急に改宗した人が居たつけな。……きつと天のお惠みかな。』

R『だが貴君……。』

N『一人の基督教の婦人が居る。信心深い婦人が居る、そして彼女はその子供に教理問答も教へずに、神に祈る事さへ欲しないで死んで行く。すると彼女の死が一牧師を感化して了ひ、無神論者を信仰に入らしめる事となる。オーこんな無茶な事が何處にあるもんかい。』

R『だが貴君……。』

N『それにさて興味といふ方面に關しては、興味は萬人の望む所なのに、それも何も無いのだ。善人を恐ろしがせる如き悪い行爲とか、悪い人間とかも、それと云つて書いて無いのだが、平凡な簡單な事件がウンザリする程に書いてあるのだ。奇想天外といふ事も無し芝居めいた事も無い。前からわかり切つた事が、豫想通りに書いてあるのだ。毎日自分の家や隣家で見る事柄を記錄に書き記す事は六ケしい事なのかしらん？』

R『そんなら貴君には「普通一般的な人間」と「稀有な事件」とが必要なんですな。しかし私ならその反對を願ふ筈である。其上貴君は宛も「小説」を讀んだ氣になつて判斷なさるが、夫は小説ではない。貴君方自身で前に「手紙の蒐集だ」と云はれた。』

N『だが私は「手紙で無い手紙」とも云つた筈だ。何といふ書簡なのだ。妙に氣取つた文體ではないかそれは。馬鹿に感動詞が多いしゴテゴテ飾りがなんて多いじやないか！。平凡な事をしか云つて居ないで誇張した云ひ方がどの位あるだらう。幼稚な推理をするのに大きな物の云ひ方をするし。それに意味があ

foolish boy

woman of the streets

る所や正しい所は稀にしかない。美妙さも無ければ、力強さも無い。深さも無い。口調はいつも雲の中に在る様にぼんやりとして居て、思想は常に鋭さが無く、のろのろして居る。假に君の書いた人物が自然の中に居るとしても、それ等を表現する仕方が不自然だといふ事は、佯はれませんな。』

R『貴君の今見て居らつしやる見地から見れば、その様に見えるだらうと思ふ。夫は尤もの事です。』

N『そんなら君は公衆が他の見方で觀るだらうと信じて居られるのですな。そして私の判斷が君のお望み通りの物じや無かつたんですね！』

R『私がかうやつて貴君と問答して居るのは、結局私の望むで居る正し判斷を得んが爲である。だが貴君は「印刷せんとの企圖を以つて書かれたる手紙」と解釋すれば御滿足でせう。』

N『この希望は現に印刷しつゝある手紙にとつては都合の良い様だな！』

R『他人がある著書を見て其著者について知る物は、唯著者がその本で自分を現さうと思ふ通りの事だけなのです。』

N『著書がその思ふ通りに現れ、著者の描いた人物が宛然として現はされると云ふ。しかし此の長所だつて此の書簡集には缺けて居る。唯一人の描寫だつて力強く書かれたものは無いし、性格の表現だつて唯一つ鮮かなものは無い。確かな觀察だつて、世界に關する智識だつて何にも無いのだ。此の二三の戀人達や自分の事をのみしか考へぬ、友人達の小さい世界を見たつて何の得る所があるのだ？』

R『得る所は人類を愛するといふ事です。大きな社會に在つては人間を嫌ふ事のみしか教へられないのです。貴君の判斷は嚴しいものだ。だが公衆の判斷はより嚴しいものに違ひ無い。貴君の判斷を不正呼ばりばかりするのをよして、私は此度、私が如何なる態度と見地から、此の書簡集を見るかを貴君に云ひ度い。そして貴君に譏られた缺點を辯護するよりも、私は何故に譏られるか、其缺點の原因があるか無いかを探してみませう。隱遁して居ると、外の人達と違つた物の見方や感じ方をする様になるものです。情熱にした所で他の人と異つて來るから從つてその表現も違つて來る。想像力にした所でいつも同じ物象に動かされて居るから他の人よりもそれに就いては遙かに深く反動する筈である。斯くして出來た僅かばかりの意象は常に彼（隱遁者）の頭に思ひ浮べられて、何を考へてもそれが關係する様になり、一般の隱遁者の話によく見得る様な、皆同じだが、又一種奇妙な特徴を生ずる事となるのです。其結果として、隱遁者の言葉は非常に力强くなる事があるかしら？否決してさうはならない。唯少し風變りだと云ふだけで。力强く話すのは世の中（隱遁に對する）でのみ人が習得する物なのです。それは何故と云ふに、世の中では先づ人よりも異つた云方をし、人よりも巧まく云ふ必要があるのだ。それから信じて居ない事も常に正しいと承認しなくてはならないし、心に感じて居ぬ感情をも有する様に表現しなければならないから、其云ふ所に實質的に推服させる力の代りに、外面的な如何にも力强く人の心を捕へる様な力を與へねばならないのです。貴君は貴君の所謂「劇」や「創作」でお褒めになる、バッとした力強い、色彩豐な物の云ひ方を眞實に情熱ある

人はすると思つておるでなのか？　否情熱が一杯にみなぎると力強いといふよりも、豊かさに於いて表現されるのだ。情熱といふものは人を推服させようなどとは毫も考へては居ない。人がそれに就いて疑問を抱かうが抱くまいが、その様な事は心にも懸けない。「情熱」がその感ずる所を云ひ現はすのは、他人に見せる爲では無いので、かへつて自ら氣を樂にする爲なのです。戀愛は大都會に於いてはよりけばけばしく描き出されるが、村々での戀愛はより良いものではなでせうか？』

N『夫は言葉が貧弱なのが感情の強さを證して居る理になるのだね。』

R『時としては情熱は眞理をも表現する事がある。書齋に居る或著者によつて書かれた、又顰かんとする程の才士によつて作られた、戀文を見るが良い。少しでも筆者の頭に熱火が燃えると、「紙を燒く」（ブリュレ・ル・パピエ）と人が云ふ様にその筆は進むのです。火の熱さだつてこれには及ば無いでせう。貴君は魅惑され恐らく氣を顚倒させられるでせう。だが、これは其場限りの乾いた興奮に外ならないので、あとで思ひ出すにしても、僅か數言で盡きるものであらう。所で今度眞實の戀の心から書かしめられた手紙、ほんとに情に瞞られた戀人に書かれた手紙には、弛みがあり、冗漫で長たらしく、混亂して同じ事が幾度も幾度も書かれてあるだらう。夫は、彼の心が溢れ出る感情に充たされて、同じ事ばかり云つて、いつ終るとも見えないのだ、丁度絶えず流れる勢の良い河の様にそして絶える事が無いのです。しかしその様な手紙には鋭い所や、人の目を惹く様な奇妙なものは無いものです。どの言葉でもどの云ひ方でも、どの文章でも覺えてゐる事が出來やしない。賞める様な所はなんにも無い。何にもそこから心を打たれる事も無い。しかし、心が柔かくなるのを感ずる。何かしらん。感動させられる、そこで若し、そこに現れて居る感情の力が吾々を感激せしめないとしても、そこにある眞實といふものが吾々を動かすのです。實際心と心とが話をすると云ふのは斯うやつて出來るものなのだ。だが、何も感じ無い人や、情熱に飾られた、氣取つた言葉使ひしか出來ぬ人はこの種類の美しさはちつともわかりやしない。そして却つてそれを輕蔑したりなんかするのです。』

N『成る程。』

R『扨て、今あけた後者の種類の手紙にあつては、思想は假令月並みでも、その文體は決して普通一般なものでは無い、又一般なものであつてはならぬのです。戀は幻だ、戀は宛も別個の宇宙となるのだ。戀の人みが存在を與へて居て現實には存在しない物に戀はとりまかれて居る。戀は總てのその感情を形あるものとする故に、その言葉は常に象徴化されて居る。しかしこの象徴たるや、正鵠を得難く。又聯絡が無い。雄々しく話し出してもそれは常に混亂して居る。響が少なければ少ないだけ、愈々多くを語る。熱狂は情熱の終極點である。情熱がその極に達すると、情熱はその對象物を完全無比の物と見て、偶像にする、そして。空へ揭げる程に崇める。そして信仰の熱狂が戀の言葉を借用する様に戀の熱狂は信仰の言葉を借用する、斯うなると、樂園しか見えない。その目は天使にしか、聖人の諸德と、天國の生活の安らけさとにしか注がれない。この様な氣高い意象のみでとり圍こまれて居る感激の中にひたつて居る時に、人は廻り

くどい言葉を以つてそれを云ひ表すかしら？　平俗な云ひ方でその觀念を低級にし、卑しくしようとするでせうか？　彼は文體を高尚にしないでせうか？　神々しさと嚴さとをその文體に與へないでせうか貴君は手紙といふものに就いて書簡文體といふものに就いてどういふ考へを持つて居らつしやるのだ？　愛する者に手紙をやるのには、以上の事をよく考へなくてはいけない。何しろ戀文は通常の手紙では無いのです、情熱の吐露なのです。』

N『オイ〳〵。のぼせてはいけない、脈を拜見しようか？』

R『馬鹿な事私はもう頭に白髪が生えて居るのです。一體人間には二つの時期がある。經驗をする時期と、それを追想する時期とがある。感情は遂にはなくなるものだけれ共、感じやすい魂は常に存在するものです。

扨て私の書いたこの書簡集に就いて云はう。若し、貴君がそれを讀んで、それが迎合的な作家の作品であり、文筆の士として自負たつぷりなお得意な作家の作品であつたなら、此書簡集は排斥す可きものである。しかし、それが眞にある樣に見て頂き度い。そしてそれはどんな種類の物であるか、判斷して頂き度い。二三の單純な、然し感じ易い若い人達が彼等の心の鬪する事を彼等の間で話し合つて居る。彼等は互に相手の目を驚かせようなどとは思つて居ない。彼等は理解し合ひ、利己的な愛のみが働いてゐるにしては、彼等は餘りに互ひに相愛し合つて居る。彼等は子供である。彼等は成人の人として物を考へ得るだらうか？　彼等は世の中や社會を知るであらうか？　彼等に充ちて居るたつた一つの感情で、彼等は法悅にひたり哲理を索めんとする。貴君は彼等が觀察し判斷し、反省すれば良いとお思ひなのですか？　彼等何にも知らない。唯愛する事しか知らない。彼等は何でもその情熱に持つて行く。彼等が彼等の狂熱した考へを無視する事は彼等が我々に見せてくれる精神よりも興味の少ない物だらうか？　彼等は何についてでも云ふ。彼等はそして何に就いてでも間違ひをする。彼等は人に教へるにしても、彼等自身をしか知らない。しかし自分達を人に知らせつゝ、彼等は人から愛せられる樣にする。彼等の誤謬は賢者の智識よりも價がある。彼等の正直な心持は常に信賴して常に裏切られて居る德に對する偏執を到處に、彼等の過失に於てさへもつてゐる。何物も彼等の言には耳を傾けず、何物も彼等には反答をしない。しかし總てが彼等を迷から救ふ。眞理であつても强合の無い勢の無い眞理を彼等は拒むのだ。彼等は彼等の感じてゐた物を求めて何處にも求め得ずに、遂に自ら反省する。そして世界から身を引いて、彼等自身で私達の世界とは違ふ小さい世界を創造して、そしてそこでまるで新しい光景を彼等は作るのだ。』

N『廿歲そこそこの男と十八歲の女達とは、いくら教育をうけたにせよ、哲學者の樣に、實在に就いて思索するなんてする筈は無いと思ふ。又此娘達が後に才能ある婦人達になり、この青年が良い觀察者になる樣に書いてあるが、この違ひは見遁し出來ないことと思ふね。私は作品の初めと終りとを比較はしない。

家庭の生活の細々した事が若い時の誤りを消し取つて了つて、貞淑な妻、賢い婦人、家庭の母として價値ある婦人達は甞つて「罪ある戀人」であつた事を忘れしめて居る。だがこれこそは非難の標的なのだ。この本の終りの方はその初めの方を臺なしにして居る。人は或は「これは二つの違つた本で同一の人達が兩方とも讀んではならない樣な本だ」と云ふかもしれない。理性の目覺めてゐる人達が描くのに何故まだ彼等が理性的で無い時代から彼等を描くのだね？　賢い教へをうけるといふのに小供達がギャーギャー騒げば子供達にはその教へをうける氣も無くなつて了ふだらう。善い事が腑に落ちぬ前に悪い事が邪道に導くのだ。結局、讀者は初めの方の下らなさに怒つて了ひ、有益な事を得る前に本を棄てて了ふ。』

R『私はその反對に考へます。つまり、本書の初の方をつまらないと思ふ人には、終りの方だつて餘計千萬な物と思はれ、終りの方が有益だと思ふ人には初めの方も面白いに違ひないと、私は考へます。だからこの本を、皆まだ讀まない人は別に損なんかはしない筈だ。又何か有利に使つてやらうと思つてゐる人だつて若し此本がもつと壯重に始められて居たら、恐らく讀まなかつたであらう。何か云はんと欲する事を有益ならしめるには、先づそれを有益に用うる可き人に聽かれなくては駄目です。

私は手管を變へ内容も變へて聽いて貰へる樣にしたけれ共、私が過去に人々に何か話さうと務めた時には彼等は少しも耳を傾けてくれなかつた。恐らく子供達に話したらもう少しよく耳を傾けてくれるかもしれない。子供といふ者はむき出しの理窟でも、下手に匿くされた所の爲になる事でも、同じ樣に味ふものであります。

Così fanciul porgimo aspersi
Di soave licor gl' orli del vaso;
Succhi amari ingannato in tanto ei beve,
E dall, inganno suo vita riceve.

愉快な兒童のやうに我々は
甕の油の甘い液を注ぐ
それ程欺かれた甘い戀を彼は飲み
欺かれたものからその生命を受ける

N『又しても、君は間違つて居やしないかと恐れる。子供達は甕の邊の所を吸ふばかりで、中の酒は飲みやしないのだ。』

R『それはもう私が悪いのじやない。そんな事が無い樣にと出來る限りしたのですのに。

私の書いた若い人達は愛す可き者共である。しかし彼等が三十歳になつた時、彼等を愛する爲には、廿歳の彼等を知つて居なくてはならない。彼等を全く好きになるのは、長い間一緒に生活しなければならない。彼等の德を味ふ樣になるのは、彼等の誤を悦いた後にのみ可能である。彼等の手紙は急には興味を起

させはせぬ、しかし段々と、心を蒸き付ける様になる。だから、親しみ難く、去り難い所があるのだ。其手紙には人を欣こばせる様な所とか、人に馴れ馴れしい所は無い。又理、智、雄辯には缺けて居る。けれ共感情がそこには生きて居る。その感情は段々と心に傳はつて行つて、遂には總ての代りとなる。誠に此の手紙は長い戀愛詩であり、その各々の句は個々として見れば、何にも感ず可き所は無いが、全體の聯續として見るとその終りに於いて立派な功果があるのである。私はそれを讀んで斯く思つた。貴君は同じい様に思ひません？』

N『否さうは思はぬ。私は其効果は貴君の云ふ所と違つた意味の處があると思ふ。若し貴君がそれの著者であるなら、其効果なんか云ふものは至極簡單で言ふ程の事も無いが、若し外の人が其本の著者なら其効果を貴君と異つた意味にとる。世の中に生活して居る人は、あの不條理極まる思想や、とつて附けた様な悲憤や、例の良い人達の長たらしい屁理窟やには馴れる事は出來ない。唯隱遁者丈がそんな物を賞美するのだと、この理由は君が前に云つたね。だが此の原稿を出版する前に、世間の人達は皆遁世者ばかりから出來て居ないのだと云ふ事も考へて欲しい。出版して後碌な事は起りやせぬが、その内で最幸なのは先づ世人があの人の良い若者をセラドン（譯者註ユルフエの有名な小說アストレの主人公で、形容の意味では憶たいな弱いそのくせ甘い、感情已む事の無い所の戀する男を意味する。）みたいな奴だなとか、又精々が、あのエドワード卿を（ドンキ・ホーテ）みたいな人だなと思ふ位のものだ。其外あのお儀舌りな女を二人のアストレ（譯者註ジユピタの嬪を示す。）みたいだとか思ふだらう。そして氣狂をからかふ様にして此等の人物に世の人達は與じ合ふのが關の山だ。だがね、あまり氣狂ひじみた事が長く續くのはあまり面白くはないね。又書くにしてもセルヴアンテス（譯者註ドン・キホーテの著者）の様に幻で、六册の本が讀める様に書かなくてはならないよ。』

R『貴君が此作を出版させまいとなさる、理由はかへつて、私をして出版させるのに、勇氣を付けて下さる事ですよ。』

N『何だつて！　讀まれぬのにきまつて居るのにそんな事を……』

R『マア慌てないで、少し私の云ふ事を聽いて下さい。訓誡めいた事に關しては、私は世人に有益な本は何も無いと思ふ。第一に、彼等が獲る新らしい澤山な本は互に反對な事を云ひ合つて居て、結局相方共の効果消滅になり、皆無効となり了る。人が選んで熟讀する本だつて効果は無いものだ。詰り若し其等が一世の規箴を主張するとなると夫は上面な淺いものであるし、世の規箴に對して反抗するものだつたら、夫は無用の物なのだ。いくら世に反抗した所でその讀者が到底その本の力では斷つ事の出來ぬ様な羈絆で社會の不德に結びつけられて居るのだ。世の中の人は、一時でも良いから、その魂を道德的秩序ある所に置かうとして働き始めるが、諸方から強いて敵對に出合つて、結局は最初の狀態に止つて居るか、そこへ戻るか餘儀なくされるのだ。私は、この様な努力をしない――少くとも一度もしないといふ様な人は極く稀であつたにしても、生れ方が良い人達だといふ事、又その努力をやつても直きにその無駄な努めに落膽し

て、再び繰り返へさぬ樣になり、本に書いてある—丁度夫は閑人の寢言みたいな—訓言に再び固執するの
に馴れて行く樣になるといふ事を私は痛切に感じた。だから人は種々な事業や大都市や諸々な社會から遠
退いて行くに從つて、障碍は減ずる。そして障碍がもう弱く自由に越えて行けるといふ所がある。さうな
つてこそ、本に何の効用がありますか。孤立して住居すると、澤山讀んで他人の鼻を明してやらうといふ氣
もなくなるから、ゆつくり讀める、從つて色々種々な本を獲る必要も無くなり、前よりも深く沈思する事
が出來る。本を讀んだ事が外面的に於いて他人とか世間とかいふものに對立しないから—卽ち本を澤山讀
んだからと云つて人に褒められるでもなし感嘆されるでも無いから、內面的に非常な効果が現れて來る。
隱遁寂寥の中に於いも、大社會の中に於いても、同樣に懈怠なる禍はあるけれ共、一朝この念に襲れても
直に、興味ある讀書に赴く。實に讀書は獨居するものの自己以外に求める唯一の政策である。扨て巴里に
於いてよりも洲に於いての方が小說は澤山讀める、又町に居るよりも田舍に居る方が澤山讀めるものだ。
その上、田舍で讀むと遙かに多くの印象感銘を受けるものだ。貴君、これはどういふ理でせうか。

しかし、自ら不幸也と思つて居るだけで不幸である所の田舍の人に興味と教育と慰安とを同時に與へる
事の出來る此小說も、反對に田舍の人が自ら憐む可き者だと思ふ偏見を根底あるものとし、更にその偏見
を擴大して、唯彼の身分をのみ嫌やがらせるのに、實す可く創作されたとも思はれる。卽ち、貴君の所謂
良いと稱する小說の人物は華奢な人達や、流行を趁ふて步く婦人連や、有名な人や軍人さんや等であつ
て、田舍の人はその身分を一層卑しいと思ふではないですか。其外その人物は、都の趣味の凝つた事や宮
庭の法式やら、贅澤な道具やら、享樂主義的な訓誡等を以つて敎へたり、意見を加へたりしてゐるのだ。
彼等の仇な、空な道德は、一見色艶が良くて、眞個の道德の輝きを薄めて居るのだ。しなければならぬ實。
行問題の代りにその方法が麗々しく說かれてある。一體人は巧い演說を聞くと、とかくその演說の內容で
ある可き立派な行爲よりもその演說の方を高く評價するし、風俗が良いと、それは往々にして無躾と人
にとられるものです。

以上の描寫は田舍の貴族にどういふ影響を及ぼすでせうか？ その田舍の貴族は彼が客を接待する時の
淡白さが罵られて居る事やその住む郡一體にお祭りの時などに、大振舞をして欣こばせるのを、亂暴な饗
宴だなどと云はれて居るのを氣が付いて居るのに。又してもその貴族の妻にはどういふ感化を及ぼすでせ
うか？ そしてその妻が家庭の母としての務めは、貴族の婦人のなす可き業で無い等と思ふ樣になつたり
又その娘にも影響が及んで、都の整つた風や、彼女達の使つて居る言葉と遜ふその言葉の都雅かさで、彼
女が結婚する筈であつた、田舍臭いけれ共、正直な村の人を輕蔑する樣になつたらどうするのだ。皆がこ
ぞつて、田舍者たる境遇を厭がつて住むで居る村に愛想を盡かし、又祖先代々守つて居た古い城—それはさ
うすれば直きに取り壞れて了ふ—を見棄てて郡へ出て行く。そして、其處で主人は城主時代に用ひて居たサ
ン、ルイの十字架をさげて策士となつて金儲けに血眼になり、妻は賭博場を經營し、娘は遊野郎の相手に

なる。そして時としては屢々三人とも卑しい生活を送つて貧困と恥曝しをして死んで了ふ。

著作家、文士、哲學者等は市民としての義務を充すのには、又同胞に貢献せんとするのには、大都市に住まなくてはならぬと絶えず叫んで居る。彼等に云はせれば巴里を去る事は取りも直さず、人類を嫌ふ事である。田舎の人達は彼にとつては問題外なのである。彼等の云ふ事を聽いて居ると、宿屋や、學士院や、宴會のある所で無ければ人は居ない事になるのだ。

段々と此の樣な傾向は總てのものを引き込む。物語、小說、劇の中で田舍者を題材とした物は皆田舍の生活の簡單なのを嘲弄して居るし、そして皆大都會で華かに暮らす樣子や欣びを說いて居るのだ。この樣な事實のあるのを識らないのは恥に當り、この事實を味へぬのが不幸な事になるのだ。日に日に巴里ではどの位の掏摸や娼婦やが此等の皮層的な快樂の魅する所となるでらう？　斯の樣にして、この誤つた考へ、同時に一般の主張である此の思想は、政治的組織の結果を強固にすると共に、各國の住民を一地方の數個に集中蝟集せしめて、或數點の地以外の地は皆荒蕪、荒廢に歸せしめるのである。斯うやつて、都市が盛んになる爲に一方では國民の人口が減少し、馬鹿な人達の目を驚ろかす所の此の『淺薄な光輝』は全歐洲をしてその滅亡に赴かしめて居る。此の毒せられた教への滔々たる流れを止めるのこそ人類の幸福に重要な務なのである。「善く賢こくあれ」と吾々に叫ぶのは全く道を說く者の務めである。勿論その說教の効果等には毫も心を關せしめずにやる可きである。自ら愛ふる市民は吾々に「善くあれ」と愚かにも云つては

ならぬ。しかし、勿論、吾々をして善からしむる所の狀態を吾人に愛せしめなくてはならぬが。』

N『まアこゝで一寸止めたまへ。まア一息いれたらどうか？私は實用的な見解を取る。大分長々と君の考を聽いたから、今度は私に少し饒舌らせて貰はうか。確に君の議論の樣に、總て想像で出來た作物に、その作物が持ち得る唯一の効用を認めるのには、その著者が企てた目的と正反對な目的にその作物を導いて考へて試る必要がある。人の作つた種々な設備を遠ざけ、總てを自然に導き歸し、人々に平等で簡單な生活を愛せしむる樣にし、靜寂と平和とを愛する樣にし、各人を各々適當に分散せしめ、町に集合する樣に誘ふ代りに、國の各地方を生氣あらめる樣にその土地に平等に散在せしめる事も必要だ。私は又、ダフニス（譯者註ギリシャ神話の神○獸を創めたと傳ふ）やシルヴアシドルやアルカデイアの牧者やリニヨンの牧人の樣な人達、又自らその土地を耕しつゝ自然について哲學的瞑想に耽けるといふ有名な百姓達を作らうなんて實に問題外であるのはわかつて居る。又書物にしか書いて無い樣な空想的な今云つた人達の種類と似た人間を作り出すのでもなく却つて、パンに苦しまぬ人達に、彼等が知る事の出來ぬ快樂を田舍の生活や農業は持つて居るものだといふ事を知らせるのこそ考へなくてはならぬ事だと思ふ。又私は此の田舍の生活の歡びは、彼等パンに苦しまぬ人達が思つて居る程に味の無いものでも無く又賤しいものでも無いといふ事はわかつて居る。そして其歡びには趣味や、良い所や、微妙な所も仲々ある物である。だから相當の地位にゐる人でも一家族率ゐて田舍に隱退し彼自身百姓にならうと決心した人には、確に田舍の方が都會の歡樂の中にあるより

も遙かに心地良い物である。そして畠に働く女でも美しい可愛い〻女―都の氣取屋連と同じ樣に優美であり、より心を動す樣な可愛い〻女になるのだ。又何か集會があつても皆優しい感情を持つて居るので、都の倶樂部での樣子振つた言葉等よりも遙かに樂しくその集會をにぎやかにするのだと思ふ。都の倶樂部では、陽氣さといふものが無いのでその埋め合せとして人の心を傷ける樣な諷刺的な笑ひ方を吾々はして居るのだ。さうでせう。』

R『さうですとも、しかし私は貴君のお考へに、たつた一つ考察を加へよう。人は小說が頭を擡して了ふと云つて慨いて居る。さうかもしれない。つまり、讀者達（譯者註、田舍の人を指す）に小說が取扱つて居る、夫れは讀者達のとは違ふ境遇から出る、所謂魅力のみを見せつけて誘惑はするけれ共本來の讀者の身分を憎惡せしめ、遂にはその愛する現在の境遇とまるで反對な華かな身分を憧憬せしむるに至るのである。現在の自分と異つたものにならうと欲して、現在の自分とは異つた者に思ふ樣になつて了ひ斯うして人々は馬鹿みたいになるのだ。若し小說がその讀者達に、その周圍手近な物や彼等の果す事の出來る義務だとか、彼等の現在の境遇の歡びだけを描いて見せて居るなら、その小說は讀者を賢くする。孤獨な隱遁者の爲に作られた書き物は隱遁者の言葉を使つて居なくてはならぬ。其上彼等を教育するのには、彼等の氣に入る樣に又彼等を歡ばせる樣に作られてなくてはいけない。そして小說はその讀者の境遇を愉快にして讀者をそれに結びつけて離れぬ樣にしなくては駄目だ。そしてどうしても大社會の箴言を破り棄てる樣にしなくてはならない。そして其等の箴言をそのあるが儘に示してその誤つて居る所、輕蔑す可き所を讀者に示さなくてはならぬ。此の樣な本は一個の小說であるにしても、そして如何にそれが、良く書かれてあり少くとも有益であるとも、流行を趁ふ人達には、平凡なくせに、大業な、馬鹿らしい本としてさんざん妨害され、嫌はれ、罵しられるに違ひ無いのである。ねえ、貴君こんな事をする世の中の馬鹿さ加減も賢明な行ひと云はれて居るのですからね。』

N『君の結論としては自然御尤もだね。だがその結論が全然下らないもので間も無く瓦解して了ふか或は案外強くて死花を咲かせるかもしれないがこれはどうも今からわからない。所で私には一つ、なほ難題が殘つて居る。田舍の人達は本を讀むにしても吾々都人士の良いといふ物のみを讀むで、惡いといふ物は目を通さぬといふ事だ。だから彼等の手に入れるものは、都の人の送つてやつた物ばかりである。例を引くと隱遁者向きの本は先づ都の人士に讀まれる、そして都人がその本を「つまらぬものだ」と云つたら、他の人はその本を讀みやしない決して。どうだらう。御返事如何だ。』

R『御返事は別に六ケ敷い事も無い。貴君は地方の頭のある人達に就いて話して居るのだが私はほんとの農夫に就いて話して居るのですよ。貴君の仲間の人達は都會で貴君方の氣持を癒やす所の偏つた考を此上も無い物として尊び、全佛蘭西の手本となつてる積りで居るけれ共佛蘭西の四分の三は貴君方が此世に居るかどうか知つてやしないのです。巴里に集つて來る書籍は地方の本屋の富を作るといふものです。

N『君は何故我々都の本屋に損までさせて地方の本屋を富ませようとするのだ。』

R『茶化すなら茶化し給へ。私は斯く信ずるのさ。兎に角光榮に憧憬れるなら、巴里でその本は讀まれなくては駄目だし、有益ならしめようとしたら、地方で讀れまなくては駄目だ。どの位の心正しき人々が、遠く離れた田舎で祖先傳來の領地を耕して、この僅かばかりの領土に居つて流適されて居る樣に思ひつゝも其暮しを立てて居る事であらう。交際社會の催し等少しも無い田舎の冬の每晩には彼等は必らず、手に這入る面白い本は何でも、ストーブの傍で讀んで、その夕を過すのである。粗朴で單純であるから、彼等は、文學通を振り廻すも才氣を彈けさする事も爲ない。彼等は本を讀むにしても、怠屈だからなので別に智識を獲ようが爲ではない。道德の本や哲學の本は彼等には有つて無いのと等しい。人は彼等に共種の本を用ひさせる事も不可能だし、又彼等もその本を讀むには至らぬ。所で貴君方の讀める小說は彼等に適當な何物をも與へぬばかりか、かへつて彼等の境遇に對して彼等に、嫌惡の情を興さしむるのである。必らずその樣な小說は彼等の住居を荒漠とした廢虛たらしめる。數時間彼等がその小說を讀んで樂しめば、面白く無く思ひ且仇な後悔をして數ケ月過す事になるであらう。しからば私は何故、良い機會があつて此の本―此の私が善いと主張する此の本（譯者註、此の本はつまり本書を指す。）が他の、より惡い多くの本と同じ樣に田舍の人の手に渡り、その內容に、彼等の境遇に似て居る身分の歡喜が描かれてるので彼等の境遇を耐え易くする、といふ事を私は何故假定出來ないのか。その位な事はあるものか。假定出來る筈である。私は二人の夫婦が一緒にになつて此本を讀み、彼等の共同の仕事を耐えるに新しい力を其處から汲みとり、又彼等の仕事を有益ならしめる新しい物の見方を體得するを想像したい。どうして彼等は此の本に描かれてある幸福な家庭を唯眺めて居るだけで、眞似しないで居られようか。又どうして、肉慾の魅惑の無い、婚姻の樂しみに、彼等自身を接近せしめ、堅固ならしめずして、その樂しみに感動出來ようか。この本を讀んで了つた所で彼等は彼等の身分に就いて悲しんだり、彼等の務めに憎惡などは抱かない。かへつて、皆の物が彼等の周圍に笑顏をして居る樣に見えて來る。そして彼等のなす可き務は彼等には氣高い仕事となつて現れて來る。彼等は自然の歡びを味ふ樣になり自然の純情は彼等の胸に甦つて來るであらう。彼等の身分相當の幸福を味ふ事を覺えるのでせう。同じ仕事をするにも人と違つた精神を以つてやり、彼等が百姓としてやつた通りに後日一家の長として行ふでせう。』

N『今迄は君の議論もよいとして、君は、夫達、妻達、一家の母達に就いて君は今迄云つて居たが娘達はどうする？』

R『いや。心の純な娘は戀愛本なぞ決して讀みやしない。若しその標題を見て尙ほ讀んでその爲に惡い感化を享けたと云つてその娘が慨かなければ、彼女は僞つて居るに違ひない。讀み了らぬ內に危險があるのです、決して標題を見て氣まぐれにも讀まうなんて、あぶない事をしてはいけません。』

N『成る程。よし。戀愛小說の作家達よ、こゝへ來い、こゝでお前達は正しいと認められるぞ。』

R『勿論作家の心から又その作品の内容が戀愛的であるならばですね。』

N『それで君自身も左樣だといふのか?』

R『さうだ等と云はずとも知れた事です。が此のジュリイは本を批判する法則を體得した樣に書いてあるが貴君が若しその法則を良いと思つたら、それを使つて次の事を判斷して下さい。一般に人は小說を讀む事は靑年に有益な事だとして居るけれ共私はこれより馬鹿な考へは無いと思つて居る。まるでポンプで遊ぶのだと云つて家に火を放つのと同じい。この誤つた考へに據ると、是等の作品の敎訓をその本來の目的に赴かしめずに、娘達に向けるのだそして娘達は人が慨く程の亂行はして居らぬといふ事に少しも考へないのだ。一般に云つて娘達は心は腐敗して居つても行狀は正しいものである。彼女達は其親に服從して他日母親と同じ事をしてやらうと待ち望んで居るのだ。だから成年の婦人達が彼女達の義務を盡す樣になれば自然と娘達も其務めを怠る事はありますまい。』

N『私の考へは少しそれと違ふ。性的方面にはどの階級の人でも放縱な一期間はあるものである樣だ。この惡い酵母は遲かれ早かれ兎に角醱酵するのだ。道德ある民にあつては、生娘が誘惑に負け勝ちであつて成年婦人は嚴格なものだ。又道德の無い所の民にあつては、それと反對なのである。前の人々は犯罪といふ事のみを考へて居るからで後者の人々は惡評にのみに其意を向けて注意して居るからである。證據のあがらぬ樣にとばかり氣をつけて居て。法律上の罪刑等は齒牙にも懸けて居ない。』

R『だがよく物事の全般を觀るとさうではないですよ。兎に角女達に對して正しい判斷を下さなくてはならない。女達が亂行したつて其罪は彼女よりも吾々の社會制度に據るのだ。自然の總ての感情が不平等の極壓しつけられて了つてから、父の不正な專斷的な行ひの結果子供達の惡德と不幸とが出て來たのだつた。そして、無理強ひで不調和な結婚をさせられて、親の貪慾や、虛榮の犧牲者たる若い娘達は自ら誇つて亂行をする樣になり、最初持つて居た正直さの潔白を求むる心を失つて了ふのである。貴君は此の弊害を矯めんと欲するか。然らばもつと根本的に物を考へてみませう。若し公の風儀に改革を加へるとしたら。それは先づ家庭の風俗からとり懸らねばならない。そして此の問題は絕對的に父母の位置にある人に關係がある。貴君方が賞める著者は壓制的の戀しか說かないがこれは敎化の宣しきを得たものではあるまい。此樣な著者の本の道德律は空虛である、何となればその道德律は最大な強者にのみ、媚びる事をしか敎へて居ぬからです。』

N『成る程、君の方で云はれる道德律は卑屈では無い、しかし、自由である儘にあまり自由過ぎやしないだらうかね。又「惡」といふ所まで至る程ではあるまいか? 君はそれが惡になるのを恐れないのか?』

R『惡になる? 誰に惡になるのです? 例へば傳染病や流行病がはやる時にだけ、そして皆が子供の時からその病氣になつて居るのに、その病に良い藥があつても健全な人に毒になるからと云つてその賣買を禁じなくてはならぬかしら? 私は若し此の書簡集が多少でも成功を收め得たら、それは必らず「最善

の本」よりも多くの良い事をするに違ひないと思つて居る、第一貴君と私とはこの點に付いても、まるで考へが違つて居るのです。』

N『君がうまい事を云はせる女說教家（譯者註シュリイの事）を持つて居る理だな。私は君が女の人達と仲が良いのは見てゐて感心する、だが私は君がその女達に說教する事を禁じたのはどうもけしからんと思ふ。』

R『仲々貴君は手嚴しい。私は默つて居なくてはならぬ。だが私は常に頑張つて「自ら正當也」と云ふ程氣狂ひでも無いし又賢者でもない。あとは一般の批判に委ねる事にします。』

N『老婆心ながら、そんなものは無からうと心配してゐる。しかし此書簡集が充たされて居る所の過激な事件や、劇しい情熱化された感情やが嚴しい檢閲係の目を通過する事は到底出來まい。試みに君、クランの鍛や化粧室と同じ場面を芝居でやつた事があるか考へてみたらいゝ。まア劇（興行物）に關する規則を讀み直して其上此書簡集をもう一度讀み直すがいい。撞著せぬ樣にやつてほしい。さうでなければ兜を脫ぐのだね。君はどう思ふ？』

R『私は、批判といふものは自家矛盾する所なく、よくその對象を瞰べてなされる可きだと思ひますね。マア貴君自身が今貴君の棄てた書き物を讀み直ほして「ナルシス」の序文を又讀んで欲しい。さうすれば貴君が私を矛盾してゐると譏る事に對する答へが見つかるに違ひ無い。「村の占者」の中に私の矛盾を認める輕率な人々は此の書簡集でも恐らくより多くの矛盾を認めるに違ひない。だが貴君は……』

N『私はナルシスの序文の二つの文章を思ひ出した。一體君は君の同時代の人々をあまり尊敬しないな！』

R『私は彼等と同時代の人間なのだ。私の此書き物が役に立たなくて、火に投じなくてはならぬ程の時代に生まれれば良かつたですなァ！』

N『君は君の癖としてあまり誇張し過ぎるのだ。ある點までは君の云ふ箴言も正しい。例へば若し君の書いたエロイーズが常に賢かつたら、あんなにいつまでも教育事業に從つて居なかつたらう、何故と云ふに彼女が一體誰かの師表になるであらうからである。一番完全な道德の敎示を望むのは最も腐敗した時代に於いてである。つまり敎はるだけで實行しないのである。そして暇つぶしの讀書により、又德に對する望みの滓によつて安價な欣びを獲て居るのである。』

R『だが貴君の仰言る樣な著者達はもう少しそのモデルを公衆的にして欲しい、若し貴君が彼等の眞似をするのを望むなら。未だ一度も汚がされぬ清さを貴君は誰に誇らうとするのか？　それより。一度は失つたが再びとり返し得る清さを吾々に話して下さい。さうすれば恐らく少くとも誰かゞ耳を傾けよう。』

N『君の書いたあの青年もその樣な考察をして居たね。だがそれは別問題として、人がしなくてはならぬ事を明示しようとしてその人が誤つてなした事にまで言及するのは罪になると思ふ。娘達に戀の手解きする事や成人婦人達に遠慮を敎へる事を除いても既成の秩序の紊亂、哲學の禁ずる細かしい小道德を持ち

來たす事になる。君は何と云ふか知らないが、娘達に戀を教へるなんて卑しい、恥づ可き事だ。その妻の戀人をゆるし得る良人は、世にはたつた一人しかないだらう。君は君の本を讀んではならぬ娘達に寛大であつて、讀んで批評する婦人達に嚴しいのは實に下手な遣方だね。でも、君がとても成功しさうにも思はなくとも安心して居たまへ、私が良い樣にしてやるから。實際君の樣な遣方では譏られるのも尤だよ。だが兎に角、私は秘密を守つて君の名など公にしはせぬよ。君もい〳〵加減にして置いた方がい〳〵ぜ。この本が有益になると君が信ずるのなら兎も角。まア君の名は發表しないで置き給へ。』

R『貴君、名を發表する？　心直き者が公衆に話す時に其名を匿して良いものかしら？　彼は心にも無い事を公に出版するだらうか？　私は此の本の編者だ？　だから私は編者として名を書く積りだ。』

N『名前を書く？　君が？』

R『さうさ私自身の。』

N『何だ？　君はそれに名前を書くといふのか？』

R『さうですとも。』

N『君の本當の名を、ジアン、ジアック。ルーソーと總てをか？』

R『さう。ジアン、ジアック、ルーソーと皆書きます。』

N『何と云ふ事だ、人は君に就いて何と云だらう？』

R『そりや人の云ふに委せますよ。私は此の書簡集の卷頭に名宣る、それはその本を自分の物とする爲で無く、それは異議のある場合に答へんが爲である。若し惡い事が書いてあつたら、私を責めて欲しい。善い事があつたとて別に私は光榮とはしない。若し人が此の本を本質的に惡い物と認めたら猶更の事私は私の名を書く理由になる。私は私が優れた人でも無いのに優れた人と見られるのは望ましくない。』

N『それで君は此の返答に滿足なのか？』

R『この本が誰にも善いと見られぬ内は仕方無い。』

N『そんなら「立派な人々」はどうする？　君は忘れたのか？』

R『自然は彼等を創成したが、吾々の制度は彼等を惡い物にして了ふのです。』

N『戀愛本の卷頭に「ゼネヴ市民、ジアンジアックルーソーによりて」と書かれるわけだな。』

R『ゼネヴの市民だつて？　否これは書かない。私は私の祖國の名を瀆す樣な事は、決して爲ない。私はその名を、祖國に光榮あるだらうと思ふ本にしか載せない。』

N『君の名だつてまんざら光榮の無い名でも無い。君は失ふ所があるよ。君の爲にならぬ、つまらぬ、平凡な本を出版するとね。だが、君が其樣な馬鹿な事をするなら、せいぜい大びらに又淡白にやつて懲しい。それは左樣と君は君の座右銘までそれに書くのかね？』

R『本屋の奴こんな惡戲をしたけれ共、私は非常に惡い事でもないから許してやる積りである。然し、貴

君、私の座右銘は此の本にはどうしたつて載せないよ……。又それだからと云つて此銘をこれでうつちやる積りもないし、それを作つた事を恐縮などしやしない。私が斧つて劇に對して反對論を書いた時に私が此書簡集を出版しようといふ考へがあつたといふ事、又私の此書簡集の一つを私が辨解する樣な事があつても夫は決して他の部分と矛盾衝突して眞理に背く事は無いといふ事を考へて貰ひ度ひ。以前にはこれから先人がどの位私を攻撃した所で及ばぬ程猛烈にやつつけられたものだ。光榮よりも眞理を望む者はやはり生命よりも眞理を望み得る者である。貴君は人は常に矛盾せぬ樣にと望んで居られるが、私はこれは人間にとつて可能の事かどうか疑ふ。だが人間にとつて可能である事は常に眞實であるといふ事である。そして私もさうならうと思つて居るのだ。』

N『君に私が「君は此の書簡集の著者か」と質ねると、何故君はうまく私の質問を避けて了ふのだい?』

R『この事に就いても私は虚言は云ひ度くないのです。』

N『然し君は眞理を云ふのも拒んでは居まいか?』

R『然し默つて居たいと宣言するのもやはり眞理に光榮あらしめる爲でせう?! 眞理といふ事を考へれば實際虚言なんかつけるものでない。其上趣味のある人達は文體を見てその著者が誰人か當て損ふ人はあるかしら? 今度は貴君が解かなくてはならぬ問題だ、どうしますか?』

N『私は若干の手紙を見れば誰が書いたかわかる。此書簡集の或物は 必らず君の作に違ひない。然し他の物はどうも君らしくない所がある、誰かゞ僞作したのかもしれない。人に見誤まれる恐れの無い自然は時々その外形を變へる。そしてこの外形以上に自然ならんとして藝術が現れて來る。寓話中の不平家は眞實の動物よりもよく動物の聲を表はすものだ。此の作には三文文士だつて避け得た樣な下手な事が一杯書いてある。例へばやたら大きな事を云つたり、繰返し、矛盾、長々とした駄辯等だ。こんな悪作をする事に決心して尙ほ、これより良い作を作り得ると云ふ人は世の何處に居るであらうか? 狂人みたいなエドアールからジュリイにやつた胸糞の悪くなる樣な結婚申込みを書いた人は何處に居るのだ。又常に死なうと思ひつゝ世間にそれを振れ歩いて尙、健全に生きて居る青年の笑止な行を訂正しようとしない人は一體何處に居るのだ。「人の性格表現に注意して文體を變へる事」と自ら心懸けて居ないで書き始めた人は何處に居るのだ。確かに、これだけ考へてみても、この本はもう少し自然的であつて慾しかつた。

私が觀察すると、親しい人達の間では、文體も性格に似て來て友達間の考へ方感じ方云ひ方は皆同じ樣になつて了ふのだ。ジュリイは元來、魅惑的な女なんだから彼女に近ずく者は皆彼女に似て來なくてはならぬ。總てが彼女の周圍にあつて「ジュリイ式」にならなくてはいけない、彼女の友達も皆同一の「トーン」を持つ筈だ。しかし此の事は感ぜられるのであつて、考へられる事では無い。考へられたとしても、それを考へ付いた人は實行する事は出來まい。其上纖細の果て單純になつたものはそんな人には到底わからぬものでない、感ずるのでなければ。だがそこに眞理の印があり、瞳眼の印が自然を認める所だ。』

R『ヘエ！それで貴君はどう結論するのですか？』

N『私は結論出來ぬ。疑ふ。そしてどの位私はこの作を讀みつゝ此の疑ひに惱まされたか明言出來ないね。確に此本は架空的なものだ、君は悪い本を作つたものだね！だが書いてある二人の婦人が嘗て居つたと云つてくれ。私は死ぬまで毎年此の集を讀み直して試る。』

R『彼女達が居なくつたつていゝじやないですか。どこ探したつて居やしない。居ないのですよ。』

N『彼女は今居ない。しかし嘗つて居たのか？』

R『この結論は條件的だね。その女達が居たら今は居ないのだ。』

N『我々の仲の話だがこんな細かしい事は煩はしいけれ共もう自明の事だと御承知願ひ度いね。』

R『思い通りに考へて下さい。さうすれば私は自己を裏切る事や虚言を云はなくても濟むから。』

N『だが無駄な事をしたものだ、どうしたつてこうしたつて讀者は君の心位當てるよ。君の引用句が總てのしやべるのに氣が付かない。』

R『私はその問題については私の引用句は何も云ひ得ないと思ふ。誰が、私がその引用句を元の原稿から見付たのか、私がそこに書き入れたのか知らう？。又私が貴君と同樣な疑の中に居るかどうか又この理の通らぬ調子のあるのは貴君が知り度いと思つて居る事に就いて知らぬ振りを私がして居るのではないかしらと云ふ事を誰が言明し得よう。』

N『しかし、君は此本に書いてある場面の土地を知つてるだらう？　君はヴォー地方のヴヴェーといふ所に居た事がある。』

R『さう、幾度も。だが私はデタンジュ男とかその娘の事は一度たりとも聞いた事は無いと云ふ事を貴君に宣言する。ドウ、ウォールマール氏の名だつて知られては居ない。私はクラランに居たけれども此書簡集に書いてある樣な家は一つも無い。あの悲しい事件のあつた年に私は伊太利から歸る途中にクラランを通つた。だがウォルマールのジュリイを悼む人は一人も居なかつた樣だし又それに似た事も毫も無かつた。私がその國の狀態を心に思ひ出せば出す程、此の書簡集には土地の位置を變へてあつたり、地理上の誤りが多い樣に見うける。それは著者が智識に乏しいためか、或は讀者を瞞着するためかもしれない。以上の事はあの點に就いて私が貴君に教へてあげられる全部だ。そして私が貴君に云ふのを拒んだ事を他人に云つて了ふ樣な事は斷じて無いから、安心し給へ。』

N『だが世の中の事は皆私みたいな功奇心を持つて居る。此の本を公にするなら、君の私に云つた事も公衆に云つてくれ給へ。寧ろ、この會話を「序」として書いてくれ給へ。必要な說明は大方そこに在るからね。』

R『成る程さうだ。私が此件に就いてこれから云はうとする事よりも遙にその方がいゝ。だがこの樣な辯明文はあまり成功しないでせう。』

書簡

N『さう、著者が遠慮して居ると見られるとね。だが。私はそんな事が無い様に注意をする。唯私の君に勤める事は役割を少し變へて私が君をしてこの集を出版せしめた様にして慾しいといふ事だ、そして君が君自身を辯護して君が反對をうける役をするので、君は私に返事をするといふ風になつて慾しいね。さうすれば至極良いね。そしてうまい結果を生ずるよ。』

R『だがこんな事をしても貴君が良いと云つて褒めた私の性格に背く事は無いのでせうね?』

N『いや、一寸罠を懸けて試たのさ。その儘に君の思ふ通りにし給へ。』 ―了―

第一部

書簡第一　ジユリイへ

貴女、私は貴女から離れなければならぬのはよくわかります、今迄だつて貴女に對して私は何をもお望みなどしてはならなかつたのです。いゝえ、むしろ私は貴女にお目にかゝつてはならなかつたのでした！しかし今となつては私はどうしたらいゝかしら？　貴女は私に友情をしなくてはならないかしら？　貴女は私に友情を約束して下さつた、私はこんなに困つて居るのですから、どうぞどうしたら良いか教へて下さい。

私が貴女のお宅へ出這入りしたのも唯貴女のお母樣のお招きに應じたからなのです！貴女はこれを知つて居らつしやる。お母樣は私がお母樣のお氣に召す樣な仕事を修業したといふ事を御存知なので、男氣の無い處で、可愛がつて居らつしやる御孃樣の御敎育には、私の持つて居る才能も、滿更不必要ではないとお思ひになつたのです。かうなると私の方でも一人のこの樣に美しい性格の方を私の若干の華で飾るのをどんなに得意に思ひましたらう！そして私はお召しの儘に、此の危い任務をお受けしたのです。危險な事も少しも豫測せず、少くとも危險があつてもそれを恐れずに……。私は、貴女に、この向ふ見ずな行ひを償ひ始めて居る等とは申しますまい。私は貴女がお聽きになるに忍はしくない樣な又貴女の行ひ、尙貴女

の御身分、貴女の魅力に對して禮を缺く樣な事を申上げる程な身の程を忘れてはならぬと思つて居ります。苦しむなら獨りで苦しむで慰めて居ませう。貴女を傷けてまで私は幸福を得ようなんて思ふものですか。

然し、私は貴女を毎日見て居る。そして貴女は無邪氣に貴女が慨く事の出來ない、又貴女が知る筈の無い不幸を深めて居らつしやるのだと、私は直覺的に氣が付きます。實際もう希望の無い者がこの樣な場合心配考慮して探る可き道は私だつて知つて居るのです。そして此の場合若し私が此心配と純な心とを調和出來たら、私もその道を探る樣に努めるでせう。しかし、私はその奥樣が自ら進んで私を入れて下さつた家庭からどうして、體裁良く出られませう？　奥樣は私にはあんなに好意を示して下さるのだし、奥樣は御自身で一番愛して居らつしやる一人の方に、私が何やかやと役に立つだらうと信じて居らつしやるのだし……。私はどうしてこの樣なやさしいお母樣が。他日そのお連合ひの方に、貴女が學問をして進歩なさつた事を見せて、お驚かしになつてお歡びになるのを、私はどうして無くして了ふ事が出來ませう……。お母樣はお父樣に匿くして貴女を御教育になつて居られるのですから。と云つて何も云はずにお暇を頂く樣な無禮な事をしなくてはならないのでせうか？　それともその理由を申上げませうか？　又私の望みを申上げれば、きつとお母樣のお氣を惡くするに違ひないのです。身分からも、財産からも、到底貴女に向つてあこがれる事なんぞ許される可きものでない一人の男の望みなんですもの。

私のこの困惑から抜ける道は一つしかありません。それは私をこの困惑に陷入れた手が私を抜き出して呉れる事なのです、私の苦しみも、私の過失も皆貴女が源なのです。どうか憐れと思つて貴女から私を追放して下さい。私の差上げた手紙を御兩親にお見せになつて、私の出入を差し止めて下さい。兎に角どうでもいゝから私を追ひ拂つて下さい、私は貴女のなさる事なら何でも堪えますけれど、私からは貴女を離れる事はどうしても出來ません。

貴女が私を追ひ拂ふ、私は貴女を逃げる。自分の身分について考へ、心を鋭くし、名譽を愛するのは何で罪になりませう。然し、ジュリィさん、貴女の麗しさが私の目を眩ましたのだ。他のものより、より強い一つの美しさが貴女の全體の美しさを色付けて、その爲に私は心が亂れて了つたのです。それはあの勢の良い感受性と少しも變らぬ優しさとが混合したものなのです。他人の不幸に對してあれまでにやさしい貴女の御心なのです。又それは貴女の天性の清けさから出て來る正しい才や偏らない整つた趣味がそれなのです。それは一言で云へば、私が貴女の内に熱愛して居る一人の人の持つて居る感情よりも、より上な感情の魅力を貴女が持つて居らつしやるのだ。他の人は貴女を私以上に美しいと思ふかもしれないが、それはいゝとして、私よりも外の正直な人の心に貴女が愛深くなり應しいといふのは、ジュリィさん、不可能です。そんな事があるものですか。

屢々私は神樣が私達の愛に不思議な程しつくりした所を與へて下さつた、又私達の趣味にも、私達の年恰好にも同じ樣に似通つた所を與へて下さつたのをどんなに得意に思つたでせう。二人とも若いのですか

ら、自然の儘な成り行きを外物は何も變へたりしやしないのです、私達の好悪も似て居る樣です。世の中一般な一樣的な物の見方を採る前に私達は私達の間での共通的な物の感じ方、見方をする樣になつたのです。私達の判斷にも同じ一致した所があるのですもの、どうして私達の心に一致した所が無いと云はれませう？　幾度か私達の目は交りました。そして屢々同時に私達は溜息をつきましたつけ。又人に知られない涙も……。おゝジュリイさん、この一致は遠い昔から決まつて居た……神樣が私達が斯うなる樣に運命をつけて置いて下さつたのなら、他の人が全力を盡したつて……ア、許して下さい。私は迷つて居るんです。私の「誓ひ」を「希望」と見違ひをするのです。私の望みの劇しいばかりに、出來やしない事も出來る樣に思つて了ふのです。

私の心が何といふ苦しみに對して待ち構へて居るかといふ事を考へると、私は恐ろしくなります。私は私の苦しみをいゝ加減に待らはふとは思ひません。私は苦しみを嫌ひます、ほんと出來たなら。私が今迄申上げた事によつてどうか私の考へが清いものかどうかを判斷して下さい。出來るなら私を育て更に私を殺す毒の源を渇らして了つて下さい。私はその毒から免かれて元通りになるか、でなければ死ぬか、どつちかを望むのです、そして私は貴女に戀人が貴女の情けを求めると同じ樣に私は貴女が情けの代りに嚴しくしかて頂き度いと要求するのです。

ほんとに、私は私の方でも自分の理性を取返すか、さうでなければ私の心の中に生じたらしい亂れを私の魂の底に集めるか、どつちかの爲に全努力を盡さうと約束し誓ひます。しかしどうか私を殺して了ふ樣な優しいお眼を私には掛て下さいますな。貴女のお顏やお姿、貴女のお腕、貴女のお手、貴女のブロンド色の髮を、貴女の身のこなしをどうか私の眼に觸れぬ樣にして下さい。それでも私の眼は不注意にも物欲し氣にしませうから、その時は私の眼に痛い目をあはせてやつて下さい。そしてどうか、あのやさしいお聲—誰だつて感動せずに聞く事の出來ないお聲を控へて下さい。噫貴女は今の儘ではいけない、今の貴女と異ふ人になつて下さい、貴女以外の人となつて私の心を惹いて下さい。今の貴女はとても噫……。

皆申上げませうか？　夕餉後の徒然れの遊び事をする時にも、貴女は皆の前で私が見て居て辛い程馴々しくなさいます。貴女は私に對しても、他の人に對しても少しも變らなく、同じ樣にお振舞になる。昨日だつて、神樣お許し下さいまし、もう少しの所で貴女は私に接吻おさせになる所だつた。貴女は何にも遖ふ樣な事はなさらないのだ。しかし私は幸にも無理に接吻を盜まうとは思つて居りませんでした。私は考へが目茶苦茶になると共に、私の苦しみが劇しくなるのを覺えたのです。噫若し私があの場合、心行く儘にあの接吻を味つたら、その接吻は私の最後の吐息でしたらう。そして私はあらゆる男の內、最も幸なものとして死にましたらうに。

どうぞ、こんな危い結果のある遊び事を離れ度い。あゝそこに連らなる男の中誰だつてこんな危險を持たぬ人はないのだ、一番若い者までも。私は遊びつゝ貴女のお手に出會ふ毎に私は恐ろしくなる。その

時、私はどんな事が起るかわかりません。貴女のお手が私の手の上に乗せられると、私は慄えて了ふのです。熱病になります、氣狂ひになります。私は見えなくなる、何も感じなくなります。こんな氣の時に私は何が云へませう、何が出來ませう、何處へ身を置きませう、「どうした」と問はれて、何と答へませうか？

學課をお教へして居る時にも前と違つた困つた事があるのです。貴女がほんと一寸の間でも獨で、お母樣や貴女のお從姉樣が居られない時には、貴女はすぐに態度をお變へになる。貴女は眞面目に冷淡につめたくなつてお了ひになつて、貴女のお氣を惡くしまいかと云ふ、恐れの心や心配のために、私は才智も判斷もなくなつて了ふのです。だから私は慄へつゝ、僅かに課業に就いてお話しをする、そして貴女の賢いためにうまくとは行かぬけれど、どうやらかうやらやつて行けるのです。そしてこの貴女の不平等は私達兩人のために良くない事なのです。卽ち私は悲しみますし、貴女が勉強なさる毎に、私はどうしてあんなしつかりした貴女の機嫌がこの樣に變つて了ふのかと、その理由を考へ込むで了ひます。私は貴女に改めてお質ねします、どうして貴女は皆の前ではあんなに愉快にして居らつしやつて、私と向き合ひになると、どうしてあんなに重々しくおなりになるのです？　私はその反對である筈だと思ひます。人の數が多くなるに從つてその態度を重々しくしなくてはなりやしないでせうか？　それなのに貴女は、私と二人きりの時は禮儀正しくなさつて、皆の前では馴々しくなさるのです、私はどうしていゝかわからない。どうか皆一樣にして下さい、さうすればもつと私は苦しまずに濟むでせうに。

貴女は生れ付きの良い人達が一樣に持つ、自然的な憐憫の情をお持ちの筈だから、今迄多少なりとも敬意を拂つて下さつた一人の不幸な者の苦しみに御同情なさつて下さい。一寸貴女が貴女のなさる事に態度をお變へ下さつたら、私は前の樣に苦しまなくともいゝのです。そして私はもつと平和に沈默を守つて私の不幸を堪へて行けませうから。私の慌みや態度が貴女のお氣に觸らずとも兎に角若し貴女が私を殺さうとなさつても、私はどうして泣言など申しませう、どうかお好きになさつて下さい。私は慌みの無い衝動にかられて貴女に對し罪人となるより、私は貴女の御命令の儘に殺されて了つた方がどの位望ましい事でせう。終りに申しますがどんな風に貴女が私の運命を決めて下さるにしろ、少くとも私は不謹愼な望みを企てたと云つて自責は致しはしません。そして若し此手紙をお讀み下さつたら、私の總ての願ひをかなへて下さつたのです。尤も私はお拒りに會ふことなどは意に介してをりませんが。

書簡第二　ジユリイへ

私は先に差上げた御手紙の中で何といふ、馬鹿な事をしたのでせう！　私の苦しみを減ずるどころか、私は貴女の御氣を惡くして了つて、苦しみを增すばかりなのです。私は何が惡いと云つて貴女のお氣に障る事が一番惡い事だと思つて居るのです。貴女は默つて居らつしやる、貴女は冷淡さうに、何事をも控へ目勝ちになさる。私あまりに不幸だ。貴女は私の願ひの一部分をしか聽き容れて下さらぬのなら、それは

私をなほさら苦しめる許りです。

E poi ed amor di me vi fece accorta,
Fur i biondi capelli allor velati,
E r amoroso sguardo in se raccolto

(斯くして戀は貴女の氣を配らせる。貴女はアロンドの髮を匿して了ひ貴女のやさしい眼なザット一所ばかりに止らさせる。—メタスターセ)

私が氣狂ひの樣になつてお訴へしても、貴女は皆が居る時には罪もなく馴々しくなさる。それだのに私の二人きりの時は、嚴かめしい樣子をなさるのですね、貴女は。そしてこの樣に貴女が峻嚴になさるのは貴女が私に對して好意を見せて下さる時も、又冷かにあしらつて下さる時にも同じ樣に現れます。

しかし、どうして貴女は、この貴女の冷やかさが、どんなに私にはつらいものだか、御判りになりませうや。私は今迄の事を思ひ出すと耐まりません。しかし兎に角このいやな手紙を貴女には讀んで頂き度いと思ひます。決して又しても貴女に對して不敬を働くのを恐れて、ほんとならば私はこの手紙は書かなかつたに違ひないのです、しかし既に前の手紙を差上けて了つた後なのですから、私は私の過失を增さうなんて致すのではございません。前にした過失を償ひ度いと思つて差上けるのでございますから……。貴女のお心を靜める爲に、私が馬鹿げた事をしたと申さねばなりますまいか？　私が貴女に對して抱いて居りました心持が戀といふものでないと申さねばなりますまいか？　私はこの心にもない事を申上けるのでせうか？　貴女を想つて居る心が卑しい讒言(うそ)を云ふものでせうか？　あゝ若しさうなら私は何といふ不幸な男なんでせう！　出過ぎた事とは申せ私は虛言つきでも、卑怯者でもないのでムいます。しかし私の心が犯した過失を私のペンは否定する譯にはゆきません。

もう今でも、私は貴女が怒つて居らつしやるのが目に見える樣です。しかし私は最後の結果を待つて居ります。他に何物も望む事は出來ないのですが、貴女が私に與へて下さるお許しを唯一つのみ得られるものとして待つて居ります。何故と申しますに、私を燒き盡して了ふ心の愚ひは罪せられるにしても、決して輕蔑されるものでは無いと思つて居りますから。少くとも私はどう致せば宜しいのか仰言つて下さい。貴女のお心を仰言つて下さい。どんな事をお命じになつても、私はお從ひするだけなんでございますから。默つて居つしやるのですか？　私はそれには堪へられません。私を貴女の居らつしやる所から放逐なさる？　一度さうなつたら、私は再びお目にかゝつてお氣を惡くする樣な馬鹿は致しません。死ねと仰言る？　あゝ是も少しも難しい事ではありません。もう貴女を愛しなくなつて了ふより外、私には採る道がないのです。あゝこの事—貴女を愛しない事には、出來る事だつたら、從ひますが……。

一日に幾度私は貴女の前にひれ伏して、泣き度くなるでせう、そしてどんなに「死」か「お許し」かを得たく思ふでせう！　けれどもいつも恐ろしい怖れが私の勇氣を凍らせて了ひます。私の膝は慄へて、貴女の前では、膝を折る事も出來ないのです。申上たいと思つた言葉も唇で消えて了ひます。私の心は貴女

を怒らせはしまいかと安らかな時は無いのです。

世の中で私程苦しい破目に居る者が御座いませうか？　私の心は罪あるのをよく知りつゝも、倘罪深くしようとして居るのです。罪と後悔とは一緒になつて心を動搖させます。そして私は、自分がどうなつて行くかをも知らないで、堪へ難い疑ひの中に在りつゝ、寛大な御心にすがつて許して頂けるといふ望みと、罰を受けなければならぬといふ恐れとの間を彷徨して居るのでございます。

けれ共、いゝえ、私は何も希望は致しますまい。私には何を望む權利も無いのです。唯貴女にして頂き度いお恵みは、私を早く罰して下さる事なのです。それは正しい罰なのですから……。自分から進んで罰して下さい等とお願ひしなくてはならぬ事になつた私はどうしてこんなに不幸なのでせう！　罰して下さい、貴女は私を罰しなくてはいけない。だけれ共、若し貴女が情のある方なら、どうかあの様な冷い様子や不満足さうな風をなさつて下さいますな、私は實際その爲に絶望して了ふのですから。罪人を死刑に處する時には、罪人は決して怒りの色を見せられるものではないのですから。

書簡第三　ジユリイへ

お怒りになつて下さるな。執念深く手紙を差上るのもこれが最後なんでございますから。私が貴女を戀する様になりました時には、こんな不幸が起るだらうなどとは少しでも考へて居りませんでした。私は最初到底望みのない戀をして居る不幸を感じました、そして時が經てば理性で抑へて了へるとのみ思つて居りました。次には私は貴女のお氣に障つてはと非常に苦しみました。しかし今は貴女までが苦しんで居らつしやるのを見て、私は一番ひどい不幸を感じます。おゝジユリイさん。私が度々お訴へしたのが貴女の安らかなお心を亂したのです。私は悲しい。貴女は、誰が何と云つても默つて居らつしやる。けれ共私の注意深くしてゐる心は貴女の人知れずに煩悶して居らつしやるのがようくわかります。お眼は爛々として來ました。夢見る様に、ヂット地面をお見つめなさる様になりました。私を見て居らつしても慌てたやうに目をお外らしなさる。華かなお顔の色もなくなりました。前と變つた青味が貴女の頰を包みました。もう少しも陽氣で居らつしやらない。ひどい悲みに堪えられぬ御様子です。唯前と變らぬやさしさがある爲にまだ少し御元氣がある様ですが。私の苦惱に對してお感じになつたにせよ、御輕蔑になるにせよ、御同情になさるにせよ、とに角貴女に私の苦しみが祟つた様に思ひます。私は私の苦しみが貴女をお苦しめしたと、大變に恐れて居ります、そして多少希望があつて私を慰めてくれるにしてもその恐れの爲に、それ以上に私は苦しめられるのです。何故と云ふに、私の考へが間違つて居るからであり又貴女の幸福は私にとつては私の幸福よりも尊いものなのですから。

然し、私自身の來し方を考へてみますと、何と私は私自身の心を誤つて判斷して居りましたのでせう！　又私が一時的な狂熱だと思つて居た事が、私の運命であつたといふ事を、何と遲くまで氣が付かなかつた

でせう！　貴女がお悲しみになるので、私は私の不幸を猶更、呻つ様になつて了つたのです。貴女のお眼の輝きも、貴女の御顔色も、貴女のハキハキした才氣の魅力も、前の様な愉快さうにして居らした御様子も、前の事は前の事で今悲しさうにして居らつしやるのに何の効果も及ぼさないのです。ジュリイさん。ほんとに貴女が此の八日といふものを、私の心がどんな悶えに燒かれて居たか御わかりになつたら、きつと貴女は貴女が私の心にお作りになつた苦しみを後悔なさるに違ひないのです。私は其れ程苦しんでゐます。しかし私の苦しみは癒やさうと思つても駄目なのです。私は目茶苦茶になりました、私はこの私を亡ほして了ふ焰は私が死ななければ消えないと感じます。

どうでもいゝのです。幸福になれぬ者は少くとも幸福になるにふさわしい者には成れます。私は貴女が確かな返事をもして下さらぬ一人の男を美事貴女に尊敬おさせ申す法を知つてゐます。私は若い。私は今はふさわしくない尊敬にでも他日にはふさわしくなれると思ひます。しかし私は安らかな心は失つたけれ共、貴女には元通り、安心させてあげなくてはなりません。それが眞實なのですのに、私は、貴女の靜かなゐまで我知らずに失くして了つてゐるのです。私だけが罪人なのですか？　私だけが罰をうけるのは正しい事です。私はお別れします。あゝ貴女はあまり美しいのだ。御丈夫でお暮し下さい。どうか前通り愉快におなり下さい。私は明日からもうお目にかゝりますまい。然し私が燃える思ひをして抱いて居る貴女に對する熱愛、清い愛は私の一生消えないといふ事をお信じ下さい。又私の心はこの様な尊い物で一杯なのですから決して卑しい事はしませんといふ事をも御信じ下さい。私の心は貴女と、聖徳とにのみこれからはその尊崇を献ずる事、「ジュリイ」さんのあがめられてゐる祭壇では、私の胸にある火以外の火は燃えぬといふ事もお忘れ下さいますな。

ジュリイからの最初の紙片。

貴君がお去りになる必要があるなんていふお考へはお棄てになつて頂戴。徳のある心は懼れ己に勝つか默つて了ふかで御座います、そして恐らくは懼れませう。けれど、貴君は……貴君は留まつて居る事が出來るんですわ。

返事。

私は默つて長い事居りましたが、貴女は前の通り冷やかにして居らつしやる。私は到頭貴女に云はなくてはなりません。若し徳の爲に己に打ち勝つて居る時には、その人の愛する者の輕蔑を堪えられるものではありません。私は去らなければやなりません。

ジュリイからの第二番目の紙片。

いゝえ。貴君の様な方は、貴君がこの様にお感じになり、貴君が私にこんな事を仰言つた後で、出發なさるものではありません。もつと色々な事をなさる筈ですわ。

返事。

私は絶望してゐる心に、無理に平靜な情を抱いて居る以外、何の芝居もして居ない積りです。明日になれば貴女は御滿足になれます。何と仰言つたつて私は去るだけの事です。

ジユリイからの第三番目の紙片。

何を貴君はなさらうとなさるの？　若し妾の生きて居るのが貴君にそんなに尊いのでしたら、貴君の生を目茶苦茶にすることを貴君はお恐れになつて頂戴！　私は何もかもわからないのです、頭が一杯になつて、貴君にお話しする事も、お書きする事も、明日にならなけりや出來ません。どうか出發なさらずにお待ち下さい。

書簡第四　ジユリイから

（譯者註―前信までは他人行儀に「貴君」（vous）と言ひしを、本信より、親しく「汝」を用ひてある。）

到頭拙劣に匿して置いた、この悲しい秘密を申上げねばなりません。これ迄幾度、命にかけても滅多には申すまいと心に盟ひましたらう！　それでも今貴君は御自分の命をどうのかうのと仰言るのですもの、私は無理にも申さねばなりません。私の名譽なんてもう無いんですわ！　あゝ私はあんまり約束に捕はれ過ぎました。名譽を棄てて迄生き殘る事以上に苦しい「死」といふものが御座いませうか？

何を申上げたら宜しいでせうか？　これまであんなに苦しんで沈默して居りましたのをどうやつて其沈默を破つたらようございませう？　いゝえ、妾はもう皆貴君に申上げなかつたでございませうか？　貴君つもてう充分お聽きになつて御居でではないでございませうか？　妾の申上げようとする事は皆貴君はお わかりの筈です。貴君は何もかも知つて居らつしやるんですわ。妾としたことが、段々と卑怯な誘惑者にひきずられて、今はもう一歩といふ所の恐ろしい絕壁の前に居るので御座いますわよ。うまい方！　貴君を大膽にするのは貴君の戀ではなくて、妾の戀ですわよ。貴君は妾の心が惑つて居るのをお覺りになつて居らつしやるのです、そして貴君はそれにつけ込んで妾を目茶苦茶になさらうといふ御考へなのです。貴君が妾を輕蔑なさるのはいゝとして、妾の一番苦しい事は貴君を輕蔑しなくてはならないといふ事なのです。けれど貴君！　貴君は不幸な方ですのねえ！　妾は貴君を尊敬して居りますのに、貴君は妾の名譽をお失はせになる……。ですけれど、若し貴君がこんな事をなさつて平和を誇らし氣に得ようとなさるのなら、それは決して出來る事ではありませんわ。

斯う申しますと貴君は益々御後悔なさるでせう。妾は今迄心の中で不德な考へなんて微塵も御座居ませんでした。貞節にして居ります事と心を直く持つて居ります事とは妾にとつて一番望ましい事で御座いました。妾はこの二つの事を單純な、然し活氣のある生活をして、養はうと思つて居りました。しかし不運と申しませう、妾が貴君にお目にかゝつた日から、妾は自分の感情、理性を亂し、腐敗して了ふ毒素を感じたので御座います。そして貴君のお眼、お考へ、お言葉、あのひどいお手紙のためにその素は日一日と妾の命に迫る樣になつたので御座います。

妾はどうかして、この忌まはしい情熱がそれ以上強くならぬ様にと努力しました。又妾は抵抗出來ない儘に、成る可く觸れられぬ様にして居りました。それなのに貴君はしつこくなさつて妾が氣を付けようと思つて居たのも無駄になつて了ひました。幾度妾は兩親の足元にひれ伏したく思ひましたらう！　お父様は私の罪の心を割つて、お父様やお母様にお見せしたかつたでせう！　お父様もお母様も什麼事が起つて居るか少しも御存知無いのですわ。妾が絶望的になつて、弱り果てて居るのを、普通の病氣の様に思つて居らつしやるのですもの。お母様は弱い方で、自身で何もテキパキとはなされないのです。然し妾はお父様が非常に嚴格でどこまでも我意を通す方なのを知つて居りますの。又妾は妾自身私の家、それから貴君自身迄をも失ひ、名譽を汚すばかりなんですわ。妾の友達（譯者註―雀姉ダレールのことを指す）も今は居りませんし、兄弟も最早一人も持つて居りませんの。妾を攻める敵に對して世の中で一人の保護者をも持つて居りません。妾は唯天を恨みます。神様は弱い者が祈つても聽いては下さらないのですわ。妾以外の物は皆妾を唯ひつくすこの力の味方をするんです。總てが妾を見棄てて居るんですわ、いゝえ、總てが妾を貴君に委ねて了ふのですわ。自然の皆が貴君と共謀になつて居るんですわ。妾がいくら拗いても駄目なんです。けれども妾は妾なんぞかまいません。妾は貴君を愛します。妾の心は貴君の御力には張り合ふなんて出來るものでは無いのですから、全く敗けました。何物をも匿す事の出來ぬ此の心が、どうして又、そのまだ知られぬ弱味があるにしてもそれを匿し了せませう！　あゝ、最初の一歩、これがいけなかつたのですわ。一歩踏み出したのですもの、妾はどこで止る事が出來ませう？　出來るものですか！　妾は一足歩きました。そして妾は深い淵へ引き込まれるのを感じます。貴君は勝手氣儘に妾を不幸になさることが出來るのですわ。

妾はこんなに苦しんで居りますの。妾は、こんな苦しみに妾を陷れた方に賴る外ないのです。そして妾滅びるのを防ぐのには、「貴君」は、「貴君」に對して妾を保護して下さる唯一人の方な筈です。妾はこの望の切れ果てた妾のお願をわざと今迄延ばして申上けなかつたのです。妾は暫くの間妾の恥を伴り了せる事が出來て居りました。そして段々と負けて行つて自分で自分を欺く様になつて了つたので御座います。何かやつてみましても、それは單に妾の自尊心を助成するだけで、妾の貞節を救ふ事なんか出來ませんでした。噫もういゝんですわ。どうしてこんな間違ひが起つたのか妾はわかります、よく感ぜられます。妾はこんな不面目を償なふなんて努力は致しませんでした、けれどそれを避けようと致しました。

けれども貴君だつて若し男の内で一番下等な方でなければ、又貴君の御心で若干かなりとも德の輝きがありましたなら、又妾が嘗て貴君に浸み渡つてると感じた所の名譽を重んずる感念が少しでもお在りならば、妾が熱狂の餘りの生命懸の告白を、貴君は御辱めになる様な卑しい方とは迚も思はれませんわ。否さうとは妾は夢にもその様な事は思ひません。妾は貴君をどんな方だかよく存じて居ります。貴君は妾の弱さを助けて下さいまし。貴君は妾の保護者となつて、妾を妾自身の心から保護をして下さいませな。貴君のお德こそ妾の生な心の最後の避難所ですわ。妾の名譽は貴君の名譽にお賴りします。貴君はこの二つ

の名譽の一方を棄てて片方のみをお保ちになる事は出來ません。あゝ！　心の寛い方！　どうかこの二つの名譽を保つて下さいませ。そして少くとも貴君が貴君御自身をお愛しになるなら妾をお憐み下さいましわ。紙が涙でぬれて了ひましたわ。妾は恐る〳〵妾のお願ひを述べました。しかし妾こそ他への願ひを受く可きであつたのを自分では知らぬのだとか、或は妾を從順なものにする代りに妾は輕視を受ける樣な事をのみやつてゐたのだ等と決してお思ひ下さいますな。貴君！　此浮華な權勢を取り去つて下さい。そして妾に正直を殘して置いて下さいませ。妾の名譽を汚してまでも貴君に從つて頂くよりも、妾は寧ろ貴君の奴隷になつて罪無く暮し度うございます。若し貴君が妾の云ふ事を聽いて下さるなら、貴君は、貴君のお蔭で更生した一人の女の愛と尊敬とを是非うけて頂き度いと思ひます。清い二つの心の結合には何といふ魅力があるのでございませうねえ！　貴君の欲望が斷たれ、消えて了へば、それは貴君の幸福の源になりますわ。そして後に貴君のお享けになる快樂は神にもふさはしい物で御座居ます。

妾は信じますわ、妾のあらゆる愛著に慣する樣に見えた或心は、妾がそれから期待した寬大を裏切らないだらうと。若しその心が卑怯で、妾の惑ひや、それが無理に云はせた告白等を侮辱するのでありましたら妾の輕視と怒りとは妾が一度失つた理性を戻してくれるでせう。そして又妾だつて、戀人のことで赤い顏をする程憶病ではありませんわ。貴君は德のある人になるか、輕視されるか、どつちかなんですが、妾は敬はれるか、日を醒すかです。死に度い希望を除けば、是こそは唯一つ私に殘つて居る希望なので御座います。

書簡第五　ジユリイへ

天の諸力よ、私は苦しみの魂を持つてをりました。どうぞ私に幸福の魂をお與へ下さい。魂の生命である愛よ、頽れんとして居る私の魂を助けに來てくれ！　愛する者の云ひ難い德の魅力、その聲の强い力、幸ひ、愉快、歡び、お前達の姿は私の胸に滲み込んで居る！　誰がお前達の姿を見て平氣で居られやうぞ！　私の心をひたして來る歡喜の流れは如何に豐かなことよ！　私はどうやつて苦勞性な戀女の懼れを償はうか？　ジユリイさん……いけません私のジユリイさん拜むなんてマア！　私のジユリイさん泣いてゐるつて！　此の宇宙が尊敬を奉つて居るその方が、自分を熱愛する男に、自分を侮辱しないように、そして其男自身をも汚さぬ樣にと願つて居らつしやる！　若し私が貴女に對して怒るにしても、それは貴女が恐れの爲に私達を卑しいものになさるからです。けれど考へて下さい、清い天の麗質に生れついた方よ！　貴女の勢力の性質はどんなものだか考へて下さい。あゝ私が貴女の魅力を愛するのは、貴女の肉體的の美しさは勿論ですけれ共、殊に汚れのない、活氣のある貴女の御心を感じて、それに愛を覺えたのではないでせうが？　貴女の清いお心の姿は皆聖い表現を持つて居るのです。貴女は私が尾け纏ふので、それにお負

けになるのを恐れて居らつしやる。けれどどんなにしつこく尾け纏つたつて、自分が感銘した自分の情を恭敬と正直で包んで居るものには少しも恐れる事がありませうか？　貴女に對して傍若無人に振舞ふ様な下等男が世の中にをりませうか？

許して下さい、許して下さい。私が愛される——此女に愛される意外な幸福を味ふてゐることを。世界の玉座よ、私はどんなにお前を下に見てゐるであらう！　私は千度も萬度も貴女のこのなつかしい御手紙を讀み返してをりますよ。この手紙には貴女の愛、貴女の感情が紹の文字で書かれて居ります。そこでいくら心が興奮で亂れて現れてをりましても、私は明かに、直き貴女のお心の中には、烈しい情と共に、聖い德の輝きを見出し得てどの様に歡んだ事でせう！　この感動すべきお手紙を讀んで貴女の今のお心につけ込んで、自分自身を輕蔑し切つて居る事を明かに示す男があつたら、その男はどの様な、惡魔でせう！

いゝえ、貴女！　どうか私を信じて下さい、貴女を欺かうなんて夢にも思つて居ない私を信じて下さい。例令私の理性が肯んでも、例令私の意識が素れを增すにしても、貴女はそれでも私にとつては、世に一番いゝといゝものであると共に、今迄人が嘗てうけた事の無い程貴女は聖い仰めをうけて私に殘るのです。私の胸の炎とその對象とは何日までたつてもその清さは失ひますまい。私は貴女のお心を汚すのは卑しい不倫な行ひよりも恐ろしいとすら思ひます。ですから貴女は御心を安らけくお持ち下さい、私は決して貴女の御期待に背く様な事は致しませんから。貴女は監督の任に當つて居らつしやる、お父様とゐらつしやつても私とゐらつしやつても、大丈夫なのですから。オー私は貴女の前で一時なりとも安かな氣持で居たいジュリィさんに愛して頂く者は賤しい心など持つものですか！　私は德を愛する限りは貴女を愛します。けれど、私が最初の卑怯に對して、私は貴女に愛して頂くことを望みませぬ。

ほんとに、私の事には御心配下さいますな、清いやさしい愛——私達を結ぶ愛の名によつて私は誓ひます。貴女に私は私の愼みと私の敬ひとをこの愛で誓ふのですから。私の心が變る事があれば、此愛も變つて了ふのですから。けれ共どうして貴女は私が望むより遙かに多く恐れて居らつしやるのでせうか？　今私の心が辛うじてでも享けて居る幸福以外に、私は何を求めませうか？　私達は實際若いのです、私達は生まれて初めて愛し合つたのです。「戀」に關しては私達は何にも經驗が無いのです。けれ共私達を導く名譽は欺く道案内者でありませうか？　其上經驗が無いと云つても、世の人がやるやうに醜い行ひをして迄始めて獲るそんな怪はしい經驗をする必要が何處にありませう？　私は色々な事を云つて少し間違ひをしたかもしれません、しかし私の心底には正しい感情があると思つてゐます。私は貴女が絕望のあまり仰言つた様な賤しい誘惑者ではないんです。けれど生な何も知らない男なのです、又感じて居る事をやすくと云つて了ふ様な敏感な男なのです、考へて赤くなる様な事は心にもない積りです。まとめて云はせて下さい、私は貴女を愛せずには居られないけれ共、罪になる事はそれ以上の程度で私は嫌はざるを得ないのです。私は知りません、私は貴女の愛が德を忘れても成立するかとか、正しき心を持たぬ人が、貴女の美し

さに感ずるか等といふ事は私は到底考へられません。——わかつてゐる事ぢやありませんか！　私は貴女の愛に涵たれば涵たる程私の氣持が高尚になつて行く樣に思はれます。今迄しなかつた善も、貴女にふさわしくなる爲に、どうしてしなくて良いでせうか？　しなくてはなりません。あゝ貴女の私にお與へになつた愛をお信じ下さい、私は愛の淨化が出來るのですから。貴女が私にお授けになつた聖い或物を敬つて、私は貴女を熱愛します。オゝ何といふ心持でせう！　眞の幸福、光榮、人が愛する者の光榮、尊い愛の勝利それに貴女はこれ等の總てに優つて尊い、いとしい方なのです。

書簡第六　ジユリイからクレールへ

クレールさん、貴女は一生死んだシアイヨーさんの事を思つて泣いておいでなの？　死んだ人の事許り思つて生きて居る人の事を忘れてはいけないわ。そりや悲しいでせう、妾だつて同情しますよ。然し長々といつ迄も泣いて居てはいけませんね。貴女のお母樣がお死にになつてから、シアイヨーさんは大切に貴女を育てて下さいました。あの方は貴女を世話して下さる方といふより寧ろ貴女のお友達でしたのねえ。あの方は貴女をやさしく愛して下さいましたそして妾が貴女を愛するので妾迄可愛がつて下さいましたのねえ。ほんとにシアイヨーさんは妾達に賢い事と名譽を重んずる事とをいつて教へて下さつたのです。妾は皆知つて居ます、そして皆有難く思つてゐます。けれ共、あの人は必要も無いのに、あまり妾達に注意して下さつて、隨分立ち入つた話もして下さいましたわね。あの方は斷えず、女に媚びて來る人達に氣を付ける事や、若い者のはやり氣とか、又は誰か男の方が云ひ寄つた時には、どういふ態度で對するか等といふ事迄を教へて下さいました。又男達の策略めいたものにかゝらぬ樣にと、シアイヨーさんは色々な惑ひに對して氣を付ける事は勿論、少くとも娘として知つて居なくてはならぬ事は、皆妾達に教へて下さいましたわ。あの方がお亡くなりになつても、妾達は損はしませぬよ。つまり、妾達の年頃ではあの方が誡めて下さつた事が益々身にこたへて來るのですもの。それに神樣があの方がこれ以上妾達の所に居てはいけない時に、天へお呼びになつたに違ひありませんわ。先に妾の兄が亡つた時に、貴女が妾に仰言つた事を覺てゐるでせう。勿論シアイヨーさんはいゝ方だけれど、あの方ばかりが貴女の大事な方ではないでせう、あの方の事ばかりお慨きになるのはいゝ事ではありませんわ。

歸つていらつしやいな。死んだ方にはいつ迄も貴女が必要ではありませんわ。貴女はくよくよとして居らつしやつて、外の悲しみが生ずるのにお氣がお付きではないの？　貴女は今妾の心も知らないで、さうやつて居らつしやつて、貴女さへ居て下さつたら、起らなかつたとて思はれるある危險な事件に、貴女の友達の私を兒棄てお了ひなるの？　眞個貴女が行かれてから色々な事が起りましたわ。妾の不注意から出來たある危い事がどんな事かお聞きになつたらきつと貴女は、慄えてお了ひになるわ。妾はどうかしてこの事から逃れ出たいのですけれど、今は云はゞ、或妾以外の人の思ひ通りになつて居るんですから。早くいら

うして頂戴！　貴女がシァイョーさんにしておあげになつた事は、もう充分ですわ。さうさう、妾が貴女にさうなさる樣にお勸めしたのですのねえ。シァイョーさんのお家庭へ色々してあげなくてはいけませんわ。そしてそれには、田舍に居らつしやるより、妾の所へいらつして一緒にしたら猶ほ良いと思ひますの。さうなされば貴女は友の情を棄てないで、同時に貴女の義務をお充しになる事が出來ますわ。

妾の父が出發しましてから、妾達は前通りの生活をして居ります。母は妾の傍に付きつきりですの。けれどそれは、不安心のためでなくて、例の通りの癖なのですわ。母の交際して居る人々の集りのため、時々妾の勉强の時間をさいて顏出しをしなくてはならぬ事があります、それは母も餘り望んでは居ない事ですけれ共、致方が無いんですわ。バビーは此頃隨分怠けてゐますわ。妾は母を勿論素的に信じ切つて、心の寄せ所として居りますけれ共、まだあの事件を打ち明ける決心は出來ないのです。母の信用を喪さずに、妾は最も安全な道を行き度いのですわ。貴女だけなんですの、皆、この事をうまくやり了せになるのは！早くねえクレールさん、早く歸つて來て頂戴よ。妾あんまり學者になり度くないのよ。先生は唯いゝ方ではありません、德のある方ですよ。けれどこわい氣がするのよ。妾みたいな者にはあの先生は良過ぎます。あの方の年恰好、妾達の年、德のある人、そしてその人が親切な人である時には、敎はる娘は、獨りより二人あつた方が良いものですから。

書簡第七　返事

貴女のお話を聞いて、妾顫るへてしまひました。勿論妾は貴女の想つて居らつしやる程にその事件が急なものとは感じないのですけれ共。貴女が恐がつてゐらつしやるので、妾の今の悲しみも其爲少くなりましたわ。けれ共これから先の事が何だかこわいのねえ！　そして貴女がよく御自分を制して下さらなけりや、妾には不幸が重なる許りですわ。噫！　シァイョーさんは、前にこんな事を云つて居ましたつけ、貴女の心から出る最初の嘆息の聲は貴女の一生の運命となるでせうつて。あゝ、ジュリィさん、若いのに早貴女は自分の運命が完成するのを御覽なさらなけりやならないのだわ！　彼の女のるないてことがどんなに之から妾達にとつて不足でせう、貴女のお信じなさる「失くしても損はない」此働きての女のないことが！　最初妾達恐らくもつと慥りした人の手に育てられなくてはならなかつたのでせう、けれどもあの人の手を離れて、他の人に世話して貰ふには、餘りに敎へ過ぎられてゐますし、といつて妾達自身を處置するにはまだ不充分なのですわ。あのシァイョーさんだけが妾達に降りかゝる危險から妾達を保護出來たのですわ。あの方は妾達に色々澤山な事を敎へて下さいました。そして妾達は——妾の考へではよ——妾達の年頃にしては、割によく考へましたねえ。小兒の時から妾達を結び付けて育てた强いけれ共やさしい友情は早くから、いはゞ、色々な熱情に妾達を目覺めさせましたわ。そして妾達はようくその現れやその結

果を知つて居ります、けれど妾達に無いものはそれを操斥する方法だけなんですわ。どうぞ貴女の若い哲學者がよくこの仕方を知つて下さるように！

妾達と妾は云ひますときには貴女が妾の話の聽者なのよ。妾は第一貴女のことを言ひますわよ。シアィョーさんはよく妾に申しましたつけ、妾は忽々つかしさが理性の代りをするんですつて。又何時までも妾には戀を知るとが無からうし、又無分別をするには妾はあんまり間が抜けて居たのですつて。けれど、貴女は用心なさいな。シアィョーさんが貴女に就いて理性をよくお見抜になつただけ、それだけ又あの方は貴女の感情の方を多く氣に懸けて居られたのですよ。けれどしつかりして頂戴な。智と名譽とで出來る事なら、貴女の魂は何でもなさると妾は信じて居ますわ。妾の心は妾の心で友情の出來る限りは何でもしますわ。若しか妾達年の割にその事を知り過ぎてゐたら、此お稽古も妾達の品性を少しも傷けなかつたでせうにねえ。しかし、ジュリイさん、世の中には妾達より單純でその癖心の正くない娘が澤山居ますのよ。妾達は心の正しい者ですわ、何故と云ふに妾達はさうならうと心掛て居るんですもの。これは人が何と議論しませうとも、正直になる一番確かな道ですもの。

けれ共貴女の仰言る所を見れば妾がお側にゐないのは一刻も安心がなりません。何故と申しますに、若し貴女が危險だと心配なさるのは決して夢ではないのですもの。豫め大事にならぬ内にして置く事は六ケ敷くはありません。つまり一寸お母樣に仰言れば良いのですもの。けれども貴女は根こそげ無くなつてしまふ手段を取り度くないのね、妾判つてますわよ。貴女は力に屈してしまつて、名譽の戰ひをする氣がおあんなさらないのだわ。あゝ可哀さうな從妹！　若しやほんの微かな光明でもありさへすれば……デタンジュ男がその一人子の娘を財產の無い町人にお嫁りになる！　それを貴女はお望みなんですか？　ぢや何をお望みなのよ？　どうなさりたいの？　哀れな、哀れな從妹！　けれど妾の方を心配なさつてはいけませんよ、妾は絕對に秘密を守りますから。多くの人は秘密をあばくことを寧ろ正直と思ひませう。それにも理屈はありませう。けれど妾は妾は勿論六ケしい事は知りませんけれども、妾は友情、信仰、信賴を裏切る樣な正直は欲しくもないんです。妾は思ひますわ、どんな關係でも、どんな年の人でも、その守る可き事、義務、道德とがあると。又他の人達には謹愼となるべきものが、妾には悖戻となること、妾達は賢くはせられないで、是等のもの總てを混亂するお陰で、惡くなされることを思ひます。貴女の戀が薄い弱いものなら妾達はそれを征服しませう、若し激しいものならば、過激な仕方で處置するのはそれを悲劇に了らせる事なのですから、愼しまなくてはなりませんよ、友情は友情のなす可き事しか出來ません。けれどその代りに貴女は妾の守護にある以上、眞正な路を步かなくてはなりませんよ。貴女は十八歲の老女がどの樣な働きをするか見て居らつしやいましよ。

御存じのとほり妾は自分の樂みに、貴女から離れて居るのではないのですわ。田舍の春は貴女のお思ひになる樣に面白いものではありませんわ。田舍の冬は寒いし、夏は暑いんですものねえ。夏外へ出ても陰

一つ無いんですし、冬は家に閉ぢこもつて居なくちやならないんですの。父は又父で、町よりも新聞の来方が遅れると云つて居ますし、ですから、あらゆる事情で町へ歸つた方がいゝのです。四五日後にはお會ひ出來ますわ。けれど、妾の心配になる事はこの四五日の間あの哲學者のものになる數時間がどうなるか妾に分らない事なのよ。ジュリイさん、あの哲學者よ！　お判りになつて？。その數時間はあのがのためにしか鳴らないとしたら奈何？

赤くなつちやいけない事よ、目をこゝで伏せちやいやよ。それと云つて、澄し切るのも貴女には駄目ねすますのは貴女の顔には似合ないのよ。妾は笑はずには泣けないし、又それでも矢張り、そのこと妾は心を痛めて居にるのは貴女だつてお判りね。妾はほんとに貴女から遠くに居るのを悔んで居るわ。と云つてやつぱし、シャイヨーさんの事も殘念に思つて居るんです。貴女が、妾にシァイヨーさんの家族の面倒を見るのを止さし度くて堪らないことは、妾ちやんと知つてますわ。けれども妾の生きてるうちは、それを棄てませんよ。若し或る機會に貴女が善いことをなさらなければ、貴女はもう本當の貴君でなくなるわ。

貴女の仰言る樣にあのシァイヨーさんは、少し饒舌で、打ち開けた話をするにあまり遠慮なさらなかつたわねえ、そして若い娘に對してあまり無躾けだつたわ。そしてあの方は御自分の昔の事をよく話して下さつたわね。ですからあの方が種々ないやな所の外に持つて居らしつたいゝ所が澤山あるけれ共、妾が惜むのはあの女の才ではないの、妾がをしむのはあの方の善い心、あの方の愛なのよ。そのために妾は母としての愛着、姉妹としての信賴をあの方に抱いたのですに。あの方は妾の家庭の代りをして下さつたでせう。妾は自分の母の事は僅しか知らないのです。父は妾をお弟さんをお失しになつたけれど妾は殆どいつだつて兄弟なんか會つたことが無いんですもの。妾はもう見棄てられた孤兒みたやうだわ。お前だけが妾に殘つてゐるのだわ、妾のいゝ子ちやん！　でも妾は貴女のお母樣でない？　仰言るとほり貴女は妾に殘された唯一つのものなのよ。妾は泣きました！　その時は氣が狂つたのだわ！　何を泣いたかしらん！（二白、もしもの事のあるのを恐れてこの手紙が安全にお手元にとゞく樣に此手紙は我々の先生宛にしますよ。）

書簡第八（一）　ジュリイへ

註　（一）書簡第六より直ちに第八に來るのは確に拔けて居る所があるので活字のあやまりではない。この樣な事は以後本書中に散在するであらう。隨分の手紙が失くなつたり省かれたりして居る、又或物は省略されてゐる。けれ共載せてある手紙で意味のとれぬ事は全然ない。本質的の所は缺ける事は毫も無いのである。（著者）

ジュリイさん、戀は何と不思議な移り氣のものでせうか！　私の心はその望んで居る事以上を得ながら、未だ滿足し切れないのです。貴女は私を愛すると仰言つたけれ共それでも私は嘆息をするんです！　此の正しくない心はまだ望むで居るのですね、もう何も望む事が無い時にでも……。私は私の心の氣まぐれで

苦しんで居ます、その爲に私は幸福の裡にあつて、尚不安なのです。けれど私に課された掟を忘れたとか又それを守る意志が無くなつたとか、お思ひになつてはいけませんよ。けれどもこの掟が私だけに損なものであるといふ事に氣が付き、あんなにか弱いやうに仰言つた貴女が今はこんなにお強く、又貴女が注意深く、私自身に對する爭闘を見て居らつしやる程、私は此戰ひを闘ふことが少い事などに氣がつきますと秘かに怨みの心が私に起るのです。二ケ月前から驚く樣に貴女はお變りになりましたねえ。辯々して居らつしやる事も、煩はしい御樣子も今は少しもありません。前通り貴女は美しく、優しく快活におなりです。貴女の魅力は又前通りにおなりです。咲き初めた薔薇の花だつて貴女程鮮かに快くはありません。貴女は又元氣良く、皆に對し活潑で、私とでも前の樣に戯談を仰言います。けれどこの事が何よりも私の心を痛めます。貴女が浮世の無上の愉快を話すと同じ燥いだ調子で永遠の愛を約束して下さることがです。

移り氣の方！　其處が自ら相闘ふ破目に陷つた烈しい熱情の特徴なんですか？　云つて下さい。若し貴女が少しでも熱情に勝たうとする思召があつたならば、少くとも遠慮が喜悦を抑へようとしないでせうか？　オ貴女は前に今程美くいらつしやらなかつたが、もつと貴女は親切な方だつた！　前には貴女は苦しみ悶へて少し、青白い顔をして居らつしたその感動すべき顔色は、私に對する幸福の尊い證でした。今はそれが無い。私は悲しく思ひます。私が悶えて暫時休暇を頂て居る間に貴女めきめきと前通りの健康におなりになつた、私はこの健康が厭のです。オーさうですとも私は、貴女が今の樣にこやかにして、目を輝かせ、花の樣な艶の良い顔色をしていらつしやつて私をお苦しめになるより、前の樣に貴女が悶えてお勝れにならぬ方が望ましいのです。貴女が私に心を廣く持てと仰言つた時には、今の樣で居らつしやらなかつた事を覺おえですか？　ジュリイさん、ジュリイさんですか？。

其上一番私が氣に食はないことは、私の願ひを聞いて下さつた後に、それを嫌がつて、まだそれが恐ろしい樣に危險をお避けてばかり居らつしやる事です。これが私の愼重な態度を尊敬なさることなんでせうか？　そして私の嚴然たる尊敬は貴女の此樣な侮辱を受くるに相當してゐるでせうか？。お父樣が御出發なさつて私達が自由になつたなどとは云へるものですか、貴女は始終誰かといらつしやつて一人でいらつした事はない。貴女のお從姉樣、少しも貴女をお離れにならないのですねえ。知らず知らずに私達はずつと前の樣な生活、互ひに用心し合つて居た時分に還らうとして居るのです、唯前と違ふのは、前には貴女はその樣な生活はお嫌ひでしたが、今はお氣に入る樣になつたと云ふ事です。

貴女が心をつゝましく純に持つて私を相當に認めて下さらないなら、私が心をこめて、貴女を愛し敬つたつて何に成りませう？　世の中で一番穩かな事をして、永遠に、自ら進んで過度に亘らぬ樣に心を緊めたつて、若しさうしてくれと仰言る方が私に對して有難いとお思ひにならなけりや何の用にたちませうぞ

實際私はくよ〳〵煩悶するのがいやになつたのです。やつて居る事の價値を知らないで、苦しい狀態に居るのはもう堪へられません。貴女が私を輕視なさる内は、貴女が罪ある程お飾りになつても何になりませうぞ。私の唇が近づく事は決して出來ぬ美しさを、唯私の眼だけで、絶へず喰ひ入る樣に見つめる必要がありませうか？　こんな苦しい犧牲を忍んでも自分を尊くする力すらなく、とう〳〵私自身にすつかり希望を斷つてしまはなくてはならぬのでせうか？　貴女が私の誓ひを何等お信じにならないから、私は無益にそれを誓はうとはしません。私の言葉を探つてみて色々と危險豫防めいた事をなさるのは安全かもしれませんが不正な事です。貴女が人の心を安々と裏切る事の出來る方か、さうでなければ私はあまり疑り深いかどつちかですね。私は貴女だつて拒む事の出來ぬ幸運の色々の機會を遁さぬ積りです。私の運命はどうあれ、私は自分の力以上の事を負つて居ると思ひます。ジユリイさん、御自分に氣をつけて下さいね。私は寄托者の信任に取つて餘りに危險な預物を貴女に返却します、そしてその寄托の保護は貴女がそれを恐れる振りをなさつたよりも貴女に心配を掛けはしません。

私は眞面目なのですよ、貴女は御自分を信用なさるか、さうでなければ私を殺して下さい。私は隨分大膽なお約束をしたのですもの。斯塵に永く私がその約束を守れたことを私は感心してをります。私は斯く常に務めなくてはならぬ事を知つて居ます。ですが私には到底さうやつてゆけさうもないのです。この樣な危險な仕事を負へば、倒れるに決まつて居ます。ジユリイさん！　私を信じて下さい！　貴女だけのために生きて居る此の鋭敏な心を信じて下さい。貴女は常に尊ばれませう。けれ共私は理性を失ふ時があります、官能が醉つて來ると冷靜な心が恐怖する樣な罪まで犯しかねなくなります。貴女の希望を裏切らなかつたこの二ケ月を過した事を私は幸に思ひます。けれど貴女はこの苦しみの二世紀の代價を私に拂つて下さらねばなりませんよ。

書簡第九　ジユリイから

仰言る事はわかりました。惡德から來る快樂と德行の光榮とを貴君は同時に併せ選ばうとなさるのですね。それが貴君の道德なのですの？　マア貴君は寬いお心を持つと云つて居らつしても、もうおやめになさつたの？　今迄さうして下さつたのも皆わざとなのでしたか？　妾の健康に就いて妙な好きこのみをなるのねえ。貴君は氣狂ひの樣な戀が、妾の健康を破壞して了ひ、妾が命だけでも救つてくれと、貴君にお賴みするのを待つて居らつしやるのねえ。貴君は妾が氣味が惡くなる迄妾をあがめて下さつて、つまる所は妾がおいやになつたら、全然妾達の愛を取消さうとお思ひではないのかしら？　妾ほんとにさうならばこの樣な苦しい事をしてもつまらないと思ひますわ。

貴君は眞すぐに妾が貴君の內心の苦鬪から貴君を救つてあげた事を、妾に貰めて居らつしやるのですねえ、丁度貴君が妾には何にも禮をいふ義務が無いといふ樣に。そして、重い任務であつた前のお約束を貴

君は遁れ様となさいますのねえ。この事は貴君がお苦しい事や、御不満である事等をお訴へになつた御手紙にも現れて居りますわ。もつとよくお考へになつて、少しも貴君の方で矛盾の無い様になさつてこの貴君の仰言る「悲しみ」にもつと薄手でない色彩をお加へ下さい、お頼みします。又むしろ貴君の元来の御性格とはまるで違ふこの考へからお離れ下さいまし。どう仰言るにしても、妾の心を貴君の心が、でない振りしてゐる以上に満足してゐますわ。ほんとにいやな方よ貴君は！　妾の心が貴君に逆らはない事は御存じの筈じやありませんか？　貴君のお手紙だつてあんなに勢強く書いてあるんですもの、貴君のお心を裏切つて居ますわ。貴君が安神してゐらつしやらないなら、あんなに活氣の滿ちたお手紙を下さる筈はありませんわ。そこには貴君に關して、無益な非難が餘りに多過ぎます。妾達は妾自らに關はる、又一見より確な理由のある非難のことに移りませう。

二ケ月前から私達が暮して來た變化のない安穩な生活は今申した事と矛盾致する事は妾にもよくわかります。そして亦貴君がこの對照に就いてお驚きになるのも御尤もと思つて居ります。前には御承知の通り妾は絕望して居りました、そして今はあんまり安すらかにして居りますのも御覽のとほりです。貴君はこの事から妾の感情は變り易いとか、妾の心は氣紛れだとか云つて妾を責め樣となさるのね。あゝ、あまりひどい御考へではないで御座いませうか？　いつかはお判りになつて頂かなくてはなりません。えゝいつか貴君は、貴君を愛して居る心は貴君の御心にお背きする事は無いといふ事がおわかりになりますわ。き

つと

若し貴君が、貴君と妾とを結びつけた最初の感情に妾はどんな恐れを抱きましたかお承知ならば、妾がどの位惑ひましたかをも御判斷なさつて下さいませう！　妾は今迄嚴しい教へをうけて養はれまして、一番純な戀でも不面目の極だと思つて居りましたの。皆が妾に次の樣な事を敎へ、又信ぜしめたのですわ。自分ます、感じやすい娘は、その唇から出る最初のやさしい言葉で身を滅ぼして了ふものであるといふ事なのでございます。妾の亂れた想像は罪と戀の告白との區別がつかなかつたんですもの。妾はこの最初の一步に對しまして恐しいと許り思つて居り、破滅はすぐその向ふに在るのだとのみ思つて居たのですわ。自分を信ぜられなくなりましたものですから、妾は尙更ら恐ろしくなつたのです。唯戀病にこわごわして居る事が眞節を基として戰ふのだと誤つて考へてゐましたのでございます。妾は默つて苦しんで居る事がとりも直さず慾望に勝つ事だと思つて居りました。口を切れば妾は失はれると、信じて居りましたのですものけれど、貴君をお救ひするのに妾は口を開かなくちやなりませんでした。かうやつて妾は妾の感情を匿くす事が出來なくなつて、妾は貴君の感情の寬大さといふ事をお望みしようと務めたのでございます。さうして妾よりも貴君におたよりして、妾は貴君の名譽を楯にとつて妾の弱味を埋めようとしたのでございます。

妾は誤つて居りましたわ。二ケ月の經驗で妾は、妾のあまり弱すぎる心は愛が必要であると思ひましたの、けれど妾の官能は戀人を必要としません。ねえ貴君、德をお愛しになる貴君！　妾がこの事に氣が付

いてどんなに悦こんで居るか御判斷下さいまし。前に恐れて許り居て、全く何も知らず、唯恥かしいことばかり思つて居りました考へから逃れ出まして、妾は純潔に戀をする樂しい欣びを味ひました。妾の一生の幸ですわ。妾の氣分も妾の體もこれに對應して幸に。又欣ばしく感じて居るのでございますの。この欣びを抱きますとすぐに妾は愛と無垢との調和は地上の樂園であると感ぜられましたわ。

斯う考へてからは妾は貴君を少しも恐しくは思はなくなりました。兩人で一緒に居つて寂しさを忘れ樣と致す時も、同樣でございます。貴君のお眼、貴君の吐息は「智」よりも「欣び」を表して居りますものけれど貴君自身仰言つた誡めを貴君がお忘れになつても、妾は忘れませんわ。

あゝ、どうして妾の魂の底深くに在つて妾を支配して居る此の幸福と平和との感じを貴君のお心にお移し出來ないのでせうか？　どうして生命の一番の樂しさを靜かにお享けになる樣に妾は貴君にお教へ出來ないものでせうかしら！　二つの魂から出る美しさは、私達にとつては無垢の美しさに附け加はるのですわ、ちつとも恐れる事なしに、恥かしい事も、私達のうけて居る惠みについて疑ふ事は少しもありませんわ。愛のほんとの快びの中に抱かれて私達は少しも恥ずる事なしに德を語事が出來るのですわ。

Et il placer con l' onestade accanto

（そして悦びは心の直き事に結び付くのです―メタスターセー）

妾の胸には何かしら悲しい豫感があるのでございます。ですから妾は大聲あけて、神樣が私達に與へて下すつた、この又とない幸ひな時を充分に味ひませうと申すのです。けれど先の事を考へますと、空しさ嵐、混亂、それから矛盾だけしか妾には見えませんの。妾には今の狀態が少しでも變つたら、それは必ず不幸な事に違ひないと思つて居ります。又もつと樂しい緣が私達を永久に結び付けても、それはあまり幸福すぎて、直きに破滅になるのではございませんかしらんと、どうも妾は判斷しかねますの。所有の動機は戀愛の危機でムいます。そして少しでも變りますれば、今の幸な狀態は危くなるのですわ。妾達は全くそれを失ふだけでございませう！

妾の唯一人のやさしい友よ、何辛、殘念と、後悔と、悲しみとを伴ふ空虛な慾望の陶醉を靜めて頂戴！平和に今の私達の狀態を味ひませうよ。貴君は妾を欣んで教育して下さるでせう、妾は又貴君のお教をうける事をほんとにうれしく思つて居ますの！　今迄以上にこれからは色々お教へ下さいませ。私達が別れるにしても、相互の幸福のためにのみ別れるのですわ。お會ひ出來ぬ時には、手紙を書き合ひませう。此の、又とない幸福な時期を樂しみ、出來得る限り利用しませうね。あゝ妾達の一生、この樣な風にしてゆけます樣に！　精神は氣高く、理性は輝き、魂は強くなり、妾は樂しんで居りますもの。何が私の幸福に缺けて居りませう！

書簡第十　ジユリイへ

ジュリイさん、貴女が、私はまだ貴女を理解して居ないのだと仰言るのは御尤もです。私はいつも貴女の立派な性質の長所を知りつくしたと思つて居つて、尚常に新しい長所に氣が付きます。どんな女でも貴女の樣に、優しさと德とを結びつけて、その兩方を調和させて、共に褒む可き樣にする事は出來ますまい私は貴女の御言葉に、一時は失望しましたけれ共、尚私は貴女の智慮の中に何かしらんやさしい魅力あるものがあるのを氣が付きます。貴女は私に色々と苦しい事をしろと仰言るけれ共、貴女はやさしく言つて下さるので、私はその苦しい事すらも慕はしく思ふ樣になつたのです。

日增しに、幸福中一番良いものは貴女に愛されるといふ事だと感ずる樣になつて來ました。この幸に匹敵する物は毫もある筈はありません。若し貴女の心か貴女の體かを所有するとの、どつちかを選ばなければならぬとしても、私は、おゝジュリイさん、躊躇するものですか！　けれどこの樣な選擇をしなければならぬのは一體どうしたものでせう、どうしてかうなるのでせう？　自然が融和しようと思つてゐる事がどうして相容れなくなるのでせうか？　今こそ尊い時だと貴女は仰言る。あるが儘に樂しみませう。そしてやきもきしてこの樂しさの平和を紊す樣な事は致しますまい。あゝ幸福に過ぎる樣に！　實際この樂しい時期を享樂するのに、清い愛を忘れるものですか？　最上の神のお惠みを棄てゝ、安息のみを選べるものですか？　有用に使へるこの時期を失ふなんていふ馬鹿が居ませうか？　あゝ若し千年をたつた十五分で生きられる位に、時が早くたつにしろ、この樂しい時期以後の日を、何を苦しんで悲しくすごさなければならないでせうか？

現在の私達の狀態の幸福に就いて仰言つた事は御尤もです。私達は幸福である可き筈なのは私によくわかりますけれ共、私は實の所幸福では無いのです。貴女が賢こけに仰言つても駄目の樣です、自然の聲の方が遙かに力强く響きます。その聲が內心の聲と共鳴した時に、それに反對する術が何處にありませう？貴女以外にこの地上の生活中私の魂、私の感覺を占めるにふさはしいものは何物も無いのです。えゝ、自然は貴女が無ければ、私にとつて何の意味も無いのです。けれ共自然の力は貴女のお眼にも在ります、其處では全く、その力は勝ち誇つてゐます。

純潔なジュリイさん、貴女はそれがさうでないのです。貴女は吾々の感覺を魅するに滿足して、貴女自身も貴女の感覺とちつともお戰ひなさいません。人類の情慾といふ物が、尊い魂の下位に在る樣に私には見えます。貴女は天使の樣な美しさを持つて居らつしやると同時に、天使の樣な純潔さを持つて居られる純潔さ、おゝ、私が悲しみつゝ仰ぐ純潔さ、それは私と貴女との間がへだたつて、貴女を私の傍に下す事も、私を貴女の傍に登す事も出來ない純潔さなのです。こんな純潔さを貴女はお持ちです、けれ共私はいつまでも地に這つて、貴女の輝き天に仰ぐのみなのです。アゝ、私が默つて居るのをいゝ事にして幸福におなりなさい。貴女のお持の色々な德をお現はしになるが良い。いつか貴女の德の一つを犯さうとするいやな奴を亡ぼして了つて下さい。幸福で居て下さい。私は私のどんなに憐れな奴だか等といふ事は忘れ

て了ひませう、努めて。そして貴女の幸福さから、私の不幸を慰安する物を求めませう。あゝさうですとも、なつかしいジュリイさんよ、私の愛はその貰む可き對象と同じだけに完全なのです、貴女の魅する様な美しさで燃え上がらせられた私の戀念は貴女の魂の高尚さに消されて了つたのです。貴女の心は何といふ靜けさなのだ、私がやゝもするとその靜安を紊しやせぬかと思ふ程、平和なのだ、靜かなのだ。私が貴女を肉體的に愛撫したいといふ欲求に驅られる度毎に、若し貴女を侮辱するといふ危險が私を引き止めるならば、私の心はこの様な清いお恵みを汚しはせぬかといふ愧疑でより一層強く私を引き止めませう。私が渇望する幸福の償の中には、必らず私は貴女の何等か御損をかけるものを見るのです。私は私の幸福と貴女の幸福とを調和させる事が出來ないなら、どうぞ御勝手に私を御裁判なさいまし、私は私の幸福を斷念します。

貴女の爲に私が抱く様になつた感情には何と説明のつかぬ矛盾があるのでせう！　私は服從したものであり、同時に向ふ見ずな者なのです。私は逸り氣な者になり、同時に謹愼な人であるのです。私は内心の苦闘無くして貴女に目は向けられません。貴女のまなざしは、私の心に愛深く、無垢の感動す可き特長を印します。拭ひ去り難い、尊い、魅惑なのです。私が大それた希望を抱くのも、夫は貴女が居らつしやらない時にであります。私のこの種の望みは、貴女まで到底屆きつこ無いのです。私の望みは到底貴女まで行く勇氣がないので貴女の姿を思ひ浮べて、それに言ひ懸けるのです。貴女自身に對して遠慮して來た尊敬を此瞬中貴女の影像に對して掃ひ、無念を晴らすのです。

けれど斯うやつて私は衰弱し、うつらうつらと日を送つて居るのです。あゝ熱い血潮は私の脈管に流れて居るのです。何だつてその焰を消す事も靜める事も出來ないのでせう！　私は仰へようとして却つていら立たせます。私は幸福なんでせう。私は幸です。私は左様思ひます。私は私の運命には不平など申しません。總てこの儘にして、私はこの地上の王様達の羨らぬ様に、私は決して現在の狀態を棄す様な事はしますまい。けれ共實際に迫つて來る不幸が私を惱ましますは死に度いなんて少しも思ひません。けれ共私は自殺するかもしれない。私は貴女の爲にのみ生き度いのです、だから、私の生命を奪るのも又貴女なのです。

書簡第十一　ジユリーから

妾は、日增しに貴君に惹き引けられてゆきますわ。妾はもう貴君と離れて了ふ事は到底出來ません。貴君が一寸でも御不在だと妾はとてもたまらいのです。妾は貴君の事を絶へず思つて居るのですもの、妾は貴君にお目にかゝつて居るか、さも無ければ貴君にお手紙をどうしても書く様になつて了ふのでございます。妾の愛は貴君の愛と共に增してゆきます。妾は貴君が妾の愛を獲ようとお思ひになつて、上皮ばかりの恐縮を裝つて居らつしやるのだと考へて居ましたの、けれ共貴君はほんとに妾の氣を惡くしまいとのみ恐

れて居らつしやつて、貴君がどんなに妾を愛して居らつしやるか今になつて明にわかりましたわ。妾には貴君のお心の中に、熱のある感情の力を見付ける事が出來ました。そして妾は、前に貴君が宇頂天の樣にして欣んで居らつしやる時よりも、今の樣に貴君が窮してお了ひになつて居らつしやる時の方が、貴君の熱情が見える樣ですの。又妾は今の貴君の狀態がどんなに面白くないものにせよ、決して欣びの缺けたものではないといふ事も解りますの。ほんとに戀をする者にとつては、その心を痛める樣な犧牲も、その愛する人の心に反響があるのですから、決して、苦しい計りの物ではございませんでせう！　けれ共、妾の感じ易すいのを利用なさつて、貴君が、妾を誘惑なさる爲に、前よりももつと考へた上句、この樣な方法をお用ひにならぬのだ等と誰が云ひ得ませう？　いゝえ誰もその樣な事は云へませんわ。いえ〳〵、妾が間違ひですわ。貴君は戀に對して策略をめぐらす等出來る方ではありませんのね。けれど又若し妾が賢ければ戀よりあはれみの方を信じますまい。妾は幾度も貴君のお欣びになつてるらつしやる樣子より、むしろ、貴君の恭々しい態度に妾は動かされましたわ。妾は貴君がお正直なまゝに、終りにはもつと恐ろしい目に貴君がお遇ひになりはせぬかとこ心配ですわ。

どうしても妾は妾の心を打ち明けて、内心強く感じてるる眞實を申上げねばなりません。貴君だつてもう御察知の事でせう、それをお聞きになつても、吃度貴君はどうする事もお出來になりませんわ。それは財産の相違や、親戚の身分や、又妾達の身分の違ひで、妾達は到底一緒にはなれぬといふ事なのです。妾達が一緒に悲しみ、又欣ぶなんていふ事は出來さうもいません。妾達の心持はどの點でも觸れ合つて何處にでも聯絡があるのですもの（こんな事を申すのはお叱はりした物理の智識を基として云つて居るのでございますが、變だつたら直して頂戴）運命は妾達を離すことは出來ませんけれども、やゝもすれば妾達の仲を縫れさせる事は出來るものですわ。これから先は妾達は同じ苦しみ、同じ欣びを分ち合はなくてはなりませんわよ。貴君がいつぞや仰言いました、身は異る所に在つても同じ事をする戀人達の樣に、妾達はお別れして了つても、世界の端と端に居る樣になつても、同じ事を感じ會ひませう。若しも貴君が希望を決して達しられないなら絶對幸福を作ることや、妾の幸福を破つて貴君の幸福を手にお入れなさる樣な望みはよして下さい、お賴みしますわ。妾が名譽を失つて貴君が幸福にお成りなさる望みを棄てゝ頂戴妾の恥さらしと、妾の涙とをお眺めになる樣な事はなさらないで下さい。妾は貴君のお心を、貴君の思つて居らつしやる以上にわかつて居るのでございますよ。斯の樣にやさしい、誠の愛は希望を支配する事が出來る筈でございますわ。貴君は貴君の絶望からはもう充分にお逃れになりました筈ですわ。これ以上の事をやるのは、貴君の不幸と妾の不幸を增すばかりでは無いでせうかしら。

ですから妾達のこれからの運を妾にお委せ下さるのは、妾達双方に大變必要だとお考へ下さいませ。貴君は、貴君が妾にとつては、妾自身と同じ樣に大事なものだといふ事をお疑ひになるの？　又貴君にお分ちしない何かの歡び何處かに在るとお思ひなの？　いゝえそんな事はあるものですか、妾は貴君と同じ程

の關心と、この利害を導く理性はを僅かに持つてをると思ひますの。えゝ、確に妾は家の中で一番若うございますけれど、貴君は、普通女の理性は弱く、殊に成年した婦人方にあつては何にも無いのと同樣だとしましても、女心には弱いにしろ、兎に角早くから理性が目覺めるといふ事を御承知でございませう。丁度樫の木より前に咲いて、間も無く枯れる日向葵の樣に。妾達の樣な娘は幼い時から色々な事に氣をつけなければならず、その爲に物を判別する力も、自ら早くからついてまるるやうでございます。そして妾は一體物を處理しますには、その恐ろしい結果を直接に觸れてみますより、前に早くその成り行きを豫知すれば一番いゝのだと思つて居りますの。妾から申しませば、妾達の今の狀態に妾が氣を懸ければかける程妾が愛の御名によつて貴君にお願ひして居る事を理性がやはり貴君にお求めして居るといふ事に氣が付きましたのでございます。どうか理性の穩かな聲にお從ひ下さい。そして妾に—あゝ妾だつて宣日なのですけれど—貴君を導かせて下さいませ。宣日にしろ多少とも妾は貴君のお賴りにはなりますわ。

妾達幸ひ相互に理解し合ふか、又は此手紙をお讀みになつて、貴君が此手紙を書いた妾の切ない心やりに御同情して下さるか妾にはわかりません。又妾は、妾達が感じ方が同じくても、物の見方は同じかどうかもわかりませんわ。けれ共、お互ひの幸福を區別して考へる考へ方が、一番選ばなくてはならぬ意見だといふ事ははつきりとわかりますわ。

書簡第十二　ジユリイへ

ジユリイさん、私は貴女の御手紙の單純さに感動させられました。私はその手紙の中に、無垢な魂の清澄さと愛の爲、やさしくも貴女が心を配つて下さるのがよくわかります。貴女のお考へは何の飾りも何の苦しみも無く云ひ表はされて居るのです。この樣な素朴な考へに觸れると人の心は前以つて作られた飾り澤山な考へ等が及びもつかぬ、深い感銘を得るものです。貴女はチヤンと筋道の通つた道理を仰言いますよく考へてみますとそれには強い力が感ぜられます。そして氣高い貴女のお考へは他の人が考へるのとまるで違つた考へ方をして居らつしやいます。あゝ仰言る通り私達の運命を貴女にお委ねします。これは私が貴女にお許しする權利ではなくつて、却つて貴女にして頂き度いと思ふ義務なのです。私が貴女にお願ひする正しい事の一つなのです。そして貴女の理性は、貴女のために私の理性が不幸な目にあつて居らのを救つて下さる可きです。今から私は、自分の一生、私の意慾の支配權を貴女に捧げます。私をどうか、彼自身の爲には何物をも有せず、その全存在が貴女のためにのみある一人の男として取扱つて下さい。確に、私はお約束した言葉を守ります、どんな事を貴女がお命じになつても。私はよく從ふ積りです、さうすれば貴女が幸におなりだと云ふのですから。私は常に私は服從すれば良いのだと思つて居ります。ですから私は殘る所なくすつかり、私達の幸福をどう取扱ふかはお任せしますよ。つまり貴女の幸福を成就な

されば良いのです。私は、一瞬たりとも貴女を忘れる事の出来ない、又貴女の事を想ふと抑へなければならぬ程の興奮を感ずる私は、たゞ〳〵貴女が私にお課しになる事に專念致す積りです。

一年前から私達は一緒に勉強して居ります。秩序のない、まとまつて居ない事を私はお教へ致しましたそれは貴女の智識を啓くといふより、むしろ貴女の御意見を私の方から伺つたのです。其上あゝして心でお互に惱みましたから、學問的な思索をする事は少しも出來ませんでした。本を見て居ても字を讀んで居ませんでした。考へる事もなく、讀みました、又 注意が缺けて居りました。貴女のお從姉樣は私達みたいに心配もお有りにならぬので、よく私達がぼんやりして悟りの惡いのをお叱りになりました。そしてあの方だけずんずん先をおやりになりました。知らず知らずの間にあの方は先生の先生と云つた役をして居られたのです。そして私達はよく、あの方の仰言る事を笑ひましたが、あの方だけがほんとに私達三人の中で勉強した事の中から何物かをお摑みになつたのです。

ですから失つた時をとり返す爲に（あゝジュリィさん、この失はれた時間はこれ程よく用ひられた事があるでせうか？）私はほんやりして勉強の邪魔をした事を組織的に償ふ一つの方法を考へ出しました。私はそれを書いてお送りします、一緒にいつかお讀みしませう。今はこゝに簡單な事を御注意して置くにとどめませう。

若し私達が博學になつて自分達の爲より、他人の爲にならうと心得たら、私の方法は何の價も無いでせう。何故と申しますに、私の方法は常に澤山なものから抽象して來て大叢書から小叢書を作り出す樣なものですから。學問などいふものはそれに携はる人の中のある人々には、丁度重用される貨幣の樣なものなのです。そしてそれを相互に交換し合つて居る間のみ幸福に資する所があり、それを語り合ひ、貨幣が商賣に於けるが如くする時だけ良い者の役に立つのです。試みに學者連に「人にその說を聞かせて欣ぶ」といふ事を禁じるとしたら、智識は彼等にとつて何の價も無くなるでせう。學者連はその書齋で研究し、蒐集するのも皆公衆にそれを擴げようとの爲なのです。彼等は他から見て賢者であり度いのです。ですから、喝賞者の無い時には彼等は少しも研究などしません。(一) けれ共私達は私達の智識を利用しようとしてゐるのですから、決して人に切賣りしよう等とは思つて居ないのです。けれ共その智識を自分達の役に立つ樣に作り變へようとしてゐるのです。智識を受持ち負ふのでなくて抱いて、滋養分とするのです。少し讀書して、讀んだ事について深く考へる、又互に話し合ふ（同じ事ですが）のは智識を消化する方法です。ですから私はかう思ひます、一度或人が沈思して完全に理解したら、必らず以後其人は本を讀むより、自己の中に皆の解釋を求めるであらうと。實際智識を頭に整理して納れ、それを自分の物とするのは一大神秘と云はなくてはなりますまい。成程智識は人が吾々に與へてくれるものですが、常にそれは私達には向かぬ他の形式を以て與へられるものです。モンテーニュは云つて居るでせう「吾々は吾々の思つて居るよりも富んで居る。けれ共常に人から物を借りたり、物を搜し索めたりさせられて居る。吾々の財産よりも他

人の財産を用ふる方法を教へられる。絕えず色々なものを集めてゐるけれど、何物にも吾々は觸れない。吾々は彼等の納屋を充すのにのみ汲々として、一杯集めたかと思ふと、飢ゑて死んで了ふ、彼の吝嗇者と同樣である」と。

勿論この方法が爲にならぬ人も澤山居ると私は思ひます。又頭が惡くて、自分でまとまつた事をよく考へられぬものだから、本を澤山讀んで少ししか瞑想しない人もあります。ですから貴女にはこれ等の人と違つた、私が考へた方法をお教へしますよ、貴女は同じ本を讀んでも本以外の事をお悟りになるし、貴女の生氣ある才氣はある本を基礎にしてまるで別の本をお作りになる。そして屢貴女のお作りになつた本の方が餘程優れて居る事があります。私達は考へてゐる事を交換し合ひませう、私は他人が考へる樣な事を申しますから貴女は同じ問題について貴女の御意見を述べて下さい。そしてかうやつて授業すれば屢々私はお蔭で貴女よりも學者になる事が出來ませう。貴女がこれから讀書をお減らしになるに從つて本をうまく選擇なさらなくてはなりません。學問する人達の大なる誤謬は、私が既に申しました樣に、あまりに本を讀んだと云つて得意がつて居る事と、世の詭辯を弄する者の中でも吾々の理性が一番吾々を損なはぬといふ事も知らずに、本から何物をも自家のものとする所がないといふ事とがそれであるのです。自己に立ち歸りさへすれば、直ぐに、皆は善である所のものを感じ美である物を辨別出來るのです。人が善美を外から私達に敎へて呉れる必要はないのです。又その事で人は押付けようとすればする程、無理强ひが出來ないのだ。けれ共最善最美の範例といふものはなほ稀で知られて居りますまい。それは人間社會を離れて搜し求めなくてはならぬものです。洞ろな虛榮心は自然の諸力を測つて、吾々をしてその吾々には無い良い點を、優れた點を、奇怪なもの、架空的な、根も葉もない物と考へさせるのです。そして人間の所謂不可能といふ考へから、怠惰と惡德とが生ずるのです。通常人が毎日は見えぬ物だと云つて居る事を弱い人は、久に見えぬ物だ永久に見えぬ物だ等と云ふのです。此の考へこそ破棄しなくてはならぬ誤りです。眞似る事は出來ないといふ口實を先づ脫する爲に、見るに慣れる樣にしなくては駄目です。此の尊い範例を觀照して、魂は高尙に、心は熱で燃えて來ます。見て居る內に人は同じ樣にならうと努める樣になります。いやな氣持で宙ブラリンとして、どつちにつかずには居られない樣になるのです。ですから私達の內心により、確かに求め得る原理や規則を本の中に求めようなんてしてはいけませんよ。幸福や德に關するあの毒にも藥にもならぬ、哲學上の爭論は措いて、哲學者が、どうしたら人が善に又幸になれるかと考へて居る間に私達は吾々自身を善に、又幸にしようではありませんか？　あの無爲の體系を趁ふよりも、賤む可き大いな規範を求めませう。

私は常に善とは美の發動に過ぎない、兩方共に密接に相關聯して居て、秩序ある自然の中に共に共通的な根源を持つて居るのだと思つて居るのです。この考へから次の樣な事が考へられます、卽ち、人の趣味も智識と同じ方法で改善されるものであり、德に對して敏感なる魂は、從つて亦美に對しても敏感な筈で

あると云ふ事のです。感ずるのと同樣物を見るのも練習です。卽ち最良精妙な觀察は、一つの微妙な纖細な感情に外なりません。ですから、畫家は美しい景色、や美しい繪に對すると、一般の素人の鑑賞者には到底氣付かれぬ所までに感心して欣ぶものです。何故だか理由と云ふものは別にありませんのに、感情のみで理解される物は澤山あります。何故だか私は知りませんが、隨分澤山な物が、幾度も唯氣に入ると云ふ事だけで、記憶に甦つて來る事があります。趣味は云はゞ判斷の顯微鏡みたいなものなのです。それは細かい物をその視力の範圍に置いて、そして、判斷がもう働かなくなつた時に、顯微鏡の働きを始めるものなのです。どうしたらこの樣な鋭い趣味を養へるでせうか？　感ずると同じ樣に見る事に努め、感情で善を判ずる樣に內省で美を辨別する事に慣れる樣にすればいゝのです。いゝえ私は申しませう、ジュリイさんの眼ざしに最初に會つて、直ぐ心を蕩かす樣な人は、この趣味は到底與り知らぬ所だと。

以上の理由で私は貴女のお讀みになる御本を趣味を養ふに爲になるものや、修身書に限つたのです。ですから、私のやらうといふ方法を皆實例にして、私は貴君には、德に就いての定義等を申上げず、德行ある人の實例をしかお示ししませんよ。又うまく物を書かうとするにも、別に規則なんかはお示ししないでうまく書けて居る本を差上げませう。

前の讀書の時に私が省略した所があるのを貴女は變にお思ひになつてはいけませんよ。私は有益にしようとするにはつゞめなくてはいけないとどうしても思つたからです。そして私は常に、魂に關して云ふ所のない物は貴女が專念する價が無いと思つて居るからです。又今度からは貴女のお好な、又貴女がお使ひになれる伊太利語以外の外國語は皆やめて了ひませう。代數と幾何の大略は前通り致しませう。それから、物理も、それが貴女に與へる關係が私の勇氣を挫くなら、やはり止めて了ひ度く思ひます。近世史は全然やめますまい、ですけれども自分達の國のはお止めですよ。それは何故と云ふに、吾國は現代に於いても、上古の人が居る樣な自由で單純な國ですから。又個人個人にとつて最も面白いのは、自國の歷史であると云ふ者共に貴女がお欺まされなさると思ふからです。けれ共この考へは誤つてゐるのです。馬鹿か智慧かでなくては、自己の歷史の讀まぬ國民があるものですか。一番面白い歷史は、風俗の例や、諸種の事象の特長の現れて居る、簡單に云へば一番ためになる歷史です。人々は貴女にかう云ふでせう、この樣な歷史は現在でも古代と同じだけ隨分とあつたと。けれ共これは誤つて居ます。彼等の歷史を開いて御覽なさい、そして默らしてお了ひなさい。顏の無い國民が澤山居ますこんな國民には勿論肖像畫家なんぞる必要もありません。特性の無い政府が澤山あります。勿論そんな政府には歷史家が要る筈は無いですねえ。こんな政府にあつては一人がある位置を占めたら直ぐ、そのやる事は始めからちやんと分つて居ます。又人々は云ふでせう、それは良い歷史家が自分達には居ないからだと。けれどそれは何故だか彼等に訊いて御覽なさい。彼等は間違つて居る。良い歷史の材料を提出すれば必らず良い歷史家は出るものです。けれ共人々はまだ遂にこんな事を云ふでせう、各時代の人は皆相似て居て、同じ道德、同じ惡德を持つて居

ると。又人が古代の人を賞讃するのは、彼等が古代の人であるからのみであると。けれ共これもうそです
よ。何故と云ふに昔は、大事業をするにもチョコチョコと簡單にやつたものなのに、現在はまるで反對なのです。古代の人は古代の史家とはやはり同時代の人でした。けれ共私達は古代の人を尊敬するのを自然的に知つて居ますもの。試に、他日吾等の子孫が吾々を仰ぐとしても彼等は決してこの上代人を敬ふ心を吾々から教ひ得たのではないのです。

私は貴女のお從姉樣には貴女とは違つた文藝物をお渡しします。ペトラルカ、タッソー、メタスターゼと佛國の劇界の諸家の外に私は詩の本も、戀愛本をも混ぜません、これは女の教育の普通とは異つて居ますが。本を讀んだつて愛に就いて何を教へ得ませう？ あゝジュリイさん！ 私達の心は本よりも遙かによく愛について云はないでせうか？ 本の眞似した言葉は、熱した人にとつては誰にでも隨分冷やかなつまらぬ物です。其上本で學ぶのは魂を摩滅させ、氣力を失はせ元氣を無くして了ふのです。けれ共、誠の愛は唆ひ入る焰の樣で、他の感情に勢を與へ、新しい精力でそれを活氣づけます。ですから、世の中で戀は並雄を作つたと云つて居るのです。ジュリイさんを戀人として持ち得る運命にある人は幸なる哉。

註 (一)セネーカもかう考へて居た。彼は曰ふ「若し人が他人に示さぬといふ條件で私に學問を與へたとしたら、私は其樣なものは不必要である、ほしくも無い」と。うまい事を云つたものだ、諸君もかこう考へるが良い。

書簡第十三　ジュリイから

妾は妾達が幸福でございますと申しましたわね。それは少しでも今の狀態が變ると妾が嫌になるのでも今の妾達が如何に幸福だかはわかりますわ。ほんとに妾達がやきもきするのなら二日お會ひしなくても非常に苦しいものですわさうでせう？ 妾は妾達と申しますに妾が感ずれば貴君もお感じになる筈ですし、全くこんなやると思つて居るからですの。何故と云ひますに妾達と申します、夫は貴君もやはり妾同樣にあせつて居らつしゃる事は云はずとも知れた事ですわねえ。

妾達は昨夕から田舍に來て居りますの。町で又お會ひする事は今は急に出來ません。けれどこんな所に來て貴君にお會ひ出來ないのはほんとにつらいんです。幾何を用ひて良いのですなら、ほんとに妾のやるせない氣持は時間と空間との隔りの爲に起つたもので遠く離れゝばそれに從つてお會ひ出來ぬといふ悲しみは增すと申しませう。

妾はお手紙と、貴君の勉强法の計畫とを持つてまゐりましたの。そしてよく考へてみませう。妾はお手紙をもう二度讀みましたの。終りの方で妾は非常に感動させられました。妾は、貴君が眞個の愛といふものを抱いて居らつしやる事がわかりましたの、何故と云ふに貴君の感じて居らつしやる愛は決して潔白を好む心を少しも除いてゐないのですし、貴君は又お心の一番感じ易い所に於いてでも、道德に對して犧牲

をなさる事がお出來になるといふ事を見てもわかりますわ。ほんとに、女の人を誘惑してとり返しのつかぬ樣にする手管として教育といふ化面を假りるのは一番罪のある事ですわ。又小說を讀ませてその戀人の心を柔かにしてしまはうなんてするのは、その人の根底の無い事が直ぐわかりますわ。貴君が御渡しなさる御本に貴君の思想の哲學をとり入れたり、貴君自身のためにのみを計る樣な規範を作つて妾を欺かうとなさつたら、妾はそんな手には乘らなかつたのですのに。けれど貴君の誘惑中最も强いのは何にも手段を用ひないといふ事なのです。愛の渦きが妾の心を捕へてそれから又妾が永劫な愛が胸に生ずるのを感じました時から、妾は神樣に親切な人に妾を結ひ付けて下さいとはお願ひせずに、美しい心を持つた人に妾を結付けて下さいとお賴みする樣になりましたの。何故と申しますに、心の美しい事が人の持つ欣びの中で一番上品なものであり、名譽はそれ等の欣びの伴ふ感情を飾るものである事を妾は知つて居りますから。妾としましては、今迄、ソロモンの樣に、妾は妾の願つた事は勿論願はぬ事も願ひがかなつたのです。妾は妾の本來の望み以外のある事が完成する爲に良い占ひを見出しましたのよ、妾は貴君が他日幸福におなりになれる日にも「貴君はさうなれない」なんて決して絕望的な考へは抱いて居ませんのよ。勿論その方法は遲くて六ケしくて苦しくて隨分恐ろしい障碍がありませう。けれ共妾は妾を危險に瀕せしめる樣な事はしません。しかし忍耐と愛とが出來る筈の事は決して忘れますまい。妾の母の氣に入る樣に貴君はなさつて頂戴、そして其次に妾の父は今は三十年間勤めた職を引いて何もしてゐないのです、ひどすぎる位な老貴族風な人なのですからそれにも堪へる樣にして下さい、父は名譽心で一杯ですが、貴君を愛撫はしないでせうけれど、愛しませうし、言葉では云はぬとも貴君を尊びませう。……。

妾は妾達の家のそばの森に散步しに行く爲に手紙を中途でよして了ひましたの。妾は散步の時でも貴君をお連れして居るのですわ。妾の胸の中に貴君を藏めて行くのです。妾は一緒に步かねばならぬ樣ないゝ所を選んで步きましたの。妾は妾達の氣を惹く樣ないゝ所をも發見しました。妾達の心はこの靜かな氣持の良い所でひたり合ひました。一緒に居つて味ふ欣びにこの所はなほも欣びを增しました。此の良い場所はほんとの戀人の步く光榮を得たわけですわ。そして妾は貴君と御一緒でなければわからぬ樣な美しさをもそこに見出しましたの。妾は驚いて了ひました。

此の所一帶の自然的な森の中で一つ一番美しいのがあります、妾は一番そこがすきです。ですから此理由で又その森の中で妾は貴君を一寸お驚かししたい事があるんでございます。貴君がいつも恭敬な心を持ち妾がいつも狹いそして寬大でない心をのみ持つてるとばかりも申されませんわ、そこで妾は、世の中では色々申しますが、與へる心は、强拗くつきまとつて奪ふ事よりも遙かに價値があるといふ事を貴君に感じさせてあげ度いのですの。けれど貴君の想像の劇しくならぬ樣に妾はかう附け加へてよ。妾達は森の中にはあの「離れない從姉」と一緒でなければ行きませんのよと。

從姉も來ますの、貴君は若しよければ木曜日にいらつしやい。母が從姉の處へ馬車をやりますから、貴

君は十時頃にあの人の處へいらつして、一緒に來て頂戴、一日御一緒にすごして其翌日夕飯後又御一緒に居りませう。

町に居る時程貴君にお手紙を差上げる便宜は無いのを考へると、妾も困りましたの。で初め植木屋の子のギュステンに、貴君の御本を返して貰つて、其本に徹ひ紙をして、其間に手紙を差しこまうと思ひましたの、けれ共貴君がそれをお受取になつても、手紙をお探しになるとは限つて居ませんから、妾は妾達の運命をこんな危い目にあはせるのは罪も罪、ひどい罪になると思ひましてやめました。ですから此手紙は直接貴君にお渡しする事にして木曜に來て頂く事は簡單に紙片れに書いてお知らせしませう。ですから森の中での秘密については前以て一言もお知らせ出來ないので少し、つまらない氣がしますわ。

書簡第十四　ジユリイへ

何といふ事を貴女はなさつたのです？　貴女は私に酬ゐようとなさつたのですか、貴女は私を失はせて了はうとなさつたのですか。私は醉つた樣で何もわからない、馬鹿みたいになりました。私の官能は變つて了つた。私の精神力はあの一度の恐ろしい接吻で棄されて了つたのに。貴女は私の苦しみを輕くしようとなさつたのですか？　貴女は酷い、貴女は却つて私の悲しみを銳くなさつた。私が貴女の唇から探つたものは毒でした。醱酵する、私の血を燒く、私を殺す、貴女の情けが私を死なしめるのです。

あの夢の樣な、狂熱した、魅される樣な瞬間のあの忘れられぬ印象！　あゝ決して決して貴女は私の心から消えない。ジユリイさんの魅惑が心に在る間は、又此の亂れた心が感動と嘆め息とを私に授ける間は貴女は私の生涯の苦しみであり、又幸福であるのです。

あゝ私は見かけ許の平穩を樂しんで居たのだ。貴女の強い意志に從はさせられて、貴女の仰言る儘をして不平一つ云はなかつたのです。私は大膽な想像が狂亂して迫つて來るのを抑へて居たのです。私は私の眼を被布で包み、私の心に足かせを嵌めて居たのです。私は貴女の書いた紙片を見て、お從姉樣の所へとんで行きます。私はあつた儘に滿足して居たのです。私はたそしてクラランに行きました。私は貴女に會ふ、私の心は波打つ、貴女のやさしいお聲は更に私の胸を怪しく亂す。私は、狂喜した人の樣に貴女のお側へ行つたのです。あの時も、お從姉樣がかれ是と戲談を云つて下さつて私の心の亂れをお母樣に知られずにすんだのです。園を散步して、靜かに夕飯を食べました、貴女はそつと其時に手紙を下さつた。けれ共皆樣の前では讀めなかつたのです。日は落ち始めました、私達三人は殘る光を避ける樣にして森の中へ行きました。私の安らかな何も知らぬ心は「自分程幸福なものは無い」等と思つて居つたのです。

森に近づくと、私は貴女が眞面目さうな顏付をなさつたり、お互ひに微笑なさつたり、それから貴女の頰の色が新しく鮮いたのに氣が付きました、私は何か非常に動かされたのです。森へ這入ると、私が驚い

た事には、お従姉様が急に私の傍にいらつして、戯談らしくも、又願ひをこめて、私に接吻をお求めになつた事です。何にも知らないで私はあの人に接吻してあげました。あの方は無邪氣で面白い爲か、私は感覚と心とは同じ物に外ならぬと考へた程です。けれど私はすぐ後にどうなつたでせうか？　手が慄へます……心地よい慄へ！　あゝ貴女の薔薇の様な唇を……ジュリィさんの唇が私の唇に、そつと觸れてギッユッと壓しつけられたのを感じた時には……。私の體が貴女の腕に締めつけられた時には……。天の光でも貴女が私を接吻なさつた時の様に感じた光程鮮かでなく、速かではないのです。私の身體の總てはあの快い接觸に集まるのでした。熱の様な思ひは私達の唇から私達の吐息と共に出ました。そして私の心は重い快樂に壓しつけられて死なんばかりだつたのです。急に貴女は眞青におなりになつて、美しいお目を閉ぢて、從姉さんへよろけかゝつて了はれて、氣を失つて了はれたのです。私は恐れの爲に喜びも消えて了ひました。私の幸福は束の間の輝きに過ぎなかつたのでした。

この不幸な瞬間から私の身に起つた事は辛らうじて思ひ出せます。私のうけた深い印象はもう忘れられません。裏みであらうか？……ひどい苦しみだ……いや、接吻などを何故したのです、私は堪えられません。貴女の接吻は、苦がく、つらぬく様で私はたまらない。貴女の接吻は剰す様だ。私の骨髓迄燒くのだ。私を氣狂ひみたいにさせて了ふのだ……。たつた一度の接吻がもう歸つて來られない迷ひに私を投げこんで了つたのだ。私は前とは異つた者になり貴女も前とは異つた者に見えて來たんです。私は貴女を昔の様に嚴しい、堅苦しいまでに眞面目な方とは思へなくなつて了つた……。その代りに私は貴女が絕えず私の胸に一丁度あの瞬間の様に一體をつけて居らつしやる氣がする、又さう思ふ。おゝジュリィさん、私の制する事が出來ぬ興奮が、どんな運命を私に暗示しても、貴女が嚴しくどんなに私をお詞しになつても、もう私は今の様な狀態には到底生きて居られません。私は貴女の脚下に伏して死ぬか……さうでなければ貴女の腕の中で、死ぬかしなくてはならないと感じます。

書簡第十五　ジュリイから

しばらくの間妾達は別れて居なくてはいけません、これに貴君が從つて下さるかどうかは、貴君が妾に御約束なさつた「服從」を試す事になるのですから。此の場合、妾が無理にお從ひなさいと申しました所で妾にはさう云ふ充分な理由があると思ひますわ。御存知なんでせうが、妾は、どうにかしなくてはなりませんわ。貴君は、唯妾の思ひ通りになつて下されば良いのです。

隨分前から貴君はヴァレーに旅行なさる豫定で居らつしたのでせう。ですから、今、まだあまり寒くならぬ内に、その旅行をなすつて戀しいと思ひますの。當地ではまだ秋は爽やかですけれど、ダン、ドウ、ジアマン（ヴォー州の高山）の頂きはもう白いのですもの。ですから今でなくてはいけませんわ、あと六週間も經つた後で、あんなつらい國に貴君を旅行おさせする事が出來るものですか！　明日出發なさるとにして

頂戴。妾の所へは今の宛名で手紙を下さいまし。貴君がシオンに着き次第に御手紙を下さいまし。

貴君は今迄一度も貴君のお家の事や、御身分等を話して下さらなかつたのね！　けれど貴君が故郷を離れて居らつしやるのを見ると、妾は貴君が少ししか財産をお持ちでなくて、始終こゝで妾達と一緒に居らつしやると随分費用もおかゝりになつたと思ひますの。ですから、妾は今貴君の財布の一部分が妾の財布の中にあるものとして、僅かばかりですが、妾は此の箱の中の財布に入れてお送りします。使ひの者の目の前で開けてはいやですよ。少し位六ヶ敷い事があつても妾はやり通します、貴君に六ケしい事許りおさせ申す程妾は貴君をおろそかには思つて居りませんの。

妾は又、妾が歸つていらつしやいと申すまでは、お歸りになつてはいけないばかりで無く、御出立の時にお別れにいらつしやつてはいけませんといふ事も申して置きますよ。けれ共母の處や妾の所へ、簡單に「急用が出來てさつそく出發しなければならない」とお知らせになすつて下さい。又貴君のお歸りまで、妾のする日課に就いて、一寸妾にも何か御考へをお示し下さいまし。かうすればちつとも變な事も、疑はれる事もないのですから、さよなら、ジユリイの心とジユリイの安息とを抱いて行らつしやるのをお忘れになつてはいけませんよ。

書簡第十六　返事

私は貴女の恐ろしいお手紙を拜見しました。私はお約束ですもの仕方ありません。仰言る通りにします。けれ共貴女は御存知ないまい、こんな犧牲はどんなに私の心を痛めるかを……。あゝ、貴女は、此位の犧牲の必要を私に感じさせる爲にだつても、森の中であんな事をなさる必要はなかつたのです。これは貴女の憎みの無い心の絶望的な殘酷の粹を盡したものです。此上貴女は私を不幸になさるかもしれないと、私は恐ろしい氣がします。

貴女は私にお送りになつた僅の箱をお受け取りになるでせう。斯麼事をなさるのは、殘酷な上に、更に侮辱をお加へになると云ふものです。私は貴女を私の運命の支配者としては置いても、私の名譽まで自由にはおさせ申すことは出來ません。この名譽といふものは、私には尊い殘り物なのです（あゝ、私に殘つてゐる唯一のもの！　私の生涯の果までそれは私だけが、背負つて行くものなのです。

書簡第十七　返答（ジユリイから）

貴君のお手紙で妾は悲しくなりました。全くあのお手紙は、少しも貴君のいつもの樣なキビキビした所が出て居ないのですもの。

妾が生命まで捧げてゐる貴君の名譽を妾が汚すと仰言るのですか？　妾が貴君の名譽を汚す事になるの

でございませうか？　ひどい方！　妾は貴君に自分の名譽までも潔くお委せしようとして居たのを御存知のくせに……。妾が汚した貴君の名譽とは、一體どこに御在いますの？　仰言つて下さいまし。卑怯な方！　考への無い方よ貴君は！　若し貴君がジュリイのわからぬ様な名譽しかお有ちでないのなら、何て貴君は情け無い方でせうか！　その運命をも共にしたつて、何の咎む可き事が御ざいませう？　妾に總てを委せたと公言なさる方が、妾が差上げる物で侮辱されたと仰言るの？　一體何時の世から、人はその愛人から贈物を受けるのが、賤しい事になつたのかしら？　何時から與へる心が受ける心を侮辱する様になつたのかしら？　勿論人は矢鱈に緣もゆかりもない人から物を貰ふことを輕蔑します、ですけれど誰がその愛人からの心をこめた贈物を貰ふのを輕蔑しませう？　賤しい心の人々は名譽を富の中に入れて、德を黄金の重さで歷しつけるのです。心の正しい方は此様な考へ方に其名譽を入れて考へて良い物ですかしら？　こんなに偏つた考へは、取柄の無い操も何も無い人にはいゝかもしれませんが。

勿論、心の正しい方のお受けなさらないのは卑しい分子のある贈物です。けれど、卑しい贈物はその差出す者も汚しますといふ事と、正しい贈物は常に正しく受取れる筈であるといふ事を御承知下さいまし。この點について妾のした事は、自分の心に少しも咎めをも感じさせません、却つて誇らしくさへ思はせます。(二)妾は人に心を賣つたり、人に金錢で自由になるなんてこれ程賤む可き事は無いと思ひます、殊にその金を拂ふ方の人が女の時にはもうお話以上ですわ。けれど結び付いた二つの心の間では所有物の共有は正しい事であり又なす可き事ですわ。例令妾が貴君に澤山差上げすぎましても、妾はそれで滿足致しますわ、そして又、若し差上げ切れぬ物がございましたら、妾は貴君から借りて居る事にしても良いと思ふ程でございます。あゝ愛の贈物を一體どの様な人が感謝して受けてくれるのでせうか？

貴君は妾が貴君の御必要にのみ計つて、妾自身の方が手薄になるのをかまはないかと御思ひなさるのですか？　それには妾は直ぐ反對な證據をおみせ申すことが出來ますわ。何故と申しますに妾のお送りした財布は初め入つて居た倍の金額を含んで居りましたのでございました。こんな事をするのも唯皆妾一人の

金をくれます、けれどほんの僅かばかりです。しかし妾は父のくれた金には觸れる必要の無い程、妾の母は色々氣を配つて不自由の無い様にしてくれますの。刺繍やレース等も別にしても。今まで嘗つて是程金持になつた事はありませんわ。今迄の悲しい戀に煩はされて、この金が少しばかりですけれど、剩つて居るのに、それを使ふことも忘れて居りましたの。そして今こそと思つて、妾はあの様にしましたのに、何の惡い所がございませう。貴君は貴君の身から出た不幸に對して卑下なさいまし、その不幸の起す誤りも愛が償ひませうから！

もつと問題につゝこんで申しませう。貴君は名譽ある故に妾の差上げる物を受取れないと仰言るのね？

若しさうなら、妾は申す事はありません。又妾は貴君がこの心盡しを、無視するのは許されませんと申しますわ。どういふお無度なのか、明かに疑の無い様に、要らぬ細々しい事は止して直ぐに受取つて頂戴な妾は御存知の通り詭辯は嫌ひなのですからね。財布をお返し下さるのは其上の事です、貴君の態度が決まつたら、妾は何も申さず、財布を返して頂きませう、そしてそれに就いては何も申しますまい。

けれど妾は氣六ケしい人や、僞の名譽は嫌ひですから、若し貴君が再び財布を何の御判斷も無く、お返しになつたり、又貴君の御判斷が、つまらぬ物だつたら、もう仕方ありません、永遠のお別れですわ。ではさよなら、ようくお考になつて頂戴ね。

註 (一)ジュリイの云ひ分は正しい。此旅行の秘密の言動から見て今ジュリイの提出して居る金程正しく使はれるものはあるまい。此金を使つてさして利益にならなかつた事は惜む可きである。

書簡第十八　ジユリイへ

お贈り物を頂戴致します。お目にかゝらずに私は出發して了ひました。こんなに私はもう遠くに來て居るのです。貴女はこんな目に、私を遣はせて置いて、御滿足なのですか、私は充分に貴女には服從しましたのです。

何の旅行、何の日當ての旅行ですか、私は云ふ事が出來ません。私は三日で廿里づゝ行く計畫を立てたのです、貴君から遠ざかつて行く一歩毎に、私の體と心とは離れます。そして死の豫感を感じます。私はこれから先私の見聞する事を貴女に書かうと思ひました。けれど駄目なのです。私は貴女しか見えないのです。私にはジュリイさんを書いてお見せするより外に道はありません。あの力強い感動を受けて私は今度絕えずぼんやりとして居ります、私は一體何處に居るのだかわかりませんでした。辛らうじて道をたどり、又道を質ねたりして、私はヴェヴエーを通らずにシヨンに參りました。

私はかうまでして貴女のお叱りを避け、逃る樣にして、貴女に不從順でない樣にと心がけて居るのです。さうですとも、貴女は酷い方です、けれど貴女はどんな事をなさらうと、私は全體を貴女からは引き離されはしません。私が此流浪の旅をして居りましても斯うして居るのは「私」の僅かな部分なのです。ほんとに生命のある私の總ては、絕えず貴女のお側に居るのです。それは失禮ですけれど、貴女の目の上にも、貴女の唇の上にでも、貴女の胸の上にも、貴女の美しさの總の上にさまよつて居るのです。それは何處へでも丁度輕い蒸氣の樣に這入ります。この點で私は、貴女には失禮ですが、斯くあとに殘つてゐる「私」が貴女のお思ひ通りにならぬ事を幸だとまで感じてゐます。

けれどもこゝで私は數人の人と會ひ、二三の用事を果す事になりましたが、悲しくてたまりません。靜かに貴女の事を想ひ、貴女の居らつしやる所へ思ひを及ぼす事は少しも嘆く事は無いのですけれ共、外の仕事をするのは辛らいのです。私自身に就いて自省をしなければならぬ樣な生活は堪へ難いのです。少し

下手に片付けてもいゝから、早く自由になつて、好んで、荒れた人氣も無い處をさまよひたいのです。此寂しい土地は私にとつて、此の國の魅力となつて見えるのです。貴女と一緒に生活ができなくなつたら、全く獨りで遠くに逃れて、獨りで世を暮さなくてはなりますまい。

書簡第十九　ジユリイへ

貴女の御命令があるまで私は斯うして居ります。こゝで五日暮して、仕事をやつてのけました、けれど少しも身の這入つて居らぬ仕事をしたと云はれるでせう。何と仰言つたつても、貴女が私を貴女から遠くにおやりになつて居るのは、唯私を苦しめる爲だと云つて、貴女に辯明の仕方はありません。

私は最初の手紙がどうなつたか心配になり始めました。私はこゝに來ると直ぐ書いてポストに入れたのですが。宛名も貴女の私に書いて遣つて下すつた通りにした筈ですが。又私は念を入れて少しも間違ひが無い樣にしたのですが。あの御手紙の御返事を下さつたなら、もう私の所に屆く筈です。けれども御返事も來ないのです。私の亂れた頭で想像しても何故貴女の御返事が遲れるのか、其理由、いまわしい理由は何も無い樣ですが。噫ジユリイさん。八日の間に、思ひがけぬ事件が起つて、永遠に又とないこのやさしい私達の間の緣が斷たれて了つたのでせうか？　私には幸福になる法は唯一しかなく、憐れなものになる法は無數にあるといふ事を考へて恐ろしくなります。ジユリイさん！　貴女は私をお忘れになつたのですか？　あゝこれが私の恐れの中で一番こわい物です。私は外の不幸に對しては頑張る事は出來ますけれど、疑ひを抱いたゞけで私の心はすつかり力を失つて了ひます。

私は私の恐れの根據のない事を知つてゐますけれ共、私はそれを靜める事が出來ません。私が不幸だといふ感じは、貴女から離れてゐると絕えず銳くされます。そしてまるでその感情だけでは私を打挫くには充分でなかつたかの如く、尙その他總ての感情をも刺戟する樣にほんやりと感じます。初め私の煩悶もそんなに劇しくなかつたのでした。急な出發、旅行の變化が、私の悲しみを一時消したとは申せ、靜寂な孤獨の氣分に還ると、一時に私の悲しみは甦つて來ました。あゝ、私は戰ひました。私の胸は死の刃で貫かれました。そしてその痛みは傷をうけて、可成りあとで痛み始めたのです。

幾度私は小說を讀んで、相手に會へぬと云つて、冷たい慨きをしてゐる戀人達を笑つた事でせう！　あゝ私は其時には、貴女に會へぬ事が他日どの樣に苦しいだらうかといふことをまるで知らなかつたのです。今初めて、私は、平和な心は熱情を判斷し得られないといふ事や、未だ感じた事の無い感情を嘲笑するのはいけないといふ事をわかつた氣がします。けれども私は貴女に申しあげる事があります。貴女から遠く離れて居るといふ悲しみも、それは貴女の御命令だと考へると、何かしら慰められる、優しい氣持によつて和らげられます。貴女のためにしてゐる不幸は、運命から來る苦しみよりは苦しいとは思ひません若し此苦しみが貴女のお氣に入つたら、私はその苦しみを感じ無い樣になりませう。御命令とあらば、苦

しみも癒て償はれる保證がついてをります。私は貴女を全く救はれない酷い方と思ふには、あまりに貴女の御心を知り過ぎてゐます。

若し御同情下されば何で不平など申しませう！　貴女が、私は心の變らぬ、忍耐強い、從順な、一言にして云へば、貴女が私に取り置いて下さる幸福に償する者だと、思つていらつしやる事は間違ひ無い事です。神樣はこれが貴君の御心ならば、私はこれつばかりの少しの苦しみに嘆いた事になりますね！　あゝ、いゝえ、私の心にこんなやさしい期待の情を起させるには、どうか出來るなら、もつと希望に償する、ふさはしい、不幸を見付けて下さい。

書簡第二十　ジユリイから

同時に貴君の御手紙二通を頂きました。妾は貴君が第二回のお手紙に、最初のお手紙がどうなつたかと色々心配して居らつしやるので、次の樣な事がわかりました。それはもう一旦想像が奔馳すると、理性はそれに伴はず、往々想像のみが働く樣になるといふ事でムいます。シヨンにお着きになつて、貴君は、貴君のお手紙の爲にのみ郵便馬車が待つて居たのだとか、その郵便馬車がこゝへ着けば、すぐお手紙は私の所へ屆けられるとか、又お返事する都合は悪い事は無い筈だとお思ひになつたのぢやなくつて？　さうはうまく物は行きませんのよ。貴君の二つのお手紙は同時に私の所へ屆きましたの。それは一週間に一度しか行き來しない郵便馬車が、丁度貴君の二番目のお手紙をお出しになつた時に出發する樣になつたからなのです。それに手紙を配るのだつて相當の時間はかゝりますもの。それに私の使者に妾の返事の手紙をそつと渡す必要もあるのですもの。そして又郵便屋はこゝへ來た翌日でなければ、シヨンには戻らないのですもの。ですから一番都合の良い時、郵便屋の方もうまい都合の時でも、お互に返事を見るのには、八日はかゝりますわ。以上の事を說明して、妾貴君のやきもきしてゐらつしやる心配をぴたりと靜めたく思ひます。貴君は運が悪いとか、妾の怠け心だと仰言るけれど、妾は此樣に妾達の文通は大丈夫安全であり、ひよつとした事がありさうなら、其手筈も出來てゐる事をちやんと知つて居りますの。どつちがほんとにやさしい心盡しをして居るかお判じになつて下さいまし。

もう「苦しい」などと云ひこなしにしませう。そして出發してから、八ケ月會はずに居た父と會ふ事が出來ると思つて、妾がどんなに欣んで居るかを知つて、貴君も欣んで頂戴。父は木曜の晩歸つて來る筈です妾は此頃父の事ばかり考へて居りますの噫妾の兩親に次で愛して居る貴君！　どうして貴君のお手紙や、お怒りの文が妾の心を亂し、家庭團欒の樂しみを破るのでせうか？　貴君は妾が始終貴君の事を思つて居ればいゝと思つていらつしやるのねえ。けれど、戀の熖の爲に肉親の事を忘れ、戀人の哀願のために父の愛を忘れて了ふ樣な顚廢した娘を、貴君のお心はお愛しになるかしら、仰言つて下さいな。いゝえ、貴君はそんな方ではありません！　こんなやさしい感情のために抱いて居る妾の無邪氣な欣びを、不正な

お叱りで毒さないで頂きませう。貴君はやさしい、感じ易い心の持主でいらつしやるのですもの、清い聖い抱擁の中で、娘の胸にあてた父の胸の善びの鼓動を感ずるのはどんなに樂しい事か お感じになる筈ですわ。あゝ、貴君は其の樣な時には心が其喜び悲みを共するものだといふ事を信じて居らつしやいませう？ えゝそれは少しも不自然ではございませんわ。

Sol che son figlia io mi rammento adesso.

（かゝる時に私の心に浮ぶは私は彼の人の嬢なりといふ事なるのみ）

けれど、妾が貴君を忘れた等とお思ひになつてはいやですよ。一度愛した者を人は永遠に忘れるものですかしら？ いゝえ、ある期間人の感じた強い情が主調となつて、愛した事は絶對に忘れられるものではありません。貴君がお發ちになつた時に、妾は決して悲しくなかつたなんて云ふ事があるものですか！ 又貴君のお歸りになるのをどうして快ばずに居られませう？ ですけれど……兎に角必要なのですから我慢して居て下さいまし。妾が出來るだけ早く、お呼び還しする事を信じて下さい。そして會へぬと云つて矢鱈不平を云ふ人ではないと云ふ事を考へて戴きたいものです。

書簡第廿一　ジュリイへ

あんなに待ちに待つたお手紙を受けとつても私は苦しみました。私は郵便局で馬車を待つて居ました。包みが開かれるや否や私は自分の名を云ひました。私はしつつこく、あせりました。局員が一つ私宛のがあると云つてくれた時 私は顫へたのです。もう死ぬ樣な 心持になつて私は手紙を渡してくれと申しました。そして到頭私は手紙を受け取つたのです。ジュリイさん！ 私は貴女の筆跡を認めました。私の手はこの尊いものを受けとる時にも顫へて了ひました。私は千度も萬度も此の尊い字に接吻したく思ひました。あゝ危い戀する者の氣がね！ 澤山人の居る前で接吻する事も、開く事も私は出來ませんでした。私はいそいで其場を立ち去りました、膝が顫へてるました。私は沸きかへる感動で道もわからなかつた位でした。最初の道の曲り角で私は開封したのです。私はずつと大急ぎで、貪る樣にして讀みました。私は貴女が尊敬しなければならぬお父樣を抱擁なさる欣びを、あんなに上手にお書きになつてるる所へ來ると、私は、急に泣き出して了ひました。通る人々は私を見るのです。私は人々を避けて、小路へ這入つて行きました。そこで私は貴女のお欣びのお裾別を受けました。私は、自分では殆ど知らない貴女の幸なお父樣（下へ）

心で夢中になつて抱き締めました。そして自然と、私は自分の父の事を想ひ出して、彼の尊い思ひ出に又をしても泣いて了つたのです。

あゝ貴女は、空虛な、何も無い私の智識から何をお求めにならうといふのですか？ あゝ貴女こそ、善な事、純な事を人の心に納れる樣な事總てを、殊に道德と、愛と、天性との立派な調和をお敎へになるのです。この調和は貴女にしか無いんですから。いゝえ、聖い愛情と云へば一つとして貴女の御心にない

ものはありません。貴女のお持ちの愛情は皆、貴女特有な感受性に由つて貴女のお心の中に一きわ聳立つてゐます！　私の心を統一する爲には、元來私の行動を皆貴女の御心通りにして居るのですから、なほ、私の全感情をも貴女に從はせなくてはならないのです。

けれ共貴女の狀態と私のとは隨分徑庭がありまして居るのではないんです。愛と名譽とはこの身分や財産の差異を充すものです。けれど貴女は貴女のお愛しになつて居る又、貴女を仰めて居らつしやる方々にとりまかれて居らつしやるのです。やさしいお母樣やお父樣の色々なさる事も皆貴女を目あての事なのです。貴女の爲にのみある樣なお從姉さんの友情貴女がその飾りである所の貴女の御一家、貴女のお心に同情し貴女のお考へに目を注いで居るのです。そして私達の愛のために殘つて居る貴女は、肉身や友情が貴女のお心から奪つて了つた殘りの僅かな部分に過ぎないのです。——そにて私はと云ふに、あゝジュリィさん、彷徨ひ、家も無く、故鄕も無く、私は地上では貴女をしか持つて居ないのです。愛が總ての代りをして居るのです。貴女のお心が一番感じ易いとしても、私の心はそれに對して一番愛する事の出來るものだといふ事にお愕きになつてはいけませんよ。そして例へ貴女が貴女の總てを人におやりになる事になつたら私は少くとも、とに角愛の價を持つて行きます。

けれどまだ、貴女を、私がしつつこく、無作法に泣言を云つて煩はすのではありません。御心配下さいますな。私は貴女のお欣びを尊いと思ひます。私はそれ自身あの樣に清い貴女のお欣びに對しても、亦それをお感じになる貴女に對しても敬意を表します。私は心の中で感ず可き幻像を作つて遠くからそれを眺めて居ります。そして私には私自身の幸福は無いのですから、私は貴女の幸福を私の幸福と思つて居りませう。貴女から私を離した理由はどんなものであれ、私はそれをも尊く思ひます。今尊く思はないで、後にその理由を否認する樣になつて更に貴女の意志に從はざるを得なくなつた時に何が其時に當つてその理由を私に認めさせるよすがとなりませう？　恐らく今認めないなら永久苦しみ了せなくてはなりますまい。默つて居る方が、貴女にお別れするより良いかしら？　噫ジュリィさん！　覺えて下さい、貴女の魂は二つの體を支配しなくてはならなぬといふ事をね。そして又其魂が選んで愛する體は一番永劫に忠實である事をも忘れては下さいますな。

Modo più forte,
Fabrizio daui, non dalla sorte.

（愛の結び目の一番固きは我等の作りしものにして運命の作れるものにあらず）

ですから私は默ります。そして貴女が私の流刑を了らせようとお思ひになるまで、私はヴァレーの山々がまだ登山出來ますからそこを走り廻つて憂ひをまぎらはさうと思ひます。私は人にまだ知られぬ此の國は確に人の目を惹くの價ある國だと氣が付きました。唯、人に賞讃せられないのはそこへ見物に來ても見

方を知らぬ人ばかりで然る可き人が來ないからだと思つて居ります。いつか少し貴女のお氣に入る樣な觀察をして書いて送りませう。美しい婦人を欣こばせるのには丁寧で優雅な人民を描く必要がありますけれど、噫ジユリイさん、貴女には……私はようく知つて居ます、幸な單純な民の描寫こそ貴女のお心には向くのだと私は信じて居りますよ。

書簡第廿二　ジユリイから

もう一歩の仕事がこれで片付いたと云ふものです、それは皆貴君獨りの事だつたのですもの。貴君は妾に教へて下さつた思想主義をくだらぬ物だと仰言いますけれど、妾の父はそれに驚いて居りますの。父は又妾が音樂や繪畫で進歩したのを褒めてくれました。母は貴君が紋章學に就いて「駄目だ」と云つて居らつしたので自分も其積りで居ましたのに、父が欣びましてね、母も驚いて居りますの。父は妾が色々な事が出來るのを欣んでくれたのです。けれど此才能は先生無しでは得られるものでは無いのですもの、先生のお名を發表しなくてはなりません。妾は先生が妾にお教へにならうとして居らつした、總ての學問——一つだけ例外なものがあります——を列べて父に知らせてやりましたのよ。父は前の旅行で屢々貴君に會つた事があると申して居りますの、そして別に貴君に對して惡い印象を抱いてゐるなんて少しも見えませんわ。

それで、父は貴君の御財産はどうだと申しましたのよ、家の者は「中位だ」と申して居りました。又父は貴君の生まれつきの性質はどうかと問ひましたわ。家の者は「親切正直な方」と申しましたの。けれどこの「正直」といふ言葉がこの貴族の耳には曖昧に聞えたのでございます。何か疑惑を興した樣でございまして色々根堀り葉堀りして益々疑が增した樣でございますの。貴君が貴族で無いといふ事を聞きますと妾の父はいくら貴君に毎月お金をおやりして居るかと質ねました。妾の母は口を容れてその樣な事は一度も相談した事もなく、それに貴君はいくら母がおとりになつて良い樣な贈物をしても仲々おとりにならないと申しましたの。すると此貴君の氣位の高い風が却つて父の誇りを刺激しましてね、貴族として平民に借金があるといふ考へになつたのでせうか、父は、お禮を拂ひ、どんなに御辭退になつてもお禮はしなくてはならぬ。そして若しそれでも拒絶なさつたら、もうやめて頂かうと決めて了ひましたの！　以上の事が貴君に關しての妾達の會話の大要です。ほんとにこの會話中、妾は全く氣が氣ではありませんでした妾はこれはだけをお知らせするに、あわててはいけないと思ひましたの。貴君がよくお考へになる樣にね御決心がおつきになつたら、どうぞ前通り妾をお教へなさつて頂戴！　この問題は貴君の御權力以內の事で妾がどうとも出來ない事なのですから。

妾は貴君が山を御歩き廻りになると聞いて辛らい氣がします。勿論、氣晴しにはなりませうし、貴君がお眺めになつて細々お知らせになれば、妾を欣ばせる事は請合ひですわ。けれど貴君がお馴れにならぬ勞れにお苦しみであらうと妾は心配して居りますの。季節も隨分寒くなつてまゐりましたし、二三日中には

皆雪で包まれて了ひますわ。妾は、貴君が勞れよりも寒さでお苦しみになりやせぬかと思つて居りますわ。若し今居らつしやる國で御病氣なんかにおなりなら妾はどんなに悲しいでせう！　どうかもつと近い所に還つて來て下さい。まだヴエヴエーにいらつしやる時ではありませんわ。けれど妾は貴君が今迄より苦しくない生活をなさる樣に、又もつと易々とお手紙の遣取りが出來ます樣にと望んで居ります。勿論何處へいらつしてもいゝんですの。けれどもどうか家の人が何處に貴君が居らつしやるか知らぬ樣にして下さいまし。そしてそれかと云つて氣味の惡い樣に雲がくれなんかなさらないで、丁度いゝ程の所で愼しみ深くして下さい。この事に關しては妾は全く信賴してるますわ。どうか深く注意して頂戴ね！　妾が思つて居る以上に深く注意して頂戴よ。

さよなら。あまり永くお話し出來ませんわ。貴君はどんなに注意を深くして妾が手紙た書かなくてならぬか御存知でせう！　其上まだ申す事がございましたの。父の命を救けた人なんださうでございますの。どうか妾達がその人を歡待しなくてはならないのを考へて頂きたいものです。その方は明日お發ちになるのださうでございます。ですからそれ迄の內に、妾達はこの恩人に、出來るだけの事をして樂しませてあげて、妾達の熱心さをお示ししなくてはなりませんの。家の者が妾を呼んで居りますわ。これで失禮します。改めて申しますわ、さよならと。

書簡第廿三　ジユリイへ

辛らうじてこの八日間を渉り廻りました、この地方は數年かゝつて觀察するを要する所です。雪の爲に山から追はれたといふ外に私は、貴女からお手紙が來てやしまいかと思つて郵便局の前へ早く行きたいので下山して了ました。貴女のお手紙が來るのを待ちつゝ、私はこれを書いて居るのです、勿論若しこれを書いて了つた後にでも貴女のお手紙が來なかつたら又もう一度書く積りです。

今私は別に旅行の細々しい點や私の觀察に就いて申さうとは思ひません。私はお知らせし度い事があるのです、兎に角私達の通信が一番今は私達の間を親しくするものであるのですから。私は自分の心の有樣を申さうと思ひます。貴女の持ち物（譯者註、自分の心）をどうかを貴女に御報告するのはしなければならぬ事です。私の心は貴女の物ですから。

私は出發しました、悲しみに閉されて又同時に貴女のお歡びに慰められて。この樣にして出發した事は私の樣な弱い心を持つ人にとつては、滿更魅力の無い理のない、陶醉に私をひたらせて了つたのです。私はゆつくりと、可成り險しい山の小道を、案內者として傭つた人に導かれて登つて行きました。勿論、私は案內者をむしろ友達の樣に思ひました。私は夢を見たかつたのです。けれど新しい景色が展開する毎に私は夢を見て居る樣な氣分から醒めるのでした。或時は大きな、何一つ生えてるない頽れかゝつた巖が

私の頭の上へ垂れて居ました。或時は又高い大きな瀧が蓼々と音を立てゝゐて、その水沫で私はズブ濡れになつて了つた事もありました。又ある時は、千古の昔から流れて居た様な急湍が私の歩く道の兩側に到底目で深さの測る事の出來ぬ様な、淵を作して居りました。幾度も私は繁つた森の暗い陰に身を沒し、又此の所から出てから快い平原に私の目を欣こばせた事もありました。原始其儘の人氣無い自然と人爲的作業の施された自然との驚く可き混和は、あんな所へは人々は行くまいと思ふ様な所にすら、どこにでも人間の手の跡を示して居りました。洞穴の傍に人家がありましたし、荊棘のみしか無い様な所に、乾らびた葡萄の枝があつたり、崩れた土地に豐かな葡萄が匍つて居たり、巖の上に美味しい果物が生つてゐたりにそふて畠まであつたりしました。

こんなに、この國を奇妙な對照の中に置くのは確に人間の作業の爲す所ではないのです。元來の自然の物が對照すると美しくなる様な性質を持つてゐるのだといふ氣がします。同じ所に居つてもそれ程、色々な景色に見えるのです。東の方には春の花、南の方には秋の果、北の方には冬の雪等、自然は同し瞬間に總ての季節を集め、同じ土地に異る土地を集めて、他所では知られぬ様な平野とアルプとの産物で一調和を形成するのです。これに又眼の幻覺を加へて御覽なさいまし、山々の嶺は各々異つた色に輝き、陽の明暗、そして影、又朝な夕なに起る光の諸現象、貴女はこれ等を皆、絕えず私の賞嘆を惹く場面であらうとお思ひになるでせうね。丁度ほんとの芝居の様に私の前に展開して行く是等の景色は……。何故と申しますに、山からの眺めは垂直なものですから、總て同時に私の眼に入ります。そして水平面に遠く傾斜してのみ見え、又一つの物が他の物に隱されて居る様な平原の景色よりも、遙に力强く感ぜられるのです。

私は最初の内、私の心にあつた靜けさを、此色々變る慰めのお蔭だと思つて居たのです。私は私達の一番劇しい情熱の上に及ぼす、一番感じ易い人達の力を嘆じました。そして又私は、無生命の物が連らなり、さながら人の魂には何等力を及ぼし得ない學問などを讃りました。けれどこの心の靜けさが一夜つゞき翌日は益々靜かになると、私は自分には知られない、何かの原因でこの様に心安くなるのだなと思ひ始めたのです。其日に私は一番低い山の上に行つて居りました、そして最高峰中で丁度手頃な峯を跋涉しました。雲の中を悠々と歩いて上つて行きますと、急に高い朗かな日を仰ぎました。その所では夏には足元に嵐や雷が起るのが見えるのですが。これは實際賢者の心の洞ろな姿なんです、そしてこの様な例を他にとらうとしても無くつて、其心の表示を見出した所にのみその様な例は存在するのです。

其處の清い空氣の中で、私は惟々と私の氣持の變化の眞の原因、あんなに前から失つて居た、内心のこの平和が再來した眞の原因がわかつたのでした。これは全く、注意はして居ないにしても總ての人が感ずる印象なのです。つまり高い山の上の清い空氣を呼吸して居ると獨り手に樂になり、氣が安められ、精神を朗かにするものです。こんな所に居ると快樂等といふものは前の様には心を惹きませんし、情熱も靜め

られます、そして瞑想もさういふ風にして居ると、私に目に止まる物象につれて一段と壯嚴な性質を帶びて來るのです。それに苦い肉感的な所の毫も無い欣ひをも含ん來ます。人の世の上に高く昇ると、下界へ卑しい人間界の感情を置いて來た樣に思へます。そして空界に近づくに從つて、何かしら其清さで心が引き締められる樣に思はれるのです、つまり空界では憂欝になる事なく、眞面目に、氣懶るい事なしに、平和自己の存在に滿足し、又好んで思索する事が出來るのです。劇しい慾求は皆鈍くなつて、それ自身を苦しい物にする樣な、鋭い性質を失ひます。そして人の心へは輕い、又穩な感動をしか與へません。ですから良い季節は人の幸福に、嘗つて苦しみであつた情慾を服せしめると云つても過言ではあるまいと私は思ひます。什麼に心が亂れて居ても、氣分が病んで居た所で、この樣な所に長く居れば、直らぬ事は決して無いと思ひます、山々の靜かな効果の多い「空氣の沐浴」は醫學上の又精神上の重大な藥だと信じて居ます

Qui non palazzi, non teatro o loggia;
ma'u l'or vece un' abete, un faggio, un pino,
Tra' l'erba oerde e'l bel morte vicino
Levan di terra alciel nostr' inbelletto.

(宮居、享樂、劇場の代りに、群、黒松、樅が山の峯々に其綠た競ひ、天つみ空に生ひそゝり立ちては、生命限あるものの眼と心みさながらはるかなるものに導くか。)

今私が述べました事を少し集めて想像して御覽になれば、貴女はきつと私がひたつて居つた、樂しい四方の有樣を少しは想像なさることができませう。物の種類の多さ、大いさ、この澤山な眺めの美しさを想像して御覽なさい。身の周りには總て目新しい物、珍らしい鳥、奇妙な見馴れない草木が在るのを見る快さを想像して下さい。丁度他の新世界に居り、他の自然界を觀る、と云つた樣な歡びを考へてみて下さい。これ等の物は皆目に云ひ表し難い混合態を呈するのです。そしてそこから出て來る魅力は空氣の透徹して居る事によつて益々增され、物の色をより鮮かに、形をより顯著ならしめて目に迫ります。空氣の厚い層が土地を被ふて、地平線が普通以上に遠い物まで含むので、平野に居るよりも物の距離が接近して見えます。そして其上、景色は何かしら、魔術的な、超自然的な、人の精神、感覺を眩す樣な性質を持つて居るのです。人は總てを忘れます、自分自身をも忘れます、何處に居るのか全く判らなくなつて了ひます。

若し私が此の國の住民の交際の有樣に、よりやさしい所を感じなかつたら、恐らく私は旅行中すつかりこの景色の美しさの中にのみ生活したでせう。私はこれから一寸と、彼等の風俗、單純さ、平等精神、彼等を苦しみから、否寧ろ、快樂を追ふ趣味から逃れさせて、彼等を幸福にして居るこの靜かな平和等に就いて書かうと思ひます。ですけれども、私がこゝで書き表はせぬ事、又人が想像も出來ぬ事があるのです夫は、住民達の利慾を離れた人間性と、もう一つは、偶然にでも、いくらか好奇心の爲にでも彼等の所へ

訪ねて行きますとき、彼等はその人を熱心に歓待してくれるといふ事なのです。私も其證據となる事に出會つた事があります。兎に角私は誰も知らないので案内者を頼りにして旅をして行きました。或夕方一つの村に着きますと、村人が各々やつて來て泊つてくれと云ふのです。私はどの家に泊らうか全く困つて了ひました。が私が泊つた家の人はとても欣びましてね、私は生まれて初めて人の望みの斯くまで強いものかと驚く位でした。所で私は主人を酒屋の番頭同樣に使ひまして、整日金をやらうとすると「いらない」と云つて受取らず、其上私の申出に少し怒つた位なのでした。私は全く驚きました。これは此土地の何處でも左樣なのです。初めあまり熱心に泊れと云ふのですから、金づくの志だなと思つたのは大違ひで、夫は全く生温るい迄にやさしい彼等の歓待好きな心だつたのでした。彼等の利害打算にうとい事は實際國中私が歩いて一バタゴン（通貨の名）すら使ふ餘地がなかつた程なのですよ。實際、主人が其費えの金高を要求せず、召使達が賃銀を要求せず、其上何等乞食の影の無い國にどうしたら金が使へるでせう？　ホーヴァレーでは金はその辭非常に少ないのですけれど、その爲に人民はなほ氣儘にして居られるのです。何故と云ふに、物産は他の地方に出て行かないので、又内に於いても少しも奢後な費えが無く、其上山育ちの百姓達がその仕事を樂みにして少しも怠惰で無いので、國内は物産で溢れて居るのですから。若し他日彼等が今より富んだら、彼等は必らずもつと貧しくなりますよ。此國には又開拓を許されて居ない金鑛まであるのです。

私は最初からバー・ヴァレーとは遠つた人民のこの習慣にひどく驚かされました、バー・ヴァレーの伊太利へ行く道筋では隨分旅客は暴利をむさぼられるのですから。ですから同じ國の人でありながら斯くも違ふものかとどうも理がわかりませんでした。所で一人のヴァレーの人が説明してくれました。斯う云ひました。「谷の方（バー・ヴァレーを指す Baa はつまり低きを指す）では通る外國人を云つたら商人かさうでなければその商賣利益に汲々してゐる人達許りですから、私達はそこではその人達が他人を扱ふ樣に扱つてやるんです。けれどこゝ（ホー、ヴァレー。Haun は蓋し高きを指す）では外國人が來る樣な事が無いので、又來るにしても皆利害抜きの旅をしに來るのがわかりますから、私達はその樣に扱ふのです。お客だつて私達がお好きだからいらつしやるんで、私達もですから親切にしてあげるんです。」

「其上」と彼は微笑しながら附け加へたのですよ。「實際かうやつてお泊りになればお金はかゝらないのですけれど、どういふものかあまり澤山の方はいらつしやいません。」―「ア、」と其時私は答へたのです「尤もだ。實際、生活する爲に生活して居て、利益を得ようとか、身を飾らうなど夢にも思つて居ない人達の中では、人は何のもうけづくの仕事が出來よう。自分に幸福に思ひ又存在する價値のある人達…私は君達の中に居て心を平けく持つ爲に、何かの點で君達に似なくてはならないと信じ度い」と。

彼等の歓待をうけてゐる間に最も私に快く思へたのは、彼等自身に又私に對するつまらない感情は少しも無かつたと云ふ事です。彼等は丁度私なんか居らぬ樣にいつもの樣に生活して居るのでした。そのくせ

私に色々つくしてくれるのは、まるで其處に居るのは私だけの樣だつたのです。又彼等には主人の前だと云つてお客の前をつくろふ樣な馬鹿〳〵しい虚榮は無いのです。それかと云つて別に主人に對して禮を失する樣な事はしません。私が何も云はなければ、彼等は私が彼等と同じ樣な此の生活をして居たいのだと假想するのです。ですから彼等の生活の嫌惡や、驚愕を起さしめずに、私自身の獨特な生活をするのにだつてたつた一言證明してやれば、萬事理解される風でした。私がス井ス人だと云つたのを聽いて彼等は「私達は兄弟だ、貴君は貴君の家に居る積りで私達の所に居てくれ」と申しましたつけ。彼等は其上、私のする事を厭がる事なんが少しも無く、同時に彼等の心盡しの眞心を私が疑ふなんて云ふ事、又私が遠慮して居るなどといふ事は想像もして居ないのでした。彼等は自分等の間でも同じ樣な單純さでつき合つて居ました。子供が理性に目覺める頃になれば親と平等となり、召使ひは主人と共に、卓を同じうするのです。同じ樣な「自由」が家々に、又國に充ちて居るのでした。そして一家族は、丁度其國の縮圖みたいなものなのです。

たつた一つ不自由で耐へられなかつたのは、御飯の間が無暗と長い事なのです。私は强いて食卓で肯と一緒に喰べなくつたつていゝんでしたが、兎に角一度食卓に就いたらもう、一日の半分はその儘にして居なくてはならなかつたんです、そして又それだけ酒を飲むのですからねえ！　これだけでもス井ス人は素的に酒好きなのを想像出來ませう？　そりや、豐醇な酒は私にだつて棄てた物ではないといふ事、又酒を飲んで陽氣になるのも別に嫌ふ可きものでないといふ事を白狀します。ですけれど。それには條件があるのです。それは、「他から强いられないといふ」事なんです。つまり、誠の無い人達は小食であつて、食卓で愼し氣にして居る事は體裁を作つてゐる事と、影日向のある心を持つて居る事の證據ですといふ理屈なのです。心のあけすけな人は醉ひかけて、他愛の無い事を云つたり、心の儘に色々な事を云ふのを決して惡い事だなぞと思つて居やしません。けれど勿論、酒の上の發作に就いてはよく氣をつけ、用心はしなくてはなりません、以上の事はあの定評のあるヴァレーの人達と一緒に居り、又故鄕の酒と同樣に强ひ酒の香を嗅いでひねり出せたものなのです「酒の强さ」と云へば實際、食卓に水なぞ並べた事なんか無いんですからねえ。賢いと云はれて居る人が馬鹿にも賭事をし氣立ての良い人達が怒る樣になるなんて、實際お酒の力は私には解しられない氣が致します。ですから私は、感謝しつゝ醉ひました。そして私は賭事などせずに散財もしなかつたので、「愉快になれてうれしい」といふ理由で兎に角若干の金を納めさせて貰ひました。

御飯の時間と同樣一寸こまつたのは役人達の家でですらも、私が訪問すると、家の女主人や娘さん達が私の椅子の後に立つてゐて、丁度召使ひの樣に食卓の事を色々面倒みてくれる事なんです。佛蘭西式の禮式しか知らない私は、こんな窮苦しい事があらうなんて夢にも思はなかつたので、顏る弱つて了つたのですそれに、その給仕をしてくれるヴァレザーヌ（ヴァレザーヌの女）の顏形が奇麗なので色々の面倒みて貰ふのが、ひ

く私には辛い氣が致すのです。實際私の言葉をお信じ下さい。ほんとにヴァレザーヌは奇麗なんです。兎に角私にはさう見えるのですから…。ほんとなら貴女を見馴れて居る瞳は「美しさ」に就いては非常に品騰する程度が高いものなのですのに、その私の目ですら、彼の女達を美しいと思ひます。

が旅行する國の習慣を、虛禮以上に尊重する私は、默つて彼の女達のしてくれるまゝになつて居りました、丁度ドン・キホーテが、侯爵夫人の所に行つて堅くなつて了つた樣に堅くなつて…。私は微笑しながら會食する男達のモヂヤ〳〵の頸飾や、威張つた樣子をこの娘達の若い美しさに較べました。娘達は一寸言葉を懸けられても赤くなつて、愈々只美しさを增すばかりです。が私は、ヴァレザーヌの咽喉が馬鹿に幅が廣いので少しいやな氣がしました。その喉首はいくら白いにした所でそれには一つしかモデルとなる所は無いのです つまり、世界の中で一番頸首、胸の邊の形の美しい人の型をとつたと想像させる程の輪廓の圖かではあるが立派な形をしたモデルーそれは世界にたつた一つしかなくて、大切にとつてあるものとしませう—をその女達の喉首の形と較べても後者に遜色は無いといふ事なので御座います。

貴女が大事と、お隱しになつて居らつしやる神秘な事に就いてこれまで私は學者なのかなどと御驚きになつてはいけません。兎に角、私はさういふ事を知つて居るので御座いますからねえ。一つの感覺は屢々他の種の感覺を人に知らせるもので御座います。憎い程、注意深くされても、その正しい身繕いにも、いくらかすき間が出來るのは致方ありません、そして貴は働いて手に觸れる感じすら起つて來るものです。

飢ゑた眼は、不遜な眼は、無躾にも花束の下の方に這入りこみます、そして薄紗の笹縁や薄い衣の下までも彷徨つて、本來ならば到底手に知覺の出來ない筈の彈力のある觸覺を與へる事となるのです。

Parte appar delle mamme acerbe, e crude,
Iarte altrui ne ricopre invida vesta,
Fuvida, ma s'agli occhi il varco chiude,
L'amoroso pensier già non arresta.

(君の辛らき、むごき乳房のほの見へ、ねたみ心の衣かくまわんとして了さず。眼よりも智き戀心を、止むる術もがな、術もがな。)

又私はヴァレザーヌの着物の着方に大きい缺點があるのに氣が就きました。夫は、衣服を後の方で高めに引き吊つて着るので、佝僂の樣に見えるといふ事なのです。そしてこんな風をしてゐるのがその赤黑い被り物と妙な結果を目に與へるのです。其外の彼女達の着こなしには仲々どうして單純性があり同時に、典雅な所があるのですが…。私は貴女にヴァレザーヌ式の衣服一揃へを差上度く思つて居ります、よくお似合ひになるといゝものですがねえ。衣服の型は國中で一番恰好の良いのを選んだのです。

私が斯うやつて夢中で、人に知られて居ないけれど、皆に賞讃される價のあるこの土地を走り廻つて居る間に、一體ジュリイさん貴女は何をし居らつしやるのでせうか? 貴女はもう私の事をお忘れになつた

でせうか？　私の方でジュリイさんを忘れるなんて事は到底ないのです。むしろ私は私自身を忘れてるのでせうに。貴女に據つて初めて何物かであるこの私がある時間の間、獨りで居る時には、一體私は何物なんでせう？　私の心の狀態の變るまゝに、本能的に、私は貴女と一筋に此地にもあそこにも居るのだ等と幻像を作つて居りまして、それは近頃程強く感ぜられた事はありません。私が悲しい時には、私の魂は、貴女の方へ逃れて行つて、貴女の居らつしやる所で慰安を求めるので御座居ます。これは貴女とお別れした時から感じて居た事なのです。樂しい時には亦、獨で樂まうとはしません。一緒に樂しみを別たうと私の居る所へ貴女をお呼びします。これは種々な物象が私に絶へず自己といふものを思ひ出させて居り、私が何處へでも幻の貴女を導いて行つた、旅程の中で感じた事なのです。一緒に歩かない一歩は、一歩たりとも私は踏んだ事はありませんでした。私は美しい景色を見る毎に貴女にお見せしようとあせらぬ事はありませんでした。私の途上で出會ふどの草木も皆貴女に影を差し出して居り、どの草原も貴女の爲には敷物の役をして居りました。ある時は、貴女の傍に私は座つて居りました。そして色々の物に貴女が目をお注ぎになるのをお助けして居りました。ある時は、私は貴女のお膝元に居りました。そして世にも稀れな感じやすい方の眼眸を眺めて居りました。道に何か障害があつて歩き惡い時には、私は明に貴女が、丁度親鳥のあとから跳ぶ、あの孔雀の樣に身輕にそれをおとび越えなるのを見ました。急流を越さなければならなかつた時には、私はこの樣に快よい貴女といふ荷物を腕の中にしつかと抱きました。そして私はゆつくりと川を渡り醉つた樣な氣持になつて居り、日の前に近づく對岸の道を恨めしく眺めるのでした。この平和な旅行中、皆凡てが貴女の事を思ひ出させます。自然の麗はしい姿、大氣の無上に清い事、住民の單純な風俗、彼等の平等で、其上少しも危氣さの無い賢こさ、あのやさしい、男女間の節操、又その無垢な美しさ等、これ等私の眼に快く映つたものは總て貴女を懷ふ種となり、私の眼の求むるものである貴女を私の心は鮮かに心像に描いて居りました。

私は幾度も、こみあげる感情で一杯になつて申しました。「おゝジュリイさん、どうして實際に貴女と一緒に是等の未知の地に、日々幸福にひたり、人々の眼を避けて、日を過す事が出來ないのだらう！　どうして、私の魂を貴女の魂の中に融合させ、同時に私自身が貴女の爲に宇宙となれないのでせうか！　あゝあの魅すべき樣な美しさ！　貴女は貴女になさるだけの尊敬はお享けになる筈です！　戀の陶醉よ、私達の心はお前を然かる後に、永劫に味ふであらう。長い又樂しい醉ひに、私達は年月の逝くのに氣が付きますまい、そして後、年の効で若い時の情熱は靜められ、共に考へ共に感じて來た慣しの爲に、情熱に纏いでやはり優しい友情が來る事でせう！　若い時に愛の感情と共に培はれた諸々の感情は、他日の空しさを充分に滿たす事でせう！　私達は、此幸な人達の裡に立つて、皆の樣に人類の義務凡てを果す樣に行はう！　絶えず私達は善をする爲に集まり、眞の意味で生くる事なしには吾々は決して死ぬまい！」と。

郵便馬車が來ました。これでお終ひにしなくてはなりません。貴女のお手紙も大急ぎでとりに行かなく

てはならないのです。今迄私の心は波打つて居たのです！　ゝゝあゝ　根の無い夢の中では私は幸福なのです。けれど私の幸福は夢と共に逃れ去るのです、きつと！　一體ほんとに私はどうなるのです、きつと！　一體ほんとに私はどうなるのでせう！

書簡第廿四　ジユリイへ

金の事に就いての御手紙の大事な所についてさつそくお返答申上ます。幸に私は金に就いてはまだ大丈夫、考へる必要がございません。けれどこれからこんな事に對する私の考へを一寸書かうと思ひます。

私は一般に名譽と呼ばれてゐるものの内に、世間の評判から出て來るものと、自尊心から出て來るものとを區別致します。最初のものは混亂した潮よりも、猶轉々として定めない、實の無い憶說から成立つて居るのでありますが、第二のものは、道義の永却不變な眞理に其根底を持つて居るものであります。世間的名譽は富に優るかもしれません、けれ共それは少しも魂に浸潤して來ません、そして眞の幸福に何の影響をも及ぼさないのです。眞個の名譽は、反對に、魂を生粹な精練されたものにします。何故と申しますと、思案勝ちの人を幸福に出來る唯一つのものである内心が、滿足するといふ變らぬ感情はこの意味の名譽の中にしか無いからであります。ジユリイさん、かうした原理を貴女の問題に應用してみませう。きつと直きに其問題は解けると思ひます。」

私が哲學の先師になつて、あのお伽噺の中の阿呆者の様に、智慧を授けるのにお金を取る者としませうさうしたらこれは隨分世間の人の目に卑しい事と見えませう。その上私は斯う附言します、何か滑稽な所がそれ自身に在るのだといふ事を。けれどもどんな人だつて自分の本眞といふものを引き出す事が出來ないのですし又よし引き出すにしても、うんと工夫を凝らして、只其近似値を求めるに過ぎないのですから苦の輕蔑を一番危險な、憶見の内に入れ度く思ひます。私達は馬鹿な評判を重んずる様な愚な事をしてはいけません。貴女は評判にかまはず、矢張り私に尊敬を拂つて下さるし、又變て私も自分の磨いた才能で生活していける時がきて、もうそんなことを愚圖々々泣言を言はなくなりませう。

けれど、もう一つ異つた考へ方もしなくてはならないのです。世間はまあ措いて、自分達に顧みませう一體私は貴女に勉強を教へてあげて報酬をお父様から頂き、つまり私の時間―結局夫は私自身―の一部をお賣りして居るのでありますが、私はお父様にとつて何物、どんな者なのでせうか？　傭ひ人、お金を頂いて働く人、給仕人の一種、こんなものなんでせう？　お父様は私の方から、御自分の信任の保證となるものとして又、御自分の物である貴女の身上の安全のためとして、箏にも棒にもかゝらない、下らぬ男からの様に默々の裡の服從を得ようとして居らつしやるのでありませうか？　お父様けれど、ジユリイさんでなくとも、獨娘よりも尊い寶は世の中の父親にとつてありませうか？　お父様に其仕事を賣る人は一體何が出來ませう？　けれどいくら召使だとしても、その御嬢様に對する感情を默

らせて了ふ様になれるでせうか？　あゝ貴女はさうだとお思ひですか？　さうでなしに又その男は心の赴くまゝに振舞つて、忠順に仕ふべき人の心を傷けるでせうかしら？　若しその様な男だつたら、斯麼家庭教師の心の中には、聖い権利を踏み躙る盲信者と、召使の風をした誘惑者としかありません。実際こんな奴等は、法律上からも正當に死刑に處せらる可きなのです。貴女がこの事を判つて下さると良いと思ひます。私は死をおそれて居るのではありません、私は死に價する恥辱を嫌つて居り自己に對する輕蔑をおそれて居るのです。

エロイーズとアベラールとの「書簡集」が、お手に這入つたら、貴女は私がこの本について又アベラールの行ひに就いて申す事がお判りになるでせう、私はいつもエロイーズを憐れと思つてゐます。つまりエロイーズは愛する様に出來た心の持主なのです（譯者註、アベラールは中世末の神學者でエロイーズは其弟子として學んだ婦である、兩人は丁度ジュリイと其家庭教師の如く戀に落ちたのである。本書の是の今エロイーズもこの意也）けれどアベラール其運命にふさわしい憐れな男としてしか私の眼には映りません、アベラールは、愛も徳も少ししかわかつて居なかつたのです。アベラールを批判した所で、私は彼の眞似をしなくてはならないでせうか？　實行出來ぬ道を說く人は不幸なれよと私は申します。徳と愛と區別の出來ぬ程迄情熱で眩まされた人は、後ち又情によつて罪せられるものです、そして彼の名譽を犧牲として献げた程の感動にもさうなると興味を失ふ様になるのです。心の誠が離れ去ると愛は其一番大きな力を失くなして了つた事になります。どうしても愛を感ずるには、心がそれに向き、そして對象と共に自分達を向上させなくては駄目です。完美といふ事を除いたら、つまり熱誠を取り去る事になります。敬意を除いて御覽なさい、愛は何でも無くなりますから。どうして或る女の方が破廉恥な男を崇められるものですか。又どうしてそんな男が、賤しい腐敗した奴に身を委ねる様な女の方を熱愛出來ませう。つまり一時愛し合つたとしても、直きに輕蔑し合ふ様になるのです。戀愛は彼等にとつては恥かしい商賣取引になる理でせう。名譽は失はれませうし、まして幸福は望外の事となるでせう。

ジュリイさん。けれど同じ熱烈さを以つて慕ひ合つて居る、同年輩の戀人達の間にはこんな事はありません。互に愛し合つて居て、固く結びつけられ、何の特別な羈に縛せられて不自由な目も見ず、兩方共最初通りの自由を享受し、兩人の誓は外からのどんな権利にも破られないといふ様な二人の戀人の間は前のとはまるで違ひます。最嚴な法も彼等には彼等の愛の重荷以外の苦しみは附與出來ないのです。相愛する事の唯一つの罰は夫は永久に愛さなくてはならぬといふ事なのです。若し此の無垢な鎖を切つて了ふ、野蕃な人の居る悲しむ可き場所があつたにしても、其様な理のわからぬ人は疑ひ無く、其無理强ひから出て來る罪に據つて遂には罰せられるのです。

私の考へは以上の如くなのです。貴女は徳も智も辨へて下さる方だからおわかりの事と思ひます。以上の事は、貴女がお手紙の中で力强く鮮かに私に書いて下さつた、貴女のお考へに對する貧しい註釋にすぎないのです。けれどもこれだけでは、私がこの思想を如何に固持して居るかおわかりになりますまい。前

に私がお金をお斷りしたにしても、少しも我意を張る樣な事はしなかつたといふ事や、偏見のために抱かされた嫌惡に關らず、又實を申すと、お斷りするのに足る、充分の根底のある理由を、眞個の名譽といふものゝ內に見出せなかつた爲に、默つて貴女の下され物を頂いて置いたと云ふ事を貴女は御記憶なさるでせう。けれど今は義務、理性、愛が皆明かな調子で話をしかけるのです。若し貴女か名譽かを選ばなければならぬのなら、私はいつでも貴女を失つてもいゝと思ひます。ほんとに、名譽を失ふまい、どうしても保ちたいと思ふのも、ジュリイさん！　それも貴女を愛して居るからなのです。

書簡第廿五　ジユリイから

貴君の御旅先からの御通信皆有難度く拜見致しました。ほんとに貴君のお手紙を讀んで居ると、妾は書いた方が慕はしくなつて來ますの、たとへ書いた方が妾にはわかつて居なくとも。けれ共妾は貴君に申し上げる小言をもつてをります。夫は貴君も「そんな事になるのだらう」とお思ひになつて居らつしやる所に就いてなの。貴女は城壁にかくれる樣に狹くも、タッソーの詩なんかで、取りつくらはうとなさつたのは笑はずには居られなかつたのですけれ共……。ねえ貴君は公開文と、其愛人の所へやる文とに相違のある事を御存知ないのでせう？　こんなおづ〳〵した、又細心の注意が要る愛は、安樂よりも色々と注意が必要ではムいませんでせうか？　あのお手紙の文體が妾にはいやだつたといふ事を御存知ではないでせう？　貴君は妾を悦ばせようとなさるの？　ですけれどこれは今あまりくだ〳〵しく云ふ必要はありませんの。妾は貴君の二番目のお手紙に氣をとられて居りますの、そしてそれについてまづ詳しくお答へし度いと思ひます。ですからヴアレー人の事はあと廻しよ。それでお話するのは、今は妾達の事と限りませう前から隨分考へた問題なのですから。

妾は貴君の御決心がわかりました。妾達はよく知り合つて居るのですから、よく遠慮無しに、德や愛に就いて考へなくてはなりませんわ。若し德といふものが妾達を永遠に離れたら、勇と犧牲を必要とする場合に出會へば、一たまりも無いと思ひますわ。劇しい攻擊に對して最初の動作は抵抗する事で御座ませうですから敵が兵を措かないで戰ふ素振りをする間は、どうかして勝たなくてはなりません。眠りの間に樂しい休息の間に、よく注意して敵の不意討ちに手くばりをしなくてはいけませんわ。けれど不幸が長く續くのは其苦しみをもう堪え難い物にしますものです、ですから心は長くつゞく悲しみよりも、一時的に劇しい苦しみの方に堪え易いものでございます。それだのに、貴君、妾達はこれから先、長い苦しみに耐へて行かうと云ふのですわね。義務あつてする所の無い苦しみに對する、より英雄的な抵抗と云ふものを義務は求めて居るのですわ。

妾はあんまり先を見通し過ぎましたのね。もう幸福な時は光の樣に逝つて了つたのですもの。悲しみの時期が來ましたわ。そして妾にはいつ此時期で了るか誰一人敎へてくれる人も無いのです。總ての物に妾

はおびえて了ひますの。何もかも妾をがつがりさせますの。深い物憂さが妾の心に一杯になつて居ります
の。別に泣くべき確かな理由もございませんのに、知らず〳〵と涙が眼からこぼれますの。妾は未來に避
ける事の出來ない不幸があるかどうかはつきりとはわからないのでございます。けれど妾は希望は前から
培つて居りますが、日に日にそれが枯れるのを見るばかりでございますの。あゝ根の切られた木に水を濳
いだとて何になりませう！

貴君！　妾は貴君にお目にかゝれずに居て辛らいのでございます——さう思ひますわ。妾は貴君とでな
ければ生きて行かれないのでございます——さう感じますの。此事が妾には一番恐ろしい事なのですけれ
共……妾は日に幾度も御一緒に居りました附近を步き廻りますの。けれど別にそこには新らしいものはご
ざいません。妾はいつもの時間に貴君のいらつしやるのを待つて居りますけれど、貴君はいらつしやらな
いのです。時間はどん〳〵經つて行きます。それでも貴君はいらつしやらないのですわ。目に這入る物皆
が貴君の事を妾に想ひ起させて、妾は貴君を失つて了つたのだといふ氣になりますの。貴君は此の苦しみ
を御存知ないのですわ。貴君のお心は妾が缺けて居らとしか貴君に訴へないのでございませう！　あゝ若
し貴君が別れる場合、殘る事がどんなに辛い事だか御存知なら、今の貴君の御身分が、どれ程妾の有樣よ
りよいかおわかりでせう。

尚若し妾が悲しみを口で表し、苦しみを人に云へれば、お訴へする程の惱みも濟ぐでせうが、妾は……
從姉の胸の中でもらす憧かな吐息の外は皆、妾はこらへて居なくてはなりませんの。涙を制せなくてはな
りませんの。死ぬ時にでも妾は笑つて居なくてはならないのですもの。

Sentirsi, o Dei! morir,
E non poter mai dir:

《Morir mi sento!》

（オ、神よ身の死なんとするを覺り、「余は死なんとするを感ず」と云ふを敢にせずとは？）

更につらい事は、是等の不幸がしつ切り無しに妾の一番な不幸を深める事と、貴君の思ひ出が妾を悲しませれば悲しよせる程、妾は貴君の事を追想したくなる事でございますの。貴君！　貴君はどんなに悶へて居る心が情に脆いものだか？　どんな悲しみを戀は釀すか御存知なの？　妾は申上たい事は山々ムいますけれど、貴君のお決りになつた御住所を知るのを待つより外には、妾の今の狀態としては、此手紙を書く事も不可能なのでございます。では又さよなら。筆は離しますけれど妾は決して貴君の事は忘れません

紙　片

妾は知らないのですけれ共、ある船の船頭に賴んでこの紙をお渡ししようと思つて、いつもの宛名で書きます。妾は今度對岸のメイユリイに居る事にして、少くとも妾の行けない地方を眺めでもして樂しまうとする積りなのでございますの。以上一すお知らせ致します。

書簡第廿六　ジユリイへ

僅かな日數の間に私の氣持は全く變化して了ひました。貴女の近くに行くといふ心の和ぎ方に、まあどうした苦しみが加はるのでせう！　悲しい反省がひし〳〵と私を襲ひます。私のおづ〳〵した心は澤山な障碍を豫見させるのです。おゝジユリイさん。感じやすい心は全く天からの不運な贈り物ですね！　其樣な心を得たものは地上では苦しみと惱みとを待つより外術はありません。そんな人は天氣や季節に弄ばれる、取るに足らぬ玩具に過ぎないのです。太陽や霧や朗かな空や、曇つた空が其運命を自由に決めるのです。つまり彼は風のまにまに愉快になつたり、悲しんだりする理です。偏つた見方に捕はれて、彼は自分の心の正しい望みに對する、打ち勝ち難い障碍を、愚にもつかない格言のうちに見つけるのです。そんな人は人からは個々の物に對して正しい考へを抱いたと云つて罰せられ、因襲的な判斷をせずに、寧ろ其自身眞なるものによつて物を批判したと云つて叱責を蒙るのです。彼自らだけはその爲、正直と美の眞正な魅力に無意識に身を委かして、自らの難澁を來したとてそれに滿足してゐるでせうが、一方必要の重い鎖が彼を不名譽に結びつけるのです。彼は自分が人間であるのも忘れて、無上の幸福を求めるでせう。彼の心(情)と彼の理性とは不斷の戰ひを開くでせうし、限りの無い慾望は彼に永劫な苦しみを準備します。

私を苦しめる運命の爲に私が陷つてゐる酷い狀態はこんなものなのです。胸の情火は燃えさかります

し、貴女のお姿は私を輕視して居らつしやる。貴女は私の生涯の魅力であり苦悶なのです。貴女さへ居らつしやらなければ、——あゝ呪はしい美しさ——私は決して私の心の底にある高尚な氣持と、私の運命にある賤しさとの耐へ難い對照は感じなかつたでせう。私は平穩に日を送つたでせうし、地上で占めた私の地位等には思ひも寄らずに、滿足して死ぬのでせうに……けれど貴女を見て貴女を獲られず、貴女を熱愛して何の得る所なく凡人として居り、愛せられて幸になれず、同じ所に住みながら一緒に生活も出來ないなんて……あゝジユリイさん！　私は思ひ切れません。運命！　私はそれには勝てないのです。貴女は私の慾望にも、私の無力にも打ち勝ちになつてからに、貴君は何といふ恐ろしい爭ひを私の心に惹き起さしたのでせう！

變な豫想もつかぬ事になつて了ひました。貴女の居らつしやる所へ、段々近づいて行く樣になつてから私が心で繰返し繰返し思ふ事は、不吉な考へだけなのです。恐らく斯うして一人で旅する事も此メランコリイの原因にはなつて居ませう。一人旅は悲しいものです、堪えられぬものです。そして其上私の心につまり私の元來メランコリイにぴつたりくるものがあるのです。ですから樂しい筈の旅も、生まれて初めてと云ふ程に私はやきもきして過ごして居るのです。草木の徽薰も生えて居ない巖が長々と丘陵を緣取つて私の住家のまわりをとりまいて居ます。冬にはもつとたまらなくなるのです。あゝジユリイさん、私は貴女をあきらめなくてはならぬなら、私にとつて、逝く日も、來る季節も何の意味もなくなつてしまひます

私はさう思ひます。

感情が興奮して來ますと、私はぢつとして居られなくなります。私は走り廻りがむしやらに丘を登つて巖の上にとび乘るのです、そして行く先々何處にでも私の心に一杯なのと同じ厭な恐ろしさを萬物の中に見るのです。綠翠と云つたら一つも無いのです。草は黄ろく枯れて了つて居ます。木々には葉がありません、東北の風と凍ほる樣な北風とが雪と氷とを厚くするのです。萬物が私の目には死んで見えます。丁度私の心の中の希望の樣に。

この丘の巖根の内の一寸奥まつた寂しい所に、私はさゝやかな臺を發見しました。そこからは貴女の住んで居らつしやる幸な町一帶が、指呼の間に見えるのです。私はどんなに貪る樣にして、目をあの懷しい所に向けるか御判斷なさつて下さい。最初の日私はどうにかして貴女のお家を見わけ樣としました。けれど可成りな隔りなのでそんな事をしても全く無駄でした。「私の疲れた目を私の想像が欺すかも知れないと氣付いたので」、私は牧師さんの所へ行つて望遠鏡を借りて來て、貴女のお家を見たのです—見たと信じました。此時から、私は毎日〳〵そこへ行つて、私の生命の源を包んでゐるあの幸な壁を眺めて暮して居ます。もう寒いのですけれど、私は其處へ朝から行きます。そして歸るのは夜になつてからです。私は枯れた木の葉や、木片等を焚いたり、又走り廻つたりして、この誰も居ない所で酷い寒さから逃れようとするのです。私は其處へインクと紙とを持つて行く程、此の荒れた土地が好きなのです。で今私は此手紙を氷の傷に隣りの巖からとれた巖の碎片の上で書いて居るのです。

ジュリイさん、此荒れた土地で貴女の不幸な愛人は、此世で恐らく味へる最後の欣びを享け盡さうとしてゐるのです。其處で彼は、空氣と壁とを通して、窃かに貴女のお宅にまで行きます。貴女の美しいお姿がなほ彼を動かして居るのです。貴女のやさしい目なざしが彼の死にかけてゐる心を甦らせます。彼は貴女の柔らかな御聲を聽きます。彼はなほ、彼が營て林の中で感じた陶醉を、又しても貴女の腕の中に求めようとまでします。慾望の中に迷ひ込んでゐる、亂れた心の空虛な幽靈！　直きに自分自身に還る樣に餘儀なくされて、私は少くとも貴女を、その無垢な生活の細々した一々に就いて、眺めるのです。私は貴女が近頃毎日どんな事をなさつてゐらつしやるか、到底知る事が出來ません。けれど私は、營て幸にも毎日お傍に居て、貴女のなさる事を見て居た時と所との事を考へて、貴女の居常を思ひ浮べるのです。私はいつも貴女が、貴女を一段と貧く思はせる樣な色々な事をやつてゐらつしやるのを想像します。そして私の心は、貴女の心の汲み切れぬ親切さに考へ至つて、歡喜に充ちて悲しくなるのです。朝になると私はこんな事を獨語に云ひます、「今あの方は樂しい眠りから覺めて、顏色は薔薇の樣に奇麗なのだ。その心は柔かな平和にひたつてゐる。あの方は其愛してゐる人に安らかな清い一日を贈られる。そしてお母樣の所へ行かれる。あの方の優しい愛情を御兩親に示される。あの方は家の細々した仕事の裡に立ち働いて、御兩親を安心おさせになる。あの方は不注意な召使のした事も大騷ぎにならぬうちに鎭め、靜かに注意をお與へ

になるだらう。又或はあの方は召使の爲に宵しをお願ひになるのだ。家の仕事が一通りすむと、厭ふ樣子も無く女としての色々な仕事をなさる。御自分の魂を有益な智識で飾り、その高尙な趣味を美術に又天性の身輕を以つて舞踏をなさつてお慰めになる。」又或時には何もしなくても良い美しさを、薄手な簡單な飾りでおよそひなつて貴女は私の目に現れていらつしやるのです。貧しい家庭の苦境を德高い牧師にお聞ひになつてゐらつしやるお姿も。又貴女が常識のある、つゝましやかなお話で良い人達をお欣ばせになつて居らつしやる有樣や、お友達とお笑ひになりつゝも、うかうかして行く若氣に、「智識と善い風俗の分子を容れ樣と努めて居ちつしやる有樣がまざ〳〵と目に映るのです。あゝこんな事を想つてゐる間は、「本當に僅なので、幻も直ぐ消えて了ふのです。あゝ、許して下さい、私は貴女が私の事に氣を使つていらつしやるなんて迄想像して居るのです。私は貴女の悲しさうな目が私の手紙の上を駛つて行くのが見えます。私は貴女の優しい又悲しさうな目の中に、貴女がその幸な戀人に手紙を書いていらつしやるのだといふ事もわかります。又貴女が私の事を、お從姉さまに優しく仰言つてゐらつしやる樣子も目に見えて來るんです！　ジュリイさん！　私達は一緒にはなれないのでせうか？　一緒に一生を送れないのでせうか？　私達はそれ共一生別れて居なくてはならないのでせうか？　いゝえこんな恐しい事は……思ひますまい。こんを事を考へるとたちまち私の心は今迄の和らいだ氣持から氣狂の樣になつて了ふのです。私は馬鹿みたいになつて酒屋から酒屋へ

飮み廻るのです！　こらへてもこらへても、私はすゝり泣いてしまひます。私は叫んでしまひます。怒つた牡獅子の樣に私はわめい了います。貴女を棄てるといふ事を除けば、私は何だつて出來ます。貴女を獲るか死んでしまふか、それより外には何にも無いんです。

こゝでこの手紙はやめてあつたのです。丁度シオンで貴女から頂いたお手紙の御返事を出さう〳〵と思つて確かな機會を待つて居た時のがこれなのです。貴女のお手紙の悲しさに私なほ悲しくなりました。貴女はあのお手紙で所を離れて居ても、思ふ心は抱き合つてゐるといふ事を手近かな例でお書きになつて居たのが私には耐らなかつたのでした。貴女の悲しみはまだ私のより耐へられると思ひます。私はたまらないのです。けれど兩人の感ずる同じ感情は、兩人の性格の色合ひを持つものです。ですから大きな不幸があれば矢張共に大變苦しむのは當り前です。私は不幸と申しましたね。何の意味？　又誰が其不幸をうけて居るのでせう？　いゝえ御存知でせう？　神樣の御命令、これが私達の運命を決めて了ふのです。これが先づ聽かなければならぬ最初の法則なのです。此法則を待つて私達は一生を樂しいものとする事が出來るのです。私は其法則がはつきりわかるのです、私は苦しいんです。貴女は色々な事をなさいますけれど、駄目なんです。貴女は唯々乘り越える事の出來ない障壁が固くなさるだけで、他に出來る方法を忘れていらつしやる。お心が正し過ぎて、貴女は理がおわかりにならなくなつた。貴女の德ですらも、單なる無狂に過ぎないのです。

あゝ若し貴女がいつ迄も今の様に美しく輝いておいでなさるなら、私は神様に、貴女が幸にしてゐらつしやるのを聞き知れば、それで足りるとお願ひします。一生の中、毎年一回貴女にお目にかゝつて、あとは遠い所から貴女のお家を眺め、巌の間に居て貴女を讃美すれば私は滿足します。けれど、あゝ！　止まる事の無い天體の運行を御覽なさい。時間は逃げる様にして經つて行きます。色々な機會も見る見る内に遠い昔のものとなります。つまり……貴女の美しさ、貴女の美しさまでが其限りがあるのです。美しさは衰へて行きます、そして他日には、摘みとられなかつた花が落ちる様に、散つてしまふのです。そして私も苦しみつゝ嘆きつゝ、私の若さは涙の中で萎んでしまふのです。考へて下さい。ジユリイさん！　他愛も無い遊び事に私達はどの位な月日を費した事でせう。もう再び其時は還らないのですのに。そして殘る時間も皆さうなんです。若しのろ〳〵として過したなら、殘りも皆同様なのです。お氣を付けて下さい。貴女は私達の到底行けない時を假想して、根も葉も無い、幸福に憧憬れて居らつしやるのです。貴女は遠い將來の事を見詰めていらつしやるのだ。貴女は私達が戀に窶れ疲れて、又私達の心が苦惱に精力盡き果てゝ、溶けて水の様に流れるのを御存知無いんです。まだ時間があるのです。こんな忌はしい考へから離れて下さい。貴女の計畫を措て、幸福になりませう。私の魂の貴女よ、私の手に來て、私達の魂はもとより體も一つにしませう。いらつしやい、神様、私達の思ひ切りやる事を導いて下さいませ。互に生死を誓ふ此誓ひの證人となつて下さい。落ぶれるなんてことを恐れないで下さい。貧しいけれど幸に暮らすのです。あゝさうすれば私達は世にも稀な寶玉を得た事にもなるのですから。けれど實際この不幸な戀人達を入れる場所が世には無い等と云つて人類を侮辱してはならないと思ひます。私は腕を持つてゐますし、私は丈夫なのです。私が働いて得たパンは、饗宴の御馳走より貴女にはうまい筈ですもの。愛で作られた御飯が無味い事がありませうか？　あゝジユリイさん！　決心一つで直ぐ私達は幸になれるのですに、貴女は此短い一生を、幸福を味はずにお去りになるのですか？

もう申す事はありません。貴女は不幸な戀人達の最後の隱所であつたルーカートの巌が昔どういふ風に用ひられたか、御存知でせう。此處はルーカートに似て居るのです、巌は競ひ立ち、水は深いのです。そして私はもう滅茶滅茶です。

書簡第廿七　クレールから

切なくて、お書きするのもよう〳〵なのですの。貴君もお苦しいでせうが、妾だつて堪りませんわ。あのジユリイさんはもう氣狂ひの様ですわ、死にさうになつておるでなのです。貴君をお自分から遠ざけ様と一生懸命におなりで、身體まで惡くなさつたのですもの。それに貴君の事についても、お父様にお話しになつたのが更にいけなかつたのですわ。近頃又悲しみに心を亂しておいでなのに、あの貴君のお手紙になほ更……ねえ。一夜中、お苦しみになつたためか、熱が出て、熱も高くなる許りですの。氣狂ひの様にお

なりなのです。ジユリィさんは、始終夢中で貴君のお名を呼んでいらつしやいますの、せきこんで貴君を呼んでいらつしやいますの、どんなに貴君の事をお思ひになつていらつしやるのでせうねえ。出來るだけ、お父樣とはお離しして置いてあるのです。こんな事が又お伯母樣の御疑ひの種になりまして、妾に心配想に貴君がお還りになるかどうかなんてお問ひになりますの。ジユリィさんがお惡いので外のお考へをなさるひまもない樣でいらつしやいますから、貴君が入らつしても何とも無いと思ひますわ。

ですから、今直ぐにいらつして頂戴。私はこの船を特別に仕立てて此手紙を差上るのです。この船を御自由にお使ひ下さいまし。早く來て下さい。直ぐにねえ、若しジユリィさんがお可哀想だとお考へになり、お會ひになりたければ。

書簡第廿八　ジユリイからクレールへ

貴女がいらつしやらないでどんなに寂しいでせう！　病後靜養つて寂しいものよ。熱よりも劇しい、情火と興奮が妾を滅茶滅茶にしようとしてゐるのです。あゝひどい方よ、貴女は、貴女に一番居て頂き度い時に何處にか行つてお了ひになるのですもの「八日位會ません」と仰言つたけれど、もう永久にお會ひ出來ないのだわ。あゝあの考へ無しの方が妾に云つた事！　どんな調子で！　貴女御存知ならば、どんなに貴女はお怒りになるでせう！　私は逃げ度い、あの人に從はうかしら？　何處かへ行つてしまはうかしら！　あゝ氣の毒な方！　誰の事を一體妾は慨いてゐるのでせう！　妾の心、妾のいらいらした心はあの方の知らぬ事に就いても知つてゐるのです……神樣！　若しあの方が夫をお知りになつたら！　あゝお怒りになるわ、きつとあゝ、妾はあの方の所へ行かうかしら、出發しなければなりませんわ……けれど妾はこわいのです。

お父樣は妾をお賣りになつたのよ！　娘を商品か奴隸の樣にして……妾の使ふ費用からかうしてお免かれにならうと云ふのよ、お父樣は御自分の生命を、妾の生命で償はうとなさるの。……えゝわかつてゐますわ。もう生きてなんて居られるものですか。いやな、何も知らないお父樣だわ！　一番いゝお父樣といふ名前に價してゐますつて、お父樣が娘を其お友達にお嫁にやらうとなさるのですもの、それが罪なのですわ。何で一番いゝお父樣なものですか！……けれどお母樣は！　どんな罪をなさつたのでせう？　あゝお母樣は、澤山な罪を、妾をあまりお可愛がりになつて、妾を失ふまでに……

クレールさん！　どうしたらいゝの！　どうなるのでせう。ハンズさんはもうちつともお見へにならないのです。此手紙をどうして貴女にお送りしていゝかしら！　貴女がこれをお讀みになる前に、貴女がいらつしやる前に、あゝ妾は人目を避けて彷徨ひ、名譽も何もかを棄てなくてはならないのです。あゝあゝどうしたらいゝのでせう？　ある日、ある時、ある瞬間に……運命を誰が避けられませう？　おゝ妾がどんな所へ行つて住まうと死なうと、どんなみぢめな隱れ家に妾の恥と不名譽とを隱しに引き込んだとして

も、クレールさん、忘れてはいやよ。……あゝ不幸と、恥辱とをうけるとまるで人の心は變つて了ひますわねえ！……あゝいつか妾の心が貴女をお忘れする樣な時が來たら、其時には妾の心は、今の樣ではありませんわ、隨分變つて了つて居るでせう！

書簡第廿九　ジユリイからクレールへ

いらつしてはいけませんよ！　いけませんよ！　もう遲過ぎたのですもの。もうお會ひは出來ませんわどうしてお會ひ出來ませう！

クレールさん、貴女は何處にお居ででしたの？　妾の救ひ主、妾の保護の天使の貴女は一體何處へいらつしたの？　貴女は私を置いてきぼりになさつて！　もう駄目ですわ！　貴女が旅行なんかなさるからいけないのですわ。そんなにその旅行はいそがなくてはなりませんでしたの？　貴女は妾を、妾の生涯中一番危い時期に、ほうつて置きになつたのですねえ？　貴女が貴女のなさらなければならない此事をお忘りになつたのですわ。その爲に貴女だつて後で後悔になさいますわ！　え、妾の淚が渦れる迄いつ迄も貴女は後悔さなつてよ。貴女は妾同樣に償はれない損をなさつたのですわ！　貴女にふさはしいお友達を無くしたら、仲々見つからぬ樣に、貴女は妾の無邪氣を永却にお失ひになりませう。

妾は何と申しましたんでせう！　妾は話す事も、默る事も出來ないのです。切ない後悔が泣き叫ぶ時に靜寂は何の役に立ちませう？　宇宙全體が妾の罪を叱責つてゐる樣な氣持になるのです。妾の恥は總ての物の上に現れてゐないでせうかしら？　妾が心を貴女のお心にそゝがれないなら、妾は默つてゐるより外はありませんの。貴女はおくやみにならないの？　あゝ、貴女は妾を裏切つてお了ひなのねえ？　貴女の忠實さ、貴女の盲目な友達の爲に貴女の不幸な寬大さの爲に、妾は失はれて了つたのですの。

どんな魔がさして貴女は妾の恥辱を作らうとなさるのでせう！　惡魔の上皮計りな心づかひは又しても妾の生活をいやなものにして了つたのです。むごい人！　永久に遠くへ行つて了へ！　殘つてゐるあはれみに、心が動かされればいゝが！　妾の苦しみを、やつて來て增す樣な事はならない！　妾の淚を眺めて氣味惡い欣びを感ずるなんていやだ！　あ、妾は何を申してゐるのでせうね！　彼の方には罪は無いのです妾だけがいけないのですわ！　妾の不幸なのは妾がもとなのです、妾だけがいけないのですわ！　だけれど、もう妾の心は汚れて腐つてゐる樣ですの！　その爲に妾の罪まで他の方になすりつけ樣とするのです。いゝえ、いゝえ、あの方との約束に背くなんて到底出來ません！　あの方の德のあるお心はその愛する者を侮辱するなんていふいやな仕方は毛頭も御存知無いのですもの。あゝほんとに、あの方は、妾なんかよりも人をお愛しになれる方です。何故つてあの方は妾よりもよく物事を納得なさる方ですから。幾度も妾はあの方が戰つてお勝ちになつたのを見ました！　あの方の眼は交みに輝いてゐるのです。所が急に、立ちどまつてお了ひになつ人のやうな歡びにあがつて、妾に身をお投けかけになつたのです。

たのですわ。越える事の出來ない城塞が妾の周圍をめぐつて居る樣なのです、あの方の劇しいけれど正直な愛もそれを越せないのです。妾は此危い有樣をよくも見つめて居れたものですわ！　妾はあの方のお歡びに動かされました。あの方の嘆息に、妾の心は碎ける樣でした。お氣の毒だとだけ思つてそのお苦しみを一緒に同情しましたの。あの方は、絕望的に狂亂なさつて、もう妾の足元でお死になさる樣なのですもの！　あゝ愛だけなら、妾は助かつたでせうにあゝ、同情これの爲に妾は失はれて了ふのです。

妾のいやな慾望は、妾を誘惑しようとして色々な德の假面を被つて出て來るのでした。あの日にはあの方がついて來てくれと、夢中になつて妾にお願ひになつたのですの。これは世の中のお父樣中、一番よいお父樣をも悲しませる事なのです。お母樣の胸に短刀を突刺すのと同樣な事なのです。妾はいやだと云ひ張りました。妾は怒つてこの計畫を拒みましたの。妾達の誓の果せ無い事、出來ない事からあの方の身に心然的に何が起るかわからない不安、こんなにやさしい、そして從順な愛人を、其の希望を弄てあそんで欺いた事！　こんな事皆が、妾の勇氣を落して了ひ、妾はどうとも出來なくなりましたの！　妾の理性は亂れて了ひました！　お父樣に死を與へるか、あの戀しい方に與へるか、又は妾自身が死ぬか、どつちかにしなくてはなりませんの！　どうしていゝかわからずに、妾は自然と不幸を境遇に這入つて了ひました。妾はすつかり何もかも忘れてゐたのです、愛についてだけしか考へてゐなかつたのです。たから、一度迷ひかけると、もう、永久に妾は駄目なのですの！　どんな娘だつて陷らぬ樣な、恥かしい淵に妾は沈んで了ひましたの。生きて行くのには、もつと不幸になるだけの事です。

妾はあとに殘つてゐる慰めを地上に求めました。妾は貴女だけしか見へませんの。貴女が居らつしやらないで妾生きては行けるものですか？　友の情の優しさを妾からお除きになつてはいけませんのよ、ほんとに、けれど妾はこんな事云へたがらではありませんわね。だけどほんとに、妾には貴女がどうしても必要なのですの！　來て頂戴ね！　貴女！　貴女のお心を妾の傷に開いて下さいまし。妾の涙をぬぐひに來て頂戴出來るなら、この自棄から妾を守つて下さい。そして、妾にまだ皆を失つてはゐないといふ事を信じさせて頂戴な！　何故つて貴女のお心だけがまだ妾に殘つて居るのですから。

書簡第卅　右返事

可哀想な方！　どうなさつたのよ貴女は。あんなに貴女は智慧の廻る方でしたのに。貴女がお苦しみの有樣のひどさに就いて、又その爲に貴女が感心してゐらつしやる事に、何と申上げたらいゝので御座いませう！　貴女の可愛いお心を、なほいらぬ事を妾しやべつて、苦しくはしないのでせうか？　それと云つて心にも無いお慰めの言葉を申していゝものでせうか？　妾は貴女に物事をそのあるがまゝな姿の樣に、又貴女が御覽になつても良いとお思ひになる樣にお見せ致しませうか？　聖い、純な友の情は妾の心に貴女のなつかしいお姿をうかべさせるのです。妾遠の內に友情があるのですから、どうか貴女のお苦しみの

事について妾がお役に立つならお使ひ下さいまし。

御存知でせうが貴女のお苦しみの禍に就いては、妾は前から恐れて居りましたの。幾度妾は貴女にそれについて申上げて、貴女はおきゝにならなかつたのでせう。それは、貴女が大膽にもあまりに自信がおありだつたからなのです……あゝこればかりではありませんわ。若しも妾が貴女を其時にお救ひしたら、それは、妾が、貴女の秘密をあばく事になるのでしたのに、けれども妾はどうやつても駄目だと、貴女御自身より明に、貴女の情に脆いお心に觸れる度にさう思ひましたの。つまり妾には、貴女のお心がどうやつても消えぬ樣な、萬物を嘗めつくす情火の中に燒けてお了ひになるの。見ましたの妾はこの波打つお心の中に、幸にあるか死ぬかどつちかだといふ事が、あるのをはつきりと感じましたの。そして堪えられなくおなりなので、あの貴女の愛していらつしやる方を遠くへ、あんなに泣いて迄して、お遣りになつた時にも妾は貴女が其內に何處かへ行かれるか、あの人が呼び還されるかどつちかになると判斷しましたの。けれど貴女が生きてゐるのがいやだなんて仰言つた時には、どんなに妾は恐ろしかつたでせう！　貴女は其時に、もう死なんばかりでゐらつしたのですのに！　貴女自身にも貴女の愛する方にもこんな事になつたのをお責めになつてはいけません、妾が一番罪があるのですから。何故と申しますのに、こんな事になるのだらうとは知りつゝ何も申上げなかつたのですもの妾は……

妾が貴女のお傍から離れましたのも、妾のほんとの心には反してゐる事なのでございます。ねえおわかりでせう！　妾はさうしなくてはならなかつたのですわ。又あの時に、若し妾が、貴女が危險な狀態にいらつしたのなら、粉にされたつて妾は貴女からは離れしやしなかつたのですけれど。妾も貴女の危險い時に氣をつかつてつかれたものですから、たとへまだ病後でつかれて、よわよわしておゐるでだらうけれど、少しの間位は、妾が居なくても良いと思つて了ひましたの。妾は、又してもぶり返して貴女があんなにお苦しみにならうなんて少しも考へもしなかつたのでございます。妾は貴女がつかれていらつしして自制などのですか！　妾も貴女を失つたら死ぬ程の絕望に陷りますわよ。まだ貴女が生きて、泣いてゐらつしても、その方がいゝと思ひますの。

けれどどうして、そんなにお泣きになるのですの？　貴女のなさつたよりも、もつと大きな悔ひをなさつたり、そんな事をなさる理もないのに、御自身をお卑しめになるのはどういふ理なのでございますの？　たゞ心弱さは、それ程まで犧牲を無駄にするものでございませうか？　貴女は自分がお敗れになる事しか考へていらつしやらないのです。そして敗北にまさる、苦しい勝利のあるのをお忘れなのですわ。抵抗する者を機すらも、貴女の德に對する試みではムいませんでせうか？　貴女のおうけになつた、苦しみ危皆、貴女がお負かしになつたなら、貴女は勝利と同樣、名譽をおうけになる筈ですわ。若し何も貴女を正

と認め、制裁するものが無かつたら、少くとも貴女に申譯を云ふ者に考へを向けて下さいまし。妾は人が戀と云つてるるものを大方は知つて居りますの。妾だつたら、戀がそゝのかす大歡喜にはいつも反抗致ませう。けれど妾は貴女の場合の様な戀だつたなら、それ程抵抗は致しませんでしたらうものを、負けてなんかをらずに、妾は貴女よりもつとお轉婆にやりましたでせう。

こんな事を申すと、いやな氣持におなりでせう。けれどこんな事を申すのも貴女が大變に不幸でいらつしやるからなのでございますのよ。これは僞言ではございませんのよ、え、生命をかけますわ。何故と申しますに妾は悪い行爲よりも、悪い格言を憎みますから。妾が斯う貴女にお話して、貴女はそれに耳をお傾けになることが、或る賤しい動機から出る、過ちが犯されるものとしたならば、もう妾達は人間中一番卑しい者です。けれど、今は此の様な事についてお話しなければならないのです。貴女はお聽きにならなくてはなりません！　さうでなければ、貴女は取返しのつかぬ事になつてお了ひになる。何故つて貴女には、自尊心が保つて居ります所の、立派な長所が殘つてお居でなのですよ。所で恥しさのあまり、又それにつゞく卑下の爲に、それは必然的に滅茶苦茶にされさうなのですもの。「貴女がまだ自分が價値のあるものだとお思ひになつていらつしやるからして、貴女はほんとに、價がお有りなのです。」

ほんとに、貴女のお氣の弱さよりもむしろ、貴女を卑屈にして了ふあぶない喪心に氣をお付けになつて頂戴！　眞個の愛は人の魂を下落させる様なものなのでせうかしら？　戀の犯したたつた一つの過ちのために、貴女を常に高尚に導く、美と純正の氣高い熱心さを忘れては、いけませんわ。

太陽に汚點があるでせうか？　たつた一つ曲つた所があるにした所で、貴女にはまだ澤山な德がお在りなのですもの。此事について貴女は、御心配であり、お疑ひになり、夫を否定なさり、嘲つたりなさるのですか？　貴女はそれ等の物―德に應はしくなくおなりになるのですか？　一言で申しませば妾達が獻ける敬意にも價なくおなりなのですか？　名譽、人倫、友情、こんな物はもう貴女のお心には何でもなくなつたのですかしら？　今失へば獲られない諸德を貴女はお嫌ひになるのですの？　いゝえ、ジュリイさん！　クレールは貴女に懲らず思ふと同時に貴女を尊重して居ります。妾は、善といつたら皆貴女のお心に在るのだといふ事を知り、又感じて居るのです。あゝ！　きつと貴女は、貴女よりも一層賢い他の人が、誰も未だ貴女を尊ばないうちに、早くも非常に澤山な損失をなさるでせう。

でも、貴女は妾の手にお止りになつたのね。妾は貴女を失ふより外の事なら何でもあきらめられますわ。貴女の最初のお手紙は恐わかつてよ。ほんとに、あの時二度目ののが一緒に來なかつたら。もう一つもつと恐ろしくないのを頂戴とお願したのでせうに。其友達をお棄てになるなんて！　妾も連れずにどこかへいらつしやらうとなさるなんて！　貴女は少しも貴女の一番大きな過に就いてはお話しなさらないのですわ。この過ちそ、倍も赤くお恥ぢになる可き筈のものですわ。けれど、貴女は、貴女の戀の事にしかお考へにならないのね。……さア！　妾はどこへ行つたつて貴女から離れませんわよ。

妾は貴女から離れてゐて過さなければならぬのはもう耐へきれぬ程なのです、妾はやきもきしてゐますの、所がお會ひ出來ない期間が又延びるのですわ！　妾達は尚六日間ローザンヌに居ります。もう六日たつたら、直ぐ貴女の所へ行きますわ、飛ぶ樣にしてねえ！　妾は貴女を慰めに、又一緒に悲しみに、又貴女の涙を拭ひに、又共に別ちに、貴女の所へ行きますよ直ぐに。妾は貴女のお悲しみの中で、堅い理性などよりもやさしい友情を生かしませう！　苦しまなくてはならないのですわ。妾達は愛し合つて、默つて出來るなら、德の力を盡して、涙では償へない誤りを拭ひとらなくてはなりません。あゝあの可哀想な死んだシアイヨーさんの事がしきりに思ひ出されますわ！

書簡第卅一　ジユリイへ

貴女は何て、心のわからない方なんでせう！　何といふ事をなさつて、私の心には到底わからぬ事をなさるのですか？　愛慾に醉ひしれてゐた私の心は今は悲しみの中にひたつて居るのです。此の上無い、幸福の胸に抱かれてゐて、私は苦しみ、弱つて行きます。私は、あゝ、私の幸福を罪を咎める樣にして、咎めるのです。嗚呼！　身を委ねる程の强い感情が一つも無く、ある感情が起つても夫を片端から一つ一つと抑へてしまはねばならぬなんて、又快樂に常に苦がさを結付けなくてはならぬなんて、何と辛らい苦しみなんでせう！　こんな日に遭ふ程みぢめな事は御座いますまい。

あゝ幸福だなんて、何の役にたちませう？　不幸！　それは私の不幸じやないのです！　貴女の不幸は私にとつて胸にひしひしと答へるのです。貴女は、貴女のお苦しみを、匿くさうとなさつたけれど、無駄でした。私は、それを、明に、貴女の物憂さうにしてゐらつしやる事や、貴女のお目が、取り亂れてゐる中に讀み取れます。此のやさしいお目は戀の秘密を置し了せませうかしら？　表面は氣持の良い樣な風をなさつてゐても、貴女を襲ふ、匿くれた、不快の情を、私は見て取れます。貴女のやさしい微笑で包まれた悲しみは、私にとつて一番つらいものなのです。

もうお匿ししたつてしやうが無いんです。私は、昨日お母樣のお室に居りました。所がお母樣が一寸外へいらつしやると、私は嗚泣きの聲を聞きました、私は胸が裂ける樣でした。私とした事が其聲の出て來る所を考へないで居られませうか？　私は其泣き聲のする方へ近づきました。私は貴女のお室に這入つて行きました。私は貴女のいらつしやる所まで這入つていつたのです。戸を細めにあけてみて、私が貴女が宇宙の最高の位に卽いて居らつしても良い程の貴女が、床に座つて安樂椅子に頭を投けかけて、泣いて居らつしやる樣を見ました時に私はどんな氣持だつたでせう！　あゝ椅子が貴女のお淚でなく私の血潮でぬれた方が私にとつては辛らくないのです。其時私はどんなに後悔したでせう！　私の幸福は私の苦難になつて了つたのです。私は貴女のお苦しみしか感ぜられない！　若し必要なら私は私の生命を以つて貴女の悲しみと私の歡びとを償ひませうに！　私は貴女の御足元に身を投け樣と思ひました。私は此尊いお淚を

軽で拭はうと思ひました。心の底深くに貴女の涙を収め、死んでしまはふか、もう二度と貴女をお泣かせはしまいと思ひました。が、お母様がいらつしやる御様子が見えたのです、私はいそいで、もとの座に還らなけりやなりませんでした。私の心には貴女のお苦しみが植ゑつけられました。それから悔いも、——共悔いは貴女のお苦しみが已むまでは私の心に這入つてゐる理です。

貴女が御後悔になつてゐるので、私はどんなに恥かしいでせう！　私はどうしてこんなに悪者なのでせう！　哀れな者なのでせう。若し、私達が一緒になる事が貴女に自棄心を起させ私の生きてお傍に居る事が貴女の御生活の苦しみなら、私はほんとに軽蔑す可き者です。けれどジユリイさん！　もつと貴女自身を見詰めて下さい！　もつと純なもつと固定した考へのない目で、貴女のお心がお作りになつた聖い關係を見詰めて下さい。貴女は天の法則中、最も清いものにお従ひにならなかつたでせうか？　貴女はやすやすと一番聖い誓ひをお立てになりませんでした

の幸を皆得る爲には到底足るものでは無い事を御存知で無いのです。感じやすい魂は無限とある幸福を適度に味ふのだといふ事をどうお考へになつていらつしやるのです？　貴女はその魂が有限なのを忘れて無の歡びを、皆感じ盡せるとお思ひなのでせう！　どんな理由を以つてしても抵抗し得ない限界が世にある事を御存知なのでせう！　常識があつて、世の總てのあらゆる事を殘りなくやる人は世の中には居ないといふ事を貴女は知つては、氣が氣では無いのでせう！　貴女の爲に迷つてゐる私の有樣に同情して下さい色々の誤りを輕蔑して下さいますな、夫は皆貴女が源泉なんじやありませんか？　もう私はたまりません理がわからないのです。私の疲れた心は貴女一人に在るのです！　貴女のお苦しみをよりよく感じ貴女のお苦しみにより深く同感出來るのです！　ジユリイさん！　御自分の事をくれぐれもお忘れになつては下さいますな。

書簡第卅二　右返事

貴君！　前には、妾達の手紙は平易に、又樂しく書けました。それを書かせる感情は單純ですけれど華かに、すんずんと流れたものでしたわ！　其時には技功を凝らすことも、色あげする事も不必要でしたのねえ！　しかも其清さは其全體に現はれて居りましたのに！　あゝ此樣な時はもうありませんわ！　あゝ二度とありません！　こんなに變つた其第一の證據として、もう妾達の心は一致理解出來なくなつて了ひましたのねえ！

貴君は妾の苦しみを御覽になるのね、そして貴君は其源に溯つて其原因をつきとめたお積りで、役にもたゝぬ事を仰言つて妾を慰めようとなさるのね。貴君は妾が憔悴して行くと仰言るけれど、夫は貴君こそ憔悴してゐらつしやるのでございますわ！　貴君のジユリイの心を信じて頂戴！　妾は妾達の愛に盡すぎたと云つて、悔ひてゐるのではありませんよ！　妾はむしろ妾達の愛から一番大きな美しさが無くなつたのを嘆いて居るのですわ！　あのやさしい德の欣びは、夢の樣に消えて了ひましたのですもの！　妾達の情火は、それを聖化しつゝ、旺にする筈の、聖い熱を失つて了ひましたの！　妾達は欣びを求めましたけれど幸福は遙かに遠くへ行つて了ひました。妾達が敬ひ合つてゐる間、どの樣に私達の心は燒け合ひましたか、あの樂しい時の事を考へてみて下さいまし。あの時には無垢といふ事が、妾達の苦しさを慰めてくれました。あの時には、名譽に對して爲ました骨さがのこらず愛に利益をもたらしたのでしたのに。あの樣な樂しかつた時と今の有樣と比較して御覽なさい。今は何といふ動搖があるのでせう！　恐ろしい事、死ぬ程辛らい事があるのでせう！　過激な感情が最初の最初の優しさを失はせて了ひました！　あの賢く、そして心正しい考へ方の熱情はどうなつた事でせう。この熱情を基とした、妾達の生活の働も愛で強められて居たのですのに！　又その熱情自身が、愛をより樂しくして居りましたのに！　妾達の樂しみは穩かでした、又絕える

時がありませんでしたのに。今はどうでせう、妾達は興奮するばかりです。この意味も無い、幸福は、やさしい、愛撫よりも、怒りの發作に似てゐるのでございます！　あの時には、強い、純な焰が妾達の胸を燒いて居りましたのに、今は、感覺の誤りに身を投けて、妾達は世の中の平凡な、野卑な戀人達になつて了ひましたの！　妬み深い愛がまだ、快樂を支配してゐるのは、勿儘の幸ですけれど……人間の一番賤しい人は、この愛も無しに、快樂を味はうとするものなのです。

これが妾達が、共にうけなくてはならぬ損失なのです！　ですから、妾は貴君に就いても、妾自身についても泣いて居るのでございます。妾の損失はもうこの上も無く大きなものなのでございますわ！　貴君のお心がそれをお感じになる筈です。妾の恥辱を考へて下さいまし！　若し貴君が愛する事の出來る方なら、苦しんで下さい！　妾のした誤りは償へませう！　あゝ貴君——其涙を流させる樣になさつた貴君！　この苦しみを犯す樣な事をなさつて下さいますな！　もう妾の希望としては、妾は一生苦しみたいのでございます！　さうすれば妾の不幸の中の一番の不幸もそれで慰められるのでございますから。えゝ、無垢を失ひ、共に、無垢な事を愛する樣にした、感情を失ふ樣になるのは恥の内でも一番惡い恥辱ですわ。

妾は、妾の運命がわかりますの！　恐ろしくなります。けれど絶望の内にも唯、一つの慰めがございますの！　夫はたつた一つしかないのです、けれど又それはなつかしいものなのでございます。それは貴君から擄られるものなのですの。妾が自分自身に目を向けなくなつてから、妾は妾の愛してゐる人に前より悅んで目を向ける樣になりましたの。貴君は、貴君の爲に妾の自尊心が無くなつた其の缺けた所を補つて下さるものなのですわ。貴君は、妾が自己嫌惡に陷らなければならぬ樣になさると、妾には貴君が此上なく慕はしいものになるのですの！　愛！　此の呪はれた愛！　は妾を滅ぼして、貴君には却つて爲になるのですのねえ、貴君は妾が下へ落ちて行くと、上へお昇りになるのですもの！　貴君のお心は丁度妾の心が賤しいものになつて行くのを利用なさる樣に見えます。妾の唯一の望み！　希望！　それは貴君に、出來るのでしたら、妾のした過ちを、過ちでは無いといふ事を證明して頂き度いのですの！　どうか妾の罪を、貴君のお考への正直な所で包んで下さいませ！　貴君の正しさで妾の恥を消して下さいな！　貴君の爲に出來た損失を、正しいお考へで、申し譯がつく樣にして下さい。ねえ、どうぞ、妾全體になつて下さい。そして申譯をしてみて下さい。妾ですか？　妾は何も出來ないのですから。妾に殘つてゐます、唯一つの名譽は皆貴君に在るのでございますから。貴君が尊敬に償する方である限りは、妾は決して、全く輕蔑す可き樣にはなりませんわ。

妾の體が元通りになつてまゐりましても、妾がどんな後悔を致すかわかりませんが、長くはそれを心に一人保つては居られまいと存じますの。云ふ事をきつと妾の顏が裏切りますわ。病氣から直つた樣な風を改しましても、駄目でございますわ。いつもの樣な日課を採れる樣になる前に、どうか、貴君！　妾達の

都合の良い樣に取り計つて下さいまし。お母樣が疑ふ樣におなりだといふ事を妾は明に見てとつて了ひましたの。そしてお母樣ば貴君に色々氣を付けていらつしやるのでございますの。お父樣はそんな樣子は少しもありませんの、確でございます。彼の方は、あの高慢な貴族は、平民が御自身の娘を戀をしてゐるなんて夢にもお思ひないのですわ。けれど、お父樣の決心の強い事を考へて下さいまし。えゝ、その決心の堅さは早くお考へにならないと、先方から察しられて了ひますから。妾の家にこれから先なほ、出這入りをなさる爲には、貴君は、妾の家から全く出て頂き度いのです。ねえ、まだ大丈夫なんですから、用事のある事にして、もう妾には敎へられなくなつたと、お母樣に仰言つて頂戴！　そして餘り度々お會ひするのは斷念致しませう、それも幾度もお會出來る樣にする爲なのですから。何故つて申しますに、若し貴君の出入が差止めになつたら、もう貴君は、お出でになれませんわ。けれど、貴君の方から、お退きになれば、貴君は御隨意に訪ねていらつしやれるし、又少しうまく、上手におやりになれば、つまり屢々貴君のお會ひが出來ますわ。人は決して氣付く事もございませんし、いけないとも思ひませんでせう。今晩丈はお會ひ出來る他の方法を中止げますわね。あの御從姉樣も前には、色々仰言いましたけれど、あの人だつて妾達の仲を裂かなくてはならないと思つては被入いませんのですもの、今は妾達にとつて、まるで不要な人ではありませんわ。何か妾達の爲になつてくれますわ。貴君もさうお思ひでせう？

書簡第卅三　ジユリイから

あゝ、人の集つてゐる所は、兩人の戀人にとつて居にくい所ですわねえ！　あんな所へ行つて、色々辛らい事を我慢しなければならなかつたのはどんなに苦しかつたでせう！　あんなに落付かないのでせうかしら？　どうしてあんなに落付かないのでせうねえ？　たつた一つの事しか考へてゐないのに、どうして他の事を考へなくてはいけないのでせう！　心が鎭まつてゐないのに、どうして動作や眼を制したらいゝものでせう？　昨夕デルヴァール夫人の所で、貴君のお名前が呼ばれた時に妾の心はすつかり亂れて了ひましたのでございます、一生中あんな事は一度もなかつたのでございますのに、貴君のお名が呼ばれると、妾は叱かられたやうな氣が致しましたわ。妾は皆が一緒になつて、妾を見つめてゐる樣な氣が致しましたの。何を妾がして居りましたか、少しも存じませんでした。貴君がいらつしやると、もう妾は眞赤になつて了ひましたわあの從姉が妾に注意してゐたものですから、あの人も困まつて、顏を妾の方へ寄せて、扇子で顏を隱してくれた程でしたのよ、あの丁度妾の耳に話しをする樣な風をして。妾はこんな事をされては恐らしかつたのです、若しや人から疑られる樣な結果になりやしまいかとか、人が此耳打ちの中にある、秘密探求なさりやしないか等と。ほんとに、もうどこへ行つても、恐ろしい事ばかりなのですの。妾は心配のある心は何

も知らぬ人達をも憚る様になるとつくづく思ひましたわ。

クレールさんは、貴君も困まつた風をしていらつしやつたのに氣が付いたと申しましたわ。ばつ悪さうにしていらつした様だつたとあの人は申しましてよ。貴君はどうしていゝかわからない様にそは〳〵してゐらつしたつて。先へ進む事も、退く事も、妾に近づく事もお廻しになつて、——クレールさんの云ふ所によれば、貴君は妾達の方に目をお向けになる機會を待つていらつしやつたのですつて。妾が少し沈着きますと、妾は今度貴君がそは〳〵してゐらつしやるのが氣につきましたのよ、えゝ、貴君は、困つていらつしてね、ブロンさんの若奥様が、貴君にお聲をおかけになる迄はね。貴君はお座りになつて、ブロンさんとお話しをなさつて段々と、そこで、沈着きになつたのですわね。

妾は思ひますの、こんな苦しい事ばかり多くて、少しも樂しくない生活の仕方は妾達にとつて良くないと思ひますの。あそこであんな妙になつたのも、そりや妾達が愛し合つてゐる事なのですけれど。こんな「集り」は、戀も知らず、親しくならうともせず、神秘（ミステール）なんか無くともいゝといふ人々にだけ向いてゐるのですわ。妾は、不安で不安でたまりませんのですし、そして貴君はお困りなのですしねえ。妾はこんな必要があると云つて、ブロン夫人の様な方を、始終妾の傍に置く事も出來ませんし。ほんとに困りますわ前の様に寂しいですけれど、平和な生活をしませう、妾がその生活から貴君をお誘ひ出して了つたのですけれど。其様な生活が、妾達の愛の焰を養ひ、育てゐるのですから。きつとこの愛の焰は弱められたのも前に、浮か々した生活をしてゐたからなのですわ。何でも力強い尊い情熱は寂しみの中で出來るものなのですから。印象に殘る物は何一つとて無くて、種々な趣味の爲に、感情の力が鈍くされてゐる様な社交界には、何で壯美な情熱がございませう！　寂しいけれど平和な生活、これは妾憂鬱にもいゝだらうと思ひますの。この憂鬱は妾の戀と同じ所から出て來てゐますの。夫は、愛と悲しみと兩方を支へる貴女のなつかしいお顔なのですの！　其上妾は貴君が人の集る所で困つたり、茫然として、ゐらつしやるのを見るよりも、妾の心の底に貴君がやさしく、感じやすい方として、ゐらつしやる方が、どんなによいでせう！

其上、妾は、もつと人の知らぬ所へ、引き籠らねばならぬ様になる時が來るのでございます。もうこの望ましい時は來たでせうか？　それについては、其様な寂しい生活をしなければならないのですから、注意と、私の傾向とから見まして、前からそれに似た寂しい生活に慣れる必要があると思つて居りますの。あゝ、若し妾の犯した過ちが、償へる様になりましたら、どんなに善いでせうに。樂しい希望と申しますとそれは他日……ある事なのでございます。あら、うつかりと、申上げなくてもいゝ事迄申上げて了ひましたわ。變な事を申したのを免して下さいね。貴君が聞いていやな氣持をなさる様な秘密なんか、妾には無いのでしたわね。けれどこれだけは御存知ありませんと、妾達の不幸を釀した戀は、やつぱりその藥をも與へてくれなくてはなりませんといふ事でございますの。ねえ、宜い

やうにどうぞお考へになつて、御解釋なさつて頂戴。けれど妾にその事についてお質ねになつてはいけませんわよ。

書簡第卅四　右返事

Nó non vedrete mai
Cambiar gl' affetti miei,
Bei lumi onde imparai,
A sospirar damor.

（いな、いな、麗しき眼の我に嘆め息さすとも、いな永久に、わか戀の變らざるを見給はん。メタスタージセ）

ブロン夫人は好い方ですねえ！　あの時、親切にも私を助けて下さいまして、私はほんとに嬉れしく思ひました。ジュリイさん！　私があの時少しの間、貴女のおど〳〵した御樣子を見てうれしかつたし、斯慶事を云ふのをお許し下さつたのです。あの時は、私が生まれて一番樂しい時でした。ひそかに私達の方へお向けになつた心配さうな、又物珍しさうな貴女のお目、私の視線を避けて俯せてお了ひになる、貴女のお目なざしはほんとに樂しいのでした。其時に私は何をしてゐたのでせうか！　ブロン夫人と話しをして居ましたかしら？　貴女はさうお思ひですか？　いゝえ、いゝえ、私はもつと他の事に專念して居りました。私の心はどんなに欣こんで、貴女のなさる事を見つめて居りましたらう！　私の目はゐてもたまらぬ樣に又貪る樣にして貴女のお姿を見守つて居りました。貴女の愛、貴女の美しさ！　私の心はそれで一杯になりました、それで前後を忘れて了ひました。私は唯、愛する貴女をお苦しめして、貴女の少しも御存知の無い悅びを味つた事が胸にこたへて來ます。あの時、ブロン夫人が仰言つた事を私は覺えて居りますかしら？　又何を私がお答へしたかさつぱり知りません。私達か何を話してゐたか私もわかりませんけれど、ブロン夫人もおわかりになりますまい。考へる事もせずに喋り、よくも聞きもせずにして答へる男の言葉を、どうしておわかりになるものですか！

Com' uom che par ch' ascolti, e nulla intende

（聽く樣なれど、何一つ聞かざる人の如くに）

ですから、あの方はすつかり私を馬鹿にしてお了ひになつたのです。あの方は皆にきつと、貴女にも仰言つたでせう、私は常識が無い、しかも其上、才智が少しも無い、まるで本みたいに、口もきけない馬鹿な奴だと仰言つたのですよ。けれど何と仰言つたつてお思ひになつたつて、私はかまいません。ジュリイさんだけが、私の事、又私が保ち度いと思つてゐる品位については知つていらつしやるのです、さうでせう？他の人達は好きなやうに云はせて置きます。私は貴女に敬はれるこれが、私の價値の全部なんですから。

あゝ貴女は、ブロン夫人にだつて、又ブロンさんよりもつと奇麗な方にだつて、貴女の仰言る様に、私の氣を紛らはせて、私の心と日々を、一瞬間でも貴女から離させる事は出來ませんのですと御信じ下さい若し貴女が私の眞劍さをお疑ひになれるなら、又若し、貴女が私の愛に貴女の美しさにこんな死の様につらい誤りの言葉をお向けになれるのなら、貴女のまわりで起つた事を一々驗べた人を指し示めして下さい私は早速その人に聞いて、私の云ひました事がうそかほんとかとかを、確めますから……。星を消す太陽の様に貴女は他の若い方々の中に輝いておいでした。皆の騎士連(一)が皆貴女の椅子の周りに集つたのに、私が氣がつかなかつたでせうか？　貴女のお友達や外の女の方がいらつしやるのにもかゝわらず、あの人達が貴女の美しさを賞嘆してゐなかつたでせうか？　彼等の熱心な嘆賞や、尊敬や、丁寧さを私は見なかつたでせうか？　又私は、貴女がこれ等を皆、簡單に無關心に——これは大仰にやるのより人を壓する力があるものですが——うけてゐらつしたのを見なかつたでせうか？　又立食の時に、貴女が手袋をお脫りになつて腕をあらはにお出しになつたために、貴女を見つめてゐる人達に起つた結果に、私は氣がつかなかつたでせうか？　接吻しようとして貴女の手袋をめくつた、ある知らない男に、貴女がそれをお許しになつたのを私が見て居なかつたでせうか？　又もつと、面の皮の厚い——そのじろ〳〵見る目には私は、血を吸はれ、生命も縮まるかと思つた程の——奴が貴女に、貴女もそれとお氣付きになつたのですが、肩掛をかけて、ピンで止めてお了ひになる様におさせしたのも私は見てゐなかつたでせうか？　貴女のお思ひの程私はほんやりとはしてゐませんでした。以上の事は皆私は見てゐました。ジュリイさん、けれど私は少しも妬み心なんか抱きませんでした。何故と申しますに、私は貴女のお心を知つて居りますもの、貴女のお心は、二度も戀をする様な、移り氣の人達のものではありませんから。貴女は、私の心も移り氣が多いと仰言いますか？

仰言る通り、あの寂しい生活に還りませう。元來私はその生活を離れる時には辛い氣がして居りましたのです。えゝさうですとも、人の心は交際社會のさわがしい中では養はれるものですか！　私達はこの社會の洞ろな歡びを見てはなほ更、誠の無い生活が苦がい物となります。私達の心は仇な遊樂よりも苦しみを選びます。けれど、ジュリイさん！　實際今迄私達の生活して來た苦しさの中には、何かしらん固い所たまらぬ所があり、又あり得たと思ひます。貴女は忘れてゐらつしやる様です。十五日間、すぐ間近に居りながら、見合ふ事も、云ひ合ふ事も無しに、居るなんて——あゝ戀に燃えてゐる心が、此様な長い間に如何すれば良いと貴女はお思ひなのですか？　會はずに居るのだつて、惡魔に辛らくは無いのですに。あんなに注意深くして居たつて、豫想以上の苦しみをを起す様な風では、何の役にたちませう！　この様な苦雜のみある生活を長くつゞけたつて、何の役にたちませうか？　むしろ一瞬間見合つて、死ぬ方がそれより優つてはゐないでせうか？

申上ますよ、私は、貴女が私に匿してゐらつしやる、あのやさしい秘密を探ねあて、考へあてゝみます

よ。何故と申しますに、こんな面白い事は、生まれて初めて私は感じますのですから。けれど今迄の所どうもわかりませんねえ、やつてみても無駄でした。むしろ私は仰言る通り默つて居りませう、そしてむら〳〵起る好奇心を抑へて居りませう。けれど、私はそのやさしい秘密を尊敬致しますが、少しも其れについて、わかつてるないのですからねえ！　けれど兎も角貴女の御計畫が、架空的なもので無い樣に、それを希望します。私の一生の友のジュリイさん！　ほんとにそれを實現する樣にしませうよ。

二日、申上げるのを忘れましたがロガン氏はサルジニヤの王の爲に編成された軍隊の中の事務に職があるから、どうかやつてみないかと云はれました。私は全く、この親切な士官には感じました。で、私はお禮を申して、私はその樣な役目には經驗も乏しく、其上、私はもつと勉強したい氣持がしますから、こんな氣持では到底その樣ないそがしい役目には不向だと思ひますからと申しておことわりしました。これについて、私は決して戀の爲に犧牲を拂つたのではありませんよ。私は斯う思つたのです、つまり、誰でも其生命と其血潮とを祖國から受けてるる。故に身を賣るとまでゆかなくとも、緣も由かりも無い他國の王樣に仕へるとか、又は賤しい傭兵を天下晴れての立派な事と思ふ樣になるのは、許されないと思つて居るのです。この訓誡は私の父の云つた事なのです。ですから彼の國に對する又義務に對する愛を眞似度く思つてるるのです。父は、外國の王樣になんぞ誰にも仕へてはいけない、と申しました。けれど一七一二年の戰の時には、父は祖國に對して立派に働きました。彼は幾度も戰ひに出まして、到頭一度傷きましたけれども。ウ井ルメルゲンの戰ひでは、サツコネツクス將軍の目の前で、父は、幸にも敵の軍旗を略奪した事があります。

註　(一)騎士とは今日の紳士といふ古語。

書簡第卅五　ジユリイから

ブロン夫人について冗談半分に申した事があんなに、眞面目に說明をされるとは思ひませんでした。確な事がまるで反對な結果を惹き起す事が屢々あるものでございますね！　それと云ふのも、つまらぬ物にばかり、目を注いで居りますと、自然つまらぬ物をも重要視する樣になりますものです。けれどもこんな事は妾達に起り得ない事でムいます！　何故つて、いそがしい人の心は決して、細かい事をくどくど申すものではございませんから。けれど戀人達が何でも無い樣な事にでも色々と惱みますのは、實際考へるより、遙かに、確かな理由があるものでございます。

このつまらぬ事のために、妾達の間に一寸、妬みの爭ひが起つても、妾は怒りは致しません、夫は妾にとつて不幸にして重大な事なのですから。

妾は、妾達の魂の抱擁や、妾達の趣味の一致やに由つて、戀といふものが妾達の生活にとり重大なものだといふ事を知つて居りますの。一度戀が、妾達が受けた樣な深い感銘を起す時には、他の情熱をすべて

消して了ふか、焼かして了ふかしなければ止みません。少しでも悪がつれなくなつて来たら、其れは、死の悩ましさとなるのですもの。戀が消えますと、打ち勝ち難い嫌悪の情や、長い〳〵つきない倦怠やがそれに引つゞくのでございます。ですから、愛するのをやめて了へば、もう、到底、妾達は生きては生けませんわ。妾にとつては、貴君も御感じの通り、今の狀態の恐ろしさを匿くすのは、唯戀に感激してゐる事の外無いのですわ。ですから妾は夢中になつて戀をするか、苦しんで死ぬか、どつちかですわ！　妾は一體妾の生活の幸不幸について、眞面目に討論が出來る資格があるのでございませうかしら？

妾自身を批判してみればみる程、妾は時々空元氣をつけてゐますけれど、ほんとは、夢中になんかなれぬ質の樣でございます！　私の苦しみの源を探つて、見出す爲には、まだ〳〵中で苦しみを旺んにしてみなくてはなりますまいと思はれますの。其上妾は、罪は總て、知らないで作されるものでないといふ事を信じさゝれてゐますので、辯解なんかするより、むしろ思ひ切つて苦しみ度いと思ひますの。そして假令へ、少しでも心に拓み心があれば　其樣な性質は思ひがけぬ事になるものでございます。妾はこの危ない傾向を妾の心に感じて恐ろしく思つて居ります。貴君のお心が妾の心の爲に造られて、他の人の心の爲に造られたのでないといふ事を知らないのではございません。けれど、人といふものは、自分を衰弱させつゝある情熱に浮いた趣味を抱くものでございます。又戀をする氣になつて、空想をのみ馳らすものでございます。又一方、貴君が貴君自身を志操の無い、移り氣の奴だと、お思ひになれば、從つて妾は貴君を不忠實な女だと云つて、お貴めする事が立派に出來ますわ。この色々な恐ろしい疑ひが妾の生活に毒を注いで居りますの。出來る事なら妾は、自分を悲しまずして、嘆息し度いのです、絕えず愛せられて、死にたいのですわ。

お願ひですから、ある不幸の事をよく考へて、妾達の考へを決めませう！　この不幸、それを思ふだけで、妾はふるへて了ふのですけれど。誓つて頂戴な、あの上皮ばかりな誓ひを戀の名でせずに、名譽といふ聖い名によつて！　貴君も尊んでいらつしやる名譽によつて、妾が貴君の永久かわらない心を打ち明けて話してもいゝ人であるといふ事と、何か變つた事が貴君のお心に起つたら先づ妾が第一に夫を知る樣になさるといふ事をお誓ひになつて頂戴！　妾には云ふ事は無い等とはくれ〴〵も仰言つちやいやよ。お願ひです、是非ね！　けれど本當に妾が氣狂ひの樣になつて恐れるといふ事を考へてお忘れにならないで下さい。そして、恐ろしい未來が無い爲に、どうぞ　現在の安泰といふ事をもお約束の中に入れて下さいまし。妾は空想で、色々と考へを廻らして煩悶するよりも、貴君から、妾のほんとの不幸をお伺ひした方が隨分良いと思ひますの。少くとも貴君の後悔にも御同情出來ますわ。若し貴君が妾の情火を共有なさるなら、妾の苦しみをも共になさつて下さい。さうすればお胸に流す涙も前よりは辛らくはありませんわ。

斯う致しますと、妾は二重の良いものを得た理になりますの、一つは妾達を結びつけたやさしい關係と一つはそれを安んぜしめる、心の正しさがさうなのです。これが純粹に感情ばかりの事件の中で働く智慧

の法則なのですわ。これがやさしい戀の苦しみを遠ざける、嚴しい德のする所なのでございますわ。若し妾が何の定見の無い戀人を持つて居たとしましたら、如何に其人が妾を永久に愛してくれると申しましても、何處に妾は其志の確かさの證據を求め得ませう？　絕へず輕蔑する事になつて、そこから妾の身を拔く方法も無くなつて了ひませう。どうしてその人の見かけによつて又妾の輕信によつて妾が惱まされないと申せませう？　けれどあゝ貴君は、そんな方ではありません。貴君は技功を衒らす事も取繕ふ事もお出來になりませんけれど、貴君は、お約束なさつた樣に誠實を以つて妾に對して下さる方なのですわ。貴君の正しいお心は妾との約束について、不忠實である事なんか到底出來るものではございません。けれど若し貴君がジュリイをお愛しになれなければ、斯う仰言つて下さい……ゑゝ斯うですよ「ジュリイよ、私はお前を……することは出來ない」と。けれども貴君！　妾はどんなことがあつても此の語は決して書きはしませんわよ。

この方法についてどうお考へになつて？　これは、妾から妬み心を取り除く唯一つのものですの。そこには、何と申しませうか、貴君の信愛や、貴君は決して不忠實な事をなさる方では無いといふ信じさせる或る力がございますの！　これが妾が貴君にして頂くお約束の結果なのですよ。何故つて妾が貴君を氣の變り易い戀人と思ふ樣になりましても、人を欺く樣な戀人だとは思ひませんわ。妾が貴君のお心を疑ひ得たにしろ、妾は到底貴君の誠實は疑へませんから。けれどこんな事をしても無駄であつて、大した事件も起らなかつたらどんなに妾は嬉しいでせう！　こんな忠實な貴君と共に、嫉妬心に關してお話しし合ふのは樂しい事ですわねえ。これも貴君が忠實な方なのだからなんでございますわよ！　妾の心は種々な事件にぶつゝかる程にまだ強く賢くはございませんの。少しでも疑ひの情が萠しますと、もう、心はすつかり亂れて了ひます。

これらの事は今晩一緒にお話し致しませう。今晩、貴君とそのお弟子である妾達二人が父の所で一緒に御飯を戴くのですからねえ。新聞へお出しになつた貴君の博學な記錄はすつかり父の氣にいつたらしく、今晩お呼び致すのも父は大贊成なのでございましたのよ。妾はクラヴサン（譯者註―十六、七世紀頃流行した樂器。現在のピアノの原始的のもの）の調子を合せて置きました。父樣はランベルチを色々と見ていらつしやいます。（譯者註、ランベルティとは十七、十九世紀にかけて生きてゐた佛國の女流教育家）妾は多分クラランの森で教へて頂いたのを彈きますわ。今始つた事では無いですが、實際貴君はいろんな事を御存知ですのねえ！　ドルブさんだつて、御考への通りいらつしやいますわ。あの方はネーブルスの王樣の歸順について六ケしい演說をなさるさうですから、其間に妾達三人は從姉の室へ參りませう！　其處で貴君は貴君のダーム（譯者註　中古の武士（騎士）が貴婦人の愛をうけるのに皆へたのであらう）であり貴君の戀人である妾の前に膝をお衝きになつて、妾の手の中にお手を入れて、大法官（シァンスエリー）の前で、どんな苦難があつても信と正とは守るとお誓ひ下さいませね。守る事も、又それかと云つて破る事も出來ない樣な誓である、永久の愛等をお誓ひになるのでなしに、眞理、と眞心と、犯かす事の出來ない潔白さをお誓ひ下さいませ。始終從

顧であるといふ事をお約束なさるよりも寧ろ、人の心を裏切る様な事はしない、男らしく何でもやるとお約束なさつて下さいませ。斯うして、貴君は昔の武士と同様に式をお了へになつて、無二の臣下と認められ、正しい騎士におなりなのです。

さよなら、今晩、御一緒に御飯を喰べるのを思ふと、うれしくてたまりません。あゝ、ほんとに樂しいように！

書簡第卅六　ジユリイから

この手紙に接吻をして下さい。お告げしようとするこの慶事を悦んで頂戴！　えゝ勿論妾だつて嬉しくてたまらないのですわ。父様がその裁判の事でベルヌへ行らつしやらなくなりましたの、ベルヌからお金の事で今度はソルールへ行らつしやるのですが、お母様にも「行かう」と、仰言いましたの、所がお母様もお體の爲にどこか氣候の變つた所へでも行かうとお思ひになつたのでせう御承諾になつたのですの。妾を連れて行かうといふ事になつたんですが、妾はどうも返事に困つて了ひましたのよ。けれど車の都合で妾は行かない事になりました。皆が行けないで氣の毒だと云つて慰めてくれるのですの。妾は悲しい風をしなけりやなりませんでしたわ。けれど其時に心にも無い風をして居りましたのが、後悔めいた感情が起りほんとに悲しくなつて了ひましたのよ。

お父様お母様の御不在中だつて、妾は家の主人とはゆきませんの。けれど妾を從姉の父様の家へ預けて置くのです。ですから矢張妾には家は出られませんわ。其上お母様が、其小間使をつれてゆく事は要らないと仰言つたので、バビは妾の用をしてくれる事になりましたの。バビはアルギュスの人で別にあぶないんではありませんわ。勿論忠實な誓ひを破らない女ですの、けれど、何か少しやつたり、氣に入つた様にしてやれば、妾達の希望通りに、妾達の傍へは來ませんわ。

ねえ、ですから、これから先十五日位はやす〳〵とお會ひ出來る筈ですわ。けれど、矢張今度は窮屈の代りに愼み深くしなければなりませんわ。前と同じ様に、遠慮深くする必要はございます。從姉の家に居りましても、前よりも、繁々といらつしてはいけませんわ。其上、妾が女で、貴君が男である事も、居る家が自分の家と違ふといふ事をもお考へになつて下さいまし、ほんとに心の正しい人には、戀は安心を與へる友情に對する尊敬は念頭に置く可き事である位はおわかりの事ですわ。妾は貴君の熱情を存じて居りますが、それにはやはり、記す事の出來ない限りのあるものだといふ事も存じて居りますわよ。心の純なものに對して貴君が今迄何の犧牲となさる事と出來なかつたのでしたとしも、貴君は今はこんな風ではいけませんよ。

この不愉快な樣子や、悲しさうな目はどこから出て來るのでせうか？　貴君は義務が課する法則がおいやなのですかしら？　何でもよございますから、ジユリイにまかせて下されば良いんですよ。貴君は今迄

妾の聲に從つて後悔なすつた事があつて？　ヴヴェーズ河の源が發して來る所の花の咲いてゐる丘の近くに寂れた村がありますの。この村は度々獵師の行つて休む所ですけれども、戀人達が人目を避けて語り合ふには絕好の所と思はれますの。ドルブさんがお建てになつた主な家の周圍には可なり離れて所々に、百姓の小屋（シャーレー）がちらばらつて居ります。その小屋は其藁屋根で、田園的な素朴を好む愛と平和とを生む樣に出來て居るのでございますの。心持良い、さゝやかな乳小屋は、他人に大丈夫秘密を匿くせますわ、何故と申しますに、乳小屋自身がある秘密を望んでゐる樣なのですから。野を流れる小河の岸邊には、氣持の良い灌木や、繁みがございますの。森は深くて他の所よりも遙かに人氣の無い、ほの闇い、かくれ家を遙かな向ふで與へてくれますわ。

al bel seggio riposto, ombroso e fosco,
ne mai pastoui acquessah, ne bifolci.
（羊飼ふ人も、野を耕すものも、このなつかしき
家か蔽ふ深き木の闇に近づきし事なし。ペトラルカ）

どんなに強めて探したつて其處には氣がかりになる樣な所は一つもありませんの！　何處にでも、皆が同じ母に抱かれてゐる樣なやさしさしか無いのです。えゝ其處では其萬物の母に庇護されて其命ずる儘にするのですわ。ドルブさんの申し出もあるので、クレールさんは、叔父樣に說いてお友達と一緒に二三日間この附近で獵をなさる樣におさせになつたのです。そして叔父樣がお離しにならない妾達も行くのですけれども、妾達は又妾達で離れる事の出來ない方をおつれしますの、ねえおわかりでせう。一人は先生の貴君、一人は妾に小屋を借して下さる人なのです。この小屋は、愛で淨められて皆にはグニード（譯者註―グニードともいふ、カリー地方にあるヴィナスの寺院）の寺院の樣な尊く見えませう！　この樂しい企畫をうまく、安全にやる爲には一寸と打ち合せをすれば足りますわ。えゝ御相談するのすらもう樂しみの一部分ですわねえ！　さよなら、今日はこれでよしますよ。えゝ妾の心はもう、小屋の方へ飛んで行つて了つた樣な氣がしますの！　忘れたからこゝで、申上げます。つまり、妾達は愼しみ深くさへすれば毎日お會ひ出來ますわねえ。つまり、二日に一度は從姉の家でもう一度は散步でね！

註　（一）木造家屋の一種で、山國でチースとか其他乳から色々なものを作る家譯者註スキスには殊に此種の家屋が多い。

書簡第卅七　ジユリイから

お父樣達は、あのやさしいお父樣と、あの他に無い樣ないゝお母樣とは妾といふ、あの方達のお情にも價ひない樣な娘にいろんな慰めを仰言つて、今朝御出發になりました。妾は、お母樣達にお別れの接吻をする時少し悲しくなつたのですけれど、この心の底の方では、この愚知らずな、戀慕的な心は賤しい欣び

を思つて、波打つて居りましたわ。あゝ！　お父様方のお目の前で無垢な賢い生活をした時期は、妾がお父様達のお胸の唯一の寶であり、又妾がお父様達から離れるのが辛らかつた時期はどうなつたのでせう！　今は、どうでせう！　妾の心には罪がありますむ〳〵して居ます。あの方達の事を考へると妾は慄えて了ひます、妾の事を内省しますと、恥かしくなつて了ひますの。妾の持つてゐる玄派な感情は皆無くなつて了ひました。そして妾は無駄な役の無い、悔ひに身を盡してゐるのでございます。えゝこの悔ひは誠の後悔から何の生氣をも與へない、仇な悔いなのでございます。こんな苦しい事を考へてまへりますと、あの方々にお別れするのが餓に、悲しくなつて來ました。バビが、荷物を作つてゐる間に妾はお母様のお室へ自發的に這入つて行きましたの。そしてまだとり擴げてある着物が御ざいましたので、一つ一つに妾は接吻を致しました。そして涙にくれて了ひましたの。斯うやつて泣いて了ひますと少しは氣が輕くなりました。そして自然のやさしい力はまだ妾にはあつたのかと思つて少し安堵致しましたの。あゝ、暴君と申しませう！　貴君は、このやさしいそして儚りに弱い心を皆、御征服なさらうとしても駄目でございます！　どうしたつて、貴君のお力がどの位だつても、妾の心には少くともいくらかの正しい感情が殘りますわ。妾の心は貴君のお力よりもつと聖いお力を敬ひ、又愛するのでございます。

お許し下さいまし、貴君！　こんな事をついつい申上げまして！　妾は斯うやつて反省して總てに及んだのでは厶いませんの！　妾達の戀が一番自由であつた妾達の生活の時はもうありません。妾はさう思ひます。たゞあるのは後悔の時だけでございます。妾は貴君に苦しみを匿くしたり、貴君をお苦しめしたりなんかしようとは少しも思つては居りません。貴君はそれを理解なさつて頂戴！　そして苦しみを保つたのでなく苦しみを和らげる爲に。若し妾の悶へを貴君のお胸に注げない時には、妾は誰方の胸にそれを注ぎませうかしら？　貴君は妾のやさしい慰安者ではいらつしやらない？　貴君が妾の定まりの無い勇氣を支へて下さるのぢやなくつて？　妾が德を失つた後にでも、妾の胸にそれを育てて下さるのは貴君ではないのでせうか？　貴君が居らつしやらなければ、貴君のやさしいお手が妾の涙をあの様に屢々拭つて下さらなかつたら、妾は遠の昔に死ぬ様な恐ろしい絶望に陷つて居りましたでせう！　けれども幸に貴君のやさしい、お心使ひが妾を助けて下さつたのです。貴君が妾を敬つて下さる間は、妾はとても、卑しい者にはなれません！　若し妾が輕蔑される外仕方の無い女でしたらば、貴君は妾をお愛しにはならないにきまつてゐると思つて居ります。むしろ悦んで。妾は從姉の所へ參ります、そしてあの人のやさしい心に、この深い悲しみをのべるのでございます。貴君は今晩妾の心に、その失つた、欣びと朗かさを再び得させる様にどうかいらつしやつて下さい。

書簡第卅八　ジユリイへ

いゝえ、いゝえ、昨日貴女にお會ひした時の様な貴女の悲しさうな御様子で、毎日私が貴女にお會ひす

る事は出來ません！　私の愛は、貴女の美しさと共に絕えず增し、生長するものなのですから。その上貴女は、私には豫想つかぬ新しい感情を絕えず私に與へて下さる泉です。あゝ昨夜は何といふ夜でしたらう！　貴女は私の心に、何とも云はれぬ不思議な歡びを與へて下さつたのだらう！　オー、魅する樣な悲しみ！　悲しむ心の寢れ！　貴女は、さはがしい樂しみ、浮き〳〵した陽氣さ、有頂天の欣ひ、戀人達の熱した慾求に、情交が限り無く呈する、總ての熱狂等を、貴女は何と、立派に超越して居らつしやるのでせう。官能の快樂には望まうとしても無い、平和な、純な樂しみ、貴女の人の心に浸みこむ樣な思ひ出はもう貴女のお心からは消えますまい。あゝやさしい兩人の美しい方がかい抱き合ひ、一人の顏を他の胸につけて、共にあえかな淚にくれて、あの美しい胸を、潤ひのある天の露が、開きそめた百合花を沾ほす樣に淚でひたしていらつしやるのを見た時、私は何と美しい有樣だらうと思ひました。いゝえ、私はうつとりして了ひました。私はあんなに優しい友情を妬たましく思ひました。その友情の中には戀にも無い美しさがありました。そして私は、ですから、私が興奮してるる爲に、友情の慰を亂して、仇なお慰をしてもどうかしらと困つて了ひました。いゝえ、いゝえ、貴女方のお慰めになる有樣程、世の中で愛のこもつたものがあるでせうか！　丁度二人の戀人の樣にしてゐらつしやる有樣が、私につらい感じを起こさせました。あゝ！　其時、若し貴女といふ方が此世に居らつしやらなかつたら、私は從姉さんに戀をする樣になつたかもしれません！　けれどもいゝえ、貴女の美しさはあたりの總てを包んで居つたのです。貴女のお召

物、貴女の身じまひ、貴女の手袋、貴女の扇子、貴女のお作りになつた物、貴女の周りにあるもの總て私の眼を打ち、私の心を魅しました。えゝ、貴女獨りがこれ程の魅力をお造り出りになるのです！　あゝジユリイさん！　この陶醉が進むと、欣びも感ずる事も出來なくなります。貴女から私か感ずるものは皆私を夢中にさせます。私は其爲に理性まで失くしやしまいかと恐れてゐます。少くとも私に、私の幸福となる迷ひを感じさせて下さい。私の戀について抱いてゐる考へよりも、もつと氣高く、もつと劇しい、新しい熱情を私に味はさせて下さい。貴女は、貴女が卑しい者におなりだなんて仰言るのですか？　あゝ情熱のために考へる力が無くなつたと仰言るのですか？　私はさうは思ひません。私は貴女は人間をしてあまりに完全な方だと思ひます。若し此の私の本體にしみ込む劇しい焰が、私を貴女の本體に結びつけ、私も貴女も同じ者だと感じたら、私は貴女を更に高尙なものと考へるでせう。いゝえ、世の中では貴女を理解する人は誰もゐません。貴女御自身だつて御存知無いでせう。が、私の心は獨り、理解出來ます、貴女の尊さを感じ、貴女を貴女に相當な位置に置くことができます。ジユリイさん！　若し貴女か美しくて愛されるだけなら、どの位の貴女に對する敬ひが減つた事でせう！　又若し貴女が天使の樣な方にすぎなかつたら、どの位貴女は、貴女としての價値をお失くしになるでせう！

どうして、私の情火は旺んになるのでせうか云つて下さい！　私は知りません、けれど感じます。何時だつて貴女の事は思つてゐますけれど、殊にどこへ行つてもどうしても、貴女のお顏がいつもより美しく

心に現れて、私を追ひ私を苦しめる様な日が度々あります。この前のお手紙でお書きになつた小屋（シャーレ）と一緒に貴女の美しいお姿は胸に刻まれて居ります。この小屋（シャーレ）の事を貴女がお話しになつてから、私はもう三度も町から出てみました、其度毎に、自然と足はいつも同じ方向に行きます。そして行く度毎に樂しい日の事がより欣こばしくなつて行きます。

Non vide il mondo ri leggiadri rami,
Ne mosse il vento mai si verdi frondi.

（未だ人、斯くの如き、いともやさしき林を見し事もなかる可く、
そよ風も、まだ、斯くの如き綠葉をゆるかせし事もなかる可し。）

私は、原は前よりも愉快さうに、勢よく、大氣も清く、空も朗かに見えます。鳥の歌もいつもより、やさしさと、愛情とをこめてゐる様な氣がします。水のさゝやきは、より強い戀の悶えを私に與へます。花の開いてゐる葡萄は遠くから、匂ひの良い香を送つて來ます。何とも云へぬ神秘な美しさが、總てを美しくて、私の感覺を誘ひます。大地が私に、私の崇めてゐる美しさ、身を盡くしてゐる情火にふさわしい新婚の床を飾つてゐるとも申されませう！　ジユリイさん！　私の魂の尊い半分である貴女よ！　このの春の飾りに早く忠々（まめ）しい戀人の姿を現してやりませうよ。洞ろな姿しか無い土地に悦びの感情を持つて行つてやりませう。さあ、自然をもつと陽氣にして遣りませう！　自然は戀の焰が無いと死にますよ。あゝもう三日待つのですか？　もう三日！　私は愛に醉つてゐます。歡びに心はときどき云つてゐます。私はやきもきして一日千秋の思ひで待つて居ります。あゝ神樣がこんな時に、その三日を取り去つて下さつたら、どんなに幸福でせう！

書簡卅九　ジユリイから

貴君には妾の心の理解出來ない感情がおありですのね。然し妾達より立派な人達が、苦しみ、惱んで居り、又妾がその人達の苦しみを考へて自ら責めて居りますの、ですから、もう餘り妾達のあの樂しみの事は申すのを止しませう。一緒にこゝに入れて置きました、手紙を讀んで下さいませ。けれど出來るなら平氣で居て下さい。妾にとりまして、その手紙の書き主が、やさしい良い娘さんなのを知つてゐますから妾は、悔いと、憐れみの涙を流して讀みましたわ。私の惡け心に對する後悔は妾の魂をひたして居ります妾の義務の最初のものを忘れたが爲に、外の事もすつかり忘れて了つたといふ事に氣がつきますと、妾は悲しみに耐えられません！　この手紙を書いた子供に世話をしてやると、前に約束しましたの、え、妾はお母樣の所で保護してやつてゐたのです。兎に角どうかかうかしてやつて居りましたのに、妾の事も氣にかけられなくなつて了ふ樣になりますと、妾は知らず〳〵に、あの娘をうつちやつて置いて居たのでしたその上、あの娘をどうして妾なんぞの思ひも寄らぬ危險な事に近づけて置いて忘れて、居りましたのです

もう二日遅かつたら、妾の大罪となり、他日一家の立派な母親となる質朴な、賢いあの娘が貧乏と、誘惑で身を滅して了ふ所であつたと考へますと、もう妾は恐ろしくなつて了ひますの！　ね貴君！　貧乏してゐるのをつけこんで、心のみが買へる愛を、金で得ようとし、愛のやさしい接吻を、肉慾に飢ゑた辱で享け様とする人がどうして此の世の中には澤山居るのでせう！

貴君はこのファンションといふ娘の孝行について、其の正しい感情に、その無邪氣な醇朴さとに、感動なさいませんの？　貴君は其戀人を安んじさせ様と身を賣つた男の様なやさしさに感動なさいませんの？しつかりした緣を結ぶ爲につくしてやるのに、貴君は御不滿なのですの？　あゝ、若し、妾達が人に其仲を割かうとされてゐる二人の心を見て、何の哀憐の情を起さなかつたら、誰からあの人達は救ひを求めるでせうかしら？　妾はあの人達に對して、盡してやつて、妾の犯した罪を償はうと決心しました。そして此兩個の人達が結婚出來る様に盡力してやらうと心に盟ひました。神様も此の企てを祝して下さる様にお願ひ致します。そして又此企てか妾達にとつてもやはり、良い占ひである様に祈りましたの。妾は貴君にどうぞ今日か、少くとも明日、ヌフシァテルに行つていたゞき度いと申します、えゝ、おねがひ致しますわ。そして、メルヴェィューさんと御相談なさつて、あの正直な男に暇をお出しになる様にして下さらないでせうか！　えゝ、うんと言つて下さい、お金もいくらでも出しますから、そしてファンションの手紙をも持つて行つてやつて下さいな。この娘には、ほんとにどんな人だつてホロリとさせられますわ。つまりですから、妾達に少し位損がありましても、つまらないでせうとも、お金がかゝりましても、クロードアネに確に先方で暇をくれると明かにわかつて初めて歸つて來て下さい。そして戀をしてゐてもこの様に清い欣ひはめつたにないのだとお思ひになつて下さいね」

そりや、貴君にだつてこんな事をするのに反對なさる理由はありますけれど、妾も貴君より先にこんな事をするのに反對してみたのですわ。けれど、妾は無理にでもやり通しますわ。何故つて、德といふ字が味の無いものであつてはいけませんわ、德は犧牲を要求しますわ。今、あの田舍での會合は出來なくともあとで其千も萬も出來るのですから。數時間の欣びは輝きの様に忽ち消えて了ひ、もうそれつ切りですけれど、兩人で正しい事をする幸福は、貴君のものなのですから、其上未來の事も考へて下さい。ほんとに、幸福に人をしてやるなんて、稀にしか出來ない事ですわ。これをしないでゐる罪は、もう再び其様な機會を得られないといふ事ですの。これをしないかするかで、妾達の心には永劫の悔いが殘るか、永劫の欣びが殘るかどつちかなのです。つまらぬ事をむやみと申上げて、生意氣だと思召すなら、お許し下さいまし。心の美しい方には云ひ過ぎましたわ。貴君が他人の苦しみに對して妾達の心を堅くする様な、むごい感情を大嫌ひでいらつしやる事を妾は知つて居りますの。どうぞ斯う仰言つて下さいませ「人道の義務の爲に樂しみの一日を犧牲にする事が出來ぬ様な人に呪あれ」と。

書簡第四十　ファンション・ルガールからジユリイへ

お嬢様。

どうなるかわからずに、絶望に沈んで居ります憐れな娘が、貴女様のお情けに又してもおあまへするのをお許しになつて下さいませ。貴女様は、可哀想なものを前から絶えず助けてやつておるでございますそして妾は、こんな哀れな者でございまして、御迷惑でございませうが、お訴へするのは神様と貴女様だけなのでございます。貴女様のお蔭で前に働いて居りました所から離れるのは、困る事なのでムいますけれど、昨年の冬母を亡くしましたので、中風で病みついて居ります父の所へは、どうしても行つてやらなければなりませんのでムいます。貴女様が母に仰言つたお言葉は妾はまだ覚えて居ります「正直な男の人を見つけて、身を立てゝ、家庭を與へる様に」つて。貴女のお父様がお連れ歸りになりました、クロードアネは、大變親切な、しつかりした、又確かな仕事の出來る人なのでございまして、妾が幸福になれる様にと骨折つてくれます。あんなにお助け下さつても、妾は何一つお役に立たず、あの冬も妾達を養つてくれたのはあの人なのでございます。來春には妾と結婚致す事となつて居ります。あの人は結婚を樂しみにして働いて居りますのに、妾は、三年の家賃の滯りに責められて、どうしたら其樣な大金を現金の儘、得られ樣かと、もう途方に暮れて居りました。所があの人は、氣の毒にも、妾には何一つ云はず、更に又メルヴエイユー樣の商會に傭はれまして、其賃金を持つて來てくれるのでございます。そしてメルヴエイユー樣ば七、八日の內にヌフシアテルをお發ちになるのでございますし、クロードも三、四日の內につれられて行かなくてはなりませんのでございます。でございますから、妾達は結婚する暇も、又お金も一文も無いのでございます。若し貴女樣か御前樣かの御信用で、五六週間の期間を延す事が出來ましたら、其間に結婚する爲にもどうか致しませうし、あの人も金を拂つて戻つても貰へると存じます。けれど、あの人は、一旦妾にくれたお金は自分ではどうしてもとりませんのでございます。

今朝方、一人の立派なお仁がお見へになつて、お金を澤山やるから、どうしろかうしろと仰言いましたが、漸くの事でおことわりすることが出來ました。その方は明朝最後の決心を聞きに來ると仰言つてお居でゞございました。そんな事をなさらなくとも、お斷りしたのでございますからと申しましても……あゝ神樣にお委せいたしませう！　又あの方は明日いらつしやるのでせう。あの方の云ふなりになりましたらさぞ、妾も憐れな人達を救へませうけれど、あんな事を致すのは苦しむのより賤しい事でございます。それにクロード、アネは人の妾をした娘等には到底不向な立派な心を持つて居る人なのでございますもの。

勝手な事を申しまして、お許し下さいまし。妾の苦しみをお訴へするのは貴女樣だけなのでございます妾はつゞけて書けない程、悲しいのでございます。どうぞお願致します。ファンション、ルガール。

書簡第四十一　右返事　（ジュリイからの）

妾はすつかり貴女の事を忘れてゐました、貴女はそんなに氣兼ねなどしなくてもいゝですのに、貴女は妾に對する信用をお忘れでしたのねえ！　え、兩方が悪いのですけれど、妾の失念は免されませんわ。妾は詫る積りで一生懸命にやりますわ。此手紙を持つて行つたバビに、急な御用のお金は言つて下さい、あの人が少し持つて行きましたから。バビは明朝又貴女の所へ行つて、若し其紳士が來たら、貴女がおやりなさつた様に追ひ返へさせますよ。午後妾も行きます。從姉と一緒に、何故つて、貴女は可哀想な貴女のお父様を離れる事なんか出來やしませんわ。それに、妾は、妾自身で、貴女の家の様子が知り度いのですからね。クロード、アネさんの事については心配なさるのはおよしなさい。父は不在ですけれど、歸つて來たら、出來るだけの事はして貰ひますから。ほんとに妾は、貴女も、あの良いクロードさんの事ももう忘やしないのだと信じて下さいね。さよなら、大事になさい。貴女は見も知らぬ人達の厄介になるのをよして、ほんとに良い事をしました。ほんとに人の心に、まだ美しい所が少しでもある以上は、そんな事はしてならぬ事ですからねえ。

書簡第四十二　ジユリイから　（其戀人から）

お手紙拜見しました。直ぐに私は出發します。これが私の出來る唯一つの御返答です。あゝ、けれど酷い方だ！　この様な苦しい「德」があらうなんて思ひもかけて居ませんでしたのに、その「德」は貴女が私にお課しになつたのですけれど、私には辛いものなのです。けれど、御命令ですもの、私は從はねばなりません。貴女に敬まはれるには、私は千遍も萬遍も死んでもいゝ筈です。

書簡第四十三　ジユリイへ

昨朝私は、ヌフシアテルに着きました。メルヴェイユーさんは田舍の方に行つてお居でだと聞いたので私はそこへ探しにまゐりました。獵をしてお居でだつたのです。私は夕方漸くお會ひ出來ました。私が斯うやつて來る理由や、クロド・アネ君に暇をやつて貰ふについてどの位お金を差けませうかなどとお願ひした時には大分困難でした。私は、私自身で其金額をどんどん嵩めてゆきました。そして相手が、「いやいや」といふにつれて更に金額は高くなりました。けれど、どうともならないので、明朝はどんな金を拂つても、どんな面倒をしても、又どうしても、氏を捕まへて談判してやらうと、其日はそれで別れて了ひました。今朝この爲に早くから起きて、馬に乘らうとして居りました時に、メルヴェイユー氏から使が來てクロードに暇をやれる、しかも素的によい條件をつけてやらう、といふ手紙を受け取つたのです。手紙は次の通りです。

「貴君の御相談の件、私は、お金と引き換へで其様な事をするのはいやです。貴君の御親切なお心根に感じて御望み通りにします。私は善い行ひに、金錢でどうかう出來る等とは夢にも思はず、又潔しとしないといふ事を御承知下さい。

貴女も御歡びと思ひますが、其時の私のうれしさも御想像下さい。さうです、とも欣こばしくない筈なんかあるものですか！　私はメルヴェイユー氏の所へ行つて、お禮を云ひ、正當なだけのお金を支拂はずには居られませんでした。若し話がつかず、もう一日止まらなくてはならずばどうなつた事でせう！　私は兎に角貴女のお氣に召す樣に行ひました。私はこんなこと位には堪へられます。愛する人の爲に仕事をして愛と德との美しさを一緒にするのは何と樂しい事なのでせう！　白狀致しませう！　私は、出發致す時にはもう心が焦燥と懷疑の念で一杯でした。私は、他人の苦しみに、貴女がどうしてこれ程に感じ易くていらつしやるか、少し腹が立ちましたのです。少しも私の苦しみについては考へて下さらず、丁度私だけが世の中で貴女に何もして頂けない者の樣にして……氣をつけて下さらなかつたのがつらかつたのです。あの樣な樂しい空想に耽つて居りましたのに、貴女が必要も無いのに、私にお見せびらかしになつた樂しみを急に取除いてお了ひになつたのには、私は隨分ひどいとも考へました。けれどもう、こんな不平は消えました。其代りに私の心には無限の滿足した氣持がわいて來るのに氣がつき出しました。私は貴女のよく仰言つた償ひはもう充分に出來たと思ひます、貴女は、善い行ひをする事に、欣びをお感じになる習慣がおありなのですねえ！

貴女の御威勢は何といふ不思議なものでせう！　其處では難澁も甘美であると共に快樂ともなり、又貴女のお爲にする事の中に自分自身を滿足させるときに發見するその歡びが感じられるではありませんか！　あゝ！　貴女は天使です！　私の魂にこんな力をお及しになる、貴女の魂はきつと人間以上の尊さがあるのでせう！　貴女の力は天のものですもの、どうして、この力は永久貴女のもので無いでせうか？　貴女を救ふからには、何うしたつて、貴女を愛せずに居られませう！

二日、勘定してゐますと、まだお母樣のお歸りまでには、少くとも五、六日あります。この間に小屋に行く事が出來ますまいか？

書簡第四十四　ジユリイから

お母樣達が急にお歸へりなつたのですけれど、そんなにお嘆きにならないで頂戴！　何故つて却つて妾達の爲にはなるのですもの、うまく假令、あの樂しみにしてゐた事をやるにしましても、きつと成功しなかつたに違いありませんわ。ねえ、妾達が空想だけに躍られて行つたら、どうなるかお考へになつて下さいまし。若し行く事にしますと、妾は丁度お母樣のお歸へりの前の日に田舍へ行く理ですね。そして碌々お會ひもしない内に電報が來る事になり、貴君には何も申上げる事も出來ずにいそいで妾も歸らなけりや

なりませんでしたらう！　さうすれば貴君はどんなにお苦しいでせう！　其上、兩人で田舍へ行つた事は皆に知れて了ひませうし、知れなくともきつと疑はれますわ。現在の不謹愼な慾求は、未來の爲の糧を失くして了ふものです。爲なければならぬ事を果さずに居るのは一生の苦しみといふものでございますもの　まあ、今の有樣を、ほんとの妾達の狀態と較べて考へて下さいまし。第一貴君がいらつしやらなくなつてからは、總てがいゝ結果になりましたのよ。アルギユスも母樣に、貴君を、お從姉樣の處では稀にしかお見かけしなかつたと申しませうし、お母樣も今度の貴君の御旅行と其目的とを御存知なのですもの、夫は貴君を尊敬致します一つの原因でもありますわ。貴君は、賢い人は、會ふ爲には、少しの不自由な時も意識的に求めるといふ事を御考へにはなれないでせうか？　人から疑はれるのを避ける爲に妾達は隱介人の目を眩ます事をしなくてはなりませんわ。そして、妾達がやつてもいゝ唯一の策略は人に私達が務めてやつた善い事を、無意識にやつたのだと、とられる樣に、妾達を人の思つてゐる以上に正しい者にする必要があるといふ事でムますの。この樣にして匿された戀は、それを味ふ者にとつて、樂しいものたる事は明でございませう！　其上に、不幸な戀人達を結びつけてやり、幸福になれる筈の若者を樂しくしてやる事を妾達の務めと致しませう！　貴君はあのファンションを御覽になつたでせう！　奇麗な、可愛らしい娘でせう！　貴君がしておやりになつた事にふさわしくない娘でせうか、あの娘は？　あんな奇麗な娘で貧乏なのですもの、それにつけこむ人は居る筈ですわ！　クロード、アネも、あの生まれつきの立派な氣立で、三年間も身を粉にして働いたのですもの、外の者の樣に無頼漢にもならずに居たのですもの、もつと不幸になるなんて、ひど過ぎますわ。お蔭で、兩人は愛し合つて、一緒になれませう。あの兩人は貧しいけれど、助ける人はいくらも居ますわ。今迄も善い人達なのですもの、先もやはり善い人達として生きて行きますわ。お父樣も、世話してやると、お約束なさいましたもの。妾が個人として貴君にお禮申す事は別と致しましても、貴君は御親切に、あの人達にも妾達にも幸福を與へて下さいましたわ！　これがほんとに、德に對してなす可き、犧牲なのですわ！　どんなにそれが辛らい事でも、すればきつと氣持の良い事なのです。ですから、善ひ行ひをして悔いる人は、見た事がありませんわ。

妾が從姉の事を離れられない人と申してゐる樣に、貴君も妾の事を說敎者と仰言るかもしれませんわ！　ほんとに、妾はほんとに職業としてゐる人よりも、そりやうまくは出來ませんけれど。若し妾習ひが玄人の人の譽より償ひが無いにしても、少くとも、妾の譽はあの人達のそれの樣に空つぽなものでは無いと思つて滿足して居りますわ。妾は自己辯護をして居るのではございませんのよ。妾を誠す樣な劇しい戀があればそれだけ、貴君の德に德をつけ加へ度く思ふのでございます。さうすれば、妾は妾自身を敬へなくなつても、妾は貴君に於いて妾を敬ひ度いと思ふのでございます。貴君は完全にお愛しになれば良いのです。總ては其處から生まれます。愛で排はねばならぬ事が澤山出來て行くのは、貴君だつて欣こんでいらつしやる筈ですわ。

従姉は、貴君がドルブさんについて、叔父様とお話しになつていらつしたのを知つて居りましたのよ。クレールさんもやさしい方なのですから、あの方とも、友情といふ意味で御相談もおかけしませう！　あゝ何と妾は幸なのでせう！　父、母、友、戀人！　妾は妾の困りのものを愛しても愛し切れません！　世のあるとあらゆるやさしい感情は皆、妾の心を求めに来る様ですの。唯妾は其の幸の内の一つしか味へないので残念ですの！

申すのを忘れましたけれど、明朝お客様があるのですの。夫は英國上院議員でいらつしやるエドワード・ボンストン卿です。ボンストン卿はジユネーヴに七、八ケ月許り御滞在になつて、お出でになりましたのよ。伊太利からの還りに貴君に會つたと仰言いましてよ。そして貴君が悲しさうにしていらつしたと申されましたわ。案外色々と貴君に就いて仰言つていらつしてよ。ボンストン卿は昨日はお父様の前で大變に又良い時に貴君の事を賞めて下さつたのですの。ですから妾も何か「いゝえ、貴君こそ」なんて獨りでに云つて了ひましたわ。ほんとにあの方のお話しの中には、常識も、興味も、熱もございますの。何か壯大な事件についてお話しになるときにはお聲が高かまり、お眉はあがりますの、これは、實際その様な事もお出來になる方によく起る現象ですわ。あの方は興味深かさうに趣味のあるお話し、とりわけて、伊太利派の音樂を尊いなどと迄に仰言つて色々な講釋をなさいますの。妾は死んだ弟と話して居る氣が致しますの。其上あの方はお話しの中に優しさと共に勢ひをお附け加へになりますの。ですから少しハラハラする程の

お氣をもお持ちです。さよなら。

書簡第四十五　ジユリイへ

前に旅行先で、貴女の第二番目の手紙を讀んで居りました時に、エドワード、ボンストン卿がいらつしやいました。澤山貴女に申上げる事はありましたが、どうあの方を批判して貴女に申上げませうか等と其時に思つたでせう？　互に滿足し合つた時には、人といふものは第三の事を觀察するものでせうか！　今貴女は私がどう思つてゐるかお知りなさり度い御様子ですから皆申上げますよ。

丁度、サンプロンをお通過になつてシオンにいらつしやつて、其處でジユネーヴからブリイグへ行く驛馬車に乘らうとなさつた時でした。閑居して居りますと、人は親しみやすくなりますが、其通りにボンスト ン卿も私に會ひにいらつしやつた理です。私達はすぐ親しくなりましたが、偏見の多い英國人が、孤獨を求めてゐる人と結ぶ間柄としては、實際珍らしい程でした。兎に角私達はよく一致しました。最初の會見で親しめさうな人だなと思つて其時から、莫逆の友となる事はまゝある事です。ですから、私達は八日位經つと、すつかり親しくなつて了ひました。えゝ一生交際しようと誓ふ程にです。丁度二人の佛蘭西人が八時間話した後、別れて了ふ迄は親しむ様に、あの方は私に旅の事を色々と話して下さいました。私もあの方が英國人で居らつしやるから、定めし建築や繪畫に就いて面白いお話しをして下さるだらうと思つて居

りました。其上、段々とお話しを聞いて行きますと、あの方は建築や繪畫だけを御存知許りでなく、風俗や人々の間の細かな事までもよく知つて居らつしやるといふ事がわかりました。殊にあの方は美術に就いて、明快に、けれど氣取る樣な素振りは少しも無く、愼しやかに澤山な事をお話しになりました。あの方は物を判斷なさるのに理窟よりも感情で、規則よりもその結果に就いてなさるといふ事を知つてうれしく思ひました、この事は實際、あの方が感じ易い心をお持ちの事を證明するに足る事です。伊太利音樂に就いては、貴女にお話しになつたと同樣大分御熱心の樣でした。そして私に、音樂まで聽かせて下さいました、何故と申しますにあの方は一人のうまい歌ひ手をお連れになつてゐて、又あの方のお附きの方が大變うまくヴァイオリンをお彈きになり、あの方自身も、可成り上手にヴィロン、チエルロをおやりになりました。仰言つた事によりますと、私の爲に殊に大變感情的な曲をお選びになつたのださうです。新しい音樂の調子がもつと馴れた耳でなければわからないにしても、又この樣にやさしい曲の力が、憂欝の中で私の大きな悲しみを拭ひ去つたにしましても、どつちにしろ、これ等の曲は私にはあまり面白くなかつたのです。成程、愉快な歌だとは思ひました、ほんとに、けれど、新奇すぎて又表現がまるで無いと感じました。

あの方は私について大分種々な事をお問ひになつて、私の境遇に興味を覺えていらつしやつた樣でした私は皆すつかり申上げました。あの方は英國へ旅行しないか、財産を作るにも好都合だ等と仰言ひましたけれど貴女の居らつしやらない國等へは私は到底行けません！　ボンストン卿は、冬はジュネーヴで過ごし、來年の夏はローザンヌで過ごすと仰言いました。そして伊太利へ又行かれる前にはヴヴエーに行くだらうと云つて居られました。つまり、お約束をお守りになつて、今回もお會ひすることが出來た理です。

あの方の御性質については、私の考へでは強くて、熱心なけれど、德のある、しつかりした方だと思ひます。あの方は哲學や、私達が前に御話し合つた種々な原理を知つて居らつしやるので、御自慢の樣ですけれど、ほんとの所は、私は唯理論的にお考へになつたに過ぎないのだと、其御性格からさう思ひます。其行爲にお現はしになる、生嚙りのストイック哲學は、唯あの方の御決心を立派な理論で飾るに過ぎないのです。私はけれど、あの方が屢々伊太利に來られて事業をなさつて、色々苦勞なさつたと聞いて苦しい氣が致しました。

貴女があの方の擧動に才氣のあり過ぎるのをお感じになつたさうですが、私にはわかりません！　勿論あの方の仰言る事、なさる事皆因襲的ではありませんが、それとて別にきびきびした新しい所は無い樣です。如何にあの方の外見が、其お心よりも開放的で無くても、又あの方がこせこせした樂しみを輕蔑なさる樣な方であつても、兎に角あの方は愉快にお附き合ひ出來る方に違ひありません！　あの方には、外形のみを支配するス井スの若い士官達が、佛蘭西から習らつて來る樣な愼み深い、禮節といふものは無くても、あの方は人道的な禮節をお持ちです。この樣な禮節は、最初の會見では仲々、其方の身分や品位を

はしませんが、全體に於いて人間といふものを尊び、重視するものです。あの方にについてすつかり申しませうか？　あの方には優しみが有りません、これは婦人方にお叱かりをお受けになる可き一つの缺點ですが、却つて男としては、あの方のいゝ所だと思ひます。ですから私は貴女が女でいらつしやるから、さぞこの事を理解なさらずに居らつしやると思ひました。

私は眞面目です。もう少し云はせて下さい。私は斯う申します、貴女は、私の權利をおだまかしになつても駄目です、又眞劍な戀はお說教で育てられはしません、と。あゝお約束をお果し下さい。何故と申しますに、貴女の仰言つた道德は皆善いと思ひます、けれどどんな事を仰言つたつて、あの「小屋（シャーレ）」行きは總てに優つて居るのですから！

書簡第四十六　ジユリイから

まア、貴君は又「小屋（シャーレ）」と仰言いますのね！　餘程「小屋（シャーレ）」のお話しがお心に殘つて居るものと見えますのねえ！　どうかしてあの事を片付けてしまはなくてはなりませんわねえ！　けれど、貴君がまだいらつしやらない所が其樣に貴君にはお慕はしいものなのでございますの！　愛の神樣は、荒れた野の中にアルミードの寺をお造りになる樣にして、町にでも妾達に「小屋（シャーレ）」に相當するものを造つて下さいませんでせうか？　ねえ斯ういふ事がございますのよ。あのファンションが結婚致すので御座ますの、父樣はお祭嘉きの樣な宴會や、色々な御準備をなさるのがお好きなのですから、あの女の結婚式にも妾達皆が出席致す筈でございますの。きつと、賑かな事でございませう！　時としましては、神秘な事が騷がしい欣びや、お祭りさわぎの中にでも其被布をひろげる事はあるものでございます。いかゞですか。妾達がしてやつた努力の結果の中に、失つた欣びを再び見出すのは樂しい事では無いでせうか？

貴女は、エドワード卿の批評に就いて大分一生懸命になつていらつしやる樣ですね、妾も貴君のお考へには不贊成ではございませんの。其上ある日の午後に一寸とお會した方をどうして妾が判斷など出來ませう？　又同樣に、貴君だつて數日のお附き合ひで、どうしてあの方がどんな方だか、おわかりになるでせう？　妾は推測であの方を判斷して居りますし、貴君にしても御同樣でせう！　何故つて、あの方の貴君におしまひなさる風は、何だかすれつからしの外國人といふ氣も致しますのよ。けれど、妾は貴君が通常經驗に鋭い眼をお持ちなことを知つて居りますの。又貴君が人に最初にお會ひになつて直ぐ其の方か善い方か悪い方かは豫じめお見わけになり易いといふ事も存じて居りますの。けれどよくもあの方が貴君に仰言つた事に就いては考へてみませう！　それはさうとファンションの結婚の時に兩人切りでお話し合ふ計畫がうまくゆけば、此上ないと思ひますわ。あゝ、忍耐するのは辛いものですわ。けれども其結果は樂しいものです。

エドワード卿に就いて妾の考へを申上げませう。前に妾は貴君に、あの方は大きな度量をお持ちで、氣象の強い方だ、愉快な遊び事より、學理的な所があの方には澤山お有りの樣ですと申上げましたわね。貴君もほゞ、同じ事を仰言いました。そして女性を讃美なさるけれど、男性が優越して居るといふお考へで妾が女であつて殘念だ等と仰言いましたわね！　丁度、永久に女といふものがあつてはならない樣な御口振りでね！　貴君のお持ちのプラトンの理想國を讀みました時に、前に妾達は兩性の精神的差異に就いて議論致しましたのを覺えてお居でございますか？　妾は今もあの時の意見通りでございますわ。妾はこの樣に違つた兩性に對して、唯一の完全なモデルを想像する事なんか到底出來ませんわ。攻撃と防禦男の方の勇敢、女の方の貞節、これは決して、多くの學者の考へてゐる樣な、因襲的な約束ではございません！　これは自然に出來た事で誰も首肯出來る事なのでムます。そしてそこから容易く、他の男女間の精神的區別をも引き出して考へられると思ひます。其上その自然の行く道は同じくはございません、物の見方、物の感じ方や、傾向等は皆各々の方向にそれぞれ導かれるのでございます。土を耕す事と、子供達に乳を與へる事とには同じ趣きや、同じ手だては決して無いのでございます。背が高いとか、聲が強いとか、顏貌が拙いとか申す事は性に關しまして少しも必然的な關係を有つて居るものではございません！　けれども勿論精神の變化に、勞働的な分子が含まれゝば、外形の變化もそれに伴つて起る筈ですわ。完全な女と完全な男とは顏付も、又魂も似る筈がありません。よく人がする樣に男が女の眞似をしたり、女が男の眞似をしたりしますのは不合理の極でございます。こんな事をするのは、賢こい人の笑ひの種であり戀愛を恐れさせ、逃げさせて了ふものでございます。妾は斯う申しますわよ、少くとも、背は五尺五寸で太い聲で、顎に髯を生やしてゐるのが「男である」といふ事については何の容喙も出來ない筈です。

あらまア、妾達は惡口を云ふのが下手でございますわねえ。貴君は妾の知りもしない過ちをお叱かりになるのですわ。さうでなければ、妾も貴君も同罪ですわ。貴君は女にはわからないと仰言つて、それが缺點だとなさいますけれど、妾はそれこそ、女の良い所、尊い所だと思ひますの。貴君も眞面目に仰言つたのですから、妾も眞面目に、今度貴君の「眞面目さ」に就いて妾の考へを申しませうか！　妾にはそれは唯「うまい御機嫌とり」、しか無い樣ですわ。つまり何でもかでも貴君が妾にして下さる色々な讃辭に就いて表面は淡白にお裝ひになつて、自己辯護なさらうと云ふんですわ。妾の表面だけは立派らしい性質が貴君の目を塞いで居りまして、貴君が、御自分の謬つたお考へを殘念に思つていらつしても、さう考へるのが根底の無い事だとお思ひ直ほしになるにしても、貴君は、確かに妾になさつても過分でない讃詞をお見付けにはなれないじやありませんの！　ね、お目が眩らまされてお居でなのですわ。

妾の眞價を話さうとして下さいますな！　おやりになつても甘くはゆきませんわ。戀をする眼は、どんなに鋭くても、相手の缺點に氣が付く事はムいませんもの。これは公平な友情のする役目ですわ。ですからクレールさんはこの點については貴君よりもずつとよく知つてお居でですわ。えゝ、妾を褒めて下さい

まし、妾を崇めて下さいまし、妾を美しい、魅力があると仰言しやいましな。妾を完全無比な女だと仰言いまし。けれどどんなにお褒めになつたつて、唯嬉しく思ふだけで、それに動かれはしませんわよ。それは、妾がそのお褒め詞は皆、虚偽ではありませんけれど、誤謬であり、貴君は妾を偽はらうとはなさらなくとも、御自身で間違ひをやつてゐらつしやるといふことを存じて居りますからですの。オ！愛の幻想は樂しいものですわ！　戀の阿諛はある意味で眞理でございますわ。悟性が默つて、心（情）が物を申しますの。妾達の持つて居らぬ樣な良い所を、褒めて下さる戀人は、ほんとにその方がお考へになる通りに、其美點がめる樣に見えるのですわ。虚言を仰言りつゝも、虚言は仰言しやらないのですわ。品位を墮す樣な事無しに、御世辭を仰言しやるのです。兎に角信じてあげなくとも、尊重してあげなくてはなりますまい。

明日は妾、兩人の哲學者樣を夕飯にお招きしようと思つて、胸がドキドキ云つて居ますわ。一人は上院議員エドワード卿、もう一人はその若い女のお弟子の足元で屢々御自分の尊嚴をお棄しになる一人の賢人方なのですわよ！　誰方でせうかしら？　どうかその方がしつかりなさつて、普段よりも良く、哲學的公式をお守りになさるように、又妾は目を俯せて妾の品位に氣をつけ、その方のお目に出來るだけ美しくないように致しませう。

書簡第四十七　ジユリイへ

あゝ、ひどい方ですね貴女は！　貴女は、用心深くやると仰言つてお居でしたが、あれがさうだつたのですか？　私の心を散々に惱まして姿をお隱くしなさるのが愼み深い事なのですか！　貴女のお約束には澤山な違反がありますよ。第一、貴女のお身飾りです。前にはあんなになさつた事はありませんでした貴女だつてあんなに危險な事をなさつた事はないつておわかりでせう。第二に、貴女のやさしい、中庸を得た、そして貴女の美しさを思ふが儘に發露させになる樣な貴女の物ごしがいけないんです。稀に、又よく考へて又、普段よりも才のあるお話し振りで私達に耳をお傾けさせになつた事、又その爲に貴女のお言葉毎に聽く耳も心も、何とは無しに、落ち付かなくなつた事がいけないのです。又貴女が歌を小聲で——夫は貴女の顏に優しみをお附け加へになる爲でした——お唱ひになつて、歌詞が佛蘭西語でしたが、エドワード卿には馬鹿にお氣に召したといふ事が私には辛らいのです。をづ〳〵した貴女のお目なざし、下へお俯せになつた貴女のお目！　これもいけないのです、お目の期待しなかつた輝には私は心を亂さずには居られませんでした。其外、何と申しませうか、何かしら、云ひ現し難い、魅惑的な所が、貴女が何の氣なしに皆の方へ頭をお向けになる毎に貴女のお身體の上に漂つてゐました。これが私は苦しいのです。私は、どうして貴女があんなになさつたのか、わかりません！　若し夫が貴女のお化粧だと致しませば、私

は貴女の周りに賢い人達をお集めになるには少し過ぎて居りますと、申上げます。

私はあの可哀想な英國哲學者も同じ様な感じ方をして居らつしやりはしないかと掛念します。お從姉さんを又お連して來ました時に、まだ皆さんが元氣なので、エドワード、ボンストン卿あの方の所へ皆で行つて音樂をやつたりパンチを飲まうと仰言ひましたね。皆集まる間に、あの方は私に貴女について少し私がいやになる程熱心にくだくだと色々な事を仰言いました。そして貴女を褒めていらつしやつたのですけれど、私は、貴女が私が褒められてゐるのをお聞きになつてお感じになる樣な歡び等は、私は少しも感じませんでした。一般に、私は、お從姉さんを除いて外の人に、貴女の事を喋られるのがいやなのです。他の人が貴女の事を云ふと、一つの言葉毎に、私の秘密や欣びの一部分が取り去られる氣がするのです。どんな事を人が申しませうと、人の云ふ事は皆疑はしい事であり、さうで無ければ私の考へとは似てもつかぬ事ばかりなのです。ですから、貴女の事については、私は、私自身の聲を聞くより外ありません！

私は貴女の樣に嫉妬心はありません！　ですから私は貴女自身より、貴女のお心を知つて居ます。私は貴女のお心が變るなんて事は想像するのも許されない、確かな保證物を持つて居ります。貴女さへ大丈夫だと云つて下されば、私は貴女に結婚を申込む人達なんかに就いて女々しく申しは致しませんが、ですけれど、この、エドワード卿は……あゝジユリイさん！……御身分も、御財産も、丁度お似合ですし……それに貴女のお父樣の決まつたお考へもありますもの！……こんな問題は私の生命の問題です！どうか是

非いて、一言仰言つて下さい。ジユリイさん！　一言！　さうすれば私は永久に心穩やかになりますから。

私は其夜伊太利音樂をやつたり、聞いたりしました。私がやる曲の中に二部合奏のがあつたものですから、私も仲間入りをした譯なのです。伊太利音樂が私に惹起した心持を何と申上げませうか、わかりません！　私は怖い氣がします。昨夕の晩餐の印象が、聽いた音樂に及んで居た樣で怖いのです。私は貴女の魅しの力と、音樂の美しさとを同一視し度くないのです。同じ音樂でありながら、シオンでは私を悲しませたにしても、今は丸で違ふ環境の中に居るのですから、與へる感じも愉快で無い事がありませうか？　貴女が私の魂の總ての愛情の最初の源ではないでせうか？　又私が貴女の魔術の力にかけられて居ないのでせうか？　若し音樂が、その物から實際に此魅惑を發するものならば、聞く人の總ての上に影響が及ぶ筈です。所が私が恍惚として居りましても、ドルブさんは靜かに、安樂椅子の中で眠つて居られました。私が夢中になつて感激して居る時にでも、あの人は、クレールさんは伊太利語を御存知かな、なんて私にお質ねになつた許りでした。

明日になるとなほよくこの事がわかりませう、今晩又新しい音樂會があるのですから。エドワード卿は完全にやらうとなさつて、ローザンヌから、新しいヴアイオリン彈きを別にお呼び寄せになりました。決して下手では無いと仰言いました。私は、私で芝居をやらせ、フランスの歌謠を唱はせようと思つて居り

ます。

今も家へ歸つてまゐりますと、近頃夜更かしする癖が着きました爲にか、ひどく勞れて居りましたけれども、貴女にお書きしてやゝなほりました。けれども眠らなくてはなりません！　眠る間も夢から離れないで下さい。貴女のお姿が夢を奏すにせよ、幸するにせよ、又ファンションの結婚式の事が幻になつて現はれるにせよ現はれないにせよ、兎に角、どうしても獲られる又私の爲に準備せられてある、樂しい一時は夫は目覺めた時に幸福を感ずる時なのです。

書簡第四十八　ジユリイへ

あゝジユリイさん！　何を私は聞いたのでせう？　何といふ悲しい調べでせう！　何といふ美しい音樂でせう！　何といふ感情と、欣びとの樂しい泉なのでせう！　直ぐに斯うして下さい、貴女のお持ちのフランスのオペラの本も歌の本も、皆、烈火に投じてお終ひなさい、それはつまらぬものですよ！　火をかき立てて、硝子も燒ける樣にして、一度で燒いてお了ひなさい！「趣味」の神樣にこの淨罪の犧牲をお拂ひなさい。貴女の罪や貴女のお聲を此樣な一本調子な重い音樂で汚してゐた私の罪、この樣に長い間耳を欺いてゐた音を心の言辭などと云つて來た私の罪を償ふ爲に。あゝ貴女のお亡くなりになつた御兄樣は御尤な事を仰言ひました、正しい事を仰言いました。今迄此の麗はしい藝術の創造に於いてどの樣に大きな妙な誤りをして居りました事でせう！　私は其少ししかの影響しか感ぜず、感じたにせよ、それを、音樂の女性的な弱い所に歸して居たのです。私はこんな事を申して居りました。「音樂は耳をたぶらかす仇な音に過ぎ無い。又間接に、輕ろく魂に力を及ぼすばかりである。音譜の調和の印象は純粹に機械的で物理的である。如何して、其れが感情に力を及ぼす所があらうか！　何故に、私は色彩の調和より美しい和音（ハアモニー）によつて強く感動され度いと望んでゐたのかしらん？」等と言語の抑揚（アクセント）につれて變る主旋律（メロディー）の調子には、私は力強い羈絆も、音と情との秘密な結合を見出す事が出來ませんでした。話す聲に力付ける感情を持つてゐる種々な音の模倣が唱ふ聲に人心を動かす樣な力を與へる事とか、聞かせる人の魂の活動の力強い一卷の繪こそ、聞く人々に眞個の魅力を與へるものなのであるといふ事を私は知らなかつたのです。

これは、エドワード卿のお連れの歌ひ手が私に云つた事です。その人は音樂家として、可成り其藝術に就いてよく、種々な事を話してくれました。その人はこんな事を申しました。「和音（ハアモニー）は模倣音樂では迂遠な附屬物であります。正しい意味の和音（ハアモニー）には何等模倣の原則は無いのです。和音は、誠に、歌調を全全に導きます。和音は歌調の正鵠を得てゐる事を表はします。そして抑揚變化も感じやすい樣にし、又表現に力を、歌に艶味を帶びさせます。けれど強い情熱的な抑揚調子が出て來るのは唯メロディーであります。全くそこからは魂に及ぼす音樂の力が皆溢れ出るのです。假にメロディー無しに立派な和弦（アコール）を順々と列べてごらんなさいまし。十五分もしない内に飽きてお了ひでせう！　其れに反して和音の無い美しい歌は可成

長く經つても倦怠を感じさせません。感情の抑揚が單純な歌を陽氣付けたらば、それはきつと面白いものになります。其れと反對に、メロデーの動かない時には、歌つてもつまりません。和音（ハーモニー）だけでは到底心に何物をも云ふ事が出來ません。」と。

彼は續けて申しました。「この點で佛蘭西人は音樂の力に關して誤つてゐる樣です。和音（ハーモニー）の無い國語や不自然な人工的な詩にはメロディーは無く又持ち得ませんので、佛蘭西人は、和音（ハーモニー）と、聲の斷片音是は音色を調子よくする所か反つて騷がしくするものですが——との結果しか知らないのです。所で尙氣の毒な事にはいくら威張つても其の詩ゐる和音（ハーモニー）すらも彼等には無いのです。どうしても取入れようとして、選ぶ所なく結果もかまわずに、矢鱈に澤山集めて了ふのです。耳を欺いて、騷がしいだけで少しも感情的な所がありません。宛も彼等にとつて一番美しい音といふのは一番大きな音である樣に。固有な所もないので、佛蘭西人は、のろ〳〵と、又遠くから、私達伊太利の音樂の眞似をするだけであります。有名なあのリュリイがこれは寧ろ佛蘭西のものでなく伊太利のものでせうね、其リュリイが其當時既に全伊太利を風靡したオペラに專念してから、以後の佛蘭西人は伊太利の昔の大家の作品を變へたり寫したりして、凡そそれから卅年四十年の間オペラが大流行したものです。佛蘭西人はそして他の國民が、自分獨有な式の音樂を有つてゐるので、學んだのか、伊太利の音樂に類似のものを作り出したのです。彼等が其歌を得意になつてゐるのは、自分で自分の罪をあばく樣なものです。若し彼等が感情を唱へたら、「精神」を失はないでせう。何故と申しますれば、夫の音樂は何も表現してゐないのです。ですからどつちかと云つたら、其音樂はオペラより歌謠に向いてゐませう。伊太利のは全體情熱（エネルギー）的ですから、歌謠よりオペラに適して居ります。」と。

斯う云つて歌なしで、伊太利のオペラの若干を云つてくれて、宣敎調（レチタティーヴォ）に於ける音樂と言語との關係、詠嘆（リク）に於ける感情と音樂との關係を感じさせてくれました。それから何處でも、正しい調子と和弦（アコールド）をうまく選擇した事とから其表現に與へられる力（エネルギー）を敎へてくれました。そうして、私が言語に關して持つてゐる智識に、私にとつても演說的、又感情的な強音（アクセント）は附け得るといふ善い觀念、卽ち、語を語らないで、言語に、耳と心とに語る術を與へられるといふ觀念をあの人が附け加へてくれて、私はこの魅惑的な音樂を聽き始めました。私は直きに音樂の起す感動を感じました。そして又私の考へてゐた佛國の音樂より、伊太利音樂は遙かに優つた力を持つて居るといふ事に氣が付きました。何とも云へない愛に充ちた感激が私を知らずの間に捕へました。これは全く私達のやる獨唱の樣な仇な音色の連りではありません。各行毎に何かきつと心像が私の頭に這入つて來ましたし、又何かきつと感情として私の心へ這入つて來ました。欣び曲は水の樣に流れます。聽く人は勿論やる人達も皆同じ氣持に興奮して居る樣でした。歌ひ手は自分の聲をよくこなして、歌詞、歌詞に從つて任意に、滯らず歌ひました。

そして私は佛蘭西音樂で、いつもながらの歌調と小節（メジュール）とが不協和で一致せず、やる人をも聽く人をも勞

らせて了ふ此兩者の不斷の爭鬪の爲に、歌手の現れてくる堅苦しさや、聲を苦しくはり上げる事や、重いカデンツア（Cadenza 或は Cadence とは演奏者の創意を加へて特に自身の技倆を示す局所の意味と、末尾を弱める法、又は休止と兩意あり。此場合何れか不明）を感じなくとも良かつてほつとしました。

けれど、愉快な曲の後で烈しい情熱の混亂を刺激、描寫する所の表現（エキスプレション）を持つてゐる大部な曲をやる事になると、私は、音樂を聽いてゐるのだ、歌である、模倣であるといふ感じをすつかり無くして了ひまして、私は苦しみの聲を聞いて居る氣がしました。狂熱と、絶望の叫びとを聞きました。目の前に、嘆き沈んだ母親、裏切られた戀人、狂ひたける暴君等の姿が、ありありと浮かんで來ました。心が亂れて來てぢつとして居れなくなりました。其時に漸く、何故前に聞いた時には私の氣を物憂くした同じ音樂が今は狂ふ迄に私を興奮させたか、分つた氣が致しました。つまり、私の心にはもともと其音樂がひそんで居たのでした、そして力を得られる樣になると、全力を盡して其力を現す樣になるといふ事です。ジユリイさん、人間はこの樣な感情を半分、滅ずるなんて事はありません。全か無かどつちかです。決して細々としたり、中位な事はありません！　何も感じないで居るか、極度に感ずるかどつちかです。少しも聞えぬ言葉の仇な音であるか、聽き手をひき込み、魂の抵抗する事の出來ない、感情の奔馳かです。唯悔やしくてたまらないのは、こんな私を感動させる曲を作つたのは貴女で無く他の人であり、愛の最もやさしい表現をあの賤しい歌手（カストラート）（譯者註　カストラート Castrato にはソプラノか唱ふ爲に幼時に去勢して了つた男子の歌者を云ふ）の口から聞いた事とであります。ジユリ

イさん！　この感情に屬してゐるものを皆私達の間に取入れるのが、務めではないでせうか？　愛情で充された魂の語り、又感じなくてはならない物を云ふのは私達でなくて誰でせう！　誰が私達よりも物悲しく、Cor mio（コル　ミオ）（私の胸）や Idolo amato（愛の本尊）を唱へませう？　あゝ若し私達が一緒にいつかこの樣に樂しい涙を流させる、やさしい二部合唱の一つを唱つたならば、心は藝術にきつと、強い力を與へるに違ひありません！　私は、貴女に兎に角一度でもいゝですからお宅なり、從姉さんの所なりで、此音樂をお聽きになつて御覽下さいとお願ひします。お望みなら、エドワード卿は連中をお引きつれになつて、早速いらつしやいませう！　貴女程敏感で居らつしやれば、きつと私以上にお理解になり、一度お聽きになつても、私の感じて居る氣持におなりでせうし、私の熱狂もおわかりだらうと思ひます。どうぞ、音樂家の居る間に、私が今朝から始めた樣に、音樂の講義をお聞きになつて下さい。あの人の教へ方は單純です明瞭です、唯言葉だけでなくて、實際上の事です。あの人は「斯うしなければいけません」などと云はず直ちに自分でやつてみせてくれるのです。他の場合も左樣ですが、規則よりも實例が役に立ちますね拍子をよく守り、よく感じ、小節を切り、念を入れて、抑揚を付け、音調を平均に保ち、決して强くする事をせず、唱ふのにも聲から叫びを除き、其他、音樂を正しく、表現を豐かに、又柔軟にする爲に佛蘭西音樂の瑣細な事を除く事が必要だといふ事が今わかつて來ました。貴女のお聲は前から輕く、柔かですから容易く此新しい僧はしにお馴れになれると思ひます。さうなさればきつと直きに力と伊太利音樂を熱あらし

めて居る所の拍子の威勢よさとをお感じになるでせう。

E'e 'l cantar che nell' anima si sente

（又更に魂に感ぜられる歌までも。ペトラルカ。）

もうつまらぬ、情けない、佛蘭西の歌はおよしなさい。佛蘭西の歌は情熱の歡喜よりも、むしろ、腹痛の時の叫び聲に似てゐますよ。感情から生まれて來る、此聖い樂音を作る樣になつて下さい、この音こそ貴女のお聲にふさわしく、貴女のお心にもふさわしいものです。そして、其音は常に感じやすい性格の人の魅力と情熱とを伴つて居るものです。

書簡第四十九　ジユリイから

妾は貴君には人目を避けてなくては、お書き出來ませんの、いつも見つかりやしないかとビクビクしてゐりますの。ですから、長いお手紙は書けませんから、貴君のお手紙の大事なことの御返事を致しますわ。又お手紙と同樣人目を避けてお話した時に申し忘れた事を、手紙で書いてお送りしますわ。今日は、エドワード卿の事を一寸申上げ度いと思ひますの、外の事は何だか忘れて了つた氣が致しますの。

あゝ貴君は、妾をお失ひになるのをお恐れですね、そして歌のことなんか仰言いましたね！　これはまだ理解し合つてゐない戀人達の間の、可愛らしい爭ひですわ。貴君は確かに嫉妬心がお有りになりませんけれど同樣に妾だつてさうですわ！　何故つて、妾は貴君のお心の底まで知つて居るのでございますもの。妾は他の人からは、貴君の冷淡さしか感じないところにでも、貴君の御信賴があるのを分つて居りますす。安全はやさしい、なつかしいものではございませんか！　其の氣の安らかさによつて、貴君は貴君のお心の中から、妾の心の伴り無い、正しい氣持を引き出して下さる可きですわ。其安全によつて、同時に妾の心が貴君を正しいと思ふのです。ですから若し妾が貴君がもつと劇しく心配なされば、妾は貴君には愛が無いと思つて了ひますわよ。

エドワード卿が、多くの人達が、妾と同じ仇な年頃の女の人に對してお抱きになる望と異つた望を持つていらつしやるかどうか、そんな事は妾は知りもしませんし、又知り度くもございません！　つまりあの方の御意嚮などは問題ではありませんの、けれどお父樣のお心と妾の考へとが大切な事なのでムいますわ。勿論あの方のお考へがあれば、それは外の所謂求婚者の意向とも、又御自分の意志とも一致するものなのですわ。貴君は求婚者については大した事は云はないと仰言いましたわね！　若しあの方のお申し出も他の方のお申し出も斷りさへすれば、御滿足なのでしたら、どうか御安心下さいまし、貴族の方がどんなに禮を盡して御求めになつたつて、又父が承諾致しましたつて娘が承諾しなければ駄目ですわ。ジユリイ、デタンジユはレデイ・ボンストンにはなりません！　どうか御信じ下さい。

今申した事で、エドワード卿の事がもう既に問題になつてゐるのだ、なんてお考へになつてはいやです

よ。貴君は妾達四人の中で、エドワード卿の、私に對するお考へを推測出來ますのは貴君たつたお一人なのです。兎に角、妾にも誰にも仰言らないけれど、この事についてお父樣のお考へも矢張り貴君に其事はお任せするといふ考へに違ひありません。ですからお父樣がいつかそれを妾に面と向つてお話しになつても、ならぬ前から夫はわかつてゐる事なのです。これも、貴君のお心配を鎭める事でせう！　つまり、貴君にはあの方のお考へを探らなければならぬといふ役目がお有りなのですから。其外の事は貴君には、全くの功奇心ですわ。妾は好奇心なんか充さうと思つて居りません。貴君は妾がこんな風にするのをお叱かりになり、こんな風にするのは妾達の利益について考へれば、それは全く思はしくない事だと仰言ひますけれど、大した事ではございませんわ。若し假令妾が好奇心を持つて居りましても、今となつては別に大事な事ではないと存じますの。父の言葉を妾が前に考へ無しにもお知らせしなかつたら、貴君はメイユリーでお嘆きになる事もなかつたでせうし、妾をお驚かせになつたお手紙もお書きにならなかつたでせうに！　妾はまだ無邪氣に生活して行き度く思ひます。妾はまだ幸福に憧れる事も出來ますの。おそろしいばかりにした不謹愼の爲に、他の不謹愼も犯す樣になつて了ひましたのを御考へになつて下さいまし。貴君は氣を配るには、あんまり、血の勝つた方で居らつしやいます。貴君は自分の情熱を欺き蔽すより、制へてお了ひになる方がいゝのですわ、少しでも御心配な事がありますと、貴君は氣狂ひの樣におなりなのですもの。そして少しでも思はしい光を御覽になると、何でもかんでも御信じになつて了ふのですわ。ですから氣をお付けにならないと、貴君のお心がら、妾達の秘密が人に知られて了ひ、御熱心のあまり、妾の折角した心盡しも無駄になる事がございますよ。どうが戀の心配は妾にまかせて下さつて、貴君は其歡びをお守りに下さい。斯うするには苦しい事でせうが？　貴君は、妾達の幸福には障碍を置かない樣にするといふ事の外、なさる事は無いとお感じになりませんか？

あゝ、今からはこの樣な齒痒い事が何の役にたつでせうか？　谷間でしつかり足を踏まへ、今迄の經驗で包々な不幸な事を豫知する時になつたのではないでせふが？　あゝ妾は、可哀想な女です！　幸福に就いて話すのは貴君こそ其に似合はしい方です！　恥や、悔いの在る幸福はあるものでせうか？　噫！　其罪を耐へられず、それとて後悔出來ないでゐる有樣は何と苦しい事なのでせう！　群がつて來る恐れに圍まれ、仇な希望に弱らされ、それかと云つて絕望の恐ろしい平靜さも味へぬとは何と辛い事なのでせう！　妾はもう此先は運命の儘にやります！　力とか、德とかは問題ではありませんわ！　運命と、注意とか大切なのです。妾の一生續く此戀を、消して了はうなんてするのは問題外ですわ！　けれど其戀を無垢として罪を犯して死ぬのが問題なのです。あゝお考へになつて下さいまし、妾の氣持を！　そして貴君が妾の熱心なる御信賴出來るがどうかをお確かめ下さいませ。

書簡第五十　ジユリイから

昨日はお別れする時に、貴君は妾が悲しさうだがどうしたのだとお責めになりましたけれどあの時は理を申上けたくなかつたのです。夫はあの時には貴君は妾を理解なされさうもありませんでしたから。説明するのは嫌な氣がしますけれ共、これだけは申上けなくてはなりますまい、夫はお約束ですもの、妾はお約束を果さうと思ひます。

昨日夕方貴君が妾に仰言つた妙なお言葉や、貴君のそれに伴つた御身振りを覺へていらつしやるかどうかは妾は存じませんが、妾は、貴君の名譽、妾の安心を考へますと、そのお言葉や、御身振りが忘れられませんの、其上不幸にも妾はそれについて、安々とは忘れられない程に怒つて了ひました。あの様なお言葉は、妾が港の附近を通ります時に、良く聞く言葉でこざいます。けれどこんな言葉は決して、心の正しい方の口からは出ないものだと思つて居りました。少くとも妾は其様な言葉は戀人達の辭典には決して入れられないものだと思ふのでございます。

其様な言葉は貴君と妾との間では用ひられるとは少しも思つては居りませんでした。あゝ、どうしたのでせう！　こんな風に快樂に味をおつけになるのなら、一體貴君の戀とは何でせうか？　あの時に、丁度貴君は長い宴會のお歸りだつた事は確でせう。又妾はこんな風にして度を過すのも此國の習慣として許さなければならぬ事は存じて居ります。ですから又妾が夫について殊更に申上けるのでございます。貴君と二人きりで居ります時に、貴君が妾を冷然として何でも無い様にしてお取り扱ひになる様になりましたら、もう夫は妾達の生活の最後の會見となつて了ひませう！

然れど貴君の爲に妾が心配に思つて居ります事は、この様な事でございます。酒に醉つた男の方の爲る行ひは通常其人の心の底で起つて居りますもの、結果であるといふ事なのでござります。本來の性をむきつけに出す様な狀態で、貴君も自分の本來の姿をお見せになつたのだと、妾は信ぜられませうか？昨夕お話しになつた様にいつも〳〵專らにお考へになるのなら、妾は一體どうなる事なのでございませう。妾は其様な恥辱を受けますよりも、この賤しい情火を消して了ひ、其愛人を尊敬せずに、又自身も尊敬されるに價しない様な戀人は失つた方が良いと思ひますわ。心正しい感情をお好みになつて居らつしやる貴君が、この酷い誤謬にお陷りになるのでせうか！　仰言つて頂戴！　この過ち、夫は幸な愛は貞節を守る事が出來ないとか、嚴しく守らなくても良い貞節には、尊敬を抱がなくても良い等と申す事でございます。あゝ若し貴君がいつも此様なお考へならば、貴君程恐ろしい方はありません、妾程不幸なものはございません！　過つた事をして下さいますな。世の中の過つた見方程、眞個の戀人には危險なものは無いのですもの！　淨山な人達が戀に就いて話しますけれど、愛する事の出來る方は僅かしかありません。そして多くの方は戀のやさしい、純潔な法則として卑しい交際の賤しい範則を見立て居るのです。此卑しい

際は直きに倦かれて了ひ、今度は空想の惡魔の助けを借りて、自ら保つ爲に醜い、いやなものとなつて了ふのでございます。

少し云ひ過ぎましたかも知れませんが、妾には、ほんとの戀は總ての因緣中、一番貞潔なもの〻様に思はれますの。此戀、其戀の聖い悔が、妾達の自然の傾向を淨め一つの物に、其種々な傾向を統一するものなのでございます。この様な戀があればこそ、妾達は誘惑から逃れられるのでございます。そして、此淨い戀が無ければ、男も女も意味の無いものだといふ事をわからせるのでございます。平凡な女にとりましては總ての男が、兎に角一人の男でございます。けれど戀をする女の心には男としては戀人だけしか映らないのでございます。何と申しませう？　戀人は人に過ぎませんかつて？　あ〻！　戀人はもつと高尚な「存在」でございます！　愛する女にとつては男の人は居りません！　戀人が總て〻其の人は無いのでございますの。彼女（エルユリユイ）と彼が人間中の唯一つのものなのでございます。兩人は何も望みません、唯愛するのです。心が感覺には從ひません！　却つて心がそれを導くのですわ！　兩人は其迷ひをやさしい被布で覆ふのですさうですとも、淫猥な事や、其卑しい言葉程きたないものはございません！　眞個の戀は愼ましやかです其樂しみを厚顏にも奪ふ様な事は少しもございませんわ！　憶病な風にして樂しむのでございますわ！神秘な事、沈默、恥をおそれる事がそのやさしい歡びを鋭くし、置します。其焰は、其愛撫を淨め讃えます。端正な事、心直き事が愛慾の中にもそれに伴ひ、慾求に、貞節を失はずに、總てを與へます。あ〻！

ほんとの懌びを知つて居らつしやる貴君！　どうして知つたかぶりの賤しい言葉が其欣びに結び付きませうか？　又どうして其様な言葉は神聖な欣びや魅力を、皆追ひ拂はない事がありませうねえ？　どうして其愛するものを眺めて樂しむ、完美の像が其爲に汚がされない事がありませうか？　貴君！　汚行と愛とは一緒に存在出來ないものですわ！　相償ひ合ふ事すら出來ないものなのでございますわ。愛する時には心はほんとの幸福を創るのですから、愛し合はなくなつたら、何物も其れを補ふ事なんか出來ません！

けれど、この様な賤しい言葉が、氣に入つて居るなどと思はれるすらも、貴君は不幸とお思ひならば、次の様な事はどうなさいますの？　其様な言葉を何故無躾にもお使ひになれたのですの、何故貴君の愛して居らつしやるものと一緒に居らつして、品位ある方は夢にも御存知ない様な言葉や身振りをなさつたのですの？　何時から其戀人を苦しめる事が樂しくお爲りなのですの？　他人の苦しみを見て歡んでいらつしやる貴君の野蕃な快樂は、一體どうした事なのでございますの？　妾は人から救はれる權利を失くしたといふ事を忘れませんでした。けれど若し、永久にそれを忘れましたら、貴君がそれを注意して下さる方なのでせうか？　妾の誤を創つた方に罰をなくして頂くのでせうか？　その方が妾を慰めて下さる可き筈ですわ。貴君以外の方は皆妾を輕視なさる權利をお持ちです。貴君は妾を斯くまでも卑下おさせになつた方なのです。妾の弱さに對して流す涙は、貴君が妾に妾の弱さを左程酷くなくお感じさせになる事に對して當然のことであります。妾は注意深い女でも尊む可き女でもございません。あ〻賢くもなれない妾がど

うして其様なものになれませう！　ひどい方！　貴君は妾のこの、弱い心が戀には何にも拒まない事を御存知なのです。けれど少くとも、妾の心が戀に譲るものは、戀にしか譲られぬものないのでございますのそれに貴君は愛に就いて色々教へて下さいましたもの、この道をはづれた戀のある筈がございませんのに……寫しられ、打たれた方が、この様な賤しい言葉で撫でられるよりようございます。ジュリイをお棄てになるか、ジュリイに敬まはれる様になさつて下さい。前にも申しました様に、廉潔さの無い戀は妾は存じませんのよ。貴君の戀を失ふ様な悲しみが妾にまいりましたら、此様な賤しい戀を保つのがそれ以上に辛らひ事でございます。

もつと申上げ度い事がございますの。けれど、この手紙はこれで止めて、外の事は他日お書きしますわねえ、お酒を無暗とお飲みになる事についての、貴君の誤つたお考へについて御注意なさつて下さいましお貴君のお心は確に、罪があるのではありません！　けれど貴君は妾の心をお悲しませになりました。そして貴君は自分の爲さる事も御存知無いで、貴君はおず〳〵して居る妾の心を、嘆きにお沈みなさいました貴君は別に其様なお積りではなく、いつもの様に妾を懲こばせて下さる時と同じお心だつたのでせうが！妾にとりましては貴君からひどいて來るものは何一つとして意味の無いものは、無いのでございます。

書簡五十一　右返事

讀んで血の湧る様に思はぬ行は、一行も貴女のお手紙にはありません！　幾度も〳〵繰り返して見てもこのお手紙が私に對して寄せられたものとは信ずる事が出來ませんでした。誰に？　私に？　私にはジュリイさんを侮辱した事になるでせうか？　私は貴女のお姿を汚した事になるのでせうか？　常に私の崇めて居た貴女が、私の侮りの目的になるのでせうか？　いゝえ！　私が其様な野蕃な事をするなんて！　私は其様な企畫すら立てる前に死んで居たでせう！　あゝ貴女は貴女を崇める様に愛し、貴女の在らつしやる先々の足元にひれ伏すこの心を、貴女には、人類にはまだ考へられない、尊敬し、新しい禮拜を獻げ様として居る此心を少しも解つて下さらない！　ジュリイさん！　若し貴女がこの心には、普通一般の戀人達が其愛人に對して獻げる月並な尊敬が無いと仰言つてお責めになるならば、貴女は少しも私の心を理解して下さらない事になります。私は無作法なものにも、賤しいものにも成つたとは思ひません！私は賤しい會話は嫌ひですし、私は生まれて一度たりとも、賤しいと覺える様な所へは出入した覺えがありません！　貴女の仰言る所に據ると、如何に私が其様な賤しい事を申し上げ、貴女の憤怒を招いたにせよ、又私が一番卑しい人間で、私の前半生を放蕩に暮し、貴女のお力の下にある私の處にまでも、恥かしい快樂の辭が位置を占めて居りますにもせよ、どうして貴女！　ジュリイさんの前では、そんな厚ケ間しい事の好きな人の前でだけより外には出來ない圖々しさをあらはしませう！　あゝ其様な事が出來るものですか！　貴女に一日デロリと見られたゞけで私の口は默まらされ、私の心は淨められます。愛は私の熱

恐した望みを貴女の淑やかさの魅力で被ふのです。戀は貴女の淑やかさを傷ける事なくして、それを從へました。そして私達の魂のやさしい融合の中に於いて、其魂の只熱狂が感覺の誤謬を生じたのです。私はそれに對する貴女御自身の御判斷を仰ぎます。限りの無い烈しい情熱の中に於て、私は美しい者を尊ぶことを忘れた事があるでせうか仰言つて下さい！　若し私の情火に相等したものを受けるにしても、私は貴女の優しい羞恥をも蹂躙する程、自分の幸福を濫用したでせうか仰言つて下さい。おづおづした手で、烈しいけれど、物恐ぢをする戀が貴女の魅力を犯したにしましても、野獸の樣な無禮さで其れを傷けた事がありませうか仰言つて下さい、不謹愼な歡喜がその面紗（ヴェール）を取り去りましても、廉潔がその役を代つて勤めないでせうか？　貴女が唯一の持物である、其貞操の聖い衣服が貴女を棄る事がありませうか？　貴女のお心は正しくて到底、卑賤に降らぬのですもの、どうして私の心の情火が變へられませうか？　この樣な感ず可き、優しい融合で私達の幸福は充分でないでせうか！　それが私達の生活の總ての幸福の樣でないでせうか？　私達は此愛が與へる悅び以外の懌びを此世に求められるでせうかしら？　又それを求め知らうと私達は望んで居りませうか？　貴女は此の樂しさが破れるとお感ひなのですか？　たとへ私が貴女を熱愛して居なくとも、心正しき時に、私は私達の愛、私の幸福、貴女に對する常々の强い尊敬を忘れる樣な事がありませうか！　あゝそんな事があるものですか！　貴女を侮辱したのは私ではありません！　其樣な覺えは少しもありません！　若し私が其時ほんとに罪があるなら、悔いは一生私から離れますまい。

あゝジュリイさん！　惡魔が、人間としてはあまりに幸な運命を妬んで、其運命を葬さうと私の姿をして出て行つたのです、そして私をより、衰れなものとする爲に、私の心臟を置いて行つたのです。貴女が私をお責めになるのですから、私の犯したけれど、私の意志が少しも關つてゐない惡い行は、もう再びしますまい。私は心を打明けて良い等と思つてゐましたけれど、實の所私の心をあんなに酷く裏切る似酒ももうこれでやめます。私は貴女によつて、堅い誓ひを致します、今日からはもう、私は死の毒藥と同樣酒は一生願みませんと申上ます。もうこの酒は私の感覺を眩まし、私の唇を汚がし、知らずに醉つた餘り、罪な行爲を爲る事はありますまい。若し私が此尊い誓ひを犯したら、「愛」が其れに相當する罪を私に與へるでせう！　其苦しみとは、一時に貴女のお姿を永久に私の心から出して、無關心と、絕望とに其れを放棄する事であります。

こんな輕い罰で私の罪を償はう等と私は思つて居るのではありません。これは罰をうける準備です。本當の罰はこれ位ではありません。私は貴女が相當な罰をお下しになる樣にお願ひします、私の悔いを輕くする爲に、私は之をお願ひしますよ！　犯された愛は償つて、靜まるものです。私をお嫌ひにならずに私を罰して下さいまし。私は少しも苦情は申しませんから！　正しくそして嚴しくなさつて下さい。どうしてもさうしなければいけません！　若し貴女が私に生命だけ許して下さるなら、貴女のお心以外のものは皆お奪りになつて良いんです。

書簡第五十二　ジユリイから

其愛人の爲に禁酒なさるのですつて？　あゝこれが犧牲といふものですわ！　あゝ妾はこの四つの郡中貴君程愛情深い方はいらつしやいますまい。見榮だけで、水を飲む樣になる佛蘭西式の若者達が此國にも居ないのではありませんが、戀の爲に水を飲ませられる方は貴君お一人でせう！　スパイスのいやに氣取つた人達に見せつけたい例でございますわ！　妾は貴君が無暗と御酒を召し上がるのを聞き知つて居りましたが、昨日、ドウ、ヴィユランさんの所へおよばれになつた時には、貴君は御飯を召し上つた後でも、酒を六纏位少しも手をつけずに前に並べて居らつしやつて、御一緒に會食の方がコートのお酒をくれとお望みになつても、貴君は水すらもくれとは仰言いませんでしたといふ事をお話に聞きまして、妾は身が引き締る樣な心持になりましたのよ。妾の手紙を差上げてから、もう三日間も貴君の禁酒は續けられたのですわ。三日間には少とも六度位は正食（譯者註　六度と書いたのは外國の習慣として、酒の出るのは晝か晩かに限つてあるからである）をなさる理です。扨てこの患質にお守りなつた六度の御食事に、更に六度が附け足されませう、それから六度はびく〳〵しながら又次の六度は恥ぢらひながら、更に次の六度には習慣となり、其の次の六度には遂に貴君は大丈夫堅固な禁酒の良習慣をつくり上げておしまひなさいませうよ。戀が唯一の光榮であります所の苦しい艱難には、どの位澤山な動機がある事でせう！　戀といふものは、それに屈して居らないもの迄自分の光榮とするものでせうか！

マア！　これば下らない冗談を申しましたわね！　もう止しませう！　貴君は生まれつき、眞面目な方ですわねえ。妾は長い冗談の爲に貴君が、肥滿症の人が長い散歩をして、のほせる樣にのぼせてお了ひになるのに氣が附きました。けれど妾はアンリー四世がマイエンヌ公に復讐した樣に、貴君に復讐を致しました理でムいます。けれど貴君の女王（譯者註　ジユリイのこと）はやはり一番良い王樣のアンリー四世の寬大さを眞似ようと思つて居るのでございます。ですから、悔いや申譯をなさつた爲に、貴君が罪の深さを飽くまでもお感じになるのを恐れて居ります。其悲は立派に償はれて居るのでございますもの。妾もあの事は早く忘れ度と思ひます。何故と申しますれば、長く妾が忘れずに居りましたら、それはもう寬大さではなくて忘恩裏切りでございますもの。

禁酒の御決心は、貴君のお思ひになる程妾にはえらいものとは思へませんの、何故と申しますに、劇しい情愛はこの樣な犧牲には一々拘つて居られませんものの。それに愛は決して阿諛から育つものではございません。其上、しようと思ふ時に直ぐあきらめられる樣に、永久的な禁慾に馴れて置き、不確な未來から今の內に、利を引き出すのには、勇氣よりも寧ろうまい手だてが必要なのです。え！　けれど、感覺を撫で柔かにする樣なもの丶內には、快樂に其亂用は付き物ではないでせうか？　酒に醉ふ事は、飲酒の趣味のある方には免かれない事ですわ！　全く放棄し、斷念して了はなくてはなりません外に何の中庸を得て

物を用ひる方法も示してくれない哲學は洞ろな、むしろ酷いものではありますまいか？

若し貴君が貴君のお約束をお守りになるならば、貴君は貴君の罪の無いお樂しみをお奪りになる事になり、生活する狀態が變つて、貴君の御健康が惡くなる事があるかもしれません！　若し貴君がそのお約束をお破りになるなら、愛は二重に汚され、貴君の名譽までがその苦しみをうける事になりませう！　此時に妾は妾の權利を用ひようと思ひます。それで妾は、「少くも酒を飲まない」といふ誓ひは、妾の許可なくして爲されたものとして貴君から取上げます。が其上妾は、妾がこれから御命じ致す以外の事はなさつてはいけませんと申上ますわよ。次の火曜には、妾の所でエドワード卿の音樂會がある筈でございます。そして立食の時に妾は、貴君に純粹な、そして美味しいお酒をコップに半分差上けますから、貴君は妾の前で、妾の見て居る前で、美の神樣に數滴淨めの雫をお注ぎになつて、そして飲んで頂き度いものです。こうして、貴君は御飯の時毎に、泉の水で薄めたお酒をお飲みになる習慣をつけて下さいまし、丁度、貴君の面白いブリマタルクが「ニンフと遊んで夢中になつてゐるバッカスの熱中を靜め度い」と云つて居りま す樣に。

火曜の音樂會の事に就きまして、あのほんやりのレジャニーノさんは、妾かもう伊太利の歌も唱へるしあの方と二部合唱も出來るといふ事を御存知なのでせうか？　あの方は妾と貴君とを一緒に唱はせ樣と思つて居らつしやいますの。つまりあの方の二人のお弟子を一緒にやらせてみたくていらつしやるのでせう！　けれどこの二重唱の中には、心が戀をして居る時には、お母樣の前では申されない樣な危險な Bis（私の善き人）が所々に在るのでございますのよ。ですからこれは從姉の所でやる演奏會の時に致しませう！　妾がやすやすと伊太利音樂の面白味を覺えましたのも、兄樣が伊太利の詩に妾の趣味を導いて下さつた事や貴君と御一緒に伊太利の詩の調子がわかると申し合つて悅こんで居りました事や、レジアニーノさんから云はせれば妾が抑揚が大變うまいのだ想ですといふ事に、其のお蔭を蒙つて居ると存じます。いつも練習致す毎に、妾は先づタッツーの幾つかの音階（オクターヴ）を、メタスターゼの幾つかの場面を讀むのです。先生はそれから宣叙調（レチタティヴォ）（譯者　歌の中で唱はずして臺詞の如く言ふもの）を妾にお云はせになつたり、御自分についてやる樣にして下さいますの。其次に唱つたり、讀んだり、續けるのでございます。これは佛蘭西の宣叙調（レチタティヴォ）をやる時とはまるで違ふ所だと思ひます。其次に注意致しますのは、均しい音は正しく、偏らぬ樣に、平滑にやる事なのでございます。これは、妾が前から聲を斷片的に出す癖がある爲に可成り六ケ敷しいのです。それから節廻しはどうかと申しますに、聲の正しく、柔軟に、感情的な表現や、強められた音色や、其他種々ものか歌のやさしさ、調子の正しさから自然と出てまゐります。歌の調子が良いものですから、一番六ケしい事すらも敎はらなくて良い氣が致します。主旋律（メロディー）の性質は言葉の音と非常に似て居ります。同時に大變適朗とした變化がありますし、歌をやす〳〵と理解する爲には、低音（バス）を聽き、自身で唱へれば足りる程です。總ての情熱が其メロディーの中では、鋭い強い表現を持ちます。佛蘭西の歌の後を引く樣なやり

にくい抑揚と反對に、伊太利のは平常やさしく、なだらかで、しかも力强く、人を感動させます。其上あまり努力なしに直ぐ唱へます。つまり此音樂は、魂を動かし、胸を鎭めると思ひます。全く妾の心臟にも肺にも効のあるものでございますわ。では火曜日にね、妾の親しいお友達、妾の先生、妾の償罪者、妾の使徒の貴君、いゝですか！　あゝ何故貴君は妾のもので無いのでせう、こんなに澤山な稱號を差上げられても、「妾のもの」とは何故云へないのでせう？

二伸、忘れましたから申上げますが、亡くなられたシアイヨーさんと一緒に二年前程に致した樣な、舟でのブロムナード（散策）を何日かなさいませんか？　ほんとにあの頃には貴君は臆病な方でしたわね！　舟から出る時妾に手を貸して下さらうとして、手を慄はせてお居でしたわねえ！　あ！　ひどい方！　貴君は隨分お變りになりましたわ！

書簡第五十三　ジユリイから

あゝ皆、妾達の計畫が狂つて了ひました。妾達の期待も裏切られて了ひました。妾達は盲目的な運命のつまらない玩具なのです。人を嘲ける樣な希望の悲しい犧牲物なのです。いつも、いつも先へ先へと遠のいて行く快樂に、決して到達する事無く手をとどかせ樣とあせつて行くのでございませうか？　あんなに待つて居りましたあのファンションの結婚は、クラランで行はれる事になつて居りましたのに、天氣が惡いので、町でする事になつて了ひました。ですから、妾達は一すお會ひしなくてはなりません！　妾にも貴君にも隨分日をつけて居る人が澤山居るのでございますから兩方で、同時に人目を逃れる事は到底出來ませんの。一方がうまく人目をのがれたにしても、他の者が一緒になる事は出來ません。そしてこゝにいゝ機會があつたので御座いますのに、酷い母樣が奪つてお了ひになりました。幸になれる筈の不幸な妾達が破滅する時ではございませんでせうか？　けれど妾の勇氣は阻喪するどころか、色々な障害が却てそれを激勵したのでございます。何かしら、新しい力が妾を活氣付ける樣でございます。若し貴君もこれをお感じになりますなら、今晩、今晩こそお約束を果し度いと思ひます。一度で戀の借財を皆お返へしし度いと思つて居りますの！　お考へになつて頂戴！　生きて行く事がどの樣に樂しい事であるか御考へになつてごらんなさいまし。何故妾はこんな事を唐突と申すのでせうか？　夫は妾が提議致します此方法は、どうかすると妾達を死に導く事もありますからでムいます。貴君がお恐れになつたらこの先をお讀み下さいますな。けれど、若し嘗てメイユリイの淵も恐怖させなかつた貴君のお心を、劍の尖も驚かす事が出來ないなら、妾の心も同じ危險を冒して、決して躊躇致しませんわ。ようムさんすか！

バビ（譯者註　既に出て來た人物。召使の女）は通常妾の室で寢るのですけれど、二三日位前から病氣なものですから、妾が大變世話してやり度いのに、無理に家の人達はあれを外の所へ連れて行つて了ひましたの。けれど、もう

餘程快いさうですから、明日あたりやつてまゐりませう！　食堂は母樣の室と妾の室へ行く昇り口から遠い所にあります。それで御傭の時には室所と食堂の外は家中誰一人り居りませんの。それに夜になりますと、此の頃は、夏ならまだほの明るい時分でももう眞闇でございます。この闇も道を通る人の姿を匿して了つて見えない樣にするには充分ですの。其上貴君は家に誰が居るか皆御存知でせう。

申上げることは之でもう充分でムいます。今日の午後ファンションの處へいらつして下さい、妾はそこで色々な事を說明し、必要な手筈を申上げませうから！　若し出來なかつたら、妾は手紙にしていつもの所へ置きますよ。この手紙も先日申上げた樣に其處で貴君のお手に這入るでせう！　兎に角誰にも知らせ度くない大切な事なのですから。

オ！　妾は貴君の心臟をドキ〳〵しましたねえ！　妾は貴君のお歡びが明にわかります、そして妾も嬉しいのです。いゝえ、妾達は幸福も味はないで此短い人生を終れるものですか！　けれど、この幸である筈の瞬間も死の恐ろしさに取卷れて居るのですよ！　一步あやまると大變な事になりますのよ！　危險事！　滅亡に一番近い隱家！　あゝ若し人に見つかつたら、もう妾達は失はれるのですから！　總ての物がうまく行つてそんな事が無い樣にしてほしいものですが……妾達間違ひは決して致さないことにしませうよ。私は傍りに父をよく知り過ぎて居りますから、卽座にその手で貴君が胸を貫かれておしまひなさることがないとは信じません。尤妾から先に手にかけますまいけれど、妾だつてもう免れつこはないのですから……では私は此危い日を御一緒に見るとことはないと確に知つてるながら、貴君を此危險にお會せ卓すのだとお信じなさいますか？

貴君の勇氣におたよりするのは問題ではございません、そんな事をお考へになつてはいけませんよ。貴君を防禦なさる爲に、武器なんか絕對に持つていらつしてはいけません。劍も勿論いけません！　持つていらつしたつて、無駄なのですから、何故つて若しめつかつたら、妾は貴君の腕の中にとびこみ貴君も妾をしつかり抱いて下さつて、離れずに一緒に殺され度いと思ひますわ！　こんな企圖なのですの。さうすれば死んだ方が生きて居るよりどの位樂しい事でせう！

一層優しい運命が妾達を待つて居ると私は期待致します。少くともそんな運命が妾達にくる筈です、そして幸運の神が私達に今迄のやうな不公平なことをしなくなると思ひますわ。貴君を貴君自身の仕合せにする爲にいらつしやいませ！　愛のやさしい庇護の下に、貴君のこれまでの「服從」と「犧牲」との御褒美を受けにいらつしやい。どうぞ快樂の中にでも其美しさは魂の結合から來るのであるといふ事を仰言りにいらつしやい！

書簡第五十四　ジユリイへ

この家に這入りつゝ、私の心はあとからあとからわき出る感傷で一杯になつて了うて居ります。ジユリイ

さん！　私は斯うして貴女の室に居ります、私は斯うして私の心が崇拝する總て物の聖堂に居るのです！　戀の炬火が私の足を導いてくれます。私は誰にも見付からずに通りました。戀しい所、幸ある所、以前には、あれ程やさしい目ざましで叱られ、燃える様な嘆息をこらした所！　此所で私の最初の戀心は生れ育てられ、そして今此の戀は冠を戴かうとして居るのだ！　汝此室よ私を不死に見つめる者よ！　私の幸福の目撃者ともなつておくれ！　永久に人の中で一番忠實な、そして幸な人の快樂を包んでおくれ！

この神聖な所は何とこの様に美しいのでせう！　皆すべての其處にある物は私を呑みつくす情火を養ふのです。あゝジユリイさん！　此室は貴女で一杯だ！　私の望みの焰は總ての貴女の殘された痕跡の上に擴うがります！　ええ私の官能は醉つて了ひました！　何か知ら淡い香りが、薔薇よりも甘い菖蒲よりも輕るい香りが總てから出て來ます。私は貴女の艶のあるお聲音が聞える氣持がします。貴女のお脫ぎになつた衣服のどの部分も私の劇しい想像は、衣服の匿くして居る貴女のお體の總てを現してくれます！　房したブロンドの髮を蔽ふ此の輕い帽子！　私がそれに一度も聽いた事の無い貴女の肩掛け！　華かだけれど單純な、そしてそれを着る人の趣味を偲ばるせ様な此の通常服！　柔かなお足が苦もなく這るこの入可愛らしい突かけ靴！　この衣を身につけ、かき抱く細い體！　何といふ蟲はしの胴であらう——二つの輕い輪廓の相合ふ時……ほしいまゝの姿……齒だつてこの印象の力にはかなふまい……なつかしい印象！私は接吻します、千遍も萬遍も……素敵だ！　けれど夫は歸宅なのだ……あゝ私はこの幸な手を胸にあて

てゐると心が高鳴りして居るのを感じます！　ジユリイさん！　私は貴女が見えます、感ぜられます、何處ででも。私は貴女の呼吸なさる空氣を呼吸します。貴女は妾の本體の中に這入つていらつしやいます！貴女の存在は私にとつては火の様に烈しく、苦しいのです私は待つて居られません！　あゝ早く來て下さい、私は失はれます。

インクをめつけて幸です！　この激しい情を靜め、興奮をまぎらす爲に私は私の感じた事を記します。あゝ音が聞へます、貴女のあのこわいお父様かしら？　私は卑怯では無いと思ひます！　けれど今は死ぬのが辛いのです。私の絕望は私を疲らせる熱情と同様に劇しいのです。神様よ……私はもう少し生きて居たいのです。あとはおまかせしますから！　あゝ望み！　恐れ！　心の酷い動搖……誰かゞ戸を開ける……這入る……あゝ彼女だ……彼女だ……私は一寸見た、私ははつきり見る……戸を閉める音がする……あゝ私の心、弱い心……お前は、この興奮に毀れて了ふ……あゝもつとしつかりして、身を呑んで來る幸福をうけよう……

書簡第五十五　ジユリイへ

あ！　貴女！　死にませう！　死んで了ひませう！　總ての幸福を皆めて了つた、殘りの味口のない若さが私達に何の役にたちませうか？　思つても夢の様なあの晩私の感じた事を說明して下さい。斯うして

過ぎた生活とはどんなものか云つて下さい。私が貴女と一緒に今感じたばかりの歓びの毫も含まれてゐ無い生活などは取り除いて下さい。私は樂しみを味ひました。幸福を抱きました。あゝ今迄私は洞ろな根底の無い夢をしか見てゐなかつたのです。私は子供らしい幸福しか想像して居なかつたのです。私の感覚は私の不作法な魂を濫用して居たのです。私は只感覚の中にだけ最高の善を認めました。けれども其汲盡された快樂すら、私の幸福の序幕に過ぎながつたのです！　あゝ自然の傑作たつた一つの傑作！　ジュリイさん！　一番劇しい戀のあらゆる大歓喜すらもそれに比らべて不足を感ずる、優しい財産！　いゝえ私が一番残り惜しいと思つてゐるのは此大歓喜ではありません！　噫いゝえ、私が百萬の生命をも打込むこの陶酔的な大歓喜をも必要あらば退けて下さい、けれど其様な歓び以外のもの、歓びを百萬遍も消す所のものを私にもう一度味はゝして下さい！　貴女が仰言つた、又貴女が私に味はさせて下さつた、親しいの結合を私にもう一度戻して下さい。御互の胸を打ち明けてうつとりとなつたときの夢心地を、私にもう一度させて下さい。貴女の胸の上の盤はしの眠むりを、もう一度ねむらせて下さい。あの無類の甘いうつゝ心と杜絶え勝ちの嘆め息、甘い涙、みだらな疲労が長い間味はして呉れた接吻、貴女の胸に合ふやうに、出來て居る此の私の胸を、貴女の胸に押しあて下さつた時のあのやさしい嘆息を、もう一度聞かして下さい

ジュリイさん！　貴女の鋭い感受性によつて、他の人の感受性を巧みに御判斷になさる貴女！　貴女は私が以前に感じたものは眞實の戀だとお思ひですか？　私の愛情は昨日から變つて了ひました。其れは前の様なせき込んだ所は無く、却つてやさしく、なよやかな美しいものになりました。私達が平和に私達の戀を、又闇い恐ろしい未來―それに由つて現在がなほ更なつかしいものなのですけれど―やの事を話し合つた時間の事を憶へていらつしやいませう！　けれどあまり短い時間でした、そして何か悲しさが加つて私達の話をあれ程に感ず可きものにして了ひました。私は心が靜かでした。けれど私は貴女の傍に居りました。貴女を私は愛して居りましたけれど私は何と望んでゐませんでした、貴女のお顔を直ぐ傍に、貴女の吐息を私の頬の上に、貴女の腕を私の首に、感ずる事より外私は幸福といふものを知りません！　私の感覚は何と靜かだつたでせう！　何といふ純粋な、絶えない、宇宙的な快樂なのでせう！　快樂の魅力は魂に在るのです。そこからは出ません、そして永久に續くのです。戀の喜樂と此穏かな心持とはどうして此様な違ふのでせう？　この平和な氣持は、生まれて初めて私は貴女のお傍で感じました。けれど私の感じた、人にはわからない變化を判斷して下さい！　一生中一番樂しい時です！　この氣持こそ一生中つゞけて良いと思ふのです。ジュリイさん、前に私は貴女を愛して居なかつたかどうか、今私は貴女を愛して居ないか、どうかどうお思ひになります？

私が貴女を愛して居ないかもしれない？　何といふ疑問なんです！　私はそんなら今死んでゐるのかしら？　私の生命は貴女のお心と私の心と兩方に在るのではないでせうか？　貴女はもう何よりも私にとつてはなつかしいものだ！　私は私の愛の陶酔の中で貴女をもつと優しくお愛しする力を得たのです！　ほ

んとに、私は貴女に對して前よりずつと安らかな心を持てる樣になりました。前と違つたものと愛の深い愛着を貴女に私は感じます！　この感情は滅ずる事無く增すでせう！　友情の快さは戀の狂亂を鎭めます。凡そ愛といふ名のつくものは皆貴女と私とを結びつける力のあるものです。いゝ私の戀人よ！　私の許婚よ！　私の妹よ！　私の友よ！　男の人の心には一番なつかしい總ての名を呼んでみても、私の感じて居る事と言盡すことは出來ません！

私の卑下を恥との中に抱いて居つた一つの懷疑の念を私は告白しようと思ひます。この事は、貴女が私よりも愛の深い方である事を證する事になりませう！　えゝジユリイさん！　貴女が私の生命と私の體を構成していらつしやるのです。私は私の心の働總てで貴女を愛しますけれど、貴のお心は尙それよりも愛情深くていらつしやるのです。貴女のお心には愛がより深く滲み込んで居ます。よくそれがわかります。其のお心が貴女の美しさを生氣づけ、貴女のお話に力を及ぼすのです。此の心が貴女のお目にやさしいけれど、人の心にしみこむ樣な力を與へ、貴女のお聲に、あんなにやさしい抑揚を付けるのです。其のお心がある爲に貴女が居らつしやると他人の心に、知らずに居る間に貴女のやさしい情調が與へられて行くのです！　私はそれには隨分遠いと申さなくてはなりません！　私は樂みたいし、貴女は愛したくて居らつしやる。私は熱情を貴女はお持ちなのだ。私の總ての劇しい歡びは、貴女のやさしい憂ひに償しません！　貴女の心が育てられる感情こそ、唯一で、最上の幸福です！　私が此樣な純な快樂を味つたのは昨日初めてなのです！　貴女は、御自身中に在る、何とも云へぬ、魅力の或るものを私にお與へになつたのでした。私は貴女のやさしい吐息と共に貴女から新生命を吹き込まれた氣が致します。お願ひです、貴女は貴女の爲さる事を早く濟ませて下ざい。そして私に殘つてゐる總ての私の心をとつて下さい。そして貴女は貴女の心を正しい所へ置いて下さい。あゝ天使の美、天の魂、貴女の美しさを讃へるのはやはり、貴女の感情でなくてはなりません！　貴女だけが眞個の愛を人々に與へられる力です！　そして又貴女だけが夫をお感じになるのです。あ！貴女の心を下さい。ジユリイさん！　貴女にふさはしい樣に貴女を愛する爲には。

書簡第五十六　クレールからジユリイへ

ジユリイさん！　妾は大事な事を申し上げなくてはなりません。昨日の夕方あの方（譯者註―ジユリイの戀人）がエドワード卿と爭論をなさつてどうかすると、思ひがけない事になりさうですの！　ドルブさんが其場に居らつしやつて、事の成り行きに御心配の樣で、今朝妾の所へいらつして下さつて、次の樣な事をお話しして下さいました。

ドルブさんも御一緒にエドワード卿の所で御晩を召し上りになつたのです。二三時間程の音樂がすむと、皆さんが、バンチを召上ることにきまつて、お飮み始めになつたのです。所があの方（ジユリイの戀

人）は一杯しか召し上らずに、しかも水をわつてお飲みになつたのです。外のお二人は仲々おやりでしたが、どうですか？　マアこれは他日のお話ですわ。ドルブさんは御自分では、醉はなかつたと仰言いましたが、所で皆さんのお話は自然と貴女の事に落ちて行きました。夫は、あのエドワード卿は貴女の事以外の話は、し度く無いのだといふ事を貴女御存知無いでせう！　あの方には、エドワード卿の打明けたお話があまり面白くなかつたのでせう！　それをつまらなさうにして聞いていらつしたのださうで、到頭パンチにお醉ひになつたエドワード卿は、あの方の冷やかな御様子が癪に障つたのでせう、貴女の氣取つていらつしやるのをおひやかしになりながら、けれど貴女は人の思つて居るよりは氣取つてはいらつしやらない、といふのは、無口で何にも云はぬ男は自分よりも良く待遇されて居る、と仰言つたのです。するとあの方は——貴女もあの方の逸り氣を御存知でせう！——半分喧嘩腰で、夢中になつて議論をお始めになつたのです。ボンストン卿は、醉つてゐらつしやるので、足をお挫きになつて、どうしてもお座りにならなくてはなりませんでした。おみ足が直ぐはれて來ました。けれど斯うして漸く爭ひは靜まつたのですが、ドルブさんが色々仲裁なさつても、これには及ばなかつたのです。ドルブさんは其場の樣子を注意していらつしたので、次の樣な事がわかりました。あの方は室をお出になる時、エドワード卿のお耳にお近づきになつて、斯う仰言いました。「君の足が直つて出られる樣になつたら、知らせて呉れ給へ、僕の方から賃ねる樣にしても良い」と。所がエドワード卿はからかふ樣な笑ひ方をなさつて「よろしい、直きになほる」とお答へになつたのです。あの方は「又會ひませう」と冷やかに仰言つてお歸りになつたのです。ドルブさんはいづれ此のお手紙の事を貴女に再び仰言るでせう、其時にもつと細かい所を御說明になるでせう！　この呪はしい出來事を揉消して了ふ方法をお考へ出しになるか、又妾がそれについて手を奈何下したら宜いか仰言つて下さるのは、貴女の深いお考への任務なのですわ。この手紙を持つて行つたものに何でもお云ひつけになつて下さい。使ひのものは何でもお云ひつけ通りに致しますから。えゝ秘密な事でもお話しになつても大丈夫です。

ほんとに大變な事ですのよ。友情から見て申上げますが、貴女のおかゝわりの此いきさつは、この町の樣な小さい町ではすぐ擴まつて了ひますのよ。二年前からあの方との御關係は、まだ皆の噂に上つて居ないだけ、大變奇蹟の樣に幸福なのですけれど。用心なさらないと、忽ち人の噂の種になりますよ。若し貴女がもつと愛せられて居らつしやらなかつたら、もうとつくに人の口にのぼつて居たに違ひありません！　貴女の事を惡く云つて騷ぐのは、惡い事であり、人から嫌らわれる理由であつた程、貴女の惡口するのは、人から恐れられて居りました。けれど物には皆限りがありますわ。ですから、戀愛が人に知られないといふ事に就いての限界も、やつぱしありやしないかと恐れて居ります。エドワード卿があの樣に仰言つたのも、何か惡い噂があるからではないかと思はれますの。よくお考へになつて頂戴！　ル・グは、

先日あの方が朝の五時頃に貴女の所から出て行らつしやるのを見たと申して居りますの。幸にあの方がこの事をまづお聞きになつて其男の所へいらつしやつて、秘密にして貰ふようになさつたのですけれど。皆は一時は默つて居りますけれど、どうなる事でせう！　貴女のお母樣の御心配は日に日に募ります。貴女も度々お聞きでせうが、可成ひどく今度は妾にも色々とあの事に就いて仰言いますのよ。お伯母樣はお伯父樣の劇しい御性質を恐れておいでなさりはしませんか、未だ伯父樣に直接にはあの事を仰言つてをらないことは確です。けれど伯父樣はきつと、貴女が伯母樣から貴女に傳はつた交際が此あやまちの主因だと、いつも仰言るやうになるとすればそれだけ又伯母樣も愈々伯父樣にはあの事を思ひ切つてお打明けにならうといふものです。

私はもうくだくだしくは申しません、まだ時もございますからよくお考へになつて下さい。人の噂にのぼる前に、あの方をお遠ざけになつて下さい、さうすれば日に日に旺になる疑ひもきつと下火になつて、どうとも出來ませうから。何故と申しますに、皆はほんとの所を何も知らないのですから。六週間後一ケ月後にはもう遲いでせう！　若しもお父樣のお耳に何か一寸した事でも這入りましたら大變です！　御家の名譽に沒頭なさつてゐる頑固な老軍人の怒りと、耐へ忍ぶ事の少しも出來ない劇しい若い方の性急とから出て來る事件こそ、恐ろしいものですよ。けれどどうかして、エドワード卿の事件から片付ける必要がありますわ。この事件が濟まぬ内にあの方に遠ざかる事を仰言つたつて、きつと「いやです」と云はれて了ひ、唯あの方を苛立たせする事にのみなるのですから。

書簡第五十七　ジユリイから（戀人へ）

妾は貴君とエドワード卿との間に起つた事柄を細かに承知致して居ります。色々の事實をよく考へてみて、妾は、此の場合貴君はどうなさらなくてはならないかを、貴君の平常云つて居らつしやる考へ方で御忠告したく思ひますの。そしてこの場合、貴君も其考へをつまらない否定などをして庇ばつたりなさらないだらうと信じます。

妾は、貴君が擊劍を御練習なつたとも、歐州で劍の使ひ手をして聲名ある方とお張り合ひになれるとも考へて居りません。あの方はもう今迄、五度も六度もお戰ひになつて、いつも、相手を殺し、傷け、又は武器を棄てさせになつた程の方なのです。貴君の居らつしやる樣な狀態にあつては、劍術は問題外で、勇氣が大切であり、貴君を嚙つた强い人に復讐する最良の方法は、殺ろされる事ですといふ事も知つて居ります。「正しい格言について考へてみませう！」貴君は妾に、貴君の幸福と妾の幸福とは、生命よりも貴君には尊いものだといふ事を仰言るでせう！　此原則から妾達は推論して行かなくてはなりません。

貴君の事に就いて先づ申しませう。妾だけが問題の筈の爭論で貴君は個人として、どこを侮辱されたとお思なすつたのですか？　仰言つて下さい！　勿論貴君は妾の爲に辯護しなくてはならないでせう、けれ

どこの事については今申し上げますが、つまり、若し貴君が妾に愛せられて居るといふ疑ひをかけられて侮辱だとお思ひにならない限りは、此の様な爭論は貴君の幸福には何の關係の無い事なのです。これを貴君は不承知でいらつしやるのでせう！　勿論貴君がひどい嘲罵をなさつた後で、確かに、貴君は侮辱をお受けになりました。妾は軍人の家に育ちましたから、この恐ろしい問題は幾度も耳にして居ります。妾は他の暴行の應酬としてなされた暴行は、決してその侮辱を消滅せしむるものではなく、又最初の侮辱されたものが獨り、被侮辱者の位置に殘るものであることを見逃しは致しません。思ひ掛なく起つた事件でも同樣です。其場合には攻擊者だけが罪人で、自分を防いで相手を殺したり傷けたりした者は、決して殺人罪を犯しはしないのです。

妾の事に就いて申せば、妾は、エドワード卿から侮辱された事になるのでございますの。貴君は妾の事を庇はうとして、どんなに熱中なさつて、無茶な事をなさつたか憶えておるでですか？　貴君はあの方の讒りを更に深くなさつたのです。あの方は別に大變間違つた事は仰言ひませんでした。貴君は妾の名譽を洞な名譽の犧牲になさつたのです。貴君は決闘家の名を得ようとなさつて、愛人の心をお傷けになるのです！　貴君が妾を辯護して下さる事と、妾のほんとの辯護との間にどの位の關係があるのでせう！　貴君はあんなに熱中して妾を辯護して下さる事が、妾達の間に何の關係も無いといふ確實な證據なのだとお思ひなのですか？　貴君は妾の戀人で無いといふ事を示す爲に、決闘して妾の夫になればそれで足りるとお

考へなのですか？　エドワード卿の仰言つた事は、貴君の行爲よりも惡くはありません！　あんな事をお しやりになるのは貴君が獨で、エドワード卿の御言葉を公になさり、お確めになると云ふものですわ！　決闘なさつてもあの方は、貴君の劍はお避けになれます。けれど妾に對する風評、妾の生涯の幸福に、貴君の爲に受ける、痛手を避けられないでせう！

これは貴君の御反對になる事もお出來にならない理由でございます。貴君は確に理性を習慣で固しつけてお了ひなのですわ。貴君は習慣といふものは、妾達を一般にひきずり込む、逃れられないものゝ一つであると仰言いました。そしてどんな場合でも、否定する力は全然無く、何か事件が新生面を展開する時には人は戰ふか、不名譽を蒙るか何方かである、夫は避けられないと貴君は仰言いました。尚申しませう。以前には貴君は、眞個の名譽と、表面たけの名譽との區別があると、妾にある重大な事が起つた時に仰言つたのを憶えていらつしやいますか？　この區別の中でのいづれに妾達は今の狀態を入れたらよろしいでせうか？　妾にとりましては、こんなに問題にする必要はないと存じます。人の喉首を締めて殺す名譽と、正しい心を示す名譽との間に、何で共通な所がございませう！　心に崩して居ります所の、眞個の名譽に他人の根も葉も無い論は何の力を及ぼすでせう！　人が實際持つて居る德といふものは、嘲罵する者の虛言を受けて消えて了ふものでせうか？　醉つはらつた人の罵る語に、どうして眞個の意味がありませう！　賢者の名譽といふものは、彼の出會ふ最初の野人に左右されるものでせうか？　決闘は人の

氣のある事を示し、他の總ての惡德に對する恥辱と、誹謗とを消せるものでせうか？　貴君はさう仰言いますか？　若しさうなら、この樣な御決心になつたものは、どういふ名譽の爲に、又どの樣な理由でそれを正しいとお認めになるのかお質ね致します！　この事に關しましては、僞善者は僞善者でなくならえとして戰ふばかりです。虛言つきの言葉は、劍の先でどうかうする事になると、眞實になるものです。若し貴君が他人から殺人だとお云はれになれば、貴君は、それは虛言であると仰言つてその男をも殺しに行らつしやるでせう！　さうしますと德、不德、幸、不幸、眞理、虛言等が皆一つの劍の打合ひから、出て來るわけです。武器を置く室は總ての正義の位となります。さうしたら力より外の理由は無く、殺人より外の理由はございますまい！　侮辱をうけた人達が復讐としてする事は皆、相手を殺す事になるのです。そして總ての侮辱は、同樣に、侮辱者か又は被侮辱者の血で洗はれる事になります。ねえ、狼に推理が可能としましたら、これ以外の規則を作るでせうか？　貴君のお立場として、妾があまりに不合理な事を云つて居りますかどうか御判斷ななさつて下さいまし、では貴君に問題なのは何でせうか？　それは貴君がほんとに虛言をお云ひになつた場合に慣りの否定をお受けになるのが左樣なのです。貴君は眞理を言つた者を罪しようとして、それを言つた者と共に眞理を殺してお了ひになるお積りなのですか？　決闘に運をお試しになつて、貴君は虛言の證明者として神樣を引き合ひに出さうとなさるのですか？　貴君は決闘の介添人に『不正義の方を助けて、虛言を勝たせて下さい』と仰言らうといふのでございますの？　こんな冒

瀆を貴君はちつともお感きになりませんか？　斯麼馬鹿らしいことをちつとも厭だとはお考へなさらないのですら？　あゝ非難ばかりを氣にして、惡德を畏れないあはれな名譽！　貴君のお心が否定するに先立つて人に否定される事に堪へられない樣に貴君をする名譽！

貴君の御持論としては、人は其讀んだ本を利用しなければならないといふのでございますから、貴君も御利用なさつて下さい。地球が英雄豪傑で一杯になつたら、人は救ひを求める事がありませうかどうかお考になつて頂戴！　古代の勇敢な人達は個人的な嘲罵を個人間の爭鬪で復讐しようと考へて居りましたかしら？　シーザーはカトーにボンペイがシーザーに、共に互ひに侮辱し合つたと云つて、決闘狀を突り合つたでせうか？　ギリシャの大將達は棒で人を殺して名譽をなくしたでせうか？　時代が變り風俗が變りました。けれども善い風俗しか殘らないものであります。ら樣な風俗であるかどうかを氣にかけて、善に導かうとしないでせうか？　名譽は不變なものでございますす。時と處又偏見に左右されるものではありません。失くなつたり、再び生まれるなんて事は絶對にムいません。名譽は正しい人の心に於て永劫な源泉を持つのでございます。そして其人の義務の變らない規則に於て、永劫な源泉を持つのでございます。若し地上で最も文明な、最も勇敢な、最も有德な人民が決闘といふものを知つてゐませんのでしたなら、決闘は名譽を基礎とした制度では無く、その恐ろしい始源にふさわしい野蕃な恐ろしい風俗だと妾は申しませう。正しい人は、自他の生命にかゝはる場合に、その風

俗に從つて身を處するものか、又さうした場合には風俗に從ふよりも、寧ろそれを破る眞の勇氣はないものかどうかお考へになつて下さいまし。貴君のお考への樣にすれば、風俗に從つて行はふとする人がそれに反對な風俗の土地ではどうするでせうか？　メッシイナとかナーブルでは、道の曲り角に人を待伏せして後から短劍で突き殺さうと致しませう。つまりさうするのがあの國では勇敢な事と目されて居るからでムいます。名譽は敵から殺されるのではなくて、敵を殺す事であると其處では云はれて居るからなのでムいます。

どうか名譽といふ聖い名と諸德を、劍の先へかけて決定し、馬鹿に強い惡人共を作る爲にのみにある樣な恐ろしい偏見と混同しては下さいますな。假りに一步をゆづり、決鬪が心の正しさに補助する所があるにしましても、心の正しさに勢力のある所では其樣な手助けは無用ではムいますまいか？　死の危險に身を曝して、正しい人たることを避ける人について何と考へませうか？　恥と、名譽とが少しも邪魔して居ない罪は、僞りの恥、非難を恐れる心とで覆はれて、愈々大きくなりはしますまいか？　此の誤つた考へが在る爲に、人は僞善者に虛言者になるのです、この樣な思想があればこそ、友達からのつまらぬ、忘れなくてはならぬ樣な謹しみの無い言葉や、自分が受けても苦情も云へない程自分に相當な叱責等をうけたからと云つて、其友達の血を流させる樣になるのですわ！　こんな事があるから、苦しみつかれて、おづ〳〵してる娘を、地獄の苦しみに陷れて了ふのです。この樣な事があるものだから、母の手に劍をとらせ其やさしい果實である子に對するやうなことになるのです……妾はこんな恐ろしい事を考へますと、氣が遠くなつて行く樣な心地が致します。妾は少くともこの惡い事しか教へない、又自然を恐れて慄えさせる樣な恐ろしい名譽を妾の心から取除いて下さらうとして努めて下さる方にはほんとに感謝致しますわ！

貴君もどうかお氣をおとり直しになつて、人の一生を論議で攻擊し、貴君の御生命を、何の正しい根底の無い危險な、野蠻な氣まぐれを滿足させる爲に、危ぶない所にお向けになる事は、許さる可き事でせうかお考へになつて下さいませ。そして此樣な場合に血を流した人の悲しい思ひ出は、其の血を流した人の心の底で叫ぶ復讐の聲までも、止ませて了へるといふ事もお考へになつて頂戴！　意識的殺人程恐ろしいものはありませんのよ。若し諸德の根底が人道だと致しませば、其隣人の生命をおびやかしたりする、血に飢ゑた腐敗した人達に就いて、妾達は一體どう考へたら良いのでございませう？　貴君が以前に外國へ仕へるといふ事に就いて仰言いましたわねえ。市民は其生命を國家の力によつて保つてゐて、法律の許す所なくして、防禦の爲とは云へ、其生命を好き勝手に處分する權利は持つて無いのですといふ事をお忘れになりまして？　貴君！　若し貴君が德を心からお愛しになるならば、德の教へる慣しに從つて下さい、人々の慣しには從つては下さいますな！　仲々やれぬ不便な所があつても良いと思ひます。德と云ふ名は貴君にとつて空な名なのでせうかしら？　德を行つて何の悔いる所が無くなつて初めて、有德な人となるのではないでせうか？

不便な事つて一體どんなものでせうか？　他人の苦しむのを見て欣ばうとし、常に新しい話題を求めて、るる樣な、暇のある、のらくらした人達や、考への無い惡い、人達の不平がそれです。それは全く困る大きな原因ですわねえ！　若し哲學者や賢人が人生の諸事に於いて、群盲の愚かな論議によつて身を律して行くのでしたら、つまりは平凡以下の人となる爲の此等の學問の諸官は何の役にたちませう！　貴君は死を恐れると云つて誹られるのがお嫌やで、義務、尊敬、友情に對する感情を犧牲になさらうといふのですの？　物をよく考へて下さい。さうなされば死を恐れるよりも、死を恐れてゐると人に譏られるのを恐れる方に、澤山の卑怯さがあるのがおわかりになるでせう！　僞善者や、臆病者はどうしても人に勇敢だと見て貰はうとします。

Ma verace valor ,ben che negletto,
E di se stesso a se freggio assai chiaro.

（されど、誠の勇士の心は、他人の證しを求めずして己よりして、其光榮を招き出すなり。）

死に面して恐れない風をしてゐる人は虚言をついてゐるのですわ。誰だつて死ぬのは恐れます。これが感性ある動物の大きな法則なのですもの。この事が無ければ總ての可死の屬は皆直くに絶滅して了ひますわ。この恐怖は自然の單純な運動であり、曾にそれ自身に於いて無關心なもので無く、更に良いものであり法則にピッタリ嵌つて居るものなのですの。此恐怖を恥かしいものに、輕蔑しなければならぬ樣にするのは、夫は其恐れが時とすると、妾達が善く吾々の義務を行ひ、果す事を妨げる事があるからであります若し卑怯さが決して德に對して障碍でありませんでしたら、夫は惡德でなくなります。確に、其義務よりも自己の生命に執着してゐる人は堅固な道德家ではありますまい。けれど、貴君理由があると誇つてゐらつしやる貴君！　罪を果す爲に死を冒す事に何の樣な價値があるかお教へになつて下さい！

決鬪するのを拒んで輕視されるのが本當ならば、どの樣な輕蔑を一番恐れなくてはなりませんかしら、誇をして輕蔑される事をかしら？　惡をして蔑ろにされる事かしら？　自己に對する自尊心の強い人は人のするほんとの譏りには敏感なものです。そして眞個の意味で譏られるのを恐れるのです。何ぜかといへば善や正直やは人間の判斷によるものではなく、事物の性質だからでございます。貴君が今なさらうとしてゐるらしやる行ひを全地が肯定しても、地はやはり恥かしく思つて居るでせう。けれど德によつてその樣な行爲を愼むのを誹謗せるのは間違でムいませう。正しい、そして其生活には汚點の無い、又一度たりとも卑怯な樣子をお見せにならぬ樣な人は、其の手を殺人で穢す事などは拒絶なさる筈です、その方にとつては名譽が第一の事なのですから。祖國にいつでも仕へようとして、弱い者を保護し、最も危險な義務でも常に充さうとし、其愛する正義は、自己の血を流してしても守らうとして、其方は眞の勇氣が無くては得られない確固とした所を其行爲の中にお見出しになります。その方はお心が安らけくていらつしやるから、

頭を高くして平然としてお歩きになるのです。敵が來ても逃げず、それかと云つて敵を求める樣な事もなさいません！　他人は直きに、其方は死よりも惡を行ふのを恐れてゐらつしやるのだといふ事がわかります。又その方は破滅よりも罪を恐れて居らつしやいます。賤しい噂がその方に對して起るならば、いつも其正しい御生活の日々の總數はそれを否定する實見者の頭數に劣らぬ位に澤山にムいます。ですから此樣な首尾一貫した行爲に於ては、一つの行爲を見て全般を窺へる理になります。

けれどこの穩かな態度が普通の人達にとつては辛らいものであるといふ理由を御存知ですか？　それはその態度をふさわしく仲々保てないといふ事です。もう決して人から後指をさゝれる樣な行爲はしないといふ必要なのです。若し惡い行ひをする事に對する恐れが其人を此最後の場合に止め得ないにしても、外の場合で止める事が何故出來ないでせうか？　もつと自然的な動機を假定出來る場合に……ですからこの事を否定するのは、德からで無く卑怯から出て來て居るのでございます。只破滅するの外ないなら謾つたところで差支へはムいません。他人に戰を挑み易い陰險な人達は、大低大變不正直な人達で、人に合然と自己に對する輕蔑を見せつけられるのを恐れて何か名譽のある事をして、自分達の全生活の恥を藏はうとして居る人達といふ事にお氣がお付きになりませんの？　金に代へて自分の血を賣る樣な職業の軍人達は別に致しませう、自分の位置を保たうとして、利害打算上から、どうすれば名譽に償するかを研究し、一エキユーすらも自分達の生命に償する物を見つけられる樣な兵隊さんは別の事ですわ。こんな人は好きに戰爭をさせて置くのです。あの人達が驅ぐ光榮程名譽の少ないものはありませんわ。馬鹿らしい習慣ですわねえ！　大きな罪で表面を塗りかくして、德の眞似をしてゐる賣物です、貴君の樣な方の名譽は到底あの人達には得られやしませんわ。眞の名譽は自己の中にあるので、世間の噂の中にはございません。其樣な名譽は劍でも盾でも防禦するものでありません。夫は廉潔な非難の無い生活に據つて守られるものでございます。そして此名譽の戰ひは其勇氣の點でも他に負けないものでございます。

以上の事で、妾がいつも眞個の勇氣に對して棒る讃詞と、僞りの勇氣に對して臭へる輕蔑とを貴君は同感して下さると存じますわ。妾は情ある方が好きです。妾はそんな人達が苦しむのを見てをられません！危險に向つて恐れて逃げる樣な臆病な戀人とは妾なら全然關係を絕つて了ひます。妾も矢張り外の女の方の樣に、勇の火は愛の火を旺にすると信じて居ります。けれど、私は勇氣が正當な場合に現はれてくることと、又宛も必要になつて急に勇氣が出せないかも知れないからと懸念してゐるものゝやうで、そうで無い時でも、見榮に勇氣をあらはすのはいやでムいます。斯麼ものが努力して、一度は表面に現はれますが、その儘生を孤獨で終る權利を獲ようとするのです。眞の勇氣にはより多く恒久性があり、より尠く熱中性があります。それは常に斯くある可きものとなつて居ります。夫を刺激してもいけませんし、又抑制するのもいけません。善人は自分に勇氣を常に身につけて居ります、敵と戰ふ時にでも馬鹿な人達の集りにでも、眞理推究の集りにでも、死と苦患とに病床で惱まされる時にでも。其勇氣を臭へる魂の力は當に役に

立つものです。その魂はあらゆる事件に衝つて其上の徳を冠し戰ふのですが、其本質でなくて、其本質は何物も恐れないといふ事にあるのでございます。その魂の力は妾が屢々褒めました勇氣の一種で、妾は貴君にも在つてほしいと望むものなのでございます。其外のものはつまらぬもので、大業なもので、恐ろしいものなのでございます。その様なものに從ふのこそ卑怯と申すものでございます。妾は無駄な危險を犯す人も、犯さなければならない危險を避ける人も同じ様に輕蔑致しますわ。

これで、若し妾の申した事が誤りでございませんでしたら、妾は貴君に、エドワード卿との御爭ひの中で貴君の名譽は少しも關する所が無い事をお示した理になります。其上貴君は劍をお使ひになつて妾の名譽を危くなさつて居らつしやる事もおわかりでせう。この様な手だては正しくないばかりか、不當であり、許されません。それは、貴君が御主張になる感情と一致致しませんわ。此様な方法は、德が無いものだから、勇氣で補はうとする不正直な人達や、名譽でなしに、利益によつて戰ふ兵士達にのみに向いてるものです。こんな手段は取るよりも輕蔑した方が、そこに本當の勇氣があるのです。そして其様な手段を放棄して人が感ずる様な不便の情は本當の義務を實行する上に不可分のもので、其上其不便といふ感じすらも、眞個のものでなくて皮相的なものなのです。つまり其様な手段を直ぐになさる方は大低、其眞實さが疑はれるものなのでございますわ。妾の結論としましては、貴君が其の様な事をなさり又おうけになるのなら、貴君は此場合理性、德、名譽、そして妾までも棄ててお了ひにならなければいけません！

妾の理論をどういふ風におとりにならうと御勝手です。貴君はどういふ風に詭辯をお用るになつても良いです。けれど、善人は決して卑怯者でなく、又決して名譽を失つた人にはなるものではないといふ事は確な事なのでございます。つまり妾は勇ある人は決鬪等は輕蔑し、善人は嫌惡するといふ事を申上げた様でございますわね！

此様な重大な事件に在りましては、理性の命ずる所に從ひ、事物のあるが儘の姿を見なければならないと思ひますの。若し妾が妾の見た通りの事を云はうとしましたれば、もつと違つた云ひ方を致す筈でございます。貴君も御存知でせうが、父は若い時に、そのお友達を浪園で殺した事がありますの。くやし紛れにやつて、馬鹿な名譽といふ考へが兩人をさう餘儀なくさせたのです。他人の生命を奪ふ死の一擊はさうした人の安息を永久に奪つて了ふものです。悲しい後悔の念は父の胸から其時以來離れる事がありませんの。幾度も獨りで居て泣いたり、うなつたりしてるのを見た事があります。父はまだ、自分の酷い手で刺した劍がお友達の心臟に這入つて居る様に思ふのです。闇の中で、父は死人の青い血にまみれた體を見るのです。ブル〳〵慄へながら致死の傷を眺めるのです。流れ出る血を止めようとしても、恐怖に捕はれて叫びをあげるのです。恐ろしい死體の幻影は恒に父を惱して居るのですもの五年前に、父は自分の愛する相續者を、一家の希望であつた妾の兄を亡くして了ひました。けれど夫の正當な罰として、其死をうけて苦しんでるのです。神様は父が他人の子供を殺して了つた其恨みを、唯一

人の息子で時らして居らつしやるのです。

殘酷な分子の有るものは皆妾に、この決闘に對すると同じ嫌惡を與へます、決闘は人が到る事の出來る一番最後の「忍辱（プリユタリテ）」なのですもの。悦んで戰ふ樣な人は、妾の日には他を裂かうとする獸としてしかに見へません。其樣な人に幾何かでも自然の感情が殘つて居ましたら、殺人者は勝利者と讃へられるよりもむしろ、憐れむ可きものになるでせう！　血を見る事に馴れて居る人達を御寛なさい！　自然の聲を抑壓して、漸く後悔を何でも無い樣に思つて居るのです。段々と彼等は酷く無感覺になつて行きます。彼等は他人の生命を玩具にします。そして人道に反した事をする罰は人道的感情を皆失つて了ふ事なのです。こんな風になつたらどうでせうか？　貴君はあの人達の樣におなりになりたいのですの？　いゝえ、貴君に限つて其樣な事をなさる方ではありません。其樣な方向に導く貴君の一歩に氣を付けて恐れて下さい。貴君のお心はまだ汚れなく、聖いのです、無理の努力により樂の無い罪や、理由の無い光榮によつて、貴君の生命を危くなさつて、其御心を賤しいものになさつてはいけません。

妾に就いては何にも申上げませんでした。貴君の御想像におまかせします。たつた一言―一言を申上げます。貴君は今迄屢々妾に「許嫁」といふ名を呼んで下さいましたけれど、今は妾は母といふ名をうけなくてはならないでせう！　聖い緣が妾達を結ばぬのに貴君は妾を「寡婦」になさらうと云ふのですか？

妾はどんな賢こい方も抵抗お出來になれない樣な力をこめてこの手紙を書きました。若し貴君がお從ひになら

ないと言ふのなら、妾は申す事は有りません。けれど、よくお考へになつて頂戴！　この大事な事をお考へになるのに八日位沈思なさつて御返事下さい。妾はこの猶據をお與へするのは理性の名によつてではございません、妾の名によりまして、妾は貴君から頂いた權利を此場合行つてゐるのでございます。恐らく此位の事は其權限内で出來る事と存じます。

書簡第五十八　ジユリイからエドワード卿へ

此手紙を差上げますのは、貴君がお氣の毒と思ふからではございません。「貴君が妾を侮辱なさつたからには、多分妾と自分の知らない過ちを貴君に對して爲てゐるのでムいませう。」心の正しい方が何の理由も無くて、やはり尊まれる筈の家庭を中傷なさらうなんてどうしても考られません。貴君は腹癒せをするのが正當な事とお思ひになつたら、貴君は腹癒せをして御滿足なさいませ。貴君が此手紙をお讀みになりましたら、貴君を侮つた事を悔いに悔いて居ります、そして其名譽を貴君の御意志のまゝにして居ります所の、可哀想な娘を滅ぼしてお了ひになるにはどうしたらいゝか容易におわかりと思ひます。さうですとも、貴君が御非難なさるのは御尤もと存じます。妾には一人の戀人かございます。それは妾の心、妾全體の主人なのでございます。死だけがこの優しい私達の結び目を破る事が出來るのでございます。此戀人は貴君が友情を以つて尊敬して居らつしやる人なのです。その人は貴君の尊敬にも價して居る人でムいます

その方は、貴君を愛して居らつしやり、そして徳のある方ですから。所が其方は貴君のお手にかゝつて死なうとなさるのです。妾は名譽が汚されれば、血で償はれる可き事は知つて居ります。妾はその方の勇氣が却つて其方の身を滅ぼすと存じます。貴君にはちつとも恐れずに、死の一撃を求めにおいでなさるのだと存じます。妾はこの無謀な熱心を抑へ度く存じました。妾は理性を以つて色々說きました。けれども、手紙を書きつゝも、どうせ無駄になるのだと感じて居りました。そして妾はあの方の徳について尊敬はして居りますけれど、あの方が、此仇な名譽からお離れになる様な立派な事がお出來になるかどうか、全く希望出來ないのでございます。貴君のお友達の胸を劍でお刺しになる時の悦びを今からお味ひなさいませ。けれど、少くとも妾の涙や、妾の絶望を御覽になつては、悦びなんぞ到底お感じにはなれませんと妾は申上げて置きます。貴君はどうかこの決して洞ろでない誓ひの證人になつて下さいませ、妾は、妾かその死をいたむ人に遲れて、おめ〳〵とは生きて居れませんとお誓ひします。そして貴君は一擊の下に二人の不幸な戀人を墓に入れてお了ひになるといふ光榮をお持ちになりませう！　其二人の戀人達は、貴君に對して自發的には何の惡意も持たず、貴君を尊敬するのを好んで居るものなのでございます。

皆の時によりますと、貴君は立派なお心と、感じやすいお心とをお持ちださうでございます。このお心があつて、尚平氣で、妾には解せない復讐をなさつたり、不幸な人を悦んでお創りになるのなら、そのお心は、妾の死後に、獨り子の死の爲に永劫の苦しみに陷つて居る、可哀さうな父や母に對してどうかなさらなけりやならない様に貴君を致すでございませう。

書簡第五十九　ドルブ氏からジユリイへ

御賴みになつた事柄を申上げようとして急いで筆を採ります。私は今エドワード卿の所から還つてまゐりました、卿はまだ、足の挫いた所の痛さで苦しんで居られて、室の中を棒を頼りにして漸く歩いて居られます。私は貴女のお手紙をお渡しましたところが、早速大急ぎて開いて御覽でした。私には氏が讀みながら、感動して居らつしやる様でした。暫くお考へになつて、もう一度お讀み直しになりました其時には あの方の心が亂れて來た事が歷々とわかりました。讀んでお了ひになると、斯う仰言いました。君も御存知の通り、名譽に關する書にはそれ獨特の法則があるものです、そこからは、到底外づれるわけにはゆきません。貴君はこの手紙の中に書いてある事を御存知でせう。手紙の中に書いてある事は皆果さなくてはなりません。あなたの二人のお友達をおつれして來て下さい。どうか明朝、貴君はあの方々と御一緒にいらつして下さい。さうしたら私の決心を申上げますから」と。私は事は私達の間で起つたのだから、同じ様に私達で片付けませうと申しました。氏は唐突に斯う答へられました。私は適當な事を知つてるるのです。私はさうしなければならぬ事をするのです。二人のお友達をお連れして來て下さい。さうでなければ

私は何も申されません」と。私はさうして家を出ました。無駄な事ですけれど一體あの方の變な計畫はどうしたものかしらん等と考へまして、兎まれ今晩はお目にかゝりたいと思ひます。明日貴女の仰言る通りの事を致しませう。若し皆さんと明朝あの方の所へ行くのがいゝとお思召しなら、私はどんな事が起つても大丈夫の樣に人數をそろへませう。

書簡第六十　ジユリイへ

優しい、可愛いジユリイさん、驚きを鎭めて下さい、この起つた事件についての私の考へを理解し、同情して下さい。

貴女のお手紙を頂いた時には、私は注意して讀まなくてはならぬお手紙を讀むのが辛らかつた程に、無茶に怒つて居りました。貴女のお手紙に私は反對せないではゐられませんのでした。目盲いた怒の方がより強かつたのです。私は獨言を申しました。「貴女は御尤な事を仰言る貴女が賤しいものになるなんて私には仰言いますな。私が貴女を失つて、罪あるものとして死なゝければならないにしても、私は當然貴女に歸すべき尊敬の缺けてゐることを決して忍ぶことが出來ません。そして私に一息でも生命の在る間は、貴女は私の心にお尊ばれになる樣に、貴女の近づく物總ての尊ばれになるのです。」と。私は貴女が私に要求なさつた八日間について、躊躇しませんでした。エドワード卿の御負傷と、私の服從の誓ひとは共に此八日といふ猶豫の日が必要だつたのです。御命令通り私はこの期間を貴女のお手紙の內容に就いて考へようと決心しまして、私はそれを讀み、考へて居りました。けれどそれは私の感情を變へる爲で無く私の考へ方を正しいと認めようとする爲であつたのです。

私は今朝も私の考へではあまりに賢く、明敏なと思はれる此のお手紙を讀み直しました。そして物憂い氣持になつて、繰り反し〳〵して居りました。丁度其時、私の室の戸を叩く音がしました。すると、私はエドワード卿が劍無しで、杖を頼りにして這入つていらつしやるのを見たのです。そして三人の方がつゞいて這入つてこられました、私は其內にドルブさんの姿を認めました。私はこの不時の訪問に驚いて默つてどうなるか待つて居りました。其時にエドワード卿は、少しの間云ふ事を聞いてくれ、中途で妨ける事無しに、すきな事をさせてくれ、云はせてくれと仰言いました。あの方は云はれました。「約束をして下さい。貴君のお友達のこの方々がお出でなのだから、貴君は無分別な約束はなさらないで下さい」と。私は直ちに其れを誓ひました。私が斯う誓ひますと、おわかりでせう私の驚きを！　あの方は私の前に膝をお突きになつたのです。こんな風にされて、私はすつかり面喰つて了ひ、直ちにお起しし樣と思ひました。けれども約束を思ひ出しまして、どうも出來なかつたのです、あの方は斯う仰言ひました。「私は酒に醉つて貴君の前で申上げた事を全然と取消しにまるりました。其言葉の正しくない事は私にとつても貴君にとつても、其言葉が心を傷ける樣なものにして了ひました。ですから、私は正當に取消しを致す義務がある

のです。私は貴君が私にお課しにならうといふ總ての罰に服します。私は私の罪が償はれて初めて私の名譽は恢復されると存じます。どんな事を私がしなくてはなりませんにしても、どうか許して下さい。もと通りに友として交つて下さい」と。私は直ぐに斯う申しました。「貴君、私は今貴君の大きな寛大なお心がわかりました。私は、貴君が本當の貴君でいらつしやらなかつた時に仰言つたお言葉と、眞個の貴君のお心から出て來る御言葉とを、よく區別出來ます。あの時は永久に忘れられる可き事です」と。さうして私は立ち上つてあの方を支へて、一緒に接吻し合ひました。かうして後にエドワード卿は皆の方をお向きになつて仰言いました。「皆さん、貴君方の御心盡しを有難度く思ひます。貴君方の樣な心の正しい方々——あの方は得意さうに、熱中して云はれました——は、斯うして自分の惡い所を償ふ者は人を苦しめる事は出來るものでないといふ事をわかつて下さる。貴君方の御寬になつた事をどうか皆に仰言つて下さい。」そしてあの方は今夕、御飯に招いて下さいました。そして三人の方は出てゆかれました。

私達が二人切りになりますと、エドワード卿は、前よりも、もつとやさしく、もつと友情をこめて接吻していらつしやいました。そして私の手をもつて、私の傍に座られて斯う急に仰言いました。「あゝ幸な人だ貴君は！　貴君にはふさわしい幸福を味つて下さい。どうかお兩人が幸に……」と。私は「何を仰言るのです。貴君はどうかなさつたのですか」とあの方のお言葉の中途で申しました。あの方は微笑なさりつゝ斯う仰言いました。いゝえどう致しまして。けれど實のところ

もう少しで、發狂する所でした。私の理性を奪つた方が私にそれをお返して下さらなかつたら、私はさうなつてゐたのです」と。そしてあの方は私に、一つの手紙を渡して下さいました。私は見ると、男の人にしては私だけにしかお書きにならぬ貴女の御手蹟だつたので、私は驚いて了ひました。それを讀みつゝ、私はどの樣に感動したでせう！　無上の又と無い樣な立派な愛人の貴女が、私を救はうとして、御自身の身を棄てにかゝつて居らつしやるのがわかりました。あゝ私は感謝します。けれど、貴女が人間中で一番幸福な人にも從はぬとお誓ひになつて居らつしやる所へ來ますと、私は私の陷らうとしてゐる危險を感じて顫へて了ひました。私は愈り愛せられ過ぎて居るとつぶやきました。そして私の恐れは、私に、貴女もやはり人間だと感じさせたのです。あゝ貴女のお奪りになつた勇氣を、私に返して下さい。私は其勇氣を、私獨りをしかに迫まらない所の死を犯さうとして、持つて居つたのです。私は身も魂も死ぬ爲に其勇氣を持つて居たのじやありません。

私の魂がこの苦しい反省に耽つて居りますと、エドワード卿はお話しをお始めになつたのです。けれど初めは、私はボンヤリとして聽いて居りました。所があの方は貴女の事をお話しになるので私も一生懸命になつて了ひました。あの方が仰言つた事は私の氣にさはり、私の嫉妬心を起こさせる樣なものではありませんでした。エドワード卿は、私達の愛の焰を棄し、貴女の安息を亂したのをひどく悔ひていらつしやる樣でした。貴女はあの方が世界で一番尊んでいらつしやるものなのです。あの方は私になさつた申し譯

を貴女には直接になさりにくいからと云つて、私に貴女の名によつて其れをうけてくれと仰言いました。そして又それを私から貴女に申上げてくれと云はれました。あの方は斯う仰言いました。「私は貴君をジュリィさんの代理人として考へます、そして私はジュリィさんに直接申上げる事も出來ず、お名をお呼びする事も出來ませんがジュリィさんの愛してゐる方の前で無暗と自己を賤しいものにする事も出來ません」と。あの方は貴女に對してある感情を抱いて居つたと告白なさいました。其感情は貴女を熟視してゐれば誰しも抱くものなのです。けれどそれは戀といふよりも、むしろやさしい嘆賞の情なのです。其感情をお抱きになつてもあの方は、何の申出も希望もお持ちにならなかつたのです。私達の關係があの方に明になるとあの方は其一切の感情を犧牲として了はれたのです。悪い言葉を前に仰言つたのはパンチ酒の爲で、けつして嫉妬心から起つて居るのではありません。あの方は、戀愛を哲學化してお考へになり、戀愛の精神を諸情に優つたものと信じてお居でなのです。私としては、あの方は、他の感情の發生を妨げる様な情慾を既に成して居らつしやるのではないかと考へて誤つて居りました。あの方は理性を努力してお働せにならうとして、心の凡てを盡してお居でなのです。そして私は、ジリュィさんを愛し、又あきらめるのは人の徳の有無によるでは無いといふ事がわかりました。

あの方は私達の戀の經過について詳しい事が聞き度いと仰言いました。そして又あの方の幸福と相容れない原因を知らうとなさいました。私は貴女のお手紙をお讀みになつたのだから、半分打明けずに置くのは危險であり、良くないと思ひましたので、すつかり申上げて了ひました。あの方はよく注意して——これがあの方の誠意のある事の證明にあるのです——聽いて下さいました。幾度も、あの方のお目は涙で一杯になり、悲しさうにおなりでした。そしてあの徳の勝利の事件（譯者註—クロード、アネとファンションとの間をまとめた時の事件を指す）が殊にあの方に強い印象をお與へした様です。私はクロード、アネに、貴女のお父様と同様熱心な保護者を得たと存じます。あの方は仰言いました。「貴君の話して下さつた中には、事件も、變つた事もありません。けれど小説の種々な事件だつて、これ程私を熱心にはさせません。それ程感情が還境を補ひ、正しい方法が、立派な動作を補つて居ります。貴君方お兩人のお心は普通の人が月並に考へたにしては到底わかない他と違つた所がおありです。幸福といふものは、貴君方にとつては、他の人達の幸福とは方向も、種類も異つて居ります。他の人達は勢力と他人の尊敬とを望みますが、貴君方は、幸福はやさしさと平和とであるより外何でもありません。貴君方の戀には貴君方を高尚にする徳の競爭があります。若し貴君方御互が少しも合つしておいでなさらないならば、何方からも尊敬なさらぬでせう。」あの方は斯うも仰言いました。「戀愛は失くなるだらう、（この冒瀆の言葉はあの方が情に迂いから仰言つたことなのですから、私達は其點であの方を免してあげなくてはなりません。）けれど徳は殘りませう」と。あゝ、徳はどうしても愛と同樣永續する樣にして欲しいものです。天は其上はお望みになりますまい。

私は、英國的な哲學の頑迷さがこの正直な英國人の心の中で、自然の人間性を決して變へて居ないと云

ふ事を理解しました。そしてあの方は、私達の苦しみに誠實に同感していらつしやる事がわかりました。若し信用と富とが私達に有利であり得ましたら、私達はあの方を信用して良いと思ひます。けれど慥カと金とは人を幸福にするのに何の役にたちませう！

斯う云ふ風にして話して居りまして、時間が經つのを知りませんでした。そして丁度晝飯になりましたので、鷄を一羽持つて來させまして飯をすませて、又私達は語り合ひました。あの方は今朝の行爲についてお話しになりました。そして私は其様に突然な、しかも正しいあの方の行ひに驚嘆の意を表はさぬわけにはゆきませんでした。けれど私に仰言つた理由以外に、あの方は斯う附言なさいました。半分滿足なのは、勇ある人にはふさわしくない、滿足は全きものか、皆無でなければならない。それは、何も償はないで、自己の人格を下落させるのを恐れて居るからである。又意に反した行ひや、不愉快でする行ひは恐れから出て居るのでは無いと。更に斯うも云はれました。「其上私の顔もたつたが、貴君はお若いし、世に出た許りの方だから、貴君は二度も斯様な事がない様にきれいに始末をつける必要があります。世の中には他人に衝つてみる、換言すれば自分よりも卑怯な人達を探して居る様な上手な卑怯者が澤山居りますよ。其様な奴は其網にかゝつた人をうんと苦しめて、自分達は名譽を得ようとする奴等なのです。貴君の様に名譽な方は手柄にもならぬ斯慶奴等の懲罰にかゝはらないでいらつしやることを希望します。奴等が教訓をうける必要があるなら、貴君からよりも、私からうけた方が良いと信じます。何故と申しますに、既に度々事件に當つてゐる人はある事件に遭つても別に失くする所はありませんが、其様な事を一つするのは一種の汚れです。ジユリイさんの戀人はその様な事を避けて居なくてはいけません」と。

以上が私がエドワード卿と話しをした事の抄略であります。私が以後、どの様にしてあの方と交際して行く可きかは貴女の御命令通りにしますが、其爲に私はこゝに一應申上げたのです。

貴女はこれで御安心でせう！　數日前から貴女を惱まして居た不吉なお考へを、どうぞ、取拂つて下さい。貴女の今の不安な狀態に御用心下さい。オー若し貴女が直きに私の存在を三倍にお出來になつたら」……若し直きに愛する誓ひの證しが出來たら……あゝ望み！　恐れ！　困迷！　私の心の愛する友よ、愛する爲に生きませう、あとは神樣が良い樣にして下さる樣に！

二白、云ふのを忘れましたが、エドワード卿は私に貴女のお手紙を渡していらつしやいました、私もこの樣なものが第三者の人の手に殘るのは良い事でないと思ひまして、それを受取つて置きました。こんどお會ひしたら貴女にお返しませう。何故かと申しますに、私も別に其手紙には用はありませんから。私の心の底に鮮かに其手紙は書かれてありますから、二度と讀む必要は無いのです。

書簡第六十一　ジユリイから

明日エドワード卿をお連れ申して下さい！　妾はあの方が貴君の足元へ身を出けてお了ひになつた樣に

妾もあの方に足元にさうしてあの方にお禮を申上げ度いのですの。あゝ何といふ心の廣い、度量の大きい方なんでせう！　妾達はあの方の前へまるりますと何て小さく見へるのでせう！　貴君はお目の瞳孔と同樣に、この尊いお友達を大事にしておあげになつて頂戴！　もつとあの方が冷やかな方でしたら、きつとあの方は今思ふ程豪い方ではありませんでしたらう！　缺點の無い人は大きな德をお持ちになれるでせうか？

あの時にはほんとに氣をもみましたわ、もう夢中でしたわ。貴君のお手紙が來て、消えた勇氣が甦りましたの。恐れがなくなつて、其手紙の爲に妾の苦しみは耐へられる樣になりました。妾はもう苦しんでも大丈夫な程の力を感じます。貴君は生きていらつしやるし、貴君は妾を愛して下さるのですもの。貴君の血もあの方の位も。兩方共離れませんでした。貴君の名譽も安全ですし。妾はもう少しも可哀さうではありませんの。

明日きつと忘れずにね！　今度の樣に妾は、貴君にお會ひし度くてたまらず、其上貴君にお會ひ出來るといふ希望がこれ程の長い間、極めてかすかであつた事はございません！

さよなら、妾の唯一人の、愛する友よ！　貴君は「愛し合ふ爲に生きませう」と仰言つたけれどまだ足りませんわ！　あゝ「生きる爲に互に愛し合ひませうね」と申さなくてはなりませんわ。

書簡第六十二　クレールからジユリイへ

ジユリイさん！　友情の一番悲しい義務のみを貴女に對して果さなくてはならないでせうか？　いつまでも心で苦しんで酷い意見をして貴女を苦しめなくてはならないでせうか？　あゝ！　確に妾達の感情は皆共通なものです。妾が貴女にお話しする新しい惱みは、皆一つ殘らず妾が前に感じたものでございます貴女の御不幸を妾の胸一つに匿して居りますれば、唯それを增すばかりでございます。やさしい友情には戀愛程の魅力が無いものでございませうか？　妾は、妾が貴女に惹起した苦惱を、皆早く拭ひ消してあげたいと、どの樣に思つて居りませう！

昨日、音樂會のあと伯母樣はあの方（ジユリイの戀人）と腕をお組みになつて還つていらつしやいましたわね、伯父樣と妾の父はエドワード卿と政治論をして居らつしやいました、妾は勞かれて聽いてゐるのも煩はしくなつたので、室から出て了ひましたの。それから三十分位しますと、あの方のお名が怒りのこもつた聲で話されてゐるのを聞きましたの。話題が變つたのと思ひまして、妾は耳を澄まして聽いて居りました。お話を聞いて居りますと、エドワード卿があの方と貴女との御結婚を仰言つた樣子で、この樣な結婚こそ正しいものだ。自分は、自分の位置として、出來得るだけの事はしてあげ度いと仰言つて居るのがわかりました。貴女のお父樣は頭から輕蔑して、この申出を拒

絶になつたのです。さうして議論が旺んになつたのでした。エドワード卿は仰言つしやいました。「貴君の御偏見はどうあつても、あの方が、御嬢様には一番似合はしい方なのですよ。そして御嬢様を幸にしてあける方として一番恰好な方なのです。人爵をお持ちではありませんが、あの方は天爵をお持ちなのですあの方にふさわしい才能をも皆持つていらつしやるんです。まだお若い上、立派でもう一人前の方で、お體も丈夫だし、才智もきいた方なのです。教育も、常識もお有りになるし、世間一切の事は心得へていらつしやるし、勇氣もおありなのです。キビキビした方ですし、又健實な思想をも持つていらつしやるんです。何が貴君のお氣に召さないのです？　財産？　それはあの方だつて段々財産もおこしらへになるでせう！　私の財産の三分の一あれば、あの方はこのヴォー州では屈指の金満家におなれでせう、必要ならば私は私の財産の半分でもあの方に差上げますよ。ぢや品位ですか？　何にも實のない特權、それが有害であつて、有利でない様な國に在りましては、特權が何の役にたちませう。けれどもあの方は尚品位を持つて居らつしやるのですよ、それは舊い羊皮紙にインクで書いてある様なものでないのです。あの方のは、心の底に永久に消えない字で刻りつけてあるのです。一言で申しませば、若し貴君が偏つた考へより理性をお望みになり、貴君の官爵よりも御嬢様をお愛しになるならば、あの方に、お嬢様はあけなくてはなりませんよ」と。

これをお聞きになると、お父様は劇しくお怒りになつたのです。エドワード卿の申出を馬鹿らしい、そして、寧ろ滑稽な事としてお受取りになつたのです、斯う仰言いました。「何です！　貴君は！　家柄の良い家の子孫が家も無い、人の恵みで生きて行く様な、何處の馬の骨とも知れない者と結婚して家名を汚し其家を絶やすなんていふ事を、貴君はそんなに單純にお考へになるのですか？」と。「待つて下さい」。とエドワード卿は途中で仰言いました。「貴君は私の友達の事についてお話しになつて居るのですよ。私の前で彼の中傷を云はれるのは、私が皆身にひきうけねばならないのです。名譽のある人に對しての嘲罵の言葉はそれを仰言る人になほ強く罵笑の形をとるものですよ。この様な風來者は歐州の全田舎紳士よりも敬ふ可き人々です。尊敬の擧れ、友情の賜より、財産に走る方が名譽があるとお考へになるのですか。考へられるのなら考へてごらんなさいまし。私が申し出ましたこのお嬢さんが、假令貴君のなさる様にいつも確に分からぬ祖先の系圖などを物の数には入れておいでなさらないにしても、あの方こそ、丁度貴君のお家の最初の方の様に、其方のお家の基礎と名譽とにおなりの筈です。貴君は一家の主長は緣組によつてその名譽を失墜するものと思召しますか？　其様な非難は、貴君御自身を非難なさることになりますまいか？　尊敬すべき人から始つた家名を數へてみるだけでも、どの位の偉大な名が忘却に葬られてるるでせう。私共は現在を以つて須く過去を批判致さうではムいませんか。正直な行をして名が顯れた二三の人達のお陰で、千百の愚物が毎日のやうにその家を華族にしてをります。又子孫がそれほど信じてるる爵位が、其祖先の盗みや破廉恥な行から出て居ないといふ事をどうして證明し得ませう！　それは勿論平民の中には不

正直な人達が居ります。けれど、一人の貴族が申着切を先祖とする事について人が賭をしましたなら、いつもサ、其對一の割合で、肯定の方へ賭けませう。ですから、祖先の事等は措いて、現在の其人の品格其働きを量る必要があります。貴君は外國のある王族に武器を取つてお仕へになりましたが、其お父さまは無報酬で武器をその國家の爲にお取りなさつたのです。貴君が若しよくお仕へになつたら、澤山な報酬をおうけになつたでせう。そして戰ひどの位貴君が名譽をお博しになつたにしろ、多くの平民達は貴君以上の名譽を被てゐるのです」と。

エドワード卿はまだ續けて仰言いました。「貴君が賴みにしてゐらつしやる爵位は一體何の誇りがそこに在るのです！　國家の光榮とか人類の幸福にそれは役に立つたでせうか？　法律の恐ろしい敵であり、自由の敵である爵位が、其勢を振つて居る多くの國では、暴虐の力と民衆への壓迫の外、何をそれは產むでせうか？　身は一國に在つて、德と人道との破壞者となり、屈服的服從を他人にさせて誇り、人として恥ぢなければならぬ樣な狀態に貴君はお得意なのですか？　貴君のお國で自由解放を叫んだ人達のな點で貴君の位といふものが貴君のお國に償してゐるのですか？　貴君のお國の歷史を開いて御覽なさい。どの樣中に幾人の貴族が居るんですか。フユルスト（譯者註―ワルテル、フユルスト。ウキルヘルム（ギヨーム）テル、と共にスキスに自由を樹立しようとした愛國者）の樣な人達テル（ウキルヘルムテルの事）の樣な人達、シユタウファッヘルの樣な人達は皆貴族でしたかしら？　貴君が贔ましく仰言るこの馬鹿らしい光榮は一體何です？　お答へしてみませう夫は一人に仕へるもので、國家の足まとひになるものです」と。

考へて頂戴な貴女！　この人の良い方が斯うしてひどすぎる程峻嚴くおやりになつて、あの方の爲にならぬ樣にしてお了ひになつたのです、勿論エドワード卿は、あの方の役にたつてやらうとお思ひになつていらつしたんですが。その時妾ほんとに困つて了ひましたわ。お父樣は、エドワード卿の仰言つた事が總體的なものでしたけれけれど、心を刺す樣な惡口にひどくお怒りになつて、今度は人身攻擊をおはじめなさいました。そしてはつきりと、自分はどうしても、今し方云はれた事には贊成するわけにはゆかないと仰言ひました。そして亂暴な調子で斯う仰言いました。「他人の事にいらぬ世話はよして下さい。貴君がどれ程の大貴族であつても、此問題について、貴君が辯護なさることが正しいかどうかわかりませんよ。貴君は私の娘を貴君の友達にくれと仰言る。けれどゝ、貴君御自身が娘に適當な事を御存知ないのだ。其上私は貴君の仰言つた事で、貴君の爵位に對する平凡な御說を伺つて、私は充分に、英國の貴族といふものを知りました」と。「それはどうも」。とエドワード卿が仰言いました。どの樣に私についてお考へにならうとも、五百年前に死んだ人（自分の先祖の意味ならん）の功績より外に、私自身の手柄を證據立てゝ、お目にかけられない事は、實際いやになつて了ひます。貴君は英國の貴族を知つて居ると仰言る、然らば貴君は英國の貴族が歐州中で一番賢い、そして一番勇敢なものだと御存知の筈です。それはさうとしても、私は英國貴族は最も古いものだといふ事を調べ出す必要を認めません。何故かと云

ひますと、人が現在の事を話すときには、過去にあつたことは問題にならないからです。私達はほんとに王侯の奴隷ではありません。其友達なのです。人民の暴君でなくて、其頭領なのです。自由の守護者であり、國家の維持者であり、王位の藩屏であるのです。私達は目には見えないけれど、王様と人民との間に立つて釣合を取つてゐるのです。私達の第一の義務は國民に對するもの、第二の義務は國民を統治する人、卽ち王様に對するものであります。私達が協議するのは、王の意志でなくて、王の權利なのです。貴族院では法律の最上の施行者となり、また時としては立法者ともなり、私達は國民と王に對して公平に振舞ひ、決して「神と吾が劍」（ディユー・エ・モン・シャンプ）といふ人のあることを許しません。「神と吾が權利」（ディユー・エ・モン・ドロワ）と云ふ人だけを許します。」

「そこです閣下」、と彼方がおつゞけになりました「他に先祖はない程舊い、尊い、しかしながら自分の祖よりは自分の功績を誇るその貴族、貴君が御存知なくてその人についてお話しなさるその貴族は一體誰ですか？　私は此有名な貴族中でも、決して下級には屬して居りません。又私は、貴君の自負心にも拘はらず、總ての點で貴君を立派な方と信じて居ります。私は、もう年頃の娘を一人持つて居ます。彼女は氣高く、愛嬌もあり、財産もあります。唯ジュリイさんに比らべますと、貴君には格別なものではないところの種々な性質が無いだけが劣つて居ります。誰でも貴君のお嬢さんの美しさを感じたあとで、其目を、其心を他所に轉ずる事が出來るに致しましたなら、私は貴君に自分の財産を半分つけてまでもお聟に差上けようとした彼の方に、たゞで私の義弟となつていたゞけて、誠に光榮なことだらうと存じます。」

妾は貴女のお父樣のお答へによつて、段々と議論が鋭く劇しくなつて行くのを感じました。妾はエドワード卿のお心の廣きに感じつゝも、妾はあんな交際のうまい方でも、今となつては其の御企てになつた相談を永久に取返しのつかないものにしておしまひなさるより外、仕方がないと感じましたの。妾は事件が進み過ぎないうちにと急いで其室へ這入つて入つて行きましたのよ。妾が行きますと、お話しは已みましたそして、少し經つて皆さんは冷然としてお別れになりましたの！　妾の父は、この論爭で困つて居つた樣でございますの。最初は、エドワード卿の申出に贊成した樣ですが、貴女のお父樣がお聽き入れにならないので、又議論が益々烈しくなつてゆくので、義理としても、義の兄弟の方に贊成した樣でございます。そしていゝ所で、折衷說を出しては話を切り、お二人だけなら、きつとはみ出しておしまひなさる自制の範圍内に、お二人をお引留め申して置いたのでございます。皆さんがお還りになると、父は起つた事の委細を打ち明けて話してくれました。妾は事件がどうなつてゆくか見越しましたので、妾は父に急いで斯う申しましたの、つまり、こんな事になりますと、あの問題の方が、貴女にこゝで屢々お會ひになるのが都合よくありませんし、又彼の方の御友達でいらつしやるドルブさんを侮辱するやうなことにならないで、彼の方がそこにいらつしやることは迚も都合よく參りますまい。けれども又エドワード卿と同樣あまりの方を繁々とおつれしないで下さい等と。これが、妾があの方々と。緣が全く切れて了はない樣にと出來

る限り致した事なのですの。

これぱかりではありませんわ。貴女の危い狀態の事を考へますと、又今申したあの事を繰り返し度くなります。エドワード卿とあの方との間のいきさつは、町の評判で皆がどうなるか待つてゐますのよ。ドルブさんがあの爭ひの秘密は守つて居て下さつたのですけれど、置し切れぬ程の色々な事があの事件をもらしたのですわ。皆が疑つてゐます、色んな揣摩憶測をするのです、貴女のお名前を人々は云ひ合つてゐます。あのル・ゲの云つた事は思つたよりも擴ろまつて居るのです。貴女は御存知でないでせうが、公衆の目に疑はしい眞理があると直きに明な眞理になつて了ふものですよ。貴女をお慰めする爲に申上げる事は一般にあの方を貴女がお選びになつたのが評判良いのです。そして皆が早く美しい御夫婦が出來る樣にと望んで居りますの。この事はあの方が此國で善い行をしてつしやる事の證明となると思ひます。けれど貴女のお心の堅いお父樣に對しては、公衆が何と云つたつて役には立ちますまい！　もうお父樣もこの噂はお聞きになつたでせう、又直きにお耳に這入るでせう。ですから、若し貴女が前以つてお父樣のお怒りに用心なさいませんと、噂の爲に起る結果はどんなものになるか恐ろしい氣が致します。貴女も恐ろしい辯解をなさらなくてはならぬ、お積りでいらつして頂戴！　あの方は一體其時にはどうなさるでせうねえ！　お父樣はあのお年ですからそのお劍にもふさわしくないとお思ひの若者と力をお試しになる樣な事は無いとしましても、町で有つていらつしやるお力を用ひて、自由にあの方に對して良くない事がお出來になりますわ。ほんとに、お怒りになると、そんな事をする氣におなりかもしれませんと思ふと恐ろしうムいます。

どうかお願ひですから、貴女のお身の周りに起つてゐる危險に考へ付いて下さい。其危險は一秒一秒と高まり增して行くのです。今迄は無上の幸福が其內にあつて貴女の爲に用意されて來ました。又今もさうですけれど、貴女の愛の神秘さに注意の印を押して下さい。貴女の不幸を釀した人を、貴女の不幸の中で幸福が包まないだらうとお恐れになつて、幸福な運を其極までおきはめになつてはいけませんよ。妾に信賴して下さい、未來は不安定なのです。そして時が經つに從ひまして、澤山な事件が起つて、思ひがけぬ事になるかもしれません。けれど現在については妾が前に申上げた樣に又もつとつよく繰り返します、あの方をお遠ざけになつて下さい、さうなさらないと貴女は取りかへしのつかぬ事になります、と。

註　(一)こゝにやゝ、不明の點がある。ヴォーの國は央してスキスの領分の中に這入つてはゐない。ベルノア人の占領地で住民は市民でも自由民でもない。唯の臣下に過ぎない。

書簡第六十三　ジュリイからクレールへ

貴女の仰言つた事が皆起つて了ひましたわ！　昨日、妾達が還つて一時間位しますと、お父樣がお母樣のお室へ、目をギラ〳〵おさせになつて、のほせ上つたお顏をなさつて、一言で申せば常とちがつた。お

顔をなさつて這入つていらつしやいました。妾は初め、きつと何か喧嘩でもなさつたのだらうと思ひましたのよ。さうでなければ喧嘩をしにいらつしやるのだと思ひました。私の亂れた心は前から妾をビク〳〵させて居りました。

お父樣は先づ劇しく、けれど一般的に、家庭の母たるものが、不謹愼にも、身分も家柄も無い若者を家へ入れるのは宜しくない。其樣な奴と交際するのは、恥と不名譽とをもたらすのみであると攻撃なさいましたのよ。けれど斯う云つても、恐れていらつしやる母樣が、何も仰言れないのを御覽なさると、お父樣は、情容赦もなく、家に起つた事を例に引いてお述べになつたのですの！　えゝ才氣自慢のくせに、くだらぬ事しか云はぬ奴、賢い娘に良い教育は何も與へずに、墮落に誘惑する樣な仕樣の無い奴を家へ入れたからいけないのだと、斯う口をおきりになつたのです。お母樣は默つて居らつしてはどうにもならぬと見てとつて墮落といふ語でお父樣のお言葉を遮つてお父樣のお話しになつてゐる、此の正直な人の行ひや、評判の中に墮落の疑ひをうける事があるかどうかをお問ひになつたのです。それは斯うしたふうに仰言いました。「妾は交際社會に、才氣のある事と、品格の具つて居る方は這入れぬものだとは少しも存じませんん。一體誰方に、家を開放してあけたら宜しいのでございませう、若し才能もあり考へもしつかりしてゐる方にそれが許されないなら？」

「適當な人にさ！」とお父樣は怒つて仰言いました。「娘の名譽を汚さぬ樣な人さ！」と「いゝえ、娘の名譽を汚さぬ樣な人に妾は家の戸を開いてやりますわ。」とお母樣は仰言いました。「一位も何も無い奴が娘をくれなんて云ふのは一家の名譽を汚すものぢやないか！」

「妾は反對に思ひます。そこに不名譽な人がムいません。反對に尊敬の表れがございます。其上、貴君はそんなに怒つていらつしやいますけれど、あの方は一體そんな申し出をなさいましたの？」

「したとも、聞まはないで置けば、どうなるかわかりやせん！　けれどお前が不注意にも果さなかつた事は今後私が油斷しないぞ」

そして、ハラハラする樣な爭ひが始まりました、その會話に妾は貴女がお話しになつた町の噂は、まだ父も母も知つてゐないといふ事がわかりました。けれど其お話しの間、妾はもう地の中深くへでも匿れて了ひ度かつたのです。一番良い、又苦勞の多いお母樣が、罪のある娘を辯護し、あゝ褒めて下さつて、失つた德について、一番立派な御言葉で褒めて下さるのに——この言葉は妾には一番卑下したものと考へられました——お父樣は怒つて、罵りの言葉をどしどしお出しなさるのですもの！　其言葉は、お父樣が夢中でいらつしやるので、悔の爲に、恥の爲に、滅茶苦茶になつてゐて、どの位の誠があるかも、お父樣はお氣づきにならずにいらつしたのです。あゝ賤しくなつた魂の、怒りや感激が見出されぬ罪の數々に惱んでゐる妾の苦しさ辛らさ！　心では受け付けないけれど、身にかゝる實の無い嘆賞の言葉の重さ！　妾はこの苦しい難から逃れ樣として、暇があつたら、もうすつかり申して了はうと思ふ程でした。けれど、お

父樣は激しいお怒りにお目がくらんでゐる樣に、同じ事を幾度も幾度も仰言るのです。そして一秒毎にまるで逆つた事を仰言るのです。お父樣は妾の賤しい、不了見な、卑しい、又妾とても後悔して居る樣な態度をお辱けになりました。妾の誤の原因がおわかりにならないのなら、お父樣はきつと妾の戀愛の原因をお見つけになるでせう！　そして妾が恥かしい程にあの方の事を、いやな、輕蔑一杯な言葉でお罵りなさるのです、妾は我慢し切れずに、お父樣を口のあけないやうにしてしまひました。

何處からこの妾の大膽さが來たのでせう！　そして又どうした氣持で妾は義務と愼しみとを忘れて了つたのでせう？　けれども妾は突嗟の間に恭しい沈默を破つてしまひましたのです、けれどなほそれには烈しい苦痛が伴つたことは御考へがつきませう。妾は斯う申しました。「マア！　氣を鎭めて下さい！　こんなに貴君から譏られる人は決して、妾には危險ではありませんわ」と。すると、お父樣はこの言葉に何か皮肉でもあるとお思ひになつたのでせう、云ひ譯も云はぬ間に、妾にとびかゝつていらつして、妾は頰を幾度か叩かれましたの。こんな事は生まれて初めてなんですの。そして妾の言葉にお怒りになつたと同じ樣な劇しさが其全體の怒りに加つて、妾を遠慮なしに、ぶつたり、叩いたりなさるのでした。いくら母樣が二人の間に這入つて、お體で妾を蔽つて下さいましたけれど、お母樣は、妾の代りに幾つか、お打たれになつたのですの。妾は避け樣として後退りして、歩みそこなつて、倒れて了ひました、そして顏が卓子の足に衝つて鼻血が出て來ました。

これでお父樣の怒りも漸く鎭つていつもの樣におなりだつたのです。妾が倒れた事、血、涙、お母樣の涙がお父樣を動かしたのです。心配さうに又熱心に妾を抱き起して、椅子に座らせて下さいました。そしてお父樣もお母樣も、妾が傷付いてやしないかと見て下さつたのです。妾は額に輕い打傷と鼻血か出た許りでしたけれど妾は、お父樣の樣子や聲が變つたので、御自分の今なさつた事を不滿に思つていらつしやる事がわかりましたの。お父樣は妾をさう急には愛撫しては下さらなかつたのでした、父の權威といふものは、其樣な急激な變化を許るさぬものでムいますから。けれどお父樣はお母樣へやさしく言ひ譯けを云つておいでゞした。そして妾は、お父樣のひそかに妾にお向けになるお目の中で、其言ひ譯けの半分は妾に對してである事がわかりましたの。やさしいお父樣が自分の爲さつた事が惡い事とお思ひになつて、困つて居らつしやるのほどお氣の毒なものはありません！　やさしいお父樣の心といふものは許す爲に出來てゐるのですわ！　許される爲に出來てゐるのではありませんわ！

丁度夕飯の時でした。妾が氣持が休まるまで御飯を延して下さつたのです。そして、お父樣は召使達が妾のこの事件を知つては困るとお思ひで、獨で妾に水を持つて來て下さいました。お母樣はお母樣樣で妾の顏を洗つて下さいました。あの氣の毒なお母樣、もうこんなに勞れて、病身なお母樣はどうかしたならこんな目にお會ひにならなくても良かつたのですに！　妾よりもお母樣を御世話してあげなくてはいけませんのに……

食卓ではお父様は一言も仰言いませんでした、けれどこの沈默は恥から出て居りますので輕蔑の爲ではないのです。お父様は料理がうまい等と強いて仰言つて、妾に勸める様にお母様に云つて居らつしやいました。そして妾が一番胸にこたへましたのは、機會を見ては、つとめて「私の娘」と妾を呼ばうとなさつて居らつしやるのに氣が付いた事ですの、いつもはジュリイと仰言るんですけれど。

『夕飯が濟みますと、馬鹿に寒いのでお母様は其のお室で火をお焚かせになりました。母様はストーブの一方に、お父様は他の一方にお座りになりました、妾は其間に椅子を持つて參りました。するとお父様は妾の裳を引つばつて、默つて自分の方にお引き寄せになつたのです。皆僅かの間にそして無意識の様に行はれましたの。ですから何かお父様は直ぐと後悔なさつた様です。けれども妾は其御膝の上に座つて居りましたので、どうともする事がお出來にならなかつたのですの。そして傍から見て其振舞を一層見ぐるしくしたのは、こんな不様な恰好で妾を抱いていらつした事ですの。妾は默つて居りました。けれども時々、お父様のお腕が妾の傍腹をギウッと締めつけ、置し了はせない吐息が洩れるのを感じました。何をキマリ惡るがつてお父様は妾をやさしく抱き締めて下さらないのかと考へましたの。離れる事の出來ない、何かしらの重いもの、打ち勝ち得ない氣まずさが。父と娘との間に、貞節と、戀とが戀人達に與へる様な抱擁を釀したのでした。お母様はもう安心し切つて、ぢつと妾達の方を見つめていらつしやいましたのよ。妾は、感じました、妾はこの様な感傷にぢつとして居れなくなりまし

たの。妾はわざと體をすべらせました。そして體を支へる爲に腕をお父様のお首にかけたのです。そして妾は顏を其お年を召したお顏の下の方から近かづけて、突嗟のうちに接吻と涙で、お顏を蔽つて了ひました！　妾はお父様も涙をお流しになつたのを感じました。きつとお父様は大きな苦しみからほつとなさつたでせう！　お母様も傍にいらつして、夢中になつてお欣びなのでした。この一生中、一番樂しい事に對する妾の心には、唯やさしい平和な無垢なものが缺けて居りましたのよ！

今朝は勞れと、倒れた時の興奮の爲に、いつもより長く床に居りましたの、すると妾が起きる前に、お父様が室へ這入つていらつしやいました。そして、妾の床の傍へお座りになつて、氣分はどうだと、お質ねになりました！　そして妾の手をおとりになつて、幾度も身をおかゞませになつて「私の大事な娘」と仰言つてそれに接吻なさいました。そして昨日餘り怒つたのを悔いてゐると仰言いました。妾は、斯う申し又斯う考へましたの、同じ様に昨日叱られても妾は幸福だ、一度撫でられれば、どんな酷い仕打ちに合つても心から忘れて了ひますと。

少し後に、父様は少し嚴しい調子で、昨日の事をもう一度仰言つて、正しい、そして明らか言辭で、其意志を仰言いましたわ。「お前も誰に私がお前を嫁としてあけようとしてゐるかわかつて居るだらう。それは昨日家へ還ると直ぐ云つた積りだ。又私はこれについて考へは變へないよ。エドワード卿の云はれた人については、皆の云ふ樣に、其才德の擧れある事は反對しないけれど、その人が自分で私に親戚關係をつけ

様等といふ大それた考へを持つてゐるかどうが、又誰かに教へられて、其様な考へになつたのかどうか私は知らない。けれど、私が目が見へなくなつても、英國の貨幣を皆あの男が持つ様になつても（譯者註―エドワード朝が其財産を半分やると言つたことりなんかするのを禁ずるよ。これはあの人の安全の爲にも、お前の幸福の爲にもなるのだからねえ。前からあの人には私はあまりいゝ感情は持つて居なかつた。私はあの人は嫌いだ。殊に今は、私にした自分を忘れたものゝ行ひに對しては、私は大いに憎んでゐる。あの男には一度はきつと思ひ知らせてやらなくてはならない」と。

斯う云つて、妾の返事も待たずに、田て行つてお丁ひになつたのです。丁度いらつしやつた時も同様に嚴かな風をなさつて。あゝ善良な人達の心を變性させ、自然の聲を發せしめない様にする偏見といふものは、何といふ、恐らしい惡魔なのでせうね！

貴女が仰言つた事はこんな風にして起りましたの。妾は貴女のお手紙を頂く迄は何故父があんな風になつたか、其原因がわかりませんでしたわ。妾の心には革命が起りましたわ。けれどどういふ風にして申上げたらいゝかしら！ この時から妾は變つて了ひましたわ。妾は悔いに滿ちた眼で家庭の中に平穩に幸福に生活してゐた時を回想致してをりますの。妾の誤つた行ひを感ずる情は、其爲に妾が失くした幸福の感情を感ずると共にいや増して來る様です。あゝ仰言つて頂戴！ もう戀愛の時期は過ぎて了つたのでせうか？ もうお會ひしてはいけないのでせうか？ けれどほんに妾の父の命令はきつぱりして居るのですもの。どうかすればあの方はきつと危い目にお遭ひになるにきまつてゐます。情の果ては妾はどうなつて了つたのでせう！ 茫然として了つて妾の魂は無感覺になつて了ひましたの。情火も理性もどうも仕様がありませんの！ 危い時なんです、貴女はさう仰言つてね！ さう思ひますわ妾も。けれど妾は、妾の行く可き道位はわかります。妾は幾度もあの慕しい方に手紙を書かうとしました、けれど一行書くと妾は氣を狂ひさうになるのです、續けて二行とは書けませんの。貴女だけが殘つて居ますの！ 妾の爲に考へ、話し、行つて下さいな。妾の運命は貴女におまかせしますから。どんな御決心であらうとも、斯う貴女にして頂き度いと思ひます。妾は戀の爲に得たこの悲しい權利を貴女にお賴みしますわ。妾自身から妾を永遠に離して頂戴！ 死なゝければならなけりや死なして頂戴！ けれど自分の手で心臟を貫く事は强いないで下さいな。

あゝ妾の保護者の貴女に、妾は何といふ恐ろしい任務を負せて了ふでせう。貴女はそれをなさる勇氣がお有りになつて？ 貴女は傍の事を考へない行ひや考へに對してなさるだけのお力がお有りになつて？ あゝ妾の心だけが裂く必要あるのではありませんわ！ クレールさん！ あゝ知つていらつしやるのねえ妾はどんなに愛されて居るのでせうか！ 妾は一番貧しい慰安すら持つて居りませんわ！ どうか貴女のお口から妾の心を云はせて頂戴！ やさしい愛の同情で貴女のお心を滿して頂戴！ あの可哀想な方を慰

めてあけてね！　百度もあの方に……あゝ仰言つて……どんな偏見、どんな障碍、どんな不幸があらうとも、天は妾達をお互の爲にお作りになつたのです。さうでせう？　えゝ一緒になれます樣に、神樣は運命を與へて下さつてゐるのですわ。この考へを離れる事は到底出來ません！　そしてそれにつゞく希望をあきらめる事はどうしても出來ませんわ！

あの方に、決して失望落膽なさらぬ樣に仰言つて頂戴！　あの方に、妾の名を以つて愛と服從を求めてお悦びになつちやいけませんよ。又妾の方についても其樣な事をなさつてはいけませんよ。安全は妾達の心に無いでせうか？　妾達の魂は別ける事の出來ないものなのです。妾達は一しか魂を持つてゐないのです。す妾を失はない樣に、そして若し運が妾達に追つて來ても、少くとも戀愛だけは信賴してほしいとだけ書いてあけて頂戴！　斯うしてあの方はこの苦しみからも、妾達の間に起つた不幸からもお逃れになれるでせうから、王はどう御命令になつても、妾達は永くは別れて生活出來ません！

手紙を書いて妾はお母樣のお室へまゐりましたの。すると馬鹿に氣持が惡くなつて、寢に還つて來なければなりませんでした。妾は斯う考へますの……恐ろしいわ……妾は昨日倒れた事から何か思ひがけない悲しい事が起つて來るのではないかと恐れてゐるよすの。これで妾の事は一段落つきました。そして妾の總ての希望が同時に妾を見棄てて了ひましたの。

簡書第六十四　クレールからドルブ氏へ

今朝父から、昨日貴君方の間におこりました事について聞かされました。妾は總てが、貴君の幸福を招くにふさはしいやうに進捗して行くのを歡びます。妾の幸福も其中に認めますわ。尊敬と友情とは貴君の身に集りました。妾の心がやさしい感情を養ひ得るものの總ては、やはり貴君のものでございます。けれど考へ遠ひをなさつちやいやですよ。確に妾は、女としては恐ろしい惡魔ですわ。どうした自然のなり行きで友情が戀に勝つたのかわかりませんの！　妾が、ジュリィさんは貴君よりも妾にとつては、慕しいと申しませば、貴君はお笑ひになるでせう。けれど皆うそなんです。彼女（あのひと）は貴君より嫉妬深いと云ふ事を自分でも知つてゐますの。貴君が滿足してゐらつしやる時でも、彼女はいつも妾が貴君を愛して居るなんて少しも知つてゐません。其上、妾はジュリィさんの戀人と同樣にジュリィの慕はしいものには皆愛着を感じます。そして貴君も妾の心では同じ位の程度で慕はしいのですわ、けれどもつと違つた意味でですわ、妾はあの人に對しては友情だけしか有つてゐませんけれど。彼女のはもつと劇しいんですよ。妾は貴君に對していくらか愛情のあることを信じて居ります。けれどそれはもつと落着いたものなのでございますわ。たとへ斯うしたものは、嫉妬心の深い方の平靜を亂すに充分でございましても、貴君の御友情がその爲に變らうとは存じません。

あのお兩人（ジュリイと其戀人）は妾達が味つてゐる樣な平靜さは少しも知らないのでございますわ。あの方々が絶望してゐるのに妾達が悦ぶなんて良くありませんわ。けれどあの人達は別れなくてはなりません。きつと永久の別れでせう。あの音樂會の日にお兩人に「あまりに悲しさうにして居らつしやる」と云ひましたが其時の悲しさは、斯うなる豫感だつたのですわ。けれどジュリイさんは何にも知らないのですよ。心を安かにして倘も失つた幸福を味つていらつしやいます。絶望の時にも、考への中で幸の影を味つておるでなのですもの。思ひがけない死で亡くなる人の樣に、あの不幸な人は生きようとなさつて、迫つて來る死を見ないで居らつしやるのですわ。あゝこの妾の手からこの恐ろしい一擊をあの人はお受け取になるのです。あゝ友情！　妾の心の愛するもの！

落人になる力を與へて下さい。この樣な苦しい義務の中で、貴君に忠實に仕へられる樣にして下さい。

妾は貴君を信賴します。貴君が妾をあまりお愛しにならなくとも、妾は貴君にお賴りしますわ。貴君のお心を妾は知つて居ります。妾は貴君のお心には人道の熱のある戀の熱狂は必要でないのだといふ事を知つて居りますもの。まづ、あの方（ジュリイの戀人）を妾の所へいらつしやる樣にお勸めするのです。其外の事は何にも仰言つちやいけません。今日は暇ですから、午後からはジュリイさん所へ行きます。貴君はエドワード卿を探してお兩人で、八時に妾の所へ行つていらつして頂戴！　あの方の出發を定め、其絶望に用意する爲に採る可き手段を御相談し度いのですから。

あの方の勇氣と私達の注意とが必要と思ひます。其上に妾はあの方の愛を必要としません。つまり、ジュリイさんの意志、ジュリイさんの生命と其名譽とが陷りかけてゐる危險さは、あの方が抵抗お出來にならない動機ですわ。とまれ、妾達の結婚はジュリイさんの方が一先づ片付いて了つてからの事です。ジュリイさんの淚が妾達を結ぶ緣を編らしてはなりませんわ。若し貴君が妾を愛して下さるのが戀愛なら、貴君の御同情は此場合、貴君の寬大さと一致するものですわ。それは、又貴君のことでないだけに、此處では他人事でもありませんのよ。

書簡第六十五　クレールからジュリイへ

もうこれで濟みましたの。隨分危い事をなさつたけれど、もう貴女は大丈夫ですわ。貴女のお心の秘密は神秘の陰に埋もれて了ひました。貴女はまだ、汚點の無い評判と世間の尊敬とを保つて、家庭の憩に、又國の中に皆から可愛がられて尊ばれて居らつしやるのですわ。恥と戀が過ぎたり、不足だつたりした爲に貴女が陷りにならうとした危險を考へてみて下さい。神の祝福の感情とさうで無い感情とを見わける樣にして下さい。貴女には貴女だけしか與へられない幸福があるんですから。貴女はあんまり臆病すぎる娘であり、愛人でありますわ。

妾はあの方にとつて酷いけれど、必要なその出發の巨細に就いては申上げたくありません。けれど貴女

は聞かしてくれと望んで居らしたし、又妾もさう御約束致しました。妾は妾達の間に共通な淡白な氣持でこの約束を守ります。この心の淡白さは、誠實と比較して優るとも劣る事の無いものでございますよ。若しお讀みになり度いなら讀んで下さい、けれどしつかりして氣を強く持つて讀んで頂戴！

妾の考へました、又昨日申上げた手筈は着々と行はれました。昨日歸つてまゐりますと、ドルブさんとエドワード卿とが來ていらつしやいました。妾はエドワード卿に妾達があの方の雄々しい寛大さに感じて居る事や又妾達の樣に感激して居るかを先づ申しましたの。其次に妾は妾達が一刻も早くあの方を遠ざけて了はなくてはならない理由や、仲々さうするも難事である事を申しました。エドワード卿はよくこの事をわかつて下さつて、其法外に熱中しておやりになつた結果、斯うなつた事に就いて苦しいと仰言いました。けれどあの方の出發を早める事は皆贊成でございました。又新しくぐず〳〵されると大變だから今こそ、有無を云はせず承知させて、事件を片付け、あの方の御滯在から出て來る、絕えない危險から救ひ出さねばならないと皆が申しましたの。妾はドルブさんに、あの方に知れない樣に適當な處置をして頂く積りでした。けれどエドワード卿は御自分の事の樣に心配して下さつて、出來るだけの事はすると仰言いましたの。エドワード卿は、今朝十一時には馬車の用意も出來るだらうから、出來るだけ遠くへあの方をお連れ申しまづ他の口實で此土地からお連れ出しになつて後で、どうにか好きな樣に決めて了ふと約束して下さいました。此方法はどうも妾達にとつても、あの方にとつても可成りあつさりとしない方法と考へまするで妾はあの方を妾達から遠くで、その絕望の苦しみにおとしいれて置く事はあまり望ましくありませんの。それにあの方の落膽なさる事も、エドワード卿のお目には、妾達の目に於ける樣に、はつきりと映らないかもしれません。ですから同じ理由で、エドワード卿があの人に直接お話しになつて、承諾を得ると仰言つた申し出もお斷りしましたの。前から妾はこの相談は機微なものであるから、妾だけで皆やらうと思つても居りましたの。それは妾が他の方よりもあの方のお心の感じ易い所を存じて居りますし、又男の方の間では、女でなければ柔らげられない樣な、何か冷めたい、乾いた所があるのも知つて居りますからなのです。けれどエドワード卿のして下さらうと云ふ事も、事件を準備する爲には乘てたものでないと考へました。で妾は德ある心で、自分で哲人と信じて居らつしやる、感じやすい方のお言葉が起こす結果が、どんなものかをもわかりましたの。それに又、そのお聲が賢こい方の推理に、どの樣な熱を與へるかをも考へてわかりますわ。

妾はエドワード卿に、兎に角あの方と一夕お過ごしになつて、あの方の狀態には直接何も云はずに、ストイクなお心を柔げて置いて頂く樣にしましたの。妾は申しました。「貴君はあのエピクテートス（譯者註―エピクテースはトイック哲學の巨頭である）の事をよく知つて居らつしやるのですから、今こそ、有益にそれを用ふる時でございますわ。表面だけの善と、眞個の善とを見わけて下さいまし。妾達の内にある善と、妾達に關係の無い善とを區別して下さいまし。試練が外から起つて來る時には、人が不幸になるのは皆自分からであり、賢こい

人は自分といふものを確かに保つて、何處にも幸福を抱いて行くものだと云ふ事を證明してあけて下さい。」と。妾はこの返事を聞いて、妾の申した輕い皮肉がエドワード卿を怒こらせずに、却つて熱心にさせた事がわかりました。そして明日はあの人をすつかり決心させて、貴女の所へ來る樣にさせますと、斷言なさいましたの。以上の事が妾の申し得られます總てですわ。貴女だつてきつとさうでせうが、妾は總て口先だけの哲學はいやに思つて居ります。けれど、兎に角心の正しい方は其主義を朝夕にお變へになる樣な事は恥とされますから、其心配は大丈夫ないと信じて居りますの、つまり前日考へて仰言つた事を翌日心で否定なさつたりするのは恥かしい事だから、其樣な事はなさるまいと思つて居りますの。

ドルブさんも何かやらしてくれと仰言つて、あの方々と一緒に、一夕を過ごす事をお望みになりましたのですけれど、妾は何もなさらない樣にお願ひしましたの。ドルブさんは會話をつまらなく、辛らいものになさるだけですから、私がドルブさんに對して興味を持つたからとて、ドルブさんが他の御二人から何にもお奪りなさる方ではないといふことに妾の氣が付く邪魔にはなりませぬ。强い魂の雄々しい者へは、その人達に一種ちがつた文法が分らぬ慣用語を與へる言葉であります。皆さんにお別れする時、妾はバンチの事を考へました。そしてまだ云はなくてもすむ事を云はれると大變と思ひまして、笑ひながら、エドワード卿にそつと其事を申しますと、エドワード卿は、斯う仰言いました。「安心なさい。何も危い事が無い樣だつたら私はいつもの樣にしますが、決して酒に呑まれて了ふ樣な事をする私ではありません！ 兎に角ジュリイさんの名譽、一箇の人間、私の友達の運命に關する問題なんですからねえ！ 何か會話に後ろ暗い所がある樣になるといけないから、私はやはり例の通りバンチは飲みますよ。けれどこのバンチはレモン汁で作りませう！（譯者註―即ち酒のつもりにして）あの人はお飲みにはならないから、そんな事にはお氣付きにはなりますまい」と。ねえ！ こんな注意をなさらなけりやならない樣な習慣（飲酒家であることばの意味）を持つていらつしやる方は隨分お氣の毒ですわねえ！

妾は其晩も申しあげられない程に心配して過ごしましたの。貴女のお少さい時の無邪氣な樂しみ、昔しのなつかしい事、一年來あの方と妾の間に、あの方が貴女にお會ひ出來ない所から生じた密接な交際、皆總てが妾の心に、今貴女とあの方とのお別れに對する悲しみを起させるのでした。妾も何だか妾の存在の一部が、貴女と同樣を失はれる樣に感じましたの。午前中妾は話さうと思ふ事に考へてみたり、その言葉の及ぼす影響等をくりかへし〳〵思つて居りましたのです。心配さうにしていらつしやつて、いきなり貴女には別お變りないかとお質ねになつたのですのそれは貴女がお父樣とあんな事をなさつた翌日に、あの方は貴女が御病氣だとお聞きになつたのですの。それにエドワード卿が貴女は床からお離れにならないと、昨日仰言つたからでせう。煩はしい事を避ける爲に妾は、直ぐに昨日夕方貴女がもう餘程およろしい樣に見うけたといふ事を申しましたの。そして、ハンズが還つてくれば、きつとずつとよくおなりだといふ事がわかりませうと附け加へて申しましたのよ。

ハンズは其時貴女の所へ丁度お使ひに出した所でした。けれどこの様にしても何の役にも立ちませんでした。あの方は色々と貴女の事をお聞きになるのですの。あまりそんなお話ばかりしては、大事な事が申されませんので、手短かな返事をして置いて、今度は妾の方からあの方に質問を始めましたのよ。

妾は先づ、其御氣持を變らせようとしました。妾は其時あの方は可成り重々しく、理論的で、理性で感情を抑えられておいでなさると見てとりましたので、斯う獨語を申しました。「おやッ！　妾の考へはまとまつてゐるのだわ、どうかうまく行く様にしたいものだわ」。普通こんな場合には段々とやさしい、悲しい事から申して行くのですけれど、妾は、一言でカットなさる劇しいあの方の想像力を知つて居りますのでまるで反對な方法をとる事にしましたの。妾は先づまつ先きにあの方に皆申し上げて了ひ、段々と慰めてあげて、其お苦しみを段々と增したり、幾度もお苦しませしたりする事はよしにしました。妾は少し眞面目になつてぢつとあの方を見つめてかう申しました。「强い魂の中でも勇と德との限界はあるものですわよ。愛するものを斷念するのは人類以上の一つの務ではないでせうか？」と。斯う申しますと、あの方は氣狂ひの様に立ち上つて手を叩いて、拳を握つたまゝ其額の所にやつてお叫びになつたのです。「わかりました。ジュリイさんは死んだのですね！　ジュリイさんは死んだ。」——とあの方は妾が恐ろしくなる程の調子で仰言いましたの。「私の死を延ばし、もつと酷いものにするのは、貴女方の儘り多い心盡しや、役にもたゝぬ手段だつたのです、わかつた！」と。

一寸恐ろしくなりましたが、妾はあの方がこんなになさる理がわかりましたの。まづ、今朝あの方が皆さんとお會ひになつて貴女の御病氣の事や、エドワード卿の誡めやをお聞きゝになり、妾がその御質問をうまくはづした事や、妾が今し方した問ひ等が、あの方をこの根のない、恐ろしい處に陷入れたのだと考へつきました。妾はあの方の誤りに對して、どういふ處置をしなけりやいけないかわかつてゐましたけれど妾はその様な酷い事は到底決心し兼ねました。愛するものゝ死は、その人にとつて樂しいものが何一つなくなる程恐ろしいものです。で妾はこれを利用しようと思ひました。妾は申しました。「恐らくもう貴君はお會ひは出來ますまい。けれどジュリイさんは生きていらつしやるんですよ。そして貴君を愛していらつしやるんですよ。あゝ若しジュリイさんがお亡くなりになつたら、妾が何を貴君に申上ける事がありませう！　貴君の不幸に、加つて來る事の出來た不幸が、無くて濟んだ事を神樣にお禮申上げて下さい」と。あの方は驚いて、熱心にしかも茫然として居らつしやいました。で妾はまづお座らせ申して、順々と申上げなくてはならぬ事を述べるのみに暇がかゝつた程でしたの。妾は出來るだけエドワード卿のなさつた事を褒めて申しました。それはあの方の正直なお心の中に、感謝の念を起して苦しみをおまぎらせになる樣にする爲なのです。

妾は續けて申しました。「現在は此樣な有樣なのです。ジュリイさんは深い淵の邊にいらつしやるのですわ。どうかすると、不名譽、一家の叱怒、あの劇しいお父樣の荒い仕打ち、又御自身の絕望の苦をお受け

になるんですよ。危險は段々と增して行きますの。お父樣の手からか、或は御自分の手からか、短劍があの方の心臟の上、すれ〳〵に擬せられてあるわけなんですから。こんな不幸を避ける唯一の方法があり、又それがたゞ貴君によつてのみに可能なのですの。貴君の戀人の運命は、貴君が好きに左右なされるのです。貴君はジュリイさんから離れて、彼女(あのひと)を助けておやりになる勇氣をお持ちでせうか！　何故つてジュリイさんは貴君にはもうお會ひ出來ないのです。禁ぜられてあるのです。貴君はそれでも彼女の破滅と不名譽との源となり、傍觀者とおなりになり度いのですか？　貴君が爲さる事を皆して下されば、彼女も貴君のお心が彼女の爲にどの位の事がお出來になるかを、おわかりになると思ひます。あんなにお苦しみですものお體が惡くなるのもあたりまへですわ！　貴君は彼女の生命に心配していらつしやるんでせう！　貴君こそあの方を助けてあげなくてはなりませんわ！」と。

あの方は默つて聽いていらつしやいましたわ。けれど當面の問題が何であるかおわかりになると、あの強い、怒つた、恐ろしい、劇しい前の御樣子はなくなつて了つたのに氣が付きました。悲しみと困惑の憂はしい氣な色が、お顏一杯におなりでした。力の無いお目付、氣力の失せた御樣子で、そのお心の亂れ亂れて居るのが窺はれました。辛らうじて斯うお答へになりました。何も知らぬ他の人から、見たら冷靜と見へる樣な調子で仰言いました。「出發しなくてはなりますまい。えゝよろしい、行きませう！　私はもう隨分長く生きてゐましたわ！」と。妾すぐ斯う申しました。「えゝ、貴君は貴君の愛する方の爲に生きていらつしやらなければやなりませんわ！　貴君は、彼女の生が貴君の生命に據つてゐるといふことをお忘れなの？」と。「それを裂く事はならぬ、」といつて、直ぐに「彼女は別れて居れたのです、又別れてをられるでせう」とあの方は斯う仰言いました。妾はその終りの言葉を聞かない風をして希望のある話をしてお心をひき立て樣としました。あの方はもう希望に對しては全く心を閉ぢていらつしやるのですもの。其時にハンズが還つてきました。そして吉報をもたらして來たのです。あの方はどの樣な欣びをお感じになつたのでせう、呼び出しになつたのよ。「あゝ丈夫でゐて下さい。幸福でゐて下さい。出來るなら……私は彼女に最後のお別れは致し度くありません(も一度あひ度いからの意味)……私は行きます。」と。私は申しました。「彼女はもう貴君にはお會ひ出來ませんのよ。あゝお別れをなさつたわけです、貴君方はもう別れていらつしやるんですわ貴君は彼女から遠くへいらつしやれば、今よりは樂におなりでせう。少くとも彼女を安全にしたといふ悅びをお感じになりますわ！　今から今日から遠くへいらつして下さい。この樣な大事な犧牲は遲れてはなりませんから。貴君が彼女の爲に身を投げ出しになつた後で、彼女を破滅させる樣な事があつていゝものですか？　あの方は怒つた樣にして仰言いましたの。「何ですつて？　私は彼女に會はずに行くのですつて！　あゝもう會へないのですつて！　いやどんな事があつても私は會ふ！　私自身を私から奪ふ前に、私は私の心、私の生命を彼女の足元に置きます。」と。妾としては、この樣な企畫の酷い事、馬鹿らしい事をあの方に說明出來ませんでしたけれど、「何です、私はもう會へないのですつて。」といふ御言葉は、絕えず

より苦しい調子で語り出されるのでした。そして將來に對する何か慰安を少くとも求めて居る樣に！　妾は申しました。「何故貴君は貴君の御不幸を實在以上に苦しいものとお考へになるんです。何故、貴君はジュリイさんもお棄てにならない希望を棄ててお了ひになるのです！　貴君は、ジュリイさんがこれが永久の別れだと知つて、此樣にして別れられるでせうか考へてみて下さい！　いゝえ、貴君は彼女の心根を察してやつて下さらなくてはなりません！　貴君は彼女がどの樣に生命より戀を重んでいらしやるかわかつておあけなさらねばなりませんわ！　妾は恐れてるるのです（妾は斯う申しましたのよ）、妾はジュリイさんが、戀を何物よりも重んじて居らつしやりやしないかと恐れて居ますのよ。ジュリイさんは希望を持つていらつしやるんですよ。何故つて彼女は生きてゆかうとなさるからですの！　注意の爲に彼女が爲していらつしやる事は過ぎてるる程に貴君を重んじて居るのですのよ。又彼女は御自分の爲にも、又貴君の爲にも自重していらつしやるんですからねえ。これを忘れないで下さいませよ！」と。そうして妾は貴女の最近の手紙を出して、戀を失つたと思つても、尙やさしい希望を持つていらつしやる貴女の事を見せてあげましたの。そして妾はあの方の希望をこのやさしい熱で旺にしようとしました。この數行の字があの方の毒の這入つた傷口に効ある藥をぬつた樣に役にたつたのです。妾はあの方の目が和らぎ、涙がたまつて來たのに氣が付きましたの。段々と絶望に安心かつ〻いて來た樣に思はれました。貴女の仰言つた、このあはれな御言葉、「長い間は到底妾達は別れてはなられません」——といふ御言葉にはあの方はワッと泣き出してお了ひでした。あの方は聲を張りあげ、手紙に接吻なさつて仰言いました。「いゝえ、ジュリイさん！　長い間私達は別れて居られるものですか！　神樣は地上で私達の運命を結び付けて下さいます。さうでなければ私達の心はあの永劫の世で一緒になる許りです。」

思ふ通りに行きました。けれど、あの方が馬鹿に悲しさうに苦しんで居らつしやるので、妾はこんなお氣持の儘出發して頂く事は出來ないと思つてるましたが、あの方がお泣きになつて、口から貴女の御名がやさしく漏れたので、妾はあの方の身の上の事には心配しなくなりました。絶望程妾には恐ろしいものはございません！　所が斯う思つて居ります時に、あの方は心の感動のあまりにか思ひがけない、反對をなさつたのです。あの方は、貴女が心配さうに仰言つた將來の事に就いてお話しになつて、これから貴女を迫害する、澤山な危い事に貴女を殘して置くより、死んだ方が良いと仰言るのです。妾はつい貴女におこつた事を申したのです、けれど妾は簡單に貴女がなさらうとする事は皆失敗し、何も出來ないでいらつしやると云つただけなんですの。あの方は嘆息をついて仰言いましたの。「あゝもうこれからは地上では一瞬の幸福な時とてなからう！　實の無い夢の樣に私の幸は消えて了つたのだ」と。

そこで妾は貴女に託された最後の事をしなけりやならないのでした。貴女方が首尾よく御結婚なさつた後は、その事に對して準備も又秘密も要るまいと存じます。妾達の會話の題目について、再び起る恐れのある爭論を避けるため、此大したことでない問題について、理窟を申すことは止して置きませうよ。妾はあ

の方にそのやり方に不注意な所があつたと云つてお責めしましたの。そして、貴女が餘程前から、あの方がもつと注意深くして下さると良いと仰言つてゐた事や、あの方が他日注意深くおなりなら、其時には、あの方に貴女の事を氣をつけて下さる樣にお願ひになるだらうし、もつと自由にさせてもあげられるし、妾が貴女に代つて、あの方にお賴みした此ほんのちよつとした附け足しの仕事をやつていたゞき度い等とあの方に申上げましたわ。あの方はこの申出に屈辱をお感じになつた樣子も見えませんでしたし、別に「役に立ちませう」といふ風もありませんでしたし。唯簡單に、貴女からあの方が受けるものは何一つ歡喜を以つて迎へないものは無いといふ事を、貴女は御承知だと仰言いましたの。けれど、又貴女の爲さる用心は上皮ばかりだとも云はれました。其上こんな事も仰言いました。つまりあの方がグランソンで小さい家をお買りになつたのです！　其お家はあの方の貧しい親からの身代の殘のものだつたのださうです！　一生中まだ持つた事の無い程金を手に入れた等と。又斯う附け加へになりました。「其上私はまん更無能な男でもありませんから、どこへ行つてもそれを賴りにして生活の糧としますよ。仕事をやつて、この不幸がまぎれたら幸です。ジュリイさんが其お金のあまりでなさつた習慣（譯者註―慈善施金）を目近に見てからは、私はその習ひを寡婦や孤兒の堅い寶だと思ふ樣になりました。私はその人達には何にも支給出來ない身ですけれど。」と。妾はあの方がヴァレーへ旅行なさつた時の回想を起させたのでした。其他貴女の手紙や貴女が日課を正しくおやりになつた事など。同じ樣な理由が殘つて居て……この時あの方は怒つた樣にしてお叫びになつたのでした。「同じ事なんです！　私が仰言る事をきかずにゐて罰せられるのは彼女にもう會へないといふ事なんでした。彼女が私を棄てゝも、私はいやは申しませんよ」

私が云ふ事をきくのに、何故私をお罰しになるのでせう？　私が若し拒絶したら、どんな事をなされるでせう！……同じ事だ（とあの方はやきもきして云はれましたよ。）私達の緣は始められた。そしてもう終らうとして居る。きつと私は永久に彼女と離れるのだ！　私と彼女との間に何の通ずる所も無くなつて了ひました。互ひに路傍の人と同樣になつて了ふのだらう。」と。この最後の言葉をあの方は非常に切ない風に仰言いました。妾はお氣をまぎらさうとして色々やりましたが駄目でした。妾は强いて笑つて申しました。「貴君はまだ子供ですわね。まだ後見人が要りますわ。妾が成りませうね！　いゝですか妾がこの事をお預りしますよ。ですから將來妾達の交りを好い都合にする爲に、貴君のなさる事は皆聞かせて頂き度いものですねえ！」と。妾はこの不吉な考へから、あの方をまぎらはせてあげようと、貴女と妾としたお話しに就いて色々と申上げ始めましたのよ。するとこの素朴な方は貴女の事なら何でも氣を付け樣としてらしやるものですから、直ぐと妾の手にかゝつてお了ひでした。其次妾達手紙の宛名について相談し合ひましたのよ。そしてこんな相談はあの方をお悅ばせしたのでせう、ドルブさんがいらつしやるまでも、色々な事を計畫致し合つて居ました。ドルブさんは萬事用意出來たと妾に合圖なさつたのです。

あの方は何の合圖だが直ぐおわかりになつて、頻りに貴女に一言書かせくれと仰言いましたけれど、妾

はお許しませんでしたの。妾はあの方が夢中になつて、手紙をお書き始めになつたら、容易に出發おさせ出來ないと思ひましたからなんでございます。私は申しましたの。「ぐずぐずなさるのがいけないのです。危險なのです。兎に角早く旅の最初の驛へいらつしやつて、そこから自由に妾達にお手紙を下さいな。」斯う云ひつゝ妾はドルブさんに合圖をしました。妾は進み出ました。妾は胸が一杯になつて、あの方のお顏にひたと妾の顏をおつけしましたの。妾は全くあの方がどうおなりだかわかりませんでしたもの。妾の目は涙で見えなくなりました。頭が茫然としてまるりました。もう妾の役目は終つたのでしたわ。

少し經ちますと、お兩人が急ぎ足で階下へ行らつしやる音がしました。妾は中段まで出て見送りました。今し方どうなさつたのか、妾は覺えては居りません。妾はあの方が階の中頃で膝をお突きになつて段々を幾度も〳〵接吻していらつしやるのを見ました。ドルブさんはこのつめたい石に、體、頭、腕を壓しつけて長いすゝり泣きを出していらつしるあの方を、一生懸命に引き離さうとしていらつしやいました。妾はもうすこしで知らず知らず泣き出す所でしたの。妾は大急ぎで室へ這入りましたの。家中の騷動になるのを恐れまして。

暫くして、ドルブさんは目に手布をおあてになつて還つていらつしやいました。そしてかう仰言いました。「これで濟みました。あの人達はもう出發して了ひました。あの方はお家へお歸りになると、馬車が來てるました。そしてエドワード卿がそこで待つていらつしやつたんです。そしてエドワード卿はあの方の前へ驅つていらつして、胸にお抱きしめになつたのです。そして、「君來たまへ。君を愛してるる者に君の苦しみを濯いでくれ給へ。來たまへ。私の樣な友のある間は地上で總て失つた事にはならないのだから」と悲し氣に仰言つてお居でした。そしてその力強い腕であの方を車にのせて、互ひに堅く抱き合つて出發なさいましたよ」と。

第一部　了。

第二部

書簡第一　ジユリイへ

私は百度もペンを取つては措きました。私は最初の言葉からためらひました。私は別な調子を取る可きかもわかりませんし、また何處から始めていゝかもわかりません、しかも私が手紙を書かうと思つてゐるのはジユリイさんになのではありませんか！　嗚呼！　何と云ふ不幸なものになつてしまつたのでせう私は！　丁度、盡きせぬ流れのように百千の優しい感情が私のペンから流れ出たあの時代は最早無いのです！　あの信頼と明け放しの樂しい時は過ぎてしまひました。私達はもう一體ではありません。私は誰に手紙を書いていゝかわかりません。あなたは私の手紙を受取つて下さいますか？　貴女の眼は私の手紙を見て下さるでせうか？　貴女は私の手紙を謙遜な愼重なものだと思つて下さるでせうか？　私は手紙の中に、昔にかはらぬ親愛の情を殘しておいてもいゝのでせうか？　私は其處に消された、棄てられた愛について書いてもいゝでせうか？　そして私は最初の日、貴女に手紙を上げた時の樣に心が臆してはゐないのですか？　何と云ふ變り方でせう、嚊々情けない！　あんなにも樂しかつた日々から私の恐ろしい災害へ移つたとは！　嗚呼！　私は生きようとしました、そして私は虚

無の中に陷ち込んでしまひました。生の希望が私の心を生かしてゐましたのに、今では死の影より他、私の前にありません！　三年の隔てが私から幸の多かつた世界を閉ぢてしまひました。嗚呼！　その間の私の老衰れかたは何と云ふことでせう！　生命を延ばすに償する何物をも、最早人生の中に見なかつたあの瞬間の快樂の後、私の豫感に何で從はなかつたのでせう！　疑もなく、生をあの三年に限つて了ふか、時の流れを止めて了ふかすべきだつたのです。幸福を味つてそれを失ふよりは、一度も幸福を味はぬ方がずつとましです。もし私があの不幸な時間を飛び越したなら、もし私の魂を別のものにしたあの最初の一瞥を避けてゐたなら、私は自分の理性を享樂し、人間の義務を滿し、そして多分何かの德でもつて私のつまらない經歷を飾つたでせうに。一瞬の迷ひがすべてを變へてしまひました。私の眼は見てはならないものを敢へて見て了つたのです。それはその避くべからざる結果を生み出しました。一步一步と迷つた揚句、は私發狂者となり、恥辱の中にその鎖と失望とを引きずつてゆく、力なき、勇氣なき、愚かな、奴隷となつてしまひました。

迷へる心の虛しき夢よ！　そを造つた心にも直ぐにいとはるゝ詐りの望よ！　それが我等に與へられる時、人は拒むだらうあの虛しい醫藥について、本當の病氣を想像してみたところで何にならう！　噫、まだ戀を味はずして誰か貴女を見、そして私が自分の最上な情火を拂つて買はうとおもふ程の可能な喜悅がその中にあると思ひませう！　いゝえ、いゝえ、神が慈悲を遠れて私に我が不幸と共に、過ぎ去つた幸福の思ひ出を殘して下さる樣に！　ジュリイさんなしで幸福でゐるよりも、私は私の追憶の中にある快樂と私の心を引き裂く悔恨に苦しむ方がいゝんです。さア、なつかしい面影！　貴女が無くては生きるすべもわからない所の一つの魂を充して下さい。私共の放浪中、私共に來て下さい。私の苦痛を慰めて下さい。消えて了つた私の望みを蘇へらして下さい。此の不幸な魂は永久に誰にも浸かされない「貴女」の聖壇でありませう。運命も人もそこから貴女を引き放なすことは出來ません。たとへ幸福に叛くとも私は永久に愛にはそむく事は出來ません、此の愛は愛を生ましめた力と同じく敗るべからざるものです。それは力と德との勵かすべからざる礎の上に建てられてゐます、それは不滅な魂の中に於て亡びることは出來ません。それは希望の支柱も要りません、過去がそれに永遠の未來に對する力を與へます。

それなのに貴女、ジュリイさん、一度は愛することを知つてゐらつした貴女だつたのに、おゝ、何故貴女のやさしいお心は生活することを忘れたのですか？　何故あの聖なる焰はあなたの純な魂の中で消えたのですか？　何故貴女は貴女一人だけがお感じになり、又お作り出しになれたあの淨い快樂の味をお失ひなつて了つたのですか？　貴女は憐みも無く、私を翫り立て、恥辱と共に追放なさる、貴女は私を絕望にお投げ入れになる、そして貴女は、貴女が自ら迷つていらつしやつて、私を不幸にし乍ら、貴女御自身の幸福をも自分から奪つてゐることにお氣が付かないのです！　嗚呼！　ジュリイさん、貴女のお心に親しい他の心をお探しになつても、それは確かに無駄です、千人の心は疑ひもなく貴女を崇拜するでせう、が私

の心只一つだけが貴女を愛することが出來ました。

答へて下さい今直ぐに、いつはり深き戀人よ、あんなにも多くの神秘を以てなされたあの計劃はどう成つたのですが？　あんなにも度々、それを以て私の信じ易しい單純さを誘惑したあの空しい望みの數々は何處にあるのですか？　熱い思ひの柔しい目的、それをもつて貴女のお筆、あなたのお口が私の望みを慰めて下すつたあの聖い、願はしい結合は何處にあるのですか？　嗚呼！　貴女の誓を信じてそこ私は良人と云ふ神聖な名にあこがれ、そして人の中でも最も幸なものと自分を信じてゐたのでした。云つて下さい殘酷な人よ！　貴女は私を卑しめて更に私の悲哀を新らしくさせ、私の屈辱を深からしめる丈なのですか？　私は自分の過ちで自分の不幸を惹き起したのですか？　私は服從を、柔順を、深慮を缺いてゐたのですか？　貴女は拒絶するのが當り前なほど、私の望みは薄弱なものだと御覽になつたのですか？　それとも私が貴女の崇高な意志を棄てゝ自分の愚かな欲求を擇んだと御覽になつたのですか？　私は貴女を喜ばせる爲にすべてを爲ました、そして貴女は私をお棄てになりました！　貴女は私の幸福を背負つてお居でなのに私を亡ぼしてお了ひになりました！　忘恩の人よ、私が貴女にお預けした抵當物を返して下さい私に私自身を返して下さい、貴女が私に示し、やがて私から奪つてお了ひなすつたあの最上の幸福の中に私の心を迷はせた後で。噫！　私はあなたの運命に逆つて生ける者の中でも最も幸福な者でありましたらうに……嗚呼！　私は最早何者でもない、一瞬間にすべてを奪はれて了ひました。私は少しの暇も無く多

の快樂から永久の悔恨に移つて行きました。私はまだ私から逃れ去る幸福に觸れてゐます……私は未だそれに觸れてゐます。しかもそれを永久に失はうとしてゐるところです！　嗚呼！　若し私がそれを信ずることが出來るものなら！　もし空しい望みの殘りが支持してくれなかつたら！……おゝメイユリイの岩々よ、迷つた私が眼はいく度お前を見たであらう！　けれどもお前達は私の失望をちつとも慰めて呉れないではないか！　若し私がそれに價値を認めなかつたら、私は人生もさほど愛惜しないであらうに！

書簡第二　エドワード卿からクレールへ

私達はブザンソンに着きました。そして私が最初氣にかけたのは私達の旅行の次第を貴女にお知らせることです。旅行は平和にとはゆかなくとも、先づ無事にすみました。そしてあの人はあの樣な惱ましい心が健康であり得られると同程度に身體も健康です。彼の人は一種の平靜を外面に裝はふとさへつとめていらつしやいました。けれどもすべてがその內心の動搖を示してをります。そして私の前では大分自制していらつしやいます。そして私がそれに欺かれてゐる樣な振りをするのは、彼人をして彼の人自身との戰ひに沒頭させて、その心の力の一部をもつて他の部分の影響を制せしめようとする爲めなのです。

彼の人は初めの內は甚だしく落膽していらつしやいました、私共の旅路の速やかさが、その悲哀を增さ

せてゐるのを見て、私は其日は早く切り上げました。彼の人は私に少しも話をしませんでした。私も又彼の人に話しかけなかつたのです。不用意な慰めは返つて激しい悲哀を鋭くする丈けなものです。無關心と冷淡となると直ぐに言葉が見出されるものです。しかし悲哀と沈默とこそは眞の友情の言葉です。私は昨日此の意氣悄沈に必ず相繼ぐものである、激情の最初の閃めきを認めました。午頃に、私達が、先方へ着く幾分前に、私の所へ近つていらつしやつて「何故私達は出發を延ばすんですか」とあの方は苦しい微笑をもつて私に云はれました、「何う云ふわけで私達は一寸でもあの方にこんなに近く止まつてゐるんです？」。其晩彼の人はジュリイさんのことは一言も云はずに努めて澤山おしやべりをしようとなさいました。私がもう十度も答へた問を再び繰返されました。私達がもう佛蘭西の地に入つたのかをお尋ねなさいました。そしてその次には直にブヴェイに着くのかとお尋ねなさいました。瞬に着く毎に彼の方が先づなさつた事は何か手紙を書くことでした。そして直ぐ後でそれを引きちぎるか消すかなさるのでした。私は此の沸騰した樣な氣持の火の、樣な劇しさがら二三度のがれました、此で貴女は彼の方の心の狀態が御想像出來ることと存じます。でも兎に角手紙を一本お書き上げになつた樣でした。

此の最初の徵候が示す激情を豫見する事は易いのですが、しかしその影響や限界は何んなであらうか私には云ふことが出來ませんでした、何故なら此れは其の人間の性格、その情熱の種類、生起せんとする環境、如何なる人智も決定し得ぬ百千の事物の結合に依るからです。私としては彼の方の怒りについては責任があります、然し失望については關係がありません、そして又如何なることを爲ようと人は常に自分の生命の主人です。

けれども私は彼の方が自分の人格と私の心遣ひとを尊敬するだらうと思つて、心を安んじてゐます、そして私は、そこに吝しまれはしない熱い友情と云ふものよりも、その情熱の質及びジュリイさんの御性質に望をかけてゐます。心と云ふものはそれに關係する性質を制限することなくして一事物に强く長く沒頭することは出來ません。ジュリイさんが持つ極端な優しさは、ジュリイさんの爲に惹き起される情熱の激烈さを柔らげるにちがひありません。そして私はあの樣に激しい一人の男の情熱はそれがないなら當然お持ちにならない筈の快樂を彼女にお與へすることを疑ひません。

私は又彼の人の心に賴ります、あの人は戰つて勝つ樣に創られてゐます。彼の人のそれの如き愛は拙づく用ひられた力の樣に薄弱なものではありません。激しい、且つ不幸な情熱はしばしの間、否寧ろ永久にその能力の一部を脊め盡して了ふことが出來ます、けれどもそれこそはその心の能力の優秀な證據であり、叡智を開發する爲にそれから引き出し得る決意の一證左なのです、何故ならば、崇高な理性は偉大なる情熱を作り出す魂の激烈さによつてこそ保持されるのでありますし、又人は愛人に對して感ずると同じ情熱を以てするに非ざれば、哲學を有價値に用ひることは出來ないからです。

槿に、クレエルさん、私は此の不幸なお二人の運命に關して貴女に劣らず興味を持つてゐます。そして

興味を持つと云つてもそれは弱さでしかあり得ないところの憐れみの情によつてではなくて、各人が自身にとつても、社會にとつても最も有益である樣な風に置かれることを欲する正義と秩序との考慮に依つてなのです。此の二つの美しい魂は一は他の爲に自然の手から出ました、柔しい結合に於て、幸福の懷の中に於ては、彼等はその力を伸ばし、その美德を働かすことが自由で、その範例をもつて地上を照らすことが出來るのです。何故偏見的な沒理漢が永遠の方向を變更し考ふる存在（人間の意味）の調和を覆へさねばならないのでせうか？　何故一人の野蠻なる父の虛榮が斯樣に光明を桝の下に隱し、それを他の魂の涙を拭ふ爲に生れて來た、柔しい慈悲深い魂の涙の中に悲しましめるのでせうか？　結婚の關係は契約の中でも最も神聖なものであると同樣に、最も自由なものでは無いのですか？　然うです、それを妨げるすべての法律は不正です。それを結んだり破つたりするすべての父は暴君です。此の聖なる自然の結合は君權の下にも、父權の下にも置かるべきではなくて、諸々の魂を支配するを知り給ひ、相結ぶべきことを彼等に命じて、相愛せしめ給ふ共通なる父（神）の唯だ一つの權威に從はさるべきであります。

自然に適合してゐるものを思想に適合さる爲めの犧牲にして了ふのは何ふ云ふわけですか？　財產と身分との差異は結婚に於て融合して了ひます。それは幸福には何の關するところもないのであつて、氣分や性格の差異こそ、永くまで差異は差異として殘るものなのです。そして幸、不幸の分れるところは一に是れに由るのです。愛より外、何等の規準を育たぬ子供の選擇は善くありません。然し思想より他の規準を持たぬ父親の選擇は更にいけません。娘が理性や經驗を缺いて、才智や風習を批判出來ない時には、良き父は疑ひも無く之を補助しなければなりません。彼の權利は、（それは義務でもあるが）、次の樣に云ふことであります、「娘よ、あれは立派な男だ」。又は「あれは馬鹿だ」。是れが父親の關す可き點であつて、すべての他の點の判斷は娘に屬す可きであります。是では社會の秩序が亂れると叫びながら、此等の暴君は自らそれを亂してゐるのです。階級はその功績により て定められ、心の結合は心の選擇によつて定められてこそ眞の社會の秩序が存するのです。此の秩序を生れや、當によつて定めるものは眞の攪亂者であり吾人は此を非難し罰すべきであります。

それ故此の弊害を匡正するのは宇宙の正義であります。暴戾に抵抗し、此の秩序を一致協力して守るのが人間の義務です、そしてもし此の不幸な二人の戀人を理性なき一老人の意に逆つて結婚させることが私に出來るなら、慥に私は人間の毀譽褒貶を眼中に置かずに是をも行つて天の仕事を完成しませう。

貴女は遙かに幸福ですね、クレエルさん、貴女のお父さんは貴女の幸福がどうして出來るかを貴女よりもよく知つてゐるぞとは云ひ張りはなさいません。それは多分賢明なる見識に依るのでもなく、又お父さんがその樣に貴女をして貴女の運命の主人たらしむる過大な愛情に依るのではないでせう。それでも若し結果が同一であり、又お父さんが貴女に與へた自由に於て、無頓着が理性の代りをするのであるとしても、その理由の如きは何の關するところがありませうか？　之は自由を惡用するどころではなく、貴女が

二十歳に於てなさつた選擇は最も賢明なる父親の賞讃を勝ち得るものであつたでせう。貴女の心は、比類のない友情にいつぱいになつてゐるので、愛の焰に對する餘地が殆んど無かつたのです。貴女はそれに代ふるに結婚に於て之を助くべきすべてのものを以てします、愛人であるよりは友人である方がより適してゐる貴女は、よしや最もやさしい妻ではなくとも、最も有德な妻になるでせう、そして叡智が爲す斯樣な結合は年齡と共に生長し年齡の續くかぎり續くものです。心の衝動は遙かに盲目的なものであつて、又遙かに打ち勝ち難きものです。それに抵抗させられることは自らを亡ぼすの道であります。理性が爲す如く に愛が調整する人々、戰ふ可き障害なく、爭ふべき偏見無き人々はほんとに幸ひですね！ 一人の頑迷なる父親の不義なる抵抗が無かつたなら、きつと私達の二人の愛人達の身の上もこの樣であつたでありませう。此のお父さんがいらつしたとても二人のいづれかゞ善き忠言をお受けになつたなら、お二人はそれでも其爲に幸福であることが出來たでせう。

ジュリイさんの例も貴女の例も共に夫妻の相適合するかどうかを判斷するのは夫たり妻たる可き者にあると云ふことを示してゐます。もし愛が支配しないなら理性のみひとり選擇するでせう、此れは貴女の場合です。もし愛が支配するならば、自然が既に選擇したのです、それはジュリイさんの場合です。かくの如きものが自然の神聖なる法則であります、此を犯すことは人間に許るされてゐない、是を犯せば人間は當然罰をうけます、そして此を侵止して身分や階級の考慮を容れれば、不幸や罪惡は到底防ぐことは出來ないのです。

冬が更けて羅馬に行かなくてはならなくなつても私は私が保護しておいでなさる此の友達心が安心の出來る平らかな狀態にあるを發見しない間は、出發しないつもりです。もし私が彼の方を幸福ならしめることが出來なくとも、少くとも私は彼の方をして賢明ならしめ、又男子として人性の罪過を忍ばしむる樣につとめます。私に委托されたといふ事によつて私には尊い役目です。もし私が彼の方と一しよに二週間ばかりを此處で過さうと決心致しました。その間にジュリイさんと貴女の御手紙を受け取り度いものです。又あなた方御二人が此の病める心の痛手の上に、何かの慰めをする事に於て私を助けて下さることを望みます、此の病める心は感情の機關に依らずには未だ理性の聲を聞くことが出來ないのです。

私は此處に貴女のジュリイさんへの手紙を一つ同封致します。どうぞ人手に托して下さらずに、貴女御自身で御渡し下さい。

〔斷　片〕　右の手紙に附加せる（戀人からジュリイへ）

一

何故私は私の出發の前に貴女にお逢ひ出來なかつたのですか？ 貴女は私が貴女にお別れするに及んで息絶えやしないかとお恐れになつたのです！ 可憐な心よ、しつかりして下さい、私は丈夫です……私は

苦しみません……私は未だ生きてをります……私は私が貴女にとつて大切な者であつた頃のことを考へてをります……少し胸が迫つて來ました……車が私をほんやりさせて了ひました……私は打ち挫かれてしまひました……私は今日は長く貴女に書くことは出來ないでせう。明日は多分もつと元氣が出るでせう……それともそんな事を必要も無くなるかも知れません。

二

此んなに早く何處へ此の馬共は私を引つ張つてゆくのかしら？　自ら私の友だと云つてゐる此の人はこんなにも熱心に何處へ私を連れてゆくのかしら？　貴女に遠く離れる爲なのですか？　それは貴女の命令なのですか？　それは貴女のおゐでなさらない場所へ行くためですか？……嗚呼！　考の無い方！……私は此んなに速く通つてゆく道を眼で測ります。何處から私は來たのですか？　何處へ私は行くのでせうか？　そして何故こんなに急ぐのでせうか？　貴女は、殘酷なお人ですねえ、私が自分の滅亡へ大急ぎで行かうとしないのを恐れていらつしやるのですか？　おゝ友情！　おゝ戀！　友情と戀との調和をお望みになるのですか？　そこに貴女の幸があるのですか？

三

貴女は私をこんなに亂暴にお騙り立てになる事について御自分の心によくお考へになつたのですか？　貴女は。云つて下さい、ジユリイさん、貴女は永久にお棄てになるつもりなのですか？　いゝえ、あの優しいお心は私を愛してゐます、私はそれをよく知つてゐます。運命に逆らつても、それ自身に逆つても、あの心は墓に至るまで私を愛するでせう……私にはそれがわかります。貴女は自分でそれを暗示していらつしやいました……何と云ふ永久の悔恨を貴女は自ら用意なさるのです！……嗚呼！　もう遲過ぎる……おゝ！　貴女は忘れることが出來たかも知れません！……おゝ！　私は貴女を誤解したのかも知れない！……嗚呼！　貴女の事を思つて下さい、私の事を思つて下さい、それから……よく聞いて下さい、未だ遲くはありません……貴女は殘酷に私をお追ひ立てになりました。私は風よりも早く逃げます……只一言を云つて下さい、さうすれば私は光の樣早く還つてゆさます。一言を、さうすれば私達は永久に結ばれるのです。私達は結ばれなければならない……私達は結ばれるでせう……嗚呼！　風よ、私の嘆きを運び去つてくれ！……それなのに私は逃げてゆく！　私は貴女から遠く離れて生活して死なうとするのだ……彼女から遠く離れて生活する……

書簡第三　エドワード卿よりジユリイ

貴女の從姉さんはあの方の近狀を御話しなさるでせう。それに又私はあの人が此の定期馬車で貴女に手紙を上げるだらうと思つてゐます。先づこれで貴女の興奮を靜め、それからあの手紙を徐ろに讀んで下さい、何故なら前以て申し上げて置きますが、あの人の問題は全く貴女の御注意を要するもので御座います

から。

私は色々な人間を知つて居ります。私は少しの年の中に多くの生活を致しました。私は自ら犠牲を拂つて大なる經驗を得ました。そして私を哲學に導いたものは情熱の道であります。然し私が今まで觀察したすべてのものの中には、貴女と貴女の戀人の如く、常例と異つたものは一つもありません。それは貴女方御二人がどちらも最初の一目でその差異を識別し得られる様な特徴ある性格を御持ちなさらない故だからではありません。そして亦貴女方を定義することの此の困難は、皮相な觀察者をして、貴方がたを凡庸な人物と看做させ勝ちです。然し貴女方を他と區別することが出來ないと云ふこと、また一般の人達の常に持つて居らないものである普通的模範の諸性質が、すべて同樣にあなた方の性質の中に輝いてゐると云ふことが、それこそ貴女方が他と區別される所以なのです。かくの如くに一つの版から押されるあらゆる押印（スタンプ）は天に其印の特徴である所の缺點を有してゐるものであります。そしてもしその版から一つの完全なものが出て來るならば、最初の一目では美しく見えても、それを確實に認めるに長い間、よく觀察しなければなりません。私が貴女の戀人を最初見た時に、私は一つの新らしい感情にうたれたのでした。そしてその感情は理性がそれを是認するに從つて毎日毎日增すばかりでした。貴女についてはこれは又全く別なものでありました。そして此の感情はその性質を考へちがへる程つよいものでした。此の印象を生ぜしめたものは性の差異と云ふよりは、寧ろ戀愛とは無關係に心が感じるところの猶一層強い完全の性格なのです。私

にはあの方がなくして貴女はどんなであるだらうかよくわかります、が貴女なくして彼の方がどんなであるだらうかはわかりません。多くの男子は彼の方に似ることが出來ます、しかしジュリイさんの樣な人は世界中に二人とをりません。私自身の罪となるあの過ちをしましたあとで、貴女の御手紙は私に私の眞の感情を知らせて下さいました。私は自分が決して嫉妬してはゐないし。又從つて戀におちてもゐないと云ふことを知りました。貴女は私にとつてあまり御親切であつたと云ふことをも知りました。貴女にふさはしいのは乙女の樣な魂なのです。そして私の魂は貴女に決して價しないものでせう。

その折から私はあなた方御互の幸福に對して盡くることない優しい興味を抱き初めました。すべての困難を排し得べく信じて、私はあなたの御父樣のお側で、不愼重な方策をとりました、そしてその不成功はかへつて私の熱中を增させる理由となつたばかりです。どうぞ私の云ふことをお聽き下さい、さうすれば私は未だ私が貴女に致しましたすべての惡いことを償ふことが出來るのですから。

貴女の御心をよく測つて御覽なさい、おゝジュリイさん！　そしてあの人が身を燒かれてゐる火を消し止むることが出來るかどうか考へて御覽なさい。火の進行を止めることが貴女に出來た時期が多分ありましたらう、しかしそれなのに、もし淸淨な、貞節なジュリイさんがお屈しなさつたとしたならば、どうしてジュリイさんは其失墜の後に再び立ちなほることが出來ませうか？　どうしてジュリイさんは勝ちほこり、そしてすべての過去の快樂をもつて武裝してゐる戀の力に抵抗することが出來ませうか？　若い戀す

る女性よ、もう貴女は自分で手を下すのをおやめなさい、そして貴女を誘惑する頼みをお斷りなさい、もし此の上戰はなければならないとすれば貴女は亡びて了ひます、貴女は卑しめられ征服されるでせう、そして恥辱を感ずる情で次第にすべての貴女の美德は徹ひかくされて了ふでせう。愛は貴女の魂の本體の大部分を最高部分を占めてゐるのですから、貴女は永久にそれを追ひ出して了はうとお思ひになつても駄目で御座います、愛は增々力を得て腐蝕性の水の樣に魂のあらゆる場所に染み込みます、貴女は貴女が自然より受けられたすべての微妙な感情を同時に消して了はない限りは(愛)の深い印象を決して消し去ることはお出來になりません、そして愛がもはや貴女に無い樣になつたら、價ある何物も貴女には存在しなくなるのです。ですから今貴女の心の狀態をお變へにならないで、貴女は何事をなさる事が出來ませうか？只一の事は、ジュリイさん、愛を正當なものにすることです。私はその爲めに貴女に殘つてゐる唯一の方法を申し上げませう、それを御利用なさい。まだ時機があるのですから。無垢と美德を肯定するのに天が貴女に下したこの崇高な理性を以てして下さい、然うでなければ最も貴重なる天の贈物を永久に卑しくする恐れがあります。

私はヨルク（英國の地名）の公爵領にかなりな土地をもつてゐます、そこに長い間私の先祖達が住んでゐました。城は昔のですが、立派で便利なものであります、その附近は人里離れてゐますが氣持よくまた色々變化があります。ウーズの河は、園地の端を通つてゐまして、目に美しい眺めを與へると同時に産物を送り出す役にも立つてゐます。土地の産物は主人の相當な暮しには充分ですし、持つて居れば忽ちふえることも出來ます。此の幸福な鄕では厭はしい偏見も威を逞うしません、平和な里人は未だ今でも昔の單純な風習を守つてゐます、そして其處ではあの方（ジュリイの戀人）があんな前に、人を感じさせる樣に描寫なさつたヴァレエの景色さながらの物があります。ジュリイさん、此の土地は、もし貴女があの方と御一緒に御住ひになつて下さるならば、貴女に差し上げます。其處で貴女方は御一緒に、私が私の手紙の中でこれから申す色々なやさしい希望を、實現して下さいまし。

御出でなさい、御出でなさい、情のある信實な男女よ、來て愛と無垢との隱れ家に造られたるこの場所を御取りなさい。來て、天と人との前に貴女達を結ぶ優しい絆をお固めなさい。來て貴女達の美德の範例をもつて、德の崇められる鄕、又素朴なる人々のそれを眞似るに吝かでをい鄕を光榮にして下さい。靜かな此の鄕で、あなたがた二人を結ぶ感情の中に純なる心の幸福を永久にお味はひなさい。神が貴女達の聖い家の火を祝福し給はんことを！　其處で貴女方は、崇むべき老樂の中に生を延ばし、そのはては貴女方の御子達の胸に抱かれて生をばお了へになつて下さい。私達の兒孫達が胸をかすかにときめかせて、此の結婚の幸福の碑をば讀み、或日心動けるまゝにこの樣に云はせて下さい、「此處は是れ無垢の隱家、此處は是れ相愛の二人が住家！」と。

貴女の運命は貴女の手の中にあります。ジュリイさん。私が貴女にする此の提議を注意深く慮つて下さ

い、そしてよくその根本を御究め下さい、何故なら之に加ふるに私が取る此の企てについてあの方のお考へも、豫め慥と確かめなければなりませんから。私はまた貴女の出發なさる事や及びあの方と共に貴女が無事御到着なさり、貴女の御身體に何の危害も無い様にと工夫を凝さなくてはなりません。あそこへいらつしやれば、貴女方は故障なく公然と結婚なさることが御出來になりませう、なぜなら、私共の方では、年頃の娘は自分の身を處置するのに、他人の同意を得る必要は少しもないのですから。私共の賢明な法律は少しも自然の法則を排するものではありません、そしてもし此の幸福な結合に何等かの不都合な結果が起きるとしても、それは結婚の時のそれに比してとるにも足らぬものなのです。私はヴヴェーに私の侍者を一人のこしておきました。是は信用の出來る、正直な、分別のある、何事につけても忠實な男でございます。貴女は別に事情をお知らせになるには及びませんか、レジアニーの助けをかりて、口頭なり、手紙なりで前の私の侍者と御談合なさることが出來ます、時機が參りましたら私共は貴女と御一緒になる爲に出發致します。そして勿論貴女は貴女の良人の手によつて親の家をお去りになるのです。

私は貴女の御考へに委せます、しかし繰り返して申し上げておきますが、誤れる偏見と、小心の誘惑とをお恐れ下さい。これは屢々名譽の道を經て惡德に導くものですから。私には、もし貴女が此の計畫を御拒みになれば、貴女の身にどんな災がふりかゝるかよくわかります、癒し難き一人の父の暴戻は貴女を深淵の中に引きずりこむでせう。それは貴女が陷ち込んだあとでなければお氣付きにはなりますまい。貴女の極端なやさしさは、時として臆病に墜ちます、貴女は境遇と云ふ怪物の犧牲にされておしまひなさるでせう、心の拒む約束までをしなければならぬ様になりますよ。社會の同情は良心の叫びによつて絶間なく打ち消さるでせう、そして貴女は榮譽はあれども侮蔑さるべきものとおなりになるでせう、寧ろ忘れられて有德なるに到底及びません。

二伸、貴女の御決心の程を危んで私はあの方にはお知らせずに此の手紙を差し上げます、貴女が拒絶なさる曉、忽ちに私の心遣ひのすべてを破壞することになりはしまいかと恐れて居ります。

書簡第四　ジユリイからクレールに

おゝ！　貴女、貴女は昨晩何と云ふ困惑の中に妾を御殘しになつたことでございませう！　そして又妾は此の致命的な手紙を夢みながら何と云ふ夜をすごしましたことでございませう！　いゝえ、一度だつてこんなに恐ろしい誘惑が私の心を襲つたことはございませんでした。一度も此の様な動搖を私は感じたこともございません。また一度もそれを靜める方法も無くてこんなに苦しんだことはございません。前には智惠と理性との光が私の意志を導きました。すべての困難な機會に遭ふ度に、私は先づ最初に一番立派な決心を見わけて直にそれを採つたのでムいました。今となりましては、妾は卑められ、常に征服せられて相反する情熱の中に漾ふの外ございません。私の弱い心はもはや誤れる選擇よりしかとれませんの、そし

て妾はこれ程哀れむべき目盲いなのでございます。もしかして私が最良の決心を取る様になるならば徳は妾をすこしも導いてくれないでせう、そして悔恨のみ殘るでございませう。貴女は妾の父がどんな良人を妾に擇んでくれるのか御存知でゐらつしやいませう、あなたはどんな絆と愛が妾に與へたか御存知でゐらつしやいます。妾は有徳であらうと欲しませうか？　服從と信とが妾に反對の義務を課すのでございます。妾は自分の心の趣くところに從ふと欲しませうか？　戀人と父といづれを擇びませうか？　嗚呼！　愛と、自然との云ふところを聞きますれば、誰かを失望させなければなりません。義務に妾の身を犧牲に致しますれば、妾は一つの罪を犯すことになります！　そしてどちらの決心を取りましても、妾は同時に不幸で罪あるものとして死なねばなりません。

嗚呼！　親しいやさしい友よ！　いつも妾の唯一の助けでいらつした貴女、そして幾度も幾度も死と絶望とから妾を救つて下さいましたあなた、どうぞ今、わたしの魂の恐ろしい狀態を考へて下さいませ、そして貴女の救ひのお手が妾に何よりも必要であるかを御考へ下さいませ。あなたは自分の御意見がきかれるどうかを御存知でゐらつしやいます。貴女は貴女の御忠告が守られるかどうか御存知でゐらつしやいます。妾は妾の生涯の幸福をかけて申しますわ、妾が友達の教訓にそむくかどうか、貴女は知つていらつしやいます。ですからどうぞあなたの爲に妾が陷りました困惑を憐んで下さいませ、貴女がもとで起つた事ですから、貴女どうぞ始末をつけて下さいまし。妾の失はされた勇氣を御助け下さいませ、あなたによつてのみ考へる者の爲に御考へ下さいませ。ともかく、あなたはあなたを愛してゐる人の心の中を御讀みなさいます、妾が妾の位置に於て欲し、又撰ぶものを御教へ下さいませ。只今となりましては妾には欲する力もなければ選ぶ理性もございません。

此の寛大な英國貴族（エドワード卿）の手紙を御讀み返しなさつて下さいませ、それを千度もお讀み返しなさつて下さいませあなた。嗚呼！　愛、平和、德が未だ妾に與へてくれ樣とする幸福の美はしき光景にあなたはお觸れなさつて下さいませ！　甘美な眩惑する樣な魂の結合、悔恨の中に於てさへも言葉にも云へぬ甘い數々の味よ、おゝ！　夫婦の契を結ぶ曉にはお前達は妾の心にとつて何んなものでせう！　おゝ！　幸福と無垢とは未だ妾の手の中にあるとしたら！　おゝ！　妾は愛する良人と彼の愛情の貴い證據との只中に愛と喜びとで溺沒することが出來るとしたら！……それなのに妾は只一瞬間を躊躇する！　そして妾の過ちを償ふ爲めに、その過を妾に犯させた人の腕に妾は身を投け入れないのだ！　そして妾は既に家族の有德な妻、貞節な母ではないのだ！……おゝ！　妾の父母は妾が思ひをひるがへして墮落の淵から出るのを御覽になれないとしたら！　お父樣達が妾につくして下すつた神聖なるつとめを妾は自分の番に今度つくすのを御兩親が御覽なさることがお出來にならないとしたら！……そしたらお前、忘恩な、道外れの娘よ、お前が義務を忘れてゐるのに、誰が御兩親のお傍にゐて、孝養を盡してお上げ申すだらうか？　お前がさうならうとするのは、母親の胸に七首を貫き通さうと云ふわけなのではないか？　その家の名譽を傷

ぐるものがその子供に家を尊敬すべきことを教へるのでございませうか？　父と母の盲目的な愛情の貴い對象は其子の生まれたことを親に悔やませて、又親を棄てて、その老ひの日々を悲しみと、辱しめで蔽ふのです……そして、出來るなら、此の樣な償を拂つて得た幸福を享くるのです！

おゝ、何と云ふおそろしいことでございませう！　こつそりと國を逃れ、家を辱しめ、父、母、友達、身内、そしてあなたをも同時に棄てるなんて！　そしてあなた、妾の心から愛する友！　あなた、妾の子供の時から、唯の一日でも離れてゐることの出來なかつたあなた、あなたを棄て、あなたにはなれ、あなたを失ひ、あなたに二度とお會ひ出來ないなんて？……あゝ！　いゝえ！　決して出來ませぬ……何と云ふ責苦がわたくしをくるしめることでせう！　妾は自分で選んだすべての惡を一時に感じてゐますわ。そして妾を慰めるどんな善も殘つてはをりません。嗚呼！　妾は迷ひます。たくさんの戰ひが妾の力に越え、妾の理性をみだします。妾は同時に勇氣も考へも失ひました。妾には唯あなたより外望みをかける方がございませんの。選んで下さるかそれとも妾を死なせて下さいませ。

書簡第五　返事

あなたの御困惑はまことに御もつともなことでございますわ、ジュリイさん、妾にはそれが前もつてわかつておりましたけれど、豫め防ぐわけにはまゐりませんでしたの。妾にはよくわかりますけれど、夫を片付けて上げることは參りませんのです、そしてあなたの場合更にいけないことは、あなた御自身でなければ誰もそれを切り抜けることは出來ないと云ふことなのですわ。間違が思慮分別に關することでございましたら、友情が動搖してゐる魂を救ひに來ることができます。もしまた善か惡かを選ばねばならぬのでございましたら、善惡を見まちがふ情熱が、默つて公平な忠告を從ふことが出來ますわ。けれども今度の場合ではどんな決心をあなたが御採りになるにしても、自然はそれを承認するとともに、又之を罪しますし理性は之を批難し又之を賞讃します、義務は默るか又は義務自身に反對します。結果はどちらから見ても同樣に恐るべきものでムいます。あなたは決心なさらないでゐらつしやるわけにもゆきませんし、また善く選ぶと云ふわけにもゆきません、あなたには唯比較すべき苦痛しかございません、そしてあなたの御心だけがその裁判者でございます。妾にとりましては思慮の重大さに、心恐ろしく思ふのでございます、そして思慮の結果が妾を悲しく致します。どんな運命をあなたが御選びになりましても、それはつねにあなたに償しないもので御座いませう、そして適當な決心をあなたに御敎へ致すことも出來ませず、又こそはあなたがあの方から御受けになる唯ひとつの拒絶でございますわ、そしてこれがまた確に最後のもので御座います、けれど妾は理性さへも自ら沈默して、又從ふべき唯一の規準はあなた自身の傾向を考へてみる事でありますから妾は貴女を支配しようと思つてあなたをうらぎりましたの。

妾に對して不公平な考へは持つて下さいますな。妾のやさしい友よ。そして時が來る前に、妾を御裁き下さいますな。用心深き友情は、相犯すことを恐れて困難な場合に忠言を拒むものであり、またその捜目は友人の危險と共に增すものであると云ふことを存じて居ります。嗚呼！　あなたはあなたを愛する此の心がこの樣な臆病な用心を知つてゐるかどうか、聽て御存知になるでせう！　あなたの御事情についてお話しする代りに、妾の事情について一寸御話し致しますのを許して頂戴。

あなたは今迄あなたに近づく、すべての人がどんな點まであなたに愛着するか考へて御覽になつたことがございましたか？　一人の父と一人の母が一人娘を寵愛するのは大して驚くにもあたりません。熱したウォルマルさんの樣な冷靜な男の方がその年までに始めてあなたを見て心をうごかすこと、一家族全體が一齊にあなたを偶像の樣にあがめること、あんなにも物に感じない妾の父が自分の又子供達と同じに、むしろそれ以上にあなたを親愛すると云ふこと、友人、知り合ひ、召使ひ、隣人、町中全體が共にあなたを愛し、そして最もやさしい興味をあなたにもつと云ふこと——是は虛言の樣な競爭めいた有樣でございませう。そして是は若しあなたの中に何か特別な理由がなかつたら起らなかつたのでございます。あなたは此の理由が何であるか御存知でゐらつしやいますか？　それはあなたの美しさでもなく、才氣でもなく、淑かさでもなく、人の氣に入る天賦として、人間の了解する何物でもございません。それは類のないやさしいお心と愛情の柔かさとなのでございます。あなたを人が愛する樣になるのは人をお愛しになるあなたの天賦によるのでございます。人間と云ふものは親切以外のものには何にでも抵抗することが出來ますわ。そして他人の愛情をかち得るには自分の愛情を他人に與へるよりも確な方法はございません。百千の女はあなたよりももつと美しうございます、あなたと同じようにしとやかな人は澤山をります。けれどあなた御一人だけが、淑やかさと共にもつと魅惑的な何物かを持つていらつしやいます。それは人を欣ばせるばかりでなく人を感じさせて、そしてすべての魂をあなたの魂の前に飛んで來させるのでございます。人は此のやさしい心は自分を捧げることしか求めないのを感じます。そして彼が求むるやさしい感情自身が其人を探す樣になるのでございますわ。

あなたは、實際エドワード卿があなた方にお示しになつてゐる信ぜられぬ程の愛情に驚いてゐらつしやいますのね、あなたはあなたの幸福に對してエドワード卿が熱中してゐるのを御存知でゐらつしやいますのね。あなたは彼の方の寬大な申出を驚いて御受けになりますわね。あなたはそれを唯、あの人の美德と云ふものゝ御蔭にしてゐらつしやいます。そしてあなたは感動しておいでになるのでムいますわ！　とこ ろがそれは間違ひなのでムいますよ。ジュリィさん！　エドワード卿の御親切を妾が割引して考へたり、又あの方の立派な御心を安く見積るのは結構でないかも知れません！　けれども、確かに、あの方の御熱心は、全く清いものではございますけれども、もしか貴女以外の他の人に對す

るのでありましたら、きつともつと弱いものでありましたでございませう。あなたの打ち勝つことの出來ない勢力とあの方（戀人）の友達の勢力との爲めに自分にはわからない乍ら、エドワード卿はあんなに力を御入れになりまして善惡によつてのみしなくてはいけないものだと、信じていらつしやることを愛情によつてやらうとしてゐらつしやるのでございます。

斯う云ふことは、ある資性をもつてゐる、すべての魂にとつて起ることなのでございます。此等の魂は申して見ますならば、他の魂を自分と同じように造り變へます。此等の魂はその中では何者も抵抗しないところの一つの力の世界を持つてをります。人はそれを知りますときに、眞似ようと致さないわけにはまへりません、そしてその崇高な高翔によつて、此等の魂はそれを取り卷くすべてのものを自分の方にひきつけるのでございます。それ故あなたも、又あなたの愛していらつしやる方も、多分決して人間といふものを御存知にならないでせう。何故なら、あなた方は彼等の本來の姿よりもはるかに異つて、あなた方が彼等を理想化し、意慾化して了つて御覽になるので御座いますから。あなた方と一しよに生活するすべての人々に一つの調子をお與へになります、彼等はあなた方から逃れるか、あなた方と同じ樣なものになるかどつちかでございます、そしてあなた方が御覽になるすべての人々は、多く世の中の他のものゝうち同樣なものは何にも見ないでございませう。

さて今度は妾のことに移りませう、ね、同じ血、同じ年齡、殊に反對な生れつきをもつてゐながら趣味と氣分とが完全に同じ爲め、子供の時からあなたと結びついてゐた妾のことに。

Congiunti eran gl alberghi,
Ma più conjiunti i cori:
Conforme era l, etate,
Mn' l pensier più conforme. Tasso, Aminte.

（われらの魂は、住家と同じく結びつきて
われらは年齡と同じき經驗を持ちにき）

あなたに近づくすべての人々に感じられる此の魅力が、貴女と一しよにその生を送つた者の生活に如何なるものを生ぜしめたかと、あなたは御考へになりますか？　一つの共通な絆しか妾達の間を支配することが出來ないと御信じになりますか？　妾の眼は妾達がお互に相ひ接して妾が每日あなたのお目の中に、受けとるところの快い喜びをあなたに返しませんかしら？　あなたは妾の感動した心の中にあなたの苦痛を分ち、あなたと一しよに泣く喜びをお讀みになりませんか？　生れ出づる最初の戀の法悅に於て、友達はすこしもあなたを煩はさなかつたし、またあなたの戀の呼きはあなたを妾から遠ける樣にもさせなかつたし、又あなたが自分の弱點を妾にお匿し出來なかつたことを、妾はどうして忘れることが出來ませうか？　あの時期は重大なものでございました　ジュリイさん、あなたの謙讓な心の中では相互的のもので

ない犠牲がどんなものに償するか妾は存じてをります。もし妾があなたの半端な友達でございましたら決して妾はあなたの秘密を打明けていたゞく人ではなかつたでございませう。妾達の魂は結びついてお互にあまりよく感じ合ひますゆゑ、何者もそののち相離すことが出來ないのでございます。

婦人の間で友達をあんなにも緩くし、あんなにも永續的のものにしないのは何でございませうか？（妾は愛することがお出來になれるだらうと思ふ婦人達の間について申しますのですが）それは愛の利害關係それは美しさの力、それは征服に對する嫉妬でムいます、そこでもし總て斯麼ものが一つも妾達の仲を裂くことが出來ないとすれば、此の分離はすでになされた筈でございませう。けれども妾の魂がも少し愛に適してゐた時、あなたの情熱はその性質として生命と共にでなければ消えないのだと云ふことを知らなかつた時には、あなたの戀人は妾の友達でございます。卽ち妾の兄弟でございます。そして誰か嘗て正眞な友情の戀によつて終ることを見ましたか？　ドルブさんについては、確にあの方は妾がそのことで不平を言はうと思はないうちは長い間あなたのお心持に滿足しきつてゐるでございませう、然し妾はもはや、貴女が妾から彼の方を引離さうとなさる程、強いても彼の方を引留めようといふ氣はムいません。あゝ！　あなた、あの方の御熱心の代價で、貴女の御惱みを妾がお癒し出來ますように、神かけて祈りますわよ！　妾はあの方を監視し、悅んであの方をお讓り致しませう。

自分の容姿に對する自信につきましても、妾は自分の滿足する丈は自信をもつことが出來ます。あなたはその點で妾の競爭者ではございません、そして確に妾達二人のどちらが美しいかを知ろうとすることはあなたの生涯中、あなたがお思ひになる事もございませんでせう。が妾は全くそれほど無關心ではございませんでした。妾はそれによつて何をもつて少しもそのことを氣にかけずにゐられるか知つてゐます。妾はそれについては嫉妬するよりもはるかに自負してゐるとさへ思はれますの。なぜと申しますならばあなたの容姿の魅力は、妾のに必要なものではないので、妾のもつてゐる何ものをも妾から奪はないのです、そして妾は自分があなたの美で美しく、あなたのしとやかさで可愛らしく、あなたの才氣で飾られてゐるのを發見致します。妾はすべてのあなたの完全さで自分を飾つてゐますの、そして妾はあなたの中によりはつきりした妾の自尊心を置くのですもの。妾は自分の事について心配するのを好みません、然し妾は自分が美しかるべき要求に應ずるだけには充分に美しいのでムいます。すべての他のものは妾には無益ですそして妾はあなたの下に就くのに讓遜なんかする必要は少しもございません。

あなたは何を妾が言ひ出さうとするのかを、ぢれつたがつていらつしやるでせう。それは斯う云ふことなのですの、妾はあなたが御求めになる忠言を御上げすることが出來ないのです。妾はその理由をあなたに申上げました。けれどもあなたが御自分の爲におとりになる決心は、同時に妾の爲のでもあるといふ事をおわかりになつて頂き度いのでございます。そしてあなたの運命がどんなものでございましても、妾はそれに與らうと決心してをります。もしあなたが御出でになるならば、妾もついてまゐります。もしあな

たが御止りになるならば、妾も止ります。妾はそれについては動かない決心を致しました。何物も妾をその決心からそらすことは出來ません。妾の致命的な溺愛があなたの滅亡をひきおこしました。あなたの運命は妾のでなければなりません、そして妾達は子供の時から、離れてはならないものでございましたからジュリイさん、墓場までその通りでなくてはなりませんわ。

あなたは、きつと、此の計劃の中には多くの輕率さをお見出しなさるでございませう、けれども、實際は見かけよりもずつと多くの意味がムいますのよ。そして妾はあなたと同樣な不決斷の動機はもちませんなるのです、その父は愛情によつてよりも無關心によつてその子供達に好きな事を爲せておくのです。何故なら御存知の通り歐羅巴の諸問題が一身の問題よりも父を熱中させ、その娘は父にとつてはブラグマチック哲學よりも貴いものではないのでございますから。のみならず妾は、あなたの樣にひとり娘ではございませんし、そしてあとにのこつてゐる子供達でもございますから一人位缺けたところで何とも思はないでございませう。

妾はきまりかけてゐる結婚を棄てませうか？　そんなことは何でもございませんわ、あなた、お氣の毒なのは（もし妾を愛してゐるとすれば）ドルブさんなんですわ。

妾としましては、どんなに妾があの方の性格を尊敬致しましても、どんなにあの人に對して愛着しないわけにはゆかないに致しましても、又どんなにあの方の中の眞に立派な人となりを惜むに致しましても、妾のジュリイさんに比べますなら、何でもございませんわ。ね、ジュリイさん、魂は性（セックス）を持つてゐるものでせうか？　實際、妾は自分の魂では性（セックス）を感じません。妾は好きになることは出來ますけれども戀することは殆んど出來ません。良人と云ふのは妾には役に立つものであるかも知れませんが、然しそれは妾には永久に一人の良人にすぎないでせう。それで良人のことについては、妾は未だ自由で構はないのですけれども、世の中から一人だけは見つけることが出來ます。

下のことをよく注意して下さい。ね、妾はすこしも躊躇しないにしましても、それはあなたが躊躇してはならないと云ふことを言はうとするのでないのです、又もしあなたが家を御出になるなら妾がとらうと思ふ決心をあなたに暗示しようとするのでもないのでございますわ。そしてあなたの義務は妾のよりははるかに重いものでございます。殆んど類のない愛情が妾の心を充し、外の感情はみな吸ひこまれてなくなつてしまつてゐると云ふことをあなたは御存知下さいますね。卽ち破ることの出來ぬやさしい習慣が子供の時から妾をあなたに結びつけてをりますの。妾はあなた一人しか完全に愛しません、そしてもしあなたに從ひつゝ何かの羈絆をやぶらなければならないならば、妾は貴女の範例によつて勇氣をつけませう。妾は自ら斯う申しませうし「妾はジュリイさんを眞似よう」そして自分のすることを正當なものと信じませう。

〔ジユリイからクレールへの紙片〕

あなたの御仰ることがわかりましたわ、比らぶるものない友よ、妾はあなたに御禮申し上げます。少くとも一度は妾は自分の義務をつくしておきませう、そうして妾はあなたにふさわしいものになつてお目にかけますわ。

書簡第六　ジユリイからエドワード卿へ

あなたの御手紙を拜見致しまして、エドワード卿、妾は感動と賞嘆との情で一ぱいでございます。あなたが保護し下さるあの方もあなたが妾達の爲に爲ようとして下すつた、すべてのことを知ります時には同樣に感じることでございませう。嗚呼！　親切なお心の價がわかるのは不幸な人ばかりなのですわね。妾達は貴君のお心の立派な事は種々な事でわかりました。貴君の雄々しいお德はいつもながら、妾達を感動させますの、けれど其お德でも私を驚かすわけにはまへりますまいと思ひます。

この樣にも寬大な御友達の保護の下に幸福で暮し、そしてその方の恩惠に依つて、運命がわたしに拒んだ幸福をとりかへすことが出來ましたら、どんなに仕合はせでございませう！　けれども、エドワード樣妾は失望致します。運命はあなたの御親切な計畫を裏切ります。私の殘酷な運命はあなたの御熱心に打勝ちます。そしてあなたが妾にお申し出で下さいました幸福の快い想像は、妾にその缺陷を更に强く感じさせて呉れるばかりでございます。あなたは迫害されてゐる二人の戀人に、心地よい安全な隱れ家を與へて下さらうとなさいます。あなたはそこで妾達の情熱を正當なものとして、妾達の結婚を合法的なものにしようとして下さいます、そして又妾はあなたの保護の下では愼つてゐる家族の追求を逃れることが出來るのを存じてをります。それは戀にとりましては充分なものでございます、けれども幸福にとつても滿足なものでございませうか？　いゝえ、さうではございません、もしあなたは妾が平和で滿足してゐることを御望みなさいますなら、もつと安全な、そこでは恥辱にも悔恨にも逃れ得る隱れ家を與へて下さいませ。あなたは妾達の必要を前以て察して下さいます、そして例のない寬大な御心で御自分のものと定つてゐる財產の一部を手放さうとなさいます。妾の家督よりもあなたの慈善により遙に富み、遙に崇められて妾はあなたの御かけですべてのものを取り戻すことが出來ますでございませう。嗚呼！　エドワード卿、自然が妾に與へた父を棄てた後で、妾は更に一人の父を見出す資格がございませうか？

此處に恐ろしい良心の叱責の源と又妾の心を劈く秘密の叫きがございませう。妾の生命を造つた人達の意志に叛いて、自分で自分を處理する權利が妾にあるかどうかは、問題ではございません。兩親を死ぬ程苦しめることなしに自分を處理することが出來るか、兩親を絕望に投ずることなしに家出することが出來るか、これが問題でございます。嗚呼！　妾は兩親からその生命を奪ふ權利がございますかどうかも考へ

ねばなりません。何日からこの様に徳と云ふものが、血肉の權利と自然の權利とを支配する様になつたのでせう？　何日から感じ易い心が翼々として感謝の世界を限る様になつたのでムいませうか？　人がその心をもう一息で罪となる點まで行かうと思ふのが既に罪ではございませんか？　そしてそれを果し度いと思はないとき、人はえらい念入りに義務の根界を探すではありませんか？　ところが妾はどうでムいますか？　妾はそのおかけて呼吸をし、妾に貴い生命を下されて、守つて下さる人達を棄てたかも知れません、その人達には妾より他には何の希望もなく、又何の樂しみもないのです、もう六十にもなる父と、いつも可弱い母！　妾は、その唯一人の娘の妾は、老いの淋しさと、倦怠との中に何の助けもない此の人達を棄てたかも知れません、此の人達が妾に澄れるばかりに注ひでくれた柔しい心遣ひを、御返しすべき時だと申しますのに！　妾は此の人達の晩年を恥、悔ひ、涙の中に沈ませたかも知れません！　恐怖は、それは妾の良心の叫びなのですの。妾の父と母とが慰めもなく息を引き取りつ、又自分達を棄て、自分達を辱かしめた不孝な娘を呪ふ有様を、絶間なく妾の目に描かせるでせう！　いゝえ、あなた、妾が棄てた德は、今度は貴方から妾を棄て、そしてもはや何も妾の心には言葉をかけてくれますまい。しかし此の恐ろしい考へがその代りに妾に話しかけます、そして妾の生活にいつも妾を苦しめて、幸福の懐の中でも妾を憐れなものとしたかも知れません。で結局、妾の半生を悔恨に暮さなければならないのが妾の運命だと致しましたら、それだけでも堪えてゆくにはあまりに妾は恐ろしすぎます。妾はむしろすべての他の物を退

けます。

妾はあなたの理論に御答へすることが出來ません。妾はむしろそれをいゝと思ひ勝ちなのでございます。けれども、あなたは未だ結婚なさつてゐらつしやいません、父でなくては他人の子供に忠言を與へる權利はないと御考へになりませんか？　妾と致しましてはもう決心がついてをります。けれども親達を不幸なものにするでございませう、妾はそれをよく存じてをります、それよりはむしろ自分で不幸に惱む方が妾とりましては心苦しさが少なうございます。それですから妾は決して親の家を棄てません。「去れよ、感じ深き魂の甘い幻よ、うるはしいあこがれの幸福よ、夜の夢と消へよ、そなたは妾にはもはや現のものでない。」そしてあなた、まことに心の寛やかなあなたは御親切な御計畫を御忘れ下さい、けれども恩を知る心の奥にはその痕がいつまでも殘り、その思ひ出の消ゆる時とてはないでございませう。もしあまりに多い妾達の災ひがあなたの大きな御心を挫きませず、もしあなたの寛大な御親切が盡きてをりませんならば、光榮をもて御施し下されるべきものがまだございます。そして、また、あなたが振けなくも御友人として下された人は、あなたの御心遣ひによつてその名にそむかぬことが出來るだらうと存じますわ。あなたが御覽になつてゐらつしやる狀態で、彼の人を御判斷下さいますな。あの人の迷ひは卑怯から生するのではございませんで、運命に對して硬くなつた熱烈な、誇り高い天賦から生ずるのでムいます。外に現はれた平常に於きましては勇氣よりも愚昧が見え勝ちなものでございます。凡庸

な人は激しい悲哀を知らぬもので厶います。また偉大なる情熱は弱い人達には生じないものでございます。嗚呼！　あの人は、高尚な魂の性格でありまして、強い感情をその心に置いてゐるのでございます。そうしてそれがまた。妾の今日の恥辱と絶望とを造りました。あなたどうぞ御信じ下さい、もしあの人が平凡な人間にすぎませんでしたら、ジュリイは決して身を亡ぼしはしなかつたでございませう。

いゝえ、いゝえ、豫めあなたに明らかな尊敬の悦を起させた此の感動は少しもあなたを欺きは致しませんでした。あの人は、あなたがよく御存知にならない中に、あの人の爲になさつて下されたすべての事に償します。あなたはあの人をお知りになつたあとでも、出來ますなら、更にもつと御盡し下さるでございませう。さうです。あの人の慰め手になつて下さいませ。あなたの爲、又あの人の爲に妾は切に之を御願ひ申します。あの人はあなたの御信用に報ひ、あなたの御慈悲を尊くし、あなたの教訓を行ひ、あなたの德を眞似、あなたから叡智をお學びになるでございませう。あゝ！　閣下、もしあなたの御手の中で、あの人がその成ると思はれるものに成ると致しましたなら、他日どんなにあなたは御自分の仕事について御誇りになされることでございませう！

書簡第七　ジユリイから

あなたもまた、あゝ、妾のやさしいお友達！　貴女こそ妾の心の唯一つの望みでございます。悲しみで

死にかゝつてゐる妾の心を引き裂かうとなさるのですの？　妾は運命の打擊に用意をしてをりました。久しい豫感が妾にそれを知らせてゐたのでございます、妾はぢつと此の打擊を耐え忍んだでございませう。それなのに、その爲めにこそ妾は忍耐致しますあなたが！……嗚呼！　あなたから來る打擊ばかりは妾に耐え難いものでございます、そして妾の苦痛を輕くして下さる筈の人によつて却つて妾の苦痛が增されるのを見ますのは誠に恐ろしいことでございます。どの位妾はやさしい慰安を待ちのぞんでをりましたでせう、それもあなたの勇氣と一しよに消えて了ひました！　あなたの御力がわたしの弱さを勵まして下さる、あなたの長所は妾の缺點を消して下さる、あなたの美德は妾の消沈した魂を振ひ立たして下さると思つて、幾度妾は自ら慰めたことでございませう！　幾度妾は次の樣に自分に申しながら苦がい涙を拭つたことで厶いませう、「妾はあの方の爲に苦しんでゐる、あの方はそれに償する、妾は罪人だ。けれどもあの方は德をもつてゐらつしやる。百千の苦しみが妾を襲ふ。けれどもあの方の變りない御心が妾を支へてくれる。そしてあの方の御心の底に妾は妾の失つたすべてのものの償ひを見付ける！」最初の試煉に、愈く〳〵もう打ち敗られた空しい希望よ！　すべての感情を高尚にし德を發露させる崇高な愛は今はどこにあるのでございますか？　どこにあの誇り高い金言はあるのでございますか？　あの偉大な人々に對する私淑はどうなつたのですか？　不幸も動かすことの出來ないあの哲學はどこに行つたのですか、そして戀人から彼を引きはなす最初の出來事に屈服するのは、誰でございますか？　どんな口實で妾は自分の恥辱を自分に

辯解したらいゝのでせうか、妾を誘つた人は、勇氣のない快樂で優柔にされた人にすぎず、卑怯な最初の不運で壓倒された心しか持つてゐず、又理性の必要な時なのにそれを棄ててかへり見ぬ狂人にすぎないのだと自分にわかりましたなら？　おゝ、此の重ね重ねの屈辱の中で妾は自分の弱さと同じく自分の撰擇をも恥ぢねばならないのでございませうか？

何れ程あなたは御自分を忘れてゐらつしやるか御覽なさいな、あなたの迷つた、卑屈な魂は、醜いほど賤しくなつてをります！　あなたは妾をお叱りなさりさへします！　あなたは妾に不平を云ひさへなさいます！……あなたのジユリイを！……何と云ふあはれなことでせう！……何うしてあなたの悔恨があなたの手を引留めないのでせうか？　何うして、今まで世にあつた最もやさしい愛の最も美しい例が貴君に妾を侮辱おさせする勇氣を與へたのでせう？　あゝ！　もし貴君が妾の心を疑ふことが出來ましたなら、どんなに貴君の御心は賤しむべきものでございませう！……いゝえ、あなたは妾の心を御疑ひにはなりません。あなたはそれを御疑ひなさることは出來ません。もしあなたがそれについて御怒りなさいますなら妾はそれを輕蔑することが出來ます、そして、妾があなたの不正當を嫌惡する時でありましても、あなた妾はが生れてから始めて經驗する憤激の源をよく御わかりになるでございませう。

もし妾が旨日な自分に依つて自分を亡ぼし、又はもし妾の計劃が成功しなかつたと致しますれば貴君はそれを妾の責任だとすることがお出來なのですの？　もし貴君がどんな希望がわたしを誘つたか、どんな計劃を妾が貴君と妾の幸福の爲に作つたか、そしてまたそれがどんなに妾の希望と共に消え失せて了つたか御存知なら、あなたは御自分の頑固なのにどんなに赤面なさるでせう！　いつかあなたも御分りになる時があるのでございませう、さう思つて妾は自分を慰めてをります、そしてその時あなたの悔恨はあなたが妾を御叱りなさつたことに對して妾の仇をとつてくれるでせう。あなたは妾の父の禁制を御存知でいらつしやいますあなたは世間の風評を御承知ないわけではございませんでした。妾はその結果が豫めわかつてをりましたし。わたしはそれをあなたに申し上げました。あなたはそれを妾共と同じく御感じになりました、そして妾達お互の身を全うするには、妾達の間を離した運命に從ふより他ございません。

そこで妾はあなたを追ひやりました。まつたくあなたがさうお仰る通りでございます！　けれども誰の爲に妾はそれを致しましたのでせうか？　むごい方よ！　恩を知らない方よ　それは、自分で思つてるよりももつと正直な、そして妾が辱められるのを見る位なら千度でも死を辭さないお方のためになるのです。ね、妾の恥辱が明るみへ出されたら、どうあなたはおなりになりますの？　貴君は妾の不名譽を忍んでゐられるとお思ひですの？　さあ、殘酷なお方、妾があなたに犧牲を捧げることが出來たと同じ勇氣で妾の名譽に對する犧牲を受けて下さい。さあ、あなたにとつて貴重であつたものに拒まれることを御恐れなさいますな。妾は妾達が御互に感じたすべてのものを、天と人との前に公言するのを憚りません。妾はあなたを高らかに妾の戀人と呼び、あなたの腕の中で愛と恥辱で死ぬのを憚りません。妾はあなたに一す

でも疑はれるよりは、世界中の人達が妾のやさしさを知つてくれるをもつと好みますそして。貴君の御叱責は破廉恥よりも妾には苦がいものでございます。

永久に此の様な御互ひの不平は止めませう、きつとね、斯う云ふことはには我慢か出きませんの。お！　どうして人はお互に相愛してゐる時に喧嘩をして、そしてお互に苦しめ合ひ乍ら、最も慰安の必要な時を失つてゆくのでせう？　否え、あなた、木當にはない不滿を裝つたところで何の役にたちませう？妾達は運命を嘆きませうそして愛をば嘆きますまい。今まで決して斯様な完全な結合はございませんでした決してもつと永續的な結合はございませんでした。妾達の魂はあまりよく融け合つてゐます故、もはや分れることは出來ないでございませう。そして妾達は同じ全體の二つの部分の様に、離れて生きることは出來ません。それ故どうしてあなたは御自分の苦痛だけしか感ずることがお出來にならないのでございませうか？　どうしてあなたの友人の苦痛を少しも感ずることがお出來なさらないのでせうか？　如何程それは夢中な叫びよりも悲しいものであることでせう！　もし貴君が妾の不幸を御分持ちなさいましたなら、どれほどそれはあなたにとつてはあなた御自身のよりももつと殘酷のものであつたでせう！

あなたは御自分の運命を悲しいものだと御覽になります！　があなたのジュリイの運命もお考へ下さいませ。そしてその爲にのみ御泣き下さい。妾共の不幸は共通でも、妾とあなたの性の相異を御考へ下さいまして妾達のどちらがより多く嘆くべきでありませうか御判斷下さい。情熱の力の中に於ても、無感覺な振りをすること、百千の苦痛の餌となりつゝ、樂しい滿足をした風をすること、晴れやかな様子と生き生きした心を持つこと、いつも感じてゐる事とは別なことを云ふこと、感ずることのすべてを變裝させること、義理で僞りの行をすること、謙讓をよそつて欺くこと、これが妾の年頃のすべての娘の普通の狀態でございます。人はこの様にして禮儀と云ふ暴逆の下にその美しい日を過してしまひます。けれども人々は妾達の心の傾向を妨ふるに、まちがつて配合された關係の下に兩親の暴逆がございます。そしてこれに加けようとしても、無駄でございます、心と云ふものは自分自身の法則しか受付けぬものでございます。それは奴隷の狀態から逃れ、自分の意に從ひます。天の與へたのではない鐵の輪の下では、人は魂のない身體だけしか支配することが出來ません。身體と信仰とは別々に取り扱はれます、そして神聖な義務の一部又は他の部分を缺くべく強いられて、不幸な犧牲は餘儀なく罪を犯すのです。もつと賢い人達もゐます！　嗚呼わたしはそれを知つてゐます。彼女等が少しも戀しなかつたなら、どんなに幸福でございましたでせうに！　娘達は反抗しますか？　妾も反抗しようと思ひました。娘達は德を更に愛しますか？　あなたが無いなら、あなた一人がいらつしやらないなら、妾は嘗に德を愛したでございませう。では妾が德を愛しないと云ふのはほんとうでせうか？　あなたは妾を亡ぼしました、それなのにあなたを慰めるのは妾なのです！……けれどわたしは、わたしは何うなるのでせう？　愛の慰

安のない時には、友情の慰安はどんなに弱いものでございませう！　では誰が妾の苦痛を慰めてくれるのですか？、何と云ふ恐ろしい運命に妾は面してゐるのでございませう、妾は罪の中に捕らへてゐたのですから、いやな、そして多分避けられぬ難境の中に新らしい罪ばつかりが見えるのでございます！　もし妾が屈從して了ひますなら、どこに妾は妾の過ちと、戀人とを泣くに充分な涙を見付けるのでございませう？　意氣沮喪して了ひますなら、どこに妾は反抗するに充分な力を見出すのでございませう？　妾は己に荷立つた父の怒りを見たのですもの、妾は既に妾の身内を搖り動かす自然の叫びを感じたのです、又妾の心を千々に引き裂く愛の嘆きを感じたのです。あなたが無ければ、妾は力も無く、助けもなく、希望もないのです、過去は妾を辱めました。現在は妾を苦しめます。そして未來は妾を恐れさせます。妾はすべてが妾達の幸福を作るのだと信じました。妾は二人に更に殘酷な別れを用意して二人を更に不幸なものとしたに過ぎませんでした。空しい快樂はもはやなくなりました、そして悔恨だけが殘つてゐます、そして妾を卑しめた恥辱は何の償ひもありません。

妾こそ弱く不幸なものですわ、妾の涙は妾の過ちが償はれなければ乾かないのです、そしてすべてを癒す時そのものでさへも妾には新らしい涙の種を與へるばかりでございます。けれどもあなたには何の恐るべき迫害もなくあなたを賤める恥辱もなく、何物もあなたの感情を強ひて卑しく粉飾させるのでもございません、あなたは不幸が襲ふのをお感じになる丈にすぎないのでございますし、又少くとも御自分の最初の德を御享受なさいました、それだのに何うしてあなたは女の樣に泣いたり、嘆いたりなさる程御自分をお低めなされ、そして狂人の樣に御自分を御忘れになるのですか？　妾が貴君の爲に當然受ける非難だけで充分ではムいませんか、その上に御自分で自分までも非難されるやうになさらないでも、又妾を貴君の恥を強いて妾にお信じさせにならんでも？　ですからどうぞしつかり遊ばして下さい。そして男であつて下さい。更に、思ひ切つて申しますなら、ジュリイの選んだ戀人であつて下さい！　もう妾があなたの勇氣を振ひ起さるに價しないものでございましても、せめてありし日の妾を思ひ出して下さいませ、今はもう無いその上の、貴君に對する妾の功績を思ひ出して下さいますな。

いゝえ、あなた、妾が永久に忘れて了はうと思ひ、又あなたが已に否認なさつた此の女々しい御手紙に於て、妾が認めますのはすこしもほんとうのあなたではございません。妾は全然卑しめられた、困惑したものでは御座いますけれども、妾の追憶がそんなに低い感情を生じさせないことを望みます、又、妾の姿が妾が燃え上らせた心の中になほ光輝を以て君臨し、また、妾しの弱さと共に、妾を弱くした人の卑怯を恥ぢないでもいゝ樣にと望みます。

不運な中でも幸ひにも、あなたは感じ易い魂の知つてゐる一番貴い償ひをお見付けなさいます。神樣はあなたの不幸の中に、一人の友を御授けなさいました、そして天があなたに與へられるものが、天があな

たから奪ふものよりももつと償のないものかどうかを考へさせます。自分の安樂を犧牲にしてあなたの生活とあなたの理性とについて心配して下さるあの寛大な御方を尊重して下さいませ。あの方があなたの爲になさらうと御思ひになつたことをみんな御存知になつたらどんなにあなたは心をお動かしなさるでせう！　けれどもあなたの悲しみを銳くなさるのでは、どんなにあなたが感謝なさつても、何の役に立ちませう！　あの方が償するすべてのものを知る爲めにはあの方がどの位まであなたを愛してゐるか知る必要はございません。そして、あなたが當然あの方をお愛しなさらないなら、あの方の償通りにあの方を尊敬なさることが出來ません。

書簡第八　クレール より

あなたはやさしさよりも愛の方を除計もつてゐらつしやいます、そして犧牲に償させるよりも貴君は犧牲をなさる事が出來ます。それであなたはあの樣な狀態にあるジュリイさんに叱責の調子で手紙を寄かうと御考へになるのですか？　そしてあなたが惱んでおいでなさるからもつと惱んでゐらつしやるジュリイさんにそれを分けなければならないのですか？　幾度も妾が申しましたが、妾はあなたの樣な不平を仰言る戀人を生れてから未だ見たことがございません。いつも何事につけても爭ふことばかり心掛けてゐらつしやるのですから、貴君にとつては愛は戰爭の狀態に他ならぬものでムいます。そして若し、いつかあなたが柔順だとしましても、後にはさうだつたことをお淚しになるのでした。おゝ！　こんな戀人は何と心配なものではございませう！　又別れがたいとき別れて、誰もそれを泣いてくれる者もない愛人を持ち度いと思はなかつたことがどれだけ妾幸福だか知れはしないと思つてをります！

どうぞ、もしジュリイさんが生きてゐて欲しいのでございましたらジュリイさんとの言葉を變へて下さいあの方にとつて、あの方の苦痛と同時にあなたの御不滿をも耐え忍ばなければならないとしますなら、それはあまりひどうございます。あまりに感じやすい心を勞はることを御學びなさい、あなたはあの方に最もやさしい慰めを與へなければなりません、自分から不平を云つて自分の苦痛をお增しにならない樣になさいませ。でなければ少なくとも妾だけに、あなたを遠くにおやりしました唯一の發起人でございます妾にだけ不平を云つて下さい。さうですあなたがあの人に危險に瀕してゐるあの人の名譽の爲めに必要な決心なとらせたのでございます、いえむしろ、妾は危險を誇張して無理にあの決心をおさせしたのです、妾はあなたにも決心おさせしたのでした、そして皆はその義務をお盡しになつたのです。妾はそれ以上の事も致しました、妾はジュリイさんが、その御兩親を恥辱と失望にお沈めしたあとでは幸福でないといふことを知つてゐるのです、そして妾はあなた御自身に關して、もしジュリイさんの幸福がないならどんな

幸福をあなたがお味ひになれるか殆んど了解することが出來ません。そしてあなたは御自身の愛する人と爭ふのが御好きです故、妾一人にだけその責任をおかけ下さい、それは忘恩的であるのを止めるのではないのでありまして、少なくとも不公平であることを止めることに成るのです。妾にとりましてはあなたはどんな態度を御取り下さいますにしましても、妾はいつもあなたにとつては同じでございますあなたは妾には、ジュリイさんがあなたを愛すると同樣に貴い方でございます。出來ますことならもつと以上に申してもよろしうございます。妾はあなたの愛の味方でありたいなかつたことも又反對しなかつたことも噯いては居りません。常に妾を導く純な友情は妾があなたの爲にしたことに於きましても妾を正しいものだとしてくれます。そしてもし、いつか妾は自分に似合はない程あなたの熱情に興味を持つたとしましても、妾の心の判斷が妾を充分安堵させます、妾はジュリイさんの爲にすることが出來たすべての心づくしを決して恥ぢは致しません、たゞそれが無駄だつたことだけを遺憾に思ふのみでございます。

妾は前にあなたが、不運に於ける賢者の堅忍につてお敎へ下さいましたことを忘れは致しません、そして多分妾は序にそれについての二三の箴言をあなたに想ひ出させることが出來ますでせう、けれども、ジュリイさんの例は妾に、妾位の年頃の娘はあなた位の年頃の哲學者にとつては危險な弟子であると同樣に惡い敎師であると云ふことを敎へてくれます。そして又妾の先生に敎訓を與へるなどと云ふことは妾の柄にも御座いませんでせう。

書簡第九　エドワード卿からジュリイへ

私達はあの方をつれてゆきます、ジュリイさん、彼の人の疑ひは彼の人を再び理性にひきもどしました。しばしの間、過誤の中に溺つてゐたことを恥ぢて彼の人の怒りは消えました。そして私達のしたいことは何でも出來る樣になつた程彼は柔順になりました。私は、彼が誤ちを恥ぢて怒るよりも悔いてゐるのを見て欣んでをります、又私は彼の方が私を愛してゐることを知つてゐます。と云ふのはあの方へは私の前では謙遜で、間誤ついてこそおいでなさるけれど、煩はされてゐるのでもないし、又窮屈がつてゐるのでもないからです、彼は本當によく自分の不公平を感じてゐらつしやいます。そしてこの樣に過ちを認めることは、過ちを歎す人によりも過ちを償ふ人により多くの光榮を與へます。

私は此の變化とその結果とを利用して彼と一緒に出發する前に、二三の用意を致しました、何故なら私達はもはや、此れ以上出發を延ばすわけにはゆきませんから。私は來年の夏再び歸つて來るつもりでございますから、彼の人が巴里で待つてゐて、それから一しよに英國に渡ることを約束しました。倫敦は偉大な才能のある人に適當な唯一の舞臺でございます、あそこは、さう云ふ人々にとつて活動の範圍がずつと廣くあります。あの人の才能は多くの點に於て勝れてをりますから、きつと直きに二三の友人の助をかり

て御自分の長所に適當な道を開拓なさるだらうと信じてゐます。私は途中でお宅に、お寄り致しますに、もつと詳しく私の考へを說明致しませう。さうするとあなたは、成功のおかげで、人は多くの困難をきりぬけることが出來るし、またあなたの御父さんの御心の中でさへも、生れを償ふことが出來る樣な種々の威嚴があると云ふことを御感じになるでせう。此が、思ひますところ、あなたの幸福とあの方の幸福との爲めに試みる可き唯一の方策であると信じますが。何故なら運命と偏見との爲めに、すべての他の法策は駄目になりましたから。

私はレジアニーノに馬車で私達と一しよになれる樣に云つてやりました、それは私があの方とすごす八日か十日の間レジアニーノを使ふ爲めです。あの人の悲しみは餘り深いので、多く話をするなどの餘裕が御座いません。音樂は空虛な天然を充し、彼の人を夢みるに任せ、そして段々とその悲痛を憂鬱に變へるでせう。さう云ふ風になつたら私はあの人の欲するにまかせてやりませう。それまでは私は滿足致しますまい。レジアニーノは歸りにあなたの處にやりませう、そして私が伊太利に歸る時までは連れてゆきませんん、その時あなた方御二人がなさつた進步を見て、もうレジアニーノはいらないと言ふでございませう。今のところは慥に彼はあなたに無用でございませうから、しばらくの間あなたからつれ去つても御困りではないでせう。

書簡第十　クレールへ

何故、私は遂に眼を自身の上に開かねばならないのでせう？　私が落ち込んだ卑賤を見るよりは、又最も幸福であつたのちに、人間の中でももつとも、つまらないものと自分を思ふよりは、むしろ永久に眼を閉ぢた方がいゝのだつた！　御親切な寬大な友よ、貴女はいつも私の隱れ家でありました、私は敢えて貴女の憐深い御心に私の恥と苦痛とを打ち明けます。私は再び此處に私自身の賤しさの感情に對してあなたの慰めを御願ひ致します。私は自己嫌惡に捕はれた時、私は敢て貴女に救ひを求めるのです。おゝ！　どうしてこんなに輕蔑すべき男が彼女に愛されることが出來たでせう？　又何うしてあの樣に聖なる焰が私の心を少しも清めなかつたのでせう？　何んなに彼女は今私を選んだことを恥ぢてゐるでせう、私はもはやあの人の名を呼ぶことさへにも償しません！　こんなに卑いこんなに賤しい心の中で彼女の姿が潰されるのを見て、どんなに彼女は嘆くにちがひないでせう！　彼女を愛して、然も一卑怯者でしかあり得ない者に、どんなに彼女は輕蔑と嫌惡とを感ずることでせう！　私のすべての誤りを御覽下さい。あなたよ、私の罪と私の悔恨とを御覽下さい。私の裁判官になつて下さい。私の仲裁人（心を和ける人）になつて下さい。私の運命を造る物が尙其仲裁人となる可きです。

私は此の不意の別れが私に齎らした影響については少も貴女に御話し申しますまい。私は貴女に私の愚

かな悲しみと私の狂つた絶望とを御話し申しますまい。あなたは人々が私を引き入れた考へも及ばぬ妄執で私の絶望を判断して下さいますな。私は自分の狀態について恐れを抱けば抱く程、ジュリイさんを諦らめることが出來なくなりました。そして此の感情の苦痛がエドワード卿の驚くべき寛大さと結び付いて思ひ出すも恐ろしい樣な疑惑を起させました。此の疑惑を私は忘れれば、それを許してくれた友達に必然的に忘恩となるのです。

狂氣の狀態に於て、私は自分の出發のすべての事柄を考へて見て、私は何かそこに豫めの謀があるのだと思ひました。そして人間の中でも一番有德な人のせいにしようと致しました。此の恐ろしい疑惑が私の心中に入りますや否やすべてが是を確める樣に思はれました。エドワード卿とデタンジュ男爵の會話、少し亂暴すぎると思つた位の調子、それから起きた口論、私に會見なさることをお止めになつたこと、私を出發させようと御決めになつたこと、秘密の準備、前日私と交された會話、それから私を案内されてゆくと云ふよりは、寧ろ引き摺らはれてゆくと云つた方がいゝあの急ぎ方、すべてはエドワード卿が私をジュリイさんから引裂く計畫を證明する樣に想はれました。そしてあの人とジュリイさんの方へするにちがひないと私が知つてゐた歸途は、あの人の心遣ひの目的を私に曝露させるばかりだと自分で考へたのでした。けれども私は破裂させる前に、も一度よく迷を晴らさうと決心して、その爲めにもつと注意して事物を調べることに身を入れました。けれどもすべては私の笑ふべき疑惑を增させるばかりでした。そして人間的の熱情は、私の爲にして下さるその正直を少しも有難いとさとらして吳れず、私の旨日的な嫉妬はその恩惠を見て其處には裏切の表記のないことをさとりませんのでした。ブザンソンで私は卿が私に知らせないでジュリイさんに手紙をやつてゐたのを知りました。そして私は卿について考へてゐたことをはつきりさせるために、その返事のみを待つてゐました。その返事で卿が不滿足な樣子をなさるのを大さう希望しながら。

昨日、夕方晩く私達が家にかへつて來た時私はスウィスから自分に屆いて來た小包があると云ふことを知りました。それについては私達は別れてゐたので卿は一言も話しませんでした。私は卿にそれを聞く時間を與へました。私は卿が何かの言葉を讀み乍ら呼いておいでなさるのを私の室から聞きました。私は注意深く耳を聳てました。「嗚呼！　ジュリイ」卿はとぎれ〳〵に申されました。「私はあなたを幸福にして上げようと思つたのだ……私はあなたの德は尊敬する……けれどあなたの間違ひを氣の毒に思ふ。」此の言葉とはつきり聞いた他の同じような言葉を聞くや否や、私は自分を忘れて了ひました。私は自分の劍に手をかけました。私は扉を破れるばかりに開きました。私は狂人の樣に入つてゆきました。否、私は此の手紙を又あなたの御目を汚したくないから怒りに任せてその場で私と戰ふ樣に卿に投じた惡罵は書きますまい嘻々、お從姉樣、あなた！　そこでこそ私は眞の叡智の世界を認めることが出來たのでした。—最も敬慮な人々が其聲に耳を傾けようとする時、彼等の上にある其叡智の世界を—最初卿は私の言葉を、少しも

了解することが出來ませんでした。そして卿は是をほんとの狂氣の爲めだと思ひ込みました。けれども私が卿の裏切りを責め、卿の陰謀を批難し、卿がもつてゐたジュリィさんの御手紙の事を絕え間なく喋つたので、遂に卿は私の怒りの原因を知りました。卿は微笑し、聽て冷靜に私に云ひました、「あなたは理性を失つておいでなさる。私は狂人と戰ひはせぬ。あなたは盲だけれども眼を開いて御覽なさい」と卿は更にやさしい聲で附加へました「あなたを裏切つたと云つて此の私をあなたは非難するのですか?」私は此の言葉の調子に何となく不誠實ではないものを感じました。卿の聲の響は私の心を搖り動かしました。私が卿の目と見交すや否や、總ての私の疑ひは消滅しました。そして私は恐怖しながら私の亂暴を反省しはじめました。

卿は直ちに此の變化を見てとつて私に手をお差出になりました、卿は申されました「さあもし貴君の反省が私の辯解よりも先でなかつたなら、私は一生あなたに逢はなかつたでせう。今は正氣におなりですから、此の手紙を讀んであなたの友達をもう一度お知りなさい。」私はそれを讀むことを拒絕しようと欲しました。けれども卿が私にいろ〳〵利益を計つて下さつたことで私の頭が上らないところへ、卿が權威を以て、是非とも讀めと仰言るのです。それを又疑ひは晴れても、矢張り讀んでみ度い下心が餘り力强くそゝのかすのでした。

これを讀んだあとで、どんな狀態に私がゐたか想像して下さい。手紙は私にあんなにも賤しく私が罵つた人の、例のない恩惠を知らせました。私は卿の足下に身を投げて、心は嘆賞と悔恨と恥辱の念に充ちながら、一言も言葉が出ず、力の限り、卿の膝を抱きしめました。卿は私の亂暴を受けたときと同樣に私の悔恨を受けました。そして私を免す代りとして、卿が私にしてくれる恩惠にそむかないことをしか要求しませんでした。あゝ! 心のまゝにして下さい、卿の崇高な魂は人間の魂以上です。そして神の恩惠よりも卿の恩惠に背くことは許されません。

次に卿は私の名宛の二つの手紙を私に下さいました。是を卿は自分への手紙み讀んでジュリィさんの決心を知るまでは私に與へようと欲しなかつたのです。私は手紙を讀みながら何と云ふ戀人、何と云ふ友を天は私に與へたのかわかりました。私は如何に天が私の悔恨をして益々苦しからしめ、私の卑賤をして愈々侮蔑せらるべく、感情と德とを私の周圍に與へたかわかりましたでせうか、彼女の美しさの如きは最も僅かな力に過ぎません。そして彼女は永遠なる力と同じく、彼女が爲した善によつても、惡によつて同樣に自らを崇敬せしむるのです。嗚呼! 彼女は私からすべてを奪つてしまひました、そして私はそれ故に更に彼女を愛するのです。彼女が私に與へたすべての苛責は私にとつては一つの新らしい德であるは彼女が完全であるのを發見します。彼女が私を不幸にすればする程益々私に與へたすべての苛責は私にとつては一つの新らしい德である樣に思はれます。自然の情に彼女が爲した犧牲は、私を悲ませ又私を惑迷させます。それは彼女が愛に捧げた犧牲の價を增すやうに思へます。否、彼女の心はそれが與へる物に價しない何物をも拒むことが

出來ないのです。

そしてあなた、友情の唯一完全な模範とも云ふべきあなた、すべての女人中人はあなたのみを引例し又あなたの心に似てゐない心は貴女を空想家だと云ふでせう。嗚呼！少しも理屈をわたしにお仰つてはいけません、私は空虚な言葉の中にしか存在しない虚飾を輕蔑します。そんなものは何の役にも立ちません。どうぞ迷つてゐる私を棄てゝ下さいますな。あなたの昔の御親切をも此の不幸なる者に御與へ下さい。此者は、もはやそれに價しないかも知れませんけれども、愈々それを熱望し、そして愈々その必要を感ずるのです。どうぞ私に私自身を思ひ出させて下さい。そしてあなたの御やさしい聲で此の病める心に理性の聲を御傳へ下さい。

否、敢へて私はそれを望みますまい。私は永遠の卑賤に沈んだのではありません。私は私がかつて燃した清い聖な焰が再び私の中に燃え上るのを感じます。德の例はその德の對象であつたもの、德を愛するもの、それを嘆賞するもの、そして絕間なくそれをまねようとしてゐる者にとつて、決して亡びないでせうおゝそれを選んだことを誇りとするなつかしの戀人よ！　おゝ我が再び崇敬せんとする友等よ！　私の心は目覺めて貴君方の心の中にその力と命とを得るのです。清い愛と崇高な友情とは、卑屈なる絕望が私から奪はんとした勇氣を私に還すでせう、私の心純のなる感情は私に叡智を與へるでせう、私は貴君方によつて私たるべきものになり、且つ若し直ちに立ち上ることが出來るならば私の失墜をあなた方に忘れさせるでありませう。私は天が如何なる運命を私に與へるか知りませんし、また知らうとも欲しません。運命がどんなものでありませうとも、私は自分が今まで享けた運命に價するものであらうと欲します。私が自分の中に持つ、此の不滅の像は私の盾となり、私の心を運命の打擊をもつても破る可からざるものとするでせう。私は自分の幸福の爲には既に充分生活しなかつたでせうか？　今私が生きねばならないのは彼女の光榮　爲めです。嗚呼！　どうして私だつて自分の德をもつて世を驚かすことが出來ぬでせうか、他日世人をしてそを嘆賞してかく云はせる爲めに、「彼はあれ以下に爲ることが出來たらうか？　彼はジュリイ人の戀だつたのだ！」と。

二伸、いやな、そして多分止むを得ない爲！　この言葉は何う云ふわけですか？　此れは彼女の手紙の中に書いてあります。クレエルさん！　私はすべてを受けます。私は諦めてゐます。そして自分の運命を忍ぶ用意をしてゐます。けれども此の言葉が……決して私は、どんなことが起りませうとも、此の言葉の說明を手にしない中は此處から出發しません。

書簡第十一　ジユリイから

妾の魂がまだ悅びに對して閉されず、悅びの感情がなほ妾の魂に這入り得るといふのは眞個の事でござ

いませうか？　あゝ妾は貴君のお出發になつてから、苦しみのみを感ずるのだらうと思つて居りました。妾は貴君からお離れして居りましては、苦しむだけだと思つて居りましたの、まして貴君の御不在に慰められ樣等とは夢にも思つては居りませんでした。貴君が從姉の所へおやりになつたおなつかしいお手紙に漸く妾に苦しむ許りで無いといふ事を悟りましたのよ。妾はこみあけて來る感傷にひたつて、幾度も幾度もお手紙を讀み、接吻致しましたの。お手紙のお蔭で妾の、倦怠に枯れ、悲みに力を失つた妾の心をやさしい露のすが〴〵しさが蔽つた樣な氣がしましたの。そして妾の心に殘つてゐる、朗かな氣持で、貴君は遠くにいらつしても近くにいらつしても、ジュリイの愛情の上に勢を持つていらつしやるといふ事がわかりましたの。

貴君が男としての勇氣に適當な、強い御感情をお持ちになる樣になつたのはマア何とうれしい事でムいませう！　妾は貴君を尊敬致します。又妾は、立派な戀の品位を全部賤しいものにしなかつた事、同時に二つの心を卑しいものにしなかつた事に就て妾自身もそんなに輕蔑す可きものではないと思つて居りますの。其上妾は、今となつては妾達は自由に妾達の事を話せる樣になつたと申上げますわ。折角教へて下さつた色々の事を使つて、又考へに入れて貴君と何の御通信も出來ない樣になるのは實際妾の絕望をより深めるものでございます。貴君は今になつて、もうあの天から授けられた尊いお友達がお解りでせう！　その友達の恵みに償するのは貴君だけの生命ではありません。貴君が今迄なさつた侮辱を償ふのには、貴君の御生命では足りません。又妾は、貴君の狂氣じみた御想像をお抑へになるのには、あの方のお教へが一番よいと存じますわ。この尊ばなくてはならない方の御指圖によつて貴君は世の中へ出ていらつしやるのです。あの方の御信用に據つて、其御經驗に導かれて、貴君は財產の無い爲に忘れられた貴君の價値をお現しになり、お償ひにならうと云ふのです。あの方には貴君御自身にもなさらない位の事でも、しておあげにならなければなりませんわ。少くとも其好意を無駄にしない樣にして、お尊びなさらなくてはいけませんわ！　貴君の前途は洋々として居るのじやございませんか？　總てのものが貴君の御熱心さを恵んで居る樣な貴君のこれからの御生活には、どの樣な顯かしい成功がございますのでせう！　神樣は貴君にあまり澤山の物を下さいましたわ。趣味によつて尙美しいものになつて居る御性格は、貴君に色々な藝能を與へましたの。廿四歲足らずでいらつしやりながら、年の効で足らぬ所を補ふ樣な成熟さを具へていらつしやるのです。

Fruito senile in su l' giovenil fore.

（春の花の上に實のりし秋の果）

貴君は御勉强なさつても、別に青年の元氣を、お失ないになつた事もありませんし、鈍重でもムいませんでした。花も實もない樣に女の媚びて、貴君のお心を狹め、貴君の理性を鈍くなさる事もムいませんでした。劇しい戀は、そこから出て來る崇高な感情を貴君に與へて同時に貴君に思想の向上と判斷の確かさ

とを附與するのでございます。判斷の確さ、それは戀とは離れる事の出來ないものでございます。戀のやさしい熱に向つて、貴君の魂は立派に働きかけていらつしやるのです。丁度花が日の光に向つて唉きます樣に、貴君は同時に富に導くものと、富を輕蔑するものとを持つていらつしやるのです。貴君には唯、世の名聲をお護りになるには自分から進んでそれに手を延さなければならないといふ事が、缺けて居るのでムいます妾は、貴君にとつてより慕はしいものが、貴君に名聲をお護りになる爲に熱心さを與へる樣になるのを望んで居ります。其熱心さは元來は世の名譽等に價しないものなんですけれど。

あゝ貴君！　貴君は妾から遠ざからうとなさるのね！　あゝ貴君はこのジユリイをお逃がしになるのはなりませんわ！……さうなさらなくてはならないのですもの。他日幸福でお會ひする爲には今はお別れして居なくての。どうかこの樣な樂しい考へが貴君に元氣付け、この辛らい、そして長いお別かれの間に、貴君をお慰め致す樣に！　この考へがどうか障碍を越え、運命を制する力を貴君に與へます樣に！　あゝ！　世の中と色々な仕事が貴君にとつて絕えない、役立つ氣晴しとなり、お會ひ出來ないといふ苦しみをお慰めするでせう！　けれど妾はたつた獨りで色々な苦しい事に心身を委ねて居なくてはなりません。そして總てのものが貴君とお別れした悔いを絕えず妾に感じさせますの、少くとも、根も葉も無い心配が妾の眞個の苦患を深くせずに、又貴君のこれから先の色々な御不幸を妾の不幸と共に感じませんでしたら、それで妾は幸でございませう！

妾は貴君が惡い生活をなさり、危い習慣をおつけになりやしないかと、色々な危險を考へまして顫えて居ります。妾は貴君を一人の男の方としてすつかり信用して居るのでございます。けれども運命で妾達はお別れして居なくてはなりません、あゝ貴君！　貴君はどうして唯の一個の人でしかいらつしやらないのでせうねえ！　是もお知りにならない世界にこれから這入つていらつしやるのにどの位の御注意が要る事でせう！　其事について色々意見を貴君に申上げるのは、若い、經驗の無い、又貴君よりも、識る所の少ない考への淺い妾の致される事ではございませんわ！　あのエドワード卿こそこれをなさる方でございます。妾は二つの事を貴君に申上げるに止めようと存じます。何故と申しますに二つの事は經驗よりも感情に關係して居るものでございまして、又其上妾が世間知らずでございましても、妾は貴君のお心はよく知つて居ると信じて居りますからです。私は斯う云ふ事を申上げます。德をお棄てにはなりません樣に、此のジユリイを決してお忘れにならない樣にと。

妾は貴君自身妾に輕蔑する樣にと敎へて下さつたあの拔け目の無い言論は申上げません。これは本に澤山書かれて在りますもので、正直な人は一人も創つた事のないものなのでムいますから。あゝこの可哀さうな理論家！　其の人達の心はこの快い欣びを感じなければ、又同時に他人にも與へもしないのです。この樣な實の無い道德家は措いて、貴君のお心の底に立ち還つて下さい。其處には常に、あれ程屢々妾達を

戀と、尊い德とで燒爛した、聖い火の源が在りませうから。其處には眞個の美の姿が在るのです、妾達は其姿をどの樣な淨い熱誠を以つて眺めて力を感じた事でせう。そして又妾達の情熱が絕えず消す事も出來ずに、其姿を穢して居たのです。貴君は、惡德を許すべからぬ樣にし、又人道の光榮を創る所の雄々しい人達の生活の話を聞いて、妾達の目から流れたあの快い涙を、亂れた胸を塞いで、息をつまらせる樣だつた心の鼓動を、自己を忘れて狂熱する程迄に妾達を高めた歡びを、憶えていらつしやいますか？　德と財産とどつちが、貴君は眞個に望ましいかおわかりですか？　公平な心で選んだ時に、心が選擇したものはどの樣なものだか、考へてみて下さい。歷史を讀んで、妾達の興味の赴く所は何處だか考へてみて下さい。クレシユスの寶や、シーザーの光榮や、ネロの權力や、ヘリオガバルの快樂や貴君は何時か望まうとなさつた事がありますか？　何故、この人達は幸福ですのに、貴君は其人達の地位に立たうとお望みにならないのでせうか？　それは眞個の意味で、其人達は幸福でなかつたからですの。貴君もさうお思ひでせう。それは其人達が賤しくて、輕蔑す可き人達だからですの。又惡逆無道で、幸福な人は誰からも羨やまれないからです。そんなら貴君はどんな人達を悅んで御覽になるでせうか？　どの樣な人を模範としてお仰ぎになるのでせうか？　どんな人達の樣に貴君はなり度いとお思ひでせうか？　滅びない美しさの到底懷抱出來ない程の魅力！毒藥をすゝる雅典人（譯者註―ソクラテスの事）其國の爲に死ぬブルタス、苦惱の中に在るレグルス、腹を裂くカトー、これ等の人達なのです。是等の不幸な德ある人達を貴君が羨やましくお思ひになるのです。貴君は貴君のお心の中に、あの人達の表面の不幸が包んで居つた、眞個の至福をお感じになつたのです。この感情は貴君お獨だけのもので無いといふ事も考へて下さい。それは皆の人達の持つて居る感情又屢々總ての人々に反する感情なのでございます。この聖い模範は妾達各人が持つて居るものでございまして、妾達のものでありながら、其美しさに魅はされて了ふのでございます。情熱が强くなつて、妾達が其模範の姿を見える樣になりますと、妾達はそれに似ようと望むのです。そして人間中一番酷に、亂暴な人が自分以外の人間に爲れたなら、きつと、善い人間にならうと望んだ筈ですわ。

この樣に夢中になつて悅ぶのをお免し下さいまし。それは貴君から來るものであると、貴君は御存知でムいます。又之を取り置いて、貴君にお傳へ申すのが妾の眞情なのでムいます。妾は今貴君に、貴君御自身の箴言をお敎へしようとして居るのではございません。けれど其箴言がどの位貴君の役に立つかを見るが爲に、一寸驗めさせて頂くのです。今こそ貴君御自身のお敎へになつた事を實行なさり、云ひ得る事がどの位まで實行お出來になつたかをお示しになる時でございますもの。カトーやレグルスの樣な人で無くてもようございますが、兎に角各々の人は其國を愛し、廉潔にして、勇敢になり、生命を棄てても信仰を守る樣にしなくてはなりませんわ。孤高の德は他人の贊同を求めないだけに屢々崇高なものでございます。けれどもそれは良く現はれた時に限るのです。そして、その正義の心あるが爲に宇宙の賞讃を受ることが來るのですわ。貴君は人間の偉大さはどの樣な狀態にでも在るもので、自己尊重を味はなければ誰一人幸

福とはならないと云ふ事を御存知になるでせう！　何故つて、それは、若し眞個の魂の享樂といふものが美の鑑賞に在ると致しましたら、悪い人達は自己を嫌悪しないでどうして他人の中の美を愛し得ませう？　賤しいお考へ、快樂が貴君を墮落おさせする等とは、妾は夢にも危んでは居りませんよ。敏感な心にとりましては其樣な物はあまり危險で無い陷穽なのです。敏感な心を誘惑するにはもつと纖細なものでなくてはなりません。けれど妾は世の中の箴言とか教訓とかを恐れますの。妾は何時でも、又盧擇ばずころがつてゐる世の中の悪例がもつ恐ろしい力が氣懸りです。其悪徳の例が身にまとつてゐる巧みな詭辯を恐れるのでムいます。遂には妾は、貴君のお心そのものが又其例が貴君を欺きはしまいか、又若し妾達の緣が其結果でなからうものなら、自分は輕蔑せられるのだといふ考へを、方法をもつと容易にお起させ申しはしまいかと心配致してをりますの。

妾は貴君には此樣な危險のある事を申上げて置きます。其餘の事は貴君の御賢察が出來ると思ひます。何故と申しますに、それは色々な危險を豫知すると云ふよりも、それを避けるのですから。妾は尙一つの考へを申上げて置きませう！　其考へは、妾の思ふ所では、悪徳の謀つた理論や、馬鹿な人達が誇らし氣に稱へてゐる迷蒙やに立ち優つたもので、賢い人の生活を善に導く可きものなのです。其考へと申しますのは次の樣なものなのでございます。幸福の源泉は全部望まれて居る物の中にも、其物を所有する心の中にも在るのではございませんで、兩者相互の關係の中に在る、そして妾達の要求の對象は常に至福を感するものとは限つて居りません故、心がいつでも又其至福を感するものではないといふのでございます。最も純な心でさへも其本當の幸福を得るには未だ充分で無いとしましたならば、地上の總ての快樂が其樣な幸福を作り得ない事は非常に明かな事です。何故かと申しますに、其幸福とそれをうける心との兩方に、或る準備が必要なのでございます。其準備とはつまり、感性の鋭い人には皆に望まれて、時間的快樂に執着し、永久の幸福を知らうにも知るに由のない僞りの賢人には分つてゐない所の尊い感情から產まれて來る或る競爭がそれなのでございます。ですから相手を僞いて恵みを得ようとし、外面的には獲るところあつても內面的に、より多くを失ひ、幸福になる手段を求めても、それを用ふる法を失ふ事は一體何の役に立ちませうか？　若し人が其二つの幸福（一時的永久的）內一つをしか選び得ないなら、寧ろ運命が妾達に與へる方を、一度失つたら又と獲られない方のものに犧牲とした方が良いと思ひますわ！　誰方がこの妾—自分の生涯の樂しさの極を盡さうとして却つて、樂しさを毒して居りました所の妾より、一體誰方が其事についてよく知つて居らつしやらなくてはならないのでせうか？　財產ばかり見せつけて、其心を示さない樣な悪い人達は措きませう！　世の中に幸福の唯一の例がございましたらば、それは善人の心の內にあるのだといふ事をお信じ下さいまし。貴君は生まれ付き善であり、直である總ての物に赴く傾向を持つていらつしやいます。貴君の本然の求めに傾聽なさつて、自然の傾向だけにお從ひ下さい。殊に、妾達の初戀の事を考へてみて下さいまし。この純な樂しい時の事が貴君のお胸に浮ぶ間は、其時期を斯くもなつかしくお感じ

になる樣にするものを、貴君は決してお忘れにはなりますまい。又美しい道德の力が貴君のお心で消える事も、貴君にふさはしくない樣な仕方でこのジュリイを得ようとなさる事も斷じて有り得ない筈ですわ。一體愛着を失つた樂みを味ふ事が出來るものでせうか？　さうですとも、愛するものを得る爲には、それを愛する心と同じ心を保つて居なくてはなりませんわ。

扨て二番目にお話しする順序のものがございますの。何故つて、妾は、妾の務めを忘れないからでございますのよ。愛が無くとも、人は、雄々しい魂の崇高な感情を持つ事が出來ますの、けれど妾達の間の樣な愛は其魂をより旺にしてくれるものでございます、其愛が燃えて居る間は。一度消えて了ひますと、妾は勞れ果てて、苦勞した心は何も出來なくなつて了ひます。若し妾達が愛して居りませんのでしたら、一體どうなるのでございませうか？　さうしたら何にも感じないで生きて居りますより、死んだ方が徐程ましではございませんでせうか？　又貴君は人の心を眩す樣な種々な歡喜を皆味つてお了ひの後に平凡な人としての無味乾燥な生活を地上でしてらいつしやられまして？　貴君はこれから大都會へお出になるのです。其處には貴君の御才能よりも貴君のお顏やお年の爲に、貴君の眞面目なお心に無數の罠がかけられますわよ。若い方の氣を奪ふ樣な媚は言葉をやさしさで飾り、貴君のお心に有無云はせずに適つて了ふかもしれません。貴君は愛をお求めにはならず、快樂をお求めになります事でせう。愛と別離して快樂をお味ひになり　爲の快樂をお見別けにはなれ無い事でせう。他の所で貴君は此ジュリイの心をお求めになるかどうか妾は存じません。けれど妾の傍でお感じになつた事を外の女の所ではお感じになれる筈はございません。こんな生活をする樣におなりになつて、貴君のお心の勢が衰へるとそれは、妾が別に申上げた運命をお告げする事になりませう。輕薄な快樂の裡に在つても、貴君は悲しみと倦怠とでお惱まされになるでせう。妾達の戀の初めての思ひ出が、貴君がどうなさつてもお心から離れないでせう。そして妾の姿は實際より千倍も萬倍にも美化されて貴君のお心に映るでせう。忽ち嫌惡の情で總ての快樂は包まれて貴君のお心には苦がい後悔の念が起る事でせう。あゝ可愛いゝ方。あゝ貴君が妾を若しお忘れになるのです。妾は酷い……あゝ妾は死ぬ許りですわ。そして貴君が賤しく、不幸に生きていらつしやる事になるのです。妾は酷い程に復讐されて死ぬのでせう。

これをお忘れになつて下さいますな。このジュリイは貴君のものであつたのですから、其心も他人のものにはなりませんといふ事を憶えていらつして下さいまし。神樣のお力におすがりして居りますもの、此上何を申しませう。けれども貴君に貴君の忠實をお求めしたからには、當然妾も自分で出來る唯一の證據として妾の忠實をもお誓ひしますわ。妾は妾の義務なんか質ねませんの。妾の亂れた精神は、義務を見分けられないのですもの。けれども妾は妾の心を賴りとして居りませう！　この胸は守ることの出來る限りの最終規則を求めてゐるのでムいます。で妾がこの心から得ました事は次の樣な事でございます——妾は父の承諾が無ければ絕對に貴君とは結婚致しません、けれど貴君の御許しがなければ又絕對に他人と結婚は致

しませんと、お誓ひ申します。どんな事がありましても、此誓は神聖なものですよ。どんな人間の力でも妾にこの誓ひを破らせる事はございますまい。貴君がいらつしやらない後、妾の身上については、ですから、御安心なさつて頂戴！　さあ、やさしい愛の庇護の下にあつて、其愛の冠とするに足るだけの運命を探し求めませう！　妾の運命を貴君にお委ねしたのは妾からの事でございますもの、妾のこれから先の事は皆總て貴君のお手の中に在るのでございます。そして妾の運命は貴君の御承認を得なくては決して變るものではございませんよ。

書簡第十二　ジユリイへ

O qual fiamma di gloria, d'onore,
Scorrer sento per tutte le vene,
Alma grande, parlando con te.

（あな、如何なる榮えと譽れの悸ありてか、君と語らひつゝ吾が血潮の燃ゆるならん。あな尊き魂よ。）

ジユリイさん、私に息をさせて下さい！　貴女は私の血潮をたぎらせておしまひなすつたのです。貴女は私を酔へさせました。貴女は私の胸を高鳴らさせました。貴女のお手紙、貴女のお手紙、徳の聖い愛で燃えて居るのです！　そして貴女は私の心の底に聖い其力を持つて來て下さつたのですか？　けれど御命令しか無い御誡めはどうした譯なのですか？　若し私が氣を亂して善を行ふのに理由を示して貰はなくてはならない樣になりました所で、少くともさうなさるのは貴女のなさる仕事ではありません！　貴女は私に貴女の意志を示して下されば足りるんですから。私が永久貴女のお氣に召す樣なものにならうとして居るのを御存知無いのですか？　又私が惡い事をするのなら、貴女に背く前にもするといふ事を御存知無いのですか？　えゝ貴女の御命令なら私はカピトール（譯者註―ローマのジユピターの殿堂。最も尊いものの意）すらも燒いたでせうに。それは私が貴女を何よりも愛して居りますからです。けれど貴女は、何故私は貴女を其樣に愛して居るか知つておいでですか？　あゝ！　それは貴女が正直事以外の物はお望みにならず又正直でいらつしやるからです。又それは德の愛が、貴女の美しさから得た私の愛を打ち勝ち離いものにして居る爲なのです。

貴女がなさつたお約束に勵まされて私は出發します。貴女はうまい事を仰言いましたけれど、あの樣な事は仰言らなくともいゝのです。私の許しなくては誰のものにもならないと約束なさる事は、私のみのものだといふ事を御約束になつた事ではないでせうか？　私は、心正しい人としての信仰決して汚される事のない信仰を貴女に申上げます。私がこれから貴女今は私は、心正しい人としての信仰決して汚される事のない信仰を貴女に申上げます。私がこれから貴女をお欣こばせする爲に試みて行はうとする生活に於いて、私の運がどの樣になるかは私は知りません。けれども、愛の緣も、夫婦となる緣も私を貴女――ジユリイ、デタンジユ以外の方に結びつける事はありま

すまい。私は貴女の爲にのみ生き、生命を保つて居るのです。自由になつて死ぬか、貴女の良人となるかいづれかです。時間が有りませんからさよなら。私はこれから直ぐに出發するのです。

書簡第十三　ジユリイへ

私は昨夕巴里に着きました。二つの町をも隔てずに貴女と生活して居つた者が今はもう數百里も隔れて居るのです。あゝジユリイさん！　私を憐れんで下さい。貴女の不幸な友を哀れと思つて下さい。私の血潮がこの都大路を河の樣にして流れるだらうなら、この路ももつと、短く感ぜられるのでせうが、又私の心かこの樣に勞かれて、嘆きに沈む事も無いでせうに。あゝ若し私が少くとも、私達をへだてて居る實間の樣に私達を再び會はせる時の何時だかをわかつて居ましたら、私は場所が遠く隔つてゐるのを、時間の經つので償ふでせうに、又私の生活から一日一日と奪られて行く日の內に、貴女に近づく一步一步を算へられるでせうに。けれど此の苦しみの生活は將來の暗澹とした闇で覆はれて居るのです。私の弱い眼には何日この苦しい時期が終るのかもわからないのです。あゝ疑ひ！　あゝ苦しみ！　私の心配に充ちた心は貴女を求めますけれど何も見付けられないのです。陽は昇ります、けれど貴女に會へるといふ希望が少しも其爲に此私に來るのでもありません！　陽が落ちます！けれど私は貴女に少しも會へないのです！　快樂も欣びも無い私の日々は、長い、長い夜の中で過ぎて了ふのです。私は心に消えた希望を甦らせようと思ひましたが無駄でした。消えた希望は私に不確かな考へへの源、疑はしい慰めをしか與へてくれないのです。私の心のなつかしい、やさしい友達！　私はどんな不幸を待ち構へて居なくてはならないのでせうか？　其不幸が過ぎた私の幸福と同じ程にならなければやならないのですなら。

お願ひです、こんな事を申しても心配して下さいますな。この寂しさ悲しさは孤獨の一時的な反映なのです。旅先で物思ひする爲に出來て來るものなのです。以前あつた樣な氣の弱さに又なつたのだとはお考へにならないで下さい。私の心は貴女のお手の內に在るのです、貴女が私の心を支へて居て下さるのですもの、私の心は打ち倒されて亡びる事はありますまい。貴女の前のお手紙の賜物である慰安的なお考への一つは私が今は二重の力で支へられて居ると知つた事なのです。愛が私の力を盡し切つて了ひましても私は尙力を得る事が出來るのです。何故と申しますに、貴女から來る勇氣は私が私自身を支へるより遙かによく私を支へてくれるからです。私は、人は獨りでは良くないといふ事を信じさせられる樣になりました人々の心は其うけられる價値を得る爲に結合しようとするものです、人造磁石の力のやうな友達の間の聖い友情の力は異つた個々の力を合併したものとは比較にならぬ程大きなものなのです。聖い友情！　其處に貴女の勝利があるのです。けれども友情の力全體を以て、百倍以上も緣を神聖にしてゐる此完全な和合に比肩すべき唯一の友情は何でせう？　戀愛の歡喜を官能の熱病だとか、賤しくなつた、個人の慾求であるとより外見ない卑しい人達は一體何處に居るのでせう？　斯ういふ人達は私の心の中に起る事を來て視

るがいゝ又感するが良い。其様な人達は愛人からは離れ、何時會へるかも知らずに失つた至福を再び得る望も無くなつても、貴女のお眼の中に見てとつた不幸な戀人、幸運を棒に振つて、却て不幸に苦しまうとし、貴女すらも辱はれようとして居る戀人、貴女が鼓吹なさつた徳を化して、その心から永久に消える事の無い、尊い此印象を立派な裝飾とする戀人を見るが宜いのです、ジュリイさん！　貴女が居らつしやらないなら、私は一體どうなる事でせう！　多分冷やかな理性が私の眼を照してくれたのでせうよ。善の生温い賞讃、私が何よりも尠く愛せねばならないのは之です。私は其上一歩すゝめます。私は熱心にそれを實行して、貴女の賢いお教へに徹底し、他日私達を認めてくれる人達に斯う申すように致しませう。「聽々、若し世の中がジュリイさんの様な人達や、ジュリイさんを愛しようとする人達で一杯にならうものなら、一體私達は皆どんな人間になるでせう」と。

途すがら、貴女の最近のお手紙について考へて、私は貴女が今迄私の書いて下さつた手紙を皆集めてみようと決心したのでした。今となつてはもう貴女のお口から貴女のお考へをお聞きする事が少しも出來ないのですから。貴女のお手紙で私が暗記して居ないのは一つもありませんけれど——私は皆暗記してるるのですよ——私はそれを絶えず讀み直し度いと思つて居るのです。それで私の幸福を作る唯一のものたるこのなつかしい筆者のお姿を思ひ出さうといふのです。けれども知らず知らずの内に、紙がすり切れて來ます、ですから、破れぬ前に私は、それを皆殘る其爲に選んだ帳面に寫さうと思つてるます。可成り厚くなります」けれど私は未來の事を考へてるます。この書簡集で滿足して、夭死しない様にと心から願つて居るのです。私は數多をこの樂しい仕事に費す事にしました。私はゆつくりとして其仕事を延ばさうと思ひます。この尊い蒐集を私は生涯離しますまい。この本は私が出て行かうとする世間での私の寶鑑となるでせう。世間の慣習に對する抗毒劑となるのです。私の惱みの時の慰めとなるでせう！　私の誤りを豫め知らせてくれ訂してくれるでせう！　私の青年期の間、私を敎へてくれるのでせう。又常に私を完成してくれるでせう」私は考へます、戀の手紙でこの様に用びれらるのはこれが初めてではないかと。

先程戴いたお手紙は今日の前に在ります、此の手紙はどの様に美しく見へましても、どうも其中には倒り取るべき箇所があるのを私は見付ました。前から判斷が非常に變でした、が猶更變だらうといふのは其文章が丁度貴女に關係してるる箇所なのです。私は其様な事を貴女が書かうとお思ひになつたのすらをお責めしますよ、忠實とか、心の變らない事等を何故私にお話しになるのですか？　前には貴女はもつとよく私、愛と貴女の權利とを知つてお居でした。あゝジュリイさん、貴女おそゝりなさる感情は消えてしまふものなのですか？　で私が貴女に何も約束しなくなつた時には、私がつまり貴女のものでなくなるのでせうか？　いゝえ、どうしてそんなことが有るものですか？　貴女の最初のお目ざし、貴女の唇から出る最初の御言葉私の心の最初の歡びによつて、私の心の中にもう何によつても消えない所の永劫の焰、燃

え立つたのでした。最初の一瞬間しか貴女にお會ひしなかつたにせよ、それはそれで定まつて了つたのです、貴女をお忘れする爲にはもう遲いのです。それで今、私が貴女を忘れるだらうと仰言るですか？ 今私は過去の幸に醉つて、既往た思ふことによつてのみ幸福を感ずるのです。今貴女の美しさに壓倒せられて、私は貴女の美しさの裡に在つてのみ呼吸するのです。今、私の最初の魂は消えて了ひ、貴女から得た魂によつて勞を保つて居るのです。今、……噫ジュリイさん！ 私は私の感じてゐる不幸を貴女に申上げようと口を開いて居る所なのです。あゝ！ 世界のあらゆる美しさが私を誘惑しようとしても駄目です、私の眼に美しいのは貴女の魅力のみなのですもの！ 如何に萬物が私の心から貴女の美しさを奪はうとしても、如何に胸を貫き、腸を裂き、ジュリイさんを生寫しにする此鏡を破らうとも、其純淸な姿は最後の碎片に至る迄其輝きを止めることはありません。何物も其處にあるそれを壞せるものは無いのです。ええ最上の力(神)すらも、貴女のお姿を破る迄にはゆきますまい。其力は私の魂を亡きものにしても、いつまでも存在して貴女を仰尊するのを妨げる事はありますまい。

エドワード卿は旅行なさいますから、其ついでに、私に關する事や、私の爲になるお計らひを貴女にお話になるのを引受けて下さいました。けれども、現在の御手紙の模樣では、この約束もお果しなされないかもしれないと思つて心配してゐます。卿の御恩が卿をして私の上に用ひられるやうな權力を握らせ、適度以上に御恩を蒙めようとして、卿がそれを敢て濫用なさると御承知下さい。私は卿が自分の手に收めないでおるでの或る年金を私の方からは返還不納にして、私にお贈り下さつたので、自分の位置が、生れついたよりも遙かに上の人間の位置にをるやうになりましたから、どうしてもロンドンへ行かなけりやなるまいと存じます。こゝでは別に私の氣に入つたものは何も有りませんから、私は今迄どほりの生活を續けてゆきます。そして、私の經費の殘りの金を無駄に費す樣に誘惑は決してされません。貴女は私に、最初の或は最も感情の鋭い要求は善をなす心の要求と仰言いましたねえ。必要な金に迫まられてゐる間は、誰か正直な人に金の剩り等あるものでせうか？

書簡第十四　ジュリイへ

私はこの世の曠漠とした砂漠に、秘かに恐れを抱いて這入ります。この混沌は私に恐ろしい孤獨の念を與へるばかりです。この孤獨の念には物悲しい沈默が充ち亘つてゐるのです。私の抑しつけられた魂は其處に身を伸ばさうと求めて、却つて押し付けられて了つたのです。古人が云つて居ります。「獨居するより寂しいものは無い」と。私は群集の中で一人切りなのです、私は其處では貴女のものになる事も他人のものになる事も出來ないのです。私はどの樣に物を語り度いでせう、けれども誰も聽いてくれない事は知つて居るのです。私の心は又どの樣に物に答へたがつてるのでせう、然し又、私の心に來て何一つ云つてくれる人は居ないのです。私は鄽(まち)の言葉を少しも聞かないのです。そして誰も私の言葉を聞いてくれる人

は居ないのです。

私は大歓迎される事も、友情を示される事も、丁寧に取り扱はれる事も無いのです。そして私の目の前には他人に對してしなくてはならぬ氣使ひが澤山あるのです。誠に私は以上の事を情けなく思つて居るのです。見も知らぬ人の友達になるにはどうしたらいゝでせうか？　人間性の正しい利益、淡白な心の單純なそして感ず可き吐露は世の慣しの要求してゐる樣な、禮節の僞の表示や、人を欺く外見等とまるで違つた言葉なのです。最初に會つて、廿年來の知己の樣に私を遇してくれる人は、あと廿年後、他日私が其人に重大な事を賴む時に、まるで私を知らない人の樣にして私を扱らふのではあるまいかと、大いに恐れてゐるのです。こんな浮々してゐる人が、多くの人に斯くまでやさしい興味を抱くの考へる所もなく、其等の人達は誰にも熱心に愛着出來ない人だといふ事を斷言し

けれども、こゝには全く眞理があるのです。何故と申しますに、佛蘭西人は生まれつき善く、心を打ち開けた、慈悲深い、親切な人間です。けれどもそのまゝに解釋してはならない澤山な話し方や、斷るのが普通である樣な表面だけの申し出、田舍の人の善い心に禮儀が懸ける澤山な罠があるのです。「この場合私を信用し給へ、私の信用を、私の金を、私の物を好きに使ひ給へ」といふ言葉を、これ程澤山聞いた事はまだありません。この言葉が皆眞面目で、一言一句眞個であるならば、これ程財產に執着の薄い國民は他に無いでせう、又其產側は直きに完全に行はれるでせう。富んだものは常に施物を爲し、一番貧しいものは常に施されて居たら、總てが自然と平らかに行くでせう。さうしたなら、巴里で公平に貨幣が分配されるのに較べて、古代のスパルタも及ばなくなるでせう。所が實の所、反對で財產が一番不均齊であり、大盡をきめこんだ豪華振りと、見る間もつらいまでの窮迫とが同時に行はれてゐるのは、世の大都會で無くて何處でせう！　他人の窮乏に對して起るらしい表面だけの同情や、一瞬時に永劫の友情を形成する樣な輕々しい感情が何を意味して居るか理解するのには以上の事で直ぐわかります。

この疑はしい感情や、人を欺く樣な信賴の代りに、私は光明と、智とを求めようとして居ります。其處に萬事の發生するやさしい源があるのです。先づ人は唯學者や、文人のみにかぎらず、あらゆる階級の人や、女の方々の會話の中に見出される、智と理とに慫かされるのです。會話の調子は自然的で流暢です少しも重い所や輕薄な所がありません。其話の內容は少しも衒學者的な所が無くて智識に富み、陽氣である が決して燥しやぐ事無く、少しも氣取る所が無く、丁寧で、決してつまらない事ばかりを云つて居るのではなく、味な所があり、冗談があつても、淫りがましい事は少しも無いのです。爭論でも諷刺でも無いのです。議論する事なしに、推論し、しやれ（地口）を用ひないで、面白い事を云ふのです。其會話では巧みに、才氣と理智とを取り入れ、箴言と頓智と、鋭い諷刺、うまい冗談と、嚴しい道德とがうまく調和案配せられてゐるのです。人々は其處に連らなつてゐる人が、各口を出せる樣に何事に就いてでも話しをします、決して問題を局部的に深める事はありません。それは專門外の人が退屈するのを恐れるからなので

す。早く色々な事柄に亘つて話して、大急ぎで片付けるのです。正確な事が優雅を導きます。各人が各自の意見を述べて、それを頑固に長々と云ふ事はありません。他人の說を夢中になつて攻撃する人や、自己の說を飽く迄も固持して止まない樣な人は一人も居ません。わからない所をわかる樣にする爲に皆は論議するのです。只論じさうになる前にやめるのです。皆が智識を得、皆が眺じ合ひます。別れる時も皆が滿足して別れ、賢い學者すら、この會話から沈思瞑想する價のある程の事柄を持ち還る事が出來るのです。

けれどもほんとの所、この樂しい會話から人は獲る所があるとお思ひですか？　世間の事物を健かに判斷出來るのでせうか？　社會をよく利用出來るのでせうか？　自分と共に生活してゐる人が少くとも、よく理解出來る樣になるのでせうか？　いゝえ、さうで無い。雄言を巧みに辯護するのを覺えるのです。理論に趨り過ぎて、道德の原理を搖るがさうとする樣になるのです。情熱と偏見との巧みな詭辯を飾るのがうまくなるのです。一時流行的な考へを基として、誤謬すらをも、持て囃す樣になるのです。人の性質を理解する事はさして必要ではありませんけれど、他人が色々なものに就いて云ふ事を判斷する爲に、其人が何處な所に頭を突込んでゐるかを理解する必要は充分あります。こゝに一人の人が喋つて居る時、これはつまり、衣服が話しをして居るので、有情な彼が話をして居るのでは無いのです。還境が變ると共に其話す事もやす〳〵と變るのです。試みに其男に長い髮の鬘と、制服と胸にかける十字架とを、代り代りに與へて御覽なさい。きつと其男は夢中になつて、淳々と法を說き、專制主義を叫び、異端紛同を叱呼するでせう。法律に對する共通の理論が一つあれば、財政に對する他の理論があり、更に又創作に對するも一つの理論があります。各の理論は他の二つ理論がいけないのだと極力主張するのです。之は三つの議論が容易に落着く歸結でムいます。ですから自分の考へて居る事を云ふものは誰一人居ないで、他人に考へる材料を與へるもののみを云ふ人が多いのです。眞理に對する表面的の熱心は其處では利害の假面にすぎないのです。

人は、孤獨に生活し、他人と交涉の無い人達は少くとも彼等自身の精神を持つてゐるものだと考へるでせう。斷じてさうではありません。自ら何にも考へずに、彈力で考へさせられる機械の一種なのです。彼等が認めてゐる彼等の社會、彼等の連中、友達、會ふ婦人、其知つてゐる作者だけが知れてゐるのです。つまり以上の事を知ると新に刊行されて彼等には一度も讀まれなかつた本や彼等が未だ一度も觀ない、將に上演されようとしてゐる芝居や、彼等の未だ知らない某々の文士や、彼等の夢にも思ひつかない云々の組織に對する彼等將來の感情を推知する事が出來るのです。時計の振子が普通僅に廿四時間もつべく仕掛けられてゐるやうに、これ等の人達は皆每夕彼等の社交會で翌日考へる事を仕入れて來るのです。

そこで他の總ての人々に代つて考へてやる少數の男女があります。すると他の總ての人々はその少數の人々に代つて語り、且つ行ふのです。で各人が自分の利益に執着してゐるので、共同な利益に顧る人が誰も居ないのです。又彼等の間での各人の利益が皆相反して居ます。ですから、陰謀を廻らし、徒黨を組ん

で絶えず衝突して、偏見や、反對な主張が潮のやうにいつも差引きしてゐるのです。或は又他人に煽てられてスッカリ逆せきつてゐる人達は殆ど常に何が問題であるかも知らずにゐるのです。各の徒黨は他所では通じない規則や、判斷や、綱紀を持つて居るのです。ある家で正直と云はれてゐる人は隣の家へ行くと不正直になるのです。善、惡、美、醜、眞、德は局部的な限界的な存在をしか持たなくなります。幾つもの社會に出入しようと思ふ人は皆アルキビアデス（譯者註―アテネの勇將。勇將で才略類を絕する人である。智にとみ、志操の無い人の比喩に用ひられる。）より も其意志を柔かにする必要があるのです。其屬する會を轉々と變へる樣に、其主義をも變へ、一足歩いては精神を變更し、信念を尺度で計る樣にならなければやならないのです。人を訪ふ毎に、門口で其魂――魂が一つしかないのなら――を離れなければやならないのです。そして其家に向く樣な他の魂を抱いて、丁度各々の家で僕婢が其家の特別な制服を着る樣にしなくてはならないのです。そして其訪問がすむとその魂を置いて又新しく更へるまで、望むならば、前の魂を身につける必要があるのです。

其上もつと不都合な事があるのです。それは各の人が絕えず自己を矛盾し合つてゐて、それをも惡い事と考へ付かずに居る事なのです。話しと實行とに各々異つた原則を持つて居るのです。この樣に矛盾に對立してゐても誰もそれを恥とは思はないのです。のみならず其二つの原則がまるで違つてゐるのを承知して居るのです。彼等には書いたものの樣に話し、話す通りに行ふ樣な作家、殊に道德家は要らないのです彼等の書く所、云ふ所、行ふ所は皆三つの別々なものでそれを調和する必要などに迫られる事は無いのであります。一言を以つて申せば、總てが不合理でありながら、馴れてゐるものですから、別に何の嫌惡も感ぜられないのです。其上この矛盾には多くの人達が誇とまでに感じてゐる所の「善い外見が」あるのです實際、皆がどの樣に其信仰を熱心に說いた所で、眞個の自分は第二の問題で他人の眞似をして威張つてゐるに過ぎないのです。つまらない奴が騎士の風をしたり、財政家が大名になつたり、司敎か競事をやり宮庭の人が哲學を論じ、政治家が冗談を云ふ樣になつたり、兵隊だけが他の階級を輕蔑して儀式ばることも無く、自分達の風を守つてゐます、併して其誠實も支へて行かれません。ドウ、ミユラール氏が兵隊の社會が良いと云はれたのも滿更理由が無いでもありません、けれど此の在世中眞理であつた事は今日は最早左樣で無いのです。學問の發達はもつと良く、一般の風潮を變へました。所が兵隊だけは變化するのを望まなかつたのです。で昔最優等であつた兵隊の風は到頭今では一番惡いものになつて了つたのです。

ですから相手になつて話しを聞いてゐる人は、同じい人であつても意見を交換してゐる人となると、全く違つた人になつて了ふのです。彼等の感情は彼等の心から出て來ないのです。彼等の光明は彼等の精神には無いのです。彼等の話す事は彼等の思想を表す事にならないのです。他人から見れば、彼等は顏に過ぎないのです。ですから彼等の集つてゐる所に居るのは丁度動く畵の前に立つてゐるのと選ぶ所が無いの

です。見て居る心靜かな人のみが自己に感激させられる唯一の生物なのです。

以上の事は私が巴里で見た社交會を基として、一般大交際社會に就いて構成した觀念なのです。この考へは眞相よりも私の一個の立場により多く關係して居るのですから、きつと他日新しい智識が啓けると改正されるでせう。其上私はエドワード卿の友達が紹介してくれた社會にしか出入しないのです。ですから一國の眞個の風俗を認知する爲には、外の階級にも這入つてゆく可きであると考へて居ます。何故かと申しますに、金持の社會は何處へ行つても同じものでムいますからね。追々と色々研究して行く積りです。ねえ、この人達を私が砂漠だと呼び、孤獨で堪まらないと申したのが不當では無いでせう？　どうです判斷して下さい。實際この寂しさの中では、私は一瞬々々に變り、自滅してゆく所の眞と情との、洞ろな外見だけしか見付けられないものです。又其處では一寸の間、蛆や幻が目に現れ、捕へようとすると消えて了ふ樣な奇怪なものしか無いのです。今迄私は澤山の假面を見て來ました。何時になつたら人の顏が見られる事でせう？

書簡第十五　ジユリイから

ええ妾達は場所から云つて離れてるるんですけれど、矢張り結び付けられて居ますのねえ！　妾達は運命がどうならうと幸福ですわ！　眞個の至福をつくる心の結合でございますの。妾達の心の引き合ふ情は

（前略）法則などを認めませんね！　妾達の心は世界の端とに居りましても、觸れ合つて居ります。貴君の仰言る樣に、戀をするものは會へないといふ感情を緩和し、一時でも近づかうとする種々な方法を持つてるるものでございますわねえ。屢々、毎日會つてるるより、多く會へる事があります、何故と申しますに兩人の內一人が獨りになると直ぐに、兩人が一緒になつて了ふものですから。若し貴君か每夕この欣びをお感じになるなら、妾は日に百度も味ひませう！　妾が孤獨な生活をより深くすればする程、妾は貴君の面影でとりまかれて了ひますの、そして妾は妾の周圍のものを見つめる每に貴君が妾の周りに見えるのです。

Qui canto dolcemente, e qui s,assise;
Qui si rivolse, e qui ritenne il passo;
Qui co' begli occhi mi trafise il core;
Qui disse una parola, e qui sorrise.

（こゝにこそ、君はかくも優しく唱ひ給ひし。此椅子にこそ想ひ給ひし。かく歩み、さ、止まり給ひき。かしこにて、優しき眼にて妾の心を射給ひ、こゝにて妾に一言給ひ、彼方にて微笑給ひぬ。）

けれど貴君はこの平和な境遇に止まつてお出でになれますの？　感覺を動搖させないで心に語らふ、安らかな、そしてやさしい戀を味つていらつしやれて？　今日の貴君の悔は貴君の前のお望よりも賢いので

せうかしら？　貴君の最初のお手紙の調子に妾は恐ろしくなりましたわ。妾はこの人を欺く様な興奮を、それを刺激して、限りの無い想像と同様恐ろしく思ひます。妾は貴君が可愛いがり過ぎて貴君のジュリィの恥をおかゝせになるといけないと恐れて居りますの。貴君は御存知無いのね。貴君のお心はあまり美妙でいらつしやらない。貴君のお心は、どの位愛が空な讃詞で傷けられるか御存知ないのねえ！　貴君に貴君のお生命は妾のものであるといふ事も、自然に任せると信じて、屢々死に至るといふ事をもお考へになりませんのね。感覚的な方！　貴君はもう戀をお出来にならないの？　先に貴君が一度お感じになり、嘗てあの様に感動した、そしてやさしい句調でお宣べになつたあの靜かな、柔かな感情を思ひ出しになつて頂戴。この感情が幸福な戀が永久に味ふ所の一番樂しいものであるならば、それは別れてゐる戀人に許される可き唯一つのものです。それを味つたら、他の感情を味はなくても惜しくは無い程のものなのです、妾は貴君のブリュタークを讀んで、自然性を傷ける賤しい趣味について妾達が考へ合つた事を思ひ出しましたの。あの時私達は斯う申しましたわね。「この悲しい快樂をまだ共に感じないにしろ、其快樂の下賤であるのには充分である」と。あまり劇しい想像の誤謬に妾達は同じ考へで對しませう！　妾達の考へは其誤謬を排除するに違ひありません。幸な方！　お樂しみになるのに、貴君お獨りの時に、何をお樂しみにならうといふのですの？　この寂寥とした愛慾は死んだ愛慾ですか？　ォ！　愛！　愛の慾は生き々々としてゐます。其れは愛する人達の魂の結合なのです愛人に與へる欣びは、愛人から妾達に返される欣びと同じ價を持つてゐます。

どんなお言葉でどの様な詭言で、前のお手紙をお書きになりましたの？　偶然と才智が其處に這入つたのではないでせうか？　若し貴君が妾とお手紙のやりとりなさる内に、奇智をお用ひにならうと云ふのなら、妾に地口お比喩の辭書を送つて下さいな。人の衣服の感情とは一體何の意味でございますの？　僕婢の着る制服の様に、執つたり棄てたりする魂とは一體何の事なんですの？　貴君は可哀想なスヰスの女がこの様な立派な譬へをわかると思召して？「家々の氣風に合つた魂をお採りになる」前に貴君はもう佛國の趣味を貴君の精神に匂はしていらつしやるのじやなくつて？　氣をつけて下さいましよ。妾は氣遣ひます。ジュリィはそこ迄は行きさうもムいますまいと。貴君のお說を伺つてゐますと貴君があの様に屢お嘲りになつた騎士マランの traslati（不明）は此の比喩に似て來ますのねえ？　そして若しお手紙の中で「人の衣服」の解釋をなされるのなら、何故あのソンネット（短詩）の中で火に汗をかゝせないのせうね？

六週間で大都市の各社會を觀察なさり、其處で取り交はされる話題を定め、正確に眞を僞から、實を空から人の云ふ所を人の考へる所から區別なさるなんて、こんな風にして佛蘭西人が屢々他國民の裡で讃られるのですわ。けれどこんな事は佛蘭西の中に在る外國人のしてはいけない事ですわ。何故つて、佛蘭西人はもつと落ち付いて研究される可き價のある人達ですわ。妾は、自分が住んで居り、自分が善く過せら

れて居る國の惡口を云ふのは承知致し兼ねますの。妾は自分を泊めてくれる人達を傷けて道德家になるよりも、外見で欺かれて居た方がましだと思ひます。其上妾は才智を鼻にかけてゐる樣な觀察者は危く思ひます。其樣な人は事物の眞相を思想のひらめきの犧牲に供し、正しい事を損つて言葉の遊戲をしやしないかと恐れますの。

あのミュラール氏も云つて居ますわ、貴君だつて御存知の筈ですわ、頓智は佛國人の習癖なんですつて。妾は貴君にも同じ習癖を持つていらつしやると思ひますわ。唯違ふ所は佛國人のは同じ癖でも典雅さを持つてゐるといふ事と、其奇癖は妾達の民族のは一番少ないといふ事ですの。貴君の澤山なお手紙には仲々凝つた所や、地口がございますわ。妾は今別に感情の力から來る力強い調子や、勢のよい表現に就いて申して居るのではございません。妾は自然的で無く誰の胸にもひゞかず、筆者の意向を表してゐる樣な、文體の氣取つてゐる事に就いて申してゐるのです。え！　神樣！　愛する人に對して氣取るなんて！　むしろ愛する物にこそ其れは置かる可きではムいませんか！　無關心な會話を、如何に人が頓才てふ諷刺で勢付けた所で、兩人の戀人の間に在つてはそれは用ひられないものでございます。華かな媚の詞は人の採り得る一番單純な調子と較べますと、感情からぐつとかけ離れたものです。御質問申上げます。才智といふものが今迄妾達さし向ひの話しの時に行はれた事がございましたかしら？　又さし向ひの時には、熱した會話の魅力が其才智を遠ざけ、現れるのを妨げますにせよ、會へないといふ悲しみで充たされ、なつかしさにより溢れて心が語るお手紙に於いては、どうして奇智が現はれ得ませうか？　如何に總ての偉大な情熱は眞劍であり又歡喜の極は笑ひよりも淚を誘ふものであるにせよ、妾は、この爲に戀は常に悲しいものだとはどうしても考へられませんの。けれども戀の陽氣さが單純であり、飾りが無く、技功無く、戀其物の樣に赤裸であり、一言で申せば、それ自身持つて居る美しさで輝き、才智の飾りも借りもので無いと云ふ事を望んで居ります。

妾が此手紙を書いて居るお部屋の主、離れ難い人（從姉）は、妾が之を書き始めたときは、戀にそゝられるか、或は許るされてゐる恐悅の態であつたと申してき入れませんの。けれども、妾はそれから此悅がどうなつたか知りません。妾がどん書いて行くにつれて、何かしら妾の心がグッタリと疲れてまるりましたの。そしてあの惡いひとが貴君に對し、色々な惡口を私に書かせ樣となさいましたけれど、其力も失くなつてまるりましたのよ。何故と申しますに、貴君の批判に對するあの方の批評は妾のより遙かあの方式なんですもの。最初に書きました事も皆あの方が狂人の樣にお笑ひになつて、妾にお書かせになつたものなのです。そして云つた通りにして少しも變へてはいけないと仰言いますの。彼方は、これは貴君に、彼の方が保護してゐらつしやるのに、貴君がお茶化しなさるマリニ對して、失禮だといふことを貴君に敎へてあげるのだと仰言るのです。

然し、何故妾達はこんなに上機嫌になつて了ひましたのでせうか、御存知なの？　それは近い内にお從

姉様が結婚遊ばすからなのよ。法律上の契約は、もう昨夜終つて、式の日は來週の月曜日と定まりましたし、若し妾達の戀が陽氣になつたのなら、それは確に其結婚の爲ですわ。えゝ世の中でお從姉様のやうに熱烈な愛をしてゐる娘はたんとゐませんわ。あのドルブさんは又あの方で、首を傾けて、この心の浮くやうな歡待ににこついていらつしやいますの。貴君の樣に少しも氣六ケしくなく、欣んで冗談を仰言いますし、其戀人（クレール）を欣こばせる術を戀の傑作だと考へてゐらつしやいますの。お從姉様にいくら他から說教じみた事を申しても、もつと落付きなさいと申しても駄目なんですの。もう期日も近いのだから、處女といふ境から離れ樣としてゐるのだから、もつと眞面目に、輕々しくせず、別れて行く處女性を尊重して下さいと申しても駄目ですのよ。彼の方はこんなに、馬鹿に氣取つた態度でお對しになるの。そしてドルブさんの前でも、式の日は無類の機嫌になるだらうとか、さうか思ふと、結婚の日には人は一般にあんまり陽氣にはならないものだなんて仰言いますのよ。けれども、この方は胸に色々な事をお匿くしになつて、皆思つた事は仰言いませんのよ。尤も今朝目を赤くしていらつしやいましたわ。ですから夜泣いて貴は其れを償ふ爲にウンとお笑ひになるのだと妾信じますわ。彼の方は友情のやさしい羈絆を棄てて新しい緣をお結びになるのです。今迄お馴染の生活と異つた生活をなさらうと云ふのです。お從姉様は滿足して安心していらつしやいます。一番善い結婚から起る色々な事を經驗なさらうとしていらつしやいます。どう仰言つても嵐の近づくに從つて亂れ始める、清い、靜かな水の樣に、お心弱い貞節なお心が、一生の運命が變つて行くのを氣がお付きにならないではゐられますまい。

あゝあのお二人は何て幸でいらつしやいませう！ 愛し合つていらつしやる。そして結婚なさるのですもの。何の障碍もなしに其戀を味はふとなさるのです。何の恐れも、何の悔も無しに……さよなら。もうこれ以上妾は申せませんわ。

忘れましたから申上げます、エドワード卿は急いでお立ちになりましたので、妾達は一寸しかお會ひ出來ませんでした。お禮を申上げたい氣持で一杯でしたので、妾はあの方に妾と貴君の心持を申上げたかつたのですけれど、何だか恥かしくなりましたのよ。ほんとに、お禮申さずに居るのはあの樣な方にとつては侮辱するのと同じ事ですわ。

註（一） Quadarn o foch, a preparar metalli（騎士マランのソネットの一節）
噫火よ、汗をかけ、金屬を細工せんが爲に

書簡第十六　ジユリイへ

劇しい情熱に驅られると大人も子供みたいになつて了ひますね！ 劇しい戀から何て色々な幻が出て來る事でせう！ 最もつまらないもので以つて最も極端な慾望を欺くのは直き出來る事です。貴女のお手紙を頂いて私は丁度其樣な歡びに打たれて、貴女を目の前に見る樣な感じがしました。私の欣びの中で一物

のつまらぬ紙切れが貴女の代りをしました。會へない時の一番不幸な事は、理性もどうも出來ない不幸な事は、愛人の安否に對する心配なのです。愛人の健康、生活、安息、愛、總てを失ふことを心配する者は何にもかも見落してしまひます。現在は未來に較べて遙かに確實なものではありません。事件が起りやしないかと恐れてゐる戀人の頭では其起り得る樣な事件が絕えずまざまざと現れるのです。起つて來るのです。が結局、矢張り私は呼吸してゐますし、私は生てゐます。そして又貴女は御丈夫で、私を愛して居て下さるのです。或は寧ろこれは十日前には眞個の事であつたと申しませう、しかし今日が日からでも誰か私に請合ひませう？　あゝ貴女はゐらつしやらず！　あゝ苦しみ！　あゝ過去の事のみしか味へず現在といふものの少しも無い奇怪な狀態はどうしたものでせう！

お從姉樣に就いてお話して下さる時には、私は私の通信批評に於て彼の方の狡るさを、又マリニの辨明の中でお從姉樣のお恨みを認めるでせう。けれども私に辨明が許されるのなら、私は默つて返事もせずにうつちやつては置きません。

先づ、お從姉樣に申上げます。（私はお從姉に御返事を爲す可き筈ですから）文體については私は有りのままのものを書いて上げました。私は貴女に流行の會話の調子の觀念を實例とを同時にお示ししようと工夫しました。前からの定めどほり私はある社會で話されてゐるものに略近づけて書きました。其上私が「騎士マラン」の中で非難したことは、比喩の使用ではなくて、その選擇的なのです。精神に在る少しの熱の爲め他人に聽いて貰ふには、比喩や形容的な文學が必要になるのです。貴女方のお手紙だつて、御存知無いのでせうが、比喩等で一杯です。で私はある幾何學者と、ある馬鹿だけが形容なしで話せるものだと主張します。事實ある同じ判斷が力を百度銳敏に感ずるのではないでせうか？　然し持つてゐるべき筈のその百度の批判は、それに與へられたる順位によらなければ、どうして決められませう？私の書いた文句は確かに、私自身までを笑はせたのです。そして貴女が、それだけを引離しお取りなさつたお蔭で、私にはそれが不合理なものに見えます。けれど私が置いた所に其儘にして置いて下さい、さうしたなら、貴女も其文句が明かに其上力強くすらあるのをお承知なさるでせうよ。若し御承知のする氣のきいた是等の眼がお互ひに、又貴女のお顏から離されて了まつたなら、其のあらゆる熱情を以つて、それが何を詔ると、お思召すか、お從姉さまよ？　本當です、何にも話しません、マダム、ドルブにさへも。

觀察者が行きついた國で先づ第一に眼に入るものは、其社會の一般情調ではないでせうか。ですから私はこの巴里でした最初の觀察はあの樣なものでした。私は貴女方に巴里で云はれてゐるものについて申して巴里で爲されてゐるものに就いては申さなかつたのです。若し私が如才ない人達の話と感情と行ひとの間に矛盾のある事を見付けて居ましたら、その矛盾こそは直ぐに先づ眼に映るものでせう。同じやうな人々が各團體毎にそれ〴〵の綱領を變へ、モリナ〻徒が此派に據れば、ヤンセン〻徒は又別な黨に入り、卑屈な廷臣は大臣の所に集り、謀反氣のある危險人物は不滿な人と行動を共にするのを私が見る時、又金滿家

が贅澤を非難し、理財官は租稅を非議し、司敎は綱紀の弛廢を嘆ずるを見る時、官女達が淑德について、坊さんは宗敎について、貴族は德について語り、作家は簡朴について談じて居るのを見る時に、又是等の愚劣奇怪さを何人も驚かないのを見る時、私が直ちに、此處では眞理は語られる以上に聞き度がれない事又自分の語ることを他人に納得させようとするどころか、自分は所信を語つてゐるのだと聽者に思はせることすらしないと、私は言つてはならないのでせうか？

おや、これはどうも、お從姉樣に隨分冗談を申しましたね。私達三人が斯麻調子で話すのは珍らしい事です。けれど私が諷刺にも、頓智にも趣味を持つてゐるのだなぞとお考へにならないで下さい。今度ほジユリイさんにお答へするがあるのですよ。何故と申しますに、私は眞面目な叱責と惡戲混りの批評とを區別出來るんですから。

貴女がどういふ譯で私の云つた事を間違つておとりになつたのか一寸考へるのに苦しみますね。私が觀察しようとしたのは佛國人ではありません。何故と云ふなら、若し諸國民の性質が其差別で定まるものならば、どうして、他の國民の性質を知らない私が其差別をつけて佛國國民性を定めようなんて出來るものですか！　又私は觀察す可き場所として首府を選ぶなんて下手をやる程馬鹿でもないのです。私は大都市は國民性が異ふ程、國々によつても異らず。其上國民の特質は大都市に在つては消滅し、大部混亂してるるといふ事。——それは宮廷がどの國でも同じ樣なものである爲なのです。——又數多いそして收縮され

た、諸社會の共通な又總ての人に同じい勢を及ぼす所の影響によつて、原始な性質を失つてゐるといふ事等を知らないのではありません。

若し私が一國民を研究しようと思ふのなら、自然的傾向を持つてゐる人達の居る偏地に行つて觀察しなくてはならないのでせう。私のさうして觀察した各の州の差別は各州特別な特色を私に考へさせてくれるでせう。又見るのでせう。私のさうして觀察した所は、其國民的な特質を構成する事になるでせうし、又到處で見出されるも共通した所、他國民と異つた所は、其國民的な特質を構成する事になるでせうし、又到處で見出されるものは即ち一般人間の屬性でありませう。けれど私にはこの樣な大きな企ても無いのですし、又それをやくてはならないのです。さうすれば悠々として私は廻り歩いて、注意深く非常に距つた數州でも經廻つて

る可く必要な智識にも乏しいのです。私の計畫は人を知らういふのです。私は人を其種々な方面關係から見て研究してみたいのです。私は今迄は、地上に散在した小さな社會に於いてのみ、人を見て來たのです。今、私は同じ所に群を爲してゐる人を見ようと云ふのです。そして其結果、社會の眞個の影響を斷したいと思ふのです。何故かと申すに、若し社會が人々を常により善いものにするのなら、若し社會が數多く、近接したものであるに從つて、尙更人々は價のあるものになるのですからね。又若しこれと反對な證據を得たら、其處から反對な歸結が出て來る筈ですから。

此方法は其上國民性研究にも私を導くでせう。けれど、其所へ行く道は長く、くねくね曲つてゐて、恐

らく私の生涯には目ゝに達せられないかもしれないのです。兎に角私は手始めとして今居る所で總てを觀察しなければならないのです。そして次に、他の國に行くに從つて、差別を段々と記して行かなくてはならないのです。其次には佛國を他の國々に比較してみる必要があるのです。丁度柳について檄欖の木を叙述し、或は私のに就いて棕梠の木を記述する樣に。扨てかうして一國民を觀察した事に據つて國民をも判斷する樣になるのであります。

どうか、こゝで、國民的な諷刺と哲學的な觀察との區別を明かにして貰ひ度いのです。私が研究しようとするのは巴里人では無いのです。大都市の住民を研究するに由ない事です。道德の規範は國の人民の習慣に左右されるも巴里と同じ樣にうまく當てはまるかも知るに由ない事です。で私は私の見た所が羅馬や倫敦やでのではありません。ですから色々な偏頗な考へが世の中に根強く有りましても、それ自體悪いものを明かに感ずる事が出來ます。けれどこの悪を佛國人、寧ろ人間に嫁す可きか、又はそれは習慣や自然の作物であるかどうか全く知りません。悪德の有樣は何處ででも、公平な眼に悪い氣持を與へるものです。そして公平な眼で見てゐるのに、人類の缺點を旺んにしようとしたり、悪德を行つたりする人は、共に輕蔑す可きであります。假令如何なる地位の人でも、又人々と、どの樣な關係に生活してゐる人であつても。今は私自身が巴里の住民なんです。恐らく、氣が付かずに私自身が私の記した亂雜な生活に資する所があつたかもしれません。實際其處に長く居ると、私の意志すらが腐敗して來るでせう。きつともう一年經つと

私は一介のブルジョワになつて了ふでせう。若し貴女にふさわしく有る爲に、私が持つてゐなくてはならぬ市民の風習、自由人の魂を棄てて了つたらば、ですから、「私が似てはそれこそ大變だと思ふ樣なもの」を私に自由に貴女の爲に描かせて下さい。詮ひと虚僞との畫面を描いて引き比べて、私が眞理の純粹な熱に勢付く樣にさせて下さい。

若し私が私の仕事、私の運命を好きに自由にする事が出來るものなら、私は確に手紙には外のを書いた筈です。そして貴女は私が前にメイユリイやヴァレーからお書きした手紙に滿足でいらつした樣に御滿足でしたらうに。けれど私が住まなくてはならぬ世の喧噪に堪える力を得る爲には、少くとも貴女にお書きして自ら慰める必要があるのです。そして貴女に何かお書きしたいといふ考へは、周圍に其題材を求める樣に刺激するのです。さうでなければ、私は一歩一歩失望落膽して行つて了ふでせう！　若し貴女が私から何も知り度く無いと仰言るのなら、私は總てを放棄しなくてはなりますまい。考へて下さい、私に少しも氣に入らない生活をする爲には、それだけの努力を私はしなければならないと云ふ事を。そして、又貴女に私がどんな事をしてあげたら良いか知る爲には、私が貴女に屢々知らなければならない箴言や、超えなくてはならない障碍やをお話しするかもしれませんから、それは我慢して頂き度いのです。

私がいくら遲くやりましても、又外の樂しみをしてゐるましたのですが、あの私の樂しみの貴女の書簡集の成作はもう出來て了つたのでした。今幸に貴女のお手紙を頂いたので、又新しい樂しみを擴張する事が

出來ます。其書簡集は左程厚くありませんが、この様な小部なものの内で、こんなに澤山の事を貴女のお心が仰言つたのだと思つて驚いて居ります。全く外にこれ程樂しい讀物がありませうか、其れは貴女を知らない人にとつても同樣です。但し其人が私達と同じ様な心情を持つて居ましたらば。けれど此の手紙の蒐集を讀んで貴女がどの様な方かわからない事があるでせうか？ 如何してこの様にやさしい感情や、人を感じさせる調子を貴女以外の女に貸してやる事が出來ませう？ 一行毎に讀む人は貴女のお眼の優しい光を見るのです。一語毎に貴女の優しいお聲を聞かない人がありませうか？ ジュリイさん以外の誰が貴女みたいに愛し、考へ、話し、行ひ、書ける事でせう？ 貴女が此樣によく表はれたお手紙は、貴女を仰いでゐる私に貴女が目の前にいらつしやると同じ氣持を與へると申しましても、お驚きになつて下さいますな。讀み返し〳〵する内に、私は恍やりして了ひます、私の頭は絶えず熱に浮された樣になつて了ひます。何物を呑み盡す樣な焰が私を疲らせ、私の血潮は熱を持ち、波打ち、狂つた樣な氣持が全身を顫はせます。私には貴女が見え、貴女に觸れ、貴女を私の胸に抱き締めてゐる樣な氣分がするのです……あゝ愛する者、美しい方、快樂と、愛との源の貴女！ 貴女を見て幸福な人達に與へられる樣な絶世の美人達を想ひ出さぬ事がありませうか？……あゝ來て下さい……私は感じます……貴女は私からお逃げになつて私は影を抱くに過ぎないのです！ 貴女は私の弱い心に對して、あまりに美しく、あまりにやさしくして下さりすぎたのです。私の心は貴女の美しさも、貴女の愛撫をも忘れないでせう。貴女の美しさはお會ひ出來ない苦しみに打ち勝ち、私が何處へ行つても私から離れますまい。私に孤獨を恐れさせます。貴女の事を常に思へないのは、不幸の極致です。

あのクレールさんとドルブさんは、どんな障碍があつても結婚なさつてゐるのでせう。親切な、そして今結婚なさつてゐるのでせう、むしろ、私の書いてゐる樣な平和な愛や、其の適當の無邪氣さや其の心の正しさに償する幸ひを與へてあげて下さい。幸福を求むるものには仲々下されない幸福を、あの方々にお與へになつて下さい。仲善く幸福にお暮しになる樣に！ あゝ私達から奪はれた總てのものをあの方々がおもちになつてゐるのです、さぞ幸福な事でせう！ けれど貴女は私達の不幸の中に何か慰めをお感じになりませんか？ 私達の不幸の極が永久に償はれないものだとはお考へにならないでせう。又あの方々が私達に無い幸福を味つていらつしやるのなら、私達もあの方々の知つていらつしやらない幸を持つてゐるとお感じになりませんか？ えゝお會ひ出來なくとも、苦しくとも、恐ろしくとも、望が無くとも、二つの心の一方が他に猛然と飛び込む事は平安な心の人には感ぜられない悦びなのです。苦しむ可き快樂を求めるのは、戀の奇蹟の一つです。で私達は私達の苦しみの感情を無くして了ふ忘却と、無關心の狀態を一番惡い不幸と考へませう。私達の運命を慨きませう！ けれども他人の運を羨むなんて事は致しますまい。恐らく私達の運命より良いものは他にはありませんよ。神樣が全幸福を自己からお引き出しになる樣に、淨い火で熱せられて居る心は、其自己の感情の中に清

いやさしい一種の樂みを求めるのです。其樂みは財産や、其他宇宙の他の部分と何等關係ないものなのです。

書簡十七　ジユリイへ

遂に私は全く奔流の中に陷りました。貴女のお手紙の蒐集が終つたので、私は芝居を見に行き、街で食事をし初めました。終日人ごみの中で過し、觸れる物のすべてに耳目を貸して、何も貴女に似てゐるものがないので、騷音の中で思ひに耽り、心の裡の貴女とそつと話を交すので御座います。この騷々しい生活も矢張り何か誘惑を持たない譯ではありません。物事の不思議な變化が新しい到來者に或る種の愉快を與へない譯ではありません。然しそれを感ずるためには、空虛な心と些末な機智とを持たねばならないのです。愛と理性とは私を厭がらせるために一緒になつて居る樣に見えます。總てがあだな外見にすぎず、總てが瞬間毎に變るので、私は何物にも感動し、何物も調べるだけの時間を持たないのです。

そこで私は社會を學ぶことの難さを知り初めました。私はそれを善く知るために如何な位地を取るべきかさへも解らないのです。哲學者は餘りに遠く、社會の人間は餘りに近いのです。社會の人間は餘り多くを見るので、反省することが出來ず、哲學者は餘り少く見るので、總括を判斷することが出來ないのです哲學者はその觸れる總ての事象を個々別々のものとして考へ、その到達し得ない他物との聯絡關係を辨別することが出來ず、從つて事象をその場所に於て見ることを得ず道理も眞の効果をも感ずることが出來ないのです。社會の人間は總てを見ますが、何物につても考へる時間を持たないので御座います。物象の動きは彼等に只認めることを許すのみで、觀察することを許さないのです。物象は交互に急速に消滅して行くのですから、社會の人間には只混沌に似た、亂れた印象しか殘らないのです。

人はまた見ることと考へることを交互になすことが出來ません。何となれば、外物の有樣は注意を連續して見なくてはならないのです、そしてそれは考慮を妨げるものです。社會と孤獨との間にその時間を間を置いて分たうとする人は、家に引込んでゐる時にも常に他人であつて、何處に安位し得ない譯でせう。それには全生活を二個の大きな部分に分つより外に方法はありません。一つは見るために、他は考へるために。然しそれさへも殆んど不可能です。だつて、理性は氣儘に置いたり取つたり出來る家具ではありませんから。そして何も考へずに十年生きることの出來た人は、誰でも殘りの一生中を考へずに過して了ふでせう。

そこで私は單純な傍觀者として社會を研究しようと望むことは、愚かな事であるのを發見しました。「自分は觀察するのだ」と主張する人は、何も觀察しないのです。何故と申しますにそんな人は何を爲ても役に立たず、樂しみ事にあつては、邪魔者ですから、何處へ行つても歡待されないのです。其樣な人は自分の行動を以つて他人の行動を律するだけなのです。社會といふ學校に於ても戀の學校に於けるが如く、學

びたいと欲するものを實行する事から始めなければなりません。

では他國人である私は、この國に何等の仕事も出來ず、また宗教の相違が何物にも向上の瞳を注ぎ得ないで居る私は、如何な決心をしたら好いのでせう？　私は學ぶために身を卑下するに至りました。そして有爲な人間となることを得ないので、面白い人間とならうと努めるに至りました。私は出來るだけ注瞰なくして、禮儀ある、卑屈なくして、氣持の好いものにならうと努め、又その惡德に感染することなくして社會の中に在る善い所を見つけて、其社會に堪え忍べる樣になることを努めようとしてゐます。社會を見ようと欲ふ閑人は皆、ある點までこのやうな形式を取らなくてはなりません。何となれば、他人に少しも善を及ぼす事なく、また他人の氣に入る樣な仕方を知らない人が、何の權利かあつてその人達（他人）の間にうけ容れられる事を要求することが出來ませう？　然しまた、その人が斯る方法を見つけた時も、彼等はより以上のものを要求しないのです。殊に彼が他國人である時にさうで御座います。彼は徒勞にも、陰謀にも、爭論にも加はる事なら免除せられるのです。彼が若し總ての人に對して、正直に身を處しますならば、若し彼がある婦人達に差別をつける樣な事をせず、排斥も撰擇も共に與へてゐませんならば、若し彼が入つてゐる各社會の秘密を守るならば、若し彼がある家の可笑しい事を他の家で曝露しないならば若し彼が秘密を打明けられる事を避け、苦惱を斥けますならば、若し彼が到處で、ある威嚴を保つて居りますならば、彼は平和に社會を見、その風俗、その誠實を保守し、しかもそれが自由の精神より出でて、利益心より出たのでない時には、その潔白さへも保守する事が出來ませう。これがエドワード卿が與へて下さつた知合の間に於ける案內者として選んだ、秀れた人達の忠告に依つて、私がしようと試みた事です。そこで私はより數少い、そしてより選まれた社會の中に許されることになつたのです。今までは私は規則立つた食事にしか連らなりませんでした。そこでは家の主婦より外に婦人を見ず、そこでは巴里の閑人達は少しでも招待され、又そこでは各人が出來る樣に機智または阿諛の裡に食事をするのです。そしてその騷々しい混雜した情調は居酒屋の食卓と餘り變らないので御座います。

私は今やもつと秘密な不思議さの中に入り込みました。私は招待されて晩食に就くのです。そこでは扉は總ての氣まぐれ者に對して閉ぢられて居り、誰にでも調子の合ふ人達をのみ見出すことは確です。お互に適し合つたのでないにしても、少くとも彼等を受け容れた人には適してゐるのです。其處では婦人達は餘り御互を觀察せず、又其處では人は婦人達を監察し始めることが出來るのです。其處ではより洗練されたより諷刺的な談話が行はれてゐます。其處では朝の間に話された世の中の新奇な話、樣々な光景、昇進死去、結婚などの代りに、巴里の逸話を秘密に檢べてみたり、醜行年代記の秘密な出來事を露いたり、善も惡も共に面白くて可笑しな風にしてしまつたり、各談話者が上手に特別な興味を以て色々な人の性格を描きながら、識らず識らず自分自身の性格を遙かに好く描くのです。其處では用心深さの餘り從僕の前で或る錯綜した言葉を發明し、それを使つて諷刺をもつと澁晦にする風を裝つて、實はそれを更に痛いもの

にするだけなのです。其處では、一言で盡せば、人が害を少くするといふ口實を構へ、實はもつと深く突込むために一生懸命に刀劍を研ぐのです。

然し私達の考へで是等の談話を見ますと、それを諷刺的だと呼ぶのは誤つてゐるので御座いませう。と言ひますのは、其等の言は人の肺腑を突くと言ふより嘲笑的であり惡德の行の上よりも笑ふ可き事の上へ落ちるのですから。概して申しますと、諷刺は大きな町では餘り通じません。そんな所では、惡い許りの事が話すのに何の世話も入らない程單純なのです。美德が尊敬せられない所で非難すべきものは何がありますでせうか？　そして何も惡いことを見出さない時に、何に就いて惡口を言ひませうか？　巴里では殊に人々は事物を只滑稽な方面から取つてゐるだけで、憤怒を燃やすべき總てのものは、若し小唄の奇穉詩（エピグラム）の中に入れられないならば、常に歡迎されないでゐるのです。美しい婦人は決して怒ることを好みません。それで彼女達は何物にも怒らないのです。彼女達は笑ふことが好きです、然し罪惡を笑ふための言葉といふものがないので、茶化す人が如才のない、通人といふことになるのです。然し嘲笑に附入られる者は何と不幸でせう！　嘲笑の捺す腐蝕性の印は消し難いのです。それは單に風俗美德を損傷する許りでなく惡德にさへもその印を捺します。それは嘲笑を惡性化します。然し我々の晩餐會に歸りませう。

この選ばれた者の社會で最も私を驚かしたのは、一緒に快く話をするために特別に選まれた六人の人達を見る事です。彼等の間には極く屢、巴里の半ばをそれに參與させるやうな、多くの他人を交へることなくして、彼等六人の間だけで、或る時間を過させるより外に仕方のない、その有樣は緊密な關係が結ばれてゐることです。宛も彼等の心が何も言ひ合ふことを持たないかの如く、また世には彼等を喜ばせるには價する人が誰も居ないかの如くです。貴女はこんな事を覺えてゐらつしやいますか、ジュリイさん？　貴女のお從姉樣のお家か貴女のお家かで晩食を食べてゐた時、拘束や秘密があるにも拘らず、私達の會話を自分に關係のある問題に何時落して行けるかを自覺してゐたではありませんかねえ。またあはれな沈思、微かな暗示等の總てに對して、閃光よりももつと生き生きした目くばせ、認めるといふより察しる溜息が如何に一つの心から他の心へ甘い感情を傳へて居りましたかを。

若し會話が偶然に會食者の事へ向けられる時には、それは大抵社會のある種類の隱語で話されるのですから、それを理解するためには字引が要るのです。この暗號の助けに依つて、人々は互にまたその時代の趣味に從つて澤山の惡酒落をするのです。その間に、一番光彩を放たない者が一番馬鹿なのではありません。一方事情に通じない第三者は默つて了ふか、退屈するか、少しもわからなかつた事に笑はなくてはならないかです。これが兩人差し向ひの場合を除いて、私には現に解らない、またいつまでたつても解るまい、すると又これがこの國の人々の附き合ひ關係に於て存在する柔しい愛情の總てです。

是等總ての中で、重立つた人は嚴肅な事、或は眞面目な問題を提出致します。すると忽ちに一般の注意はこの新しい對象に向けられます。老若男女總てが、種々な方面からこれを考へようと致します。そして

人々はこれらの總て浮々した人々の頭から、すき無しに出て來る勝れてゐる解釋や理屈に驚くのでムいます。道德上の問題は、哲學者の社會に於いてすらも、巴里の美しい婦人の社會に於いて論ぜられる以上に良くは論ぜられないでせう。そこでは諸論は屢より峻嚴でない事さへありませう。その譯は話すが如く行はうと欲ふ哲學者は事を行ふに先ち、充分に考慮するものですから、然し此處では總ての道德はほんの饒舌に過ぎませんから、人々は定見なくして、嚴格にすることが出來、また哲學者の寧大さを少しく矯正するために、聖人さへも達し得ない程高く德を祭り上げて、好き勝手な眞似をしてをります。その上に、男女總てが社會の經驗に依つて教へられて、一致して自分等の仲間を出來るだけ悪く考へ、常に悲しい哲學を作り、常に人間の性質を虐榮に依つて卑しくし、常に惡德の中に善となる總てのものの原因を探さうとし、常に、彼等の固有の情によつて、人間の心を惡しざまに言ひ做してゐるのです。

この汚辱的な教理にも拘らず、この平和な社會で珍重せられる題目の一つは、感情です。但しこの言葉の意味を戀愛や友情などの胸の中の眞情吐露と取つては不可ません。そんなものは死ぬる程無味な事ですそれは感情でありますが、然し一般的な大きな格言に於いて、また形而上學が有する最もこせこせした所のものの總てに依つて本質化されたものなのです。私の一生にこれ程感情に就いて語られるのを聞いたことはもなければ、人々が感情に就いて語つてゐることをこれほどわからなかつた事もないと、言ふ事が出來ます。それは想像し難い美妙な點があります。あゝジュリィさん！　私達の粗野な心はこれらの美しい格言を少しも知らなかつたのです。そして私は此社會の人達のところにある感情なるものは術學者の中にホメロスがゐる樣なものではないかと恐れます。彼等はこの詩人に、眞實を感じそこねた多くの空想的な美を僞造してゐます。社會の人間はこの樣に彼等の總ての感情を機智の中に浪費してゐます。議論の中に非常に多く感情が出るので、實際實行するためにはそれが少しも殘つて居ない程です。幸にも禮式がそれを補つてゐるので、感受性に依つて爲すことと殆んど同じな事を、習慣に依つて爲すのです。兎も角どうでも して自分の事を善く言はせるためには、形式や一寸の間違感をすればそれでよいのです。何となれば犧牲が餘り長く手間取るか、或は餘り高價になるまでに至つた時には、感情よ、さらばですから、禮式はそこまで要求は致しません。その近くでは、彼等が手段と呼んでゐるものに於て如何な點で總てが秤量せられるのか解りません。感情の中に存しない總てを、彼等は定規の中に入れます、彼等の間では總てが定規ですこの模倣的な人達は、何も知ることが出來ない程獨創で充ちて了ふでせう。と言ふのは誰も彼自身たることを敢て爲ませんから。「他人のする樣にせねばならぬ、」——これがこの國の智慧の第一の格言です。「それは出來る事、それは出來ない事」——これが最後の決論です。

この外見上の規則正しさは一般の習慣に、最も眞面目な事に於ても滑稽な社會の樣子を與へるのです。人は適當な時期に他人の便りを聞きに人を遣る外は何時がいゝか知つてゐます。手紙を書かせねばならぬ

時、卽ち自身に足を運ばぬ訪問をする時。自分で訪問する時自宅に居ても好い時。實際は自宅に居ても居るとしてはならない時。如何な申出でをすべきか、如何な申出を斥くべきか。これこれの死に對して、如何な悲しみの程度を現はすべきか。田舍で何時間位泣くべきか。心を慰めるため町に歸つても好い日。悲しみ事の暇に舞踏會を開き、興行物に行くことを許さたる時間。是等の事を、同時に爲します。總ては戰爭に於ける聯隊の運動の樣に時間に依つて進みます。貴女は是等の物は同じ板に釘付けられた、或は同じ人に引張られた人形芝居と同じだとお言ひになるでせう。

さて、同じ事を正確に氣取つて爲してゐる是等の人達が同樣に正確に感動させられるといふことは不可能な事ですから、彼等を理解するためには他の方法でもう一步突き入らねばならぬ事は云ふ迄もないのです。あらゆる隱語は單に上べ許りの言語に過ぎず、巴里を支配してゐる調子を判斷する事も、更にその風俗を判斷する事も一層役立たないことは明かです。人々は斯くして巴里で話す事柄を了解しますが、その事柄を批判するに役立つものは何物も了解しないのです。私はまた新しく書かれた出版物の大部に就いて同じ事だと申します。また芝居にさへも同樣です。この芝居は、モリエール以來、市民の生活を上演すると言ふより、可愛い會話を暗誦するのです。此處には三個の劇場がありまして、その二つでは空想的な物が上演せられてゐます。卽ち一つでは道化役者（アルルキャン）、滑稽老人（パンタロン）、黑衣喜劇役者（スカラムウシュ）（譯者註―以上三つは伊太利喜劇の役名）を出し、他の一つでは、神樣、惡魔、巫女を出してゐます。三番目のでは、此等高古不易の劇（モリエール等の）を出します。その劇は本で讀むと仲々面白いものです。時に其劇場では新しい物を舞臺に出します是等の劇の幾つかは悲劇ですが、餘り感動させられません。若しそこに何か自然な感情とか、人間の心に眞に關係してゐるものが有るとしても、それを見て樂んでゐる人達の特殊な風俗に何等資する所がありません。

悲劇の結構といふものは、其創始者に於てはそれを權威あるものとするに足る宗教的基礎を持つてゐました。加之、其劇は希臘人（劇の始祖はギリシャ人）には、その敵たる波斯人の災難の中にあつて、また此の民族が其苛酷な政治から逃れた王樣の罪惡痴愚の中にあつて、敎訓的快い光景を與へました。ベルヌやツユーリツヒやヘエグで、塡斯太利家の古い專制を上演しますと、祖國と自由との愛は是等の劇を私達にとつて興味あるものとします。然しコルチイユの悲劇が此處で何の用をなすかとか、ポンペイやセルトリウスが巴里人に何の關係があるかと、人は私に言ふでせう。希臘悲劇は實際の出來事或は見物人に依つて斯く斯くと信ぜられ、且つ歷史的傳統に基礎を置いた出來事の上に行はれてゐました。然し偉人の魂の中にある英雄的純潔な焰が何をしますか？　戀と德の爭闘は彼等に屢々不快な夜を與へ、王樣達の結婚の外にせねばならぬ多くの物が、心にあることを人々は言ひはしないでせうか？　こんな空想的な主題の上に置かれてゐる澤山の劇の、眞らしさと實用とを判斷して御覽なさいまし！

喜劇に就いては、その作られた時代の人々の風俗を自然に現はすべきものであることは確です。それは鏡の前で自分の顏の汚點を取去る樣に、人がそれを見て惡德や缺點を矯正するのを目的として持つてゐるま

す。テランスとプロオトは彼等の目的について誤つてゐます。然し彼等の前に、アリストファネスやメナンドルは雅典の風俗を雅典人に見せました。それ以來、モリエールだけが前世紀の佛蘭西人の風俗を彼等自身の眼に更に純に描きました。然し畫家は最早來ないのでした。今では巴里のある家の會話が劇場で模寫されてゐます。この外に、佛蘭西人の風俗を劇場では何も學べないのです。この町には舞臺上で少しも問題にされない五六十萬の魂がある譯です。モリエールは侯爵も、町人も、職人も、同じ樣にうまく描く事が出來ました。ソークラテースは駁者、指物師靴屋左官迄をも話さしめました。然し今日の作家は、異つた風の人達であつて、商人の帳場や職人の店などに起る事を知つてゐるのは不名譽だと思つて居るので御座いませう。彼には只有名な話手があれば好いので、その人物の地位と申せば、自らの才能が及びもしない樣な高い身分を作中の人物に附與してゐるのです。見物人自身さへも非常に御上品になつて、喜劇で煩はされるのを訪問で煩はされるやうに恐れ、自分達より劣つた身分の人達の事を上演されると、それを見に行く事を欲しない程です。彼等は宛も地上唯一の住民の樣です。殘りの總ての人達は彼等の目には何物でもありません。四輪馬車を持ち、門衞を持ち、料理主任を持つ事が、皆と同じ樣にあることなのです。皆と同じ樣に成るには、非常に少數の人達の樣にせねばならないのです。車にのらずに歩いて行く人間は、社會の者ではないのです。それは中流市民であり、民衆であり、他の世界の人間なのです。そして四輪馬車は人を導くと言ふより、それを持つてゐると世の中に存在するのが認められるために心要だと言はれませう。この樣に全世界を通じて自分だけしか考へず、また彼等のする惡のため許りでなく人が彼等を考へるだけの價値のない、無作法者が一掴み居る譯です。芝居が作られるのは、單に彼等のためにのみで御座います。彼等はそこでは同時に劇場の眞中で演ぜられる者であり、兩側に於ける出演者であるのです。彼等は舞臺の人物であり、腰掛の喜劇役者であります。斯の如くにして社會と作者の範圍は狹小になり、現代劇はその御窮屈な威嚴を去らないのであります。人々は金光かの着物を着た人を舞臺に立たせるより外は出來ないのです。貴女は佛蘭西は伯爵と騎士と許りで出來てゐると御言ひになるでせう。そして民衆が悲慘で、乞食の樣で、あればある程描かれる民衆は却つて光輝あつて壯大なのです此給は他の階級の模範となるべき階級を嘲笑する爲に描きながら、その階級を消滅せるよりも寧ろ擡め且つ又常に金持の猿眞似をする模倣者の民衆は、彼等の馬鹿臭さを笑ふためよりも、それを研究するために劇場に行き、それを模倣して彼等より一層愚かになるのです。これはモリエール自身が始めたことです彼は町を腐敗させて、宮廷を矯正しました。彼の滑稽な侯爵は、その後を受け繼いだ町人の遊野郎の第一の型でありました。

概して佛蘭西劇には談話は澤山あるけれど、動作は少う御座います。多分佛蘭西人は實際動くことより饒舌ることを多くなすのか、少くとも行ふことより言ふ事を尊ぶのでせう。暴君ドニスの劇を見てから戰場を出る時に誰かが言ひました。「私は何も見なかつた。然し強い言葉を聞いた」と。これが佛蘭西劇を見

てから言ひ得る事で御座います。ラシーヌもコルネイユもその天才を以てして、只に話し手に過ぎません。そして彼等の後繼者は、英吉利人を倣ねて、時々上演に場景を敢へて入れた第一人者であります。一般に總てのものは善く整へられ且つ善く唸る美しい會話の中に進行し、人々は、そこで各會話者の第一の注意は目立つことになると、先づ氣が付くのです。殆んど總てが一般的な格言で言はれます。役者が如何に乘氣になれても、常に自分達より觀客のことを餘計に考へてゐるのです。一の章句は一の感情よりも、彼等にとつて價少なきものです。ラシイヌとモリエールの劇は別として、「私（ジュ）」と言ふ言葉は、ボオル・ロワイヤル（譯者註―巴里郊外の尼僧院）の文書で省かれてゐる樣に、念入りにも佛蘭西から省かれてゐるのです。また人間的な情熱も、基督教的謙遜と等しく勢無く、「人々」（譯者註―佛語 on は漠然と「人々」「世間」とふ程の非人代名詞である）と言ふ言葉許りで話されるです。まだ身振や話す事柄には何か樣子ぶつた威嚴がありますが、それは國語を正確に語る情熱も作者がその人物を飾り、舞臺の上に現れて熱中する事も許さず、常に作者を劇と觀客に縛り付けてゐるのです。故に最も生き生きした場面が出るにしても、その爲め作者は文句や上品な所作を綺麗に竝べることを忘れないのです。若し絶望が彼の女の心臟に短劍を突きさしたにしても、ボリクセータの樣に倒れながら禮儀を守ることに滿足しないので、彼は決して倒れません。禮儀は死んでも彼を立たして置きます。又這絶しかけた者共もその爲に直ぐ我に歸つて立上ります。

是等は總て、佛蘭西人が舞臺に少しも自然や幻覺を求めず、只機智や思想許りを望むから起つて來るので、彼等は愉快を尊敬しましても、模倣は敬ひません。そして一すでも面白かつたら、誘惑されるのをすら心配しません。誰も芝居の面白さのために芝居を見に行きません。彼等が行くのは、集會を見るため、自分が見られたいため、芝居の後で何かお饒舌りの材料に供給するものを拾ふためです。そして見た事を考へるのは後で何を人々に云はうかと考へるためです。世界の帝王として話してゐるその男は決して、アウグストスではなく、バロン（役者の名）なのです。ポンペイの寡婦はアドリエンヌ（女優の名）であり、アルズイルはゴオセン孃であり、かの傲慢な野蠻人はグランドヴァルであります。喜劇役者は喜劇役者で、幻覺を全く無視し、又誰もそれに就いて懸念してゐないのです。彼等は古代の英雄を若い巴里人の六列の間に置くのです。彼等は羅馬の着物をきて、佛蘭西風を倣ねます。人々は赤い二本指で泣いてゐるコルネリウスを見、白く白粉をつけたカトーを見、籠へ這りたるブルタスを見ます。是は皆誰をも感動させず、劇の成功に何物をも齎しません。人々が役の中にある役者だけしか見ない樣に、戲曲の中にある作者だけしか見ないのです。若し扮裝が少し位下手に出來ても、それは容易に許されます。何となれば、吾々はコルネリウスが裁縫師でなくクレピヨンが寢師でなかつた事を善く知つて居ますから。

この樣に、如何な意味で以て物を視ても、總て此處では饒舌隱語、理由のない話柄に過ぎません。社會でも舞臺でも言はれてゐることを聞かうとしても駄目であり、爲されてゐることも何だかわかりません。

では何故それを知る必要があるのでせうか？　一人が話すや否や、人々はその行爲を知らうとするでせうか？　彼は總てを爲さなかつたでせうか？　彼は審判されなかつたでせうか？　此處の正直な人は善事を行ふ人ではなく、美事を言ふ人なのです。巴里では反省せずに發せられ、考へ無しで云つた唯一つの言葉も其發言者にとつては其清廉潔白の四十年すらが消し得ない程の償ひ難い過ちをした事になるのです。一言で言へば、此人の仕事はその說くところと少しも一致してゐないにも拘らず、私の見るところでは、只その言葉によつてのみ、その人々が描かれ、その仕事は顧みられてをりません。又大都市に於ては、その社會はより無學なもの丶間に於けるよりすらも、一層温和、一層氣が置けず一層確りしてゐるやうに見えると言ふ事を私はさとります。然し其處の人間は實際、より人間的、より調和的、より公正でせうか。私は知りません。其處にも外見だけしかありません。そして、それ程開放的な氣持よい表面の下には、恐らく心が更に秘められ、吾々の心より更に奥深くひきこもつてゐるのでせう。他國人で、孤りぼつちで、仕事も交際も喜びもなく、自分より以外に關係しようと思つてゐない私に、發言出來る方法がございませうかしら？

けれども私は、この焦立つた騒々しい生活が、それを導いてゐる人達を陶酔に沈めるを感じ初めました。幾千の事物を急速に目の前に通される人の眩暈に似た惑きに陷りました。私を打つ事物の何物もが心に留りません。然し皆が一緒に心を亂し、感情を停止させ、ある時は自分が何であるか誰に屬してゐるかさへ所に忘れさせる位で御座います。毎日家を出る時、私は自分の氣分に鍵をかけて、しまひ込み、私を待つてゐるつまらない物に用意されてゐる他の氣分を取るのです。皆が判斷したり議論したりするのを聞いて私も何の感じもなく、その通りに判斷したり議論したりします。若し時々人々の先入見を否定して、動かしたり、物の眞相をあるが儘に見ようと試みたりするならば、直ちにそのむちやな議論に善く似たお饒舌りに依つて散々な目に遭ふのです。其處には物の現實性を視る半哲學者しかないことが、私に明白に分ります。又こゝでは眞の智者は物を外見に依つてのみ見るものであり、主義の代りには偏見を、法律の代りには禮儀を採らねばならぬものであり、最も壯嚴な智慧は愚人の樣に生くる事にあるのだと、私に分ります。

斯の如く私の道德的感情を變へることを強ひられ、空想に倘び、自然と道理に沈默を課することを強ひられて、私は、内心深く持つて居り、且私の慾望の對象と同時に行動の規範として役立つてゐた、この尊い姿（ジュリィの）を、變形せしめられるのを見るのです。私は移り氣から、移り氣へと漂ひ、私の趣味が絶えず輿論に從はさせられるものですから、たゞの一日だつて、明日愛するものを今日斯うだと斷言出來ません。

私の中にある人間性を墮落さすことを感じて、また私達の燃え立つ心が交る交る育て上げたこの内心の偉大さがかくも低く、卑くなるのを見て、當惑し、卑下し、驚愕して、私は夜、密かな悲しみに胸刺され

死ぬ程の不快に壓倒され、心は空氣をつめ込んだ風船玉の樣に空つぽで膨れあがつて、歸つて來るのです
おゝ愛！　おゝ私は如何に戀に純眞な感情を持つてゐるだらう！　如何な魅力と共に私は我に歸るのだら
う！　如何な恍惚を以てそこに私の最初の品威の最初の感動を見出すのでせう！　どうして私はそこにそ
の總ての光輝の中に德の姿が輝いてゐる事を見て喜ぶのでせう！　そこに貴女を見るのです、噫ジユリイ
さん、光榮の冠に座して只一吹きであらゆる是等の幻影を散らす貴女を！　私は壓しつぶされてゐる魂が
息づくのを感じます、私の生存と生活とをまた發見したと信じます。そして私の愛を以て、その愛を彼の
對象に向つて價値あるものとする總ての壯嚴な感情を取り戻すのです。

書簡第十八　ジユリイから

妾は是まで妾の眼を恍惚とさしたものゝ中で、一番賢い、一番愛らしいのは、遂に一等品位のある、一等善い女になりました。彼女が願を充たした、彼女に對する尊敬と愛とに充ちてゐる正直な男は、彼女を愛し、崇拜し、幸福にするために許り生きてゐらつしやるので御座います。そして妾の從姉の幸福の目擊者となる事、言ひ換へれば、その幸福を分つ事の、言ひ知れぬ嬉しさを味ひました。あなたはそれをお感じにならないとは仰言らないでせう！　妾は善く知つてゐますの。彼女がいつもあれ程優しく愛したあなた、彼女の小供の時から可愛い人であつたあなた。そしてあれ程多くの慈悲があなたのため、彼女をもつと可愛くせねばならなかつたので御座いますもの。元々全く彼女が感ずる感情は皆彼女の心にさうです樣に、妾達の心に感ぜられるのでございます。その感情が彼女にとつて喜びであるなら、妾達にとつては慰めで御座いまず。そして斯ういふ風なのが、私達を結びつけてゐる友情の價なので御座います。三人の中の一人の幸福が他の二人の不幸を和げるに足りるので御座います。

けれどこの類の無いお友達（クレール）がもう一部分私達を離れようとしてゐることを隱し立て致しますまい。彼女は事物の新しい秩序（新生活）の中にゐらつしやるので御座います。彼女は其處に新な契約新な義務に從つてゐらつしやるので御座います。そして妾達の物であつた彼女の心は、今友情が今迄保つてゐたその第一位を讓らねばならない他の愛情の物とならねばなりません。まだあるので御座いますよ、あなた私達は彼女の熱心の證明をするため、妾達は更に細心にならねばなりません。妾達に對する彼女の愛情や、彼女に逢する必要許りを顧慮してはいけません、尙彼女の新な狀態に適應する事や、彼女の良人に氣に入る事、氣に入らない事についても顧慮せねばなりません。妾達はこんな場合に德が要求するものを探す必要は御座いません。友情の法則だけで十分で御座います。個人の利益の爲に一人の友達を危くするかもしれないやうな人が、德を持つただけの價値が御座いませうか？　彼女が娘でした外には自由でしたから、自分自身以外にその行動の責任を問ふことはいらず、只その意圖の正直さが自分の眼に善し

とすれば足りたので御座います。彼女は妾達を、お互に運命づけられた夫婦の様に見て居りました。そして彼女の感じ易い純な心は、その罪ある友達（ジュリイの事）に對する最も柔しい同情と自分自身に對する最も貞節な用心とを結びつけて居ました。彼女は私の過ちを分たずに蔽つて呉れました。けれども現在では總てが變つて了ひました。彼女は自分の行爲を他人（良人）に托さねばならないので御座います。彼女は良人に對する忠信を約束した許りでなく、その自由をも譲りました。同時に二人の名譽の預り人でありますから、彼女には單に正直であることで十分でなく、また尊敬されねばなりません。善より外に何もしないと言ふのでは足りず、彼女はまた、一般によしと認められない様な事は何もしてはなりません。徳のある婦人は、良人の尊敬に價する許りでなく、その尊敬を獲得せねばなりません。良人が非難したら、彼女は非難せらるべきで御座います。そして、無實であつたとしても、彼女が疑はれるのは悪いので御座います、と言ひますのは、外見さへも彼女の義務の一つと数へられてゐるので御座いますから。

こんな議論が善いかどうか、はつきりと解りませう。でも心の中のある感情が妾に告げますには、従姉を妾の秘密を托す人として續けるのは善くないと言ひますし、また彼女が自分が第一の心の友だとも申さないので御座います。妾はよく推理の間違をしますが、それを妾に與へる秘密な感情に就いては決して間違ひません。妾が理性よりも本能をより以上に信じてゐるのは、これから來るので御座います。

この理由から、妾はあなたの御手紙を彼女から取戻す口實を作りました。それはクレールさんの所へ貰方のお手紙を置くと人から見られしやしないかといふ疑念かあつたのですから。彼女は、妾のその氣持を感じたのですが、悲しさうにして手紙を返しました。それでこそ妾はせねばならなかつた事をしたのだとよく〳〵申しましたの。妾達は何も口に出しては申しませんでしたが、お互の眼はそれを語つてゐました彼女は泣きながら妾を抱きました。如何に友情といふ柔しい言葉が言語の助けなど殆んどいらないかといふ事をお互に何も言はないで感じましたわ。

彼女の所に代るべき妾への手紙の宛名は、ファンシン・アネの所が好いと考へました。それは妾達の撰び得る最も安全な路だと思ひます。然しこの若い女が従姉よりも低い位置にゐるから、正直といふことに關して彼女をより尊敬しないといふ理由になるでございませうか？　却つて餘り高くない感情の人こそは妾達を更に危險にしはしないか、従姉にとつては氣高い友情の努力に外ならなかつた事も、他の人には墮落の初めとなりはしないか、またその愚を濫用して、妾は徳をさへ悪の機關として役立つことを強ひはしますまいか、と言ふ樣な事を恐れるべきでは御座いますまいか？　共犯者を捧へず、又自分の罪で他人の罪の重さを加へないで自分獨り悪者になるだけでは不充分なのでムいませうか？　でも貴方、そんな事は考へますまい。妾は更に別の冒險、もつと危ないことを考へましたのよ。それは誰も卷添へにしないし、又妾達が打明ける人をもつ必要がないのですから、非難も又より、尠うムいます。それは虚名を使つて、例へば

ヂボスケ氏と言ふ風にして妾へお手紙をお出しになり、その上レヂァニーノ宛の封筒をお用ひになるので御座います。すれば妾は前以て手配して置きます。それでレジァニーノ自身は何も知らないでせう。まあ疑ふ位でせうが、それは突きとめる事はようしませんわ。だつて彼の人がお金を貰つてゐるエドワード卿が彼の人に就いて妾に責任を負つて下さいましたから。此方法で妾達の通信が續いてゐる間に、ヴァレーに旅行した時に役立つた法を又することが出來ますか、或は永久的で確實な他の方法を考へて見ませう。

あなたのお心の狀態を知らないのならば、妾はあなたの御手紙を支配してゐる氣分によつて、あなたの御生活はあなたの趣味には合つたものではないと氣が付きませう。佛蘭西で非難せられてゐるド・ミュラル氏の書簡だつてあなたの程嚴しくは御座いません。敎師に向つて怒つてゐる小供の樣に、あなたが世の中を敎はり遊ばす最初の人々に對して、貴君は、世の中をお學びなさらねばならぬやうになつたことの腹癒せをしてをられます。妾を一等驚かしましたのは、あなたを反抗おさせ申すに至つた物が——縱令あなた御自身の意見では個人的にそれをお賞めなさるに違ないとしましても——總ての他國人に豫知せられるもの卽ち佛蘭西人の應接、その社會の一般的な調子であることで御座います。妾は特殊な點の巴里の特徵も、一般的な大都市の特徵も共に忘れてはをりません。然し、是か彼かに應ずる物を御存知なさらないで惡口か、觀察かおわかりにならないうちに、勝手なお批評をなさつていらつしやいます。兎に角、妾は佛蘭西國民が好きで御座います。そしてそれを惡く言ふことは出來ません。妾達が御一緒に勉强して得た大

部分は、妾はこの國の善い書物のお蔭だと思つて居ります。若し妾達の國が最早野蠻でないのは、誰にお陰を蒙つてゐるのでせう？　二人の最も偉大な、現代に於て最も德の高い人、カテイナとフエヌロンは、共に佛蘭西人で御座います。妾の好きな善良な王樣のアンリ第四世も佛蘭西人で御座います。よし佛蘭西が自由な人の國でないとしましても、眞實な人の國で御座います。そしてこの自由は賢人の眼には他の價が十分に御座います。慇懃で他國人の保護者である佛蘭西人は、自分の損になる眞相さへもその爲めに公表します。佛蘭西人の惡口を巴里で申して佛蘭西人はそれでも言ふ儘にさせて置きますが、惡口の半分でも英吉利人に就いて言ひますと、倫敦では石を投けて殺されるでせう。一生を佛蘭西で送つた妾の父は、夢中になつてこの善良な愛すべき國民の事を話します。王樣に御奉公に父が血を注いだので、王樣は隱退後も父をお忘れになさらず、その善事を未だに尊敬して居られます。この樣に父がその光榮を見出した國の光榮に妾は興味を抱いて居ります。あなた、若し各國民が長所と短所とを持つてゐるのでしたら、少くともその非難する眞理と共に、その賞める眞理をも尊敬なさつて下さい。

妾はもつと言ひませう。何故あなたの居られる所で過すべき時間を、暢氣な訪問で消費なさいますの？　巴里は倫敦より才能を發揮する舞臺ではないので御座いますの？　そして外國人は巴里では道を行くのにそれ程氣安くないので御座いますの？　私の言ふのをお信じ下さい。英吉利人が皆々エドワード卿では御座いませんし、佛蘭西人が皆々、あなたをあんなに强く厭がらした美しいお饒舌りに似ては居りませんの

よ。よしやそれが單に風俗を深くさぐり、又それ程口のうまい此人民の仕事を判斷するだけの事であつても何かの證據を探し試みに拵へて御覽なさい。從姉の父はあなたは帝國の制度と王樣の利益をよく御存じだと仰言いました。エドワード卿も、あなたが政治の原則や政府の種々の組織を知つてをられるのを認めていらつしやいます。功績が最も尊ばれる世の國は、あなたに一等適して居り、用るられる爲に丈け人に知られゝばよいのだと、妾は考へて居ますの。信仰に就きましては、あなたの信仰は何故他の人に對してよりもあなたを害するので御座いませう？　理性は不容赦と熱狂との豫防劑では御座いませんか？　獨逸よりも佛蘭西で人はもつと妄信的になるので御座いますか？　ド・センサンブオレン氏が維納で行つたと同じ道をあなたが巴里でお踏みなさるのを、誰が妨げますか？　若し目的をお考へになれば、最も早い試みが成功を速めるに違ないでは御座いませんか？　若し手段を比較なされば、友達に依つて進むより才能に依つて、進む方が遙に正直では御座いませんか？　若しあなたがお考へになれば……あゝ、此の海！……更に長い行程……若し巴里が彼岸にありましたなら、妾は英吉利の方がずつと好きでムいませうに！

此の大都市の事の序に、あなたのお手紙の中に認めました一の氣障なところを思ひ切つて取りあげてみませうか？　あれ程の喜びを以てヴァレエザンヌのことをお話しになつたあなたか、何故佛蘭西婦人のことを少しもお話しになりませんの？　この態熟な有名な婦人達は單純な、粗野な田舍女よりも語るに足らないので御座いますの？　世の中の最も幽惑的な女の描寫は、妾に不安を與へはしないかと多分お恐れになつたので御座いませう。悟つていたゞきませうぶ、ねえあなた、私の不和を亂すのは彼等のことを少しもお話しにならないことで御座います。そして、縱令何と仰言つても、佛蘭西女に就いてあなたの沈默は、あなたがそれをお賞めになつてるのより遙に妾に疑惑を起させますわ。

此處で素晴らしい評判の巴里のオペラ座に就いて、一言でも仰言つたら、妾は大變氣持よかつたで御座いませうに、要するに音樂は惡いか知れませんし、見世物は美しい物を持つてるかも知れませんからです。若し見世物に美がなかつたら、それこそ貴君の惡口の主題となるものでムいます。又少くともあなたは人を侮辱なさることでムいます。

クレールさんの結婚の時に、先日二人の求婚者が打合せてあつたやうに、妾のところへお見へになつたことを、あなたに話すのは、苦痛かどうか解りません。一人はイヴエルダンから、城から城へとさすらへて、狩をしながら來たので御座います。他の一人は獨逸の國からベルタの馬車で參りました。前の人は見え坊の樣な風でして、只上の空でしか聞いてゐない人達に、氣のきいた返答を見せつける積りて、可成りきび〳〵と話してゐました。も一人は大きな、おづ〳〵しさも、人の氣を惡くしまいとしての可愛いい內氣なのではなく、何にも言ふことの出來ない馬鹿のへどもどした氣持を、又一つは禮儀正しい娘の傍にゐて、落着を感じない我儘者の當惑から出る憶病さで御座います。この二人の方々につきましては父の意向を非常に確實に存じてをりましたので、お二人を妾の氣の向く儘に取

扱ふことを許された自由を、妾は喜んで用ひました。そしてこの氣儘はお二人をおつれ申したその空想を永續させなかつたことと信じます。あなたの爲めにそれを防ぐ武器のないのに、あなたが支配して居られる一つの心臟を、此二人が敢て襲ふのは嫌やだと思ひました。二人が若しそんな武器をお持ちになることだつたら、妾は更に一層憎んだで御座いませうよ。然しお二人も、又他の人達も、更に又全世界の人も、何處でその武器を取るでございませう。いゝえ、いゝえ。安心していらつしやい、いとしいお方！　あなたの功績に等しいものを見出しましたら、又その功績が貴君以外の他の人に現はれた時には、矢張り最初に來た者が唯一の承諾せられた人でございませう。ですから妾が殆んど話し度くないと思ひましたこのお二人につきましては、少しも御心配下さいますな。一緒においでなさつたやうに一緒に歸らうと決心なさつた程完全に、不快を與へてやることは如何なる愉快でございませう。また同時にあなたに彼等の出發をお知らせするのはどんなに愉快で御座いませう！

ド・クルウザ氏はボープの書簡詩に對する辯駁を公表されましたが、妾は退屈しながら讀みました。全く妾はこの二人の作者のどちらが正しいのか解りません。然しド・クルウザ氏の書物は善い行爲を人にさせた事はないだらうと思ひます。また人がボープの書籍を捨てて爲ようといふ氣になつた事程好い物はないと思ひます。妾に取りましては、自分の讀書を判斷する方法には、妾の魂が置かれた氣分を測るより外にございません。そして、讀者を善い方に導かない書物に、如何な親切があるのか殆んど想像出來ません。

ではさよなら、暮しい君よ。こんなに早くよす積りではございませんの。でも人が待つてゐます、呼んでゐるのでございます。あなたとお別れするは殘念でございます。だつて、妾は愉快なのでございますもの。そして妾の嬉しさをあなたにもお分ちしたいと思ひます。この嬉しさを浮立たせ、二倍にするものは母が四五日來快方に赴いてゐることでございます。母は結婚式に出席して、その姪に——むしろその次女に、母としての役をつとめるだけの力を、十分に感じたのでございます。可愛相にクレールさんは嬉し泣きをいたしました。彼女を引き寄せて置くだけの價値の殆んどないのに、いつも彼女を失ふことを恐れてゐる妾を御判斷下さいまし。實際に、彼女は、最も完全な健康の中で、美しく振舞つて、非常に喜んで式の光榮となるのでございます。ある心痛の名殘りが彼女の無邪氣な禮讓を、更に感動的にしてゐるやうにさへ見えます。いいえ、いつだつてこの比類のない母が是程善良で、愛らしくて、崇拜されるに價したことはございません。母がドルブさんにあなたのお便りを何遍聞いたが御在じでございますか？　縱令母があなたの事を妾に少しも話さないとしても、あなたを愛してゐることを妾は看過いたしません。そしてまた、嘗て母の聽かれたことがあるならば、あなたの幸福と妾のとが、彼女の第一の仕事でございませう。あゝ、若しあなたの心が感ずることが出來たら、如何なに感じることが必要でございませう！　また如何なに支拂はねばならぬ負債があるでございませう。

書簡第十九　ジユリイへ

あゝジユリイさん！　叱つて下さい。私を打つて下さい。私は皆こんな事には堪ませうけれど、私の考へて居る事だけはどうしても申上げます。私の感情を明察して下さる貴女でなければ、誰か私の思ひを打明る者になれませう？　貴女が聽いて下さらないのなら、私は誰に私の心を打ち明けませう。私が私の觀察や、判斷を申上げたのは貴女に訂正して頂く積りであつたので、貴女に同感して頂く氣は少しもなかつたのです。其上私が誤謬を犯せば犯す程、私はそれを貴女に申上けようと急ぐのです。若し私が此の大都市で、私の耳目を打つた種々な過度な事を惡口に申しましたにせよ。お打ち明けした事については申譯は致しませんよ。何故といふに、其人に面と向つて云ふとを許されない第三者のことを申したことがないのですから。そして私が巴里人に就いてお書きしたものゝ中では、私は、私が直かに常に彼等の話して居る事を繰り返したに過ぎません。私にも巴里人は可成りよく附き合つてくれます。隨分色々な事で意見も一致します、巴里人はあのミユラールの事を浪して居ました。私はさうだと思ひますよ。何故つてあのミユラールは巴里人を當然賞めなけりやならない所に迄に、巴里人を嫌つてゐるのですものですから、私の批評の中で、それと同じ事が書いてあれば、私も隨分間違つて居る理です。巴里人の好意の爲に抱く樣になつた尊敬と感謝の念とは、私のあけすけに物を見、云ふのを益々增長させる許りです。

あけすけに云ふ事は決して無駄な事ではありません。で私の云ふ所を皆眞理と考へれば、皆の方は私のこのあけすけのお話を、お聞きになれる方で、私はそれをなすべき人です。この意味で惡口を云ふ眞理は、賞讃する眞理よりも尊む可きだといふ事になるのです。何故つて、賞讃はそれを享ける人を腐敗させるだけです。其上一番下等な奴が一番褒められ度いくと思つてゐる奴なんです。批評は有益で、功績のみ獨り眞理を助けることを知つてゐるのです。心の底から私は斯う申して居るのですよ。私は佛國人を、人間を愛する天性親切な國民として唯一のものだと思つて居ります。けれども此故に、又私は、佛國民が自分達の自狀してゐる缺點に對してまでも、一般に賞められる筈だと云つてゐるのを認めず、少しも褒めてやる氣にはならないのです。若し佛國人が何にも德を持つて居なかつたら、それは、彼等は人間でないといふ事になります。佛國人は常に褒められる爲には、餘りに澤山な褒む可き方面を持ち過ぎて居ます。

貴女は「誘惑がある」と仰言いますけれど、私は到底誘惑されさうもありません、誘惑される爲には兎に角私にふさわしくない事をしなけりやならないのです。又貴女自身が私にお禁じになつた事をしなけりやならないのです。此國では、あの共和的な峻嚴さは流行つてゐないのです。もつと融通のきく德が必要なのです。友達や保護者の利益により良く從つて了ふ德が必要なんです。確に人の功業は尊まれるものです。けれどこの地では名聲を得させる能力と、財寶を得させる能力とはまるで異ふものです。で不幸にも

私が後者の方を持つてゐるとしたら、貴女は成金の妻とおなれになりますか？　英國では又違ひます。風俗は佛國より悪いにしましても、それだからと云つて、正しい道を通つて金持ちになるのを妨げる事は絶對にありますまい。それは人民が佛國よりも政治に多く參與し、公衆の尊信が信用を得る大きな方法なのですから。エドワード卿が私の爲に企て呉して下さる計畫もこの様な道を踏むのであるといふ事を貴女だつて御存知でせう！　又私の計畫はエドワード卿の熱心さを證據立てるにあるのです。貴女から最も遠く距つて私の居る地上の此場所は、私がその計畫に接近することのちつとも出來ない場所なんです。貴女と結婚することは六ケしいなら、此處にゐてはなほ更難しいのです。此處に戀が私に命ずる高尚な義務があります。

貴女がお母樣の御樣子が良くつていらつしやるといふ報知をして下さつて私は大安心致しました。私が出發する前から、貴女はお母樣の事を氣にかけていらつしやいました。で其時には私は私の思つて居る事なら申上げ兼ねて居りました。ほんとにお母樣はお痩せになり、前と隨分お變りになつて居らつしやいました、私は何か重い御病氣にでも罹つていらつしやるのではないかと恐れて居りました。大事にしておあげなさつて下さい。お母樣は私には慕しい方なんです、何故つて私の心はお母樣を崇めて居りますし、あの方の御好意だけが私の唯一の希望なのですから、又殊にあの方は私の大事な、ジュリイさんのお母樣でいらつしやるのですから。

あの二人の求婚者の事について申上げませう求婚者、それは私の嫌いな言葉なんです、それが假令冗談に用ひられてもいやなんです！。其貴女があの人達に就いてお話しになる調子が、私にあの方々を恐れさせます。私はこの不幸な人達を少しも嫌いませんから、さうお斷り申して置きます。けれど私は嫌悪を抱いてゐるとお思ひになる貴女の單純さを賞讃しますよ。貴女が嫌悪とお考へのものこそは怨みの戀だとおさとりになりませんか？　愛人から追はれた白鳩は斯く慨きます。さアジュリイさん、比類ない娘、貴女が何物かを嫌悪する樣になられたら、其時は私も貴女を愛しなくても良くなれるでせう。

二伸、あの二人の人に心配していらつしやる貴女をお氣の毒に思ひます！　貴女自身の愛の爲にどうか早くあの人達を追ひ還して下さい。

書簡第廿　ジュリイから

私は、シルヴエストルさんの所書で、貴君へ宛て、小包一つを送つて頂くようにドルブさんにお頼みしました。貴君はそれをシルヴエストルさんの所でお受けとりになりませう。けれどどうか貴君お獨りの時又貴君のお室の中でそれをお開けになつて頂き度うございますわ。何故つて其包の中には、貴君のお用ひになる樣な一寸とした器具が這入つて居りますから。

それは戀人達がよく身につける一種の護符みたいなものなんでございますのよ。其使用法は隨分妙なもので、斯うなんですよ。毎朝十五分間それを、心が何かしら悲しくなるまでお眺めにならなけりやいけないんですの。其次に、それを貴君のお目の上、唇の上、胸の上にお當てになるのです。さうするのは、人の云ふ所によれば、其一日の間派手な事の多い國の悪い風に對する豫防になるのだ想ですの。又人はこの護符には大變奇妙な電氣の様な力が有るのだと云つて居ります。けれど其力は誠のある戀人達の間にしか現れないのださうです。つまり、接吻の氣持をどんなに距離が離れて居ても一方から他方へ感じさせられるのださうです。妾は經驗上の効果は存じません、貴君が其力をためして御覽になる方だと思ひますわ。

御安心遊ばせあの二人の求婚者、女好き氣取屋さん——何とでも好きな名を仰言いませ。……と云ふのは名は事實に對して何物でもないですから。あの人達は出發して了ひましたもの。どうか無事で行きますように！　妾はあの人達を見なくなつてから、妾はもうあの人達が嫌いでなくなりました。

書簡第廿一　ジユリイへ

貴女はお望みなんですから、私は巴里のこのやさしい婦人達の事を今度お話しなければなりません。傲慢な方！　此貴物は貴女の爲しにそはぬものです。何んぼ熱望を御裝ひなさつても、又貴女の淑德と貴女の愛を以てしても、私は此好奇の裏には心配よりも、多くの虛榮が隱れてゐることをさとつてをります。それはともあれ、私は眞實を書きませう、私は眞個の事を書く事が出來ます。若し私が其上褒めなければならなくなつたら、尙更の事悦んで眞相を述べませう！

佛國の女はどうして、あんなに貴女より美しくないのでせう！　どうして少しも奇麗な所がなくて、貴女の美しさが一きわ優るのでせう！

私が御無沙汰したのを貴女はお滾しになりましたね。えゝ何を私は申したら良いのでございませう！　この手紙をお讀みになつたら、貴女は何故私が前にヴァレーヌ（ヴァレーの女）達の事を好んで貴女にお話ししたかおわかりになります。そして何故私が今迄佛國の女の事をお話ししなかつたかお判りになるでせう。つまり、ヴァレザーヌの方は絶えず貴女の事を私に思ひ出させました。けれど、里巴の婦人は……まア讀んでそして、私の考へを判斷して下さい。其上、佛國婦人に就いて私の様な考へ方をする人は少いのですけれど、又私の說に左擔してくれる人も居ないのではありません。で以上の事に就いて、公平といふ立場から見て私は貴女に申上げるのです。それも貴女が、私は、佛國婦人の實際にかくある事をお知らせするのではなく、私の目を通して見た所をお知らせするのだと云ふ事を理解して頂く爲なのです。兎に角、若し佛國婦人に對して私が不公平でありましたら、どうか又充分に批判して下さい。けれども貴女は私より不公平でせうな！　何故つて總ての間違ひは皆貴女に在るのですから。

まづ外面的の事から始めませう。そして多くの考察者も其處に其論點を置いてゐるのです。若し私が其樣な考察者の最似をしたら、此國の婦人には餘りに氣の毒です。此國の婦人の性質は、其容貌の樣に表面に表はれてゐるんです。そして、其性質の外的表示も容貌も同じ樣に、佛國婦人には望ましいものではないのですから、そればかりで佛國婦人を判斷して了ふのはよくありますまい。佛國の婦人は容貌から云つたら、マアマア普通でせう、一般に云へば佳いと云ふより惡いでせう。けれど例外は確かに在るのですよ。佛國の女は纖細な、と云ふよりむしろ完成した姿をしてゐますが、恰好の良いスラリとした姿はしてゐません。ですから、流行を好んで趁つて其姿の缺點を匿す爲に作られた流行を、模して行く他國の婦人達を單純なものだなと思ひます。

佛國の婦人連の步み方は氣輕るで、皆同じ樣な步き方をします。其態度には少しも氣取つた所がありません。それは彼女達が氣兼ねするのを好まない爲めにも據ります。けれども彼女達は自然的に一種の優美さを失はない（ロンヴオルヴクラ finivolupia（活潑さ））を持つて居るんです。そして彼女達は其の性質を屢々無關心にまでに進めるのを誇りとしてゐるのです。佛國婦人は普通一般な白い皮肌を持つて居て概して少し痩せて居ます。痩せてゐるのは肌の色を美しくはしないものです。喉首の事について申せば、全く夫はヴァレザーヌと正反對ですね。體を强く締めてゐるので佛國の婦人達はしつかりしてゐるので押出しが効いてゐるのです。其外肌の色も仲々いゝのです。私は是等のものを遠くから見たのですけれど、よく觀察出來て、日向外の事までわかる程でした。此婦人連はこんな事はあまり問題にはして居ない樣です。何故と申しますに容貌の美點は尠くとも、見る人の想像は目で見るより遙かにその美點を美化するものですから。ガスコニイ式の哲學者（手前味噌）の言葉に從へば、全く飢ゑてゐるのは既に滿足させられた飢ゑよりも、遙かに多く辛辣な—少くともその感じによつて—ものです。

佛國婦人の顏はあまり整つてはゐません。けれど、彼女達が美しくないにしろ、表情に富んでゐて美しさを補ひ、屢々全く美しい人の樣に見えます。彼女達の生々として輝いた眼は、鋭くも無く、やさしくもありません。彼女達は紅の力で誤魔化さうとしてゐますけれど、斯くして與へた表情には愛の焰より、怒りの焰が澤山あるやうです。勿論其日はたゞもう陽氣です。又時々優しい情操を求めてをる樣に見えますが、其眼は決してやさしい感情を約束しません。

佛國の婦人達は實際上手に着物を着ます、少くともそれは有名なもので、着物の着こなしに於ては、結局歐州の他國の典型となつて居る位です。實際こんな妙な着物を、佛國の女程に趣味を持つて、用ひる事は出來ません。彼女達は、婦人達の中、流行に感染されず、更に新しいものを求めるといふ點で一番なものでせう。流行は地方の女を支配しますのですけれど、巴里の女は流行を支配して、各自分に都合の好いやうに流行を變更してゆけるのです。例へてみますれば、地方の女達は文字の誤りまで寫す所の無智な、働く、筆記者のやうなものです。巴里の女は先生に習つて書くけれども、その間違ひを正すことを知つて

る著作者です。

佛國婦人の身の飾りは立派だと云ふより凝つておるのです。金目と云ふより典雅が其主流をなしてゐるのです。毎年々々流行が古びて行く速さと、屢々化粧を変へたがる清潔好みの御陰で、馬鹿々々しい大業に華美な事が出來ないのです。彼女達だつて化粧や身のまはりに金をかけことは厭いわけで、はありませんが、其金のかけ方が餘り合點が參りません。伊太利などの様に古風で、大屑な着物は無く、其代り簡單な、そして常に氣持の好い衣服を常地では用ひてゐます。男も女も此點に就いては、同じ様な控へ目と、同じ様な纖細さと持つてゐます、この趣味は私の氣に入るものです。私は袖飾りや、種々の飾り模様が無いので大變氣に入つてゐるのです。私達の地方の人は除きまして、とりわけ女が鍍金の具を身に附けない國民は、決してムいません。どの様な階級でも衣服の地は皆同一ですから、若し公爵夫人と一市民の女と較べた場合、前の方か何か後者の眞似の出來ない特色を現す術を心得て居なければ、兩者を區別する事は非常に六ヶ敷いのです。で茲にどうも困難な事があるのです、どんな新流行を宮中で採用した所で、此流行は直きに町で眞似られて了ふのです。で巴里の中民は、現に流行してゐない、流行に執着してゐる地方人や外國人とは全く違ひます。又一番有名な家が一番金持で、その夫人達は他人の眞似の出來ない様な贅澤をして、自ら他を區別してゐる様な外の國とは全く趣きが異るのです。若し佛國で宮廷の婦人達がある事をするとしたなら、直ぐ眞似られて、其の婦人達は、資本家の夫人達と區別がつけられなくなつて了ひませう。

では何を佛國の婦人達はしたのでせうか？　佛國婦人達はもつと確かな、上手な、もつと考へたらしい方法を選びました。彼女達は貞節と、淑徳との思想が民の頭に深く刻みつけられて居る事を知つて居るのです。其處に他に眞似されない流行を暗示するものがあるのです。彼女達は人民が頑然 Ford（ファル）と不作法な名で稱んでゐた臆脂に身震ひしてゐたことを知つてをりました。彼女等は四本の指に Ford（ファル）ではない、臙脂（Rouge）をさしてゐたからです。何ぜかなれば、詞がちがへば、それは最早元のものではないのですから。彼女達は喉襟を露はに出すのは公衆の手前、破廉恥な事だと云ふ事を知つて居ります。けれど彼女達は襟の所を廣く三日月形に切つて居るのです。彼女達は見ました……あゝジユリイさん！　お嬢さんであるうちは、決してこれからも御覽にならない事が澤山ありますよ。彼女等は其行動に於いても、其衣服の着こなし方に在ると同じ精神を有つて居るのです。あの可愛らしい、そして、女性を優れたものにし、尊くし、美しくする、貞淑さは、彼女達にとつてはつまらない、そして田舍臭いものなんですよ。彼女達は其擧動や其談話を、上品に繕ろつた厚ケ間しさで勢付けてゐるのです。斯うして彼女達は他の婦人達と見まちがへられるのを恐れて、女らしく振舞はず、女性といふ事よりも階級に目を置いて、他から眞似されないやうに、娼婦のやうな風にして居るのです。

私は何處まで、彼女達の模倣が進むか知りません。けれど私は、彼女達が豫知しようと思つて居た模倣を全く避けられなかつたといふ事を知つてゐます。頬紅や、襟を三日月形に切る事に就いては、彼女達は出來得る限りの進歩はしてゐます。町の女達は、寧ろ自然からの肌の色を棄て、愛人のAmoroso, Penchant（アモーロソ・ペンシエル）（戀情）を起させる魅力をも棄てて了ひました。そして御新造（ブルジョワズ）さん達として、立てられることを欲しました。それで若し此の範例が一番下級點にまで及んでゐないならば、此樣な扮裝をしておひろひで行く婦人は民衆の嘲弄をきつと受けないとは極言されません。此嘲弄は反抗せられた貞節の叫びであり、そして又この場合に於ては、他の多くの場合と同じく立派な人達の禮儀よりも遙かに正直な、民衆の亂暴が、恐らく百千の婦人を實素の境内の中に引止めてゐるのでせう。これが正しく、此等の流行の素早い證明者たる婦人達が主張したものなのです

兵士の樣子や、近衛兵の調子は何處でも同じですから、別に驚く程の事ではありません。新たに國外から來た人のみの眼を惹くさへも覺束ないです。サン、ジエルマンの樹道から、諸市場迄に居る女達は皆面の皮の厚いもの許りで、づか〳〵近寄つたり、眼を使つたりして、自國で其樣な例を見なかつた人々を狼狽させます。このまるで目新しい事で、すつかり驚いて了つて、外國人は土地の人から笑はれる程のへまな風をするのです。其上、其女達が口を開くと更にいけません。私達のヴォードァの女の樣なやさしい、柔かな聲は少しも無くて、何かしら堅い、尖つた、問をかける樣な、威丈高かな、嘲笑的な、男よりも太い調子で話すのです。又假に其聲の中に、女性の優しさが在るにしても、彼女達の亂暴な、人々をぢろぢろ見る物見高い樣子は、女性の優美さを皆包んで了ひます。私には丁度、彼女等は、彼女達を初めて見た人々を狼狽させて樂しんでゐる樣にすら見えます。けれど、何故人々が狼狽するか其原因を明にして、示してやつたら、この狼狽する事も、前よりは、彼女達の氣に入らなくなるでせう！

しかし、私の美に對する偏見かもしれず又、美自身が表はれようとする本能力かもしれませんが、兎に角、美しい婦人達は一般に私には、外の人達よりも淑ましやかであると思ひます。又私は其態度の中に仲々端正な所を見出します。この端正さは少しも彼女達の損にはならず、其利益を感じさせます。又さういふ美しい彼女達は私達を惹引けるのにも、揶揄なんかしなくても濟むのです。恐らく、不貞腐れな事は醜に附け加はる、一番胸の惡い、いやなものです。で確かに、恥を知らない醜顏は接吻どころか、平手でなぐられて了ひませうよ、醜い顏だつて淑やかにすれば、やさしい同情をもわかせる樣にして、屢々愛にまで人を導くものですのに、けれど、美人の態度の中に、如何にやさしい何物かを認めるにしろ、其態度の中には又隨分作つた愛嬌が見出されるものです。彼女達は他から見ても可笑しい程自分の事のみに氣を奪られて居て、佛國では決して誘惑などに罹らない程です。あのド・ミユラール氏が英國の婦人達のとゝろで引罹つておしまひなさつた、卽ち美しい、彼の方を悅ばした一英國婦人に關した誘惑などは此處にはムいません。

國民特有の陽氣な性質や大風を眞似ようとする慾望は、佛國婦人の會話と態度との中に現れた自由の唯一の原因ではありません。其自由は其風俗の中に兩性の不謹愼な、絶えない混合によつて、深い根を引いて居るのです。兩性の混合は一方に他の異性の方の風、言葉つき、態度等を慣習づけて了ふものです。吾等の瑞西の女達は可成り女は女たけで集合するのを好みます。そしてやさしい、友情の中に生きて居るのです。そして如何に瑞西女達は表面では男の人が混つてゐても平氣な風をして居ますが、確かに男の人が居る事はこのさゝやかな、婦人主權政體に一種の窮屈さを與へる樣です。所が巴里ではこれは全く反對なのです。女は男と一緒に居ると、安樂にしてゐるのです。女は男と一緒に居るのしかを好まないのです。どうして又、どこからどの交際社會にあつても、一家の女主人は男の人達に、とりまかれて居るのです。こんなに男の人がやつて來たか苦しむ程ですよ。が巴里には澤山な投機師や、獨身者が居つて、此家からかの家へと轉々遊び暮してゐるのです。丁度貨幣の樣に男の人の數は、流用されつゝ數を增してゆくのです。ですから、女の人も男の樣に話す樣になり、又行ふ樣になり、考へる樣になるのです。そして、男の人は女の樣になるのです。斯うして女は男のつまらない世辭や媚の唯一の對象となつて、平然として、眞心の無い侮辱を含むだ、讚辭を受けて居るのです。それはいゝとして、眞面目に、又は冗談かに男達があら女に注意を拂ひ、女も欣んでゐるとします。所がこゝに別の女が急に出て來ますと、忽ち、今迄の親睦な氣分に儀式めいた氣分がついで起り、皆が氣取り始め、男達の注意は分裂し、皆が各々ひそかに、氣まずい思ひに打たれてゐて、會が終つて、別れるまで其儘になつてゐるのです。

巴里の婦人達は芝居を見に行くのを好みます、換言すれば芝居へ行つてゐるのを他に見られるのを好みます。けれど、彼等が見物に行かうと思つた時に、困る事は同伴者を選ぶといふ事です。何故つて、風習として、どの婦人もたつた一人で棧敷に行くのは許されてゐないのです。又其良人と行く事も、又他の男の人と行く事も許されてゐないのです。佛國の樣に社交的な國で、この觀劇會が組織されるのに非常に六ケ敷い等とは到底考へられません。十人行く事になつても、九人行かない事になる事があるのです。つまり觀劇に行くといふ望みがあると結合し、行くのが面倒になると、忽ちオジヤンになるのです。私は婦人達は容易にこのつまらない、習慣を廢す事が出來ると信じます。何故つて一人で公衆の中へ出て行く事が出來ない理由が何處にあるのでせうか？　けれどキット、理由の無いといふ事が其樣な習慣を保つて居るのでございませう。禮儀を缺けば無用となるものに對し、出來るだけ多くの禮儀を返すのが善です。オペラを見に獨りで行く權利をもてば婦人はどんな利益が得られませうか。この權利をむしろ、男の友達を特別に接待する爲に使つた方が良いじやありませんかね？

此樣に澤山な男の人達の間に散在し、孤立して生活する彼女達の生活法から隨分澤山の秘密な關係が出來て來るのです。これは今日の衆人の齊しく認める所なのです。經驗上から云つて、誘惑を一方で益しつゝ、誘惑を斥ぞける樣な不合理な規箴が破壞されて行きます。この方法が正しいものであるとは毫も云は

れてゐないのです、唯然し此方法が樂しいものだとは云はれてゐるのです。又私はそれも虛僞だと思ひます。何故つて、貞淑が罵られて居る所に何で愛が在りませうぞ！　又愛と、心の直さの同時に缺けて居る生活にどんな美しさが在りませうぞ？　でありますから、浮氣な人達の大災厄は倦怠である樣に、彼女達は愛せられるといふ事よりも、欣ばせられるといふ事を念頭に置いて居ります。媚や、色々世話をされる事が彼女達にとつては愛よりも、償が有るのです少し熱心になる時がありましても、熱情的（オプレヨネ）になる事はさして重大な事とは考へられてゐないのです。男女の親しい會合からは、愛とか愛人とかいふ言葉は少しも用ひられて居ないのです。そして緣とか、媚とがいふ彼女達の讀んだ事の無い小說の中にある言葉も同樣お拂ひ箱になるのです。

自然的な感情の順序は皆こゝでは反對の樣です。心は何の執着を感じないのです。娘達に意中の人を持つ事は禁ぜられてゐるのです。意中の人を持つといふ權利は既婚の婦人だけに許されて居て、選ぶにしても彼女達の夫達は勘定に入れないのです。娘が一人の心の愛人を持つより、母親が廿人の戀人を持つ方がいゝのです。不義な事は正々堂々と行はれて、行はれても人は何等公安を案ずる事を感じないのです。人の修養する爲に讀む禮儀に正しい書物は澤山あるのですが、不忠實に破倫が加つても、少しも非難されないのです。あゝジュリイさん！　こんな婦人は新婚の床を百度も汚がす、こんな女は、その不純な唇で私達の貞節な戀を咎めるでせう。永劫に信仰を失はない眞面目な二つの心の融合を罰するでせう。ですから、斯ういふ事も云へるでせう、巴里の結婚は他所の何處の結婚とも質がまるで違ふと。この結婚は、巴里の人士の云ふ所によれば、秘蹟（サクルマン）（聖餐と言ふこと天主教的用語）であるさうですが、法律上（宗教上に對しての）の力は毫も無い秘蹟（サクルマン）なんです。夫は同棲しようと承諾し合つた、又同じ名前を頂き、子供も同姓にするといふ事を認めた自由な二人の人達の協和に過ぎないのです。其上彼等互に何の權利も無いものであります。で妻の亂行を監理しようと思ふ夫は、私達の方に於ける樣にやつぱり泣言を云ふのです。女の方は男に對して、少しも嚴しくはないのです。ですから、妻の亂行を眞似た夫を妻が罰した事は未聞の事です。實際心が少しも考へられてゐない此んな結婚の雙方から、もつと正直な結果を期待するのは愚な事です！　財產や身分を目當てに結婚した人は個人に對しては何等負ふ所が無いのです。

戀愛も、其力を失つて、結婚と同じ樣に變性したものになつて居るのです。巴里での夫婦がもつと自由を得ようとして、同棲する樣な男や女達ですなら、巴里の戀人達は、快樂や、氣分や、慣習や、一時的な要求の爲に相會つてゐる、無關心な人達なのです。彼等の心は未婚の男女の身に在る羈絆をのがれようとばかり思つてゐて、戀の中に便利とか外面的な或る種類の便宜をのみ求めてゐるのです。是は、マア斯うも言へるでせう。卽ち、同棲し、身を落付け、出來るならより少く相交はることです。媚でつき合ふ關係は一寸とした訪問よりは少し位長つゞきはしますよ。それは奇麗な會話や、寫眞を一杯入れ、格言や、哲學や、才智を一杯に充たした美しい手紙やの蒐集です。肉體的については少しも神秘な所がありません。

慾望が起つたら、直ぐ容易にそれを滿足させ當然な事と認めてゐるのです。最初に會ふ女、男、戀人、他人、——人間は常に人間なんです、皆が平等にいゝ理です。けれど其處には少くとも大分影響があります。何故良人より戀人の方に忠實なのでせうか？　ある年頃ではどの男も凡人と同じ人です、どの女も同じ様な女です。此の人形は皆同じ流行品の商人の店から出て行くのです。

手の下に一番手近に這入つたものを選んで樂しむといふより外、選擇はしないのです。

私は實際の所、この様な事に就いては何にも知つては居ないのです。で人が話してくれたものですが、私は其人の云ふ事がわからなかつた程奇妙な調子で話してくれた人ですよ。それで私が考へました所の總ては斯ういふ事なんです、大部分の婦人に在つては其愛人は宛も召使ひの様なもので、役目を果さないと追出して新らしいのと取換るのです。若し今度男の方で他處にもつといゝ所を見付けるか、又自分の仕事がいやになるかすると、離れて行きます、さうすると女の方は新しい人を採用するのです。話に據りますと家の主人をまで瞰してみる氣の多い女が居るさうです、つまり主人だと云つても要するに男の一種だといふ意味でね。この浮氣は長續きはしません。いやになると追出し、別な人を求めます、又どうしても男が去らない、時は其儘にして置いて又外の男を引き入れるのです。

私はこの變な習慣を說明してくれた人に斯う申しました。「だがしかし、其婦人は暇をとり、又暇を出された男の人達とどんな風にしてつき合ふのですか」と。相手は答へました。「それは斯うです。一緒に少しもつき合ひませんよ。もう曾ひもしなければ見知り合ひもしません。若し又前い戀を再び結ぶ様な浮氣心が起つたら、新しく知り合ふのだといふ事になるのです。ですから前に關係があつた事を二度目三度目に關係をつけた時に思ひ出すなんて事は餘分あるのですよ」と。私はかぶりました。「わかりました。けれどどうもわからない所があります。私は、こんなにやさしい關係の後でどうして冷淡に再會したり、一度愛したものの名で心をときめかせず、どうして出會つて戰慄を感じないのでせうか、わかりません」と。——「馬鹿仰言い！」と相手は言葉を挾みました——「身を慄はせるとは滑稽ですね。貴君は婦人達がそれで卒倒すればいゝと仰言るのですね？」と。

明かにあまりゴテ〳〵塡つた畫面の一部を除いて、その餘地の處にジュリイさんを置いて下さい、そして、私の心を想ひ出して下さい。然らば私はもう何も申す事はありません。

けれど斯ういふ事は申さなくてはなりませんね。この不快な印象は見馴れるにつけて、遂に消えて了ふといふ事を。惡が善以前に現はれたとしても、善の發現が妨げられる事はありません。精神と性質の美しさは身體の美しさに匹敵します。最初の嫌惡を制して了ふとそれは反對な感情と今度はなります。見方が違ふのです。正當な見方はある物の不利な方面のみを以て批判してはいけないと命じます。

人々が其本來の性質を失ひ、社會に感化されて自己と違つたものにあるのは大都會に於ける第一の不都合な事です。巴里に於いては、これは全くほんとです。殊に女の人達にとつてさうです。女の人達の心配

してゐる所は他人からどう見られるかといふ事なのですから。或る會で一婦人に近づいて行くと、巴里女（パリジエンヌ）であらうと思つて居たのに、登計らんや、單にその流行の模倣者を見出す事があるのです。背の高さ、廣さ、行動、姿勢、喉、肌の色、風采、目眸、會話、樣子等が、本然の其婦人のものではないのです、皆模倣なんです。若し其婦人の自然な儘な姿を見たら、會の時の婦人と同じ人だとは到底見別けられますまい所でこの樣な變化は斯うする人達に稀にしか爲にならないのです、一般に、自然の儘の代りに人工的な事を施して不足の無い樣には、滅多に出來ませんよ。けれど、生地は決して皆置し了はせるもので無く、何處でか現はれるのです。觀察眼の具はつてゐるといふのも、つまり、この自然さを巧みに捕へる事に在るのです。これは佛國の婦人に對しゐる時はさして六ケ敷しい事はないのです、何となれば、佛國婦人達は自分達で思つてゐるより自然的な所が多いものですから、少しでも執拗く彼女達に交り、彼女達には氣に入つてゐる、いつまでも變らない見榮をとり去ると、其處に彼女達本然の姿を見得るのです。斯うすると彼女達から、初めに得た嫌惡の情は變じて、尊敬と親睦とに變るのです。

以上の事は、先週遊山の會で觀察し得た所のものです。其會へは數人の婦人が私達——私と其他新到來者數名——を氣に入るかどうかをも考へないで、招待して下さつたのでした。恐らく其會で私達の事を笑はふつもりで招待されたのかもしれません。こんな事は最初の日からあるのです。婦人達は初め私達に面白く、可笑しく振舞てもてなし、煙にまきました。けれど手答が無いので間も無く根負けして了つて、次には上機嫌に振舞ひました、けれど私達が皆彼女達に調子を合せないので、とう〳〵仕方がなくて私達の調子になつてしまひました。この變化を彼女達がよく氣が付いたかどうか知りませんが、私の方では大變よくその事を感付きました。驚いた事には私は多くの男の人達とよりも、この女の人達との方が色々理解出來た事が多かつたといふ事です。彼女達の才氣はあまりに本心を飾つてゐて、それを變形させるのを私が恐れた程でした。そして此國の婦人達をもつとよく批判して見ると、此の樣に親切な婦人達が單にそれを有つのを好まないといふだけの理由からして、理性に缺けてゐるのを見て慨きました。私は又友愛的な自然的な、愛情が知らず知らずの內に、町のハイカラな風を消してゐるといふ事も認めます。それを考へないから、口で言はれてゐることに相等した方法が取られるのです、そして又手管の眼顏の働きを道理にかなつた論にすることが出來ないのです。

私は彼女達が美しくならうと自ら求めなくなつて以來、前よりも彼女達は美しいと感ずる樣になりました。又私は人の氣を惹く爲には粉黛を凝らさない事が必要だと思ひました。私はこの點から推論して趣味の玉座だと云はれてゐる巴里は世界中、恐ちく一番趣味の少ない所だらうとまで疑ひます。何故かと申しますに、人の氣に入る爲に巴里でする手段は皆眞の美を毀損するものですから。

私達は斯うして四五日、互に滿足し合つて生活して居りました。巴里と其狂態を觀察しないで、私達はそれを忘れて居りました。私達の仕事の總ては、私達の間に愉快な樂しい集合を享有する事でした。私達

は、燥ぐ爲に諷刺や、冗談をいふ必要はありませんでした、又私達の笑ひは嘲笑でなくて陽氣さであつたのです、丁度貴女のお從姉樣の笑ひの樣に。

所がこゝに一つの他の事件が起つて私の意見を更に全く變へて了ひました。屢々私達の會話中に、家の主婦へ召使が耳打ちをする事があるのです。さうすると、主婦は室を出て、自室へ閉ぢ籠つて何か書き初めます。そして仲々元の所へ戻つて來ないのです。此の雲隱れは何か戀人との通信又はさういつたやうな種類のもののためであらう、と考へるのは容易な事です。他の婦人が其時には氣轉に言葉を挿みますけれど、受付けられません。斯ういふ事は私の次の樣な判斷をさせます。つまり主婦は戀人を持つて居なかつたにしろ、友達を持つて居たのだと。所で私の好奇心に惹かれて注意して居りましたが、この巴里のグリゾン人（西の一洲の住人―譯者）ともいふべき人達は不幸に會つて彼等の貴婦人に保護を求めに來た敎區の百姓達だといふ事を知つた時には全く驚きました。ある者は富者が脫稅してゐるので、人頭稅を過重にされ、ある者は年や子供の數にも關らず軍隊にとられてゐるのです。他の者は又不正な訴訟で負けて金持の隣人にさんざんな目に會はされ、ある者は隆雹の爲破產し酷く借金の催促に苦しめられてゐるのです。結果皆が何うかして貰ひたがつてゐるのです。皆の話は長々と聽かれます。別に恐られません。で主婦が戀の手紙を書いてゐるのだと思はれたこの時間は此等の不幸な人達の爲に色々書いてやる爲に費やされるのです。私がこれを聞いてどの樣に驚いたか、又如何に若い、浮氣の婦人がこの樣な親切な義務を欣んでやつてゐるかに

又彼女は斯の樣な仕事をしても、少しも衒氣が無いといふ事をどう云ふ風に貴女にお知らせしたら良いか言葉に苦しむ程です。私は全く感じて斯く申しました。「あゝ！　ジュリィさんだつて、斯うなさるけれど」と。この時以來、私はこの婦人を敬意を以つて眺める樣になりました。そして、彼女の總ての缺點が私の目に見えぬ樣になりました。

私の觀察が斯ういふ方面に向ひますと、初め堪え難い、いやな人達と思つた同一の婦人に多くの長所のあることを氣付きました。どの外國人も皆同樣に、流行といふ事を除くと以上の事に贊成します。實際婦人がこれ程明智で、しつかりとした話し方をし、正しい云ひ方をし、必要に應じて最良の敎訓を與へてくれる國は他には有りません。媚の言葉や、頓智を除いたら、西班牙の女や伊太利女や獨逸女の話から、私達は何を得ませう？　無です。それで貴女も御存知の通り私達瑞西の女も同樣です。けれど、婦人に對して取て少し親切にするのをやめて、佛國女をその立籠る媚や才智の砦から引き出して御覽なさい。實の所佛國の女は其處から出るのを好まないのですが、さう身を寄すべき地物のない平原に於てすらも、矢張り誰とでも話相手として、太刀打が出來るのです。又論議をするにしても、男を相手にしてゐる樣な氣がします。それ程佛國の女は理論で身を固め、德を必要とすることを知つてゐるのです。長所として、私は彼女達が其男の友達に仕へる熱心さを殊更に申しますまい。何故と申しますに其熱心さには、一種のどこの國にもある利己的な熱情が這入つてゐるのですから。けれど、如何に一般的に、彼女達が自分自身をのみ愛

するにしても、長い習慣が其習慣を體得しようと可成りの決心を持つて居れば——勢のある感情を彼等に與へるものです。十年間一つの事に執着出來る人達は、大概一生中其習慣を守れるものです。彼女達は古い男の友達を、新しい愛人達よりもやさしく、少くとも確實に愛するのです。

婦人の責任に歸すると思はれて、充分一般的に注目を受けてゐることは、此國では萬事が婦人によつて爲されたので、その結果、善よりも惡が多いといふ事なのです。けれど彼女達は、惡を男達に強ひられて爲し、善は自己の衝動ですると云つて彼女達を辯護する向きもあります。この事は前に「兩性間の交際の中に情といふものが毫も認められてゐない」と云つた事と矛盾して居ないのです何故つて云ひますに、佛國の女に媚びる習慣は婦人方に、自ら持するに優しい感情を必要としないといふ一般的な權力を與へて居るのです。皆總てが彼女達の自由氣儘になります。彼女達に據つて、その爲になされぬものは何も有りません。オリンプスとパルナース（兩者ともギリシヤ神話の山の名。オリムプスは諸神の在する場所、パルナスは詩神の王座のある—譯者註）光榮と富とは等しく彼女達の力の下にあるのです。書籍や著者は婦人達が共鳴してくれて、初めて價値と尊敬とを得るのです。彼女達は崇嚴に、一番愉快な智識と、一番高尚な智識と同じ樣に決定するのです。詩、文學、史學、哲學政治等すら左樣で、總ての本を見ると、女體からして、其本が美しい婦人達を欣ばせる爲に書かれたものである事がわかります。近頃聖書を洒落た物語に書き流したのがあります。色々の事業に在りましても彼女達は其要求を通す爲に、良人の上にまでも自然的優越權を持つて居ます。それは其の人達は彼女達の良人ですからでなくて、彼等は男ですから。又男はどの婦人に對しても何も拒む事が出來ないといふ事が明ですし、其妻に對しても同樣なのですから。

其上此權力は愛も尊敬も豫想せず、唯禮節と世の習慣とをのみ豫想してゐるのです。其れは、佛國の禮式には婦人に仕へる事も、又婦人を輕蔑する事も共に緊要な事である爲です。この輕蔑は男子の威嚴を保つ一つの名稱で、又婦人を理解する爲には可成り經驗して來た事を表はす事にもなるのです。誰でも婦人を尊敬したら、其人は婦人方から見て、新參者で、浪人者で女を小說の中でしか知らない男と見做されるのです。彼女達は頗る公正に斯う考へます。卽ち、婦人達を尊ぶ人は、到底婦人の氣に入る樣にはなれつこないと。ですから、幸福になる最初の資格は、尊嚴に無作法である事なんです。

とまれ、彼女達は自ら性が惡いと云つてゐますが、それにも關らず彼女達は善良な人です。次に述べる事は殊に彼女達の心の良さが有益になつた事を示すものです。どの國でも、澤山な仕事で暇の無い樣な人達は常に嫌なもので、又同情に乏しいものです。所で巴里は歐洲一の大國民の事業の中心地です。ですから其事業をしてゐる人は人間中一番酷い人達なのです。この爲に優しさを持つてゐて欲しいと思ふのは、婦人達だといふ事になるのです。彼女達は不幸な人々の救濟人となり、彼等の訴へに耳を藉してやり、よく聽いてやり慰め、世話をしてやるのです。彼女達の送る浮々した生活の裡に在つて、悅んで數刻を裂い

し、天稟の善い性質の發現の爲に與へてゐるのです。若し、その或る女の人達が世話をしてやつて、德義

上恥かしい事をしましたらば、他の多くの婦人達は無償で金を費して貧乏人を毎日救ひ、其信用で被壓制者を救濟します。勿論彼女等のする事は屢々不謹愼なものでせう。又彼女等の氣付いた不幸者を救け樣として彼女等の知らない不幸な人を、かまわず苦しめ損つてゐる事でせう。けれど、この樣な大國で總ての人を惡く知り盡す事が出來ませうか？　又其上善をするといふより惡を爲ないといふのが最高の努力である樣な眞個の德から離れた魂の好意に何が出來ませうか？　それに又彼女等は善に赴く傾向を持つて居り、善を多く爲し、善を快く爲し、又巴里に辛じて殘つてゐる人道を彼女達のみが保つて居るといふ事は確實な事なのです。彼女達が居なければ、狼の樣に喰ひ合ふ、飢ゑた餓鬼の樣な人々のみが殘るでせう。

以上の事は、若し私が小說や喜劇の實行者を描く所だけに止めて居たら、私の少しも知らなかつた事でせう。この人達は婦人達の中に自分達の持つてゐる笑ふ可き點のみを見付けて、持つて居ない惡い點は見つけないのです、又婦人達が根據の無いものと信じて行はなかつた所の德の傑作のみを吹張して、彼女達を善に導き、又彼女の實際に爲した善を少しも褒めないのであります。恐らくも小說といふものは墮落した人民にとつて、もう救ふ術が無い場合に與へられる最後の敎訓です。ですから、從つて、この種の本を作るのは、心正しい、そして感じ易い、そして其人の心が其作中に發揮される樣な人々にのみ許さるものと思ひます。人間らしい弱點を具へ、德を突然と人の手の及ばない樣な空に揭ける樣な事をせず、德を初めに左程崇敬に描かずに人々に親しめる樣にし、惡德の中に在つて知らず知らずの內に人々を善德に導く樣な人々にこそ、小說製作は托す可きです。

前にも申上げた通り、此國の婦人に對して共通な意見といふものは何も持つて居りません。兎に角衆人の齊しく認める所は、佛國婦人は素的に魅惑的です。人を誘ふ樣な美しさ、纖細な媚、媚の中の節儉、他人を非常に悅ばせる手腕を佛國の女の中に認めると衆人は申します。私としては、私は彼女達に近づくと少し胸が惡くなり、嫌氣を起こさせる樣な媚、貞節の無い擧動を見ます。彼女達が何か申し出したら、きつと私の心は閉ぢられて了ふだらうと思ひます。彼女達は戀を人に感じさせ、又自ら感ずる事が出來るを自ら人にさう見せびらかしつゝ戀愛談をする樣な人達ではないと云ふ事を堅く信じて疑ひません。

他の方面で、佛國婦人中の有名な婦人は、自分達の性質を輕蔑するのです。彼女は、佛國女を、氣儘なすれつからしの、技巧的な、無反省な、浮々した、饒言で、何も考へず、感ずる事は尙少く、自分達の價値を冗談の間に浪費してゐる人達の樣に描いてゐます。これ等のものは皆私に、彼女達の外から見た存在は彼女達の繻袴（譯者註—十八世紀流行）や彼女達の紅の樣な外面的なものである事を示すのであります。巴里でしなけりやならないのは滿鑑飾に身を飾るといふ惡い習慣です、これは實際、婦人達の內的の、才、理智、人性良自然性を讀ひ匿して了ふものなのです。佛國の婦人は、私達の國の女よりも又恐らく世界のどの國の女よりも、愼み深い、人に骨折をかけない人達です。彼女達はより堅實に敎養されて居り、其敎育は彼女達の判斷に資する所があります。一言で申せば、彼女達の女としての特質が——彼女達が變化した

特質が如何に、私の氣に障りましても、私は私達が尊ばねばならない美的な點を考へて、彼女達を尊敬します。私は彼女達は親切な女としてよりも價値ある男の人となる可きだとつくづく思ひます。

結論ですよ。若しジユリイさんが居らつしやらなかつたとしても、又若し私の心が私の生まれついて持つてゐる愛情以外のものをうける事が出來たと致しましても、私は決して巴里の女とは結婚しませんよ。けれど私は快よく話し相手の友達とは致しますよ。でこの寶(友)は恐らく他の二つの寶(妻、戀人)を得ない時でも私を慰めてくれるでせう。

書簡第廿二　ジユリイへ

貴女のお手紙を頂いてから、私は、シルヴエストルさんの所へ毎日の樣に小包がつきましたかどうかつて質ねにゆきました。小包はどうしても來なかつたのです。私は苦しい焦慮にせかれて七度もあの人の所へ無駄に行つたりかへつたりして了ひました。到々八度目に漸く私は小包を受けとつたのです。掌の中に小包を入れると、私は運賃も拂はず、又さうする必要のある事も勿論考へず、物一つ云はず直ちに、私は馬鹿の樣になつてあの方の家から出て來ました。家へかへりつく間もまたれない氣がしましたので、私は夢中になつて道を探りました、そして半時間位たつて私の家のあるトウルノンへ行く道を探して見るとわからず、初めて自分は巴里のトウルノンとは反對の町外れのマレーに居るのがわかりました。私は早く家へ歸らうとして、馬車を傭はねばなりませんでした。こんな事が朝から起つた事は初めてであります。何故つて私は素的に丈夫な脚を持つてゐるのです、けれども少し私の財産に餘裕があつたら、この脚を使はなくてよいのにと、考へると癪に觸ります。

小包を持つたまゝ私は馬車の中で、どうも全く困つて了ひました。貴女の御命令ですから、私は家へ歸つてそれから開け度いと思ひました。其上平凡な物の中に在る安樂を私に忘れさせた一種の慾望は、私をして其安樂を眞個の喜びの中に求めさせました。私は平凡な事には何にも慰安を感じません。で私は貴女から私に來る總てのものを味ふ時間と、喜びとを持たうと思ひました。功利心を抱いて、此の小包を持つて居りました。そして私は包み紙の上から、撫でてみて何が這入つてゐるか知らうと努めました。私の手が忙し氣に動いてゐる所を人が見ましたら「小包が私の手を燒く」とでも申すでせう。私は小包の大きさや、重さ、貴女のお手紙の調子に疑問を抱くのではありませんが、私はどうして貴女が此の小包をお作らせになり、又お作らせになつた機會をおみつけになつたかと云ふ事に疑問を起したのです。以上の事はまだ今でも、わからない事なのです。戀の奇蹟なのです。戀は私の理性を超越する程のものであるに從ひ一層私の心を魅します。それなのです。

私は遂に家へ着きました。飛ぶ樣にして、私は室にとぢこもりました。ハアハア云ひながら腰を下して

私は慄える手を封印の所へやりました。あゝ護符の第一の力の發現です！　紙を一枚づゝはがして行く毎に、私の心は躍りました。で私は胸が迫つて、最後の一枚をはぐ時に息を一寸の間して、休まなければならない程でした。……ジュリイさん！……オ！　私のジュリイさん！……包紙は裂かれました……私は貴女を見たんです……私は貴女の美しいお姿を見たんですよ。私の唇は接吻し、私の心は抱き、尊敬を第一に現はしました。私は膝を折りました……美しさ美しさ又、もう一度貴女は私の目をお赦しになるのでせう。このなつかしいお姿の魔術の様な力の早い事、力の強い事！　貴女の仰言る様に十五分もかゝりませんん、其力を感ずるのには。一秒、一瞬間で充分です。私の胸から群がる熱い溜息を引き出し、貴女のお姿と共に私の過ぎ去つた幸福の姿を思ひ出すには。何故その様に尊い寶を持つ欣びが、この様に酷い悲しみに混ぜられなければならないのでせうか？　私はどんなに烈しく、今は既に無い過去の時間を思ひ出した事でせう！　過去を見れば貴女をもう一度見る事が出來ると思はれるのです。今でこそ其思ひ出が私の生活の不幸となつて居り、又神様が私に與へられ、又怒つて奪つて了はれた、過去のなつかしい時に又ひたり得る様な氣がするのです。あ！　けれど、直ぐに私は夢からさめるのです。貴女にお會ひ出來ない苦痛が、又しても起り、私から一時其苦しみを除いてくれた誤謬を取り去つて、其苦痛は鋭く、いら〳〵して來るのです。私は苦しみを更に更に感ずる様に益々苦しめられる所の不幸の人達の様です。あ！　私の飢ゑた眼は、この思ひもかけなかつた物の中に、何といふ迸ばしる流の様な情熱を汲んだでせう！　あ！

この物は貴女が私のすぐ前にいらつしやる時の心に起される様な總ての烈しい感動を私の心に甦らせたのです。あゝジュリイさん！　貴女の官能に私の感ずる狂熱と幻影とを移して感じさせてあげられることが本當に出來るものなら……けれど何故それは出來ないのでせう？　何故魂がこの様に活々とひたらした印象が、魂と同じ位離れた所へ行かないのでせうか？　何故魂がこの様に活々とひたらした印象手紙を書いてゐる間に貴女が何を爲ていらつしても、私が此總てを受ける時には、貴女は、貴女のやさしいお顔が愛の涙、悲しみの涙で濡れるのをお感じになる筈です。貴女は、貴女のお目、頰、お口、胸が私の熱い接吻で壓され、締めつけられ、堪へられなくおなりなのをお感じになりませんか？　貴女は貴女の身體總てが私の燃える様な唇の熱氣に包かれて居らつしやる様にお感じになりませんか？……あゝ……！何か音がします、誰かゞ來ます……私の寶を抱きしめ、匿しませう。……今來るなんて何と無躾けな人でせう！……このやさしい歡びを烈しに來る酷い人に禍あれ！……そんな人は戀が出來ない様に……さうでなければ其愛するものから遠くに生活する様に！

書簡第廿三　ジュリイの愛人からドルブ夫人へ

なつかしいお從姉様よ、私は貴女にオペラ座に就いて申上げ度いと思ひます。何故と申しますに、如何に貴女が貴女のお手紙では其事については少しもお話しにならず、又ジュリイさんも貴女に默つていらつ

しても、私は何處から彼女にこの好奇心が出て來るのかわかります。オペラ座へは私が慰むために一度行きまして、貴女方の爲にあれから二度も行きました。お望みなら、もう一度行つて、欠伸をしに、嘆息つきに、へたばりにでもまゐりますよ。けれどあそこで、緊張して、注意してゐる事は私には到底出來ません。

此の有名な芝居に就いて申上げるに先立つて、先づ私は、巴里では人はこのオペラに就いてどういふ意見だかを貴女に申上げ度いと思ひます。若し私が誤つて居りましたら、玄人の判斷が私の正しい判斷を導き出すでせう。

巴里のオペラは巴里では人類の藝術が發見したものゝ内で一番立派な、又一番逸樂的な、一番嘆賞す可き芝居であると考へられてゐるのです。人の云ふ所によれば、オペラ座はルイ第十四世の華奢の記念物中一番壯大なものなんださうです。この重大な問題については、自個の意見を吐く事は、貴女の思つていらつしやる程、自由ではありません。巴里では兎に角、音樂と、オペラ座を除いての外の事は何だつて議論の種になるのですが、只此事にだけは空恍けてゐないと、危險なことがあります。佛國の音樂は其吟味が大變嚴しいので保つてゐるのです。で形式的な訓練としまして、佛國へ來る外國人に敎へる事は、此オペラに絶對的な美を認めさせる事なのです。實際の所は一番愼み深い人達は默つて、自分達の間だけで、そつと笑ふのですが。

けれど兎に角金を大變にかけて曾に自然の珍らしさをやるのみでなく、又前人未發の他の立派な事を演る事は認めてやらなくてはなりません。ボーブがこの奇妙な芝居に冠するに、「神々、小鬼、惡魔、王、牧人、妖婆、怒り、歡び、熄、樂踊り（譯者註―英國水夫の間に行はるゝものである）戰ひ、舞踏會等こんなものが混然としてゐる芝居」といふ名を以つてしようと望んだのも尤もです。

此の立派な莊嚴としたアサンブラージュ集合は宛も其れが演出してゐる總ての物を現實に含んでゐると考へてゐるのです。寺院の光景が現れて來ると皆が聖い敬意に打たれるのです。所で少しでも出て來る女神が美しいと、忽ち土間の客は全體異敎徒となつて了ひます。（譯者註―蓋し異敎徒のみ女神の存在を許すからである。皮肉な意味であらう）コメディ、フランセーズ（佛國喜劇場）に於ける程此處では面倒ではありません。喜劇役者をして、その人物に扮裝せしめることの出來ない是等の觀客は又、オペラ座とその役者とを分離することは出來ないのです。人々は正しい幻に對しては容易に心をゆるめずに居り、其幻が不合理であり、賤しいものであると、心を許す樣に見えます。恐らく、彼等は英雄よりも神々の事を容易に考へられるのです。ジュピターは私達とはまるで違つたものなですよ、人々は好きな樣にそれに就いて考へます。カトン（カトー）は人であります、けれど一體カトンか、世に居たか居ないか、正しく云へる權利のある人は何人位るるでせうかね？

巴里のオペラ座は他處の樣に公衆に芝居をやつてみせて金を取る人達の團體はありません。尤もその座員の或者に公衆が金を拂ひ、其人達が演技してゐることは相違ありません。けれど、王立音樂院、卽ち、

告訴を待たずに自らの權利で裁判し、又正義と忠實との外には毫も誇る所の無い最高法廷に坐つては、總て斯ふいふものゝ性質が違つて參ります。其處で、お徘姉樣、何れだけ或る國では言葉に物の眞理が含まれ、又正直の名が一番正直でない物までをも敬はせるに充分であるといふ事がおわかりでせう。

この高尙な音樂院の人員は位を落される事は無いのですが、破門されるのです。これは他の國とまるで反對でせう。けれど恐らく、どつちを選ぶかと云ひますに、彼等は平民となつて祝福されるより、貴族のまゝで地獄行きとなる方を望んでゐます。私は芝居で「近代的な騎士」(一)——昔あの憐れなラベリウスが(二)徐儀なく芝居をやり、自分の作つた臺詞しか暗誦しないに關らず、自分の役者といふ職業を深く恥ぢて居たのと、深さに於いては同じ位その職業を得意がつてゐる近代騎士——を見た事があります。舊いラベリウスは、だから羅馬の騎士達と混つて、演伎することが出來なかつたのに、今のラベリウスは常に國中の最高の貴族樣方と混つてコメディ、フランセーズの舞臺に立つのです。全く羅馬では、今日巴里でオペラ座の威嚴が語られる程の敬意を以て羅民族の威嚴について語られた事が聞きませぬ。

以上の事はこの立派な芝居に關する他人の意見を集めたのです。今度私の見た事をお話ししなくてはなりません。

幅十五尺、奥行のそれに比例した一つの臺を心に描いて下さい。この臺が芝居する所なんですよ。兩側に間をあけて道具立が幾つか置いてあるのですよ。其上には、その場面の演出する光景に這入る物品が粗末に置いてあるのです。奥の方も同じ樣に描かれた幕です。それが大低常に裂けてゐたり、穴があいて居たりします。見方によつては地面に深淵があつたり、空に穴が明いて居る樣に見えます。舞臺の後を人が通る毎に、其さけてある幕に觸れるものですから、搖れて、見てゐると仲々面白い地震を現出しよすよ、空は靑い襤褸布を丁度洗濯やの干物綱の樣に棒や綱に引きかけたもので表はされてゐるのです。太陽は(何故つて、屋太陽を出す時があるのです)提灯の中で炬火を灯したものです。神々や女神達の馬車は鍬綱の樣な形をして太い綱でぶら下けられた絹紐形の四本の梁木から出來てゐるのです。此の梁木の間に板が横にのせてあつて、其上に神樣がお座りになる理なんです。そして其前に汚ない布がブラリと下つてゐて、この立派な馬車に對して雲の代りをするのです。此仕組みの下の方に二三本の匂ひのする、心のよく切つてない蠟燭が燻いて居て、例の軟糞をブラブラやりつゝ、登場人物が、詞を云つたり叱したりしてゐる間に、完全に煙で蒸して了ふのです、つまり神樣にふさわしいお香なんですね！

此馬車はオペラ座の最も重大な機械の主なものなのですから、他の物は推して知る可しでせう！ 荒れた海は、長い角のある靑い紙か布かで出來た提灯を平行な串に刺して、子僧つ兒にぐるぐる廻轉させて作るのです。雷は窖の上を重い車を引き廻して音を出すので、雷も仲々この面白い音樂の中では可成り人を感動させるものなんですよ。稻妻は炬火の中に、樹脂を少し、宛投げ入れて作るのですし、落雷は狼火の先に爆藥をつけてさへるのです。

舞臺には小さな四角な陷穽があつて必要に應じて開くのです、つまり其處から惡魔が出て來なのです。若し惡魔が空中へ昇る必要がある時には、巧みに少さい褐色の布製の惡魔か、又は屢々實物の煙突掃除人を替玉にして綱で空中にブラ下げて、昇せて行つて、先に申した例のボロ布（雲）の中に悠々として匿れ了はせるのです。けれど實際惡劇なのは、其綱がうまくゆかない時とか、中途で切れたり等した時です。切れたりしやうもんなら、地獄の惡靈や、不死の神が墜落して、氣絶したり、又屢々死んだりして了ひますからね。其上これ等に總ての場面をより、衰れつぽくする、龍とか蜥蜴とか龜とか、鰐とか、大蟇等が舞臺を脅やかしつゝ、空中を運行するのも附け加へませう。でこれ等のものはオペラで「聖アントワンヌの誘惑」を現出してくれるのです。これ等の物は皆、獸の眞似も出來ない愚鈍なサヴォイ人によつて、動かされるのです。

私はこれだけの事を土間から眼鏡を通して見たのですが、貴女もこれで大體オペラ座の壯嚴な仕組みがおわかりでせう？　これ等の方法が秘密に行はれ、崇な結果を與へるとお考へになつてはいけませんよ。

私はこれについては、私自身が見た事しか、申さないのです、つまり、私の樣に、熱中せずして見てゐる觀客の、齊しく認める所をまうしあげるのですよ。然しこんないろ〳〵なものを動かすには實に非常に多數な機械を用ゐるのださうです。屢々、私にそれの實際を見せようといつてくれる人がありますが、人が汗みどろになつて、こんなつまらぬものを、どうやつて動かすのか知らうと思ふほど、好奇心は旺では

ありません。

オペラ座で使はれてゐる人の數は實に大變なものです。管絃樂隊と、合唱隊と併せて約百人位居ます。澤山な踊り手が居ます。大低總ての役は二重か三重です。つまり、主な役者に代らうと用意してゐる二、三の下役者が必らず居るものです。彼等は何もしないで滿足して金を貰うてゐるのです、こんな事は屢々多く有る事です。一度上演すると重要人物の一流の役者は再び舞臺に立たず、其役を下役に讓るのです、すると、それが又其下役に讓るのです。同じ金額は入場料として受けとるのですけれど、同じ芝居は決して同一人がしないのです。觀客も、丁度富籤の時の樣にどんな利得をするか知らずに切符を引くのです。それでどうあつても、誰も不平は云へないのです、何故つて、御存知の通り此の音樂院の高尙な會員は、民衆に對して、何の敬意をも拂ふ必要なく、却つて民衆が彼等に斯うす可きなのであるのです。

貴女の御存知の佛國音樂に就ては申しますまい。けれど貴女は、上演中の恐ろしい叫び聲や、劇場に鳴り渡る長い唸り聲については少しもお考へになれないでせう！　痙攣してゐる樣な女優達は、彼女達の肺臟から嗄がれ聲を絞り出すのです、拳を握つて胸にあて頭を後方へ倒し、燃えた樣な顏をし、血管は膨れ上り、胃のあたりをピク〳〵動かして。見て居るのと、聽いてゐるのとどつちが不愉快だかわかりませんが、彼女達の努力は、其歌で聞き手を惱ますと同じく、觀手をも惱します。それで尙更にいやな事はワーワー云つて騷ぐのが觀客の喝采の唯一つのものなのです。彼等が手を叩いてゐるのを見ると、まるで聾者が時

々鋭い音を聞いて、素的に悦んでゐる様にとれます。で其聴者達は益々後者に其鋭い音を出させんとしてゐる様です。私としては、オペラ座の女優の叫びを人が喝采するのは、丁度市の日に道化師の力術をしてゐるのに對してと、同じ事だと思はざるを得ません。受ける感じは實際辛らくて、不快なんですよ、叫び聲のしてゐる間は人は苦しむのですからね。無事に終るとホッと一息ついて、敢て歡びも現はす位です。一寸考へて下さいこの唱ひ方がキノールがかつて一番上品な一番優美なものだと云つたものと表現する爲に用ひられてゐるといふ事を。ミューズ、でも、美の神でも、愛の神でも、并ナスですら「こんな種類の繊細さ」で現はされるといふ事を考へてみて下さい！　其結果を判斷してごらんなさい。とてもひどいものですよ。惡魔にとつてはまだ良いでせう、何故かと云ふに佛國音樂は惡魔に似合しい、何かしら地獄めいた趣を持つて居るのですよ。ですから、魔術とか、惡鬼術とか、惡魔の集會などと云ふものが常に佛國オペラで一番喝賞されるものなのです。

この美しい音色、又やさしいと共に正鵠な肉聲の色にしつくりと管絃樂の音が合ふのです。主旋律の缺け、果てしもない樂器のどんちやん騒ぎ、低音部の長く、絶えまない囂々しさ——これは私が生まれて初めて聞いた氣味悪い物であり、一番堪えられないもので、半時間も聽いてゐると烈しい頭痛がして來るのです。——を考へてみて下さい。以上のものが皆、日常、歌も拍子も無い一種の朗讀を構成するのです。けれど時々節が輕快になつて、行く事があります、がさうなると皆が足踏みをし始めるのです。土間の人達が管絃樂の一人の男の身振りにつれて大苦しみをして、ドタバタ始あるのです。稀に聞くこの調子を一寸感じてすつかり宇頂天になつて、耳を立て、聲を氣取らせ、手足を顫るはせ、全體に大苦しみをしていつもの様に彼等には捕促し難い調子の後を趁はうとします。獨逸人や伊太利人は其様な調子は心の底から嗤んでゐますから、よく感じ、別に努力もせずに其調子に從つて、決してそれを破壞する様な事はしないものですが。レジアニーノは私に屢々斯う申しました——少くとも伊太利のオペラでは、調子は素的に感じ易く烈しいものであるけれど、管絃樂隊の中でも、觀客の中でも決して立上つて騒いだりする様な事はないのです。けれど實際何にから何までも佛國では、音樂機械の固陋さを證明してゐます。音色から固く柔味無く、抑揚もぎこち無く、強く、壓し出した様な長々とひゞく音色、拍子の無い事、民謠にも少しも面白い調子の無い事等。軍樂器、此の兵隊のファイフ（木で造つた一種の笛）騎兵隊の喇叭、角笛、オーボー（竪笛で歌口に葦のついたもの）街路の歌手、掛茶屋のヴァイオリン、こんなものは皆最も織巧を缺く耳ですらもぞつとさせるものです。總ての才能といふものは同じ人許りに與へられないものです。で一般的に云つて佛國人は歐洲の諸國民中一番音樂的でない國民です。エドワード卿は英國人も左様だと仰言いました。けれど其間に自ら差異があります。といふのは、佛國人が多くの正理を否定して、自分達が一流の音樂家でないといふ事を認めるよりも、寧ろ他のものに罪を被せるところを、英國人は自分達が音樂に不向きなのを知つてゐるつゝ、それに氣を懸けないのです。人々の中には悦んで巴里の音樂を國家の事業と見る人が

るます、それは恐らくテイモテーの立琴の絃を二本剪つたといふスパルタでの政治上の事件があつたから斯う云ふのでせう。この事については論外の事だとお思ひだと信じます。ですが兎に角、巴里のオペラ座は趣味の人には不向きであるにしても、非常に立派な政治上の組織であります。が、本筋に還つて、描寫を續けませう。

これから申上げる、バレエ（舞踊）は此オペラの内で、一番立派なもので、獨立して鑑賞され、實際快い、立派な、芝居らしい光景を見せてくれるのです。バレエは其編成は音曲から出來てるるのです、でこの點でバレエを鑑賞しなくてはならないのです。貴女はキノールのオペラを御存知でせう、貴女は彼の作ではどんな風に幕間の餘興が用るられてるるか知つていらつしやるでせう。キノール以後の人達に在つては皆同等に或はより劣つてるるのです。各幕で、仕草は坐つた役者達が宴會を開いてるる所で、大低は終るので、土間の客は皆は立つて視るのです。又劇の役目といふものが全然忘れられて了ふ事がありまず。又自分の役目を忘れ、外の物を見て居る役者達を看客が見てるるのです。このお祭りさわぎの場をやるのは至極簡單です、皇子が悦ばし氣にしてるれば、皆が其悦びを別ち合つて、舞踏をします、若し皇子が悲しがつて居ると、人は氣を引き立てようとして、やはり舞踏をし始めるのです。

王樣の機嫌が悪い時に舞踏會をやるのが朝廷の習慣かどうか私は存じません。私がこの事について知り得る物は、ガヴオツト（古風な曲）ダンスを見、小歌を聽いたりしてるる王樣の變らないストイック風な心の堅さをあまり賞められないといふ事です。そして王樣が斯うやつてるる間に、劇場の裏では王位の事や王樣の生命の事等に就いて思ひ掛けぬ事が決められる事が屢々あります。けれど舞踏の目的は他にあるのです。生命のあるもの、最も重大な行動が跳りつゝなされるのです。坊主が踊ります、兵士が踊ります神樣が、惡魔が踊ります。墓場へ葬られるまで踊りまず。皆が總て踊るのです。

舞踏は叙情劇中の制度から云つて技巧上から云つて、第四番目のものです。けれど、他の三つが互ひに模倣に力を借りてるるのですが、さて何の舞踏は何の模倣でせうか？　何にも無いのです。舞踏として用ひられるより外仕方が無いのです。何故つて、ミニュエット（十七八世紀頃流行の上品なダンス）リゴドン踊りや、シアコンヌ踊りが悲劇に何の效果がありませう。もつと申しませう。若し舞踊が何かの模倣であるとしても、やつぱり、不穩當なものです。何故と云ひますに、統一といふ點から見て、言葉の統一といふもの程缺くへからぬものは無いのです。ですから、オペラで所作が、歌が半分、舞踊が半分と行はれるのは、佛語と伊太利語とを混ぜて使ふオペラよりも滑稽なのです。

叙情劇の主要部として舞踊をとり入れるのは不滿でありながら、彼等は屢々舞踊を主要なものとしなければならないのです。そして彼等のオペラは舞踊（バレエ）の名で呼まれることがありますが、その名稱は、舞踏（ダンス）が、そこでは他の處よりも不適當であると同じ程度で、その内容に多くそぐはぬものであります。このバレエの大部分は、幕の數と同數の主題で出來てるるのです。そして其主題は、自らある形而上學的な關係で結

ひつけられてゐて、それについては、作者が序樂の中でそれを告けてゐなければ、觀客は少しも知らないのです。季節、年、感覺、要素、私はこれ等のものが舞踊とどういふ關係を持つてゐるか、又これ等のものが想像に資する所はどんなものかといふ事を考へてみました。ある物は全く寓話的ですね、謝肉祭（カルニヴァル）の宴の樣な又其時出て來るフォリイ（快活を表象する人物―譯者）の樣な。でそれは實際何よりも堪え難いものです、何故つて、それは才氣のある所や纖細な所があつても、何の感情も何の情操も、何の位も、何の熱も、何の興味も音樂に効果あらしめ、幻想を養ひ造る何物も持つてゐる無いのです。この自稱バレエに在つては、所作はいつも歌に伴つて行はれ、舞踏が常に所作を中斷するか、時々現はれて、他のものとは少しも調和せずに居るのです。で、結局はバレエは悲劇よりもつまらぬものになり、この中斷される事が少しも氣付かれぬ樣になるのです。若し此上に劇しいものだつたら、猶更人は胸を惡くするでせう。けれど或る缺點は他の缺點を補ひます。作者の技功――舞踏がつまらぬものにならぬ樣にとする作者の技功は――其劇をして退屈させる樣なものにします。

斯う申して來ますと、自然に叙情詩劇の眞個の組織は如何といふ事になります、ですがこの問題は此手紙に書く可く餘りに廣大な問題ですし、私の云はんとする所から大分離れます。ですから私はこゝに一寸した論文を書きましたから、此手紙に副えて置きます。貴女はレジアニーノと一緒にそれについて御話し下さい。私が佛國のオペラに就いて申さなくてはならぬ事は、佛國オペラの一大缺點は壯大と偉りの趣味なのです、この趣味のある爲、人は何でも珍奇なものを上演します。想像でしかわからぬ事でありながら滑稽にも芝居に上演し、叙事詩の中に取り入れるのです。私自身で見なかつたら、太陽神の戰車（太陽神アポロは馬車に乘る）を眞似しようと望む愚かな藝術家や、この眞似を見に行く子供〳〵した觀客が居るなんて到底信じられなかつたでせう。ラ、ブリュイエール（譯註者―佛國十七世紀來の道德學者）は何故この巴里の立派なオペラ座が金をかけて見に來る彼を退屈にするが理解出來なかつたのです。私は、ラ、ブリュイエールみたいな人でない私は、何故だかよくわかります。私は斯ういふ事を主張します、卽ち藝術の趣味を失はない人にとつては、佛國音樂、舞踏、それから例の珍らしいものは雖然と一つとなつて、巴里のオペラを世界中一番つまらない見世物とすると。結局、佛國人にとりましては、より完全な芝居は、――少くともそれを上演する上についてー――不必要なのでせう。彼等は完美を認識出來ないのじやないのですけれど、オペラに在りましては、惡の方が善よりも彼等を欣ばせるのです。彼等は喝采するよりも、ワーワー云つて騷ぐ方が好きなのです、批評する悅びは芝居のつまらなさと帳消しにするのです。其場に在つて面白ろがるより、其場に居ないで惡口をするのが彼等には愉快なのです。

註　（一）近代の騎士（Chevalir modern）はドゥ・シャーセーの事、有名な昔の低い人である。ルーソーはドゥシアーセについて常に惡口を云つてはゐない。夫は彼の作つた音樂辭典（dictionnaire de musique）の俳優（acteur）といふ章で、ドゥ・シアーセの事を賞めてゐるのであるからである。（編者註）

(二)羅馬騎士で暴君の命で無理に舞臺に立たせられたのである。彼はその場で詩を作り自己を慨いたので民衆の同情を買つて帝に對する反抗の聲を高めた。

書簡第廿四　ジユリイから

ええ、わかります幸福な妾はいつも、貴君に愛して頂けるのですわねえ！　前に貴君のお目に觸いて居りましたと同じ焰が貴君の此の前のお手紙の中で感ぜられましたわ。其處には妾を力強くしてくれる總ての力を認めました。私の力も又起りましたわ。え、どんなにしたつて妾達を隔てる事は出來ませんわ！心を壓し當てませう！　この心の交通のお蔭で自然の熱を出して逢えない事や、望みの無い事の冷氣に對抗しませう。其熱を大切にしませう！　妾達の愛に隙を作らうとする物總てだつて、妾達の愛を益々接近させる許りですわ。

けれど妾の心の單純さを褒めて下さいまし。このお手紙を頂いてから、私は其手紙の語る何か不思議な力を感じましたの。妾の作つた護符にしろ、あの護符の冗談は妾をも誘惑し、そして妾に眞理の樣に見えてまゐりましたの。一日に幾度も幾度も、妾獨りで居る時に、丁度貴君が妾の傍にいらつしやる樣な氣がして、體が顫えますの。妾は貴君が妾の肖像を持つていらつしやるのを想像します。そして妾は、貴君が肖像になさる愛撫の感じを感ずる樣な氣が致します、又貴君が肖像になさる接吻をも感じます程なのです。私は氣狂ひの樣になつて了ひます。妾の脣は貴君に接吻されてゐる樣な氣がしますが、妾のやさしい心はそれを味つてゐる氣がしますわ。あゝなつかしい幻！　限の無い事！　不幸な人々の最後の手段！あゝ出來るなら、ほんとに接吻もしませうに！　幸福に見離された人達としては貴君はまだ何かお持ちになつていらつしやいます。

此の肖像をどうやつて拵へたか申上げませうか、これが戀の務めといふものでございます。けれど、若し戀が奇蹟をしますれば、肖像なんか撰びやしませんと云ふ事を御信じ下さい。これから謎の解決を申しませう。暫く前に此地へ伊太利から來た肖像畫家がまゐりましたの。其の人はエドワード卿の御手紙を持つて居りました。エドワード卿は其お手紙をお渡しになつて、斯うする事をお云ひつけになつたのでせうドルブさんはこの機會を利用して、從姉の肖像を作らせようとなさいましたの。妾も一つ作らうと思ひました。クルールさんと妾の母は妻の肖像を欲しがつて居らつしたのでした。ですから、繪工に妾が賴んでひそかに別な寫しをして貰つたのですの。で妾は其二枚の中一番似てゐるのを（原畫か、其模寫が其樣な事は考へず）選んで貴君にお送りしたのです。又はベテンでムいますが、妾はそれを少しも不安に感じません。何故つて少し位似て居なくつたつて、母や、從姉にはかまひませんけれど、妾の顏とは違ふ顏に貴君が讃美をして下さるのは一種の不實なのですもの、殊に其繪が妾より美しく出來たら更に危險ですわ。ですから、どうあつても、妾の持て居ない美しさに、貴君が趣味をお持ちになつてはいけません。其上、肖像の中であまりキチンと衣服を着て居ないのは妾の考へを用ひてくださいますな。

れないのです。父だつて、肖像といふものはありの儘を書く可きだと仰言つてゐるんですもの。少くとも帽子を除いたあとの物は、皆妾が其時身に着けて居たのではありませんの。給工は可成り自由に見たのですよ、自分の想像の作物で妾を飾つて了つたのですわ。

書簡第廿五　ジユリイへ

又貴女の肖像の話をしなけりやなりません。けれど今度は最初の、貴女までお感じになつたその歓びについてはで無いんです、反對に仇な希望に力盡きた、失つたものをどうしても取戻す事の出來ない男の後悔なのです。貴女の肖像は、貴女そつくりの優しさ、美しさを持つてゐます、可成り似てゐます、巧みな人に描かれたのですね。けれどこの給で滿足するには、貴女を直接に見ては、なりません！

私が肖像に對して爲た最初の非難は、貴女に似て居つて貴女で無く、貴女の顏そつくりで、感情の無い人だといふ事なのです。給工は貴女のお目や貴女のお顏の樣子をどうしたつて描けるもので無いのです。貴女のお顏を生氣付けてゐるこのやさしい感情は少しも出てゐないのです。この感じがなければ、いくら奇麗だつて、貴女の美しさでは無いのです。貴女のお心の中に、貴女のお顏の「化粧」はあるのです。肖像とは似てもつきません！　白狀すれば、これは藝術の不足なのでせう。けれど少くとも、それは給工が自分に關係する事物に對して不精確であつたといふ誤りなのです。例へば彼は毛髮の根をあまり、蜷谷から遠く隔して描きました。これは額に、見て悅の少いやさし味の少ない輪廓を與へるものです。又彼は其處に皮下の小脈の爲に見える紫の分脈を落してゐるのです、分脈と云へば丁度、前にクラランの園で或日私達が眺めた菖蒲に於ける樣なのです。頰の色がある樣に、其頰の色が下で薔薇色に薄められて居ません。肖像を見るとこの佛國の女達が使ふ頰紅だと人は云ふでせう。この缺點は些細なものじやありません、それで貴女のお目は剛くなり、少しこわくさへなりましたもの。

けれど一體貴女のお口の兩端に匿れるあの愛嬌のある糸切齒を畫工はどうしたのです、あの幸福な日に私は幾度私の口でそれを温め樣としたでせう！。畫工はこの隅々まで其美しさを置かなかつたのです。彼は此口に快い、眞劍な形を與へなかつたのです。此形は少しでも貴女がお笑ひになると直ぐ形を變へて、私の心に何かしら、何とも云へない悅び、と何と云つていゝかわからない、急なときめきを與へるのですのに。貴女の御肖像は全く眞面目な所から、微笑に移る事が出來ないのですね。あゝこれを私が嘆くのですよ。貴女の美しさを表現する爲には、貴女を貴女の生活の各瞬間に描かねばなりますまい。

美しさを滅らしたので畫工を責めるのはよしませう。けれどそれでも貴女を描くのに誤つてゐる所のあるのは、それは彼が缺點を除いて了つた事です。彼は貴女が右のお目の下と左側の首の處に殆ど分らぬ程に持つていらつしやる痣を描かなかつたのです。彼は……あゝこの人は何にもわからないんだ！……彼は

貴女の唇の下にある小さな傷跡を忘れてゐるのです。彼は貴女の毛髪と眉毛とを同じ色にしたのです。同じ色ではないのです。眉は栗色で髪毛はもつと灰色がゝつてゐるのですのに。

Lionda testa, occhi azurri; e bruno ciglio.

栗色の髪毛、碧き眼と、とび色の眉

マリニ

彼はお顔の下を正しく卵形にしましたね。彼は、額と頬とを區切つて、輪廓をもつと柔かく、優しくする軽い曲線に氣が付かないのでした。これが著しい缺點です。其外彼は隨分外の缺點を除きました。私は彼を恨みます、私は唯貴女の美しいのに戀をしてゐるのではありません。私は貴女自身を、在の儘の貴女に戀してゐるのです。貴女が繪筆が何もつけ加へぬ樣にとお望みになるなら、私は、何も除かない樣にと望みます。私の心は、畫工が、貴女の持つていらしやらない、顔形を一生懸命につけようとする程、それを氣にかけてはをりません。

附加物については、おめかしになつても又少し放棄つてお置きになつても、肖像の中で貴女がお描かれにならない程、充分多くの趣味を加へて、いつも私は貴女を心に描いてゐるのです。髪飾りはあまり色々なもので、蔽はれ過ぎて居ります。人が見たら花だけだと云ふでせう。この花は餘分ですね。貴女は貴女がヴァレザーヌ式の衣服を着てお踊りになり、私が——クレールさんの言葉によれば、眞面目くさつて哲學者風に踊つた舞踊會の事をお想ひ出しになつて下さい。あの時貴女は髪飾りとしては、唯縮れた髪の毛を束ねて、ベルヌの町の女の樣に金のピンで止めていらつしやいましたねえ。太陽がどの樣に其光で自身を飾つたとて、あの日貴女を見た人は、一生貴女を忘れられないでせう。あの樣に貴女は髪のものをなさらなければいけません。貴女のお顔を飾るのは、貴女の髪の金色の光なのですよ。此の貴女の髪をかくす薔薇は貴女のお顔を飾るものではありません。薔薇だつて貴女の顔色と比べては顔色無しでせう。クレールさんに斯う仰言つて下さい（私はあの方のお氣のつくことと、お好みを知つてゐるのですから）、貴女の髪を彼女がお被せ遊ばしになつたこの花は彼女がアドンヌ（騎士マラン）の中でお集めになつた花よりも遙かに趣味の無いものだと、又花といふものは美しさを添へる爲で、置す爲ではムいませんと。胸の邊の事については、戀人が、お父樣よりも嚴しいといふ奇妙な現象があるのです。けれどほんとに、私は貴女があの肖像ではあまり注意して着物を着ていらつしやらないのに氣が付きました。戀、この秘密は貴女にしか屬してゐないのです。貴女は畫工が總てを其想像から引き出して來たと仰言います。さうでせう、さうでせう！……あゝ若し畫工が貴女の匿された美しさの少しでもに氣が付いたら、彼の目はそれを貪り視、彼の手はもう描けなくなるでせう！　何故彼の厚かましい藝術が、この美しさを想像しなければならないのでせうか？　あの人の禮儀が缺けてゐるのじやありません、私はむしろ趣味が缺けてゐるのだと申しませう。えゝ貴女の

お顔は貴女のお胸の混亂を忍ぶには餘り貞節過ぎます。此兩方のうち一方は他方の現はれることを邪魔する筈です。戀の熱狂だけがそれに添ふ事が出來るのです。で彼の熱烈な手が羞恥に蔽はれてゐるものを敢へて現はす時、貴女のお目の陶醉と困亂とは、貴女がそれをお忘れになることを語りますが、それを曝露なさるのは貴女ではムいません。

貴女の肖像を熱心に見つめて居りまして、批評みたいな事を致しましたのは以上の通りです。私はそこで、私の考へに從つて其肖像を作り直さうと思ひ立ちました。そして私は私の考へを、一人の巧みな〇工に話してみました。それで私が、彼の今迄描きあげた所を見ますと、大變貴女に似たものが出來上りさうです。肖像を汚すのを恐れまして私達は別にした模寫の上に、私が彼に申した色々の變更を試みようと思ひます。そして彼は、私達が其變更（ジュリイの送つた肖像に無い細かい點を指す—譯者）をして確に効果があると思つたら、其時に原の肖像の上に其變更を加へるでせう。私はあまり上手には畫が描けないのですが、この畫工は私の觀察の細かい事を頗りと感嘆して居りました。彼はそんな觀察を私に口授する者は、彼よりも遙に、賢い一人の教師であることを知りません。ですから私は彼の眼に屢々隨分荒唐無稽な事をする男に見えたのです。何故かなれば、彼は斯う申したいからです——貴君は、他人の思ひどほりには仲々見せられぬものを描くさうすると妙な戀人の隨一のものだと申しましたから。それで私が、貴女に丁寧に衣服をお着せするのは貴女をより良く見る爲であると答へました時に、彼は私を氣狂ひだと申しました。あ！　若し私が肖像に

貴女のお顔と共に貴女のお心を表し、貴女の貞淑さと、貴女のお容姿とを共に描き得る方法を發見出來たら、貴女の肖像はもつともつと、人を感動させるものになるでせう！　きつと斯うすれば、貴女のお顔形はもつと立派に美しくなるでせう！　今の儘なら、見る人は唯畫工の假想した所を見るだけですが、今申した樣にすれば感動した觀者は、其顔形を如實のものとして考へるでせう。何だか知りませんが、貴女自身の中には何か不思議な力があります。貴女に觸れた物は皆其力に參與して居るのです。衣を着けてゐる人を崇めるには、其裳裾の片隅を見ればそれで足ります。貴女のお着ごなしを見ると、人は貴女の總ての所に美を蔽ふてゐる優美の薄紗を感じます。そして貴女のつゝましやかな身の飾りの趣味は、心に其飾りが隱してゐる美しさを告げる樣です。

書簡第廿六　ジユリイへ

ジユリイさん！　私は嘗ては敢て貴女を「私のもの」と呼んで居りました。貴女、今日も亦其名を濟して私はジユリイさんと申します！　私の顏へる手から、ペンがころげ出しさうです。涙で紙がぬれて了ひました。今迄決して書いてはならなかつた樣な手紙を書かうとしてゐるので、どう書き始めてよいか非常に苦しみます。私は默つてゐる事も話す事も出來ないのです。來て下さい尊い、なつかしい、面影！　恥辱で卑しくなり、後悔で碎かれた此の心を清めに、力を與へに來て下さい。消えた私の勇氣を支へて下さい。貴

女にお會ひ出來ぬ事から、知らず知らず犯した罪を告白する力を私の悔いに與へて下さい。

あゝ貴女は罪人を輕蔑なさるのです！　けれど其輕蔑は私が私自身が持つてゐる輕蔑と較れば、遙かに小さいものです。どんなに私が貴女に賤しい奴と見えましても、私には更に〳〵其百倍にも賤しく思はれるのです。何故と申しますに、私のありの儘の姿を眺めつゝ私を一番卑下させるのは、貴女にふさわしくない所で、貴女を私の心の底に見、感ずる事なのです。愛の眞個の快樂の思ひ出は、餌の無い陷穽から又魅しの無い罪から、私の感能を庇護出來なかつたのだと考へる事なんです。

貴女の寛大さにお縋りしながらも、尙私の惡業の告白によつて、此手紙の上で貴女のお目を汚がすのを恐れてゐるといふ事が、私の心を目茶に亂すのです。許して下さい。私の迷ひを償ふ方法が若しこの告白で無いのですなら、私は當然この話は貴女のやさしいお心にはお聞かせしない筈です。私は貴女の御好意にふさわしくないものです、確にさうです。私は賤しい、下等な、輕蔑す可き奴です。けれど少くとも私は虛言吐きにはなりますまい。一瞬間でも貴女に恥をお與へするより、私は貴女を失ひ、死ぬ方がいゝと思ひます！　やればやるだけ、私の罪が深められる「言ひ譯」といふものを求める樣になるのを恐れて、私は私に起つた事件の細かい事を申上げようと思ひます。私の爲に私は皆すつかり申上げ樣と思ひます。

私は前に近衞の若干の將校と、私と同じ園の青年達と知り合ひになつて居りました。此青年達の天性の美點は私はよく見て居りましたが、又私は彼等にはふさわしくない、實の無い世の風儀を彼等が眞似してゐる事も、さるもの、私が巴里でス井スの舊い習慣の單純を固く守つてゐると云つて嘲弄ふのでした。

彼等は私の座右銘や、私の行動を迂遠な教へだと云つて、どうかして、私の調子を變へて了はうと決心したのでした。度々色々やつて、失敗しましたけれど、遂に彼等は常然彼等の思ふ壺に嵌る樣な、よく考へられた一つの計畫を行つたのでした。昨朝彼等は私に、嘗て私に話した事のあるこの大佐の夫人の所へ夕飯を食べに行かうと申し出たのでした。彼等の云ふ所によれば、其夫佐夫人は、私が色々な事を識つてゐるといふので、私に會ひ度く思つてゐた人なのだ想でした。うまく此の手だてに乘つた馬鹿な私は、兎に角最初は訪問をしようと申しましたが、彼等は私の氣兼ねを笑つて、ス井スの淡白さは其樣に業々しくやる必要はない、其上、其樣に儀式張ると却て私の評判か惡くなると申しました。で九時に私達は其夫人の宅へ行きました。彼女は階段の上で私達に禮をしたのです、こんな事は私は未だ嘗つて一度も又何處でも見た事の無い事です。這入りますと、私はストーブの兩端に火をつけたばかりの古い蠟燭が灯つてゐるのを見ました。そして私に少しも氣に入らない、一種の氣取つた氣分が一杯漲つて居りました。主婦の夫人は綺麗に見えました、少し年增と云つた樣な所がありましたが。そして同じ年輩の同じ樣な顏付の他の婦人方が其處に居ました。彼女達の身の飾りは可成りきらびやかで、趣味と云ふよりむしろ、光輝を有

つて居りました。けれど、私は、こんな風だから、佛國では女の身分は容易に判斷出來ないのだと、既に考へて居ました。

最初の挨拶はどこでも同じ樣でした。社交界の習慣は其の挨拶を簡單にするか、又挨拶が煩はしくなる前に茶化して了ふかどつちかに致します。けれど話題が一般的になり、眞劍になつて來ますと、まるで違つて來ます。私はこの婦人達はかしこまつた、こまつた樣な風をして居たと思ひます。丁度この眞面目な話が彼女達には不向きであるかの樣に。で巴里へ來て始めて、私は理屈つぽい談をするのをいやがつてる婦人達を見ました。話題を柔げ樣として、彼女達は家の事に就いて口を容れました、各の婦人が思ひ通りに自分の家の事を話しました。これ程、「大佐殿（ムシュール・コロネル）」に就いて話されたのを聞いた事がありません。人を呼ぶのに其稱號でするよりも、名を呼ばれる習慣のある國、自分の姓名を持ちながら、違つた姓名を冠むる人達の居る國で、以上の事は全く私を驚ろかせました。

此の僞の品位は間も無く、もつと自然的な方法に變つたのでした。人々は低い聲で話し始めました。打つて變つて、禮儀などは氣にかけぬ親しさで、人々は私を見て、叫き合つたり微笑し合つたりしてるました。そして其時に家の主婦の夫人は、私の心には少しもひゞかない、キツパリした調子で、私の心の狀態に就いて問ひを私にかけました。夕飯を食べる事になりました。總ての狀態をゴチヤ〳〵に楽してしまふやうだけれど、實は知らず〳〵に各人を其位置につかせる食卓の自由さは、私に一體、私がどの樣な所に居るのかを敎へてくれました。けれど、約束を取消して、夕飯を食はぬ譯にはゆきませんでした。もう遲かつたのでした。きつと厭になる事だと思ひながらも、私は此の夕、觀察者として私の務に捧げようと思うたのでした。それで、生まれて初めて見る機會のある、この婦人達の素性を見わけてやらうと決心したのでした。私は私の注意からは僅ばかりの結果しか得ませんでした。彼女達は今の自分達の狀態は少しも念頭に無いらしく、又これから先の事も少しも見込みを立てゝるないらしく、お里の知れる樣な喋舌の外は彼女達は何にも知らないので、私が最初彼女達に持つてるた憐みが、輕蔑に變つた程でした。娛樂等に關して話題を向けても、彼女達はそれを感ずる事が出來なかつた程でした。彼女達は其貪慾心をそそるものに對しては、素的に餓ゑてゐる樣に見えたのです。これについても、私は彼女達の口から一つとして衷心からの言葉は出て來ないと思ひました。私は立派な人達がどうして、こんなつまらない集會で平氣で居られるかと、つくづく感心して了ひました。彼等が自分等に選んだ生活形式で彼等を非難するのは、私の考へでは、彼等に對して餘りに殘酷だらうと思ひます。

扨て、夕飯は長引いて益々喧囂として來ました。愛が無いので、皆が酒で熱狂してゐるのです。議論も決してやさしいもので無く、橫着なものなのでした。そして婦人達は彼女達の着付を亂して、その爲當然起るべきみだらな慾望を刺激しようとして居るのでした。初めの內、是等のものは私にまるで反對な結果を及ぼしました、私を誘惑しようとする彼等の努力は私を怒らせるだけでした。私は獨言を云つて居りま

した。「やさしい貞節、愛の最上の慾求！　女がこれを失ふと、何て魅力が無くなるのだらう！　若し女がこれ等のもの〳〵力を知つてゐるならば、一生懸命にそれを守るであらう。正直さに依つてでなければ少くとも媚で以つて。けれど、貞節さの眞似は出來るものでない。貞節を眞似ようとするより愚かな技巧は無いのだ。」私は尙も思ひました。「この人達の不貞な無躾や、淫逸な、暗い行爲にくらべて、このをづ〳〵した、情に燃える眼ざし、つゝましさ一杯の話し、優美さ、感情等とは何たる相違だらう！……」私はこれをすつかり考て了へませんでした。私はこの思つてもいやな比較に恥ぢて、眞赤になりました。……私の意志に反して、私の心に浮んで來る、あのなつかしい思ひ出を以つて、罪のある樣に私を責めたのでした。……何といふ所で私は彼女の事を考へてゐたのだらう。……あゝ私の心からあまりになつかしい面影を遠ざけ樣と出來ないで私は其れを礙つて了ふ樣につとめました。

私の耳に這入る、物音、話題、目に入る物が、私を知らず〳〵の内に興奮させました。私の兩側に居た女は絶えず私の機嫌を買つてゐました。私は冷靜になる爲に彼女達を遠くへ追ひやつて了ひました。私は私の頭が鏡つて來たのを感じました。私はいつも、薄くした酒を飲みました。私は更に水の量を增し、遂には水だけを飲む樣になりました。所が水だけのんでみますと、此水だと云つて出されたのが白葡萄酒だつたのに氣がついたのでした。私は彼を食べてゐる間、欺かれてゐたのでした。私は不平を云つて嘲罵をうける樣な事は致しませんでした。私は飮むのをやめました。けれどもう遲そかつたのです。罪は行はれました。私は、漸く私に殘つてゐた意識をも、間も無く失はせる樣になりました。氣が付いてみると、私は驚きました、私は奥まつた小房の中でこの一人の女の腕の中に私を見出したのです。私は其時私が實際に罪ある如くに私の罪を感じて絶望して了ひました。

これでこの恐ろしい話が終りました。貴女の眼も、貴女のお心の私の記憶も汚れない樣に！　あゝどうか裁判をして下さい。嚴重にして下さい、嚴重にされるのが當然です。どんな罰をうけても、私の罪の思ひ出より私に對しては酷いものでは無いでせう。

書簡第廿七　ジユリイから

妾を怒らせたと御思ひになつて御心配なさいますな、あなたの御手紙を讀んで妾は怒るよりも寧ろ悲しみました、あなたが心にもない放埒で侮辱なすつたのは。妾ではなくてあなた御自身です。妾はそれを只悲しく思ふばかりでございます、妾はあなたが御自分を辱しめなさるよりは妾を侮辱なさる方がずつと心にかなひます、そしてあなたが御自身に對して爲さる惡こそは、御許しすることの出來ない唯一の事でムいます。

御自分で赤面なさる過失しか御覽にならないので、あなたは實際よりも御自分をずつと罪あるものと御思ひなさいます。そして妾は此場合は不謹愼のみをあなたに御責め致すだけでございます、がしかし是は

もつと遠いところから來て、あなたには御分りにならないもつと深い根を持つてゐるのでございます。友人の情として是をあなたに御知らせ致さなければなりません。

あなたの最初の誤りは社會に出るに當つて惡い道をおとりになつたことでございます。あなたは前進なさればなさる程、益々御迷ひになるのです。そして妾はもしあなたが元通りにお還りにならなければ、亡んで御了ひになるだらう！と思つてぞつとするのでございます。あなたは妾が怨れた係蹄に知らず識らずの中に御這入りになるのです。惡徳の卑しい餌は、始めはあなたを誘惑することが出來ませんでした、けれども惡い仲間が、あなたの德を腐敗させるために、あなたの理性を毒し始めたのでございます、そしてあなたの品性の上に彼等の主義の最初の試みを爲たのでございます。

あなたは巴里で御作りになつた習慣については何も特別には、御仰言いませんけれども、あなたの御手紙によつてあなたの御仲間を、又あなたが彼等を御覽になる態度によつてあなたに對象を與へる人達を容易に判斷することが出來るのでございます。妾はあなたの御手紙について隨分不滿に思つて居りますことをあなたに少しも御かくし致しませんでした。あなたは同じ調子を續けてゐらつしやいます。それですから妾の不滿は增すばかりでござります。實際、人は此等の手紙を一哲學者の通信としてよりは、むしろ小才士の皮肉としてとらでございませう。そして昔あなたが妾に書いて下すつたと同じお手で書かれたのだとは信じ難い程でございます。あゝ！あなたは上流婦人や美食の人々の間のつまらぬ風態の中に人間を研究しようとなさつたのです。そして此の皮層的な無常な外觀の虛飾は、あなたの御目を惹く筈ではありませんでしたのに、すべてのあなたの注意の根底となりました！　これは十年以來、もはや存在してゐない風習儀禮を怠りなく蒐集することが困難だつたためなのですか、それと同時に人間の心の永久な契機、情熱の秘密な永久的な働きは、あなたの探求から洩れて了ふのです。あなたの御手紙を女性についてのものと致して見ませうか、妾に女性を知らせ得る何物がその中にございませうか？　世人が皆それで教育される彼女等の裝飾についての描寫、彼女達の羞恥進退についての皮肉な觀察、不公平に化粧された、小説の人共のだらしないといふ觀念、丁度すべての立派な感情は巴里では消え失せて了ひ、そしてすべての婦人達は四輪の馬車でそこにゆき、一流の宿をとるのだとでも申します樣に！　あなたは彼女達の趣味、見識眞の性格について何か妾に御教示して下さいましたか？　それはまた一國の婦人に關して語る場合に賢明な男子が、家庭の世話や子供の教育を看とる人々を忘れてゐますのは、その意を得ないことではございませんでせうか？　此の御手紙中であなたらしく見えます唯一のものは、あなたが喜んで彼女達の善良な本然の性質を讃めてお出でになることでございますが、ですがその點であなたは一般に女性といふものを認めたと云ふに過ぎないのではございませんか？　世の中の何處の國でも優雅と同情とは愛すべき婦人の職分ではございませんでせうか？　それは云はずとも知れてゐる事です。

もしあなたが、人があなたに云つた事よりも、寧ろあなたが御覽になつたことを妾に描いて下さるか、

でなければ少くとも分別ある人達とばかり御交際もなさつたなら、どんなに模様が異つたことでせう！御自分の判斷を失ふまいとあんなにも御注意なすつたあなたが、わざとでもする樣に、無分別な青年達との交際の中に判斷を失つて御了ひなさるなど〳〵云ふことがございませうか？　青年達は社會に於て賢人を求むるのは、それを試みる爲のみで、それを誘惑する爲ではございません！　あなたはあなたには少しも役に立たぬ年齡の無益な一致を求めていらつしやるのです。そしてあなたにとつて缺くことの出來ないものである知識と理性との一致を忘れていらつしやるのです。あなたがどんなにひどくお恣りになつても、あなたは一番人間中で誘惑されやすい方です。そしてどんなに精神が圓熟していらしやつても、そんなに一緒に生活してゐらつしやる人達の。するがまゝになつてゐらつしやるのですもの、もつとお年がお若くなつて、も一遍子供におなりにならなければ、あなたと御同年の方達とお交際はお出來になる筈は御座いません。それをこんなに御自分にお似合になると思召して御自分の品位を下げていらつしやるなんて！あなたよりもつと考へ深い方をお友達にお選びにならなければ、つまりはあなた御自身を下等なものになさることになりますわ。

妾はあなたが御承知なくて、いやしい家へつれられてお出でになつたことを、兎や角申しはいたしません。がしかし、お近付きになつてはならない樣な、又は少くともあなたのお樂しみを指圖させたりなさつてはいけない、あの若い士官達のするまゝにされてゐらつしやつたことは、默つて居ることが出來ません。尤も、彼等をあなたの堅固な道德心に歸服させるといふ色々な御計畫に就いては、妾はそこに注意深くてゐらつしやるといふよりは、むしろ非常に御熱心であるといふことを認めます。で貴方があんまりお固すぎて、彼等の仲間にお這入りになれなければ、又同樣にあなたがお若すぎて、彼等の指導者とおなりになることは出來ませんのです。ですから、もうあなた御自身について爲さることが何もなくなつて、初めて他人を矯正することに手をお出しになるべきで御座います。

更にもう一つ重く、且遖に許し難い過ちといふのは、斯くあなたにふさはしくない樣な所で、自ら進んで夜をお過しになり、どんな惡い場所に自分がゐるかといふことに、初めてお氣がお附きになつた時、すぐに御身をお引きにならなかつたことです。そのことであなたは色々言譯なさいましたが、それは役に立ちませんわ。その樣な場所に何等かの御氣に召した所があつたかの樣に、或はそれがために德義心が打負けたに違ひないかの樣に、將又、機を逸してお了ひになつて、どうしても惡いことをしないわけには行かなくなつたかの樣に過ちをお打消しになつたつてももう後の祭で厶います。あなたが嫌惡の情を脫れて、安堵なさつていらつしやることに就いては何も申しますまい。それが如何にも尤もであるといふことは、結果を御覽になつて、よくお分りで御座いませうから、あなたの心を讀むことの出來る女の方に、もつと辛直に話して御覽遊ばせ、かへつて羞恥の心が先になつて、そんなことはお出來になりはしませんわ。あなたは中途で其處からはお出なさらうとなさつた時、人が笑ひはしまいかと思つていらつしやつしやり、又冷罵さ

れやしないだらうかと、恐れていらつしやいました。そしてあなたの思召しとしては、他人の嘲弄を真面に浴びるよりは、自ら後悔する方がよろしかつたのでした。此の場合、あなたはどういふ方針をお採りになつたか、十分御存知でいらつしやいますか？　第一に或る一人の生れつき善良な魂の中に、悪徳を導き入れる方針は、良心の聲を大勢の喧騒で抑へて了ひ、善をしようといふ勇猛心を、批難を恐れて、抑へ附けて了ひます。色々な善くない例に負ける人は色々の誘惑によると打勝ちませう。又その様な人は愼み深くしてゐるのを恥ぢ入り、辱かしめをうけても厚ヶ間しくしてゐます。そしてこんな無意味な恥しさといふものは、悪い性癖よりも道義心に富んだ心を悪くするものです。あなたがあなたの心を害されぬ様、お防ぎにならねばならぬのは殊にそれでムいます。と申しますのは、あなたが何を遊ばすにしましても、人に嘲笑されるのを恐れていらつしやることが、あなたはそれを御自分では何でもない様に思召していらつしやいますが、どうしても、矢張、あなたを左右いたします。ですからあなたは一の嘲弄よりも、百の危険の方をむしろ、何とも氣にかけておいでにならないでございませう。こんなに勇しい心に、これほど多く臆病の心が一つに附いてゐるなんて、そんな人は世の中に御座いませんわ。

貴君の方が私よりはずつとよく御承知の事で御座いますが、數ある道徳律の此缺點に對して貴君が虚勢をお張りにならなければ、妾はあなたがその缺點に捕はれない様に一つの方法をおとりになるのを申し上げませう。それは哲學のあらゆる議論よりは、恐らくはもつと容易で、もつと確實でムいませう。あなたの御心の中で、時の置換へをなさり、未來の數分を先取することなので御座います。あのかなしい夜食の際、あなたが一歩街にお出になれば、魂がどんな狀態にならうかとお考へになつて、會食者から發せられる一時の嘲弄に對して御自分を保護していらつしやつて、悪徳の陷穽をお逃れになる内心の滿足、容易にそれに打勝ち得らるゝ此習慣を取る利益、又あなたが勝利を得られたことを意識してお感じになられる快樂、妾にその勝利をお述べになる快樂、その勝利から妾自身が受ける快樂を御想像遊ばしましたならば、すべてこれらの感情が、一時の嫌悪の情に打勝たなかつたといふことがどうして信用されませうか？　然し事實は事實でした。そしてその嫌悪の情もよく〳〵その結果をお考へになれば、決してそれに屈してお了ひになることはなかつたでせうのに、尚其上何の價値もない様な人達の嘲弄を、重く御覽になるこの嫌悪の情とは、一體何で御座いませうか？　この様に反省して見ますと、必ず一時な意味も無い羞恥に對しまして、遙かに正しい、永つづきをする一種の羞恥心、種々の悔恨、又は危險といふものを、あなたからお免かれさせたで御座いませう。何も包み隱さずに申すなら、貴君の女のお友達は、二三滴にも足りない涙を流してゐましたらうに。

あなたはあの夕方に觀察者としての立場を利用してやらうとなさつたと言つておいでです。何といふ事でせう。何といふ御考へでせう。あなたの言ひ譯を聞いて、私はあなたの爲にどんなに顔を赤らめる事でせう。あなたはこれ程の好奇心を以て巢窟にゐる泥棒の群を御覽にはならないでせうか？　又通りがゝり

の人を彼等がどんな風にして掠めるかといふ事も御注意なさらないでせうか？　この世の中には人々が見る事を許されてさへ居ないやうな厭ふべき事のある事も、道徳の慣瀦は悪徳を行ふ事を恕しはしないといふ事も御存知ない人ですか？　賢者といふ者は自分の鑑められないやうな一般の紊亂に氣がつきます。彼はかういふ紊亂を見て、それによつて引き起される惱みをその悲しい顔に浮べるのです。併し個人的の紊亂には反對するか、或ひはその存在することを揩にとられるのを恐れて眼をそむけます。その上、其處で起る事件や人々のする議論を判斷するのは、同じやうな社會を見ることが必要ではありませんか？　妾には貴方がそれについてお云ひになつた、極く僅かのことよりも、唯一つのことによつて殘りのことを總て想像するになんでもありませんわ。人々がそこで見出す享樂の思想は、私に享樂を求むる人達を充分知らせて呉れますの。

貴君の便利な哲學が、似たやうな場合を寛容するために、人々が大都會に於いて立てた主義を既に採用したかどうかは存じませんが、併し少くとも私は、下等な人達にのみ了解せられる、下らない空想的必要を口實として、その習慣を敢てするために、自らを輕蔑する人間の一人で貴君がないといふことを希つてゐます。恰かも兩性が此の點については異つた性質のもので、相合へぬ時とか、獨身の場合には、財産は正直な男には必要であり、正直な婦人には必要がないとでもいふやうな事です。若し此の誤りが貴君を賣春婦のもとにつれて行かないでも、その樣なお考が貴君をこれから先お迷はしする事を妾は非常に恐れて居りま

す。あゝ貴君が卑しい方におなりなさりたいならば、言譯なんかせずに、輕蔑せらる可きものにお成りなさいまし。そして放蕩した上に伴りまで云ふことはおよしなさい。總て是等の所謂必要なるものは、その根源を天よりの性質に置かずに、感能の意識的な腐敗に根を持つて居るものでございます。愛の幻影でさへも貞節な心にあつては清くなります。そしてその幻影は既に腐敗した心にあつてのみ腐敗するものでございます。反對に純潔はそれ自身で保つて行くことができます。常に抑壓せられた慾望は、もはや再び現はれないやうになります。そして誘惑は負ければ、つけ上るものです。妾は友情によつて二度此の種の問題を取扱ふ嫌惡の情を抑へました。これでそんな事を申すのも、お終ひでございます。と申しますのは妾は何といふ名義で、貴方が正直や愛や理性に拒んでいらつしやるものを貴方から得ようと望めませう？

妾は此の手紙の始めに書いた重要な點に立返りませう。貴方は廿一の時にヴアレーから愼重な明敏な描寫をしたお手紙を下さいました。貴方が巴里からつまらない手紙を下さつたのも、廿一の時でムいます。その後の方のお手紙では貴方の性格とは違つて居ります所の、冗談混りの才智に貴君の感情や理性を殆どすてから、其才智は滅つた樣に思はれます。貴君は貴君の才能を百姓達の間でお獲になり、都の才士の間でお失くしになるのです。是は貴方の居らつしやる國の罪ではなくて、貴方がそこでお知りになつた、智識の罪です。何故かと云へば最も勝れたものと、最も劣つたものとを混和する事以上に選擇を多く要するも

のは世にムいません。若し社會をお知りになりたければ、長い經驗と穩健な觀察によつて社會をよく知つて居る人々とお交りなさいまし。決して決して表面のみを見る若い輕薄な人や、自ら笑ふ可きものになるやうな人とは交はることをなさいますな。巴里にはよく沈思瞑想なさる學者が澤山ゐられます。此の巴里といふ大住居は日々それらの人達に問題を提供して居ります。貴君は妾に是等の慥重な勉強好きな人々が貴君と同じやうに家から家へ、仲間から仲間へ、婦人や青年に戲れ、總ての哲理をお喋舌にしてしまふために馳けまはつて居るといふやうなことを、信じさせはなさらないでせう。彼等學者は非常に威嚴を有して居ますから、彼等の地位を墜したり、才能を金に賣つたり、彼等が模範を示すことによつて改めねばならぬ習慣を維持したりすることはありません。大部分の人がさうなつても、確かに數人のものはさうならないでせう。そして貴女のお求めにならなければならぬものは今申した人達でございます。

近代喜劇作家について批難した過ちに、貴君自らがお陷りになつたり又巴里には貴君から見れば、貴族ばかりであつたり、又は貴君の樣な狀態の人々が貴君のお話しにならない唯一のものであるといふやうなことは少し變ではムいますまいか？　あだかも貴族の空しい偏見があるため、貴君が直に貴族達をお嫌ひになれたり、又貴君のゐらつしやる國では一番尊敬すべき階級である所の禮を守るブールジョアと交はることが貴君を墮落させるとお信じになるやうに。貴君はエドワード卿とお知己におなりなさつたことについて理解をなさいました。そしてそれを利用して、貴君は直ちにもつと下級の階級の人に知己をお持になりました。多くの人々は墮落し易い所迄に上りたがつて居るものです。そして貴君の告白によりますと最も多くの狀態の私人的生活を知る事は眞の風習を知る唯一の方法でございます。何故と申しますに大名暮しをする人達に注意を向けるのは、それは、喜劇役者を見てゐるに過ぎないので、物の眞相想は、わかるものではございません。

妾に貴君の好奇心がもつと進む樣に希つて居ります。妾共の居ます所には百萬長者も見られませんが、極端な貧しい人も稀でございますのに、非常に富有な都會では下層階級の人は如何してあのやうに慘めなのでございませう。此の疑問こそ貴君の探究に償するものではないかと妾は存じます。然し此の問題の解決に貴方が身をお委ねにならなければならないなどといふ事は、貴君の一緒に暮しておいでになる人々にはお要もないことでございます。一人の學生が社會の風潮を知らうとするのは、光り輝く部室でございませうね。併し賢者は貧しきものの藁屋に於て社會の秘密を學びます。人々がこの社會では、綢塗された生活の中に暗くされて居る惡德の、實際に行はれて居る暗い姿を、明かに見ることのできるのは其處でございます。又或秘密な、不正さによつて權力ある者が、富んだ者が、表面は同情するやうな風をして、その實壓服せられたものの黒パンの殘りまで引さらふのも、其處に於いてでございます。あゝ若し妾が是等の人達の云ふことを信ずるとすれば、貴方は六階の屋根裏の部屋に於いて、如何に多くのことをお知りになることができるでせう。それ等の不正な事を人々はサンジエルマン郊外の家々に於て、深い秘密の中に葬り

去つて了ひます。そして若し其處に行はれた不正事が、その表面の取りつくろひを破つて現はれる時は、如何に多くの口巧者な人達が、彼等の人道主義を以て、そのことを曖昧にごまかして了ふことでございませう！

人間は人間の力で緩和することの出來ない、悲慘な有樣を見るのを望むものでございません。そして救ふことを拒む富有な人でさへ貧困から眼をそむけることを妾は信じて居ます。併し不幸な人達に必要である所のものは唯お金許りではムいません。そして手元にあるお金入れを有用に使ふことを知らないで、贅澤に生活してゆく怠け者ばかり世には居ります。慰藉、忠告、配慮、味方、保護、此等のものは、貧困を緩和するの金力が無い場合には、貴君の御同情の念が貴君に實行の可能をお許しする數々の手段でムいます。そして抑壓せられた者達はされるがまゝになつて居ることが屢ございます。それは彼等が不平を申すやうな機關を缺いて居るからでございます。そして折々彼等が言ひ得ない一つの言葉や彼等が表現し得ない一つの理性や、彼等の越ゆることの出來ない大きい戸口が問題となります。利害關係を離れた道德の大膽な根據は無限の障害を引き起すのに充分でございますしめることができます。そして人の雜誹は極盛をつくす暴君をさへ恐れ

若し貴方が實際に於て人間とおなりになりたいならば、更に身を下すことをお學びなさいまし。人情は清らかな、有益な水の樣に流れて、低い土地を肥やしまする有害な陰と、破片を與ふる、乾燥しきつた岩は乾いたまゝにして置きます。

あゝ吾が友よ、人間は現在に教へられて、未來に對して、どれ程現在を利用することでございませう？既得の光が妾共にとつて無用となる時、その爲、その光りを得るに費した時間を失ふまいとして、如何に智慧のさとしが先にされ、利益を後にされるでムいませう。當局者のうちに住まはなければならない人は茶毒せられたその規箴に對して、過大の防護を取ることに氣がつきません。最も勝れた心を、野心の多い仲間の中に卷き込まれないやうにする善い行を絕えず實行するといふことが必要でございます。妾の申すことが必要なばかりでございます。妾の申すことをお信じになつて、此の新たな修養をなさつてごらんなさいまし。それは嘗つて貴方のお抱きになつた所のものよりも、遙かに貴君に相應はしい所のものでございます。心が腐敗するにつれて、才能は狹くなるものでございますから、貴君は直ちに反對に崇高な德の實行は、如何程天才を育て養ふかといふことと、他人の不幸に對してやさしくしてやることが、もつとよく德の來る所以を認め、不幸を生ずる惡德を、如何なる意味に於ても、妾達から遠けるのに、如何に有効であるかといふことをお感じになるでございませう。

混亂に向ふ今一歩が、貴君の氣がお付きになる前に、早くも貴君をその深淵に陷れることを懸念して、妾が貴君を批評する立場にあるときには、一切の友情を取除いてしまはなくてはなりません。吾が友よ、今妾は貴君に何もお置しすることが出ません。どんなに貴君の鋭い眞面目な告白が妾を感動させたことで

ございませう。何故と申しますのに、貴方が此の告白をなさるのに、如何に恥しい思ひをなさつたか、その結果どんなに心をお苦しめになつたか、といふことを妾は感じますから。自ら意識して居ない過ちは許されます。そして容易く忘れられます。これからは妾が放棄しなかつた主義をよくお保ちなさいまし。斯る場合に再び過ちをしない人は、最初から過ちを致すものではムいません。

さらば吾が友よ。隨分御健康に注意をなさいまし。妾はそれを祈つてをります。そして妾のお赦しした罪の跡が少しも殘されないだらうと考へます。

二伸、妾はドルプさんの手から貴方がエドワード卿にお出しになつた數通の手紙の寫しを拜見しました。それによりますと、妾は貴君の觀察の質及び仕方に對して加へた非難の一部を訂正しなければなりません。その觀察は重要な問題を取扱つて居ることを妾は認めます。それは愼重な分別のある反省に滿ちて居るやうでございます。併しその代りに妾達（妾と妾の從姉）をひどく輕蔑していらつしやる貴君は貴君のお友達には非常な尊敬を拂らつてゐられるのにかかはらず、妾達にはその尊敬を棄てるに相應はしい樣なお手紙をばかりお送りになつて妾達を出來るだけ少く尊敬しようとなさいます。貴君のお弟子達を貴君の才能を稱讃する資格のないものとされるのは、貴君の敎へて下さつた課業を馬鹿にされることになるやうに妾には思はれます。そして貴君は少くとも虛榮心によつて妾達が貴君の云はれることを理解することができるとお信じになる風をなさる可きでございませうに。

妾は政治が殆ど婦人の範圍外にあることを自白致します。妾の叔父は妾達に倦き倦きする程そのことを申しました。それで妾が婦人を政治の範圍外に置くことに貴女が恐れて居られたかといふことを理解することができました。貴方にあからさまにお話をすることも最早ありません。政治の効用は妾には餘り緣遠いので、妾を非常に感動させることは出來ませんの。その光りは餘り崇高なので、妾の眼を射る事は出來ません。神樣がそのもとに妾をお生れさせになつた所の政治を無理に愛する樣にされて、その政府が勝れたものであるかどうかを知りたいなどとは、餘り考へませんのでございました。政治に參與する權利の無い妾に政治を詳細に知る事は何の役に立ちませう？　妾の慰めることを許されて居る妾の周圍の他の人達を見れば、それだけ多く妾がどうともすることの出來ないもつと多くの不幸を考へては、何故私は心を痛めるのでございませう。併し妾は貴方を寵します。妾は問題に興味をもちません、問題を取扱ふ者者に興味を感じます。妾はやさしくも稱讃した心を以て貴方の天才を證據立てする色々な御手紙を集めます。妾の心に非常に應はしい事に得意になつて、貴方の愛を感ずるために、必要な精神と同じやうな愛をのみ妾は要求します。貴方は善をなされた所の總てのことを理解し、愛する樂しみを妾に殘すのを御拒みなさいますな。若し神樣が妾達の運命をお結びになつてゐるなら、貴君と共に考へる事の出來るお友達を貴君は正しく御判別なさらないのかと考へる樣な私に、辱しめをお與へにならうとお望みなんでございますの？

書簡第廿八　ジユリイから

皆失敗です！　皆露れて了ひました。最早妾は貴君から戴いたお手紙を匿して置いた所には見出すことができません。其手紙は昨夜迄そこに来だありましたの。盗まれたとすれば、今日でムいますお母様がきつとそれをお見付けになつたのです！　若しお父様がそれを御覧になれば、妾は生きて居られません！　あゝ若し總てを放棄しなければならぬのでしたら、お父様が夫を見ないことが何になりませう。あ！　大変…お母様が妾を呼びにお寄越しになりました。何處へ逃げませう？　如何してお母様に會へ」ませう？　どうして妾は地の中に隠れることはできないでせうか。妾の全身は震へて、一歩も歩めませんの。恥しさと悔蔑ときつい御小言…妾は凡て當然のことなんです。妾は總てを堪え忍びませう。けれども悲しいですわね。泣き濡れたお母様の涙。おゝ！　この心の亂れお母様は妾を待つておられます。妾はこれ以上遅れることはできません。お母様は知りたがつてお居でございませう。お父様は何でも仰言るでせう。レジアニーノは暇を出されるでせう。次にお知らせするまでは、もうお手紙を下さいますな。それは何時になりますか誰も知る事ではありません。私は出來るでせう。如何して。……虚言をつく、お母様に虚言をついて…あゝ虚言をついて妾達を救はなければならぬとは！　妾達はもう駄目なんです。左様なら。

第二部　了。

第三部

書簡第一　ドルブ夫人から

貴君を愛して居る人達に貴君は何といふ、惱みをお與へになるのです？　貴君は今迄どの位不幸な一つの家族に涙をお流させになつたのですか？　貴君獨りが其お家の平和な空氣を紊してお了ひになつたのですよ。妾達の涙に「喪まで」加はらぬように心配して下さいましよ。貴君が其娘の心にお濃ぎになつた毒藥の効驗は驚て、惱まされた母親までも殺すことになつて、紊れた戀が遂には貴君に取つて永久な悔の源とならぬように心配なさいましよ。貴君が誤つた事をなさつてるても、妾は希望の影がそれを培つて居りました間は、堪えられました。けれど、名譽と理性とに見離され、不幸と、苦しみとをのみ釀して、執拗さといふ名のみに償する様な仇な、實も何も無い相變らずのお心はどうして許す事が出來ませう！　今迄伯母が疑ひの眼を、あんなに長く逃れて居た貴君との戀の秘密が、どの様にして貴君のお手紙から發見されて了つたか御存知でムいませう。貴君よりも御自分に對してお怒りになつてるらつしやる、やさしい徳の高いあの母親に、この打擊がどの様に身に答へる程のものでございましても、伯母は自分の不明を不注意のみを責めてをるのでムいますの。伯母は自分が悲しくも人を見損なつた事を慨いてをりますの。それ

で一番苦しんでゐる事は、あまりに自分の娘を容び過ぎた事なのですの。伯母の苦しみは、ジユリイには其お叱りよりも遙かに辛らいものなのです。

可哀想な従妹の困つてゐることは想像も出來ません。貴それを悟るには、それを見ないければ、駄目でムいますわ。ジユリイの心は慨きに息の根を抑へられてゐる様に、又胸にむらがる色々な感傷の劇しさには、唯々ぼんやりとしてをります。其様子は鈍い聲を立てて、泣くよりも恐ろしいのでございます。蓋夜となくその母の枕元へ膝を突いて、悲しさうに、床を見つめて默つてをります。そして時々消え入る様に泣出すのです。それはまるで、別人の様に見へますわ。母の病氣の爲に辛らうじて氣を張つておゐでな事が明にわかります。母の世話もせず、氣もゆるんでおるでの時には、日付もほんやりと、顔色も青く、まるつきり氣絶でもしてゐる様に弱つてをりますの。妾は従妹こそ、自分が母にする位の世話を、他からして貰はなければならないのじやあるまいかと思ふ程なのですの。伯母もそれに氣付いて、妾に心配さうにジユリイの體の事を問ひますの。これでどの位伯母の心は次々と重なる心配と戰つてゐるかよくわかりますわ。又どの位こんなに樂しい團欒をお楽しになつた貴君を憎んでゐるかもわかります。

この苦しさは、氣六ケしい伯母の目を忍んで、其娘の生活にひたすら氣を揉み、この危い秘密を匿して了はうとなさる事で、更に度を増されるのでございます。伯父の前では、昔通りの家族團欒を形作らうと皆が努めて居りますの。けれど、母のやさしい心からこの見せ掛けを利用なさつても、心の亂れたジユリイは偽りの愛撫だと思ひ、その心を許す事も出來ないでをるのでムいます。信ずれば其愛撫は自分になつかしいものだけに、信ぜられない今は、唯々酷いものとして彼女に感ぜられます。伯父の愛撫を受けながら彼女は、目に其の心が現れて居ると云つても良い位のやさしい目付きをして、伯母の方を見ますの。丁度斯う言つて居る様に、「あゝ、妾は母様から愛撫して頂ける様な價のあるものではございません！」と。

デタンジユ夫人（ジユリイの母、ドルア夫人即ちクレールの伯母―譯者）は妾に度々妾にだけの内秘話をしました。ですが御叱責の中にもこもる優しさや、言葉の調子で、直ぐに次の様な事が判りましたわ。ジユリイは妾達に對する母の係りなかつたと申すのでムいます。貴君の御手紙それ自體が、過度な戀愛の特色をそなへてゐながら、伯母の注意を逭れなかつた一種の辯解をもつてをります。貴方に對して信用なされ過ぎた事よりかも、愛に共鳴した單純さを思ふて、伯母は心を痛めて居るのでムいます、伯母は貴君を尊敬して居りますよ。誰でもあの程な場合に、貴君位自分の情と戰ふ方はあるまいと信じて居る程ですの、貴君の過ちを德の爲めだと云つてをりますの。伯母の言葉を借りて申せば、一時の熱に臨られて、家名を傷つけ、賢い娘を汚すに躊躇しなかつたのも、愛を感じて居られる立派な人の正直な心から出たものなのですと。併し過ちを回想して何の役に立ちませう？　今は唯此の厭な秘密を永遠の面紗の中に隱す――出來ることなら、其の跡を小さくされるだけ、小さくなるようによく拭ひ清めて了ひ、神の御意に任すことでムいます。神は決して目に見

える様な證跡を遺すものではありませんから、秘密は六人の確かな方々の中に握られて居るのです。貴君の愛して居られる總てのもの丶安心、失望にある母の光榮、尊敬すべき御家の名譽貴君御自身の德も、全部まだ貴君次第なので御座ります。總ては貴君に義務を命じて居ります。貴方は御自身がお惹き起しなすつた悲哀を繕つてあげるとがお出來になるのです。ジュリイに似合しいものにお爲りになされるのです。」彼女を思ひ切つて彼女の誤を辨護なさる事が出來ます。若し貴女の御心が妾の思ふ樣でしたら、屹度愛の大きさに應ずるだけの犧牲がありますの、今はその犧牲が必要なのです。妾は常に貴君の御心を信じて居りました上に、以前あつたあの樂しい一家團欒が、彼女に與へる力を思ひやつて、貴君の御名に依つて斯う誓つて了つたのです。貴君は屹度我慢して下さると。貴君は妾が信賴しすぎたのだと、御主張なさいますなら、御遠慮なく仰言つて下さい。さうでなかつたら、貴君は今日は義務に赴いて下さい。貴君の戀か貴君の御戀人か、どつちかを犧牲にしなければならない時です。そして卑怯な方であるか、德のある御方であるかを御示しにならなければならぬ時で御座います。

この不幸な伯母は、貴君に手紙を差しあげ樣かと思つて居つたのです。手紙を書き始めたのですわ。噫！ 伯母の傷ましい嘆は貴君に何の位短刀を刺された中の苦しみをお感じさせになるでせう！ 何の位悲痛な苛責に貴君の心臟は引き裂かれるでせう！ 貴君はどんなにあのやさしい顏に依つて恥ぢ、お悶へになるでせう！ 妾は貴君が到底お堪えになれまいと云ふ思ひに負けてやつて此の手紙を切り了てゝ了つ

たのです。娘の誘惑者の眼に卑下した其の母親の姿を御見せ申す樣なこの上も無い、恐ろしい事を妾は許す譯には行きませんでした。少くとも貴君にはこんな遣方を用ひられる資格は御座いませんわ。これは惡魔を屈服させ、思慮のある方を悲哀に殺させる行爲なのですもの。

若し之が戀のために、貴君が爲さらなければならない初めての努力でしたら、妾は成就をあやぶみもしませうし、又貴君に拂はれて居る尊敬に躊躇を感じも致しませう。ですけれど此の國を御立ちなされて、ジュリイの名譽の爲めにお捧げ下さる犧牲は、甲斐ない文通を御止めになつて安心を御與へ下さる犧牲の保證となる氣が致します。德の始の行爲は常も最も辛いものです。あれ程價を拂はれた努力の報いを貴君は無くしてお了ひなさることはないでせう。強いて儚ない文通を續けられても、唯貴君の戀人にとつて、危險がいよ〳〵怖ろしくなる許りで、其の贖ひは貴君御兩人に無いのです。其の上互の苦惱を無益に永びかせる許りなのですわ。疑はないで下さい、貴方にあれ程親しかつたジュリイは愛する御方のものではないのです。貴君の御不幸を自分に伴はつてしまはふとなすつても、だめでムいます。貴君が彼女の許を離れなさつた時、既に貴君は彼女をお失ひになつたのです。屹度從妹が貴君に身を御任かせするよりも、神は寧ろ貴方から彼女を奪つたでせうもの。父が御歸りになつた時から彼女の婚約は取結ばれて居たのです。貴君も良く御存じでせう、此の剛情な人の言葉は變更出來ないものだといふことを什麼風に貴君がなさらうとも、無殘な運命は貴君の御希望を退けたのですわ。貴君は從妹を所有することは不可能になりま

した。唯貴方のお採りになる所は、彼女を不幸と汚辱の深淵に墜すか、貴方の崇敬の的になつたものの、名譽を重んじ、失はれた幸福の代りに、智識と、平和と、貴方の熱烈な御交際に依つて奪はれたせめてもの安全を彼女に御與へ下さるかでムいます。

若し貴方が不幸に沈んだ戀人の今の樣を御考へになつたら、どんなに後悔に沈まれるでせう。叱責と恥しさに意氣をすつかり無くなされて了つた有樣を御考へになつたら！　何んと云ふ顏色をお變へになるでせう！　何と云ふ力ない姿でせう！　あれ程にこやかで、温しかつた總ての感情もそれを呑み盡して了ふ一事の中に悲しく溶けて了つたのですわ！　友情も冷めて、御會ひしても、以前の樣な喜はありません。彼女は唯愛と悲哀の擒になつて居るのですの。何うなるのでせう。あの愛らしい感じ易い性質は？　物事に對する純粹な感情は？　逆りは！　他人の悲喜に寄せる共鳴？　噫何處へ是等のものは隱れたのでせう？妾は是丈は申し上げます。本當に彼女は今も優しい同情ある婦人でムいます。物腰のしとやかな所は全くなくなつたと云ふのではないのですが、それは惰性なんです。以前の熱心はありませんわ。あんなに氣高かつた御心も元氣を落され、情焰も消えて、天使は普通の女に變つて了ひましたのでムいます。あゝ！　貴君は何んと云ふ魂を德からお奪ひになつたのです！

書簡第二　ジユリイの戀人からデタンジユ夫人へ

私の生きてゐる限りは續く筈の悲哀に胸を刺されて、貴女の足下に跪いて申し上げます。夫人、私は心にもない悔悟を述べる爲めではありません、私の生涯の慰安を奪てゝ自分の不本意にも犯した罪の贖ひをする爲めなのです。貴女の尊い御娘樣が私にお與へになつた感情程、人間らしい感情は他にムいませんと同じに、世の母の中で最も立派な方に、今私が爲さうとする程のものに等しい犧牲はありません。ジユリイさんは私に如何に義務の前に幸福を犧牲にしなければならないかを教へて下さいました。彼の女は雄々しく、其の例を示して下さいましたので、一度は其を眞似ない譯には行きませんでした。若し私の血潮が貴女の苦痛を直される程でございますのなら、私は默つて其血を注ぎませうし、又私の熱心に就いて、極く儚ない證跡しか貴女にお示しすることが出來ないのを嘆ずる位でございませう。併し曾て二つの心を結びつけて居た、最も優しい、最も純潔な、最も神聖な絆を絕ち切る！　夫れは全世界の力を以てしたつて到底私にさせることは出來なかつたことです。それは只貴女にだけ出來たことでムいます。

私は全く貴女の御望みなされるだけ永く彼女と別れて生活することを誓ひます。決して訪問もしなければ手紙も差し出しません。私は彼女の生命を保つ爲にも、あれ程必要な尊い貴女の御生命に依つて誓ひます。貴女が彼女にも私にも御命じなさることに全く服從致します。怖ろしいのですが、決して不平は申しません。彼女の幸福は自分の不幸の慰籍でありますのなら、私は死んでも嬉しく思ひます。彼女によい良人をお選びになる必要があるのです。そして彼女が

私に「貴君より夫の方をずつと愛せます」と仰言れる様にして下さい。夫人、其夫となる方は私に缺けてゐる事を持つて居らつしやいますでせうけれど、若い私の様な心をお持ちでなかつたら、ジュリイさんにとつて何の價の無い方でせう。私はたつた優しい正直な心しか持つて居りませんのです。噫併し最早何も持つて居ません。總てを親和させる戀は人間の重みを加へます。私の感情にあの時に從つて居りましたら、何度貴女に御話しゝながら、母様と云ふ親しみの詞が口から貴女に向つて迸つた事でございませう。

何卒宜しくならないこの誓を御信じ下さい。決して僞は言ひませんから。若し貴女の尊敬を濫用した日があつたとしたら、私自身が自己を欺く最初のものです。私の經驗の無い心は逃げ去るにはもう遲い時になつて初めて危險を感じます。私はあんなに良く教へて下すつた、自ら戀を制する術が、彼女の中に秘んで居たとは知りません。御願ひですから心配しないで下さい。此の世の中に私よりも彼女の戀安、喜悦、名譽を貴重にするものがあるでせうか？　否私の言葉と心とは貴女の約束を保證さしたのです。私の立派な友の名譽と同樣に私の名譽にかけて、無分別なことは實際決してありませんでした。人は私が如何樣な悲哀に依つて私の一生を終らせたかを知らずに、私は生活の最後の息を引き取るでせう。貴女を苦しめる悲哀を御除き下さい。併し私の悲哀は鋭くなつて行く許りです。私の魂を引き裂く涙を御拭ひ下さい　御丈夫におなり下さい」幸福な光におひたりにならない彼女をも健やかにしてあげ下さい。貴方の御爲めに其幸福すら拋棄なさつたのですから。彼女に依つて貴女御自身をも幸福になされるのです。終りに申しますが、生きて居て下さい、彼女に生命を愛させるために。噫！　戀の過ちを大目に見て下さい、ジュリイさんの母樣として居らせれる事は尚ほ生活に讃辭を捧げるに充分な運命で御座います！

書簡第三　ジュリイの戀人からドルブ夫人へ

（前書簡を同封して）

殘酷です貴女は、これが私の返書です。若し貴女が私の心を御知りでしたら、若し貴女の御心が尚豐な感じをもつていらしたら、涙に暮れて下さい。併し決して無用な尊敬を高く賣つて、私の生命の苦痛を增加する打擊を加へないで下さい。

殆んど若々しい蕾の時から、貴女の眼の下で結ばれたあの緣を解き破つたのは貴女の酷い手でしたね。貴女の友誼は本當に御愛想の上被りです！　私は貴女の思はれる通り不幸なのです、殆んど不幸の極りなのです！　噫貴女は貴女のお作りになつた不幸を御存知ですか？　貴女の犯された罪は私には贖ひ難いのも能く御分りですか？　互に生きて行くよりも死んで了つた方が千倍も增しだと云つたことが分りになりませんか？　ジュリイさんの幸福に就いて何を話すのです？　お母樣の危險の何を話すのです？　母樣

の生命？　私の？　貴女の？　彼女の？　全人類の命？　聴私達を結びつけて居る軟かい感情と比らべたら、之等が何んでせう？　貴女は野蠻な、情知らずの徳の塊りです。私は貴女の御言葉を聞くには聞きましたせう、私が貴女の仰しやる通り行つても、私の心は常に貴女を憎んで居ます。激しい悲哀に沈んで居る魂に、貴女の慰安なんかゞ何の役に立ちませう！　貴女は不幸を司る神の偶像です。貴女は運命の與へる方便すら奪つて、悲哀を深める許りです。併し貴女の御言葉に從ひませう。本當に殘酷なのですが、服從致しませう。私は出來る事なら、貴方の樣に情無い聾人の樣になり度いものです。此の世界にあつて親しかつた人々を忘れて了ふ、私はジュリィさんの名も、貴女の名も言はれるのを聞き度くはない。自分の心に堪えられない思出を想ひ起し度くはない。怨恨、怒りは此樣な不幸に對して、私を尖らさせます。片意地は勇氣に代つて私を支へて居ます。感情的では堪えられなくなりました。人生を〇てた方が良い位です。

書簡第四　ドルブ夫人からジユリイの戀人へ

貴君は妾に悲しい御手紙を御書きになりました。貴君の御行爲の中には愛と德が溢れて、貴君の苦痛をすつかり消して居ますわ。貴君はあまり御心が寛くていらつしやるので、爭ふ勇氣すら持つことが出來ませんのです。御手紙中憤りが現はれては居りますが、此のやうに、自分の愛する者に身を犧牲に供することが知れさすならば、それは非難よりも多く賞讃に價ひ致します。貴君が妾をお嘲りになつたに拘らず、貴君に貴君の價値を知つてから後の親密さを妾は決して以前感じたことはありません。

貴君か嫌なものだと信じていらつしやるその德に感謝なさいませな。妾の斯うするのは貴君の戀の爲めよりは、貴君自身の御爲めを考へての後なんですわ。あの私の母ですら貴君の犧牲にすつかり感動して了つたのですの。伯母は感に打たれて、御手紙が讀めなくなつて、心弱くも御手紙をジュリィさんに御見せになつたのですわ。ジュリィさんが御讀みになりながら、呼吸や涙を御抑へになつた努力は、伯母樣を卒倒させて了つたのです。

優しい母は貴君の御手紙に力强く感動して、眼に映る凡てから、貴君方御二人の心が何の位普通の規則以外であり、又何の位貴君の愛情に心からの同情が滿ちて居たかを了解し始めたのですの。人の力も時の經過もそれを拭ひ得ないことを知つたのですの。慰籍を必要となさる伯母さまが自分からジュリィさんをお慰めになつたかも知れませんわ。若し母子の證と云ふものが引き留めなかつたら。又從妹は是迄に妾にもついぞ許したことのない程、貴君の秘密を打明けるぐらゐ伯母樣を信ずるやうになりました。昨日もジュリィさんの前で、伯母樣の口から、無分別にもこんな言葉が漏れたのです——「妾獨りの考へで、何うにかなるのだつたら——」と全部を言ひ切つてはお了ひにならなかつたのですが、ジュリィさんがお手になさつた激しい接吻から察しますと、從姉にはそれが良く分つたのに違ひありませんわ。伯母樣が度々剛情な伯父樣に話さうとなさつたのを妾は知つてますわ。併しジュリィさんを憤怒の矢面に立たせはしない

か、又自分も叱られはしないかと思ひお煩ひになる臆病な心で控へていらつしたのです。伯母様の衰弱していらつしやる事や、病氣が感じ易い性質にして了つて、決心の定らぬ先に決心が崩れて了つて、實行なんか出來ないのですわ。

兎に角貴君のお惹き起しになつた過失にも關らず、御互の戀の中に感ぜられる正直な心のため、伯母様は、貴君方が交通をもうしないと仰言つた御言葉に信用なさつて、ジュリイさんを嚴しく監督する心配は無用であると云ふ意見をお懷きになつたのです。ですから若しジュリイさんがその信任に應ずる樣になさらないなら、從妹は母樣の御心配をなさるに當らぬつまらない人です。若し貴君があの立派な伯母樣を陷れ、貴君に對する尊敬を濫用なんかなさつたりするのでしたら、貴君方は慚死なさらなければなりませんわ。

妾は妾自身すら持つて居ない希望を、貴女の御心の中に開かせ樣とは求めて居ないので御座います。唯是丈は云ひますわ、最も正直な方々は最も賢い方々です。——この言葉は全く眞實ですわ——貴君の戀に殘つて居る手段があると致しますなら、それは名譽と理性が命令する犧牲の中に存するものですことを。母、兩親、友と父親を除く總ての人々は、皆貴君の犧牲に依つて救はれる許りです。決してそれ以外の道に依つて救はれ無いものと存じて居るのです。絕望の谷間に迷つた際に、惡魔に呪ひの言葉を囁かれたとしても、貴君が今幸福にお達しになる最善の法は德の途を行かれることだと云ふことを充分證明して下さい。さうなされば幸福は德を伴つてより、純粹な、より、堅固な、より愉快なものになるのですわ。若し幸福に缺ける所があつたら、德が無いからだと申してもようございます。何卒勇氣を出して下さい、男である事を證明して下さい。否、いつもの通りの貴君であつて下さい。若し貴君の御心を良く存じて居たとするならばジュリイさんを失ふ最も殘酷な仕方は、彼女を獲る資格の無いことになるのですわ。

書簡第五　ジュリイから戀人へ

母は亡くなつて了つたのです！　妾の眼はその眼の永久に閉されるのを見ました。妾の口はその最後の吐息を受けました。母の呼んだ最後の名は妾の名でした。最後の眸は妾に注られたのでした。否母が去つたのは生活では無い樣でした。何故つてこの世の生活が彼女に樂しいものであつたとは殆んど妾には考へられないのですもの。彼女は唯妾に丈から離れたのです。母は目あても、希望もなく、不幸と過失とに壓しつぶされたものゝやうに見えました。死は彼女になんでもなかつたのです。唯妾をこんな狀態に見棄ておく了ひになるのを苦になさつたのみですの。彼女は本當に正しい人なのでした。此の世に何んの後悔しなければならぬものがお在りでしたでせう？　現世に彼女の忍耐と德に報ゆる値のあるものがあつたでせうか？　唯天國での酬ひは彼女を待つて居るでせう？　何をこの世に思ひ殘すことがありませう、妾の汚辱を泣く外に？　純潔な眞操な魂よ！　妻として母として無上の魂よ！　貴女は今は光榮と感謝の天國に

生きて居らつしやいます！　貴女は天國にお生きなさる！　妾は！　悔悟と失望に沈み、貴女の御世話、貴女の御言葉、貴女の御愛撫を永久に失うて、妾は幸福に對しても死んだと同樣別れたのです！　平和にも無垢な事にも死に別れたのです。妾は貴女の死を感じ自分の恥辱を見る許りです。妾の生活は苦痛と悲哀の生活なのです　御母樣よ、優しい御母樣よ、噫妾は貴女の代りになら喜んで、死にませうものを！

　おゝ不思議！　どうした熱狂が不幸な妾を迷はせ、決心を忘れさせたのでせう？　何處へ涙を濺ぎませう？　何處へ嘆息を漏らしませう？　妾の涙を嘆聲をうけて頂く方は、私の涙と嘆との源をお作りになつた殘酷な方なんです　妾の悲しい不幸を作りだした方と私は、私の不幸を慨かうと思ひます。本當ですわ、貴君がお蒸き起しになつた妾の苦惱を分擔して下さい。貴君！　妾は貴君の爲めに母の胸に短刀を刺したのですもの。貴君から汚いて出て來た不幸を嘆いて下さい。妾と一緒に貴君の犯された母殺しの恐ろしさに慄へて下さい。妾と同じく慘めな方に、何うして眼を向けられませう？　良心の苛責のまに〳〵誰の前に身を屈めませう？　妾の罪の共犯者の外に、誰れが充分それを了解することが出來ませう？　良人の苛責を逃れ樣なんてする願ひは、妾には到底出來ません。激しい後悔から湧み出る不純な涙を、自然の故にして平氣で居られませう？　妾は母樣の悲しい最後を靈し、死を御急がせしました不幸に顏へて居ます。妾を愍む心からそんなことには氣がつかない眞似をなさつてもダメでした。母樣の窘態の進まれたのは病の自然の結果だと云ふ風をなさいましたが、それもダメでした。信用して居る從姉樣も左樣に申されますが駄目ですわ。何物も妾の後悔に破れた心臟を誤魔化す事は出來ませんわ。妾の永遠の惱として、私はあんなに御世話になつた人の生命を縮めた怖ろしい考へを墓場に行くまで保つて行きます。

　おゝ貴君、神は怒りに任せて妾を不幸と罪人にする爲め、貴君を御授けになつたのですわ。何卒貴君の御作りなすつた涙を、最後に貴君の胸に流さして下さいませ。妾は昔の樣に共通の苦痛を分擔することは致しません。噫これが心にもなく漏れた御別れの挨拶ですの、最後ですわ。愛の力は失望に破れて魂を離れましたのです。尊い母樣の爲めに妾は涙で殘りの日を淨めませう、母の生命を奪つて了つた熱情を母の爲に犧牲にすることは出來ますわ。假令母の苦しみを贖ふ爲め熱情を制する事が、多くの價を拂ふとも、妾には幸福でせう。噫母樣の不死の靈が妾の心で居りましたら、屹度私の棒げる犧牲は彼女にふさわしくなくはないといふ事を御存じでせう。妾に以前貴君が御靈し下された力を御分ち下さい。若しあんなに親しい、又淋しい交際の思出を尊重なさるならば、何卒御願ひですわ。妾を離れて下さい。御手紙をもう書かないで下さい。悔いを增さない樣にして下さい、出來ることなら御互ひに仕合つた事を忘れて下さい。何卒妾の眼に貴君の御姿の映らない樣に、妾の耳に貴君の御名前の聞えない樣に、何卒妾の心情を思つて苛立てないで下さい。戀の名で敢へて斯う申しますが、その戀も既う許されませんわ。深い悲哀に最後の誓の聽かれない悲しみをつけ加へないで下さい。最後に左樣なら。

　妾の唯一人の親しい貴君……噫何と云ふ情ない女でせう……左樣なら永遠に……

書簡第六　ジユリイの戀人からドブル夫人へ

終に幕は破れて了ひました。長い幻想は滅びました。樂しい希望の光は消えて了ひました。心の永遠の糧としては悲しくはあるが、樂しい思出より外に何物もありません。この思出こそ私の生命を支へ、且つ今は無い幸福の、儚ない感情の苦惱を培ふものなのです。

本當に私は無上の幸福を味つたでせうか？　ある一日でも幸福な生活に生きた人でせうか？　私の享けた快樂を享受し苦惱を感じ得る人は、苦惱の生活に生きる爲めに生れた人ではないでせう乎？　私の今の、それを失つても、尚生きて居られるでせうか？　相反した感情が一つの心の中に芽ばへて行くものでせうか？　快樂と光榮の過去の日よ！　お前等は死すべき人間といふものゝ日ではなかつたのだ。お前達は滅びるには、餘りに美しかつた。甘美な恍惚がお前達の續いてゐる間を飽滿させて、永劫の歡喜のやうに一點に集中させて了つた。私には過ぎたものも未來もなかつた。十萬年の歡喜を一時に味つて了つたのです。噫お前達は稻妻の樣に消えた。永遠と思つた幸福も、私の生涯の一瞬に過ぎなかつたのです。時間はのろ〳〵と、此私の失望の中を秒一秒と時を刻んで行く。懈怠は惠まれてない餘りの日を冗長な年に計へさせる。

神は餘りの生涯を煮え切れないものになされる爲めに、より多くの懊惱を私に押しつけ、より親しかつた凡てのものをして、私を見棄てさせたのです。奥樣！　貴女は今も私を愛して居られるでせう。併し今は或る外の方の御世話をお燒きならなければなりません。他の義務で貴女は忙殺されていらつしやいます貴女が營ては深く御聞き下さいました私の嘆聲が、今は無駄なものになりました。ジユリイさんでさへ元氣を落されて、私を見棄てゝお了ひになりました。悲しい後悔は戀を逐ひ拂ひ、總ては私に取つて變つて了ひました。唯私の心だけは平生の通りですが、私の運命はその爲に怖ろしいものなのです。

私の現在の存在、私のこれからなる可き事が、なんの重大な意味を持つて居りませう？　ジユリイさんは惱まされていらつしやいます。が今は私を思つて下さる時でせうか？　私の苦痛を一層辛いものにするのは彼の方の苦痛なのです。えゝむしろ本當に私は彼方が私を愛することを御止めになり、幸福に暮されることを好みませう！……彼の方が私を愛することを止める……彼の方がそれを希望する……否決して、彼の方が私に面會することも、手紙を書くことも、禁じても無駄です。苦痛を脫することにはなりません。噫それは慰藉を失ふことになるのです。優しいお母樣の死は、優しいお友達を彼の方から奪はなくてはならないでせうか？　お失ひになる事を增しながら、自ら悲哀を輕くしたと彼女はお思ひになるでせうか？　愛！

否々、あの方が私をお忘れになるとお言ひ張りになつても駄目です。あの優しい御心に、何うして私の心と別れられませう？　あの方が何うあつても私が再び結び付けないで置きませうか？　私達の經驗した

情を忘れられませうか？　當時の感情を感ぜずに囘想されませうか？　勝ち誇つた戀が彼女の生涯の不幸を作つて了つたのです。敗れた戀は唯彼女を更に嘆かせる許りでした。彼女は生涯悲哀の中に無益な後悔と希望とに惱まされ、戀にも德にも滿たされないで世をお送りになるでせう。

私は彼の方の過失を嘆いて許り居て、思やることをしないと信じないで下さい。多くの犧牲を拂つて了つた今日では、不服を學ぶには餘りに遲いのです。彼の方の御命令で充分なのです。御命令なされば、彼の方は私の名をもうお聞きになることはありますまい。私の運命の怖ろしさを判斷して下さいませ。私の最大の失望は彼の方を棄てることではありません。私の激しい悲哀は彼の方の心の中にあるのです。自分のよりも彼の方の不幸に就いて一層心を傷めて居るのです。彼の方の何よりも愛して居る貴女、私の考へでは眞に貴女だけが彼の方を愛し得られるのです。クレールさん、愛するクレールさん、貴女は彼の方に殘された唯一の光なのです。その光こそ他の喪失にも增して尊いものです。彼の方を去つた、又彼の方の拒む慰藉を、彼の方に憶つてやつて下さい。清淨い友情で母と戀人の優しさを與へ、幸福を與へる感情の美しさを補つて下さい。さうすれば屹度幸福におなりです。何んなにしても出來るなら幸福にしてあげたいのです。私の棄した平和と、安息の再び見出されることを望みます。さうすれば、彼女が私に殘された苦痛を感ずることが少なくなりますから。私の眼にさへ私は價値ないものであり、彼女の爲めに死ぬのは、私の運命ですから、若し次の樣な考が彼女に平安を與へるならば、彼女に私はもう生きてゐないと思つて藏き度いのです。貴女に依つて最初の德と幸福を取り返へされることを望みます　貴女の御心使ひによつて、彼の方が未だ私を御存じなかつたときの狀態に戻してお上げ下さらんことを祈ります。

噫あの方は未だ娘なのに、お母樣をお持ちなさらんのです！　この喪失こそ掛換への出來ないものです。後悔を知る年齡にある人の慰め難いものです。苛ら立つた心にはこの優しい母樣が必要なのです。この悲哀の中に怖ろしい苛責が、苦惱に加はつたのです。ジユリイさん、貴女は此の怖ろしい感情を知らなければならないのですか？　御病氣を直接看護なされた貴女、不幸な御母樣の臨終の床に居られた貴女！　何卒々々御願ひです、眞實を御話し下さい。私の罪でしたら、この心臟を引き裂いて下さい！　私達の過失の悲哀がお母樣を墓場に落したのでしたら、私は生きる甲斐のない人非人です。こんなに不幸な御互の結婚を考へるのも罪です。大陽を仰ぐのも罪です。私は强いて信じます。あれ程淨い媒が、こんな惡い結果を生じはしまいと、戀は變性した人々の惡い行爲が出て來る爲にはあまりに尊い感情を私達に與へてくれたのです。あゝ神！　神は不公平でありませうか？　兩親の爲め自己の幸福を犧牲とすることを得た魂は、其兩親の生命に手を下す樣な事が出來るものでせうか？

書簡第七　返事

貴君への尊敬を日一日と篤くして行く時、人は何うして貴君への愛を減ぜられませう？　貴君が日に新

らしく價値を高めて行らつしやる時、妾は古い時代の感情を何うして失はれませう？　決して〳〵、妾の親愛な立派な友よ、若かつた日から、互に續けて來ました總てを、將來にも續けて行きませう。妾達御互の隔りが少しも擴けられぬとしたら、それは擴ける餘地がないからですわ。相逢と云つたら、過去には貴君を兄として愛してきましたが、現在の愛は子供に對する樣なものですの。何故つて妾達は貴君より年少な上に、貴君の御弟子なのですが、妾には貴君が妾達の御弟子に見へるのです。貴君は妾達に考へる事を御教へになりながら、妾達は貴君を多感な方に作つて了つたのです。貴君の英國哲學が何んと云つも、この教育はきつと別なものでせう。人を作るものが理性でしても、人を導いて行くものは感情ですわ。

妾の貴君に對する態度が變つた樣に見える理由を御分りですか？　妾を御信じなすつて下さい。これは妾の心が常も同樣なもので無いからではムいません。貴君の狀態が變られたからですわ。希望の光を御持ちになつてゐた間は、貴君の情を愛して居りました。強いてジュリイさんを御所望なされるならば。唯あの方を不幸になさるばかりです。貴君の御面倒になることになるのですもの。妾は寧ろ貴君が愁訴なさらないで、一層不滿足でいらつしやればいゝにと思ひます。共通の幸福が得られない時は、自分の幸福を愛人の幸福の中に求めるのは、希望の絕へた戀に殘された唯一の仕事では無いでせうか？

心寬い妾のお友達のかた！　それを御心に感じて居るよりも實行なすつて下さい。信實な戀人のなされるやうな悲しい犧牲を拂つて實行なさつて下さい。ジュリイさんを斷念して下さい。貴君の安心を代償に拂つてあのかたの安心を購つてやつて下さい。それは唯貴君が彼の方を斷念して下されば良いのです。

其の上、苦痛を忍んで心に浮ぶ變な考を敢へて云ひますよ。併し其の考も慰安なのですから、妾を元氣付けるのですの。第一に眞實の戀は德と同じ樣に、總ての犧牲を拂ひ、堪えられない感情に依つて負はされた或る苦しみや、妾達を其處に導いて來た動機を享け、樂しむ利益を探つて居るものですと、妾は信じますの。ジュリイさんが愛される價のあるものとして、貴君にお愛されになつたし、尙此の後にも愛されるであらうし、それで貴方が幸福であらうと云ふ事を貴君は表明して下さいまし。若い德の總てを拂ひ得る氣高い自愛は、美しさを戀の美しさに交はらせて居ます。貴君には屹度「私は愛するものを占有して居る」、と云ふ言葉に依つては味はれないものを、「私は愛し得る」と云ふ言葉に依つてお味ひなさることができるでせう。その喜は一層永續的な、一層高雅かなもので了ふものですが、後者は常に心に留まつて、貴君が愛をする事が出來なくなつても、尙享け樂まれますものの。

其の上に、ジュリイさんが御仰しやる通りに、愛は人の心臟に滲み込む、本當に最も美しい感情であるものですなら、多くの悲哀の代りに、愛を永續きさせ引き留めて置けば貴君も幸福になりますわ。若し又愛が貴君の言はれた樣に、障碍に會つて激する欲求でムいますなら、よし滿たされても、良いものではあ

りません。愛が歡樂の胸底に消えて了ふよりは、不幸であつても、永續きのする方が增しですわ。貴君の情火は占有、時、不在等あらゆる苦痛の試練に堪へました。あらゆる障碍を征服しました。只總てに優る最強の障害を除く外は。その障害は貴君の情火でも最早打勝たれないもの、却て情火そのものに養はれるものでムいます。世界は此の試錬に堪えた熱情を未だ見た事がありませんわ。貴君の熱情が此の試錬に堪えることを望んだ、貴君は何んな權利を御持ちでしたの？　時間は永い所有の倦怠に、年齡の傾きと、美の衰頽を加へますわ。別離は神が貴君方の御爲めにと定めた事の樣です。貴君方は相互にいつも青年です わ、貴君は貴君方の御別れの際の通りで變らず、いつまでもゐらつしやるでせう。貴君達の御心は墓場に行く迄、美しい幻想の中に、戀と青春とを盡いて生きて行かれるでせう。

嘗て貴君が幸福で御居いでなさらなかつたら、打ち勝ち難い不安は貴君を苦しめたでせう。貴君の御心はふさはしかつた幸福を嘆聲を漏らしながらお惜しがりになるでせう。激しい想像は絕えず求めても得られぬと思はれる樣な幸福を求めるでせう。併し戀は貴君に滿たされた樣な歡喜以外の物を有つては居りませんわ。貴君の御口を眞似て言へば、一年の中に全生涯の快樂を貴方は汲み盡してお了ひになつたのです もの。無謀な會合の明くる日、御書きになつた愛情に溢れた御手紙を思ひ出して下さい。妾は讀みながら經驗したことの無い感激に捕はれたのです。軟かな魂の變らぬ姿は見へませんでしたが。戀に燃へ、快樂に醉ふた心の最後の熱烈さが讀まれました。人は生涯に二度とこの法悅を經驗せられまいし、又これを感じた上は死なゝければならぬかも知れぬと御考へになつたでせう貴君は。おゝ友達のお方、それが頂上でした。僥倖と戀との爲であるとは言へ、貴君の情熾も、幸福も、これを變へることは出來なかつたので御座います。あゝ併し此の瞬間にそ又不幸の端緒なのでしたわ。貴方が戀人を傍にして味はゝれる、新らしい感情を御享けにならぬ前に、戀人は貴君から去つたのでした。恰も運命が落膽失望を貴君の御心に避け得ぬものだと定めた樣に、過ぎ去つた快樂を思出の中に、猶貴君が享けられさうな總ての快樂にも增して樂しいものを遺す樣に。

貴方を常に脫れてゐた、又貴君に殘されて居りました光すら奪つて了つた幸福の喪失を御諦め下さい。幸福と、戀とは同時に消えたのですわね。併し貴君は少しともこの感情だけは御持ちです——愛し續けて居られる此喜なしには居られないと云ふ感情を。消え失せた戀の面影は不幸な戀のそれよりも優しい御心を恐れさすもので御座います。持つてゐるものに對する倦怠は、失くなつたものに對する悔より、百倍も惡いものでムいますよ。

若し悲哀に沈んだ妾の從妹がその母の死に就いて自ら負ふた非難が理由のあるものでムいましたら、妾は云ひますわ、この酷い思ひ出は貴君方の戀の記憶すら毒するでせう、又この悲しい考は永久戀を消させるにきまつてますと。ですが彼の方の悲哀に信用を置かないで下さい。悲哀は彼の方を狂はせて居ますもの或は彼の方の悲哀を重く見たがる空想的な動機が、無暗と悲しむのだと言譯の口實を作つて居るのですも

の。あの優しい魂は苦しみの足りないのを怖れて居たのです。苦痛の感情に猶苦痛を深め様とするのが彼の方には一種の快樂なのです。彼の方はそれでもつて自己を欺いておいでなのです。それはもうきつとなんですわ。彼の方は自分に對しては不眞面目なのです。若し眞面目に自分が母樣の生命を縮めたと信じて居たら、心は怖ろしい苛責に堪えられるでせうか？　否々、屹度涙を流す暇すらなくお母樣に從いてお行きでせう。デタンジュ夫人の病氣は良く分つて居たので御座います。彼の方に不治の胸部水腫症なので した。貴君の御手紙の發見される以前から、人々は彼の方の生命に望を懷いて居なかつたのです　御手紙の發見は彼の力に非常な心配を與へたのでムいました。併し愛の爲につくられた悲しみを何んと云ふ喜びが償つたでせう！　自分の娘の過に心を傷めながらも、その過が何の樣な德によつて贖はれ、心弱さを嘆きながら、娘の魂を賞めなければならぬことを見るのが、優しいあのお母樣にとつては、どんな慰籍だつたのでせう！　自分の娘が、どんなに親愛なものであることを感ずるのが、如何許り彼の方には樂しかつたのでせう！　何んと云ふ變らぬ御世話でせう！　何の樣な失望にお苦しめられになつたでせう！　何んと云ふ後悔！　何んと云ふ涙！　何んと云ふ傷ましい愛撫！　まあ何んと云ふ深い同情なのでせう！　母お苦しめて凡てのものは、娘の眼の中に讀まれたのですわ。貴の御世話、幾夜の徹夜の看病に從はれたのはジュリイさんでした。ジュリイさんの手で彼の方は救助を受けて居らつしたのです。あの時貴君はジュリイさんを御覽になつたら、全く別のジュリイさんを見て居られるのだとお信じになるでせう、生れつきのしなやかな所は消え失せて了ひ、堅い丈夫な方になりでした。堪えられない樣な手仕事にも堪えられて魂は新らしい肉體を與へられた樣でした。彼の方は萬端の御仕事をなされて、まだ何もなさらない樣でした。何處へでもいらつしやいました。又お母樣の枕下に常も跪まづいて、口をぴつたり母樣の手に當てゝ、自分の過失と、母樣の病氣を一緒にしてもつともつと苦しい感情を募らせ樣と、心を貴めて居らつしやいました。最後の日に、病室を訪れた方々で此の不憫な光景につまされて涙を流さない方を妾は見ませんでした。悲しい別れの間際に、此二つの心は何んなに結び合はふと努めたか、別れの名殘惜しさが、母と娘との心を占むる只一つのものであつたことが分つてゐました。生死は問題では無かつたのですもの、若し御兩人が、殘るも、別れるも一緒であることが出來だつたら。

ジュリイさんの暗い考へが行はれるどころか、人々に望める限り、又心の慰籍の及ぶ限りの彼の女の介抱は、母親の病狀の進行を遲くし、又その優しさと、注意とは必然にその生命を永く保たしたことは確でムいます。若しジュリイさんがなかつたら、私共は伯母樣をあれ程永く生かして置くことは出來なかつたでせう。伯母樣自身も妾に何度も繰り返し申されましたわ——死ぬ時になつてからが、自分の生涯中最も幸福な時であつたと、又唯娘の幸福が缺けて居るだけが自分の幸福のうちで唯一つ缺けたものであると。伯母樣の死を心配のせいにしましても、此の心配の起りは遠いのです。その責任を負ふ人は唯伯父樣だ

けですわ。あの方は永い間、軽率と移り氣に身を任せて、青春の情熱を徳の高い妻に比べては心を留める價の無い様な無駄事にすら空費され、年が積つて再びそれが募つて、妻に對してなし難い程の粗暴な行ひをなされたのです。誠心を缺いて居る夫といふものは斯うして過を深くして行くものです。不幸な從妹も怨んで居ましたわ。貴族の盲目的な頑固な宥め難い剛情が、貴君方と彼の人達の不幸を作つたのでムいます。いつも貴方に傾き、消しきれなくなつた娘の戀に氣がお付きになつた叔母様は、秘かに娘の好みと夫の頑固を矯める事の出來ないものを嘆いて居らつしたのです。之が伯母様が不治の病の第一の原因です。貴方の意外な御手紙をお見付けになると伯母様は、貴君が何の位伯母様の信任を亂用してるらつしやつたかをお覺りになつたのです。そのとき伯母様は總てを救はふと思つたら、總てを失ふだらうと怖れて居られました。伯母様は駄目だと知りながらも、夫の氣を引いてみたり、僞倖を恃んで殘らず打ちあけて、義務の範圍を明かにしようと屢お思ひ立ちになつたのですが、恐怖と臆病がいつもその心を挫へさせて了つたのです。口のきける間はためらつて居て、いざ云はうとなさる時は、時機を失つてお了ひだつたのです。口をきく力が無くなつて居らつしたのです。悲しい秘密を胸に秘め、閉ぢながらお亡くなりになつたのですわ。嚴しい伯父様の氣分を知つて居る妾は天眞の感情が、何の位その氣分を和らげて呉れるか知りませんが、唯ジュリイさんの幸福が確定されるのを見れば妾は安心ですわ。

從妹に總て是を一つとして知らんではムいません。併し妾は唯その表面の懺悔を見て、貴君に云ふのでせうか？　戀はあの女よりも小器用ですわ。母を失ふ悔恨で胸一杯の彼方は貴君を忘れようとしていらつしやるのです。併し忘れても、又戀が良心を苦しめて、無理にもあの方に貴君を考へさせますわ。戀は彼方の涙がその愛人と關係あることを望んで居るのです。彼方は最早直には貴君の事は考へないでせうが、戀に迫まられて、彼方は貴君の事をお思ひになるでせう。少くとも其後悔から。戀は巧みに彼女を讒り、もつと苦しみ度い、貴君が彼方の苦痛の主題の中に入つてゐること望ませるのですわ。貴君の御心は多分彼女の心の斯る遁辭をお聞きにならないでせうが、其の遁辭も不自然ではありませんのですの。何故つて貴君方御二人の愛の力は同じであつても、結果は似て居ませんもの。貴君の愛は猛烈な烈しいものでした が彼方のは優しい可憐なものでした。貴君の感情は勢込んで外に現れましたが、彼方のは自分の周圍を廻つて居て、魂の本體に滲み込んで彼方の性質を變へて、了つたのですもの彼の方は知らずの間に變つたのです。戀は貴君のお心を激し、又助けても呉れましたが、彼方の心を弱くし力を失はせ、その德も消してたのです。雄々しい心の働きは絕滅したのではありませんが、中止したので御座いますわ。或る危機に働きが全力を取り返すことがありますかも知れませんが、左樣でなかつたら、元氣は再び返つて來ないかも知れません。若しあの方が失望の途を今一步進めたら、今はもう萬事休無ですわ。併し此優れた魂が少時でも再び擡頭することになりましたら、彼方はもつと丈夫な、もつと偉い又もつと貞操な方におなりですわ二度と過を犯す樣な事は絕對に問題ではなくなりますわ。妾の愛する友達、此の危險な狀態に於て、妾

をお信じ下さいませ、嘗て御愛しになつた方を尊敬して下さい。貴君から來る總ては、例へ貴君自身の意志に反する事であつても、彼方には命にかゝはるものでございます。あの方に取つては、若し貴君があの方の傍に何うしても居りたいとお願ひになれば、或は樂々と望を達せられるかも知れませんけれど、前と同じジユリイさんを得られることは不可能だと御信じ下さい。若しその樣な事をなされば、あの時のジユリイさんに貴君は二度とお會ひになれないでせう。

書簡第八　エドワード卿からジユリイの戀人へ

私は君の心に對しては既に左右し得る權利を持つてゐるのです。君は私に必要でした。私は君に一緒にならうと準備して居た。私の權利、私の必要、私の熱心も何のかゝはりがあらう？　君は私を忘れたのだ手紙なんか寄こさないで呉れ給へ。私は君の淋しい、人おぢた生活を聞き知つた。君の秘密な企てを了解して居る。君は生きて行くのがいやになつて居る乞度。

ぢや死んで了ひたまへ。馬鹿な青年よ！　死んで了い給へ。殘酷な卑劣な男よ！　併し死にながらも忘れないで呉れ、君に親しかつた正直な男に君は忘恩に依つて報いた悲哀を殘したといふ事を。

書簡第九　返事

來て下さい！　エドワード閣下。私はもう此の世では何の喜びをも味ふことは出來ないと思つてゐました。けれども又御目にかゝりませう。貴君が私を恩知らずと思ひ違へになることなどは決して有るべきことでないと思ひます。貴君の御心はそんな思ひ違ひを成さる樣には出來てゐないのですもの。私の心も同樣です。

……ジユリイからの紙片

今は青春の過誤を棄て、間違つた希望を抛棄すべき時だと思ひます。妾はもう決して貴君のものでございますまい。ですからどうぞ嘗て妾が貴君にお托せし、今御父樣が御心任せにしたく思つてゐらつしやる妾の自由を、妾に御返し下さいまし。それが御嫌なら、御斷はり遊ばして、妾の不幸を限りなくして下さいまし、さうすれば貴君はも何も役にもたゝないで、その上妾達二人とも滅びることで御座いませう。

……ジユリイデタンジユから。

書簡第十　デタンジユ男爵から

……（この中に前の手紙があつた）

若し誘惑者である君の魂の內に、何等か名譽と、人間の感情が殘り得るとしたならば、この一人の不幸な女の手紙に答へ給へ。君はその女の心を腐らした。その女は自己忘却に陷つたと、一時私は推測したの

であつたが、もうそんなことをしないだらう。

誰の見さかいもなく最初に來る人に自分の身を投げかけることを彼女に教へた哲學が、その父親に從はない樣に彼女に教へたことを、私は大して驚きはせぬ、然しながら、そのことを考へて御覽、私はどんな場合でも、それで事が足りるといふ望のある時には、溫和な正直な道を取ることを好むのぢや、然し私が君と親しくしてゆくことを望むにしても、貴族でない、平民の爲めに侵された貴族の名譽を、如何にして償ふべきかを私が知らないとは思はないで貰はう。

簡書第十一　返事

閣下！　私には少しも恐ろしくない、無駄な恐迫や、私を辱しめることの出來ない、不正な批難を除りなさらないで下さい。同年の二人の男女の間には、戀より外に誘惑者はないといふことを御了解下さい。そして貴君の御孃樣が尊敬して下さつた一人の男を卑しめることは、決して貴方のなさることではないといふことを御了解下さい。

貴君はどんな犧牲を私に背負せようとなさるんですか？　又どんな口實でそれを要求なさるのですか？私の最後の希望を犧牲にしてしまはなくてはならないのは、總て此私の不幸の源である方になんですか？私はジュリイさんの御父樣なる貴方を尊敬したいと思ひます。然し私が貴君に從はなくてはならないならば、貴君は私の御父樣となつて戴きたうございます、どうしてどうして、閣下！　貴君が御自身の態度についてどんな御意見を持つて御出でになりませうとも、私はその態度に餘儀なくせられて貴君の爲めに、私の心にこんなにも親しく思つてゐる、又こんなにも貴く思つてゐる權利を棄てるやうなことは到底出來ません。貴君は私の生涯の不幸をお作りになつたのです。私が貴君に負つてゐるのは憎みの情だけなんです。そして貴君は私から何も要求なさるものはありません。ジュリイさんは嘗て次の樣に申しました、「今こそ私はほんとに承知いたします、」とア、。彼女の仰言る樣にしなくてはいけません。或る他の人が、彼女を妻とするでせう。然し私はその人よりも、もつと〳〵彼女に相應しい資格のある者でせう。

若し貴君の御孃樣が、貴君の父としての權限に就いて、私に相談して下さるならば、私は貴君の不正なる要求に反抗するように、彼女にお教へするといふことを疑はないで下さい。貴君が濫用なさる權限がどんなであつたにしても、私の權利は貴君のより、一層神聖なものなのです。私達二人を結びつける鎖は、人間の裁判所で裁判される時でさへ、父權の限度なんです。そして貴君が敢て自然の救ひをばお求めになる場合には、貴君こそ自然の法律を輕視した唯一の人なんです。

貴君が復讐すると仰言るあんなに奇妙な、あんなにデリケートな幸福も亦主張しないで下さい。貴君より外の人は誰もそれを犯した人はないのです。ジュリイさんの撰擇を尊重して下さい。さうすれば、貴君の幸福は安全です。何故なら侮辱されるにも關らず、又貴君が舊式な主義を奉じて御出でになるにも關ら

す、私の心は貴君を尊敬します。正直な人が提携する時には、決して他のも一人の人の顔をつぶす様なことはありません。若し私の假定が貴君を傷けるやうなら、私の生命を攻撃して下さい。私は決して貴君に對して私の生命を防ぐやうなことはしません。その上私は貴族の名譽が何んなものから成立つてゐるか、それが知りたいなど〻氣にかけてはゐないのです。然し善良な人の名譽に關してならば、事は私の問題なのですから、私はそれを防ぐことを知つてゐます。いや私は私の生命のある限りそれを純潔に汚れなく守るでせう。

さて野蠻な、あんな柔しい名を受ける價値のない御父樣よ！　一人の柔しい柔順な娘が貴君の偏見の爲めに自分の幸福を犧牲にしる間に、一方恐ろしい親殺しの罪を犯したことを考へて御覽なさい。貴君の悔恨は何日か私の爲に、貴君が私になした惡に對する復讐をしてくれるでせう。さうして貴君は遙か後、間に合はなくなつた時、貴君の盲目的な、ひねくれた憎みは私に對してと同樣に、貴君自身に對しても、悲しいものであつた、といふことを御感じになるでせう。勿論私は不幸なものでせう。然し若し、何時か血潮の叫びが貴君の心の底に湧き上るならば、貴君は貴君の心奥の唯一の寶、この世で美の點でも、價値の點でも唯一つのものなる貴君の御嬢樣を、單なる妄想の爲めに犧牲にした事について、どんなにか私よりも、一層不幸を御感じになることでせう。そしてその女の爲めに、惠み物を澤山に與へて神樣は一人の善良な御父樣の外は何もお與へにならなかつたのです。あの大切な善良な御父樣のみを

下さるのを御忘れになつて、……

前の手紙に封入してあつた手紙

私はジユリイ・デタンジユさんに自分の身を自由に處理する權利と、お心に御謀りにならず結婚なさる權利とを御返しいたします。

書簡第十二　ジユリイから

妾はたつた今起つたばかりで、さうして貴君が御受取になつた筈の手紙を生んだあの場面を貴君に書いて御見せしたう御座います。でも妾の御父樣は非常に正しい處置を御取りになりましたので、それは郵便屋の出發前に、ほんの一寸した間に濟んで了ひました。

御父樣の御手紙は勿論丁度都合のいゝ時に郵便局につきましたの。この手紙に對しては何時もの妾からの手紙に對すると同じ樣にはゆかないと思ひます。貴君は直ぐ樣御決心を遊ばして、この手紙の御手に屆かない前に御返事をなさるでせう。ですから今更あの場面の細々しい事などを御知らせするなんて、後々なんの御役にもたゝないことで御座いませう、妾は妾の義務をつくしました。貴君も御自分の義務を御盡しなさるでせう。さうは申しますものゝ、あゝ！　運命はどんなに妾達を苦しめることで御座いませう。どんなに幸福は妾達を裏切ることで御座いませう。妾達はもう永久に別れることで御座いませう。あゝ！

それよりもつと〳〵恐ろしいことは、妾は誰か貴君以外の方の生活の中に自分の一生を過さうとしてゐることで御座います。……こんなことがあり得ることでせうか！……餘りに情けないことだと思ひますの妾は貴君の御心の中に貴君と共に生活することは出來ました。——それですのに……。おゝ！　義務ですつて？　一體それは何に用ひられるものでせうか？　おゝ！　神樣！……私は默かはしう御座います。恐ろしう御座います。でも結局は沈默の中にかくれることになるでございませう。

今妾の手はペンをも握りかねて、時々は知らず〳〵落して了ひます。數日來妾は少し工合が惡う御座いました。さうして今朝の話は、餘りにひどく妾を激昂させたので御座います。頭も痛う御座いますし、胸も苦しう御座います。そして妾は非常に氣分が惡う御座います。妾は氣絕しさうにさへ感じるので御座います。神樣は妾の苦痛を御憐れんで下さるでせうか？……妾は到底起きてはゐられません。で餘儀なく床に就かうと思ひます。そしてもう決して恢つて起きることなどはないといふ希望を懷いて、自ら慰めようと思ひます。もう御別れです。御機嫌よく御暮らし遊ばせ！

妾の唯だ一人の愛する方よ！　もう最後の最後の御別れです。どうか御機嫌よく……、愛するやさしい妾の戀人よ！　あゝ！　若し妾がもう貴君の爲めに生きないとすれば、妾はもう生きるのを止めたと同じではないでせうか？

書簡第十三　ジユリイからドルブ夫人へ

愛する、殘酷な御友達！　貴女が妾を生き返らせ、又苦痛を御與へになつた事は事實なんでせうか？妾は妾が一番柔しい御母樣に再び御目にかゝれさうになつた幸福な瞬間を、またも貴女の不人情な御看病はあのお母樣を御慕ひして長い間私を泣き續けさせましたわ。そして妾が御母樣に隨いて行きたいといふ欲望の爲めに、この地上から離れようとします時には、妾は貴女を去るといふ悲しみの爲めに、いつも踏み止まりますの、若し妾が生きることについて何等か自ら慰めるとしますれば、それは生きてゐても決して全く死から逃れたことはないといふ點に希望があるからですわ。妾の心にあんなに迷惑を掛けた妾の顏の美しさは、最早ムいません。妾が直りました病氣がそれを除いて臭れました。この幸福な損失の爲めに、妾の心の同意なしに、敢て妾と結婚しようとする可成り上品な、纖細な點に缺けてゐる人は、その結婚したといふ卑しい熱望をゆるめることでせう。その人はもう妾の中にはその人を喜ばせるものは何もないのを見出して、妾といふ殘り物などを餘り氣にかけることはなくなるでせう。御父樣との約束にも背かないで、又御父樣の掌中に生命を握られてゐらつしやるあの方をも傷けないで、妾はその執念深い人をはねつけるで御座いませう。妾の口は沈默を守りますけれども、妾の顏は妾の爲めに話してくれるでございませう。その人の嫌惡の情の爲に、遂に妾を壓制なさる事もなくなるでせう。けれども御終ひには妾が餘

り醜いのに氣がついて、その人の妻として妾を不幸にすることなどはやめてお了ひになるでありませう。

あゝ愛するお從姉樣！　貴女はこのやうにしてはねつけられなかつた、もつと不變の、もつと優しい心を持つてゐらつしやる方を御存じですわ。その方の趣味は決して顏立ちや、姿ばかりに限られてはゐません。その方の愛してゐらしたのは妾自身であつて、決して妾の顏ではありません。妾達が御互に結び合つたのは、妾達二人の全生命によつてですわ。ですから、ジュリイそのものは舊の樣に同じで、その美しさが失くなつた時でも、愛は永久に舊の通り存在してゐることでございませう。けれども其の方は斷念を承知なさつたのでした……。あゝ情の無い方だ！　妾かさうなつて下さいと御願ひしたからこそ、その方はそゝおなりになつたのですわ。その心を取り消さうと思つてゐる人を、その言葉で引き止めようとするのは誰でせうか？　妾はその時妾の心を取り消さうと欲したのでせうか？　妾はそれをしましたのでせうか？　總てはもうない一つの時間を、そしてもうあつてはならない無情の火を絕えず私に思ひ出させるばかりで御座います。妾は妾の心から、この愛する面影を引き離さうと努めましたが、それは無駄なことでしたの。私はその面影が餘りに强く私の心に刻み込まれてあるのを感じます。妾はその面影を引き離さないで、たゞ破らうといたすので御座います。ですから、その優しい懷しい記憶を消失させようとする妾の努力は、たゞ〳〵一層それを深く心に刻みつけるばかりで御座います。妾は思ひ切つて、妾の思ひの烈しさを貴女に御話ししませうかしら。その道上は熱の失くなると共に消えます所が、熱が直つてから、一ほ

私を苦しめるので御座います。どうか貴女の不幸な友達の心の亂れを御承知になつて御憐み下さいまし。そしてその與奪の與へる恐ろしい情熱から貴女の心を御守り下さつたことについて、神樣に感謝して下さいまし。私の氣持が一番惡かつた時にはその恐怖の眞最中、妾は妾の本の側にあの不幸な方を見た樣に思ひました。その時のあの方は、昔妾の生涯の短い幸福の時に、妾の眼を魅惑なさつた樣な、幸福な樂しいお方ではなく、青ざめた、失意の、取り亂した御方で、兩眼には絕望の色が漂つてゐました。あの方は妾の手の一つをお取りになりましたが、そして妾の手は汚れてゐましたのに、御嫌がりなさらないで、又病毒の傳染も御恐れにならないで、あの方の御顏を見て、妾はあの方に突然思ひがけなく御目にかゝつた時に、折々感じた樣な、あの生々した、美妙な情趣を感じたのでした。妾はあの方に飛びつきたいと思つてゐました。人々は私を引き止めました。貴女は妾の眼前からあの方を引き離してお了ひになりました。そして妾に一番つらかつたものは、彼の方の嘆息の聲で御座いました。妾はそれをあの方が遠ざかつて御行きになるに從つて聞いた樣な氣が致しましの。

妾はこの幻が妾に起した驚くべき結果を貴女に御示しすることは出來ません。妾の熱は激しく、長くつづきました。妾は數日の間意識を失くしてゐました。妾はその夢の中であの方に屢々御目にかゝりました。然しそのどの幻もあの最後の幻程妾の想像の中に深い印象を殘したものはありませんでした。その幻

は妾の記憶と感覺から消すことが出來ない程深いらので御座いました。妾は各秒毎に各分毎に、常に同じ姿勢でゐらつしやる、あの方を見てゐた樣に思はれました。あの方の御樣子、御召物、御身振、悲しげな御眼は猶ほ私の眼にあり〳〵と殘つてゐます。妾はあの方の唇が妾の手に押し當てられるのを感じた樣に思ひました。妾は涙で妾の手がぬれるのを感じたのでした。あの方の物悲しい御聲の響は私をぞつとさせます。妾はあの方が妾から遠くに引き離されて行らつしやるのを見ます。妾はあの方が尚ほそのまゝにゐて戴ける樣一生懸命にやります。總ては妾に現實に起つた事件よりも、もつと强くははつきりと想像の場面を描かせるのでございます。

實は妾は貴女にこの打ち明け話しをする爲めに長い間躊躇いたしましたの、恥だと思ふ感情の爲めに到底貴女にこんなことを御話しすることは出來ませんでした。然し妾の激昂、動搖は靜まりますどころか日に〳〵募つてまゐりますの。そして妾は妾の狂人じみた感情を貴女に白狀したいといふ要求にもう抵抗することが出來なくなりました？　あゝ、何んなにあの激しい感情は妾の心を奪ふことでせうか！　どうして妾はこのやうにして理性を失つて了ふことが出來ないのでせう。何故つて少しでも理性が妾に殘つてゐれば、それは妾を苦しめる外、もう何んにも役にたちませんから。

妾は又妾の幻の話に立ち返ろうと思ひますわ。どうか私の單純さ愚かさを御嗤ひ下さいまし。然し妾はこの幻の中にそれと普通の思想とを區別する何かしら神秘的なものがあるのですよ。この幻は總ての人の

人の中で一番善い人あの方の死の豫感ではないでせうか？　神樣は少くとも一度だけは、神樣が妾に愛するやうにして下さつた、あの方に從ふ樣に導いて下さい招いて下さるのでないでせうか？　本當に悲しいことで御座います。神樣からの死の命令は妾に取つては多くの御恵みの中の第一の御恵みですのに……妾はその哲學が何んにも感じない人々を樂しませる、あの總ての議論を思ひ出さうとしました。が駄目でございました。あの議論はもう妾に何んにもそれについて與へてくれないので御座います。そして妾はそれを輕蔑する感じを懷かないではゐられませんの。人々は靈魂は無いと申しますが、妾は魂があると信じたう御座います。然しあんなに緊密に結ばれ合つた二つの魂の間には、肉體や感覺とは獨立した、直接の交はりがあり得るのではないでせうか？　一つの魂が他の魂から受ける直接の印象は腦髓の中に移すことが出來るでせうか？　又その直接印象は一つの魂がそれに與へた色々の感覺を折り返しに他の魂から受けとることが出來るでせうか？……。憐れなジユリイよ！　何んと不條理なことばかりあるのでせう！　何んと情熱は妾達を輕々しく信じさせることでせう！　又活々と感じた心はその心が認めた過ちからさへも、どんなに苦しんで漸く離れることでせう！

書簡第十四　返事

あゝ！　餘りに不幸で感じ易いジュリイさんよ！　貴女は苦しむ爲めにのみ御生れになつたのでせうか？　妾は出來るなら貴女の御苦しみを少なくしてお上げしたいと思つてゐましたけれども、それも無駄なことでしたわね。貴女は絕えず苦しみを求めてゐらつしやる樣に思はれます。貴女のその御傾向は妾の心遣ではどうにもならない程強いのですわ。苦痛の多くの眞の問題には、少くとも空想は加はらないのでございます。妾が御導きすることは有益どころか却つて有害のやうで御座いますから、貴女御自身で貴女を苦しめてゐる過誤から御逃れなさいまし。多分ほんとうの悲しみは今貴女が感じておゐでなさるほど殘酷なものではないでせうよ。それから貴女が夢だと思つてゐらつしやることは決して夢ではないといふことを御了解下さいまし。そして貴女の御覽になつたのは、あの方の影ではなくて眞のあの方であつたことを、又絕えず貴女の想像にのぼる感動すべきあの場面は、貴女の一番御惡かつた日の翌々日、貴女の御寢室で本當に起つたことであると御承知になつて下さいまし。

妾はその前夜可成り遲く貴女の御宅を出ました。良人ドルブはその夜、妾を貴女の傍から離さうと思つて、出かけようとしてゐました。その時忽ち突然、思ひかけなくもあの不幸な方が御氣の毒な御樣子で這入つてゐらつしやつて、妾達の足許に飛びついて御出でになりました。あの方の御話によりますと、あの方は貴女の最後の御手紙を御受取になると、直ぐ驛へ急いで御駈けつけなさつたさうです。そして夜を日に繼いで、三日間どん〳〵御進みになつたさうです。それで町には入る爲めに夜になるのを御待ちにならなければならなかつたので、始めて最後の宿場で御止りになつたとのことでした。妾樣のかしいんですけれども、妾はドルブよりもあの方を接吻することが遲れましたの。（歡迎の意を表することが遲れて貴女にすまないの意味―譯者）妾はあの方の御旅行の理由を知りませんでしたけれども、その結果を豫見することが出來たのでした。多くの苦い記憶、貴女の心配や、あの方の心遣ひや、あの方がは入つてゐらつしやる樣に妾には思はれた不規律等總てのものがその時の優しい驚きを悲しく苦しくさせたのでした。妾は餘り感動してゐましたので、一寸の間あの方を愛撫することが出來ませんでした。ですけれども妾はあの方も感じて下さつた、胸も張り裂ける樣な悲しい思ひを懷いてあの方を抱擁いたしました。そしてその悲しい思ひに沈默して、抱擁し合ふことによつて叫んだり、涙を流したりするよりも、一層雄辨に御互に感じられたのでした。あの方の最初の言葉は「彼方はいかゞなんですか？　あゝどうなさつてゐるのですか？　私を殺すか生かすかして下さい。」といふのでしたわ。妾はその時あの方が貴女の病氣のことを知つていらつしやることが分りました。そして妾はあの方も亦貴女が何の病氣だか御存知ないと思ひましたので、御心配を減らしたいとのみ心を配つてその病氣について、御話してあげましたのよ。あの方は病氣か痘瘡であることを御存知になると直ぐ、何やら御叫びになつて、それから氣分が惡くおなりになり、喪心なさいました。疲勞と不眠とに揚て加へて心の心配の爲めにあの方はすつかり失心してお了ひになつたのでした。

それはそれから恢復するのに長い時間がかゝつた程ひどいもので御座いました。あの方はやつと話が出

來るか出來ない位でしたので、床へお就かせ申しました。自然の力には打ち勝てないものですわね。あの方もそれから引き續いて十三時間御眠みになりました。然しその御睡眠も力を恢復するといふより寧ろ力を失くなすのではないかと思はれる程の激昂を伴つたものでした。その翌日又新らしい困つたことが起りました。あの方はどうしても貴女に逢ひたいとお望みになりました。妾はそんなことをすれば貴女の病氣に激變が起る心配があることをあの方によく〳〵御話ししました。それであの方はもうさういふ危險がないといふ時迄待つと仰つたのでした。でもあの方のお滯在すらも病氣には慥ろしいものでした妾はこの事をあの方がお感じになる樣にと色々努めて見ました。あの方は御怒りになつた調子で妾に仰いました。「どうか貴女の殘忍な雄辯を御愼しみ下さい。貴女は私の身の滅びる樣に、偽り雄辯を御振ひになります貴女が前に私を追放なさつた樣に、又私を追つ拂はうなどゝ御望みになつてはいけません。私はたつた一瞬間、彼の女を見る爲めに世界の涯から百度でも來るでせう。」と。

それから又あの方は性急に、熱烈に次の樣に御附け加へになりました。「然し私を遣つて下さつた創造生の名によつて誓ひますが、彼方に一度も逢はないでは決して此處から出發いたしません。私が貴女を不愼なものにして逢へるやうになるか、或は貴女が私を誓に背くものにして逢へない樣になるか、試して見ませう」と。

あの方は決心してゐらつしやいました。ドルヴはあの方が再び歸つて御出でになつたことが皆に知れない中にあの方を送り返すことの出來る樣に、あの方の滿足なさる方法を捜すことがよいと思つてゐらしく見えました。何故と申しますなら妾は確に知つてゐるますが、家中であの方を知つてゐるのは、ハンズたゞ一人だけでしたから。それであの方を家の者には遣つた名前（第四部に在るサン、プルー、といふ名前を借りて―譯者）でお呼びいたしました。妾はあの方にほんの少しの間だけ逢ふといふことと、あの方は貴女に話しをしないといふことと、あの方の方はその翌日未明に御發ちになるといふことゝを條件にして、次の夜貴女に御逢はせするといふことを約束いたしました。それが濟んでからは妾の心が落ちつきました。妾は夫とあの方とを御一緒に殘して、貴女の側に歸つて行きました。貴女が目に見えて良くおなりになつたのに氣がつきました。發疹は濟んでゐたのでした。御醫者樣は妾に元氣を與へ、希望を與へて下さいました。妾は豫めバビーと相談いたしましたので、妾はその時を擇んで人を遠ざけ、夫にあの方を連も、なほ貴女は頭が惡くなつてゐらつしやいましたので、妾はその時を擇んで人を遠ざけ、夫にあの方を連れて來る樣に言ふ事といたしました。それは妾が發作の終らない中ならば、貴女はあの方を認め難い狀態にゐらつしやると思つたからですの。妾達は心を痛めてゐらつしやる貴女の御父樣を、室からお出しするのに非常な苦心を致したのでした。何故かと申しますなら、御父樣は每晩殘つて看病したいとお言ひ張りになりましたからです。遂々妾は怒つて、御父樣に、お父樣が人々の骨折を少なくして下さらないこと、妾も同じ樣に看病する決心をしてゐること、どんな御父樣でも、御父樣といふ以上、その愛情は妾の愛情よ

りも用心ぶかくないといふことを知つて御出でになれば、手數もかゝるまいと申し上げました。御父樣はしぶ〳〵出てお行きになりました。で妾達だけ殘りました。ドルブは十一時に着きましたが、あの方は御道一殘して來たと申しました。妾はあの方の腕を取りました、あの方は木の葉の樣に震へてゐらつしやいましたが、餘儀なく坐つてお了ひになりました。あの方は苦しさうに呼吸してゐらつしやいましたが、餘儀なく坐つてお了ひになりました。

その時遠くにある光からの仄きで、何か或るものを御見別けになり、深い嘆息をなさつて、あの方は仰いました。「さうだ！　自分は矢張り同じ場所を見てゐるのだ。自分の生涯で曾て一度自分はその場所を通つた……同じ時間に……同じ樣にひそかに……心も今日の樣に震へてゐた……。おゝ！　何んといふ向ふ見ずの人間だつたのだろう。自分は死すべきものであつた。然るに自分は敢て……を味はうとした。自分は今總てが自分の魂が醉つてゐたあの悅樂を息づいてゐる、この同じ隱れ場で何を見ようとするのか？又自分の無我夢中の激情を作つてくれたり、或は共に分ち合つた。この同じ物の中に何を見ようとするのか？」と。

親しい從妹よ！　妾はあの人を感動させる場面の細かしいことを貴女の御氣の毒な心は餘り話すことを差し控へませう。あの方はそれを約束なさつたのでしたもの。あの方はそれを約束なさつたのでしたもの。あの方は跪いて泣きじやくつてゐらつしやりながら、貴女の床の几帳を接吻なさいました。それから手を擧げ、眼を擧げて御覽になりました。あの方は重々しい苦しさうな聲を御出しになりました。あの方は苦痛と叫び聲を、辛くも抑へて見えました。

貴女はあの方を御覽にならないで、而も機械的に一本の腕を御出しになりました。それをあの方は一種の狂亂を以てお握りなさいました。あの方が貴女の病氣の手にお注ぎになつた火の樣な接吻は、貴女をとり圍んでゐる總てのもの、音や聲よりも一層よく貴女を眼覺したのでした。妾はあの方をお認めになつたと思ひました。妾はあの方が抵抗しお嘆きになりましたけれども一瞬間で室の外へ御出しして了ひました。それは妾がこんなに一寸の間あの方が見えたといふ事を、貴女が人事不省でゐらしやつたので、幻想の中でさうお思ひになつたのです。といふ樣に後でお欺ししようと思つたからです。然し、妾はその後貴女がそれに就て妾に何んにも仰有いませんでしたので。それをお忘れになつてゐるんだと思つてゐました。妾はバビーにそれを御話ししてはならないと口止めして置ましたが、バビーはその約束を守つたのでした。でもそれは戀が調子を狂はせたり、又もう時間も消し去ることの出來ない記憶を釀すばかりの何といふ無駄な用心でしたでせうか！

あの方は約束通りに御出發になりました。そして妾は貴女の近所には止まらない、といふことをあの方に約束させて了ひました。併し貴女！　話は之で終つたのではありません。妾は前の話と同じ樣に長い間貴女の知ることの出來なかつたことをお話し一て了はなくてはなりません。エドワード卿がその二日後御

立寄りになりました。

そしてあの方に追ひつかうと急いで御行きになりました。エドワード卿はあの方にディジョンで追ひつき遊ばして、あの方が病氣になつてゐらつしやるのを御見つけになりました。あの不幸な方は痘瘡が傳染つてお了ひになつたのでした。あの方は決して傳染つてはゐないと言つてそれを妾に匿してゐらつしやつたのでした。そして妾は前以て注意しないで、あの方を貴女に御連れしたのでした。あの方は貴女の病氣を直すことが出來ないので、病氣を共にしようとお思ひになつたのでした。あの方が貴女のお手に接吻なさつた仕方を思ひ出して見ますと、妾はあの方が御自分から望んで痘種をお受けになつたのだといふことを疑ふことは出來ません。是以上悪くしようといつても、悪くすることは出來ませんですけれどもそれは戀の種痘でしたの。そしてそれはあの方にとつて幸福なものでした。生命の父なる方はその痘種を曾てあつた一番優しい戀人に傳染す爲めに取つてお置きになつたのでした。でもあの方は今はお恢りになりました。そしてエドワード卿の最近の御手紙によりますと、あの方達は今現にパリーに向つて再び御出發になつてつ居る筈でございます。

本當に愛らしいジュリイさん！　何んの理由もなく貴女を驚かしてゐた、痛ましい恐怖を追ひ拂つてしまう事の出來るものがこゝにありますのよ。貴女はずつと前からあの方のことを斷念してゐらつしやいました。そしてあの方の御生命は安全でございました。ですからたゞ貴女の生命を保持してゆくことばかりを御考へなさい。そして快よく貴女の心が御父樣の愛に約束なさつた犧牲を御履行なさいまし。無駄に仇な希望のおもちやになつたり、又空想に耽つたりなさることを御止めなさいまし。貴女は貴女の醜さを誇ることを餘り御急ぎになります。どうかもつと謹愼に御なり下さいまし。妾を信じて下さいまし貴女が醜婦とお成りになるには、未だ〳〵殘された問題が餘りに澤山ムいますわ。貴女は殘酷な傷害を御受けになりました。けれども貴女の御顏はそれを逃れたのでしたもの。貴女が復讐だと御思ひになつてゐるものは直きに消えて了ふ赤色に過ぎません。妾は貴女よりも、よつほどひどくやられました。ですけれども、貴女は妾がひどく醜いとはお思ひになりません。妾の天使！　貴女は貴女が何んと御思ひになりましても、それにかまはず、美しく御なりになるでございませう。そして三年間ゐらつしやらなくても、八日の間に御愼き遊はした戀の病から、御恢りになることが出來なかつた、あの無頓着なウォールマールさんは、始終常に貴女を御覽になつて、その戀愛病から御恢りになるでございませう。おゝ若し貴女の御取りなさる手段が、たゞあの方に不快の思ひをおさせするといふだけでしたら、到底それの成功する見込はありませんわ。貴女の運命は何んなに絶望でせうか？

書簡第十五　ジュリイから

それは餘りでございますわ。それは餘りでございますわ。貴君は御勝ちになりました。妾はもう澤山の

戀の試練には堪へられません。妾の抵抗力は失くなつて了ひました。妾は妾の全精力を使ひ果して了ひました。妾の良心はそれに就いて喜ばしい證據を擧げてくれますのよ。神樣は御自分が妾に御與へ下さつたより以上のものを妾に御求めになることはないと思ひます。妾はそれを望みますわ。貴君が數多度御買ひ受けになり、そして貴君の心をあんなにひどく苦しめた妾の悲しい心は、すつかり殘す底なく貴君のものでございます。妾の心は妾が貴君に御目にかゝつた最初の時から貴君のものでございました。妾の心は妾が最後の息を引き取る時迄貴君の中に殘るでございませう。貴君は餘りよくそれに相應しい資格を持つてゐらつしやつたのですから、それを御失ひになるやうなことはございません。そして妾は正義を顧みないで、空想的な道德に仕へるのに疲れて氣力を失くして了ひました。

お、優しい寛大な心の戀人よ！　貴君のジュリイは永久に貴君のものでございます。永久に貴君を愛するでございませう。さうでなくてはなりません。妾はそれを望みます。いゝえ妾はさうすべきでございます。妾は戀が貴君に與へた主權を御返しいたします。それはもう決して貴君から奪ひ取られることはないで御座いませう。虛僞の聲が妾の心の奥で、何かぶつ〳〵言つてゐますが、それは無駄でございますわ。妾はもうその聲に迷はされはしませんもの。

その虛僞の聲が、神樣が妾に愛するやうにおさせ下さつたものを、永久に愛するといふことについての色々なものに反對に妾に置いた、あの寂しい義務は、一體何でございませうか？　總てのことの中で、一番神聖なことは、貴君に對してのことではないでせうか？　貴君にこそ妾は總てのことを御約束したのではないでせうか？　妾の心の最初の誓願は、決して貴君を忘れないといふことではなかつたでせうか？　そして貴君の仕すことの出來ない忠實な心は、妾のそれに對して又新らしい結緣となつたのではないでせうか？　妾を貴君に御任せする戀の大歡喜の最中で、妾の只一つの悲しみは、こんなにも愛する、正しい感情と戰つたといふことで御座います。自然！　お、優しい自然よ！　總ての貴君の權利を再び取つて下さいまし、妾は貴君を滅ぼす野蠻な道德を擯棄いたします。貴君が妾に御與へ下さつた心の傾向は、何度も〳〵、妾を誤らせた理性より、一層人を迷はするものでせうか？

妾の愛する戀人よ！　これらの優しい心の傾向を尊敬して下さいまし。貴君はそれを嫌惡するには餘りにそれの恩を受けてゐらつしやる所がありますわ。併しその親しい優しい分け前に御苦しみなさいまし。血族と友情の權利は戀の權利によつて消されないことに御苦しみなさいまし。貴君に隨つて行く爲に、妾の生れた御父樣の家を永久に棄てるとは考へないで下さいまし。妾が神聖な權威が妾にまかせる絲の絆を拒絕することをお望みなさらないで下さいまし。妾の母を失つた事は殘つた父を苦しめてはいけないと教へてくれました。いゝえ、父は妾から今後總ての慰安を期待してゐる方なんですから、妾は心配で苦しめ惱まされた、その人の魂をこの上悲しませるやうな事はしない積りで御座います。いゝえ、いゝえ。妾は自分の罪を認めますわ。けれども、それを嫌ふことは出來ません。義務、名譽、德、總て、これ等のこと

はもう妾に何んにも言ひません。ですけれども妾は決して血も涙もない人間ではありません。妾はすつかり弱つて了つたのです。けれど心變りした人間になつたのではありません。妾は決心いたしました。妾は妾を愛する方を決して惱ましたりなどいたしませんと。約束の奴隷となり、空しい名前を欲しがつてゐらつしやる御父樣が、御自分の御約束なさつた妾の結婚を御心任せになさる事を、妾は望んでゐるのでございます。妾はたゞ戀ばかりが妾の心を自由にするのを望んでゐるのでございます。そして妾の涙が妾の優しいお友達の胸の中で、決して流れるのを止めないことを望んでゐるのでございます。妾はつまらないものでも、不幸なものでも厭ひはいたしません。併し私にとつて親しい總ての方は、出來ますならば幸福で滿足でゐらつしやるように切望してやまないので御座います。三人總掛りで妾の唯一の生命を作つて下さいまし。そして貴君の幸福が妾に妾の惨めさと絶望を忘れさせて下さいまし。

書簡第十六　返事

私のジユリイさん！　私達は共に再生しませう。私達の魂の總ての眞實の感情が、再びその進路を取つて進んでゐます。自然がその存在を私達の爲めに保持してゐたのです。そして戀は私達を甦生させます。貴女はそれを御疑ひになりますか？　貴女は敢て貴女の心を私から除き去ることが出來るとお思ひなんですか？　えゝ！　私は貴女より一層よく、神樣が私の爲めに作つて下さつた、あの心を知つてゐます。

私が死ぬまで失ふことの出來ない共通の命によつて眞の感情が結びつけられて居る樣に感じます。その眞の感情を分つこと、いや分たうと望むことでさへ私達に關係ある、私達次第で如何ともなる事でせうか？　それは人々が作つて、破壞することの出來る緣の絆で　御互に結びついてゐるものでせうか？　いゝえ、いゝえ、ジユリイさん！　さうではありません。若し殘酷な運命が私達に夫婦といふ名前を拒絶しましても、何んな物でも私達から忠實な戀人といふ名前を奪ひ取ることは出來ません。それは私達の悲しい日々の慰安となるでありませう。そして私達はそれを墓場まで持つて行くでせう。

この樣にして、私達は苦しむことを再び始める爲めに、生きることを再び始めませう。そして私達の生命の感情は私達にとつては苦痛の感情に外ならなくなるでせう。私達はどうなるでせうか？　何故私達は普通りの私達でないのでせうか？　何處に至上の幸福のあの歡喜があるのでせうか？　それで以て道德が私達の熱情の氷を活氣づけた、あの美妙なこの上もない恍惚は何處にあるのでせうか？　私達からは、私達の戀の外何も殘つてゐません。戀のみが殘つてゐます。そしてその魔力は蔽はれてゐます。餘りに柔順な娘よ！　勇氣のない戀人よ！　總ての悲しみは貴女の過誤から來るのです。私は眞に悲しいのです。もつと純粹でない心ならば貴女をそれに夢中にさせる事も、もつと少なかつたでせう。そうです。私達を亡ぼすことは私達を結ぶ絆の正直なことなんです。その心を滿してゐる、正しい感情はその心から悔口といふこと迄ひ出してしまつたのです。貴女は處女の優しさと、制御す

ることの出來ない戀とを調和させたいと御思ひになりました。貴女は總ての傾向と同時に、自分の身を仔せて、それ等の傾向を調和させる代りにそれ等をごつちやにしてゐらつしやいます。そして道德を高唱なさつた結果、自ら罪ある者となつてゐらつしやいます。おゝジュリイさんよ！　貴女の想像もつかない大きな勢力は一體何でありませうか！　何んといふ不思議な力で貴女は私の理性を魅することでせう。私達の熱情の火で私を赤くする時に於てさへ、貴女は貴女の過誤で自分から評價しようとなさいます。貴女は貴女の良心の苛責を共に分つて、貴女を讃美することを強ひて私におさせなさる程です。良心の苛責！それをお感じになるのは貴女ですか？　私が愛してゐた貴女ですか？　一體、罪は貴女の心に近づくことが出來ますかしら？　貴女は殘酷です、私のものである其心を私に御返し下さるなら、どうかその曾て私に御與へ下さつた通りにして御返し下さい。

貴女は何を私に仰言つたのですか？　貴女は敢て私に何を了解させようとなさるんですか？　貴女！貴女は他の人の腕の中に一生を送ろうとなさるんですつて！……貴女はもう私のものではありません！……此の上もなく恐ろしいことには貴女はもう私一人のものではありません！　私！　私はこの恐ろしい刑罰を受けるでせう。私は貴女が御自分一人で御生き殘りになるのを見るでせう。いゝえ！　私は貴女を他の人と共に有つよりは失ふ方を好みます。私は神樣が私を動搖させる激昂の高ぶりに堪へる勇氣を、私に御與へ下さることをどんなに希望することでせう。貴女の手が

戀によつて憎まれ、名譽によつて排斥されたその痛ましい結婚の中で、卑しくされない中に、私は自分の手で貴女の胸に短刀を突き刺さうとするでせう。私は不實なものは決して汚さない、一塊の血を貴女の操正しい心から掴み出すでせう。私はこの純潔な血に何ものも消すことの出來ない火となつて、私の血管の中に燃えてゐる血を混ぜるでせう。私は貴女の腕の中に倒れるでせう。そして私は最後の息を貴女の脣の上にするでせう。又私は貴女のそれを受けるでせう。正に息も絶えようとしてゐるジュリイさんよ！……死の恐怖によつて消されたあんなに優しい貴女の兩眼！　あの胸、戀のあの玉座、私の手によつて引き裂かれ、血と生命をどつと流す所のあの胸！　いゝえ、生きて下さい。そして苦しんで下さい。私は貴女がもうこの世にゐつしやらないことを望むでせう。然し私は貴女を刺し殺す程充分には貴女を愛することは出來ないのです！

おゝ！　若し貴女が苦しみでしめつけられたこの心の狀態を知つて下さいましたなら！　曾て一度も私の心は、あんな神聖な火で燃えたことはありませんでした。又曾て一度も貴女の無邪氣さと貴女の德とはこの心にこんなに尊かつたことはありません。私は戀人です、私は愛することを知つてゐます。私はそれを感じます。併し私は一個の人間に過ぎません。至上の福祉を棄てることは人力以上のことです。一夜、たつた一夜が永久に總ての私の魂を變へて了ひました。どうか私からこの危險な記憶を奪ひ取つて下さい。私は眞實なものです。併しあの宿命的な夜が私の心の奥を支配します。そして私の生涯の殘りを、その夜

の影で蔽はうとしてゐます。あゝ！　ジユリイさんよ！　崇拝する貴女よ！　若し私達が永久に可愛さうなものでなければならないなら、尚ほ幸福の一時間がある様に！　そして永遠の悲しみがあるように！

貴女を愛するものゝ言葉をよく聞いて下さい。何故私達は、私達だけで總ての他の人々よりも賢くありか？　何故でせうか！　私達はロンドンやパリーに住んでゐる、あの學者達の群よりも、もつと良い道徳家にならうとするのでせうか？　その學者達は總て御互に夫婦の忠實を冷笑つてゐるんです。そして不義を一つの遊戯と見てゐるんです。その例は決して聽づべき汚らはしいことゝはされてゐません。そこに再言すべきものを見出すことが許されすらもしません。そして總ての廉恥心のある人々はこゝでは、結婚を尊敬する爲に、その心の傾向に抵抗する人々を互に笑つてゐたんです。その人達は次の様に言ひます。「實際、輿論の中にのみある間違は、それが秘密である時には、何んでもないのではないでせうか？　若し不貞な女の夫がその妻の不貞なことを知らなかつたなら、その人は一體どんな損を受けるでせうか？　どんな喜悦を以て妻はその間違ひた償はないでせうか？　どんなにか優しくその疑ひを豫想し、或はそれを晴らさうとしないでせうか？　架空的な疑ひが除かれて初めてその夫は前より一層幸福に生活します。そして世間の人がそれについて非常に評判をした、この所謂罪はその上社會に於て一つの結び緒となります。」と。

おゝ、私の心の親しい友達よ！　私がこんなに聽づべき格言で、貴女の心を再び安心させようと欲したことを神樣は御不快に思し召さないでせう。私はそれらの格言と戰ふことが出來ないで、それを憎惡しますそして私の良心は理性より、もつとよくそれに答へてくれます。私は私が嫌つてゐる勇氣を自ら失くなすといふのではないのです。けれども、又そんなに貴い德を望みはしませんけれども、併し私は私の缺點を辨護することを努める時の方が、もつと罪がないと自ら思つてゐます。そして私はそれについて、良心の苛責を除き去らうとすることは、罪の最たるものだと思つてゐます。私は何を私が書いてゐるのか分りません。私は自ら恐ろしい狀態にある魂を感じます。それは私が貴女のお手紙を、受取る前に持つてゐたのより一層悪いものです。貴女が私にお與へになる希望は悲しく暗いものです。それは數々度、私達を導いてくれた、あんなに純粹な、あの光りを消して了ひます。貴女の嫉妬はそれで汚され、そしてもつと衰れなものになるばかりです。私は貴女を優しい、不幸な女だと思ひます。私の心は貴女の兩眼から流れ出る涙で充ち溢れてゐます。私は貴女の幸福を犧牲にしなければ、味ふことの出來ない一つの幸福のことを、得ようと望んでゐる心を自ら恥じてゐます。それにも關らず私は一つのかくれた熱が、尚ほ私を活氣づけ、そして良心の苛責が、私から奪ひ取ろうとしてゐる勇氣を私に與へるを感じます。親しいお友達よ、あゝ！　貴女は私の戀の樣な戀が、どんな損失を以て貴女に償ふことが出來るか知つてゐつしやいますか？　貴女は貴女の爲めにのみ生きてゐる一人の戀人が、どれ程までに貴女に

生命を愛させることが出來るか知つてゐらつしやいますか？　貴女は私が將來生きること、働くこと、考へること、感ずることを望むのは、たゞ貴女一人の爲めであるといふことは、よくお考へになつたことがありますか？　いゝえ、否貴女は私の生存してゐることの非常に愉快なる源なのです。そして私はもう、貴女の魂より以上の魂を持たないでせう。私はもう貴女御自身の一部分より以上の何ものでもないでせう。貴女は私の心の奥底に非常に優しい生命をお感じになるでせう。それですから貴女は御自分の生命が、その魅力を失ふことをお感じにならないでせう。あゝ！　それでよし！　私達は罪あるものになりませう。併し私達は永しへに德を愛しませう。私達は自分達の過誤の許しを乞ふ所ではなく、それを歎き悲しみませう。それが爲めに、一諸に涙を流して悲しみませう。私達は出來るならば、有金な善良なことを數多くして、それを償ひませう。ジユリイさん！　貴女は何をなさるでせうか？　貴女は何をお出來になりますか？　貴女は私の心からお逃れになることは出來ません私の心は貴女の心と結婚しなかつたでせうか？

私の心をあんなに卑しく苦しめてゐた、成功したいといふ仇な企ては、ずつと前から忘れられてゐました。私はエドワード卿に御厄介をかけてゐる色々の御世話に、專念に沒頭してゆかうと思ひます。エドワード卿は私を英吉利に連れて行きたいと思つてゐらつしやいます。あの方はそこで私があの方の役にたつと主張していらつしやいます。私は英吉利へエドワード卿に隨いて行くのではなく、私の一生涯、私はそこに隱れるでせう。併しそれはたゞ隨いて行女に話すことは出來ないとしても、少くとも私は貴女を見るでせう。私は人知れず貴でせう。貴女の御眼の一瞥は私に十ケ月の生命を與へるでせう。若し私が貴く出發しなければならない時には、私は自分を慰める爲めに、戀人に私が近づく時のやうに氣取つた步み方をするでせう。このやうに屢往來することは貴女の不幸な戀人に一つの變化を與へるでせう。貴女の戀は貴女を見ようとする爲めに出發する時に、已に貴女をしけ〳〵と見るやうに思ふでせう。その非常な恍惚たる記憶は貴女の戀人をその歸る間中、魅惑するでせう。殘酷な運命にも關らず、貴女の戀人の年月は全く失はれはしないでせう。色々の快樂の記されてゐない年月は何もないでせう。そして貴女の不幸な戀人が貴女の側で暮す短い時間は、その全生涯に於て段々增加してゆくでせう。

書簡第十七　ドルブ夫人からジユリイの戀人へ

貴君の戀人はもうゐらつしやいません。併し妾は一人の御友達を又見出したのでございます。貴君も一人の友達を御持ちになつたのでございます。その女の心は貴君が御失ひ遊ばしたより一層多くのものを貴君に御與へすることで御座いませう。ジユリイさんは御結婚なさいました。そして新たにジユリイさんと

運命を共になさつたばかりの心の正しい御方を幸福になさるのに相應しくおなりになりました。多くの輕卒なことをなさつた後で、貴君方二人共をお救ひ下さつた、尚ほ詳しく言つて見ますれば、あの方を恥辱からそして貴君をあの方の名譽を傷つけたといふ悔恨から御救ひ下さつた、神樣に感謝を捧げて下さいまし、ジユリイさんの新らしい御身分を尊敬なさつて下さいまし。そしてジユリイさんが御願ひになつたことでございますが、どうかあの方に御手紙を出さないで下さいまし。あの方が貴君に御手紙を差し上げる迄御待ち下さいまし。あの方は近々に御手紙を差し上げるでございませう。遂々妾が貴君に對して持つてゐる評價に相應する資格を貴君は持つていらつしやる方かどうかを知る時が參りました。そして貴君の御心が純粹な、利害關係のない友情を御感じになるかどうかを知る時が參りました。

書簡第十八　ジユリイからその戀人へ

譯者註―最初一二度の書簡にはジユリイとその戀人とは打解けた間の稱を用ひたが此書簡からはもう友人となつたので、他人行儀になる代名詞が用ひてあるが譯文ではそれが出せないのは遺憾である。

貴君はもうずつと久しい以前から、妾の心の秘密の委託者で居らつしやいましたもの、どうしてあれほどまでに優しい習慣をお失ひになる事が出來ませう。妾の生涯の一番大切な場合に、あの人は貴君と打明けあふ事を望んで居ります。あの人に貴君の御心を打明けて下さいまし。そして長い情愛の物語を御心にお聽き入れ下さいまし。情愛は話する者を時として冗漫しくさせるけれど、それはまた何時でも、聽く者を忍耐強くさせるもので御座いますわ。

夫の運命、と申すよりは父親の意志に、強い鐵で縛りつけられて、妾は新しい生活に這入つたので御座いますの、恐らく死ぬまでは終ることない、かうした生活の始めに、妾はちよつとの間、過ぎ去つた過去を見返りたう御座います。あの尊い時を思ひ返す事は私達にはもう出來ない事となるで御座いませうから、これが妾に殘つて居ります時間の、よい用ひ方だと存じます。そして恐らく、貴君に何時もお分りでなかつた、妾の行爲がそれでお分りになることゝ存じます。少くとも私達お互の間を考へる時に、お互の心が最後までどうならなければならないかを、私達はもつとよく感じるに違ひ御座いません。

妾が始めてお目にかゝつたのは、六年程前で御座いましたわね。貴君は御若くて、御立派で御親切でした、どの男の方も貴君程美しく、立派に見えた方は御座いませんでしたわ。外の方は何の感じも起させませんでしたのに、最初お目にかゝつた時から、妾の心は貴方のもので御座いました。妾の魂に缺けてはならない貴君のお心の影が、御顏の上に讀まれたので御座います。五感は、高尚な感情に對しては、唯器官の役目を務めるだけのものゝ樣に思はれました。妾は貴方の御樣子よりも、一層妾の心の中に感じられる貴君の御心に氣を引かれたので御座います。二ケ月前は自分が間違つては居なかつたと思つて居りました、妾

は考へたので御座います。「私達二人はお互ひの爲めに創られて居るのですもの、若し人間の秩序等が自然の關係を紊しさへしなければ、妾はあの方のものだし、もし誰れかに幸福になることが許されゝば、私達二人が一緒にさうならなければならないんだ」

妾の感情は私達にとつて共通なもので御座いました。若しも妾が只一人、それを感じたのでしたならば妾は身も魂も勞れさせられたで御座いませう。妾が知つて居りました戀は、お互の承諾と心の一致によつてゞなければ、生れる事の出來ないもので御座いました。愛されて居なければ、人は愛するものでは御座いません。少くとも長く愛しはしないでせう。一方だけの愛情、多くの不幸者を作ると云はれてゐるそれは只五感の上だけの事で御座います。若しもそのどれかゞ心にまで這入りこんだとしても、單に間違つた關係によつてで、それは直ぐ分つて了ふもので御座います。肉感的の戀には所有といふ事を省く事は出來ません。そしてその事のために亡んで了ふもので御座います。眞の戀には心を省く事は出來ません。そしてそれが生まれた關係の深さだけ續くもので御座います。かうしたのが私達の戀の初めで御座いました。私達が死ぬときまでかうした風でありたう御座いますの。その時には妾達はそれを一層よく察へることが出來ませう。妾は愛して戴けて居る事、またさうして戴かねばならないことを感じて居りました。口では默つて居り、日は伏せて居りましたものゝ、心ではよく分つて居りました。やがて私達はお互に何故とはしらず、沈默を雄辯にし、伏せた目付に物を言はせ、大膽でありながら、おど〳〵した態度をとり、恐れによつて、希望をあらはし、これといふ說明もせずに總てを言ふ所のものを感じたのでした。

妾は妾の心を感じました。そして貴君の最初の御言葉で、ほうつとなつた樣に思はれました。妾は貴君が御謹しみ深さから、困つた樣な御樣子をなすつてお居でなのを見出しました。そしてその初な尊い御心に、妾は一層貴君を御懷しく存じました。そしてこの苦しいけれど、必然な沈默からどうかして貴君をお出ししようと思ひました。それは無邪氣さには少しも優しない事だつたのですけれど。で妾は柄にもなく從姉樣の眞似をしたのでした。そして餘り眞面目な說明を期待し、又上面だけの快活の御陰で、多くの優しい愛撫を受けようと。おしやべりをしたりふざけ散らしたりしたので御座います。それは貴君をおくつろがせしようと思つてゞ御座いましたけれど、却つてこんな氣象ねが一層御遠慮勝ちにおさせしたのでした。皆やりそこなつて了つたので御座いますわ。柄にもない事をしたりして決していゝ事つてあるものでは御座いませんわね。何て妾は馬鹿だつたのでせう！　その失敗に氣をつける代りに、妾はなほ〳〵進んでそれを繰り返したのですもの。緩和劑に毒を用ゐたのですもの、お默らせしなければならぬ筈の事を却つてお言はせする樣な事になつて了ひました。わざと冷淡にして、なるたけ二人切りにならない樣にして居りましたのは、何の役にも立ちませんでした。この氣苦勞も私の心を現はして居りました。貴君はお手紙を下さいましたそして、その最初のお手紙を、火にくべたり、母樣にお見せしたりする代りに、妾は自分で開いて了つたので御座います。これは妾の罪で御座いました。あとの總ての事に皆これから起つた

ので御座いますもの。識まないでは居れなかつたくせに、この悲しい御手紙に妾は御返事すまいと思つたので御座いました。がこの恐しい心の戦は、身體を損ねて了ひました。もうどうしても落ちこんで行かなければならない、深い淵を見たので御座います。妾は自分が恐しくなりました。けれど貴君をお殺たせするに忍びなかつたので御座います。妾はがつかりした様になつて了ひました。一層の事貴君と妾とは何の關係もないものとなればよいとまで思ひました。遂々貴君がお逝りになれば……とまで思ひました。神様は妾の心を御覧だつたので御座います。かうして努力はいくらかの間違を償ふ筈でムいます。

貴君が何時も妾につかへよう、仕へやうとしておいでになるのを見ては、お話する外はありませんでした。妾はシアイヨーさんの教へを受けて居つたので御座いましたが、それは妾にこの告白の危險な事を分らせる許りで御座いました。口に出して云ふのをさまたげたその總は、悪い結果を巧みに避けさせる事を妾に教へて呉れました。貴君は妾の最後の隠れ場だつたので御座います。そして妾の弱い心に對して、御心をしめておいでだといふ事を充分信じて居りました。また罪から妾を救つて下さる事の出來る方だと思ひました。そして貴君の方を正しいと認めて居りました。妾を大切な預り物として心を盡してお出での貴君を拜見しては、情慾が貴君の御徳の上に自分を旨にして了つてはならないといふ事を知りました。でお互に充分と思はれるだけ平靜に、妾は授業に就いたので御座いました。そして心の底には徳義を重んじる感情があるだけだと信じ切つて、何の用意もなく、快い親しみを味つたので御座いました。あゝけれど、

どんないけない事がかうしなほざりに、根をはるかといふ事も、妾に知らなかつたので御座います。貴方が控へ目にしてお出でなので、妾は妾の控へ目によることも緩めて、大丈夫と思つたのでした。罪のない、子供らしい望みから、優しい友情で、御心の中の御徳を勵まして上げやうと、考へたので御座います。がクラランの蔵の中で妾は、自分にあんまり頼りすぎてゐた事、また人が感能に何か楽じて居るならば、何もその感能に與へてはならぬ事を知りました。一刻一刻、妾の感情は、何ものによつても消されない炎で燃えて行きました。そして猶意志が抵抗してゐましたにしろ、その時から妾の心は傷いて居つたので御座いますわ。

貴君も妾と同じやうにお遂になつてゐらつしやいましたわね。貴君の御手紙は妾を身顫ひさせましたよ、危險は二重だつたので御座います。貴君と妾とを保證するためには、貴君から遠退かなければなりませんでした。それは死にかゝつた徳の最後の努力で御座いました。けれどさうしながら妾は遂々貴君に負かされて了つたので御座います。御目にかゝれなくなると、直ぐ様、憎ましさが貴君にさからふ爲めに殘つて居りました、僅かな力をも妾から奪ひ取つて了ひました。

父は用務が濟ますと、ウォルマールさんの所に妾を連れて行つたので御座います。生活の上に受けてるらつしやる御蔭や、二十年間もの長い交際であの方と御父様とは、切つても切れない親しい間柄になつて居つたので御座います。ウォルマールさんは年も可成りで御座いますし、財産もあり、お生れもいゝので

すけれど、御似合ひな奥様が居らつしやらなかつたので御座いませう。そして兎に角妾に御會なさらなくてはならなかつたので御座います。父はあの方に、妾の事を話したのでたのも實はその爲めだつたのでした。そしてこれまでに何方も御愛しにならなかつたウォルマールさんが妾の氣に入る事を運命は望んで居つたので御座います。父とあの方とは、密かに話を交はしあつてゐらつしやつたのです。あの方は、御家族や財産がお有りだつた北方の宮廷に、色々と整理なさらねばならない事があつたので、その爲めに暇をお取りになつて、お出掛けになりました。多分その時御父様と御約束なさつたのでせう。あの方が御出掛けになると、御父様はお母様と妾に、あの方を妾の夫と定めた事、そして妾に氣おくれさせて、少しも答へさせない様な強い調子で、あの方の申込みをお受けせいと仰有ひました。妾の心をよく御存知で、又貴君の方へ、自然に傾いて行つた事を感付いてお居でのお母様は何度もこの決心を動かさうとなさいました。母様は直接には云ひ出さずに、御父様に貴君の事を考へ、貴君の御心を御知りなさる望みを起させる様に御話になつて居らつしやいました。けれど貴君に缺けてゐる一つ事が持つてゐらつしやる他の總ての事に對して、御父様を無關心にならせて居ります。生れがその他の性格と取り換へる事の出來るものではないといふ事を是認して居らつしやり乍ら、御父様は猶ほ、その他の性だけが他の價値をつけるものだといふ事を云ひ張つてお居でなので御座います。

幸福になる事の不可能が、ほんたうは、それによつて消える筈の熱情の火を一層いらだゝせました。昏

つては愚かな幻が苦しみの中にも、妾を力づけて居りました。けれど今はその幻と一緒に苦しみに堪えて行く力も失つて了つたので御座います。御一緒になれるといふ望がいくらかでも殘つて居りました間は、恐らく自分に打ち勝つ事が出來たで御座いませうけれど。一生涯貴君に抵抗して行く事は、永久に貴君を見離す事よりもまだ辛くはなかつたので御座います。そしていつまでも戰つて行かなければならないと考へますと、打ち勝つ勇氣は拔けて了ひます。

悲しみと戀しさが心をすり減らして了ひました。妾は深い失望の中に落ちこみました。それはこの私の文字にも現はれてゐると思ひます。メイユリーから下すつたお手紙の文面には、この上もない御氣おとしの御樣子が見えて居りました。そして妾自身の苦しみに、貴君の御氣おとしの氣持が加りました。あゝ、二人の悲しみを抱いて居る心と申すものは、いつでもこの上もなく弱いもので御座いますのね。貴君がお話なすつたあの決心は、妾の心をこの上もなく混亂させました。雨親の望みに就くか貴君の望みに添うか、どうしても定めねばならなかつた事でございました。妾はこの恐しいディレンマに堪える事が出來ませんでした。自然の力には一つの極限を有つてをります。それ程多くの苦しみが妾の力をすつかり失くして了つたので御座いますもの。妾は生命にお暇が戴き度うゐいました。そして神樣はその樣な妾を御哀れみになつた樣でした。けれど殘酷な死はやつぱり妾を亡して了はうとはしなかつたので御座います。貴君にお目にかゝり、そして一時身體も癒つたりしてその後に、妾は死んで行くのでございます。

妾の過ちの中に、幸福が見出されなかつたにしろ、妾はそこに其事を決して望んだのでは御座いませんでした。妾の心は德の爲めに創られ、德がなければ幸福になる事は出來ないといふ事を、感じて居りましたけれど、間違つてゞはなく、弱い許りに打ち負かされたので御座いますもの、妾は不明であつたと云ふ云ひ譯すら、持つて居らないので御座います。罪のないといふ事と戀とは妾にとつて、同じ樣に必要だつたので御座います。けれど、その兩方を保つて居る事が出來なくなつた時、貴君が迷つてお居でなのを拜見して、妾は遂々、貴君の方をお擇びしたのです、そして貴君をお救ひするために自分から迷つて了つたので御座いました。

けれど、德を捨てようと思ふ事は、それ程易しいものでは御座いません。それは長い間、捨てれば捨てたものを苦しめます。そして純な心の歡びであつたその魅力は、猶も愛して居りながら、もうそれを樂しむ事が出來なくなつた罪人の、最後の苦痛を生むもので御座います。罪人であり乍ら、まだ墮落はして居ない妾は、妾を待ちかまへてゐた後悔から、身を避ける事は出來ませんでした。德を慕ふ心、それは失はれて了つた後までも妾に取つてなつかしいもので御座いました。恥しさ——例へ秘密であつたにしろやつぱり、それが妾には辛く〳〵身に沁みました。恐らく世界中の人が、妾の事を知つたとしましても、これ以上には恥かしさが增しはすまいと思ふ程で御座います。そして丁度傷が腐つて來はしないかと心配する負傷者が、痛む間はまだ大丈夫だと思ふ樣に、妾はこの苦しみの中で自分を慰めて居つたので御座い

ます。

けれどこの辱かしい有樣は、いやでいやでたまりませんでしたので、罪から離れないで、責められる心の苦しさを靜めようとして、到頭、迷つた、そして、迷つて居乍ら歡んで居る、正直な魂に、起つて來るやうな事が、妾の上にも起きて來たのでした。新しい幻が、後悔の苦が〳〵しさを和げに來たので御座いを一緒にしなければならない樣な方法を講じやうとしたので御座います。妾達の戀の最初の子は、この優しいつながりを强める筈で御座いますもの。それを神樣に、まるでそれが妾が德に立ち歸り、二人が共に幸福になる保證でゞもあるかの樣にお願したのでした。外の女の人が妾と同じ樣な場合であつたら、それ ばかりを恐れたでせうのに、妾は反つて望んだので御座います。こんな妄想によつて、良心の囁きを靜めながら、優しい戀は妾の弱い心を、望むでゐる結果で慰めて居りました、そしてかうした懷かしい期待によつて、戀は妾の生活の魅力と望みとなつたので御座いました。

で妾は私の環境に明かな變化の印しが現れましたら直ぐ、公然と家族達の前でベレットさん（牧師である）に私の決心を話しする積りでゐたので御座いました。妾は臟病で結座います。ほんとうに臟病で御座いますの。どの位苦しまなければならないかもよく感じて居りました。けれど名譽が妾に勇氣をつけて呉れました。心の中に永久の恥をかくして居るよりは、妾にとつてはあたりまへである一時の氣苦しさを愛

けしのんで了はうと思つたので御座います。御父様が死を下さるか、戀人を下さるかは分つて居りましたこの選擇は妾には少しも恐しくは御座いませんでしたはうと思つたので御座います。

妾が貴君にお隱ししようと思つた秘密は、之れなので御座いますの。貴君はこれを、好奇心一杯な御心配な樣子で、おさぐりなさらうとして居らつしやいましたわね。けれど多くの理由から、貴君の樣な熱し易い御方に對しては、どうしても默つて居なければならなかつたので御座いました、貴君の無鐵砲な執拗さに、新たな口實を與へてはならないといふ事は考へませんで。殊にあの危い場合に貴君と離れてゐる事は都合がよかつたので御座いました。妾は貴君がもし御存知だつたら決してこんな危い所に妾を見捨て置ては下さらないといふ事を存じて居りましたの。

あゝ、けれど妾はこの優しい望みを、除り持ち過ぎたので御座いました。神樣は罪の中に在つて造り上げた計劃をはねつけてお了ひになつたのです。妾は母（計企を子とすれば）となることも出來ませんでした。妾の期待はいつも空しく終つたのでした。けれど名譽を損ねてまで、過失を償ふ事はどうしても出來なかつたので御座います。だめだと失望しながらも、貴君と不用意にお會ひしたのは、向ふ見ず事で御座いました。それが遂々貴君のお生命まで危くしたので御座いますもの。が妾の誓ひは失敗しても、それは自分のせいにして了へばいゝと思ひました、そして慾望にくらまされた妾の心は、慾望を滿足させようといふ一心に、只それを、いつか正當のものとしようとする事だけより外には氣が付かなかつたのです。

ほんの少しの間、希望が成就したと思ひました。そしてその誤つてゐた事が妾の失望を一層ひどくする源となりました。自然によつて叶へられたこの戀は、運命によつて、殘酷に〳〵裏切られる許りで御座いました。どの樣な出來事が、妾の胸の中の胚子と共に、希望の最後の根底までを毀ちさつたかは御存知の事で御座います。この不幸は、お別れしました時に起りました、丁度妾に當然な、あらゆる不幸を妾にお負はせになり、同時に妾達を結ぶあらゆる緣を切つて了はうとでも神樣はお思ひなつてゐるかの樣に。

貴君のお出かけになつた事は、妾の過、そして妾の樂しみの終りだつたので御座います。妾はやうやく空想に溺れてゐた事を知りました。そして悲深い戀や不可能だけれど止むに已まれない當然な慾念を抱いて、不幸と侮蔑の中にある自分を見出しました。多くの空しい悔いに惱まされて、妾は苦しい、益のない考へを捨てました。自分で考へて居りました樣な苦しみには、もう價しないので御座います。妾は貴君にお仕へする爲めに一生をお捧げ致しますわ。貴君の御名譽貴君の幸福より以上の名譽や望みは、妾には御座いませんの。貴君から送つて下さる感情は、妾の心を動かす事の出來る唯一つのもので御座います。

戀は貴君の御過失に就て、妾を盲目には致しませんでしたけれど、それは今は妾にとつて貴重なものとなりました。もしも貴君がもつと御缺點のない方だつたら、妾はこれ程お慕ひ申さなかつたかも知れないと思はれますのよ。お心の中はよく存じて居りましたの。はけしい御氣象も……。妾よりはずつと勇氣が

お有りだつたのに、我慢がお出來にならなかつたのですわね。そして妾の心を苦しめる不幸が貴君のお心を落させるといふ事も存じて居りましたの。お父樣とのお話をいつも〳〵氣をつけてお耳に入れなかつたのもかうした考へからで御座いました。お別れする時も、貴君の御運のために、エドワード卿のお元氣を利用して貴君にも御元氣をつけやうと思つて、ありもしない希望でお歡ばせしたりしたので御座いました妾達をおびやかす危險を知りました時。妾は二人がそこから逃れられる唯一つの用意を致しました。そして言葉で出來るだけの自由をお約束し其上反古に出來ぬ又貴君をお靜めする事の出來る約束で、貴君には自信、妾には確信を吹き込まうと努めました。それは隨分幼稚な遣口で御座いました。さうとは知つて居りましたものの、どうしても止す譯には行かなかつたので御座います。德は、一度その眞個のものを失ふと、すぐ自分で何かしらそれに代るものを捜らべる程、私達の心にはなくてはならないもので御座いますのね、そして人は却つてその自分で遣つた德をより強く、守る樣で御座いますのね。

貴君が御離れになつてから、妾がどんなに苦しみましたかは少しも申し上げない事に致します。總ての中でもつとも惡い事は忘れられはしないかといふ事で御座います。貴君の御滯在は妾を顧へさせました。其所での御暮しになる御樣子は、妾の恐れを增させました。もう教育をお受けになつた方の樣ではないまでに、卑くおなりになつたかとも思ひました。この不名譽は、何にもまして妾には殘酷で御座います。貴君が不幸で居らつしやるといふ事を知る方が、見下げた御有樣なのを知るよりどんなにいゝでせう。色々な苦しみに堪えて來た妾では御座いますけれど、貴君の御不名譽ばかりには堪えられません。

お手紙の調子で確められる色々な懸念に就て妾は安心致しました。又妾は他の女をすつかり欺かしてしまはれるやうな方法で安心をしたのでムいます。妾は貴君の御這入りになつた放從な生活に就て申します。それをさつぱりと、自由に御打ち開け下すつた事は、妾の大好きな貴君の淡白さを、すつかり證明して居ります。妾は貴君をよく存じて居りましたのですもの。あの淡白な御言葉が、貴君にほんたうに應はしいことを知らずには居れませんでしたの。恥かしさに打ち勝つて、戀が唯獨りあゝした御言葉を御吐かせしたのだと思ひました。あんな眞面目な御心に隱れて不實な事等は御出來ぢやないと妾は判斷致しました。貴君の御過失の間違ひなどよりも、それを告白して下すつた御立派さが目に付いて、昔の御約束を思ひ起しながら、嫉妬の氣持等すつかり癒つて了ひました。

貴君！　妾はもう幸福では御座いませんでした。ちよつとした苦しみのために、多く他の苦しい事が起つて來ます、そして、心の平安を、迷の中に求める事がどんなに馬鹿らしいかといふ事も分らなくなつたので御座います。平安は賢さの中にのみ見出されるものですわ。妾の不幸な失敗の結果どうしても頼らなければならなかつたパピーは妾に裏切つて、母樣を、妾は長い事、私かに泣き悲しみました。はけしい寢れが、何時かしら生命をすり減らしていつたのに妾の戀や過失を打ちあけたので御座います。貴君のお手紙は從姉の所から私が頂いてまゐりますと直ぐ

樣見つかつて了つたので御座います。證據はどうしても言ひのがれやうが御座いませんでした。そして、悲しみがその時御病氣の爲とは申せ、まだ僅かばかり殘つて居りました母樣の御力をすつかり奪つて了ひました。妾は後悔でお母樣の足元に仆れて死にさうになりました。死ぬ樣な日にあはせて下さつても、妾には當然なので御座いますのに、お母樣は、妾の恥を包んで、唯それを御歎きになつたゞけで御います。お母樣をこれ程まで酷く傷けなさつた貴君さへも、お母樣は、お憎みなさいませんでした。御手紙がお母樣の優しい御同情深い御心に引き起した結果を、妾は日のあたりに見たので御座います。あゝ、お母樣は妾や貴君が、幸福になる事を御望みになつたので御座います。母樣は一度ならず……。けれど、消え去つた願を思ひ出す事が何の役に立ちませう？　神樣は祈願とはまつたく別な處理をなさいました。かうしてお母樣は嚴しいお父樣の氣を折る事もならず、御自分には應はしくない娘を後に殘すといふ苦しみの中に、優しい御生涯を了へてお了ひになりました。

此の殘酷な打擊を蒙つて、妾はもう、たゞそれを感ずるだけの力しかなくなりました。自然の悲しむ聲は、戀の囁きを息づまらせました。妾は、ある恐怖の中に、この多くの不幸の原因を知つたのでした。で到々その不幸を妾に引きつゞるた、いまわしい情慾を押へて、貴君も永久に見捨てやうと思ひました。臨かにそれは必要で御座いました。絶えず新しい涙の種を探さなくつても、一生涯泣くに足るだけのものは充分持つて居なかつたでございませうか？　何もかも妾の決心を助ける樣に思はれました。假令悲しみが

魂を柔かにしましても、深い苦しみがそれを幄くしたので御座います。臨終のお母樣の思出では貴女の思出を打ち消して了ひました。妾達はお互に離れ〳〵で御座いました、そして希望は妾を捨てゝ了つたので御座います。あのクレールさんがこれ程迄に氣高く、妾の心を見つめて獨りで世話をして下さいました事は、決して今迄には御座いませんことでした。クレールさんの御德、理性、友情、と優しい愛撫は、妾の心を清淨にする樣に思はれました。貴君を忘れきつて了ひ、妾はもうよくなつたのだと思ひました。けれどそれはもう遲う御座いましたの。消え去つた戀の冷かさだと思つて居りましたのは、たゞ、失望で一時、がつかりしたのに過ぎませんでした。

衰弱しきつて苦しみのなくなつた病人が、再びはげしい苦しみを感じて、勢がつくと同じ樣に、やがて妾が苦痛の再び起つて來たのを感じましたのは、ウオルマールさんが近々に歸つて行らつしやると御父樣が仰有つた時で御座いました。そしてあのどうしても滅びない戀が、もう妾にはないと信じて居りました力を與へて呉れたのも、その時で御座いました。生れて初めて、妾は御父樣の前で次の樣な事をはつきりと申して反對致したので御座います。ウオルマールさんは妾にとつては何でもない方だといふ事、あの方が例へ妾の生活を自由になされても、心はどうする事も出來ない事、そして、妾の意志はどうしても變らない事等を言ひ張りました。妾は御父樣の御經りについても、妾が受けねばならなかつたお仗打に就いても、申し上げない事に致します。妾はぴくとも致しませんでしたの。打ち負された臆病な心は、却つてそれと

は反對な方に妾を導いて行きました。そして聲の調子は御父樣の程威丈高では御座いませんでしたけれど、全く同じやうに、きつぱりとなりました。

御父樣は、妾がもう決心をして居り、權威では打ち負す事が出來ないのを御覽になりました。一瞬間、妾は御父樣の迫害から解き放たれた樣に思ひました。けれど、突然あの誰れよりも嚴格な御父樣が感動なさつて、涙を瀧の樣にながしてお居でなのを、妾の足元に見た時妾はどうなりましたでせう？　妾が立ち上がれぬ樣に膝をしつかりとお抑へになつて、涙にぬれた瞳で妾の瞳をぢつと御覽になりながら、感動したふるへ聲で仰有つた事が、今でも心の中で聞えるので御座いますの。

「娘！　不幸なお父さんの白い髮の毛を大事に思つておくれ。お母さんにさせた樣な苦しみをまた、このわしに負はせて墓場へ落す樣な事をして呉れるな。あゝお前は、家族殘らずを死なして了ひ度いのか？」

妾の心持を御察し下さいまし。あの御態度や、お聲や、御樣子や、恐しいお考へに、心が亂れて、妾は遂々お父樣の腕の間に半分死んだ樣になつて、身を投けて了つた程で御座いました。そして、息もつかれないはげしいすゝり泣きに長く〳〵かきくれた後で、やつと弱い、かすれた聲で御父樣に御答へする事が出來たのでした。「御父樣・御父樣の、脅しに對しては妾は武器を持つて居つたので御座いましたけれど、御涙に對してはどうする事も出來ませんわ。御父樣こそ、娘を御殺しになるのぢや御座いませんか。」

私達はすつかり心が亂れて、長い間冷靜になる事が出來ませんでした。けれど御父樣のおしまひの言葉を心の中で繰り返しながら、思つて居つたよりも、お父樣は理のわかつた方なのだといふ事を、思ひ付きました。でそれを丁度幸ひ、一生の瀨戸際に、今迄申さう〳〵と長く延ばして居た告白をしようと、心をきめたので御座います。その時、御父樣は、それにお氣づきになつて、妾の云はうとする事を恐れて居らつしやるかの樣に、急いでお止めになり乍ら次の樣に仰有いました。

「家の良い若い娘に應しくない空想を心の底にお前が養つてゐることを、わしはよく知つて居るのだ。だがね、今はそのお前の名譽を傷け、わしの生命を損ねねば已まない樣な恥かしい戀などを、義務の爲め、厭恥のために犧牲にせねばならぬ時だよ。父の名譽又お前の名譽がそれを强要して居るのだといふ事を一度耳に入れて、お前自身考へて御覽。」

ウォルマールさんは立派な家柄の方だよ。そしてその御家を保つていらつしやれるだけの、あらゆる才能を持つてゐる方だよ。一般の人達からも尊敬を受けて居られるが、又實際それだけの價のある方だよ。其上わしにはまた命の親に當る方なんだ。お前も、わしがあの方とした約束を知つて居るだらう。猶お前に話さねばならぬ事がある。あの御方が、用をたす爲め、國へ歸つて居られた時、あの最近の革命に取りまかれてな、財產も失して了ひ、危うくシベリヤに流される所を不思議な幸運で救はれて、友達である私の言葉に從つて、誰れにも決してなくてはならない、財產の僅かな殘りをもつて歸つて來られた事だ。前にして下さつた御恩返しを今こそする時なんだよ。お前わしがどうしてあの方を待遇してあげたらいゝか

考へてごらん。」「貴君が富んで居られる時にわしは娘を差上げる事を御約束した。だが貴君は今何も持つて居られない故御約束を取消しにする。第一娘が貴君を好いて居らんからな」とわしが云はうかね？　拒絶をする事が例へこんな様でないにしたところで、人々は皆さう取るに違ひないのだ。お前等の戀にした所が、單なる口實と見られるか、さもなくば、わしの恥になるだけだらうよ。そしてわし達は、お前は、操を失つた娘として、わしはまた、いやしい利害のために義務や、信仰を犧牲にし、忘恩に、不忠實に加へた破廉恥漢と見られて了ふのぢや。娘よわしわ汚點のない一生を不名譽の中に終えるには、もう時期が遲いのだ。六十年間の名譽は十五分で捨てられるものではないよ。」

「考へても御覽、お前が云ふ事は皆、今はどの位不適當な事か。貞節によつて、取消す事の出來る約束だとか、若氣のうつり易い情熱等は、乙女の義務や、父親の名譽等とくらべあふ事の、出來るものかどうかを考へて御覽。もし之れが二人の間でどちらかの幸福を、犧牲にするといふ事だけの問題だつたら、わしは潔くお前の犧牲になつてやるのだよ。けれど、お前、これは名譽の事なのだよ。お前が生れ出た血統の中にあつては、名譽がいつでもすべてを決定するのだ。」

妾はこの御話に對してよい返事をしなくてはなりませんでした。けれどその偏見は、妾の道理とはまるで違つた主義を御父樣に與へて居るので御座いました。妾の理由などは、そのお耳に入れるまでもなく、お父樣を動かせそうもないと思はれました。その上妾の行爲に就て、御とらへになつた、光明がどこから來て、どこまで行く事が出來るものだかも分らず、妾の言葉をさへぎらうとして居らつしやる、御父樣の御樣子では妾の云はうとしてゐる事に就て、まだあきらめてお出でではないのかと、氣になつたのもありますけれど、それよりも、妾にはどうしても打ち勝つ事の出來ない恥かしさに押へられて、言譯をするのが安全の樣に思はれたので御座いました。何故と申しますに、言ひ譯がお父樣の御考へ方に一層應はしかつたのですから。妾は眞直に御父樣に貴方との御約束をお話して了ひました。そしてどうしても貴君に御約束を違へない事、どんな事があつても、貴君の御許しがなくては結婚しない事を云ひはつたので御座います。

でも妾の細心さが御父樣を不快にしなかつた事に氣がつくと嬉しう御座いました。御父樣は、妾の御約束に就て、はげしく非難はなさいましたけれど、何もそれに故障は仰有いませんでした。名譽心のある紳士は契約の信といふ事について高い理想を持つて居り。其譽ひの言葉を神聖なものと見て居るもので御座います。約束の無益な事などを、議論してくどくど仰有る代りに、御父樣は妾に無理に手紙を御書かせなさつて、御自分もそれにお手紙を添へて、直ぐ樣貴君に宛ててお出しなさりましたの。どんなに煩悶して御返事のないようにと思つてゐた事でせう。どんなにか貴君がいつもの通り、御氣を慢しくなさらない樣にと望んだ事でせう、けれど妾は貴君が御從ひなさるといふ事を疑ふには、あまりに貴君を知り過ぎて居りました。そして妾は强ゐられる犧牲が苦しいものであればあるだけ、一層貴君はそれを御自分に御强ひなさる方だといふ事を存じて居りましたの。御返事が來ました。それは。妾の病氣の間は隱してあつたのでした。平

癒しました後、やつぱりそれは妾の恐れてゐた通りだつたのを知りました。それでもう言ひ譯を私がしてゐる餘地もなくなりました。御父樣は、もう妾の言ひ譯なぞは聞かないと仰有いました。そして恐しい言葉で、妾の意志を抑へつける樣に、御父樣は結婚の氣を變へる樣な事があるといけないから、決してウォルマールさんに何も云はない樣に、妾にお誓はせなさいました。何故かと云ふに其樣な事があの人の耳に這入ると、私達の間で計つた仕事の樣だからね、どうしてもこの結婚は濟ませなければいけないのだ。さもなくば俺は死んで了ふと」御樣父はつけ加へて仰有いました。

貴君も御知の通り、疲れや陽氣の惡いのに對してはあれ程強い妾の健康も、混亂したはげしい情には抵抗する事が出來ないので御座います。このあまりに感じ易い心が、身體にも心にもあらゆる惡い事の源なので御座います。長い間の苦しみが血をくさらせてるたか、それとも自然は妾の悲みの釀母を清めるに此時を擇んだか、妾はこの話の終りに於てひどく心地惡くなつた事を感じました。御父樣の御部屋から出て、貴君に一言お書きしようと努めて見ましたけれど、床に就いたなりもう其處から起き上りたくなくなつた程、加減が惡う御座いました。あとの事は貴君にはわかり過ぎる程分つてお出でですわれ。妾の無分別が貴君までも無分別におさせしたのでした。貴君はお入來になりました。お目にかゝつた時、頭がくるつて居りました間、妾はよく貴君の夢を見たものですから、これもその一つぢやないかと思ひました。けれど御出でになつた事、實際にお目にかゝつた事、又貴君がお癒しなさることの出來ない妾の病氣をわざと御自分におうつしになつた事を知つた時、この最後の試みには堪える事は出來ませんでした。そしてあんな優しい愛が、希望が無くなつた後でも殘つてるのを見て、妾が今まで多くの苦しみながら抱いて居りました戀は、もう際限をしらず、これまでにない熱情を以つて再び生き返つたので御座います。妾はどうしても愛さなければならない事を知りました。罪人とならなければならぬ事、妾は御父樣にも戀人にも、そむく事は出來ない事又正直を犧牲に供するのでなければ、決して戀の權利と血統の權利と、妾に調和させないだらうといふ事を知りました。かうして妾の善良な心は消えて了ひました。總ての精神の力は狂つて、慙等申す事は妾の目にはもう恐しいものではなくなりました。心の中にはまるで外の事が考へられました。障害によつて一層燃やされた戀の放縱な、はげしい思ひが遂に心を苦しめる、最も恐しい絶望の中に妾を投げ入れました。妾は德に對する望を捨てました。これからの悔恨を豫想させるよりも、過ぎ去つたそれを呼び起させるに適當した貴君の御手紙は、とう〳〵妾を遂はせて了ひました。

妾の心は腐り果て丶、もう理性は貴君の哲學には抵抗する事が出來ない程で御座いました。曾つて妾の心には味爽もなかつた樣な恐怖の觀念がそこにあらはれました。妾の意志はその恐怖と戰つて居りました。けれど想像がそれを見る事になれて了つたので御座いました。前以て罪を心の中に負ふて居ませんでしたら、妾は罪に抵抗し得る唯一の此の勇ましい決心を尙更心の中に持ちませんでした。

書き續ける事が苦しう御座いますから、しばらく休ませていたゞきます。妾遂を勢づけて居た、あの強

いやさしい火が總ての二人の感情を潔めて居り、清い情熱が妾達に尊い純潔と愛すべき廉恥とを與へて居て、欲望といつては唯その二つを克ち得る名譽と、お互にそれに應はしいものとなる事より、外には起らなかつた、無邪氣な、幸福な、あの時分を御想ひ出し下さいませ。私達の最初の手紙を御讀み下さいましそしてあれ程短かく味ふ事の少かつたあの時代の事を考へて下さいませ。あの頃は、妾達の目にうつる戀は、德のあらゆる美しさで飾られてありました。そしてその德によつて非難される關係を、お互ひの間に形作る爲めにはあまりに愛しあつて居りました。

それが二人共どうなつたので御座いませう？　やさしい二人の戀人は最も嚴しい沈默の中に、まる一年一緒に送つたのでしたわね。吐息さへもしあはなかつたのでしたけれど、心と心とは分りあつてゐました。二人共苦しんでゐるのを知つてゐて、二人共幸福でしたわ。理解しあふ事によつて話しあつてゐました。けれど、二人共自己に打ち勝ち、滿足にそして互に尊び合つて居りました。二人は、もう一年を矢張りいくらか嚴格な、つゝしみ深さの中に過しました。二人はお互の苦しみを語りあひ、そして幸福でございました。けれどこの長い戰にもよくは耐へられたかつたのです。一瞬間弱かつたために、二人は迷ひに入り、快樂に我を忘れました。けれどお互に忠實であり、神と自然の情が二人の作つた結び目を支配して德が尊ばれてゐる間は、二人共操を失ひませんでした。二人はまだ德を愛して居り、それを尊敬する事を知つて居りました。お互に卑しくもならず又更に腐敗などはして居ませんでした。幸福になる價はなかつたにしろ、幸福ではあつたのでした。

このやさしい、綺な炎に燃え、廉恥の價を知つてゐた戀人同志が今はどうなつたといふのでせう？　誰れが二人の身上を聞いて平然として居られませう？　今は二人共罪の中に落ちこんで居るので御座いますす。夫婦の床を汚すといふ考へさへも、二人にとつてはもう恐しい事では御座いませんの。お互に姦淫の名に應はしいので御座います。何といふ事で御座いませう。これが前と同じ二人なのでせうか？　二人の心は少しも變つては居ないのでせうか？　どうして惡人には決して見る事の出來ない、美しい影像か、もと輝いてゐた心から、今は消えさる事が出來るのでせうか？　どうして此の德の魅力が一度德を知つた者に、惡を厭はせないのでせうか？　幾世紀の年月がこの不思議な變化を生じ得たのでせうか？　どの位な長い時間があれ程美しい思出を變つて、幸福の感情を、一度はそれを感じて居たものの胸から失ひ去る事が出來たのでせう？　あゝ、最初には不仕鱈な事をするのが、あれ程爲しにくく、また進みの鈍ろいものであるのに、それから後にはどうしてかうまで早く、容易なのでせう？　情慾のまどはし、貴君はかうして理性を幻惑され、賢さを誤つて、さうと人に氣付かれた時は、もう御性格が變つてゐらしつたのでした。人は僅か一瞬で遂に入り、只の一歩で正しき道からそれるもので御座いますのね。すると直ぐ、逃れぬ墮落の坂がお互ひを引き込んで引き落して了ふもので御座います。そして遂には深い淵に落ちこんで・德を行ふ爲めに生れ出た心と一緒に自分が罪にすつかり蔽はれてゐる事に、恐しくも目が覺めるので御座

います。この蔽ひをつき落して下さいまし。近づく事を遮ける爲めにその蔽ひが妾達から隠してゐる恐しい絶壁を見なければならないでは御座いませんか？　さあもう前のつゞきにもどりませう。

ウオルマールさんがいらつしやいましたけれど妾の顔の變つてゐるのを失望なさいませんでした。けれど御父樣は妾に息を吐くこともお許しムいませんでした。お母樣の喪はもう終らうとしてゐました、そして妾の惱みは時がたつても、うすらぎませんでした。妾は自分の約束をうまく遁れる爲めには、そのどちらをも申立てする事は出來ませんでした。約束は果さなければなりません。永久に貴君と妾とから妾を取り去らねばならない日は、妾には一生の終りの樣に思はれたので御座います。自分の墓場の支度さへも、まだこの結婚の支度を見るよりも恐しくはないで御座いませう。悲しい日が近づくに從つて、妾は猶の事、初戀の思を心から絶切る事に出來なくなつて行きましたの。この戀は打ち消さうとする努力によつて一層いらだちました。到々妾はもうわけもなく戰ふより外はなくなりました。他の人に向つて永久の從順を今にも誓はうとするその時に、妾は猶貴君に向つて、永久の戀を誓つてゐるので御座いました。そして妾はさゝげられようとする祭壇を濟すけがれた犧牲の樣に、教會に連れていかれました。そこに着いた時、門をくぐり乍ら妾は、今まで感じた事のないある感を感じました。この單純な嚴かな場所、人々のつかへてゐる神の威嚴に滿ちたこの場所で、妾はどんなに恐れを心に抱いたか知れません。突如とした恐怖が妾をふるへ上らせました。ふるへてほとんど氣を失つて仆れやうとしました。妾はやつと敎壇の下まで歩いて行きました。安心どころですか、式の間、妾の惱ましさはだん〳〵增して行く樣に思はれました。そして見るものも見るものもが恐しう御座いました。建物の中の澤明り、列席者の深い沈默、その人達の謙讓な心をこめた態度、親類達の列、嚴めしい御父樣の威壓する樣な御樣子、總てが行はれやうとする事に嚴かさを與へました。それは妾に注意と尊敬とを起させ、僞の誓をしてゐるのだといふ觀念に妾を顫へ上らせました。禮拜式の祈禱を嚴かに讀む牧師の聲は神樣の御聲の樣に思はれたのでした。結婚の純潔、威嚴、神聖、それは聖書の句に明かに現はれて居り、その尊い義務は人類の幸福と、秩序と、平和と、永續に必要であり自分に取つても快い事である。その總ては急激な革命を內心に感じる樣な、一つの感情を妾に起させました。分らぬ力が突然、不秩序な情愛を矯めて吳れた樣でした、神樣のお目は何でも見てお出でなさるのだわと妾は思つたので御座います。心の底までも見通してゐらつしやるのだわ。口さきだけの妾の答へと心の底の秘かな考へと比較して居らつしやる、天も地も妾のした潔い契約の證人となつて、妾がそれを守る忠實さを見てゐるのだわ。總ての權利のうちで第一番のものを敢て疑續する者は誰でも、人間の何の權利を尊重することが出來やうか。

妾の向ひに坐つて居らつしやるドルプ樣御夫婦の上に、ふと瞳を投げた時妾は今まで色々なもので起つたのよりも、もつとはげしい感激を心に感じさせました。御二人は妾をぢつと見つめてお出でだつたので御座います。尊敬すべき德のある御夫婦よ、貴女方は戀を御味ひにならなかつたと云つて、より强くなく

結合されておいでですか？　あの方々には義務と廉恥が結びついてお出でなのですわ。やさしい友達であり、忠實な夫であり、心を弱らせるはげしい情火に燃やされる様な事もなく、賢さで支配され理性で導かれて、お互の心を養ふ清い優しい感情で愛しあつてお出でなのです。幸福なお方ですわ。あゝ妾があゝした關係の中に、無邪氣さを保ち、幸福を味ふ事が出來たら！　假令あの方に價しない女であつても、あの方をお手本として、それに應はしく自分をならせますわ。かう感じますと希望と勇氣とが起きて來ました。妾はこれから形作られやうとする神聖な結婚を、心を清め、そしてすべての務をしなければならないと、新しい新しい生涯なのだと考へました。で司祭から、妾の承諾に對して從順と忠實とを約束するかどうかと尋ねられました時、口でも、又心からもそれを約束致しました。妾は死ぬまでこの誓はたがへないつもで御座います。

家に歸つて來ると一時間も獨りで寂しく心を鎭めて溜息を致しました。妾が此時間を得るには面倒がいではムいませんでした。又どんなにその時間を利用したくても、妾は最初自己省察がどうしても厭でたまりませんでしたわ。といふのは、これも亦一寸の内變つた。一時的の心の動搖でありはしないかと思はれて、やがては賢くない娘であつたと同じやうに、應はしくない妻となるのぢやないかといふ懸念があつたからでムいます。試みた結果は確かでムいましたけれど、また危險でも御座いました。妾は貴君の事を考へ初めました。そしてどんな優しい思ひ出も、今妾が致した嚴かな契約を汚さない、事を確かめました。

取去り得ない貴君の御姿や、色々なその思ひ出を心に浮べて見ても、どうしてかうまで長い間、妾の心が平和になつて居られるのが分りませんでした。妾はまたこの無關心で忘れてゐる事も、長くは續かない不自然な間違つた狀態なのかも知れないと疑つて見ました。けれど此事も殆ど恐れるに足りまんでした。妾はいまゝでより、もつと貴君を愛してゐるのだといふ事を感じましたけれど、それでも心に咎めは少しも感じませんでしたの。貴君を思出すのに、自分が他の人の妻である事を忘れる事などは、必要がないといふ事を妾は知りました。貴君が　どんなに妾にとつて尊いものだかを思ひ浮べると心は感激しましたけれど、良心と感覺は靜まつて居りました。そしてこの時から、自分がもうすつかり變つて了つたのだといふ事を知りました。どんな清い歡喜の流れが、その時妾の心にみなぎつた事でせう。長く〳〵消えさつて居た平和な感情が、恥で萎れた心を生氣づけ、身體中に新たな靜けさをひろげました。生れ變つた様な氣持でした。別な生涯を始めた様な氣が致しました。穩かな心をなぐさめる德よ、妾はお前によつて再び生活を始めます。妾に生命を尊いものとして與れるのはお前です。妾が生命を捧げようとするのもお前です。あゝ、お前をもう一度棄てるなら、それこそお前を失ふものだと妾は知り過ぎてゐます！

この大きな、速急な、思ひがけない變化の大喜びの中に、妾は昨日までの自分の有樣を考へました。最初に迷つてから以來、危險に身を落し、自分を忘れてゐた、あの價値のない卑しさの前に妾はふるへ上るので御座います。妾を誘惑してゐた罪の恐ろしさを見せつけ、又賢い事に對する趣味を心の中に呼びさまして

呉れたのは何といふ幸福で御座いませう。どういふ運命の御陰によつて、貴君や妾の移り氣が新たな傾向に妾を引き込まなかつたのでせう？　どうして妾は既に第一の戀人が打ち克ち、又慾望に從ふことに馴れた恥辱が打克つた抵抗を、次の戀人に對して爲したのでせう戀にひたつてゐた間では、德の權利よりも、消え行く戀の權利等を尊重致しませうか？　世界で唯一人貴君だけを愛すると申した所で、それが信じあひ恒に變らない事を誓ひ、又それとなく心を變へながら、いつも無邪氣なふりをしてゐる、あらゆる戀人達がもつてゐると思ふ一つの感情でなければ、何にもなりません。一つの失敗があると、次の失敗の準備をするものです。不德をする習慣は妾の目に恐しさを打ち消して了ひました。自分を止める何の手懸りもなく、不名譽から破廉恥へ、引き込まれ、放從な戀人から、墮落女となつて行き、女の恥と、一家の絕望を招く所で御座いました。

誰れが妾の過失から其樣な本當な結果の出て來るのを妨止出來るでせう？　一足踏み出して了つた後、誰れが妾を抑へて呉れるのでせう？　愛する人達の尊敬の名譽とを誰れが保つて呉れたでせう。そして誰があの性格に於ても人格に於ても、愛すべき、そして妾には本當に價しない程な、愛情と尊敬とに滿ちた德の高い夫の被護に妾を置いたのでせう。そして誰れが、妾を猶、正直な女として生きる事を許し、またそれに應はしくならうとする勇氣を與へて呉れたのでせう。妾は、その方を見、その方を感じます。闇を通つて妾を導びて呉れた救ひの手は、間違ひの蔽ひを目からとり除いて、妾を自分の本當の望に歸らせて下さつたそれです。心の底で叫く事を止めなかつた、秘かな聲は、妾が今にも亡びやうとしたその時、一層强く高まつて、響いたので御座いました。總ての眞理をお造りになつた神樣は、あの罪の深い僞りの誓から、免かれてゆく事を少しも疑はず、妾の罪を後悔によつて豫め妾に知らせて下さつて、正に落ち込まうとして居つた深淵を妾にお見せになつたのでした。「永遠の神樣、昆虫をお衞はせになり、空を廻轉させる貴方は被造物の極些やかな物までもお守りなさつて居らつしやいます。貴方は妾に善を思ひ出させて下さいました。貴方は妾に戀をさせて下さいました。貴方の御心付で淸くなつた心から、御受けなさる應はしい、このたゝへ事をお受け下さいまし。

しばらくの間、深き放たれた身の危險や、再び建てられた樣に感じる名譽と安心の狀態の、はつきりとした感じを心に深く感じて、妾は地に伏し、手を空にあけて、王であり、自分の意のまゝに、人類に與へた自由を毀しもし、お支へにもなる神樣を叫びました。「貴方が御望みになり、貴方のみがその源泉である善が欲しう御座います。」と妾は神樣に云ひました。「貴方が御與へ下すつた夫を愛したう御座います。妾は忠實になりたう御座います。何故ならば、それは家族を結び、あらゆる社會をつなぐ第一の首德で御座いますから。また妾は美しくなりたう御座います。何故なら、それは、總ての外の物を養つて行く、第一の德で御座いますから。貴方がお建てになつたあらゆる自然の法則と、貴方からいたゞいて居る理性の法則とに關係してゐる總てのものが欲しう御座います。妾は、心を貴方の御守りの下に、望みを貴君の御手に

御托し申します。すべての妾の行爲を、ほんとは貴君のものである妾の不變の意志に適はせて下さいまし
そして一時の間違ひが一生涯の撰擇をする事の御座いませんように。」

此の短い祈禱は妾が眞心からした最初のもので御座いました。これで妾は決心が堅くなつた樣に思はれました。そしてこの決心に從ふ事は、易しく、快く見えました。又之から後、利己心に逆ふために必要な併も自分の中にはない力を何處に求めなければならないかゞ、はつきりと分りました。この發見から、新な自信を引き出しました。そしてこの自信を長く〳〵妾に缺かせて居た悲しい盲目を悔みました。妾が全く宗教なしで居つた事は決してなかつた事なのです、全く上べばかりの又心にも、良心にも觸れて居ない宗教を持つより持たぬ方が宜うございます。形式に限られて、その神樣もある定まつた時間の間信じてゐても、後の大部分の間は忘れてゐる樣な宗教は無い方がいゝのです。たゞ皆でする禮拜をのみ細心に氣にかけて居て、そこから自分の生活の實際問題を引き出す事を知らない樣な宗教も同樣でございます。妾は自分の生れのいゝ事を感じ、したいまゝの事をして居りました。考へる事が好きで、自分の理性も疑つて居りましたけれど、福音の精神と世間のそれとを一致させる事が出來なくて、信仰もなく唯空しい自分の理性が滿足する一つの境域しか持つて居なかつたので御座いました。妾は信ずる爲めと、行動するための格言をもつて居ました。ある所ではその他の所で考へて居た事を忘れてゐました。妾は教會に忠實でした。そして家に居ります時は考へ込んで居つたので御座います。あゝ妾はどの方面にも價のない者でした。

妾の祈禱は言葉に過ぎませんでした。妾の判斷は詭辯に過ぎませんでした。そして妾はたゞ一つの光として滅亡に導いて行く、迷はしい情熱を追つて居つたのです。
妾に缺けてゐた此主義が、是迄どれぐらゐ妾を惡くした主義に對する非難を、妾に被せたかは申し上げることが出來ませんわ。

その惡い主義の最初の根本は何だつたので御座いませう？ それはどんな基礎に建てられてあつたので御座いませう？ 幸福？ 本性が妾を幸福につれ行きます、はげしい情は自ら起ります。それも矢張り同じ本性に根をもつて居ります。それを壞して了ふのにはどうすればよいのでせう？ 秩序といふ考へから德の美しい事や皆の爲めにならうとするその力を引き出しました。けれどもこれらの總ては、妾の特殊な利益に對し何でムいませう？ 又、他の人々を損ねて得た自分の幸福、或は、自分の幸福を損ねて得た他の人々の幸福、斯麼ものゝどれが結局一番妾に肝要なのでムいませうか？ もしも恥や罰に對する恐れが、自分の利益の爲めに惡い事をさせない樣にするのであれば、ひそかに夫れをすればいゝわけで御座います。德は妾にもう何も云ひは致しません。そして妾が誤つてゐる事を見付けられたなら、人々はスパルタの樣に、罪をではなく、無器用だつた事を罰するだけですわ。最後に、性格と美を愛好することは自然によつて妾の心の中に印されてゐましたら、妾はその利益がくづれない限りは、妾自身の慣例を守つてゐるで御座いませう。けれど、感覺を持つてゐる生物の間にあつて、それにくらべられる模型のない程のこの內心

の姿を、いつも純粋に保ち得る事をどうして自分に確められませう？　人は亂れた愛情が、意志も、理性も腐らして了ふ事や、また變り行く、色々な臆測にしたがつて、一世紀毎、一民族毎、一個人毎に、良心でさへもしらず〳〵異つて變化して行くものだといふ事を知らないでせうか？

永久の實在をあがめて下さいまし。それは妾の賢いそして立派な友達で御座いますの、空しい外觀だけに過ぎない理性のあの幻を貴君は一息で御打ち壞しになるで御座いませう。動かす事の出來ない眞理の前にはそれは幻の樣に消えて行つて了ひます。正義に目的を、道德に基礎を、この短い生涯に價値を與へて下さるのは神で御座います。神によらなくては何物もありは致しません。「お前等の罪惡は見られて居る」と罪人達に絕えず叫んでいらつしやるのも神で御座います。また人に忘れられてゐる正義には「お前の道德は見てゐるものがあるぞ」と仰有る事が出來るので御座います。神、その變らない本體こそは妾達が心の中にもつてゐる完成と申す事の標本なので御座います。妾達の情慾がそれをくづして了はうとしても駄目で御座います。そのすべての性格は悠久そのものに結び付いて、常に理性の前にあらはれて居り、誤や、僞善に、惡化されたものを、建て直す役目をつとめて居るので御座います。これはわけもなく分る事で御座います。普通な感念はそれをするのに充分で御座います。この本體の觀念から離れる事の出來ない總ての物は神であります。その他の總ては人の所造に過ぎませんか。精神が清まり、向上して、卑しい方へ傾き殘らはしい方へ傾くのを賤しみ、それに打克つことも體得するのは、この神々しい典型を眺める事によつてであります。この崇高な眞理のしみこんだ心は、人間の小さな情慾などを退けて了ふものです。この無限な偉大さは却つて人間の傲りをにくみます。瞑想する事の愉快は、地上の慾望などを心から取り去つて了ひます。そして心が沒頭してゐる壯大な實在者がたとへ居なくなつても、猶自己を制し、より强くより賢くあるために、心が汲々としてゐるはよい事で御座いませう。

貴君は自分をのみ纏つてゐる理性が空な詭辨である、分り易い例をお探しなさいまして？　冷靜に、貴君の哲學の御說を考へませう。それはもう腐つて了つた心しかを誘惑しない罪の辨明者に應はしいもので御座います。この危險な理論家は、契約の中での最も尊い、最も嚴かなもの（結婚の事？）に直に攻擊を向けてたゞ一打ちに、契約に對する信仰によつて成立つてゐる人間社會を亡さうと決心したと云はれないでせうか？　どうか、彼等がどんなに、穢められた姦淫を庇護してゐたか考へて下さいまし。「それからは何の惡い結果も生じては來ない、姦淫の行はれてゐるのを知らない良人にとつても左樣だ」と彼等は云つて居ります。良人がそれをいつまでも知らないといふ事が確かな事であり得るかの樣に、又彼等が他を害さないといふ事が、僞誓と、不忠實とを許すのに充分であるかの樣に。

何といふ事で御座いませう。信仰がないといふ事、そむいてはならない大切な誓言や契約の力を、亡ぼす事は惡ではないでせうか？　猥らく、嘔吐きになる事を自分に强ひる事惡がではないのでせうか？　他

人の不幸や死、況して最も愛さなければならない者の死までも、貴君に望ませたやうな關係を作る事は惡ではないでせうか？　他のあらゆる罪がみなそれの結果である様な狀態が惡ではないでせうか？

兩方のうち片方の一人は、自分の方ではそれは勝手に出來ることであらうし、又何人にも約束をたがへたのではないから、自分は罪がないと思ふでせうか？　それは卑しい間違ひで御座いますわ。結婚の純潔が變らぬ様にと申すのは單に夫婦の利害關係の爲ではなく、總ての人の共通な利益の爲なので御座います。二人の男女が一つの嚴かな緣で結ばれる度毎に、この神聖な關係を尊重し、お互の間に夫婦の一致を尊重する、あらゆる人類の默契的な契約が加はるもので御座います。これは妾には、內緣の結婚に反對する强い理由の様に思はれます。この様な結婚は結合の何等のしるしもなしに、無邪氣な心を、姦淫の炎でもやして了ふ様な危險に晒らすもので御座います。公衆は過去の契約の眼前の保證の様なもので御座いますす。そして、貞節な妻の名譽はすべての善人の保護の下にあるといふ事が出來ます。かうして誰れでもその妻を墮落させたものは、罪を犯した事となります、何故ならば第一にその人は妻に罪を犯させたからで御座います。そして人々は、いつでも犯した人も犯さした人も共に罪を分け持つので御座います。その人は猶直接に自分自身にも罪を犯した事になるので御座います。何故ならば、人間の事柄が正しい秩序をもつて存續して行くには、缺く事の出來ない結婚の一般の神聖な信仰を犯したからで御座います。

罪は秘密に行はれると彼等は申します。そしてそこからは誰れに何の結果も及ぼさないと申します。もしも之等の哲學者が神様の存在と、靈魂の不滅とを信じて居りましたならば、證人として第一の侮辱をうけたものと、唯一の眞の裁判者(神)とをもつてゐる様な犯罪を、「知られない罪」と呼ぶ事が出來るでせうか？　最も自分に利害關係のある者をのぞいてその罪をかくすのに、總ての人の目をのがれさせるとは妙な秘密では御座いませんか？　神様の存在を認めて居ないにしても、どうして彼等は、誰にも惡い事をして居ないといふ事を云ひはる事が出來ませう？　どうして、自分の血の混つてゐない相續人をもち、其の上恐らく、又自分の血統でない子供まで負はされて、父としての情も持たずして、その不名譽な子供に自分の財產を與へなければならない様な父親に對して、無關心であると斷言出來ませうか？　此の唯物主義的な理論者を假定しませう。人々は、すべての人の心の底にはかうした傲慢な哲學に對する、情を求めるやさしい自然の聲を、この様な理論家に對して立てる事でせう。そしてこの自然の聲は正しい理性によつて、決して非難されるものでは御座いません、實際身體だけで思想を生み、感情が唯器官にのみよつて起るのであるのでしたら、同じ血液で形作られた二つの生物は、お互ひの間に、强い類似と强い愛情とを持つたり顏と同じ様に心が似合つて居たりはしない筈では御座いませんか？　その心の似合ひこそは愛しあふといふ事の大きな原因なので御座います。

貴君の御說では、この自然な一致を、異つた血によつて亡ぼし、又惡くする事や、家族中のあらゆる人達をお互ひに結びつけて行く、相互の愛情を棄す事は少しも惡い事ではないので御座いますか？　正直な

人で、一人の子供を他の子供と違つた育て方をするのを、恐れない人が世の中にあるでせうか？　そして、母親の懐の中でそれを變へるといふ事は、一番悪くない罪でせうか？

女だけの事を、考へて見ましても、悪事が悪事らしくないやうに見せかけてあることがどれ程澤山ムいませう！　よしや名譽を失つた結果が、直にその人にとつてあらゆる他の諸德の抛棄となる、一箇の罪の女の堕落でないと致しましても！　又それはもう自分の妻から愛されてゐないのでないにしても、秘かに歸朋せんとしてゐることが優しい良人に判り過る程判つてゐる證據でなくて何と致しませう？　その妻は自分の無頓着を證據だてゐより以上には、さうした悪る賢こい心使ひを以つて何をするといふのでせう。作りの愛撫によつて亂用せられるものは戀の目でせうか？　そして愛すべきものの傍にあつて、手が私達を抱いて、心が私達を嫌悪してゐる事を感じるのはどんな苦しみでせう！　妾は幸運が屢々過ぎらしたこの慘重を幸運が補けんことを欲しますわ。妾は時にちよつと、天が好んで混亂させる用心に他人が安心してゐることや、幸運の僞りの無辜を信ずる冒險を何でもないと思ひます。どの位の虚僞や虚言や瞞着が、悪い交際を厳ふ爲め、夫をだまかす爲め、家庭を腐敗させる爲めに行はれる事で御座いませう！　共犯者にどの位な汚名をきせ、子孫にどんな悪い手本をのこす事で御座いませう！　罪ある情熱を罰せられない様にして滑たすことに、あれや是れやと心配してゐるやうでは、子供達の教育はどうなるで御座いませう！　家の平和やその一致はどうなるで御座いませう！　こんなことが總てあつても、良人は少しも傷けられないでせうか？　けれど誰がその負はされた心から良人の煩ひを取りのぞき、妻を尊敬すべき妻とならせ得るでせうか？　誰が安息と安心とを與へるでせうか？　誰が良人の正しい疑惑を撫すのでせうか？　誰が良人自身の子供を抱擁するとき自然の感情を彼に信じさせるでせう？

姦淫や不忠實が家族の間に作り得る、僞りの關係は、眞面目な考へと申すよりも、唯一つの答へとして輕蔑と憤怒がそれに償してゐる愚かな野蛮な戯れで御座います。裏切り、爭ひ、喧嘩、殺人、毒殺、かうしたものによつて、不秩序は常に、地上を蔽つて居ります。そして之等の悪事は人間の安息と平和の代りに、罪によつて作られた愛着から、人々が何を待ち受けなければならないかを充分に示して居ります。この卑しい、さけすむべき交際から社會が幾種類か出來て來るならば、それは本當な社會を確立するために毀ち、亡して了はなければならない盗賊の社會に等しいもので御座います。

斯麼言葉から引き起される憤りをしばらく抑へて、妾は貴君とおだやかにこの言葉を考へようと思ひます。それが馬鹿げたものだとされればそれ迄の事、恐く曾つては、大した無關心でもなく、それを聽いて居つただらうと自分を恥しく思ふので、それを繰返する事をいやしまない様になつて行きます。その箴言が健全な理性に試驗されて一溜りもなかつた事は御存知の通りで御座います。けれど若しその源である所のものの中にでなければ何處に健全な理性を捜されませう。又人々を導くために、彼等に與へられたこの神聖な炬火をさゝげる人に就て何を考ふべきでせうか？　妾達は言葉だけの哲學を信じてはなりませぬ。あ

らゆる德を獲し、あらゆる惡德を辯護するいつはりの德を信じてはなりませぬ。何がよい事だかを見出す良法は、眞面目にそれを求めて見る事で御座います、かうして探せば間もなく、凡ての善の創造主の御元まで、溯らずには居られません。これは妾の感情、妾の理性を誤つた道から立て直す事に意を用ひる樣になつてから、妾になされた樣に思はれる事なのでムいます、又これは、貴君が妾と同じ道を御進みなさらうとする時に、妾よりももつとよく御出來なされる事で御座います。貴君が妾の心に宗教の立派な觀念を暫らく御養ひ下すつた事を考へるのは妾を慰めて呉れます。御心に、妾に對して何も隱したものを持つては居らつしやらない貴君が、若し外の感情をもつて居らしつたのでしたら、あゝいふ風にはお話しになりはなさいませんでしたらうに。かうした會話は私達にとつて魅力のあるものの樣にも見えます。崇高な神樣の存在等は、妾達には決してつまらないものでは御座いませんでした。それは妾達に恐怖よりも希望を與へてをりました。それは惡人の心しか決して御座いました。妾達はお互の約束の證人として神を持つてゐるのを喜びました。そして神のやうになり、神樣のやうにまで高く向上する事をいきんで居りました。時として妾達が辱しめられました時には、お互の弱さをなげきながら、「少くとも神樣は私達の心を見て居らつしやる」と云ひあつたものですわ。ね、そして妾達は前よりも平靜になつたものですわ。

若し此安穩が妾達を遠はしたなら、それはその安穩が、妾達を導く爲に建てられた原則の咎でムいます自分自身に一致する事の決して出來ない人間、その行爲には一つの法則を持ち、その感情には他の法則をもつて心のないものの樣に行動し、身體のないものの樣に考へる人間、そして、一生かゝつてした事を、全く何も自分のものとする事のない人間は、人間の價のないものでは御座いませんか。妾には人々は、妾達の昔の金言に從つて居つて、もしそれを空しい思考で限らないならば、充分に强い人々だといふ事を見出します。

弱いのは人間の常で御座います。寬仁な神樣は御自分が人間をさう御造りになつたのですもの、確にその事はお許しなさいますわ。けれど罪は惡人にある事で御座います。そしてそれは、正しい神樣の御前で決して罰せられずには居りません。神を信じないものは、自分の好きな德に身を任せます　彼は好ましいが故に善をするので、撰んで善をするのではありません。もしもその欲望が總て正當で御座いましたら、彼は强いられるまでもなく、それに從ひます。彼女はそれが正當でなくても、矢張り慾望に從ひます。といふのは　何で彼が遠慮致すものですか？　けれど總ての人間の共通な父に仕へ、それを知つて居るものは高い目的を信じて居ります。そして、それを果す熱情は氣持を生々とさせ、自分達の傾向よりももつと確かな一つの法則に從つて、彼は自分達に償した善をなし義務の法則のために、感情の欲求を犧牲に致します。かうした人達は妾の友達で御座います。勇ましい犧牲、それを妾達二人もしなければならないので御座います。妾達を結んだ戀は生涯の魅力を作つたので御座いませう。それは猶希望に生きました。時や

所を超えました。そしてあらゆる試みに堪えました。これ程完全な感情は決して自ら亡ぶものではない筈で御座います。それは道徳に献げられるに應はしいもので御座います。

もつと申し上げませう。總てはもう私達の間ではすつかり變つて了ひました。ですから貴君の御心も御變りにならなければなりませんわ。ウオルマールのジユリイはもう昔のジユリイでは御座いませんの、あのジユリイのための貴君の感情を、どうしてもすつかりお變へにならなければなりませんわ。この不徳から徳にうつつた事を、尊んで下さる事だけしか貴君には殘つて居りませんの。妾はノートの中に、貴君が御批難なさらなかつたある作者の句を書きとつて御座います。その作者はこんな事をいつて居ります。

「戀は、廉恥がそれを捨てさつた時には、その最も大いなる魅力を失ふ。そのあらゆる價値を感ずる爲めには、心がその廉恥を藥んで居なければならぬ。而して戀は愛するものを向上させつゝ、吾人を向上させるものでなければならぬ。完全の理想を捨て去り、熱情を捨てさり、尊敬を捨てさつたならば戀はもう何物でもない。女は如何にして、その輕蔑す可き男を尊ぼうか？　又如何にして、男はいやしい破廉恥漢に苦もなく身をまかす様な女を尊び得やうか？　かくしてやがて彼等はお互に卑すみあふに至る。戀はこの天の感情は、もう彼等にとつては一つの恥づべき契約に外ならない。彼等は名譽を失ふであらう。そして最大の幸福を見出さぬであらう。」こゝに妾達にとつての教訓がありますの。妾のお友達よ！　それを御強ひになつたのは貴君で御座います。あの手紙が書かれた幸福な時に於てよりも、もつと親しく妾達の心が互に

愛し合つたことが、曾て御座いましたでせうか？　又あの幸福な時と同じ様に名譽が妾達の心にとつて親しかつたことが曾て御座いましたでせうか？　ですから妾達の魂を恍りさせる最も優しい恍惚の感情を失ふのもかまわずに育まれた罪のある熱情が、今日妾達を何に導いてゆくか御覽になつて下さいまし。妾達二人共にはあんなに自然的である、悪徳に對する恐れは妾達の過誤の犯行者の上にも廣がるで御座いませう。妾達は自分達が互りに愛されてゐることに對して、御互に嫌ひ合ひが御いませう、そして戀は悔恨の中に延び廣がつてゆくで御座いませう。こんなに親しい二つの感情を長く續かせるよりはそれを清める方が一層善いことではないで御座いませうか？　少くともその中の無邪氣と、調和することの出來るものを保持してゆくことが、一層善いことでないで御座いませうか？　これはその感情の持つてゐる總ての最も可愛らしいものを保持してゆくことではないで御座いませうか？　さうで御座います私の善良で立派なお友達よ！　妾達が永久に愛する爲めには、妾達はお互ひに棄て合はなければなりませんわ。妾達は魂の總ての殘りを忘れるやうにいたしませう。そして貴君は妾の魂の總てを慰める程優しいものに御座います。

妾はこの樣に妾の生活の忠實な絵を提供いたしました。そして妾の心の中に起つた總てのことの、ありのまゝの歷史を提供いたしました。妾は永久に貴君を愛します。どうかそれを疑はないで下さいまし。妾を貴君に結びつけてゐる感情は尙ほ非常に優しく、又非常に生々としてゐるので御座います。それですか

ら、或る女はそれに多分驚いてゐるで御座いませう。妾がそれを信じない爲めには、それに就て餘りに異つた一つの感情を知つてゐるので御座います。妾はそれの性質の變つたのを感じるので御座います。そしてこのことに於ては少くとも、妾の過去の過誤は現在の安全を創つたもので御座います。妾は聖に嵌つた禮讓を、上面の德が尙ほ多くを要求するといふこと、そしてそれは貴君が妾の心に全く忘れられてお了ひなる時に、始めて滿足するであらうといふことを知つてゐるので御座います。妾はもつと確かな規則を持つて、それにより自分の身を持するで御座いませう。妾は秘やかな良心の聲を聞きますが、それは何にも妾を叱責致しません。そしてそれに眞心から相談する魂を迷はせは致しません。たとへ世間の人々の間に私を辯護するのには、これで充分でないに致しましても、妾自身の心の平靜を得る爲めには充分で御座います。この幸福な變化はどういふわけでなされたので御座いませうか？　妾はそれを知りません。妾が知つてゐます事は、妾がそれを激しく望んでゐたといふことで御座います。その餘はたゞ神樣ばかりがなさつたので御座います。妾は何か突然の變事言ひ換へて見ますれば、身分と地位の激變が全くその關係を變へて了ふ事か、又は激しい動搖によつて、良い地位を再び見付け出すように、それを助けることが無ければ、一度腐敗した魂は永久に腐敗してゐて、もう魂自身の善には返らないと、考へるので御座います。總てのその習慣は敗れ、そして總てのその情熱はこの一般の顚覆の中に變化して了つて、人は再びその原始の性格をとり、そして自然の手から近々に出た一つの新らしいものゝやうになるので御座います。その時には以前に陋劣であつたといふ記憶は、再び墮落する時の豫防として役にたつので御座います。昨日は人は卑しく弱い者でしたけれども、今日はその人は強く心の大きい人なので御座います。この異つた二つの狀態をつく〴〵とよく見ますと、人はその人が、再び登つたものの價がどんなに貴いかといふことを一層よく感じ、そしてそれを支持することに一層注意深くなるので御座います。妾の結婚は妾が貴君に說明しようと努めましたことゝ、略ほ同じものを妾に感じさせたので御座ます。あんなに恐がられたこの結婚は、それより遙かに恐ろしい屈從から妾を解放してくれるので御座います。そして妾の夫は妾を妾自身に返してくれましたが故に、一層妾に親愛なものとなつたので御座います。

妾達、貴君と妾は係りによく結びついてゐますから、その種類がかはつて妾達の結合が破られるやうなる事などは決して御座いません。たとへ貴君は優しい戀人を御失ひになりましても、一人の忠實な友達を御持ちになつたので御座います。そして妾達がどんなに妾達の幻想の間、それについて言ふことが出來ましたにいたしましても、今妾はこの變化が果して貴君にとつて不利なものであつたらうかといふ疑ひを起します。妾は貴君に切に御願ひいたします。どうかもつと善く、もつと賢く、そして哲學の敎訓を基督敎の風習によつて淨める爲めに、それから妾と同じ樣にこの變化を利用なさつて下さいまし。妾は貴君が同樣に幸福でゐらつしやらない限りは、決して幸福になることは御座いますまい。そして妾は以前より一層多く德がなくては幸福はないといふことを感じるので御座います。若し貴君が本當に妾を愛して下さい

ますなら、どうか妾に優しい慰めを與へて下さいまし。言葉を換へて申し上げますなら、どうか妾達の心はその迷つてゐた時に互に一致してゐたと同じ樣に、正路に歸つた時も完全に一致してゐるといふことを見せて、慰めを與へて下さいまし。

妾はこの長い手紙に辨明の必要があらうとは思はないのでありませんでしたら、この手紙ももつと短かつたことで御座いませう。この手紙を終へる前に、貴君に御願ひすることがまだ殘つてゐるので御座います。妾の過去の行ひは主人のウォールマールが知らないので御座います。併し何事も匿さないで、眞心を打ち開けることは、妾が夫にしなくてはならない忠節の一部分なので御座います。妾はウォールマールが賢い穩和な人であることは存じてゐますけれど、貴君を名指すことは、貴君に累を及ぼすことであると、常に思ふので御座いますゝそして妾はそれを貴君の御承諾なしに致さうとは望まないので御座います。貴君にそれを御願することは、貴君を御不快にすることで御座いませうか？

そしてそのお許しを得ると獨りぎめにしてゐるのは、貴君と自分とを、あまり當てにし過ぎて居る事になるので御座いませうか？　妾は本當に御願ひいたします。どうかこの匿してゐる事は罪のない事ではないといふこと、又このことは日一日と益々心を苦しめるといふこと、そして貴君の御返事を受け取る迄は妾の心は一瞬間も、平靜な時はないでせうといふことを考へて下さいまし。

書簡第十九　右返

貴女はもう私のジュリイさんではないのですか？　あ！　そんな事仰有らないで下さい。正しい尊敬に價する御婦人！　今こそ貴女は、いつもより遙かに正しい方です。尊敬す可き方です。貴女は宇宙全體の崇御をおうけになる資の方です。眞個の美といふものを初めて感じて、私が憧仰した方なのです。死んだ後までも、若し私の魂に、生前私の心を魅惑した、誠に神々しいお容姿の思ひ出が殘つて居ますものなら私が崇憧を斷たない人こそは貴女でムいます。貴女を貴女の總ての德に導いた勇氣の努力は、只一層貴女を貴女らしいものにしたに過ぎません。いゝえ、いゝえ、これを感じ、これを云ふのに、私はどの樣な苦しみを受けてをりませう。貴女は、貴女が私を拒絶なさつた瞬間より以上、貴女を自分の物だつたと思つたことは是までなかつたのですもの！　あ！　貴女を失ふことの裡、貴女を再び見出したのでした。けれどその心臟は貴女を眞似ようとする考へだけで慄へてゐる私、堪へる事も、打ち勝つ事も出來なかつた罪の情熱に苦しめられてゐる私、その私は貴つて私が存在する者と考へてゐた私なのでせうか？　私は貴女のお氣に入つてゐたのでせうか？　どんな權利があつて、私は貴女を、私の欺きや私の絶望でお惱ませした事でせうか？　貴女のお蔭で懊惱することこそ私にとつて結構だつたのです！　でなければ何で私は貴女を戀

したのでせう？

馬鹿な男です！　新しいものをその中に捜しもしないで、まるでまだ屈辱を受けて居ないかの様にしてゐたとは！　何故戀が消滅させて了つた差異を今更考へなくてはならないのでせう？　戀の爲私は上に引き上げられ、貴女と同等のものとなつたのでした。私達の心は混合して了ひました。私の感情は貴女の感情の氣高さを分けていただきました。然し今は、再び自分の低劣の中に陷つてゐます。私の心を養ひ、あれ程長く私を逸はしたやさしい希望よ！　今はもう再び抱く事もならずに消えて了つたのだ！　彼女（ジュリイの事）はもう私のものでなくなつた。私は永久に失つて了つた！　彼女は他人を幸福になさるのだ！……あゝ地獄の苦しみだ！……畜生奴！　あ……お前はもう決して決して……許して下さい奥樣。私の狂憤を憐れと思つて下さい。あゝ神樣！　貴君はあまりそれを鮮かに豫言されました。彼女はもうないと……彼女このなつかしいジュリイさん、私の心の總ての働きをお示しする事が出來た人は、もう居らつしやらないのだ！　それだのに何といふ事だ！　私は不幸だつたとは又私は可哀想な男だつたとは！……彼女が私の云ふ事を聽いて下さつたとは！　私は不幸だつたのだとは！　今日は一體私は何なのだらう？……いや、私は今後貴女の事についても、又私の事についても、貴女に赤面おさせ申すことをしますまい。萬事終つて了つた！　お互に殘念し合ひ、別れなくてはなりません。德性物がそれを愼めと命令しました。貴女の

お手はそれをお書きなさることが出來たのです。私共は忘れませう！……少くとも私の事は忘れて下さい私は忘心しました、私は誓ひます。私は、私の事をもう、決して申上げますまい。

貴女に向つて、なほも貴女の事を語つたり、私に殘る唯一つの興味たる貴女の幸福を依然とし握つてつて離さない程私は圖太いでせうか？　私に貴女のお心の狀態をお示しになつたうちに、貴女は私に御自分の運命に就いては何も仰言いませんでした。あ！　貴女がお感じになる苦の犧牲の代償で、私をこの堪へ難い疑から救ひ出して下さい。ジュリイさん、貴女は御幸福でいらつしやいますか？　若しさうなら、絕望の裡に只一つ私が感ぜられる慰安を與へて下さい。若し幸福でいらつしやらないなら、憐れと思召して私に「自分は幸福だ」と仰言つて下さい、さうすれば、さういつ迄も私不幸では無いでせうから。

私は貴女のお考へになつた告白を再考してみますれば、愈々以て、それを承知し兼ねます。常に貴女に拒絕の勇氣を私から奪ひ去つたと同じ動機から、この事については到底私は冷酷になれません。事實重要なものではありません。私が斯く申す理由をお考へになつて下さいとお願ひします。第一に貴女の大變纖細な感じが貴女をこの點について誤まらせて居る樣に見えます。それで、どういふ理由から、至極嚴しい德がこの樣な告白を、要求する樣になるか私には理解出來ません。世に如何なる約束も既往に對る効果を持ちません。人々は過去の爲には責任を負ふ事も、又果すことの出來なかつた約束を守らせられる事も、知りますまい。どうして自由によつて爲された既往の習慣について、又決して彼に約束されなかつた忠信

について、人は責任を帯びなければならんのですか？　これを聞違つて下さいますな。貴女の御誠實さの足りなかつたのは貴女の御主人に對してではなく、貴女のお友達に對してなのです。貴女のお父樣か酷い仕打をなさる前には、天も自然も私達を結び付けて居りました。貴女は、私達の緣以外の緣をお結びになつて、恐らく愛も、名譽も許さないだらう所の罪をお犯しになつたのです。私こそウオールマールさんが私から奪つてお了ひになつた幸福を要求する權利を持つて居るのです。

義務が此樣な告白を要求する場合といふのは過を犯して、其危險の爲に注意深い婦人が危險から免かれる樣と色々豫防策を講じなければならなくなつた時なのです。けれど、貴女のお手紙は貴女が貴女の單個の御感情に就いてお考へを及ぼしていらつしやらないといふ事をます〳〵明示しました。それを讀みつゝ、私は私の心の中で　どの樣に、貴女のお心が戀に醉ひしれてゐる時にでも、罪のある約束を、遠慮なくお憎みになつたかといふ事を感じました。其約束の恐ろしさは、遠ざかれば私達から無くなるものなのでしたが。

義務と正直さとがこの樣な秘密を要求しなくなつて了ふと、智と理性とが此秘密を守ります。何故と申しますに、其樣な事は、必要も無いのに、結婚生活中にある算い何物かを犯し、危くするからです。つまり夫の愛着、お互ひの信賴、一家の平和等です。此樣な手段に就いて一體貴女はよくお考へになつたのですか？　其手段が貴女の御主人に醜すだらう所の結果に別に危い事が無いと御自信がある程、貴女は、貴女の御主人を御存知なのですか？　貴女は世の中に、熱烈な嫉妬や烈しい、輕蔑をこの爲に直ぐ抱き、又恐らく婦人を一人自殺させて了ふ樣な人達が世に澤山ある事を御存知なのですか？　この樣なデリケートな事を試みてみるには、時、所、性格を念頭に置かねばなりません。今私の居る國では、この樣な打明け話はしても、少しも危險がありません。又この樣に、夫婦間の信實さを輕く見る人達は、婚約に先立つ過ちをかくばかりに重大視する人達でもありません。此等の誓ひを屢々不可缺なものとし、又貴女に對しては起つた事の無いいろ〳〵の理由については云はないことにして、私は、次の樣な婦人をあまり算い人とは思ひません、卽ち必要あるがまゝに其婦人達に濫用の出來る信用を恐らく此價で得るが爲でせう、大した冒險もせずに、この誠實の價を自ら得ようとする婦人達です。けれど結婚の神聖さがより多く敬はれてゐる所、此聖な緣しが堅い結合を形成してゐる、又夫が其妻に對してほんとの愛着を感じて居る所に於ては、夫は、其妻の身上に關してより嚴しい始末を彼女に要求して居るのです。夫は妻の心が彼等に對して唯やさしい感情のみを持つ樣にと要求してゐます。夫等は自分達の所有以外の權利を奪つて、彼女達が彼等のものとなる前にも、彼等のみに屬してゐなくてはならぬと要求します。そして實際の不誠實にもまして自由の濫用を容赦しません。

私を信じて下さい。德のあるジュリイさん！　仇な、必要の無い熱情を輕蔑なさいまし。何者も貴女に告白を強ふる事の出來ないこの危ない秘密を守つて下さい、この秘密が人に知れたら、貴女は失はれて了

つのでせうし、貴女の御主人の爲さる事も決まつて了ひませう。彼の方(夫)が其告白をお受けになれる方にしても、其お心はきつと其爲に、悲しまされるでせう。貴女は理も無くて、彼の方をお苦しめになる事になるでせう。若し彼の方が其告白をお受けになれぬ人ならば、何故貴女は告白等して貴女に對するその非難に口實をお與へにならうと云ふのですか？　貴女の内心の責めに對して貴女を保つて居た貴女の德が、此先益々增して行く家庭的な煩ひに對して貴女をやはり援けて行くかを、どうお考へになつていらつしやるのですか？　貴女の不幸が貴女の勇氣よりも力强くなり、又細心の餘り、貴女がもう仲々お出になれない樣な狀態よりも、更に悪い狀態にお陷りになるのをお恐れになつて、どうか決して意識的に貴女の不幸を嵩めないように願ひます。智は諸德の基です。智にお賴りになつて下さい。お願ひしますから、貴女の御生活中の一番重大事に當つては、智に相談なさつて下さい。又此致命的な秘密がその樣に苦しく貴女をお責めするなら、少くとも、其秘密をお逃れになる爲には、年月が經つて、もつと完全に御主人を理解なさる時を、又貴女の美しさで、御主人のお心に、貴女のお性質の美しさのより安全な結果と、貴女のお心の美しさを感ずるやさしい習慣とが副はる樣になる時をお待ち下さい。この理由がどんなに確固としたものにせよ、貴女が納得し兼ねる樣におなりの時は、其理由を云ふ聲に耳を閉ぢてはいけません。あゝジュリイさん。若干の德を行ふ事の出來る一人の男の云ふ事を聞いて下さい。其男は少くとも、今日彼が貴女にする犧牲によつて、今度は貴女から若干の犧牲をうけてもいい男なのです。

私はこれで筆を擱かなくてはならないのです。私は、かう感じます、もう貴女がお聞きになれない樣な調子を其處にこれを最後として入れざるを得なかつたのです。ジュリイさん！　貴女から離れなければならないのです。こんなに若い身で、もう幸福を斷念しなくてはなりません。あゝ還つて來ない日！　過ぎ逝く時！　永劫の悔の源なのです。快樂、歡喜、心地好い陶醉、甘美な時、神々しい眩惑！　私の戀、私のたつた一つの戀、私の生涯の名譽と魅力の戀！　あゝ永遠の別れです！

書簡第廿　ジュリイから

貴君は妾が幸福であるかと仰しやいますの。けれど、妾、貴君がお力添え下さらなければ、お答へする事は出來ませんわ。貴君のお言葉の樣に、忘れて了はうとしてゐる所ではなし、若し、貴君がもう愛して下さらないなら、妾、幸福だなんて、事はありませんわ。どうしても、妾の幸福には、貴君の幸福がなければならないんですもの。此前のお手紙に、ウォルマールの事を避けて書かなかつたのは、貴君に御遠慮しての事です。妾は、貴君が、非常に感じ易い方ですから、御心を苛立たせずにはゐないといふ事をよく知つてゐます。併し、妾の運命に就いて、貴君が御心配下さるから妾はその方のお話をせずには居られません。けれどそのお話は、只々その方の妻と、眞理のお友達にふさはしい、如何にも、その方相當のお話なのです。

ウォルマールは、五十近い者ですが、變化のない、きちんとした生活を送り、又熱情に走らない温和な氣質ですから、健かな體格で、つや〳〵しい樣子は、まだ漸く四十位にしか見えません。それでゐて、その經驗の豐富な事と、賢明な事とは非常なものです。氣高い、愛嬌のある顏付で、何でも近付き易い、解放的な人です。慇懃と云ふよりも、正直な態度の人です。言葉數は少いが、要領を得てゐて、而も、諷刺的な樣子も見えません。誰にも同じ樣に對し、特に人を近づけたがり、遠ざける事もなく、只その理性の擇ぶ所に從ふだけです。

斯の樣に、冷靜な生れ付きでありましたが、妾の父の仕事を手傳つてゐた中に、妾を氣に入り、生れて初めて、愛著の情を感じたのです。此穩かな、併し何時迄も續く彼の情は、全くその禮節ある行ひに支配され、常に同樣に維持されてゐて、その境遇が變つても、その調子を變へる必要もなく、その結婚の莊重さを汚す事もなく、結婚後も前同樣な態度を續けて妾に交はつてゐるのです。妾には、良人は愉快さうにも亦悲しさうにも、見えませんが、彼は何時も滿足さうに見えます。彼の口から自分の事を聞いた事は決してありません。稀に妾の事を話す丈です。妾に關ねた事はありません。妾と別れる時は餘り嬉しさうでもありません。彼は少しも笑ひません。彼は求めずして、自ら眞摯になるのです。その靜な應待ぶりは、却つて妾を快濶にする樣に力めてゐると思へます。妾が愉快を感ずる時は、彼も感ずる時であるので、彼が妾の爲に意を用ひて晃れる事は、妾を愉快にさ……ようと力める事だけなのです。つまり、彼は、妾が幸

福である樣にと望んでゐるのです。彼は妾にその事を云ひました、然し妾にもそれは解ります。その妻の幸福を求める事は、幸福を獲た事ではありませんか？

何んなに氣をつけて彼を觀察しても、妾は彼の妾に對する、心持を見出す事は出來まいと思はれます。尙ほ心持は大變平等な温和なもので、彼が愛すと云ふのは、愛さうと思ふだけなのだと人に云はれ、又それも理性の許すだけしか、愛さうと思はぬのであると云はれる程のものなのです。實際エドワード卿のお思ひなさつてゐる通りの人なのです。妾達が自分であんなに賞めてゐる感情をもつてゐる妾達凡ての人々よりも、彼が優れてゐるとは、なんで思ひませうか！　感情は色々の點で妾達を誤らせるものです。そして常に疑はしいと云ふ事を本として動くものですから。併し理性は、唯正しい事以外の結果は齎しません。理性の動く所は人の行爲にあつても、常に確固たる、明白な、容易なものであります。理性は、それ自身の爲に爲されるのではない、拙らない思索をしては、迷ふだけなのです。

ウォルマールは觀察する事が最も大きな好みなのです。見てゐる人や、行爲の性質を判斷する事が好きなのです。彼は最も賢明に、且、公平に判斷するのです。その敵が彼に害を加へた時にも、彼は至極平靜に相手の動機と方法とを考察して、恰も自分に關係のない事にでもたづさはつてゐる樣に思へる程です。妾が話した貴君の事を彼が何う取つたか知りませんが、彼は屢々、貴君の事を尊敬して話します、妾は彼が詐るものでないと云ふ事をよく知つてゐます。此樣な談話を彼と交はしてゐる時に、彼が妾を觀察し

てゐるなと思ふ時がありますが、此様に妾が氣かつくといふのは、常におず〳〵して居る心の中に起る、心咎めに過ぎない様です。兎に角妾は、妾の爲すべき事をして了ひました。不當な遠慮をさせる様な恐しさも、羞づかしさも持つて居りません。而も、妾は貴君も、あの人も、お互に御尤もであると思つてゐますの。

妾は、妾達の收入とその處分方法とに就いてお話しするのを忘れました。ウォルマールの財産の殘餘と妾の父の財産と、恩給丈なんですが——と一緒に合せて、相當な、中位な財産となつて居りますの。貞人はそれを、巧に、上品に使つて居ります。何の不便も來たさない様に、無駄な贅澤もせずに、然し餘裕ある眞生活に都合よくし、且、その近所の貧乏人にも必要な施與をして暮して居るのです。その家庭の秩序は實にその心に在る秩序の正しい事の姿であり、又一國家にある秩序をその小家庭で眞似てゐる様に思はれます。却てぎごちない窮窟を感ずる様な、融通のきかない所もなく、凡ての習慣を除く様なまづいごたごたした所もありません。教へ子を導く師の手の様な心持を見出しますが、決してそれを感じません。彼は最初の手管々どし〳〵進めて、今は凡てがすら〳〵と獨りで進んで行く程です。そこには秩序と自由とが同時に快く感ぜられるのでございます。

貴君、之が妾が彼と一緒に暮して以來知り得たウォルマールの簡單ではあるが、僞のない姿なのです。その最初に見た彼の姿は、實に今も少しも變らないそのまゝの彼の姿です。彼は決して隱し立てした様子をするものとは思へませんから、これで妾は確に、餘す所なくよく彼を見てゐると思ふのです。

此事について、豫じめ貴君は自問自答してゐらつしやるかも知れません、併し、貴君は餘程妾を馬鹿になさらなければ、これでも妾が幸福であると思へないとは仰しやれますまい。長い間、妾を誤らせ、又今尚貴君を誤らしてゐるものは、戀は幸福な結婚をなすに必要なものであると考へる事です。ねえ、此は誤りでせう。正直な事、德のある事、ある釣合のとれてゐる事、年齢、地位等よりも寧ろその性質、心はせ等の方が二人の配偶者には重要なのです。それ故戀からでなくても、戀の時と同樣に和やかな、只もつと長く續く非常に優しい愛着心が、此樣な結婚から生じ得るものでございます。戀は常にやまない嫉みと色々不自由な事を伴ふもので、享樂と平和の生活であるべき結婚には不都合な性質を備へて居ります。結婚するのは、相互個々別々に考へる爲ではなく、二人一緒になつて、その内生活の務めを盡し、家庭を心して統べ、その子供をよく育てる爲なのです。戀人は互にその相手だけしか見ず、相手の事ばかり思ひ煩ひ相互に愛する事の外は、何をして良いかわからないのです。しなければならぬ事がそんなにあるのも、配偶者達には充分ではないのです。戀の樣に强い幻を起させる熱情は彼等にはないのです。戀の激しさはその永續する事を思はせます。それにその樣に和かな情も持つてゐるその心は、將來へと擴つて行くのです。そして此戀の續く限りは、決してその心も變るまいと思はれるのです。併し、之と反對に、その心が失はれて了ふのもその戀の激しさからなのです。戀は、若さと、美しさと等しく、漸く力なくなり、年齡

の鏡の下に消え失せるのです。白髪の二人の愛人が互にその戀を語つてゐるのを見た事はないのです。して見れば、早かれ、遅かれ、二人の燃ゆる様な愛も、屹せるのだと思はない譯には參りますまい。偶像は破壊されても、人は猶仕へてゐるのです。人は互に、自分の氣持と同じ様に、他人を見るのです。その愛した對象を尋ね求めては驚くのです。それを見出す事も出來ず、殘つてゐるものを恨めしく思ふのです。そして、想像はその對象に昔粧はしてゐた衣を脫がして、形を變へさせる事も屢あるのです。「互に愛してもゐない時に、愛してゐたと云ふ事を心恥づかしく思はぬ人は少い」とラロシュフーコーが云つてゐます。激しい情についで倦怠が來ると云ふのは、何と恐しい事でせうか。その戀の凋みゆく時には、お互に知らぬ顏をするだけではなく、却て嫌惡の情を生ずる様になつて行くとはほんとに恐しい事でございます。ほんとに恐しい事でございます。餘り愛し合つてゐた爲に二人の戀人は、遂に妻たり夫たるお互を嫌ふ様になるのですわ。貴君、妾は貴君が非常に御親切であると思つてゐます。今迄、貴君を戀人としての み見てゐたのです。若しもう戀人でないとして、貴君は何うおなりになるでせうか妾には解りません。屹めた戀は、心に力を與へるのを常とする様に思ひます。併し心が抱きしめなければならない關係に於いて幸福になる爲にはそれで充分なのでせうか。おゝ、多くの德ある男の方にも、隨分忍び難い夫となつて居らつしやいます！　以上の事で、何うにか妾の事も御判じ下される事と存じます。

ウオルマールに對しては。何の空想もお互に初めから持つて居りませんでした。妾達はあるがまゝに、見てゐるのです。妾達を結ぶ心は、情に驅られた情の盲目的な切愛では決してありません。二人の正しい心、理性ある人間の、濫らない固い、愛着心なのです。二人共之から先の生活を共にする様な運命を持ち、その運命に滿足し、互に優しく穩かにする様に力めてゐるのでございます。若し、わざ〳〵私達が一緒になる様に生まれたにしましても、今以上に樂しくは暮す事は出來ないでせう。彼が妾と同樣に柔しくとも、時々はお互の感じ易い心が衝突し、その結果屢いさかひが起ると云ふ事は避けられない事ですわ。妾が彼の様に穩かであつたら、妾達の間は餘りに冷く、今よりも不快に、温か味がなく暮さなければならないでせう。彼が妾を少しも愛さなければ、二人共うまく暮す事は出來ますまい。又餘り愛したとしたら妾は却てうるさく思ひませう。ほんとに今は二人共お互に必要なものとなつてゐるのです。彼は妾に光明を投けて呉れます。妾は彼に生氣を與へて居りますの。私達は一緒になつて居ればこそ、それをよくよく尊重するのです。二人の間には只一つの魂があつて、彼はその理性の方面を持ち、妾は其情意の方面をうけ持つてゐる様に見えますの。彼が少し年を老つてゐる事迄が、二人の共通の利益を取るのに都合がよいのでございます。以前の様に自ら苦められる程の熱情を持つてゐた妾は、彼がも少し若かつたなら、結婚をしても、尚どんなにか餘計苦しんだ事でございませう。そしてどゞのつまりは、妾の心に起つた此幸福な變動も妨げられて起らなかつたかも知れません。

貴君、天の神様は、親達の善い意圖を照らし、その子達の從順な事をお酬ゐになるでせう。決して妾は

神の御不興を蒙る様な事は致しません。妾の運命に就いて、貴君に充分御安心申させ度い唯一の望は、以下の事をこゝに附け加へさして頂く事でございます。妾が未だ嫁がずにゐて、夫を選ぶ權利を與へられてゐたあの時、今貴君に對して抱いてゐた此感情と、今の知識とがあつたならば、妾を導いて下され且妾の胸の奥をお解りになる、あの神樣を以て、妾が眞摯であると云ふ證人にし、妾が夫として擇ぶのは貴君ではなく、ウオルマールだと云ふ事を示したでございませう。

貴君の御心を原に回へすには、妾の心に殘る事を悉く申して了ふ事が必要でございませう。ウオルマールは、妾よりも、年上です。妾の誤を責める爲に、神樣が妾には勿體ない此立派な夫を奪つてお了ひになれば、妾は決して他に夫を持たないと堅く決心して居ります。世に貞潔な處女があると云ふ幸福がなくても、せめて貞潔な寡婦とは成り得るでございませう。御承知の通り、妾は一度斯う申し上げたら、決して後へは引かない女で御座います。

貴君の御不審を揭げる爲に申し上げた事は、妾が夫になさねばならぬと思つてゐる告白に、貴君がなさる反對を解決するのに役立つかも知れません。良人は非常に賢い人ですから、不面目な手數をかけて妾を罰する樣な事は致しません。妾が後悔すると云ふ一事で、妾は許される事でせう。妾には貴君の仰せの樣な御婦人達のなさる惡い企みは到底出來ません、出來ると疑はれる事もございますまい。此事を告白するのは必要でないと仰しやる、貴君の理由に至つては全くそれは一種の詭辨でございます。まだ自分のものではない一人の夫に對しては、何も責任がないとはいへ、身を僞つてその人と結婚する事は許さるべき事ではありません。妾は結婚しない中から、感じてゐる此結合を破る事は、彼の意のまゝで出來るものでも無く、又そんな事をするのに、嘗ては彼の人より、ふさはしかつた妾の心一つによるのでもない、と云ふ事を充すのを妨げたならば、妾は一層罪を重ねる許りでございます。正しくない誓約をする事は既に罪惡であるのに、その誓約を守つて行くのは、又第二の罪ではありませんか。妾には到底申し上げられませんが尙他に一の理由がありますの。それを申し上げれば、妾は更に〳〵罪を重ねるのです。神樣何卒、その理由は清えます樣に。

更に正當な、又更に重大な考は、彼のその妻を尊敬して、幸福にゐらしやる心正しい人の平和を、徒に亂すといふ恐れでございます。妾達を一緒にしてゐる此結合を破る事は、彼の意のまゝで出來るものでもなく、又そんな事をするのに、嘗ては彼の人より、ふさはしかつた妾の心一つによるのでもない、と云ふ事は確かです。斯の樣に、妾は彼に不躾けにも、打ち明け話しを致しまして、彼を全く煩悶させて了ひ、妾の心に長い間から在りました、いやな秘め事から離れて了ふと云ふ　利益無い樣な事をやらうと致しましたの。彼に告白して了つてからは、一層落ちつくだらうと存じます。さう感じます。併し、徒には反對の結果を來したかも知れません。彼の靜な心持よりも、却て自分の和かな心持を望むと云ふのは、實に妾の誤を償ふに不都合な方法でございませう。

妾の此迷ひを解くに、何うしたらよいでせうか？　妾の務を更によく示して下さる爲に、貴君の御親切

な御勸めに從ひませう。妾は默つて居ります。妾は、夫には妾の犯した過は申しますまい。他日此過が許される丈の行ひをして、それを償ふ樣に力めませう。

此樣に必要な改革を始める爲に、妾達があれ以來文通を斷つて居りました事をお悅び下さい。もしウォルマールが妾の告白を聞いたならば、妾達お互を結びつけてゐる、此友情を何の位の程度迄許して下さるか、又その少しも不純なものでないと云ふ事を何れ程迄認めて下さるでせうか。併し、妾は敢て御相談を致しませんが、妾の經驗では、外面上最も正しい習慣が人を迷はすと云ふ事をよく知つて居ます。よく物を考へるべき時なのでございます。妾の心は落着いて居りますが、妾の爲になる樣に判じ度くはありませんん、娘の頃迷つたと同じ自惚を、今又心に抱かうとは思ひません。之が妾の最後の手紙となるのでございます。今後決してお手紙を下さらぬ樣に。併し、妾は何時迄も貴君の事を心にしては居りますし、又君がお變りになる事を悅んで居ります。面白いお便りがあります節は、ドルブ夫人の許へお手紙を下さいの樣に清いものでございますから、時折は、貴君の御便りも伺ひ度く、又貴君に應はしい御幸福を[redacted]ませ。貴君の御心の辛直なのが何時も御手紙に現はれる事を望んで居ります。又妾の從姉は、德のある、賢い女で御座ゐますから、妾の見てもよい手紙は、妾にも報らせ、貴君が餘りお書き過ざになれば、從姉は御手紙を訂正しても呉れませう。

それでは之で失禮致します。若し財產が貴君を幸福になし得ると思へば、妾は貴君に「急いで財產をお

遣り遊ばせと申し上げませう。然し財產が無くともいゝ爲に寶物等と一緒に貴君が財產を御輕蔑になるのも恐らく御尤もな事でございます。妾は寧ろ「急いで最大の幸福をお求め下さい。それこそ賢人の財產なのです」と申し上げ度いのです。德がなければ、幸福もないとは妾達の常に思つてゐる所でございます。併し、此の德といふ言葉は、餘り抽象的で、あるが爲自分の心の滿足を求むるよりも他人を惑はす事の見榮の名稱の樣に考へてはならない事にお氣をつけ下さい。自分の心の奥に不義を有つものも尙德を語ると思へば怖しくなります。妾達があの恐しい文通をして居りました時に、此尊ぶべき、而も濫用されてゐる此言葉が、妾達には何を意味してゐたかお解りになりますか。それは夢中になつゐたあの戀なのです。妾達はその戀でお互を熱し合ひ、その戀の熱情に、あの聖い神の狂熱を裝はせて、更に親しみ易いものとし、更にそれを濫りに享樂しようとしたのです。妾は、妾達は眞の德に從ひ、德に近づく爲に作られたのであると思ひます。妾達は德を求めつゝ、踏み誤りました。そしてその空しい影を追ふ許りでした。幻は消え、長い迷夢の覺める時となつたのでございます。此覺醒は、貴君には苦しいものではありません。貴君は、御自身、自らの指導者でいらつしやいます。貴君は、それをお忘れになる事は出來ましても、それを除きお去りになる事は出來ませんでした。貴君は魂は聖くして、凡て善なる事を愛していらつしやいます。時折、それを脫れるのは、魂がその全力を注がなかつたからなのです。良心の奥底に立ち歸り、貴君の凡ての行爲を更によく支配し、それをお互に又その共通の對象にしつかりと結びつけて呉れる、ある忘

れられた力を探ね求めて御覧なさいまし。揺かす事の出来ない地盤の上にその土臺を置いてこそ。妾ら貴君の行の土臺となるのでございますわ。巨きな象の上に、世界を建て、その象を一匹の龜の上に置くあり印度人の話を覚えてゐらつしやるでせう。もしその龜は何の上に置くのかと聞けば、彼等は答へられないのでございます。

貴君のお友達である妾の此話に少しでも耳を傾け、妾達が長い間迷つて來た路とは違ふ、確な路がとつて幸福へとお進みになる事を心からお願ひ致しますわ。貴君と妾との爲に、妾は絶えず神樣に幸を祈り、二人の爲にそれが獲られた時始めて、滿足しませう。あゝ、もし妾達が、思はずも若い時の迷を思ひ、出した時には、その迷の夢から醒める事が、その思ひ出を許し、又故人と共に、「あゝ、我々は未だ死んでゐたのでは無いとしたなら、死んでしまふのであつたらうに」(此文句はテミストクレースの言葉である—編者註)と叫び得る樣に致しませう。

說敎師である妾の誓もこゝで終りました。妾は、此から自分の爲に說敎しなければならない事が隨分あるのでございます。では御親切な貴君、永くお別れ致しませう。此が、曲げる事の出來ない義務の命ずる所なのでございます。併し、ジユリイの心は、貴君の心は、昔親しかつたお方を忘れて了ふ事は出來ないと云ふ事を御承知下さい。

あゝ！ 何う致しませう……此手紙の樣子で、貴君はきつと御判じ下さるでせう。あゝ！ 最後のお別れの辭を」その友達に述べる時に悲しくなつてはいけないのでせうか？

書簡第廿一　ジユリイの戀人からエドワード卿へ

本當に閣下さうなんです。私の魂は生命の重荷に抑へつけられてゐるのです。前々から生命は私の重荷になつてゐるのです。私は生命を私に懐しくするものゝ總てを失つて了ひました。今は只倦み疲れた氣持が殘つてゐるだけです。併し私に生命を與へて下さつたお方(神の意味する—譯者)の御命令も待たずに、それを勝手に處分するのは許すべきものでないと云ふ事を知つてゐるのです。又私は、此生命が名義だけではなく、それ以上貴君のものとなつてゐるのを知つてゐます。貴君の御注意で、二度も、それは救はれました。今も貴君の御恩で、私はそれを繋ぎ止めてゐます。私は自分の思ふ儘にしても決して誰にも罪を作らず、又は、貴君の爲にする事が出來ると云ふ望みが少しでもない限りは、決してそれを自分勝手には致しますまい。

貴君は、私が貴君の爲に入用だとお仰言いましたね、併し、何故、私をお欺しになつたのですか？ 私達がロンドンに參つた時から、貴君は、御自分の事を私に思はせず、只私の事だけ御心配なさられます。何とマア貴君のお心配の餘りにとき過ぎてゐますこと！ 閣下、私は生命よりも、罪惡の方が更に嫌ひだと云ふ事を御存じですね。私は、永遠の實在を愛し崇ぶのです。私は、凡てに於て貴君のお蔭を蒙り、私は貴君を愛して居ります。私は只貴君の爲に此世にをります。愛、義務等が地上には不幸な者を縛りつける力をもつてゐるのです。(義理にからまれて死なれないの意—譯者)日實や、詭辯では、不幸な者を地上に捕へて置く事は出

來ません。私の理性を照し私の心に向つて語つて下さい。私は悦んで貴君の仰有る事を伺ひませう。併し之は失望の餘りでないと云ふ事を御記憶下さい。

貴君は議論をなさり度いのですねえ、えゝ、よろしうムいます。では議論を致しませう。貴君は取扱はれる問題の大さにつれて、その討議が比例することを御望みで御座るませうね、畏まりました。靜に、落ち著いて、眞理を探ね、恰も、何か他の事でゞもある樣に、冷靜に審議致しませう。(一)ロベックは自殺する前にその自殺の辯解をした書物を著はしました。私は彼の例に倣つて書物を著しはしない、又私は彼の著書にはあまり感じてゐませんのです。併し、今之を審議するに當つて彼の冷靜な態度を眞似ようと思ひます。

私は長い間、此重大な問題に就いて熟慮致しました。貴君はそれを御承知の筈です。それは貴君が私の運命を知り、又私は猶生きて居りますものですから。考へれば考へる程、私は此は結局次の樣な根本的の問題となるのだと思ひます。他人を傷けない範圍で自己の善を求め、自己の惡を避けるのは、實に天の權利であります。私達の生きて行く事が自分自身にとつて善とならないならば身を生の束縛から解脫させる事は許さるべき事でありますが、若し生が自分にとつて惡であり、又何人にとつても善とならないならば實に之であると思ひます。世に、明白な、確實な格言があるとすれば、此格言が全然覆へされて了つたならば、凡ゆる人の行動は、罪惡であります。

我々の詭辯家達は此事に就いて何う申しますか？　先づ、彼等は、生命は、私達に與へられたものなのだから、私達の日本より有するものではないと考へてゐます。併し、生命は、私達に與へられたものであるからこそ、私達のものなのです。神樣は果して詭辯家達に二本の腕を與へなかつたでせうか？　併し、若し彼等がその腕に壞疽が出來るのを恐れる時は、片方の腕を切らせ、必要な時には兩方共切らせるでせう。靈魂の不滅を信じる者に對しても、全く同樣の事が云へます。その譯は、若し私が自分の體の大切な部分の爲に、私の腕を犧牲にするなら、私はもつと貴重な自分の幸福となるものの爲に、私の體を犧牲にするからです。若し天から與へられた凡ゆる賜物が、本來私達にとつて幸福であるとしても、それ等はその性質は偶りに變じ易いものであります。而も天の神樣は、それに加へて、その賜物を識別する爲に理性を與へたのでした。若し此掟が、一を取り、一を棄てる事を許さなかつたなら、人間の間では、此掟は何の用をするのでせう？

詭辯家達は、左程頑强でない此障礙を、色々の方法で避けるのです。彼等は、地上に生きてゐる人間を歩哨に立つてゐる兵士と見るのです。「神樣はお前を此世に立たして置かれたのだ。何故その許しも待たずに逃げ出すのだ。」と彼等は云ひます。「併し、お前自身も、神樣がお前の町の中にお立たせになつたのではないか？　何故その許しもなしに、お前は町を出て來たのだ。」その許しは、不遇者には與へられないのですか？　體の中にしろ、土の上にしろ、たとへ何んな所に立たせられても、自分がその場所に居て良いからそこにゐるので、そこにゐて惡ければ、そこを出るのです。是が自然の法則であり、神の御聲でありま

す。その命ずる所を待たねばならないと私は知つてゐます。が然し私が自然に死ぬ時は、神様は、私に死を命じたまふたのではなくて、私の生を奪つておしまひなすつたのです。つまり、私には生を背負ひ切れない様にして了つて、私に、此世を去れとお命じになつたのです。第一の場合には、私は力の限り反抗しますが、第二の場合には、それに服するのが順當なのです。

丁度、神の掟の束縛を脱しようとしてであるかの様に、神の攝理に逆らひ、好んで死を謀る程不埒な人が、あるとお思になりますか？　命を絶つのは、神の掟から遁れる爲ではなく、却てその掟を實施する事となるのです。何です、神様は只私の體に對してのみ權力があるのですつて？　生きてゐるものが生きてゐるところ、天下、神様の御手の下にないと云ふ所が此世にあるのですか？　私の肉體が純化されて、もう肉體ではなくなり、神の本體により多く似て來たものとなる時、神様は前よりも一層かく直接に私に作用を及ぼすのでせうか。否、神様の正義と仁慈とは私の希望となつたのであります。若し、死と云ふ事で神の威力から遁れる事が出來ると思ふなら、私は決して死に度いとは思ひません。

まだ高尚な眞理の多くを含んでゐるのは、フエドン（譯者註―プラトン對話篇の一つ）の詭辯の中の或る詭辯です。「お前の奴隷が自殺した時に、彼がお前の財産であるもの（彼自身）を不都合にもなくして了つたといふ廉でお前は彼を罰しないだらうか。」とソクラテースが、セベスに云ひました。ソクラテースよ、貴君は私達には何と仰しやいますか？　死んで了へば、人間はもう神のものではないのですか？　そんな事はありません

然し、次の様に云ふべきでせう「若し、お前が奴隷に、奴隷の仕事をするには邪魔な衣物を着せてやる時に、奴隷がその務を一層よくつくす爲に、此衣物を脱いで了つたからとて彼を罰するだらうか？」と。私達の存在が、生活によつてのみ存し、死んで了へばもうそれつきりであるかの様に思つて、生きて居る事を除りに重視する事が大な誤なのです。私達の生きてゐると云ふ事は、神様の眼には大した事ではないのです。悟性の上から見れば、又大した事ではないのです。又私達の眼から見ても、大した事ではない譯なのです。私達が肉體を殘してゐる時は、邪魔な着物を着せる丈の事なのです、そんなに大騷ぎする程のものなのですか。ね閣下、此勿體らしく云ふ人々は善意はないのです。その推論するのに痴けたひどい遣り方をして、恰も人がその存在を奪はれるかの様に所謂罪惡なるものを過重視し、人間は常に此世に永遠に存在すべきものであるかの様に、その罪を罰してゐるのです。

併し、彼等に、その今迄用ひてゐたあの尤もらしい議論を與へる。フエドンに於ては、此問題は輕々に扱はれてゐる丈です。不公平な裁判の爲に僅か數時間後には死刑に處せらるるソクラテースは、自分の命を自分の自由にする事が許さるる事であるか何うかをよく〳〵考ふる必要はなかつたのです。プラトンが彼に傳へさせたかの說話を實際に彼が守つてゐたとして、彼はその說話を實行する場合には、必す一層注意して、その効果を擧げたでせう。此不朽の著書からは、彼が自分の生命を處置する權利を阻む都合のよい障礙を見出す事は出來ないが、その證據は、カトーがその死ぬ前夜、二度も此書物を通讀した事を見

れば解るのであります。

我々の詭辯家達は又、生きて行く事は、悪であるかと尋ねてゐます。此人生の、多くの迷ひ、多くの惱み多くの弊を見ては、寧ろ「之でも生きて行く事が[もと]善であつたのか」と疑つて見度い位です。罪は、最も德高い人の身邊を、絶えず取り巻いてゐます。刻一刻と彼は、悪魔の餌食となり、自身悪魔とならうとしてゐます。爭闘と苦惱、是が此世に於ける高德の人の運命なのです。悪をなしては苦しめらるるのが德の卑しい人の運命なのです。他の人間にあつては、又夫々の差異はありますが、只、生きてゆくみじめさは、みな人の持つ共通なものです。若し權威ある事實がなければ御信じなさらないなら、私は、多くの神託、賢人の應答、死によつて酬ゐられた有德の人の行爲等を擧げて說明しませう。併し、貴君、それは止しませう。私は貴君にお話してゐるのです。そして、此世では、自分自身に專念するといふ事の外、賢人の根本的の爲すべき事は何であるかを貴君にお尋ねしてゐるのです。自分自身に潛心するとは、いはゞ、その胸底に心を集注し、生きてゐる間に、死んだものゝやうに自らを強うることであります。人間の害惡の中から私達を脫け出させる爲に、悟性が見出す事の出來る唯一の方法は、私達を地上のもの、私達自身の中の凡ゆる合死のものと、離脫させ、私達自身の心の中に自省させ、崇高な默想裡に自己を修養させる事ではありませんか。若し私達の情熱と迷夢とが不運にさせるものであるならば、それから解脫させて吳れる或る狀態を過ぎた時、私達はどれ程、新しい元氣を感ずる樣になるでせうか。その肉の悅樂に耽つては

その憂を增す感覺的な人達は何を爲すものでせうか？　彼等は、地上にその存在を擴げては、それを減しますのですその執着を增しては、きづなを更に重くするのです。その享樂は、常に多くの苦い艱苦を伴ふのです。その感情の增すにつれて、その苦惱は重るのです。生の深みに陷る程に、その不幸は重るのです。

併し、普通に言へば地上を悲しくも匐ひ廻るのが、人間として一の善である筈だといふ事は御尤もです。私は凡ゆる種類の人間が一齊に犧牲となれよ、世界を以て廣大な墓とせよとは主張致しません。世には餘りに多くの特權を持ち過ぎて、普通の道を行く事は出來ない不幸な人が澤山々々ムいます。その人達には、絶望と苦い悲しみとが自然の旅行券なのです。斯る人達にとつては、自分等の生は神經痛によつて苦められた詭辯家ボンドニウスに對して生が善であつたと同樣矢張り善であると信ずる事も亦馬鹿らしくなりませう。生きてゆくのが、私達にとつて善い事である限りは、私達は、生きてゆく事を大いに希望します。此希望を胸の裡で打ち敗ぶるものとては、只ひどい嫌な感情があるだけです。私達は、皆、天から死を大に恐れる心を享けてゐるからなのです。又此恐しさが、人間と云ふ有樣のみじめさを、我々の眼に假裝させて見せるからなのです。人生を去らうと決する迄は、人は辛い、悲しい、生を永く送るのです。併し、一度、生に倦んで、死の恐しさに打ち勝つ時は、明かに、生は一の大な悪です。私達は、偸り早くそれから解脫する事は出來ないのです。斯樣に、私達は、何時、何處で、生が善でなくなつてゆくかを精

確に示す事は出來ないが、兎に角、私達に惡だと見える時より、ずつと以前に既に惡になるといふ事は確です。思慮ある人は、將、もう諦めて生に執着を失ふ前に、先づ何時も非常に死の誘惑を感ずるのです。

是だけではありません。私達が生の羈絆を脫する權利を奪ふ爲に、生が惡であり得るといふ事を否定した後で、詭辯家達は、遂に私達が生に堪へる事が出來ない事を批難する爲に、生は惡であると云ふのです。彼等の言ふ所によれば、その苦痛、その悲愁を遁れるのは、卑怯である。自殺するのは、卑怯な人間の仕事に過ぎないと云つてゐるのです。噫ローマよ！　世界を征服したお前！　卑怯者の集りであるお前の軍隊が、あの大帝國を建てて呉れたのだね。アリ、エポニン、ルユクレス達はその内の人々なんだね、併し此人達は女だつた。けれども、ブルタス、カシユウス、そして、神々達と同樣に、威懾した地上の者達の尊敬を享けてゐる汝、偉大な、神樣の樣なカトーよ、その威嚴のある、聖い姿は、ローマ人に聖い熱狂を與へ叛王達の心膽を寒からしめた汝カトーよ、お前が、牢獄での德操を保つ事を、幸福な罪と認めなかつたのは單にお前が卑怯者であつたからだと、平凡修辭學者共が、學校の片隅に塵埃を浴び乍ら、喋る日があるとはお前の熱心な嘆美者達も思ひがけなかつたのだ。近代作家の力と偉大さよ、何と云ふ崇高さだ、君達は！　又、此作家達は、筆を手にしては、何と、大膽なものでせう！　併し乍ら、生の苦惱に更に長く堪ゆる爲に、雄々しくも、立派な、勇敢な、夫の英雄を鬪爭の渦中から救ひ出してゐる君達は、あの小さな燃えさしの火が、此雄辨な手の上に落ちかかつた時、何故、あんなに急いで手を引込めたのかれ？　おや〳〵、君達は、火の熱をば堪へようとはしないと强ひるものはないと言ふのかね。併し、此私に、誰が生を堪へよと强ひるのかね。一人の人間の一代はつまらぬ塵芥の一生より何れ程、神樣にとつて、價値あるものであつたか？　而も、兩方共、神の造りませる物ではないのか？

勿論、避ける事の出來ない不幸を忍んでうける勇氣と云ふものはあります。併し、別に害を及ぼさずに避けらるる不幸を、好んで苦しむのは愚者に過ぎません、必要もないのに、惡を我慢してゆくのは、時としては、一大罪惡であります。速かな死で、辛い生の苦しみを脫する事を知らない者は、外科醫の巧妙な手術の厄介にならないで、徒に傷を惡化するまゝに放擲して置く事を好む者と同樣です。さあ、パリゾ先生、私の命にかかはる此脚を切つて下さい。私は、貴君のなさる所を、びくともせずに見てゐませう。此手術を受けようともせずに、却つてその身を腐らせる、あのお人よし達には、憶病者とでも何とでも、云はせておきませう。

凡ゆる人に對して、その人自分の身を自由に處置するのを、許さないのが、他人に對する義務なのです併し、自由の處置を命ずる者が、果して幾人ありませうか？　國家の安寧を兩肩に負ふ一官吏、子供に對して、衣食を給與せねばならない一家の父、遂にはその債權者の破産を來さしめる樣な返却する力のない債務者達よ、お前達は、何んな事があつても、先づその義務を盡さねばならない。實に多くの公私の關係

が、不運な、正直な人に、より大きな不幸を免れさせる爲に、生の不幸を忍ばせて居り、それとは全然異つた場合に、多くの憐めな人を犠牲にして、敢て死せんとしない者にのみ有用な生を、保たしてゐる。それが許さるべきなのだらうか？「俺を殺して呉れ。お前の兄弟達と力を併せて闘ひ、孫を救つて呉れ。俺の親を食ひ殺した様な者の手に、此父を生きながら渡して呉れるな」と老衰した或る蠻人が、自分を背負つてその妻みに堪へ兼ねてゐる息子に向つて云ひました。野蠻人にも増して凶悪な敵である飢餓、病氣、貧困等に迫られても、一家の糊口を凌ぐ事も出來兼ねる程小量のパンを、病床に横はつてゐる不幸な不具者が食ひ減らして行くのです。そんな場合には、この何にも係り合ひのない人間、神様が只獨り此世に生きさせて置いて下さる此人間、不幸にも此世に生きてゐる事が何の善をも生じない様な人間は、自分の不平が只餘計なものとなり、自分の害悪が何の効用もなさない、此浮世を棄てて逝つて了ふ權利を、何故持つてゐないのでせうか？

此等の考へを酌量してみませう。凡ゆる此等の理由を纏めて考へて見ませう。さうすれば、此等は皆、自然の權利の内の最も簡明なものに歸し。理知ある人間は決して斯麼事を問題にしないとお思ひになるでせう。神經痛は全癒するのに、生の苦から癒へる事は何故許されないのでせうか？ 何れも、神の同じ御手から與へられたものではありませんか？ 死ぬのが辛らければ、何と申したらいゝでせう？ 藥を服むのは愉快な事ですか。實に多くの人は、藥を服むよりは、死を望みます。此は自然が兩方共に矛盾する證

據です。生を除かれて不治の病から脫するよりも、藥を調へて一時的に病から脫する事が出來、熱病に規那皮を用ひる方が、膽石病に鴉片を用ひるよりも、罪が尠ないと云ふ所以を示して貰ひ度いものです。その目的を注意して見れば、何づれも不遇を脫するにあるのです。その嫌の情を注意して見れば、等しく自然なのです。その手段を注意して見れば、何れも、等しく兩個の方面があります。又主神の意を心して見れば我々に送られたのではない、奈何悪と戰はうとするのですか？ 神の御手に與へられない何んな悲みから脫れ度いのでせうか？ 神の力の及ばない、私達が正當に反抗し得る限界は、どの位なのですか？凡て在るものは、神の思召し通りに在るからとて、私達が何んなものでも置き變へる事は出來ないでせうか？ 神の掟に背く事を恐れて、私達は、此世に、何ものをも造り出してはいけないのですか？ 否、貴君、人間の天職は更に大きく尊いものなのです。神は、永遠の靜寂の中にじつとしてゐる爲に、人間に魂を與へられたのではありません。神は、善を爲す爲に自由を、善に意欲する爲に良心を、善否を擇ぶ爲に理性を、人間に與へられたのです。神は、人間を、自分自身の行爲を制する唯一の裁判官にお任じになつたのです。その心の中に「汝には有益であり、何人をも傷けない様な事を爲せよ」と人の心にお書きになつたのでした。自分にとつて、死ぬ方がよいと感ずれば 私は、生に執着させるその命令に反抗します。それは、神が私に望み通りの死を與へて、死を求めよとお命じになる事なのです。

ボムストン閣下、私は、貴君の賢明と純潔とに訴へます。理性は、自殺に對して、宗教から、更に確實

な金言を、抽き出せるでせうか？　基督教徒が、その反對の說を建てても、彼等はその說を、その宗教の原則、その唯一の教義である聖書から、抽き出したのではなく、唯、多神教の哲學者の說から抽き出したものなのです。基督も、使徒も、嘗て一言も與へなかつた此新教義の先驅者であるラクタンスと、アウグスチヌスとは、既に私が論じたフエドンに論據を置いてゐるのです。此新教義を以て、福音書の權威を繼いでゐると信ずる信徒達は、プラトンの教義を繼いでゐるものなのです。實に、自殺に反對な掟、或は單に之を非難するものも、全聖書の何處にも見當りません。自殺をした人達の實例を見ても、之を批難してゐる言葉は一言も見出さないとは、實に、奇妙ではありませんか。尙又、サムヌンの言葉は、敵に仇を報ゐた奇蹟によつて、認められてゐます。恐らくは、此奇蹟は、或る罪を辯護する爲に、行はれたのではありますまいか？　或る女の誘惑するまゝになつてゐた爲、その力を失つた此人は、本當の大罪を犯す爲に此女を取り戻したかつたのでせうか？　神樣自身が、人間を欺かうと思つてゐらしたかの樣ですねえ。「汝殺すなかれ」とモーゼの十誡は掲けてゐます。その結果は何うなるのでせうか？　此誡を、字義通りに守つたとしたなら、惡人も、敵も、殺してはならないでせう、あの樣に多くの人を殺したモーゼは、その訓をひどく誤解してゐるのでせう。幾何かの例外があるとすれば、それは確に自殺の爲に設けられてゐるのであります。何故つて、自殺は暴力と不正義から免かれてゐますからは、その暴力と、不正義といふ二つの見方は殺人を罪あるものとするものであります。又もう一つの理と云つては、自然が外の方面で自殺に反對する有力な障害を置いてゐますから。彼等は更に云ひます。「併し、天の賦與せる不幸を忍び。自分の苦痛に相當した者になれ」と。斯樣に、此基督教の格言を適用するのは、その精神を捕へる事に拙いものであります。人間は、多くの罪惡に附隨してゐるのであります。人生は、多くの悲慘事の織りなせるものであります。人は唯、苦しむ爲に生れるとしか思はれません。此の不幸の中にも、避け得られるものは理性が之を避けようとするものです。それは理性と矛盾しない宗教の認むる所です。併し、避け得られる惡の總數は、不本意ながら苦しまねばならぬ惡に比らべれば尠いのであります。「寬仁の神樣が、人間にとつて、有難いものになるのは斯慶惡の御蔭です。神は、私達に強ひ賦課なさる貢をば喜んで捧げる服從の禮として受け納れ、此世での諦めをあの世の爲にと、記して置かれるのです。人間の眞の贖罪は既に天の課する所なのです。凡ゆる忍び難い事を忍ぶなら、人間は此點で、天の望み通りを爲したのです。更に此以上の事を爲ようと思つて、自ら誇示するのは、幽閉して置かねばならぬ狂人か、罰すべき詐欺師かなのです。遁れ得る丈の惡はさつさと遁れませう。まだ〳〵、苦まねばならない惡は、餘りに多いのです惡業を爲すのは、私達の心一つであり、遁れたとて、神も、人間も傷けるのでないのですから、生きてゆくのが私達に、惡業となつた時は直ぐ、何の悔いも殘さずに、生の羈絆を遁れませう。尊い神樣に、犧牲を捧ねばならないならば、死ぬと云ふ事より外には何もないではないでせうか？　理性の聲で、私達に課せられる死を、神樣に捧げませう。神が喚び戻さるゝ私達の魂を、その胸に、靜に、注ぎませう。

常識が凡ての人に與へ・宗教か認むる所の一般の訓誨は・以上の様なものです。扨又・私達の問題に立歸りませう。貴君は御親切にも・私に・胸の中を吐露して下さいました。私は貴君の御心配を承知して居り・貴君も私と同樣にお惱みなさるのを知つて居ります。貴君のお苦しみも・私のと同樣に・仲々醫されるものでないのです。それ名譽の掟は・運命の掟にも增して・動かす事の出來ないものであるから・尙更醫し難いのです。併し・貴君は・斷然・それを忍んでいらつしやいます。今は・德が・貴方を支へてるのです。もう一足で・貴君はそれから放されてお了ひでせう。貴君は・私を苦めとお强ひなさいます。私は・貴君の御自身の惱みが終る樣にと・貴君を促してるるのです。私達の中の誰が・その外の者にとつて最も貴いかを・貴君の判斷に任せようとするのです。

何故・私達は・何時も當然なすべき步みを躊躇するのでせうか？ 若い美しさが失せて・年々・齡も增して・老ひ衰へるのを待ち・屈辱と哀愁とを加へて・病氣で・衰へた體を引きづる樣になるのを待つのでせうか？ 私達は・今・靈の力も自由に・而も猶死の衛を知る年齡なのです。やがては・呻き乍も・生の絆を解かるるまゝになるのです。生の倦怠が・私達に望ましい死を與へて呉れる此時を利用しませう。恐しい事です。今に・私達が望んでるるないのに・多くの怖しい影と共に・死がやつて來ます。私は覺えてるます。……あの時・私は・神樣に僅か一時間丈けをお願いしたのでした。そして・その一時間を捕へなかつたならば・私は・失望して・死んで了つたのでせう。あゝ・私達を此地上につなぐあの綱を斷るには實に骨が折れる事です。それ故・斷れたら直ぐに・此地上を去るのが賢いのです。貴君も・私も更に淸い天地に住むべき人間であると思つてるます。德は私達にその天地を探すようにと促してるます。私達を結ぶ此友情が・今はの際迄も私達を一つにして呉れる樣に。二人の眞の友達が・互の腕に身を抱かれて嫣然とその一生を終へ・その最後の息を混へ・一つ魂の兩半が同時に息を引き取るのは・私達眞の友達にとつては・實に此上もない・快事です。その時・どんな憂ひも・悔いも・去つて了うでせう。此世を去つても・二人はどうして別れる事になりませう？ 彼等は・一緒に逝きます。彼等は・決して別れないのです。

註 (一)ツヤンロマックは一〇七二年カルマルに生れ・新敎徒であつた。一七〇四年宗敎改宗して・ジユズイト派の宣敎師となつた。一七三五年の某日自身の所有全部を人に分配して・アレーメンに行いた。彼が舟に乘るものも人は見たが・翌日ウエルセルの河の岸に死骸となつて發見せられた。自殺に關する彼の論文は羅典語で書かれたもので聖年印刷に附せられた。(二)リヨン市の有名な外科醫である。ルカソオは此人のことを悔悛錄の第七卷で褒めてゐる。

書簡第廿二　右返事

君は、餘りに夢中になつて眼が眩んでるるのですよ。もつと愼んで、忠告を他人に請うてる乍ら、却てその人に忠告をする樣な事をしてはいけない。私は、君とは異ふ罪業も知つてるる。私の頭はしつかりし

てゐます。私は英國人なのだ。私は、生きる事を知つてゐるのだから、死ぬ事も知つてゐます。人として苦む事も知つてゐる。私は眞近に、死を見たのです。而も、餘りに冷かに看たので、自分で、死を求めに行かうとはしません。さあ、君の事を話さう。

ほんとに、君は、私に必要だつた。君の魂が必要だつた。君の心配は、私に有益たり得たのだ。君の理性は、私の一生の最も重大な事に當つて、私に知識を與へることが出來たのだ。私が、ちつともそれを用ひないなら。君は、誰にそれを背負はせるのですか？　それは何處にあるのです。何うなつてゐるのですか？　君は、何を爲る事が出來るのですか？　君の今の狀態が、何に良いんですか？　私が君から何を期待出來るんですか？　餘り心配するものだから、君は、馬鹿な、憐む事の出來ない人間になつてゐるのです。君は、人間ではない、君といふものはないのだ。そして君がこれから先になろうとする有樣を考へなければ、君程なさけない人は世の中には居ないと考へて了ふでせう。

私は君の手紙だけを見てかう云ふのではない。昔は、君にも、常識や正しいところがあつたのだ。君の感情は素直で、君の考は有理であつた。私は、君が何となく好きだつたのではなく、私をもつと啓發して呉れると思つて、特に好きだつたのです。併し、君がこんなに得意らしく書いた此手紙に、今私は何を求められるだらうか？　君が、理知の助けを失つて、迷つてゐる所に、君の心情の迷を現はしてゐる情けない、永久變らない詭辯が記されてゐるのです。私も君の熱狂して逆上してゐるのを氣の毒に思へばこそ斯うして此に指摘して上げるのです。

君のその迷ひを解くには、只次の一事をお尋ねすればいゝのです。神が存在し、靈は不滅で、人間が自由を有する事を信ずる君は、勿論、叡知の實在が肉體に入つて、偶然にも地上に立たせられてゐるのは、只生きて、苦んで、そして死ぬ爲なのであるとは思ひませんか？　確に、人間の生活には、或る目的、或る終極と或る神秘的對象とはあるのですが、何うか此點に就いて明瞭に御返事を承り度い。そして私達は君の手紙を一句〳〵繰り返して讀んで見よう。さうすれば、君はきつと、この手紙を書いたのが恥しくなるのでせう。

併し、一般の格言の事は暫く措きませう。それを適用する場合には、きつと何か特別の條件があつて、その條件は他の人に訓へる爲書かれた掟に從ふ事は、自分は免除せられるのだと各自が思ふ位、事情を化せしめるものだから、何時もその格言は大騷ぎされる許りで、決して、人がそれに從つた事がないのです。そんな一般的の格言を立てる人は、それを凡ての人に强ひて、而も自分だけは例外にしてゐるのだと云ふ事が私達には解つてゐます。もう少し君の事を話しませう。

君の言によれば、君には、生を斷つのが許されてゐるのですね。その論據は變ですよ。君は死に度いといふのですからねえ。それは惡い人達に都合のいゝ論法ですよ。彼等は君が彼等に與へた武器を大變有難がつてゐる筈です。誘惑されたから、それを犯したのだと彼等で辯護し得ない大罪は之からはもうなくな

りませう。感情の激動は彼をして、罪の恐ろしさに打克たすのですから、その時既に彼等は悪事をし度いとの希望の中に、それが正當であることを見出してゐるのです。

扨てそれで、自ら生を斷つ事は許されてゐるのでせうか？　私は君がやり始めたか何うかを知り度いのです。けれどどうも！　えッ！　君は何も爲ないうちに、此地上に生れたのですか？　神樣は、生と同時に或る務を賜りませんでしたか？　若し、君が、その日の仕事を日の暮れぬ中にして了つたら、その日はお休みなさい。君は休んでもいゝのです。併し、君の爲した仕事を調べて見ませう。君は、その時間の勘定を尋ねる至高な裁判官（最後の日の審判廷に於ける神のことを指す―譯者）に對して答へる丈の用意がありますか？　さあ、君は何と云へますか？「私は善良な娘を誘惑し、悲みに陷つてゐる友達を見棄てて來ます」と云ふのですか？　可愛さうに！　充分に勝つたと誇る義人を私に探しあてて下さい。私はその人から、堂々と此世を去つて行くには、如何に生活しなければならないかを教へて貰ひます。

君は人間の罪業を數へます。君は百度も穿鑿せられた處を又ほぢつくつて恥しくないのですね。また君は「人生は惡である」と云つて恥ぢないのですね。併し、世上の事物に少しも惡業の混じてゐないものがあらか何うかよく探し求めて御覽なさい。併しそれで此世には、善はないと云へますか？　君は、本來惡であるものと、偶發的に惡ばかりで苦んでゐるものとを混同なさるのですか？　君自身の云ふ通り、人間の受動的生活は大したものではなく、只やがて離れる肉體を眺めてゐるのみです。然し、自發的な精神的な生活は、その全身に影響を與へるもので、その意志の訓練に存屬してゐるのである。人生は、榮え行く惡人には一つの惡であるが、不幸な、正直な人間には一つの善であります。それは、一時的の變態ではなく、人生を善となし、惡となす所の物に對する關係なのである。して見れば、君がそれ程此世を去り度いと思ふ程の此悲みは何であるか？　君は、私が君の偏頗にも人生の惡を指示した中に、君自身の惡の話をする恥かしさを看破しないと思ふのですか？　併し、同時に君の善い所迄も棄てゝはいけない。せめて昔の純な所は棄てずに、私に打明けて云つて下さい。私はあの正直な女を墮落させようと云ふ望を失つた、それで今、何うしても、善人に成らなければならない。それ故、死ぬ方がいゝのですと。

君は人生に倦んで、「人生は惡なり」と云ふのです。遲かれ速かれ、君は慰藉を受けて、其時は「人生は善なりと云ふでせう。君はもつとよく道理を說かないでも眞理を言ふでせう、といふのは君より外に何にも變りがないのですから。さあ、だから、今日からお變りなさい。凡てが惡であると云ふのは、君の心が惡傾向を持つてゐるのだから、狂つてゐる情を矯めて、家を骨折つて整理する事が出來ないが爲に、君の家をつく樣な事はしてはいけませんよ。

肉體の不幸の進むのに直接に反對な、魂の不幸の自然の進歩をば、本質上反對してゐる二の物として考へて御覽なさい。肉體の惡はこゞれて、年と共につのつて遂には此肉體を壞つて了う。之と反對に、魂の不幸は、不滅の、單一な存在の分面上の一時的の變化であつて、知らず〳〵消えて、何物も變する事の出

來ない本來の形體になるのである。悲しみ、倦怠、悔い、失望等は長續きするの憾ひではなく、魂に深く根ざしてゐるのではない。永遠の惱みであると思はれる此苦がい感情を打消して晃れるのは、何時も經驗といふものなのです。倘又、私は、私達を壞敗させる惡德が、私達の哀愁よりも、私達にとつて本來のものであるとは思へない。此惡德は、その依つて起る肉體と共に亡びるものであると考へるのみならず、若い頃は、只、德が最も良いものだと思つてゐるのだとも考へるのです。

兎に角、肉體的の不幸の大部分は絕えず增してゆく許りなのだから、肉體の激しい心配は、不治のものであるなら、その人にその身を自由に處置する事を許すのです、凡ゆるその力はその心配の爲に狂ひ、その身の不幸は醫やす術もないのだから、彼には意志も理性も何の用をもなさないのです。死ぬより先き、人間たる事を止め、その命を斷てば、つまり、命を縛ばつて、魂は既にない肉體を離れて了ふだけの事なのだ。

併し、魂の生きてゐる中は、常にその惱みを治す藥を自分で持つてゐるものなので、魂の惱みは決してそんなものではありません。どういふ理で不幸が、實に苦しいものだといふ事になるのですか？ それは其不幸が長くつゞく事なのです。外科醫の手術は、傷の痛みより更に酷いものです。けれど病の痛みは永續的なのであり手術の苦しみは一時であるから、手術の苦みの方を人は擇ぶのです。苦しみが長く續くから、手術の苦しみに、何故手術を施す必要がありませうか？ 自ら進べられないのであるから、既に消えて了つて苦しみを增すものです。哀愁の詭辯！ つまらない言辭、理智も、正義も、恐らくは信仰さへもないつまらない言辭です！ 死んで苦しみを斷たうといふ希望は何か時か、その一つを擇ばなければならぬ同じ苦しみを道がれる二つの方法のうちで、誰の爲めに、償値ありとせられる限りの年月のみを尊重しませうか？ 何を御望みなんですか？

私の苦しみが終るだらうと考へるのは、更に苦しみを增すものです。哀愁の詭辯！ つまらない言辭、理智も、正義も、恐らくは信仰さへもないつまらない言辭です！ 死んで苦しみを斷たうといふ希望は何といふ絕望的な馬鹿〳〵しい動機でせう？ 假に此妙な考を信じても、傷を癒着させる爲に、傷を刺する樣に、確にその苦しみが今に終るのを知つてる、現在の苦みを一時激しくさせるのを誰か望まないでせう？ 好んで苦しませる樣な一種の魅力を持つてゐる、現在の苦みがある時、命を放棄してその苦みを斷つのは、勝來の凡ゆる心に掛る事を一時にして了ふ事ではないのですか？

そこをよく考へて御覽なさい。不滅のものにとつて十年、卅年、卅年はどれだけの事でせう。苦樂は影の樣に過ぎて行きます。人生は一瞬の間に終つて了ひます。人生そのものは何でもないのです。それを用ひる所に價値が生じます。人間が爲した所の善が後に殘る、それによつて人生が有意義になるのです。

生きる事は、君にとつて惡であるとはもう云つてはいけません。それが善となるのは、君一人にあるので、今迄生きてゐた事が惡であると云ふならば、それこそ、これから更に生きてゆく理由なのだ。自分に

は死ぬ事が許されてゐる」と云ふのをよして下さい、それは君を生み出した神樣を裏切り、君の運命を誤らせる事が出來るといふのと同樣なのだから。君が死んでも誰にも惡を及ぼさないと云ふ事を君は云ふが君は斯麼事を敢て君の友達に對して云へると思ふのですか？

君の死は、誰にも惡を及ぼさない！　成る程！　私達に、さんざん害や悲しみを與へて死ぬ事は、君には殆ど大した事ではないでせう。君は私達の悔みを何とも思はないのです。君が侮蔑してゐる友情の色々な權利事については、私は何も云ひません。君が生きて行く爲に友情よりもつと慕はしいものがありませんか？　君を愛してゐて君に先立たれ度くないと思ひ、その人が幸福である爲には、君の幸福だけが欠けてゐると云ふ樣な人が世にあるなら、君はその人の事を少しも念頭に置かなくてもいゝと思ひますか？　君の不吉な計畫が實行される時、あんなに苦しんで、もとの純眞に戻つた靜な魂を攪き亂さないだらうか？　此非常に柔しい心に秘められた古い疵を、又曝き出す事を思ひませんか？　君の死が、更に酷い死を誘ひ、世の中から又德から甘い一番尊い裝飾を奪つて了ふのを恐れないのですか？　若しその人が君よりも生き永らへたなら、生よりも更に重い苦しい悔恨がその胸に迫るに違ひないのを思はないのですか？　恩を知らない友よ、人知れぬ心の奥を察せぬ戀人よ、君は何時も自分丈の事しか考へないのですね。君の苦しみしか思はぬのですね。君を愼ふ人の幸には少しも考へないのですね。君と一緒に死に度いとまで思つた事のある人の爲に生きてゐる事が出來ないのですか？

君は、裁判官や、家庭の父親の義務の事を語つてゐた、そして彼等が君に務を負はせないので、君は凡てに自由なのだと思つてゐる。君の生存を保たして呉れる此社會、君を必要とする不幸者達に、君は何にもしなくていゝのですか？　君は實に精確に列擧した、君の數へ上げた義務の中で、君は人間及市民としての義務を落してゐる。自分の國の爲にのみ命を捧げるのであるとて、他國の爲に命を賣らず、又その法の爲に命を賭して死に物狂ひになつてゐるあの立派な愛國者は何處にゐるのですか？　法だ、法だ！　若いお人よ、賢者は法を侮蔑しましたかしら！　ソクラテースは冤罪であつたが、法を尊重したからこそ、牢を脫出しなかつたのですぜ、君は、不正にも生を脫しようとして、躊躇せずに法を犯さうとするのです。而も君は「私は死んだとて何んな惡をする事になるのか」と尋ねておいでだ。

君は實例によつて、自ら許して居り、又多くのローマ人の例を引いておいでなさる。此等の有名な人々の名を敢て口にするのは確に君の勝手です。併しプルタスは失望した戀人となつて、死んだのか？　カトーは、その情婦の爲に、腹を切つたのか？　小さい、弱い人間よ、君とカトーとの間には何れ程の差があるでせうか？　さあ、君とあの偉大な人とに共通な所を見せて呉れ給へな。向ふ見ずの男よ、お獸りなさい！　私は、君があの人達の事を使つて、自ら辯護する事によつてあの人達の名が汚されるのを恐れる。此聖い、嚴い人の名を聞いては、總ての德を愛する人は地に額を擦りつけ、默つて、此無上に偉大な人の思ひ出に敬意を拂はねばなりませぬ。

君は實に拙い例を擇んだのです。ローマ人達は生きてゆくのが彼等に重荷となるや、直に生を棄てるのが正しいと思つてゐたと君が考へるのなら、君は低級な判斷をしてゐます。共和國の中の立派な時代を觀て御覽なさい。その德の高い市民が、隨分酷く不運な目に遭つてからでも、その重い義務を遁れたか何うかよく見て御覽なさい。カルターゴに歸るレグルスは、彼の歸りを待ち受けてゐる多くの苦しみを免る爲に死を擇んだかしら。フルシユ・ガウヂイヌスの隘路でこの手段が彼に許るされたでせうか？ その失敗したにも拘らず尙生き存へてゐた爲に執政官ヴァロンは、元老院からその勇氣ある努力を何れ程賞せられたでせう？ 屈辱と云ふ事は甚だ慘酷で、死ぬ事は大した事ではなかつたのに、多くの大將達が敵のするまゝに降參したのは何故です？ 彼等はその血も、命も、その最後の息も只その國家の爲に得てゐるので、恥辱も何も此聖い義務を免れさせるものではないからです。併しその國法は消滅し、國家は敵に奪はれた時市民は立つてその本來の自由と自己に對する權利とを取り戻した。ローマが全くなくなつて了つた時、ローマ人はその消滅する事が許されたのです。彼等は地上での職務を盡しました。彼等が全然その國土を失つて了つた時、彼等は自己を處分し、その返すべき國家のなくなつて了つた自由を、彼等自身の手に持たせたのである。息も絕え絕えのローマにその務を盡し、國法の爲に鬪つて後、彼等は生前の如く、氣高くも死んだのである。二君に仕へると云ふ醜態を曝露しない爲にローマ人の死は、再びその國家の名譽の爲に捧げられたのであります。

併し、君は一體誰なんです？ 何をしたのですか？ 自分の冥蒙を辨護したと思つてゐますか？ 弱い君の心は、君の義務から逃げはしなかつたでせうか？ その國家で、名譽も位置もない爲に出來る丈その國法に從ふのを遁れてはゐませんか？ 君は自分の同胞に、君の命が預けられてゐるのに、死ぬと云ふ事を口にしてもよいのですか？ 君にふさはしいのは、恥づべき、遁辭的の死です。それは人類に對して盜賊を働く事になります。此世を去る前に、先づ君の爲に作つて呉れたものを返却して見給へ。併し私はかまはないよ……。私は此世界には不用なのだ……一日の哲學者！ 君は、充たすべき義務も無くては、此地上で一步も動く事は出來ず、何んな人でも、生きてゐる事それ自身が凡ての人間に有用であるといふ事を知らないのか？

まあお聞きなさい、愚な若い方！ 君は私には親しい人なのだ、私は君の迷ひを氣の毒に思つてゐます若し、君の心の奥に、僅でもいゝ所が殘つてゐるのなら、私の所へお出で下さい。生を愛する樣に敎へて上げませう。此世を去り度くなる毎に、「俺は死ぬ前にまだ善い行を爲なければならない」と心に向つて云ひ給へ。それから、貧しい人を索ねては救ひ、不幸な者を索ねては慰め、壓制されてゐる人を探しては守つておやりなさい。おびえて私に近づかない不幸な者を私に近づけて下さい。私の金や、信用を使つて構ひませんから。私の財產をとつて使つて下さい。此考が、今君を止めれば、明日も、明後日も一生涯君を引止めるでせう。今君を引止められなければ、死んでお了ひなさい。さ

うすれば君は、要するに悪い人なのですよ。

書簡第廿三　エドワード卿からジユリイの戀人へ

私は前に自分で思つた様に、今日貴君と逢ふ事は出來ないでせう。まだ二日程ケンシントンに用があるのです。宮中の仕事と云ふものは、何もせずにゐるかの様に遲く而も色々の仕事が續いて出て來て、仲々終るものではないんです。一週間も前から此地に私を引止めてゐる用事は二時間とはかゝらなかつた、併し、大臣達の最も重要な仕事は、何時も非常に忙しさうな様子のものだから、暇ばかり潰して、私はそれを取り返すことが出來ないのです。外目にこそ餘り見えないが、私が如何に焦つても此永引くのを早く片付けてしまへないのです。君も御存知の通り、宮中は私にはあまり向いてゐないのです。私達が一緒に暮してからは、私には堪へられないものになつて了ひました。私は此國に群つてゐる多くの阿諛者達の退屈な事よりも、君の悲しみを共に別つ方が何れ程よいか知れないのです。

併し、こんなのらくらした阿諛者共と話をしてゐる時、君を見て、その身の處置をつけるのに、單に君の意見を待たうと云ふ考が起つて來たのです。君がその苦しみと鬪ひ、同時に、惡と抵抗とに苦しんでゐるのが解ります。貴君が、生きて、回復なさり度いとお思ひなのは、名譽と理性とがそれを要求すると云ふよりも、貴君の友達を悦ばせる爲なのですか。併し、是だけではないでせう。人生の務めを充分盡く

す爲に、人生に興味を持たなければならない。凡ての事にさう冷淡になつては、決してうまくはゆかないものです。兩方共やらうとしても駄目です。只理性だけが君に理性を戻しては呉れません。色々の新しい著しい事物が君の注意を惹いて、今迄君の心が氣に掛けてゐた事にだけしか注意しなかつたのを、變へなければならないですよ。君を己に歸らせるには、君が自分自身の内から離れなければいけない。君が安息を求め得られるのは、只、自ら生動する生の興奮の中に於てだけなんです。

此試練をするには、等閑視されないある機會がある。大きな、美しい、多くの人達が今迄似寄りものを見た事もない様な計畫がこゝにあるのです。その證人となり而も協力するのは、君一人なのです。人間の眼を驚かせ得る最大な光景を君は御覽になるでせう。觀察する事の好きな君は、何か滿足するに足るものを見出しになると思ふ。君の職務は名譽あるものとなり、君の様な才能を持つてゐれば、只勇氣と健康とが必要なのです。その時、君は困惑すると云ふよりも寧ろ危險がありませう。君には更にふさはしいのです。君の仕事は非常に長い事はありますまい。今日之以上語る事は出來ません。此計畫も、公表される迄は、私も何うする事も出來ない秘密なのだからです。只若し貴君が此滅多にない幸な機會を逸したなら、もう永しへに獲られずに、一生涯後悔するかも知れないと云ふ事丈を附記します。

此手紙を持たしてやる使ひに、貴君が何處にゐらつしても、探して之を渡し、必ず返事を頂いて歸れと命じました。何故つて至急御返事が頂き度いのです。私はこゝを立つ前にどうしても私の返事をしなくて

はならない樣になつてゐるのです。

書簡第廿四　返事

さあ、閣下！　私を御處置なさつて下さい。貴君は何でも否認なさらないでせうから。私が貴君の御役に立つ樣になる迄に、やめて、貴君の御意見に從ふ樣に致しませう。

書簡第廿五　エドワード卿からジユリイの戀人へ

私の考を承知して下さつたから、私は取り敢へず、凡てはうまく取り結ばれて了つたといふ事を御注意し、當面の問題を說明しませう。

御承知でせうが、プライマウスで五隻の戰艦が武裝して、今や出發しようとしてゐるのです。その指揮の役に當つてゐるのは、私の昔馴染みの、熟練勇敢なジョージ・アンソン提督です。此艦隊は南方海上の任に當つてゐて、マゼラン海峽を通つて行き、歸途は東印度を通らなければならないのです。それで、約三年と思はれる此世界一週の大航海も亦相當の大問題でせう。私は君を志願兵として、入れられようと思ひます。併し、私は船でも一層尊敬せられる樣にと思つて或る位を附けました。君は陸戰隊の技師として乘り込むのです。工學は君が最初の目的であつたばかりに君にとつても又便宜です。君が早くから工學を勉強されたことを私は知つてゐます。

私は明日ロンドンに歸り、二月程の中にはアンソン提督に君を紹介する積りです。それ迄、もう乘船は全く終つて、出發命令を待つてゐる丈なのだから、船中の事を考へたり、道具や、本を揃へて置きなさい此長い航海中、身も心も恙なく歸つて來て下さいそして、歸つてからは永遠に一緒に暮さうではありませんか？

書簡第廿六　ジユリイの戀人からドルブ夫人へ

なつかしいお從姉樣、私は世界一週の旅に上ります。此半球で見出せなかつた心の靜けさを求めて他の半球へと旅立ちます。實に私は愚でした。心を息める所もなくて、廣い世界にさ迷ひ行きます。貴女と掛け離れた世界に、住み家を尋ねて行くのです。併し、或る友の、恩人の、否寧ろ父とも云ふべき人の意を尊重しなければならないのです。心を置するあてもなく、併し、ジユリイさんとその操とが命ずるのですから、せめてもさう思はなければなりません。三時間後には波のまに〳〵漂つてゐるでせう。三日後には歐洲の地を離れるでせう。三月後には涯知れぬ海に、永遠の嵐に包まれてゐるでせう。三年後には恐くは……。貴女と又逢ふ事の出來ないのは、餘りひどい事です！　最も恐しい危險が私の心の底に橫つてゐるのです。私は覺悟しました、誓ひました、やがてお目に掛れる樣なものとなつてお目に掛るか、さもなけれ

ば、これが永へのお別れでせう。

ローマにお歸りになるエドワード卿が、此手紙をお渡しして、委細をお話し下さるでせう。私の心も御存知の筈ですから、何卒私心をよく御存じですから、その言葉の意味もお察し下さるでせう。私の心も御存知の筈ですから、何卒私の口から申さない事迄も御察し下さい。あゝエドワード卿に貴女が又お會ひなさるのです！

貴女のお友達（ジュリイ）と、貴女樣は、母とおなりになつて、幸福でゐらつしやるでせうね。彼女はもう確にそうなつて居らつしやる筈です。おゝ苛酷な天よ……お母樣！　觸れてゐる樣な子を、貴女に與へたのだらうか。

もう止めませう。さらば、優しいクレールさん！　さらば、いとしい方々よ、さらば、清い、天のまゝなる心の人達！　さらば、柔しい、離れられない友！　地上での只獨りの娘達！　二人共、皆此世ならぬ世にふさはしい人達でいらつしやる。お互に、幸福になつて下さい。心の思ひを、貴女達の中に分ち度いと思つてのみ生きてゐた不幸な者、貴女達と別れたその時に、生を斷つた此不幸な者を、時には思ひ出して下さい、さらば、永へに……水夫達の合圖の叫びが聞えます。風が爽かになつて、帆が上がるのを私は見てゐます。もう乘船しなければなりません。出發なのです。廣漠として、際涯のない大海！　その只中に恐くは、私をのみ込んで了ふのでせう！　私の亂れた心から失はれた靜けさを、大海の波濤の上に漂つて、尋ね求められるものだらうか！

ルツソオ全集　第壹卷

新エロイズ　前編

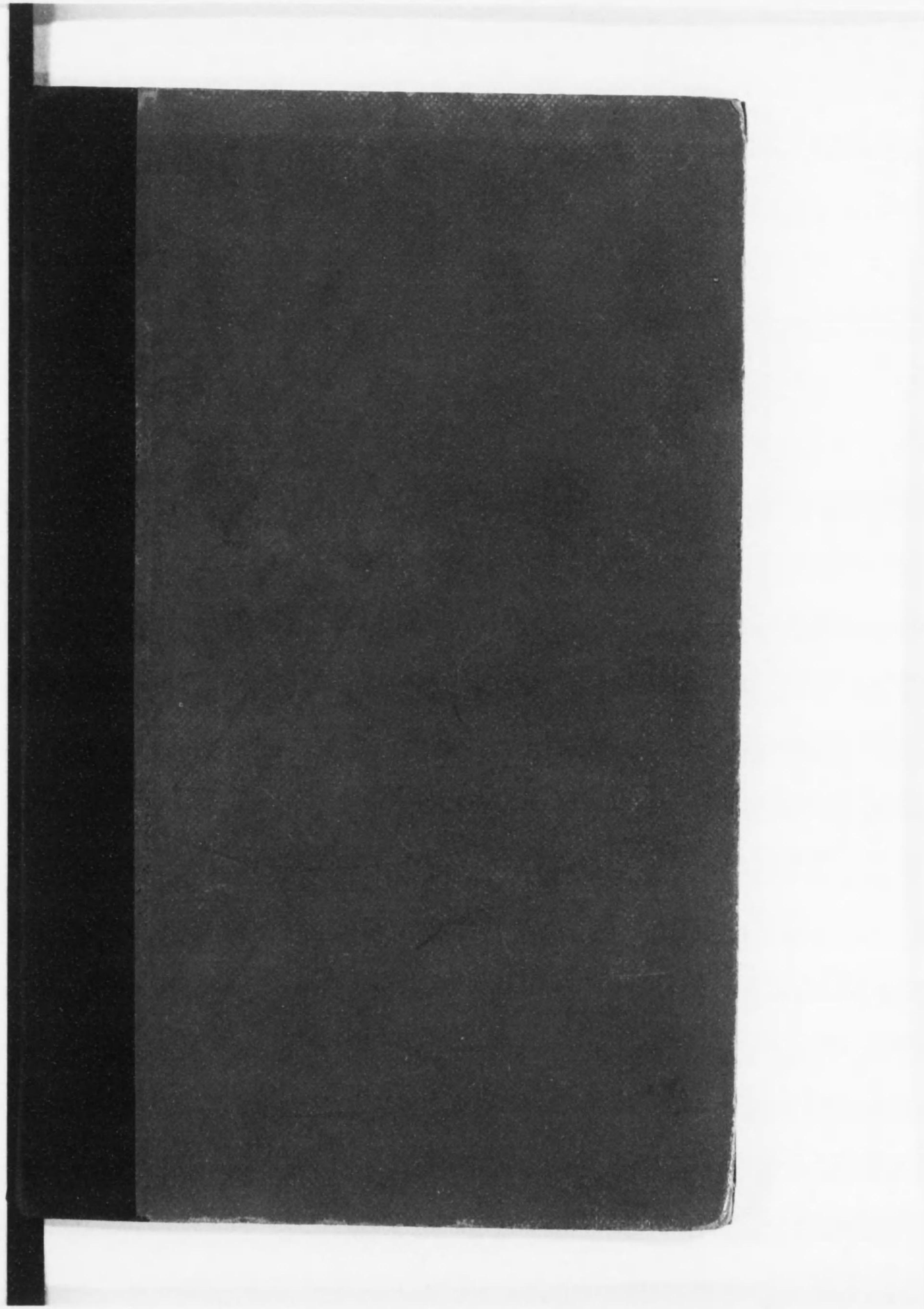
定價金參圓五拾錢

大正十一年四月二十日印刷
大正十一年四月廿七日發行

著作者　宮原晃一郎　東京市牛込區早稻田鶴卷町三〇三
發行者　藤森楓　東京市神田區上白壁町一番地
印刷者　宮澤得一　東京市神田區上白壁町一番地
印刷所　精弘社印刷所

發行所　東京市牛込區早稻田鶴卷町　光文社　電話番町五三五三　振替東京五二五六〇

不許複製

F53
R76
4a

終